

きょうわ ちょう  
共和町

かみ

# 上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ 3 遺跡(2)

— 一般国道276号岩内共和道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成17年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

きょうわ ちょう  
共和町

かみ

# 上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ 3 遺跡(2)

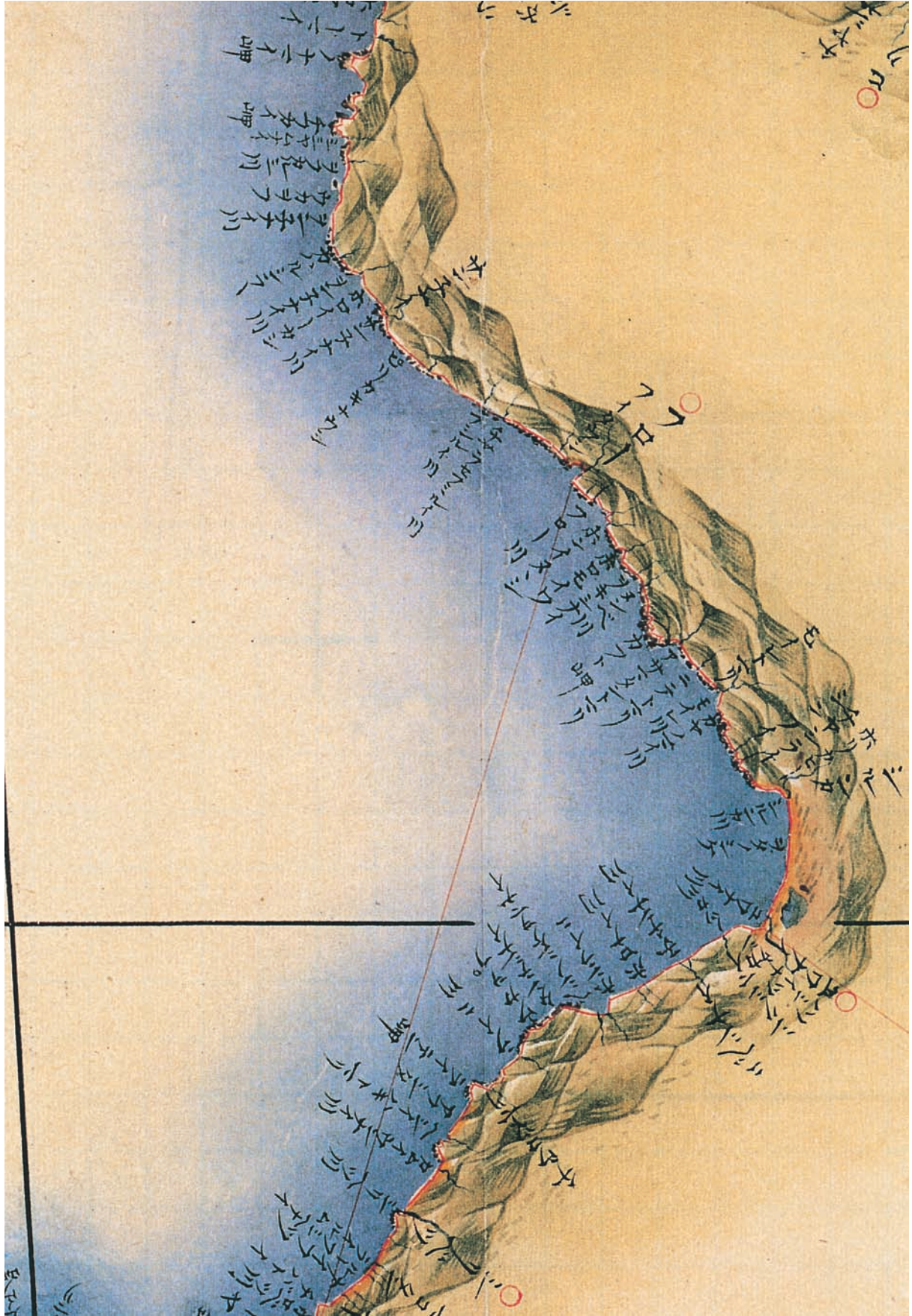
— 一般国道276号岩内共和道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成17年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡周辺の空中写真 1976年撮影（国土地理院発行のものを複製したものである）



「伊能中図」東京国立博物館蔵・伊能中図原寸複製  
『伊能図』（清水・武揚堂ほか編著2002）の積丹・岩内の一部を複製



リヤムナイ 3 遺跡Ⅱ群 a 類土器

口絵 4



1 上リヤムナイ遺跡全景（西から）



2 上リヤムナイ遺跡FC-1出土状況（東から）

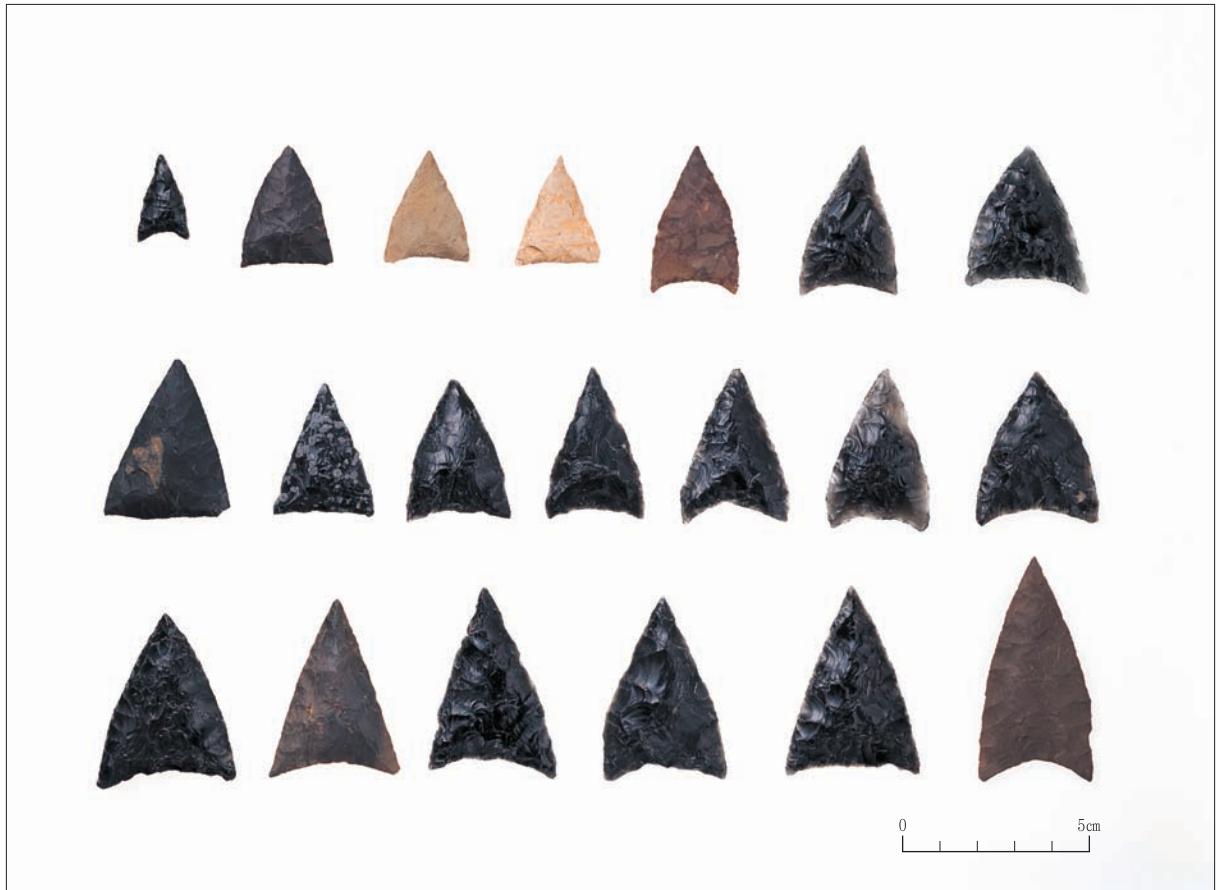


1 リヤムナイ 3 遺跡全景（北から）



2 石器集中 1 出土状況（南東から）

口絵 6



リヤムナイ 3 遺跡石器集中 1 出土の遺物 上段：石鏃 下段：赤鉄鉱



# 例 言

- 1 本書は国土交通省北海道開発局小樽開発建設部が行なう一般国道276号岩内共和道路工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成17年度に実施した上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ3遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は第2調査部第1調査課が担当した。
- 3 本書の執筆はⅠ・Ⅱ章：遠藤、Ⅲ章：遠藤・笠原・袖岡、Ⅳ章：袖岡、Ⅴ章：笠原・袖岡が担当した。編集は遠藤が担当し総括した。文責は文末に記してある。
- 4 整理作業は上リヤムナイ・リヤムナイ3遺跡の一次整理を遠藤が行った。二次整理は上リヤムナイ遺跡の土器・石器、リヤムナイ3遺跡の土器を袖岡、リヤムナイ3遺跡の石器を笠原が行った。
- 5 現場の写真撮影は上リヤムナイ遺跡を袖岡、リヤムナイ3遺跡を主に笠原が行った。遺物の室内撮影は上リヤムナイ遺跡の土器・石器、リヤムナイ3遺跡の土器を第2調査部第2調査課中山昭大が行い、リヤムナイ3遺跡の石器を笠原が行った。
- 6 各種同定、分析などは下記に依頼した。  
放射性炭素年代測定：株式会社 加速器分析研究所  
動物遺存体同定：株式会社 パレオ・ラボ
- 7 調査報告終了後の出土資料および記録類については共和町教育委員会が保管する。
- 8 調査にあたっては下記の諸機関、各位から御協力、御指導をいただいた。(順不同、敬称略)。  
北海道教育委員会、国土交通省北海道開発局小樽開発建設部 三陽建設工業株式会社  
共和町教育委員会 澤田正幸・山城美治・見年 昭・森 正司・小林英樹・宮崎勝雄・浜田 豊、  
共和町かかし古里館、共和町文化財保護審議会、共和町教育研究会、共和町東陽小学校、  
岩内町教育委員会、泊村教育委員会、ほくでん原子力PRセンターとまりん館 吉田玄一、  
北電泊原子力訓練センター 大和谷正人、北海道新聞社岩内支局 武藤理司、岩内町郷土館、  
岩宇郷土史研究会、道都大学 鈴木正章、小樽市博物館 石川直章、  
余市水産博物館 乾 芳宏、(財)アイヌ民族博物館 中村 齋、北海道立地質研究所 垣原康之、  
千歳サケのふるさと館 高橋 理、伊達市教育委員会 青野友哉、北広島西高等学校 山浦 修、  
首都大学東京 山田昌久、国立歴史民俗博物館 新免歳靖・小林謙一、  
青森県六ヶ所村郷土館 高橋総司、青森県埋蔵文化財調査センター 永嶋 豊・茅野嘉雄・  
野村信生・葛城和穂、東北町歴史民俗資料館 古屋敷則雄、大沼忠春、野村 崇、田部 淳、  
村上章久、浅賀輝夫、渡辺真吾、佐藤美智雄、浅井文博

## 記号等の説明

- 1 本文および図表中では、以下に示す記号を使用した。  
F：焼土 S：集石 FC：剥片集中
- 2 実測図の縮尺は、原則として以下のとおりであり、すべてにスケールをつけている。  
遺構 1：40 遺物出土状況図 1：20 復元土器 1：3 土器拓本 1：3  
土・石製品 1：2 剥片石器 1：2 磨製石斧 1：2 礫石器 1：3
- 3 遺構図の出土遺物は下記の記号を使用した。  
土器：☆ 頁岩剥片石器：▲ 黒曜石剥片石器：■ 頁岩剥片：△ 黒曜石剥片：□  
礫石器：● 礫：○ 石斧：★ 骨片：×
- 4 遺構図中の方位は真北を示す。遺構平面図の+は小発掘区ラインの交点で、傍らの名称記号は右下の小発掘区を示している。遺構平面図の・小数字とセクションレベルは標高（単位m）である。
- 5 遺構の規模については以下の要領で示した。なお、一部破壊されているものについては現存長を（ ）で記し、不明のものは—で示した。  
確認面での長軸長×短軸長／最大深・最大厚（単位m）
- 6 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の覆土についてはアラビア数字で表した。
- 7 土層説明には『新版標準土色帖19版』（小山・竹原1997）と『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロロジー学会編1997）を引用した。
- 8 石器・土製品・石製品の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」（単位cm）で示した。剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。なお、破損しているものについては現存最大値を（ ）で示した。  
また、実測図中でたたき痕は「V—V」、すり痕は「|—|」で範囲を表した。
- 9 表は表一覧として一括したが、必要に応じて本文中に掲載してある。

# 目 次

口絵カラー

例 言

記号等の説明

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

## I 調査の概要

1 調査要綱	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
4 調査の概要	4
(1) 上リヤムナイ遺跡	4
(2) リヤムナイ3遺跡	4

## II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境	11
(1) 位置と自然環境	11
(2) 歴史的環境	12
(3) 堀株、リヤムナイの語源について	12
(4) 江戸期の日誌、地図にみえる梨野舞納	16
2 周辺の遺跡	17
(1) 共和町内の遺跡	17
(2) 下リヤムナイ遺跡と「浜中大曲式」	20
(3) リヤムナイ採集として報告された資料について	23
3 鉄道関連の遺構	29
(1) 杭跡と側溝跡	29
(2) 西前田駅プラットホーム	29

## III 調査の方法

1 発掘区の設定	31
2 整理の方法	31
3 遺物の分類	34
(1) 土器	34
(2) 石器等	34
(3) 礫について	35

IV	上リヤムナイ遺跡の調査	37
1	発掘調査の方法	37
2	基本土層	37
3	遺構と遺構出土の遺物	37
(1)	剥片集中	37
4	包含層出土の遺物	44
V	リヤムナイ3遺跡の調査	47
1	発掘調査の方法	47
2	基本土層	48
3	遺構と遺構出土の遺物	57
(1)	石器集中	57
(2)	集石	67
(3)	剥片集中	77
(4)	焼土	89
4	包含層出土の遺物	99
(1)	土器	99
(2)	石器等	150
	一覧表	169
VI	自然科学的手法による分析	185
1	リヤムナイ3遺跡から検出された動物遺存体同定	
	株式会社 パレオ・ラボ	185
2	放射性炭素年代測定結果	
	株式会社 加速器分析研究所	188
VII	小 括	193
1	石器について	193
2	リヤムナイ3遺跡の春日町式土器・円筒土器下層式直前の土器について	195

写真図版

引用参考文献

報告書抄録

# 挿 図 目 次

<b>I 調査の概要</b>	図V-2-5 F34ライン・N45区1号トレンチ 土層断面 …………… 53
図I-1-1 遺跡の位置 …………… 2	図V-2-6 D37、J37ライン土層断面 …………… 54
図I-1-2 岩内共和道路計画路線図 …………… 3	図V-2-7 F～H37ライン土層断面 …………… 55
図I-4-1 トレンチ、深掘り調査グリッドの位置 …………… 5	図V-2-8 H44、J44ライン土層断面 …………… 56
図I-4-2 遺跡と周辺の地形 …………… 6	図V-3-1 Ⅲ層上面の地形と遺構位置図 …………… 59
<b>II 遺跡の位置と環境</b>	図V-3-2 石器集中1 …………… 61
図II-1-1 松浦武四郎著『東西蝦夷山川地理取調圖』 …………… 14	図V-3-3 石器集中1と出土遺物(1) …………… 62
図II-1-2 旧版5万分の1地形図(1) …………… 14	図V-3-4 石器集中1の出土遺物(2) …………… 63
図II-1-3 旧版5万分の1地形図(2) …………… 15	図V-3-5 石器集中1の出土遺物(3) …………… 64
図II-1-4 旧版5万分の1地形図(3) …………… 15	図V-3-6 石器集中1の出土遺物(4) …………… 65
図II-2-1 共和町内の遺跡 …………… 18	図V-3-7 石器集中1の出土遺物(5) …………… 66
図II-2-2 下リヤムナイ遺跡の位置 (『岩内遺跡』所収) …………… 22	図V-3-8 S-7と出土遺物(1) …………… 69
図II-2-3 「浜中遺跡略報」(昭和27年(1952)度 『明治大学考古学研究会報告要旨』から) …………… 24	図V-3-9 S-7出土遺物(2) …………… 70
図II-3-1 鉄道関連の遺構 …………… 27	図V-3-10 S-8・9・11～13・18と出土遺物 …………… 71
図II-3-2 古レールの刻印 …………… 28	図V-3-11 S-10・15と出土遺物 …………… 72
<b>III 調査の方法</b>	図V-3-12 S-14と出土遺物 …………… 73
図III-1-1 発掘区設定図 …………… 32	図V-3-13 S-16・17と出土遺物 …………… 74
<b>IV 上リヤムナイ遺跡の調査</b>	図V-3-14 S-19・20と出土遺物 …………… 75
図IV-2-1 上リヤムナイ遺跡の土層断面図 …………… 38	図V-3-15 S-21と出土遺物 …………… 76
図IV-3-1 FC-1(1) …………… 40	図V-3-16 FC-9～12と出土遺物 …………… 79
図IV-3-2 FC-1(2) …………… 41	図V-3-17 FC-13～19と出土遺物 …………… 80
図IV-3-3 FC-1(3)・FC-2 …………… 42	図V-3-18 FC-20～22・25と出土遺物 …………… 81
図IV-3-4 包含層の出土遺物と出土状況 …………… 43	図V-3-19 FC-23・24・26～30と出土遺物 …… 82
図IV-3-5 遺物の分布(1) …………… 45	図V-3-20 FC-31～34と出土遺物 …………… 83
図IV-3-6 遺物の分布(2) …………… 46	図V-3-21 FC-35～40・42と出土遺物 …………… 84
<b>V リヤムナイ3遺跡の調査</b>	図V-3-22 FC-41・43・44・46と出土遺物 …… 85
図V-1-1 調査の方法別区分図 …………… 47	図V-3-23 FC-45・47～52と出土遺物 …………… 86
図V-2-1 基本土層 …………… 48	図V-3-24 FC-53～63と出土遺物 …………… 87
図V-2-2 Hライン土層柱状図 …………… 49	図V-3-25 FC-64～71と出土遺物 …………… 88
図V-2-3 H23、H29ライン土層断面 …………… 50	図V-3-26 F-5～13と出土遺物 …………… 91
図V-2-4 前年度との境界部分の土層断面、 噴泥跡平面図 …………… 51	図V-3-27 F-14～21と出土遺物 …………… 92
	図V-3-28 F-22～26と出土遺物 …………… 93
	図V-3-29 F-27～33と出土遺物 …………… 94
	図V-3-30 F-34～40・42と出土遺物 …………… 95
	図V-3-31 F-41・43～50と出土遺物 …………… 96
	図V-3-32 F-51～59 …………… 97

図V-3-33	F-60~64	98
図V-4-1	包含層出土の土器(1)	105
図V-4-2	包含層出土の土器(2)	106
図V-4-3	包含層出土の土器(3)	107
図V-4-4	包含層出土の土器(4)	108
図V-4-5	包含層出土の土器(5)	109
図V-4-6	包含層出土の土器(6)	110
図V-4-7	包含層出土の土器(7)	111
図V-4-8	包含層出土の土器(8)	112
図V-4-9	包含層出土の土器(9)	113
図V-4-10	包含層出土の土器(10)	114
図V-4-11	包含層出土の土器(11)	115
図V-4-12	包含層出土の土器(12)	116
図V-4-13	包含層出土の土器(13)	117
図V-4-14	包含層出土の土器(14)	118
図V-4-15	包含層出土の土器(15)	119
図V-4-16	包含層出土の土器(16)	120
図V-4-17	包含層出土の土器(17)	121
図V-4-18	包含層出土の土器(18)	122
図V-4-19	包含層出土の土器(19)	123
図V-4-20	包含層出土の土器(20)	124
図V-4-21	包含層出土の土器(21)	125
図V-4-22	包含層出土の土器(22)	126
図V-4-23	包含層出土の土器(23)	127
図V-4-24	包含層出土の土器(24)	128
図V-4-25	包含層出土の土器(25)	129
図V-4-26	II群a類土器の出土状況(1)	130
図V-4-27	II群a類土器の出土状況(2)	131
図V-4-28	II群a類土器の出土状況(3)	132
図V-4-29	II群a類土器の出土状況(4)	133
図V-4-30	II群a類土器の出土状況(5)	134
図V-4-31	II群a類土器の出土状況(6)	135
図V-4-32	II群a類土器の出土状況(7)	136
図V-4-33	II群a類土器の出土状況(8)	137
図V-4-34	II群a類土器の出土状況(9)	138
図V-4-35	II群a類土器の出土状況(10)	139

図V-4-36	II群a類土器の出土状況(11)	140
図V-4-37	II群a類土器の出土状況(12)	141
図V-4-38	II群a類土器の出土状況(13)	142
図V-4-39	II群a類土器の出土状況(14)	143
図V-4-40	II群a類土器の出土状況(15)	144
図V-4-41	II群a類土器の出土状況(16)	145
図V-4-42	II群a類土器の出土状況(17)	146
図V-4-43	II群a類土器の出土状況(18)	147
図V-4-44	土器の分布(1)	148
図V-4-45	土器の分布(2)	149
図V-4-46	包含層出土の石器(1)	154
図V-4-47	包含層出土の石器(2)	155
図V-4-48	包含層出土の石器(3)	156
図V-4-49	包含層出土の石器(4)	157
図V-4-50	包含層出土の石器(5)	158
図V-4-51	包含層出土の石器(6)	159
図V-4-52	包含層出土の石器(7)	160
図V-4-53	包含層出土の石器(8)	161
図V-4-54	包含層出土の石器(9)、石製品、土製品	162
図V-4-55	石器分布図(1)	163
図V-4-56	石器分布図(2)	164
図V-4-57	石器分布図(3)	165
図V-4-58	石器分布図(4)	166
図V-4-59	石器分布図(5)	167
図V-4-60	石器分布図(6)	168

## VI 自然科学的手法による分析

図VI-1	暦年代較正結果(1)	191
図VI-2	暦年代較正結果(2)	192

## VII 小括

図VII-2-1	リヤムナイ3遺跡出土の土器と 春日町式土器	196
図VII-2-2	リヤムナイ3遺跡出土の土器と 円筒土器下層式直前のもの	197
図VII-2-3	春日町式土器出土遺跡	198

## 表 目 次

I 調査の概要	表V-4 遺構出土遺物一覧 ……………171
表I-1 上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ3遺跡 遺構一覧 …………… 9	表V-5 層位別出土土器一覧 ……………172
表I-2 上リヤムナイ遺跡出土遺物一覧………… 9	表V-6 層位別出土石器等一覧 ……………173
表I-3 リヤムナイ3遺跡出土土器一覧 …………… 10	表V-7 遺構出土掲載土器一覧 ……………174
表I-4 リヤムナイ3遺跡出土石器等一覧 …………… 10	表V-8 遺構出土掲載石器等一覧 ……………175
II 位置と環境	表V-9 包含層出土掲載復元土器一覧 ……………178
表II-1 共和町の遺跡一覧 …………… 19	表V-10 包含層出土掲載拓本土器一覧 ……………179
IV 上リヤムナイ遺跡の調査	表V-11 包含層出土掲載石器等一覧 ……………182
表IV-1 検出遺構一覧 …………… 44	表V-12 焼土土壌フローテーション成果一覧 ……184
表IV-2 遺構掲載遺物一覧 …………… 44	VI 自然科学的手法による分析
表IV-3 包含層掲載遺物一覧 …………… 44	表VI-1 リヤムナイ3遺跡出土骨類一覧表 ……186
V リヤムナイ3遺跡の調査	表VI-2 放射性炭素年代測定結果 ……………189
表V-1 たたき石形態別グラフ ……………153	表VI-3 放射性炭素年代測定試料一覧 ……………191
表V-2 すり石形態別グラフ ……………153	VII 小括
表V-3 検出遺構一覧 ……………169	表VII-1 春日町式土器出土遺跡 ……………198

## 図 版 目 次

口絵1 遺跡周辺の空中写真 1976年撮影(国土地理院発行のものを複製したものである)	上リヤムナイ遺跡
口絵2 「伊能中図」東京国立博物館蔵・伊能中図原寸複製 『伊能図』(清水・武揚堂ほか編著2002)の積丹・岩内の一部を複製	図版1 1 上リヤムナイ遺跡調査状況(南西から) 2 FC-1検出状況(東から)
口絵3 リヤムナイ3遺跡II群a類土器	図版2 1 FC-2検出状況(南から) 2 土層断面(南東から) 3 土層断面(東から)
口絵4 1 上リヤムナイ遺跡全景(西から) 2 上リヤムナイ遺跡FC-1出土状況(東から)	図版3 1 FC-1(1) ①球顆がわずかに混じるもの 石器等 剥片(1)
口絵5 1 リヤムナイ3遺跡全景(北から) 2 石器集中1出土状況(南東から)	図版4 1 FC-1(2) ①球顆がわずかに混じるもの 剥片(2)
口絵6 リヤムナイ3遺跡石器集中1出土の遺物	図版5 1 FC-1(3) ①球顆がわずかに混じるもの 剥片(3)
II 位置と環境	図版6 1 FC-1(4) ②球顆が少ないもの 石器等 剥片(1)
図版II-1 海岸部にある標識 …………… 11	図版7 1 FC-1(5) ②球顆が少ないもの 剥片(2)
VI 自然科学的手法による分析	図版8 1 FC-1(6) ③球顆が多いもの 石器等 剥片
図版VI-1 リヤムナイ3遺跡出土骨類 ……………187	図版9 1 FC-1(7) 石器等 剥片

	2	包含層出土の遺物(1)	4	S-15検出(西から)
図版10	1	包含層出土の遺物(2)と出土状況	5	S-16検出(西から)
			6	S-17検出(西から)
<b>リヤムナイ3遺跡</b>			図版22	1 S-18検出(西から)
図版11	1	リヤムナイ3遺跡全景(北から)	2	S-19検出(西から)
	2	リヤムナイ3遺跡全景(西から)	3	S-20検出(北から)
図版12	1	リヤムナイ3遺跡調査風景(西から)	4	S-21検出(北東から)
	2	リヤムナイ3遺跡遺物出土状況(北から)	5	FC-9検出(西から)
図版13	1	リヤムナイ3遺跡調査風景(東から)	6	FC-10検出(南から)
	2	リヤムナイ3遺跡調査状況(西から)	7	FC-11検出(南から)
図版14	1	N45区1号トレンチ土層断面(南西から)	8	FC-12検出(西から)
	2	M45・N46区1号トレンチ完掘(南から)	図版23	1 FC-13検出(西から)
	3	R45区1号トレンチ土層断面(北西から)	2	FC-14検出(東から)
	4	N45区1号トレンチ土層断面(北東から)	3	FC-15検出(南から)
図版15	1	H23ライン土層断面(南西から)	4	FC-16検出(東から)
	2	D37ライン土層断面(南から)	5	FC-17検出(東から)
	3	F37ライン土層断面(南西から)	6	FC-18検出(北西から)
図版16	1	G37ライン土層断面(南西から)	7	FC-22検出(南から)
	2	H37ライン土層断面(南から)	8	FC-23検出(東から)
	3	J37ライン土層断面(南西から)	図版24	1 FC-24検出(南から)
図版17	1	G24ライン土層断面(北東から)	2	FC-25検出(南から)
	2	F24ライン土層断面(北東から)	3	FC-29検出(東から)
	3	E24ライン土層断面(北東から)	4	FC-30検出(南から)
	4	D24ライン土層断面(北東から)	5	FC-31検出(北から)
図版18	1	H44ライン土層断面(南から)	6	FC-34検出(北から)
	2	J44ライン土層断面(南から)	7	FC-35検出(北から)
	3	G26より北東側調査状況(南から)	8	FC-37検出(西から)
図版19	1	石器集中1出土状況(東から)	図版25	1 FC-38検出(東から)
	2	石器集中1土層断面(東から)	2	FC-39検出(西から)
	3	石器集中1(南から)	3	FC-40検出(東から)
	4	石器集中1(東から)	4	FC-41検出(北から)
図版20	1	S-7検出(東から)	5	FC-43検出(東から)
	2	S-7土層断面(東から)	6	FC-44検出(西から)
	3	S-8検出(北から)	7	FC-46検出(南から)
	4	S-9検出(東から)	8	FC-47検出(南東から)
	5	S-10検出(西から)	図版26	1 FC-49検出(北西から)
	6	S-11検出(南西から)	2	FC-50検出(北西から)
図版21	1	S-12検出(南から)	3	FC-51検出(東から)
	2	S-13検出(南西から)	4	FC-52検出(東から)
	3	S-14検出(西から)	5	FC-53検出(東から)



- 6 F C -54検出 (西から)
- 7 F C -55検出 (東から)
- 8 F C -56検出 (南東から)
- 図版27 1 F C -57検出 (西から)
- 2 F C -58検出 (東から)
- 3 F C -60検出 (東から)
- 4 F C -61検出 (南西から)
- 5 F C -62検出 (北から)
- 6 F C -63検出 (北東から)
- 7 F C -64検出 (北から)
- 8 F C -65検出 (南東から)
- 図版28 1 F C -66検出 (南西から)
- 2 F C -67検出 (北東から)
- 3 F C -68検出 (東から)
- 4 F C -69検出 (北から)
- 5 F C -70検出 (東から)
- 6 F C -71検出 (東から)
- 7 F - 6 検出 (西から)
- 8 F - 8 検出 (西から)
- 図版29 1 F - 9 検出 (南東から)
- 2 F -23検出 (南から)
- 3 F -24検出 (北東から)
- 4 F -37検出 (西から)
- 5 F -46検出 (西から)
- 6 F -49検出 (北から)
- 7 F -61検出 (西から)
- 8 F -64検出 (東から)
- 図版30 1 F -63検出 (北西から)
- 2 F -63土層断面 (北西から)
- 3 図V-1-1-1 (西から)
- 4 図V-4-1-2 (西から)
- 5 図V-4-1-3 (南東から)
- 6 図V-4-2-4、図V-4-21-92  
(東から)
- 7 図V-4-6-11 (北から)
- 8 図V-4-3-6 (北から)
- 図版31 1 図V-4-4-7 (北東から)
- 2 図V-4-5-8 (東から)
- 3 図V-4-5-10 (北から)
- 4 図V-4-6-12 (西から)
- 5 図V-4-6-13 (南東から)
- 6 図V-4-7-14 (西から)
- 7 図V-4-7-15 (東から)
- 8 図V-4-7-16 (南から)
- 図版32 1 図V-4-7-18 (西から)
- 2 図V-4-8-19 (南西から)
- 3 図V-4-8-20 (南から)
- 4 図V-4-10-23 (北から)
- 5 図V-4-11-24 (南から)
- 6 図V-4-11-25 (東から)
- 7 図V-4-12-26 (南東から)
- 図版33 1 図V-4-14-43 (東から)
- 2 図V-4-20-88 (東から)
- 3 図V-4-9-22 (北から)
- 4 図V-4-16-69 (南から)
- 5 図V-4-19-86 (東から)
- 6 図V-4-21-100 (南から)
- 7 図V-4-17-71 (南東から)
- 図版34 1 図V-4-22-109 (西から)
- 2 図V-4-24-124 (北から)
- 3 噴泥跡検出 (南西から)
- 4 河川堆積物境界検出 (西から)
- 5 28ラインより西側完掘 (東から)
- 図版35 1 石器集中1出土の遺物(1)
- 図版36 1 石器集中1出土の遺物(2)
- 図版37 1 石器集中1出土の遺物(3)
- 図版38 1 石器集中1出土の遺物(4)
- 図版39 1 S-7出土の遺物
- 図版40 1 S-8出土の石器
- 2 S-9出土の石器
- 3 S-10出土の石器
- 図版41 1 S-14出土の土器
- 図版42 1 S-15出土の石器
- 図版43 1 S-16出土の石器
- 図版44 1 S-17出土の石器
- 2 S-19出土の石器
- 図版45 1 S-20出土の石器
- 2 S-21出土の遺物
- 図版46 1 F C-10出土の石器
- 2 F C-17出土の土器

- 図版47 1 F C -20出土の土器  
2 F C -27出土の土器  
3 F C -23出土の石器  
4 F C -24出土の石器
- 図版48 1 F C -29出土の石器  
2 F C -31出土の石器  
3 F C -33出土の土器
- 図版49 1 F C -43出土の土器
- 図版50 1 F C -40出土の石器  
2 F C -45出土の土器
- 図版51 1 F C -56出土の土器  
2 F C -64出土の土器  
3 F -11出土の土器  
4 F -14出土の石器
- 図版52 1 F -18・19出土の土器  
2 F -26出土の土器  
3 F -23出土の土器  
4 F -41出土の土器  
5 F -37出土の石器  
6 F -27出土の石器
- 図版53 1 包含層出土の土器(1)  
図V-4-1・2
- 図版54 1 包含層出土の土器(2)  
図V-4-3
- 図版55 1 包含層出土の土器(3)  
図V-4-4・5・6(1)
- 図版56 1 包含層出土の土器(4)  
図V-4-6(2)・7(1)
- 図版57 1 包含層出土の土器(5)  
図V-4-7(2)・8・9(1)
- 図版58 1 包含層出土の土器(6)  
図V-4-9(2)・10
- 図版59 1 包含層出土の土器(7)  
図V-4-11・12
- 図版60 1 包含層出土の土器(8)  
図V-4-13(1)
- 図版61 1 包含層出土の土器(9)  
図V-4-13(2)・14(1)
- 図版62 1 包含層出土の土器(10)  
図V-4-14(2)・15(1)
- 図版63 1 包含層出土の土器(11)  
図V-4-15(2)・16(1)
- 図版64 1 包含層出土の土器(12)  
図V-4-16(2)
- 図版65 1 包含層出土の土器(13)  
図V-4-17・18(1)・19(1)
- 図版66 1 包含層出土の土器(14)  
図V-4-18(2)
- 図版67 1 包含層出土の土器(15)  
図V-4-19(2)・21(1)
- 図版68 1 包含層出土の土器(16)  
図V-4-20
- 図版69 1 包含層出土の土器(17)  
図V-4-19(3)・21(2)
- 図版70 1 包含層出土の土器(18)  
図V-4-18(3)・22(1)・23(1)
- 図版71 1 包含層出土の土器(19)  
図V-4-22(2)・23(2)
- 図版72 1 包含層出土の土器(20)  
図V-4-22(3)・24(1)
- 図版73 1 包含層出土の土器(21)  
図V-4-24(2)・25
- 図版74 1 包含層出土の石器(1)
- 図版75 1 包含層出土の石器(2)
- 図版76 1 包含層出土の石器(3)
- 図版77 1 包含層出土の石器(4)
- 図版78 1 包含層出土の石器(5)
- 図版79 1 包含層出土の石器(6)
- 図版80 1 包含層出土の石器(7)
- 図版81 1 包含層出土の石器(8)
- 図版82 1 包含層出土の石器(9)  
2 包含層出土の石製品  
3 包含層出土の土製品

# I 調査の概要

## 1 調査要綱

事業名：一般国道276号岩内・共和道路工事

委託者：国土交通省北海道開発建設局小樽開発建設部

遺跡名：①上<sup>かみ</sup>リヤムナイ遺跡（北海道教育委員会登録番号：D-12-2）

②リヤムナイ3遺跡（北海道教育委員会登録番号：D-12-29）

所在地：①岩内郡共和町字梨野舞納70ほか ②岩内郡共和町字梨野舞納19-2ほか

調査面積：①1300㎡ ②6100㎡

受託期間：平成17年4月1日～平成18年3月31日

調査期間：①平成17年6月7日～9月9日 ②平成17年5月8日～10月28日

## 2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長 森重 楯一

第2調査部長 西田 茂

専務理事 宮崎 勝

第1調査課長 遠藤 香澄（発掘担当者）

常務理事 佐藤 俊和

主 査 笠原 興（発掘担当者）

主 任 袖岡 淳子（発掘担当者）

## 3 調査にいたる経緯

岩内共和道路工事は一般国道276号（尻別国道）のうち、共和町<sup>りやむない</sup>梨野舞納から同町<sup>くにとみ</sup>国富にいたる延長7.6km間の二車線バイパス改良事業である（図I-1-2）。この道路の整備目的は、縦断勾配や冬期間の地吹雪による視程障害や夏期間の交通渋滞の解消、泊原子力発電所の緊急時の広域避難路の確保、物流拠点である岩内港や共和町の農産物集荷基地等へのアクセス改善および地域の活性化である。路線の大部分は旧国鉄岩内線跡地を利用している。さらに北海道の地域事情に配慮した独自の基準『北海道スタンダード』を導入するモデル路線で、中央分離帯のある二車線、防雪林の造成、遊歩道の整備、道路による観光支援など「北海道らしい道路」作りが推進されている。

平成14年度に事業化され、平成16年度までに設計協議、用地測量が進められ、平成17年度は用地買収および一部工事が着手されている。

この事業に関する埋蔵文化財包蔵地については、平成11年7月、北海道開発局小樽開発建設部から北海道教育委員会へ（以下道教委）埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出され、これを受けた道教委では平成11年8月に所在調査を実施した。さらに同年10月に工事計画用地内にある周知の梨野舞納<sup>りやむない</sup>段丘1遺跡（D-12-4）の一部について範囲確認調査が行われたが、この調査では縄文時代前期・中期の遺物が多量に発見され、遺構の濃密な分布が予想された。これらの結果に基づき、同年11月、道教委は小樽開発建設部にあて、「梨野舞納<sup>りやむない</sup>段丘1遺跡ほか計6地点について範囲確認調査が必要である」旨を回答した。遺構・遺物の密集地帯を通ることから、梨野舞納段丘1遺跡の現状保存についての協議が関係者において重さねられ、最終的には小樽開発建設部により計画道路路線の変更が検討されることとなった。

平成12年8月、小樽開発建設部から新路線の計画書を添えた新たな事前協議書が道教委に提出され

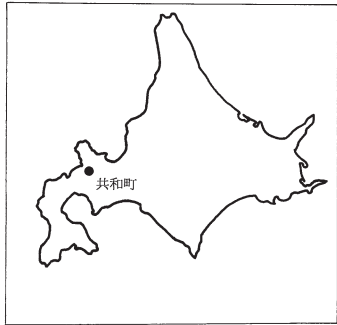


図 I - 1 - 1 遺跡の位置

(この図は国土地理院平成12年発行の2万5千分の1地形図「岩内」茅沼を複製したものである)

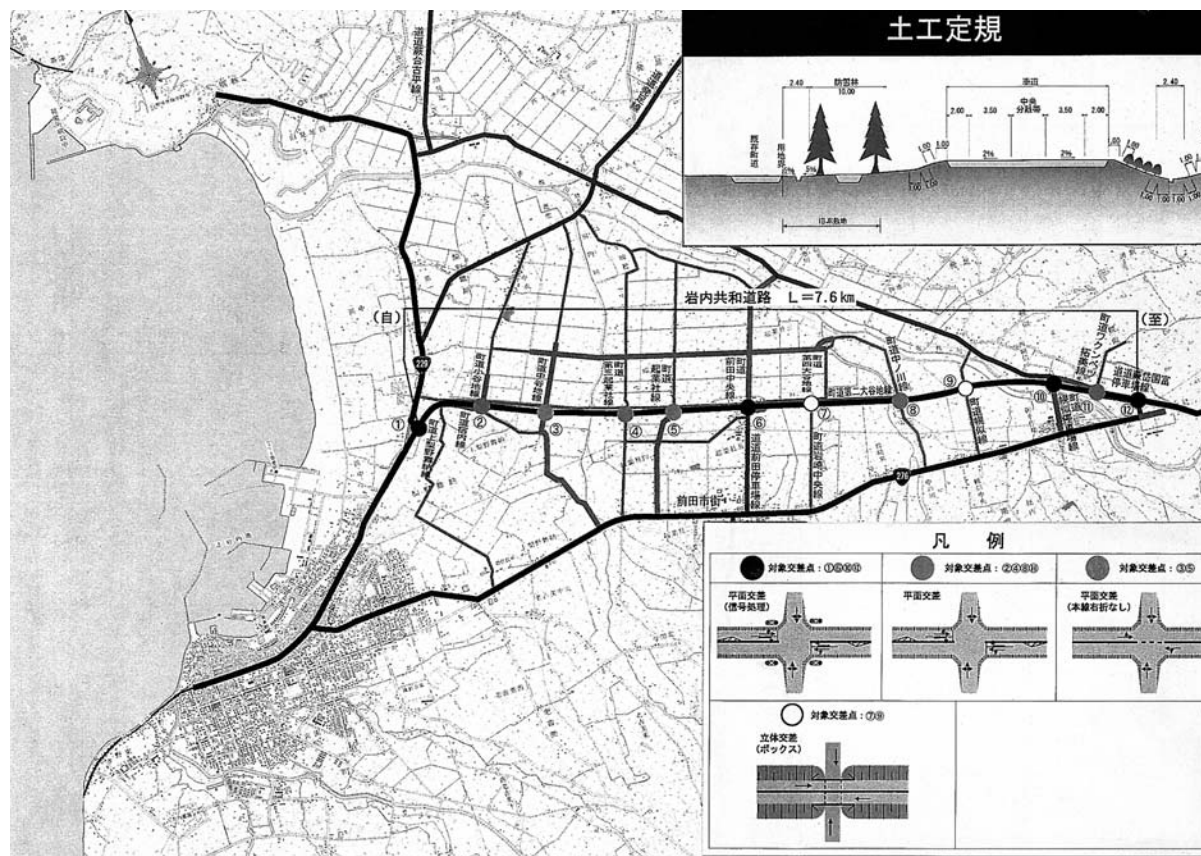


図 I - 1 - 2 岩内共和道路計画路線図

(この図は小樽開発建設部岩内道路事務所提供の資料を複製一部改変したものである)

た。新路線は道路基点付近を変更し、梨野舞納段丘1遺跡を含む試掘調査が必要な4地点を回避するものである。平成12年10月、道教委により路線変更部分の所在確認調査が行われた。この結果、「海岸の砂丘部分1か所」について範囲確認調査が必要と判断されたことから、同年11月、この範囲の試掘調査が実施された。調査は約2haを対象に、2.5m×1mトレンチ11か所、1m×1mのピット41か所を設けて行われた。このうち12か所から縄文土器片、頁岩、玄武岩剥片、磨製石器、礫石器等が発見され包蔵地であることが判明、約9600㎡が新たに「リヤムナイ3遺跡」として登載された(登載番号D-12-29)。

事業化後の平成15年6月、小樽開発建設部から道教委へ包蔵地付近の詳細な工事設計を添えた再協議文書が提出された。これを受けた道教委はリヤムナイ3遺跡については約7000㎡の発掘調査が必要であるとの判断を示した。また、工事設計の確定にともない東側に隣接する周知の上リヤムナイ遺跡(D-12-2)についても範囲確認調査が必要となったことから、道教委は平成15年10月、約7667㎡を対象として試掘調査を行った。この結果、2か所の試掘坑から砥石等が出土し、リヤムナイ遺跡については約1300㎡が発掘調査の必要な範囲となった。

発掘調査は(財)北海道埋蔵文化財センターが委託を受け、平成16年7月8日から10月29日まで、リヤムナイ3遺跡のうち道路基点寄り(岩内町側)の範囲3500㎡について先行調査し平成17年6月に『共和町リヤムナイ3遺跡(1)』として報告書を刊行した。剥片集中8、焼土4、集石6と縄文時代前期前半の土器を主体とした土器、石器合わせて32463点が検出されている(道埋文2005c)。

なお、初年度調査中の平成16年9月、小樽開発建設部から道教委に対して、リヤムナイ3遺跡付近の工事計画の一部を変更する旨の通知があり、これに伴い調査必要面積が追加されることとなった。

この追加分を含めると最終的な調査必要面積は9600㎡となった。

平成17年度は第2年次で5月8日からリヤムナイ3遺跡の調査を開始、10月28日に終了した。上リヤムナイ遺跡の調査はリヤムナイ3遺跡の調査と並行して6月7日に開始、両遺跡の調査工程の兼ね合いから一時中断したが、9月9日に終了した。

両遺跡ともに調査終了後の11月2日から工事用重機による埋め戻し作業を行い、11月14日に小樽開発建設部岩内道路事務所担当者立会いのもと引渡しをした。これをもって岩内共和道路工事にかかる両遺跡の調査は終了したことになる。

## 4 調査の概要

### (1) 上リヤムナイ遺跡

#### 調査の経過

調査に先立ち6月上旬から立木伐採、抜根および工事用重機により表土層除去作業を行った。その後測量、杭の打設を業者に委託した。道教委文化課の試掘調査では、調査区の西側の三分の一程は平坦部でかつて畑として利用されており、その際黒色土が搬出され包含層が削平されているとのことであった。このため、包含層の残存状態、遺構、遺物の分布の詳細な把握を目的とした25%調査から開始した。その結果、遺跡のほぼ全域が削平を受けており、また遺物の出土状況は散点的で、調査区全体としてはあまり多くはないことが判明した。しかしOWラインより東側の2か所から剥片集中が検出されたことから、この周辺部に重点を置き調査を進めることとした。今回の調査で確認された包含層はⅢ層褐色土である。また、昭和32年の調査で周辺部から旧石器時代の遺物が検出されていることから（大場・桐井1957）、調査区東端にあたるa69区にトレンチを設け深掘り調査を行ったが遺物は出土しなかった。

#### 調査結果の概要

検出された遺構は剥片集中（FC）2か所である。FC-1は石器の素材になるものと思われるフレイク472点、ほかに石核、Rフレイク、Uフレイク、スクレイパー、粗工両面調整石器等合わせて544点で構成されるものである。これらの剥片は0.3m四方に収まる範囲から重なって出土し、袋状の物に収納されたものが放置されたような状態である。すべて黒曜石で、肉眼観察から判断すると赤井川産のものである。FC-2は微細な頁岩のフレイクで構成されるものである。いずれも周辺部から出土する石器の形態から判断すると早期に属する可能性がある。

包含層から出土した遺物は石鏃、たたき石、すり石、石皿、Uフレイク、黒曜石・頁岩のフレイク、礫、合わせて21点である。石鏃は黒曜石製で基部が平坦で細身に薄いものである。すり石は断面が三角形状で使用面の幅が狭いもので石皿とともに出土した。土器は伴出していないが黒曜石製石鏃の形態的特長から判断するといずれも早期の土器に対応される可能性がある。ほかに攪乱層から縄文時代の土器片（後北式）1点が出土している。

### (2) リヤムナイ3遺跡

#### 調査の経過

調査に先立ち、4月中旬から樹木の伐採、抜根及び重機による表土層、旧国鉄岩内線の「路盤土」や「道床」を除去し、業者に杭打設を委託した。

前年度の調査結果から、縄文時代前期前半の包含層（Ⅲ～Ⅴ層）は砂層の互層で深度が現地表面下の0.5m～2m前後と場所によりばらつきがあること、また東側へ向かうほど遺物量が増えることか

ら今年度調査区が遺跡の主体である可能性が高いことを予想していた。

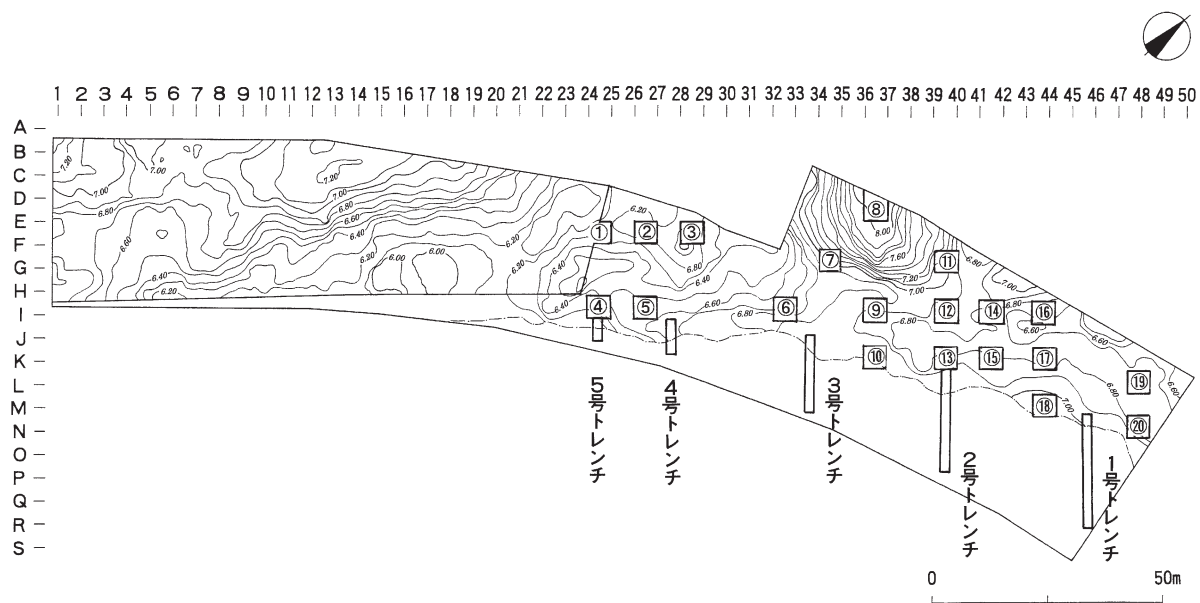
最初に一部に残っていたⅠ層ならびにⅡ層を掘り下げ、縄文時代の包含層であるⅢ層～Ⅳ層上面の地形を検出する調査から開始し、この面での地形測量を行った。この段階で旧国鉄岩内線に沿って側溝跡や杭跡が検出されており、順次調査を進めた(Ⅱ章-3)。

さらにⅠラインから南東側の土層の堆積状況を把握するためトレンチ調査を実施した。この周辺部では砂の堆積が北西部とは異なっていたからである。トレンチは24～46ライン間に25mほどの間隔を置き5m幅で5列設けた(図Ⅰ-4-1、図版14)。この結果、調査区南東部22～49ライン間では、人力で調査できた範囲についてみると、標高5mほどまで平行ラミナが発達する水成起源の砂が堆積しており、基本土層のⅢ～Ⅴ層に対応される包含層が存在しないことが判明した。もっとも東側に設けたN45区1号トレンチでは土層断面で観察されるようにほぼ垂直に削平された部分も認められた。これらは強い水の攻撃を受けた状況とみられ、調査区南東部が古い河川の流路であることが推測された(図Ⅴ-2-5 土層断面⑤、図版14-1)。

また、前年度調査に沿って長く延びる地区(7～25ライン間)において、当初予想していた以上の深さから遺物が検出されたことから、調査区全域の包含層の深度を把握するため、20か所以上の発掘区を対象に深掘り調査を行った(図Ⅰ-4-1 ①～⑳)。平均して現地表面から1.5m～2m前後、段を設けて掘り下げたが、いずれも標高5.10～5.20m前後で湧水しはじめる。このため作業安全上の理由から包含層の最下部までは達していない状態である。

24～29ライン間の5グリッド(①～⑤)の調査では、Ⅳ層上位からⅤ層上・中位にかけてほぼ途切れることなく遺物が出土した。①、⑤において標高5.15mまで掘削したところ、①ではⅣ層下位から(標高5.40m)土器とフレイクのまとまりが(剥片集中)検出され、同じく⑤では石錘などの石器が出土した。また③ではⅣ層上位から土器が、Ⅳ層中位～Ⅴ層にかけて剥片集中が検出された。いずれも発掘後は冠水する状態であったが、遺物、遺構ともに密に分布することが分かった。

32～42ライン間の発掘区(⑥～⑱)のうち、⑧は砂丘の末端部にあたるところで、調査区の中で最も標高の高い地点(8.10m)である(土層断面⑥、図Ⅴ-2-5)。Ⅳ層上位では遺物がまばらであり、間層からは全く遺物が検出されなかったが、現地表面下1.8mほど掘り下げた地点で(Ⅴ層下位



図Ⅰ-4-1 トレンチ、深掘り調査グリッドの位置

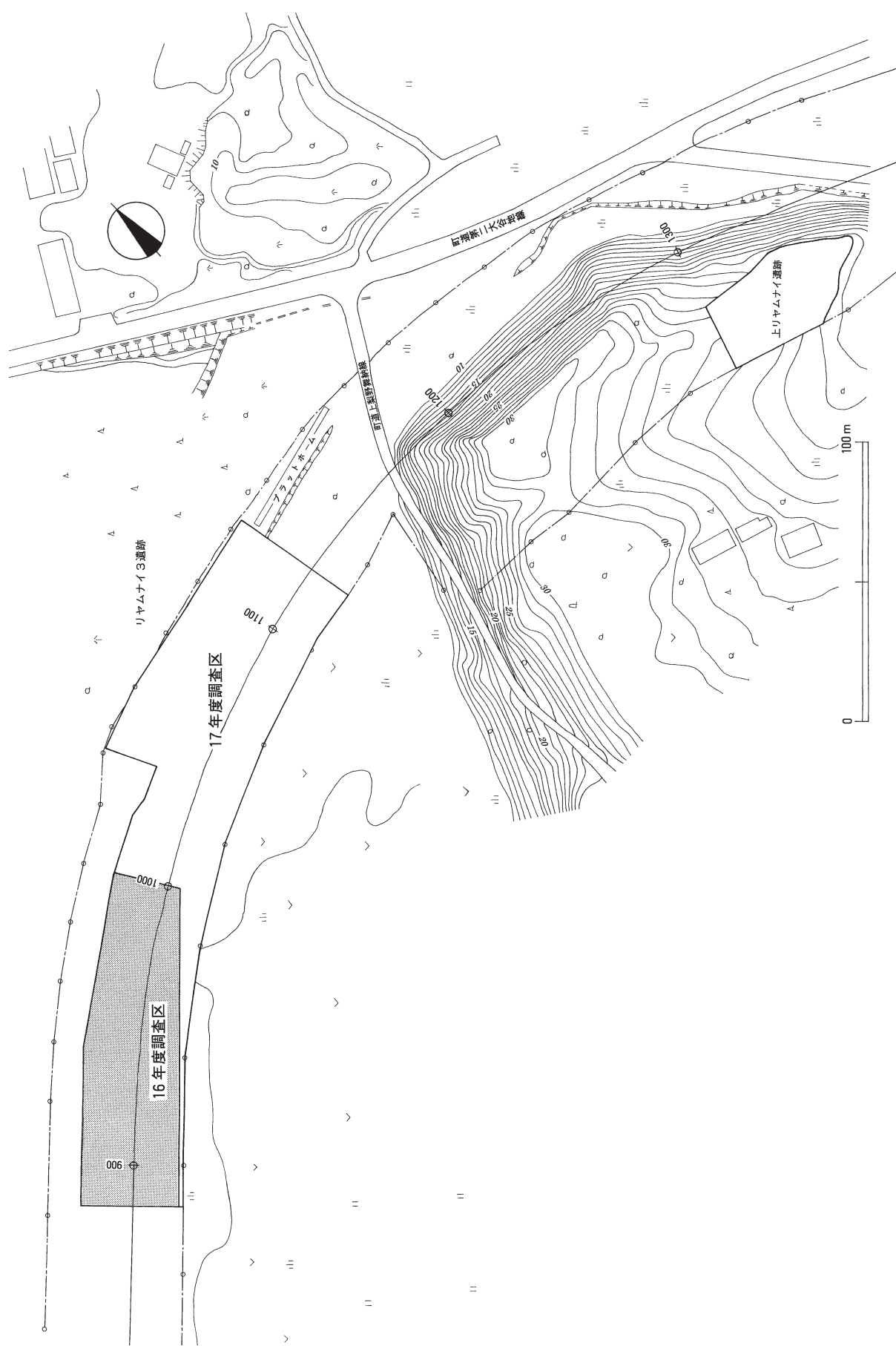


図 I-4-2 遺跡と周辺の地形



相当、標高6.48m)、土器と石器が数点出土する状況であった。また⑦、⑨～⑮では、IV層上・中位で焼土や剥片集中などの遺構が検出された。⑦は砂丘の高まりの裾部分にあたる。⑮ではさらに1.4mほど下位、標高5.2mまで掘削したが遺物は全く出土していない。⑦、⑨～⑭の調査においても同様であった。⑥では石器が1点出土したが、それ以外では冠水する5.10mまで全く遺物が認められなかった。

43ラインでは、⑯においてIV層上位で土器が出土し、さらに1mほど(標高5.67mまで)掘削した段階で集石が検出された。V層下位相当であり、そこに至るまでの間層には遺物は全くない。⑰は標高5.20mまで掘り下げたが遺物は出土しなかった。43ラインの⑱および47ラインの⑲、⑳ではIV層上位からわずかに遺物が出土する状況であり、下位からは検出されていない。43ライン以東では局所的に遺物が出土するが、概ね遺構・遺物の分布は稀薄であることが分かった。

これら①～⑳区のⅢ～V層から出土した土器はすべて縄文時代前期前半期のもので、包含層は数層ある。

以上のようなトレンチ調査および深掘り調査で得られた結果をもとに、調査方法の検討・見直しを行った。すなわち、一部遺物の稀薄な間層を対象に工事用重機を導入し掘削するなど、調査方法により大きく4つの範囲に区分し本格的に調査を進めることとした。なお、調査方法の具体はV章-1、調査別区分図は図V-1-1に示してある。

### 調査結果の概要

検出された遺構は石器集中1か所、集石(S)15か所、焼土(F)60か所、剥片集中(FC)63か所である。これらは32～40ライン間の標高8mほどの小高い砂丘の末端部とそれを取り巻くような位置にある。43ライン以東からはほとんど検出されていない。出土する土器からいずれも所属時期は縄文時代前期前半期に限定される。なお、平成16年度の調査で得られた遺構、遺物の数量についても合わせて一覧表に掲載してある(表I-1～4)

石器集中1はH33d区のIV層から検出された。石鏃やスクレイパー、つまみ付きナイフ、石斧、すり石、石鋸等の石器と頁岩・黒曜石のフレイク等の石器の原材料、スコリア、赤鉄鉱の原石など合わせて295点が1m×0.65mほどの範囲からまとまって出土したものである。とくに石鏃は通常のものよりも大型のものが目立ち、長さが5cmを超えるもの6点を含め20点あった。スクレイパーは19点で、1点を除き、頁岩製である。

集石はS-7がⅢ層、S-10、14、17、18がV層、そのほかはIV層中から検出された。構成する石器等の内容をみると、①たたき石、礫・礫片(S-9、11、12、18)、②たたき石と台石・石皿、礫・礫片(S-8、17、19、20)、③たたき石、すり石、台石・石皿(S-10、15、16)等である。たたき石、礫と台石・石皿で構成されるものが多い。S-9は10cm前後のほぼ同じ大きさのもので、2か所打ち欠きの石錘も混じる。また、S-13はほぼ同じ大きさの礫・礫片、S-14は台石片のみで構成されるものである。S-7は30cm四方ほどの狭い範囲から緑色泥岩、泥岩の石斧、石斧の破片等合わせて14点がまとまって出土したものである。これらは刃部や基部を欠くもので、未成品や破片もある。

剥片集中はV層中から検出されたものが8か所あるほかは、IV層中から検出された。ほぼ頁岩のフレイクだけで構成されるものが半数近くを占める。次いで頁岩が主体で黒曜石のフレイクが混じるものが多い(FC-18、24、25、28、41など)。黒曜石が主体で頁岩が少量混じるもの(FC-10、12、37、39、54など)、黒曜石のみで構成されるものは少ない(FC-23、58、70など)。成品としての剥片石器はほとんど混入されない。石器製作に関連するたたき石やすり石を伴うものがある(FC-9

～12、15、18など)。

焼土はF-7とF-9がⅢ層中、そのほかはⅣ層とⅤ層中から検出された。このうちF-63は灰の堆積土、F-64は炭化物が多く混じる堆積土からなり、焼土そのものは検出されていない。F-41は上面から土器がまとまって出土し、柱穴状の落ち込みにベンガラに類する色調の赤褐色砂土が堆積していたものである。

大半の焼土については土壌サンプルを採集しフローテーション(浮遊選別)処理を行った。二次選別の結果、F-6～10、24、26、37、64からは動物の骨片が、多くの遺構から炭化クルミや炭化木片が検出された。このうち焼土の試料の8件と集石(S-9)と剥片集中(F C-63)、包含層中から検出された動物遺存体合計19件について、種の同定を依頼した。検出された骨片はすべて焼骨で、残存状態があまり良くないこともあり種や部位の同定が出来たものは多くはない。複数の遺構から海獣骨やエゾシカの角やクマなどの大型陸獣の骨がほかに魚類の椎骨、鳥類の骨幹などが認められた(Ⅵ章-1)。

また、焼土7か所と剥片集中2か所、土器に充填されていた土壌から検出され炭化クルミ等10件については放射性炭素年代測定を行った。この結果5530-5320yrBPという測定値が得られている。F-23(Ⅴ層3回目)の炭化クルミが5530±40yrBP、F-61(Ⅴ層8回目)の炭化材が5510±40yrBPであり、報告された中でも古い値が得られている。最も新しい値はF C-63(Ⅳ層5回目)検出の炭化クルミの5320±40yrBPである。一部逆転する部分もあるが検出層の上下・新旧と概ね整合する測定値である(Ⅵ章-2)。

遺物は包含層から79,752点、遺構から121,854点、合計201,606点出土した。

土器が34,379点(包含層34,039点、遺構340点)、石器等が167,227点(包含層45,713点、遺構121,854点)である。包含層についてみると土器の8割以上、石器等は6割弱がⅣ層から出土している。

土器は縄文時代前期前半期のⅡ群a類に属するものが35,304点出土した。このほか前期後半期の円筒下層式(Ⅱ群b類)が10点、中期後半期の天神山式(Ⅲ群b類)が15点とごくわずかである。

Ⅱ群a類土器は尖底が大多数を占め平底のものが少量ある。尖底、平底を問わず文様要素から三つのグループに分けられる。①羽状縄文や斜行縄文地に押し引き文、刺突文、沈線文あるいは縄線文が加えられる土器群で道南部の春日町式の類、②静内中野式に並行するとみられる斜行縄文や縦行縄文の施された土器群、③縄文に綾絡文が加えられる資料で、戸井町高屋敷川1遺跡出土資料(古屋敷ほか2001)に類する新しい段階のものがある。

また、札幌市発寒小学校遺跡出土資料(岩崎・三室1966)や伊達町若生貝塚第6層出土資料(名取・峰山1957)に類する、尖底部の内側に黒曜石の剥片を埋め込む特徴をもつ資料が出土している(図V-4-11-25)。ほかに東北地方から搬入されたとみられる綾絡文や弧状の文様が施された大木2a式に相当するとみられる土器が調査区の数か所から、それぞれ別個体が出土している。

石器は石器製作に関連する頁岩・黒曜石のフレイクが150,327点で全体の90%を占める。ほかに礫・礫片が8%近い13,214点、定型的石器は2%ほどである。フレイクは8割以上が頁岩で、黒曜石は肉眼による観察から判断するとほとんどが赤井川産である。ほかに玄武岩の破片がごく少量ある。

剥片石器ではスクレイパーが最も多い。次いで石鏃、つまみ付きナイフ、石錐、石槍またはナイフ、両面調整石器、ピエス・エス・キユの順である。スクレイパーは篋状のもの、楕円形状、半月状のもの、大型で直線的な刃部をもつものなどがある。前年度調査でも出土している、搔器に類するものもある。石鏃は二等辺三角形で基部に抉りのあるものが主体を占める。茎部を有するものは非常に少ない。石鏃の石材についてみると、頁岩、黒曜石がそれぞれほぼ半数である。また、遺構出土のもの

表 I-1 上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ3遺跡遺構一覧

遺跡名	調査年度	集石 (S)	焼土 (F)	剥片集中 (FC)	石器集中
上リヤムナイ遺跡	平成17年度			2	
リヤムナイ3遺跡	平成16年度	6	4	8	
	平成17年度	15	60	63	1
	小計	21	64	71	1

表 I-2 上リヤムナイ遺跡出土遺物一覧

遺物名	土器	石鏃	パスクレイ	石核	粗工両面調整石器	たたき石	すり石	石皿	Uフレイク	Rフレイク	黒曜石フレイク	頁岩フレイク	礫	合計
包含層	1	5				1	1	1	1		2	4	6	22
遺構			4	1	10				4	53	472	264		808
合計	1	5	4	1	10	1	1	1	5	53	474	268	6	830

には包含層から出土するものに比べて二回り以上も大きく、長さが5 cmを超え、重量が10 gをはかる大型のものがある。

つまみ付きナイフにはいわゆる「花十勝」と称する黒曜石を素材とした精巧なつくりのものがある。石錘は棒状のものが多い。両面調整石器には明瞭な刃部をもたないものがある。

礫石器ではたたき石が多数を占め、たたき石と対を成す台石・石皿が次いで多い。ほかにすり石、石錘、砥石、石鋸、礫器、石斧等がある。たたき石は定型的石器のなかで最も多く出土した。円形、楕円形の扁平礫の周縁部や背腹面を使用するものが多く、棒状礫の端部を使用するもの、持ち重りのする大型のものもある。石材は主に安山岩が利用されている。台石は大型のもののほか小型のものもある。石皿と併用しているものも認められた。すり石は扁平礫や断面が三角形の礫を利用しており使用面の幅は狭いものである。掌に納まるほどの小型のものが目に付く。

石鋸は安山岩の板状礫を素材とするものでいずれも使用面の幅は5 mmほどのものである。石錘は4か所に打ち欠きのあるものが主で、長軸に2か所あるものは数点である。スコリアや軽石は砥石として利用されているもののほか、使用の痕跡の認められないものも多数出土している。

このほか、包含層から石製品5点、土器片錘2点、円盤状土製品片1点、遺構から石製品1点が出土している。  
(遠藤香澄)

表 I - 3 リヤムナイ 3 遺跡出土土器一覧

分類 調査年度	Ⅱ群 a 類		Ⅱ群 b 類	Ⅲ群 a 類	Ⅲ群 b 類	不明	合 計
	包含層	遺 構	包含層	包含層	包含層		
平成16年度	2,148	6	73	91	2	107	2,427
平成17年度	34,014	340	10		15		34,379
合 計	36,162	346	83	91	17	107	36,806

表 I - 4 リヤムナイ 3 遺跡出土石器一覧

器 種	石 鏃		は石 ナイフ 槍 また		きつ ナイフ み付		石 錐		パ ス ク レ イ		石 両 面 調 整 器		ス ピ エ ス ・ キ ー ユ		石 核		フ レ イ ク ・ U ・ R	
	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺
調査年度	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺
平成16年度	58	3	9	3	27	1	13	4	83	2	6				61	5	28	
平成17年度	266	28	55	7	160	9	75	3	283	30	58	6	5	2	189	36	148	9
小 計	324	31	64	10	187	10	88	7	366	32	64	6	5	2	250	41	176	9

器 種	フ レ イ ク 黒 曜 石		フ レ イ ク 頁 岩		フ レ イ ク 玄 武 岩		フ レ イ ク そ の 他 の		石 の 斧 み ・		海 道 式 石 冠 すり 石 ・ 北		た た き 石	
	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺
調査年度	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺
平成16年度	999	3,447	12,802	10,164	380	688	4		6	6	11		199	37
平成17年度	4,629	20,233	24,532	100,762	35		130	6	73	26	182	16	1,009	119
小 計	5,628	23,680	37,334	110,926	415	688	134	6	79	32	193	16	1,208	156

器 種	石 錘		砥 石		石 鋸		石 台 石 皿 ・		ス コ リ ア		軽 石		原 石		礫 器		あ 加 る 工 礫 痕	
	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺
調査年度	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺
平成16年度	12		18				35	3			1		9		1		2	
平成17年度	65	2	28		11	5	223	35	339	9	132	2	16	1	9		6	
小 計	77	2	46		11	5	258	38	339	9	133	2	25	1	10		8	

器 種	礫 ・ 礫 片		石 製 品		土 製 品		粘 焼 土 塊 成		合 計
	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	
調査年度	包	遺	包	遺	包	遺	包	遺	
平成16年度	866	37			2		4		30,036
平成17年度	13,047	167	5	1	3				167,227
小 計	13,913	204	5	1	5		4		197,263

\* 包は包含層  
\* 遺は遺構  
\* 北海道式石冠は平成16年度に  
1点出土

## II 遺跡の位置と環境

### 1 位置と環境

#### (1) 位置と自然環境

共和町は北海道の中央西部、日本海に大きく張り出した積丹半島の基部にある。後志支庁管内の西寄りに位置し6町村と接する。北部に八内岳(943.6m)、東部に銀山(640.5m)、南部から東にはワイスホルン(1045.5m)やニセコ連峰の中央部に位置するシャクナゲ岳(1074m)など三方を山に囲まれ、北西部は日本海に開けている。町のほぼ中央を堀株川が南東から北西に向かって流れ、その下流域に岩内平野が形成されている。町域は304.96km<sup>2</sup>で、このうち田・畑は総面積の19%ほど、山林・原野が57%を占める。町の東部をJR函館線と国道5号、海岸に沿って国道229号があり、両国道を結ぶように国道276号が町のほぼ中央を通る。岩内平野は岩内市街地一帯を除くとその大部分が共和町域である。旧金沢藩前田家にちなんで「前田平野」と別称されるこの平野は北海道内でも有数の水田地帯で、共和町は屈指の優良米の生産地である。また、昭和40年頃からはスイカ、メロン、スイートコーンなどの青果物が注目され始め、近年『らいでんスイカ』『らいでんメロン』の銘柄は定着し全国に出荷されている。

気候は三方を山にかこまれた地形のため夏期は気温が高く雨量もやや多い。冬期は氷点下10度を下回ることは少ないが北西の季節風が極めて強い。また積雪は平野部でも1mを越える多雪地帯である。平成12年の気象概況を見ると、8月の平均気温23.5度、2月の平均気温-4.1度、年間平均気温は8.5度、また年間降水量は1248.3mmである。

遺跡のある梨野舞納は共和町の西部、堀株川下流南岸域である。北側は河口を隔て泊村と南側の浜中は岩内町と接している。西側は日本海に面し、海岸部には砂丘と砂堤が延長3kmほど続く。砂丘は現在の海岸線より1km(仮称A列)と1.5kmの付近(仮称B列)とに二列発達し、砂堤列は海岸側(A列)の砂丘の海側に数列認められる(山田ほか1992)。現在、海岸部には60haにわたっての森林造成がなされ、砂防林が整備されている。「北西の強風によって5~7km内陸の発足、幌似地区まで砂が飛散し、上空が茶褐色になり一夜で砂丘ができ、車馬の通行が不能になることがしばしば」というかつての実態が海岸に立てられた標識に明記してある(図版II-1)。

リヤムナイ3遺跡は現在の海岸線より1.2kmほど内陸部、最も内側の砂堤上に立地する。標高は7m~8m、今年度調査区の北西側で標高8m(表土層除去後)と最も高くこの部分が砂堤の末端部(南端)の可能性もある。また、200mほど東南側で海成段丘に接している。調査区をほぼ縦断するように旧国鉄岩内線の道床(砂利や碎石)と路盤土が残り、海(北西)側はニセアカシアを主とした防風林帯であった。前年度の調査では旧茅沼炭鉱専用鉄道の跡も検出されている(道埋文2005c)。

調査一年目の平成16年9月9日に当地に上陸した台風18号では、昭和29年の「岩内大火」の要因となつたいわゆる「洞爺丸台風」並みの猛烈な風が吹き、調査区に面した樹木のほとんどが根こそぎ倒れた。



図版II-1 海岸部にある標識

上<sup>かみ</sup>リヤムナイ遺跡はリヤムナイ3遺跡の東方に隣接する標高25m前後の海成段丘上にある。周辺部の通称「山崎」の名が示すとおり、岬状に突出した地形が認められ、遺跡はその末端部に位置する。西側の三分の一程は平坦部で、かつて畑として利用されており、その際黒色土が搬出され削平されている。東から南側は斜面部でクリ、イタヤカエデなどの樹林であった。土地所有者である浅井文博氏によると今年度調査区の西側、現在の住宅との間にはかつて自噴する井戸があり小さな池があったという。遺跡のある周辺の台地は、明治期の開墾当初から夥しい量の土器、石器が出土することが知られており、「上リヤムナイ付近では素足で畑に入ると石器の破片で傷がつく」ほどに散在していたという（大場・桐井1958）。

昭和31年（1956）年、積丹半島西海岸における第二次大戦後初めての本格的発掘として岩内町東山遺跡の第一次調査が行われた。この際上リヤムナイ遺跡の予備的調査が共和村教育委員会の主催のもとに行われている。今回の調査範囲はその周辺部にあたる。1956年の調査では上層（1、2層）から円筒土器下層式等の遺物が、下層（3層）からは頁岩製の石器、石器片が出土している。また2層から円筒下層式期の住居跡も検出されている。その前年に同一地点で採集された石刃、彫刻刀（グレイバー）、舟底形石器等が参考品として掲載されており、下層の遺物は旧石器時代のものと報告されている（大場・桐井前掲書）。遺跡のある段丘には梨野舞納段丘1遺跡をはじめ遺跡が密集しており、その南西方向延長2kmのところにあるのが東山遺跡（東山1遺跡）である。昭和43年（1968）には「岩内東山円筒文化遺跡」として北海道史跡（図Ⅱ-2-1の斜線の範囲）に、また出土遺物は有形文化財に指定されている。

## (2) 歴史的環境

共和町の開墾は安政4（1858）年に越後の人、松川弁之助が設けた2か所の幕府直営御<sup>おてさくぼ</sup>手作場に始まるとされる。設置された場所は現在の<sup>まえだほろに</sup>前田幌似と<sup>ほったりつねみ</sup>発足常見である（共和町史編さん委員会編1972）。

同じ年、箱館奉行堀利熙に随行し蝦夷地を巡検した玉蟲<sup>たまむし</sup>左太夫の『入北記』には開墾場について以下の記述がみえる。安政五年閏五月十九日の条である（玉蟲著・稲葉一郎解説1992）。

「(越後) 弁之助開墾場ニ至り一見セシガ、雇百姓十一人程稼ギ居ル。当春ヨリ始メト見ヘ畠地二丁部、田地ハ二三畝程モ開ケリ。地味至宜シク植付シ苗モ勢気大ニ盛ンナリ。其外畠物モ宜シク只今迄開墾場ヲ見分セシガ是程ノ所ハ稀ナリ」とあり、雇い人11人で水稻、野菜の植え付けが行われている様子が見える。しかし、慣れない気候風土に難儀し入植者の定住する割合は多くはなかったという。

その後、明治元年（1868）に岩手県人が発足地区に数戸、同6年には梨野舞納地区に旧佐賀鍋島藩士族が入植し開墾に従事している。堀株川流域の原野を中心とした開拓が本格化するのには明治10年代に入ってからである。明治13年（1881）、発足地区に岩崎轍輔の「北海道開進会社」が、明治16年原野の中心部に旧金沢藩主前田家による「起業社農場」が、また梨野舞納地区には安達定吉が農場を開設するなど大規模な開墾が相次ぎ、畑作を中心に開拓が進められた。その後堀株川筋には多くの村が成立し合併、分離を繰り返している（武内編1987、永井編2003）。

明治39年（1906）には前田村と発足村が、明治42年には堀株川上流域の<sup>こざわ</sup>小澤村がそれぞれ二級町村制を施行し、昭和30年（1955）に三か村の合併により共和村となった。町制施行は昭和46年（1971）である。町内には「御手作場」、「岩崎」、「前田」、「起業社」等開拓の名残が地名にみえる。

## (3) 堀株、リヤムナイの語源について

「リヤムナイ」は堀<sup>ほり</sup>株<sup>か</sup>川の北支流であるアイヌ語の川名に由来する。

「堀株」も同様にアイヌ語に由来する地名、川名であるが、川名堀株は新しい名である。明治3年(1870)の宮島幹『北行日記』には「ホリカツ川」とみえ、同年の山田民弥『恵曾谷日誌』に「シリフカ川ホリカツとも云三十間余」とあり、同6年の『後志国地誌提要』には堀株川に「土人シリフカ川ト云」との注記がある(永井編2003)。それ以前17、18世紀後半までは以下に見えるようにシリブカ、尻ふか、しりふか、シルンカ、シルムカなどと呼ばれていた。

寛文9年(1669)蜂起のシャクシャインの戦いに関連し『津軽一統史』卷十之下(享保16年1731)に「しりふかの大将 カンニシコル」とあり、同じく「兵庫様御居城より松前上国え渡口覚」の条に「湯和内」と並んで「尻ふか 川有 間有 狄屋あり」と見えるのが早い記録である。元禄13年(1700)年の『元禄松前嶋郷帳』には「しりぶか」とある(北海道編1969)。また永田方正『北海道蝦夷語地名解』(初版1891年明治24年)では「シルムカペツ。山陰の上(かみ)より来る川」と書いている。本来はアイヌ語に由来する地名であろうが、山田秀三氏はこの永田方正の解については「shr-um-ka-pet「山の・後部・の上(からの)・川」とでも読んだのだろうか。ずいぶん難しい解である」と、読み方の解釈の判断が付きかねるようで、自身の解は保留している(山田1984)。

松浦武四郎は『西蝦夷日誌』(松浦著・吉田編1984)に「シリブカ(川幅四十間、船あり)本名シルンカと云り」と書いた。続いて「越て(砂濱)、ホリカブ(堀株)「番や、出稼多し、いなり社」、前に島あり、弁天社有、橋を架て風景世ろし」とある。川名シリブカとホリカブが並んであり、「堀株」は元来、川を渡った北岸の砂浜のところの名であったことが推測できる。『東西蝦夷山川地理取調図』ではホリカフエトとみえる(図II-1-1)。

堀株川は昭和8年(1933)年に現在のように改修されるまでは河口付近で大きく蛇行する川であった。アイヌの人々にとっては、河口から上っていくと上流でくると方向を変えて川上が海の方に向かっていたりする、ホルカ「horka-p 後戻りする・もの(川)」である。山田秀三氏はそれ故、ホルカが河口北岸の場所の地名となり、後に川の総名としても使われるようになったのであろうとしている(山田1984)。

また、『西蝦夷日誌』には「往古は千余軒有て、シリカフ川筋に往し」とあり、堀株川筋にはアイヌの大集落があったことを伝えている。現在、地名堀株は隣の泊村に引き継がれている。

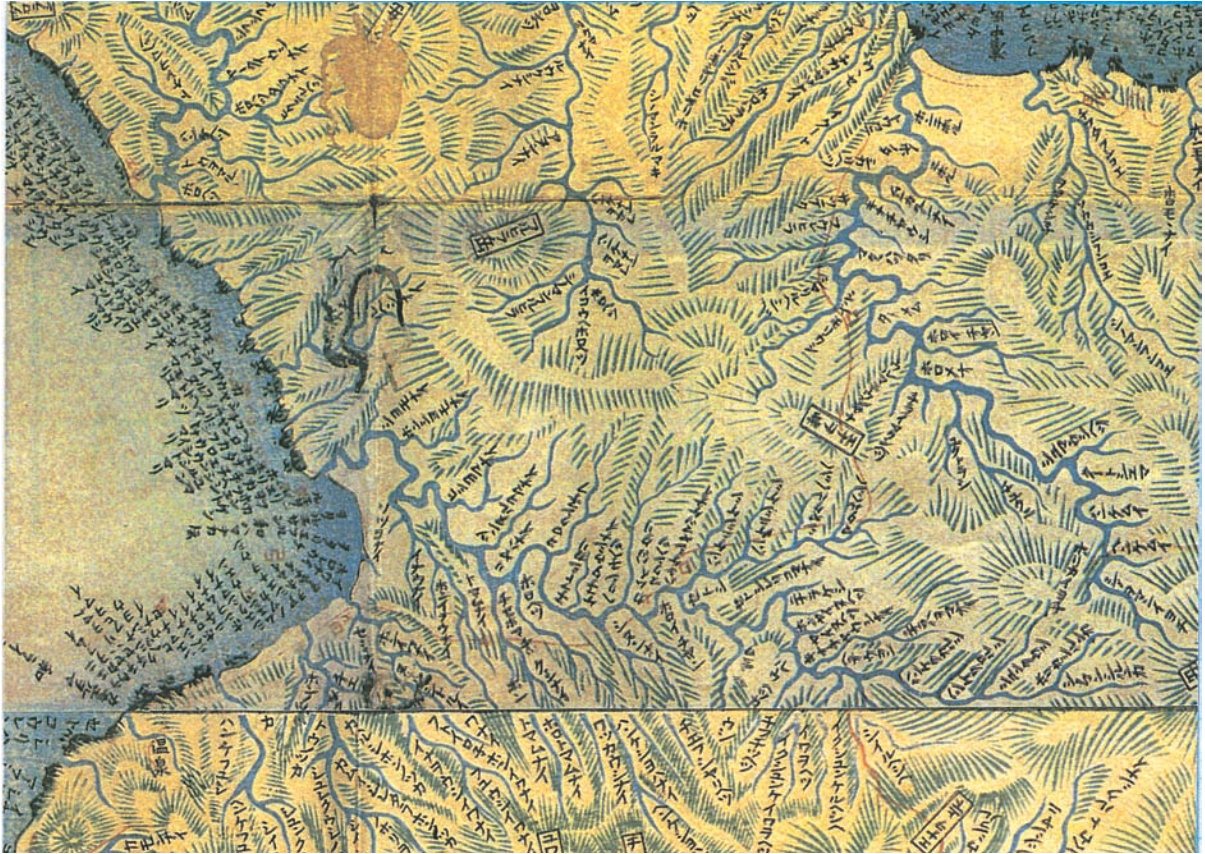
リヤムナイの名は松浦武四郎の安政3年(1857)の『武四郎廻浦日記』(松浦著・高倉解説1978)の記述に見えるのが最初である。シリブカ川の「扱渡し場よりしばし上りて左りの方…」と川の名の列記が続き、「リヤムナイ、此川も相応の川也」と記されている。

翌安政4年の『丁巳曾宇津計日誌』(松浦著・高倉校訂・秋葉解説1982)には「左りの方ヨイチ山のうしろの方より落来る」川としてヨロクンネ、子フトシカリ、ケ子タウシナイとならんで下流側にリヤムナイがみえる(図II-1-1)。地名としては本来、堀株川右岸の流域(現在の字発足)を指していたものと見られる。

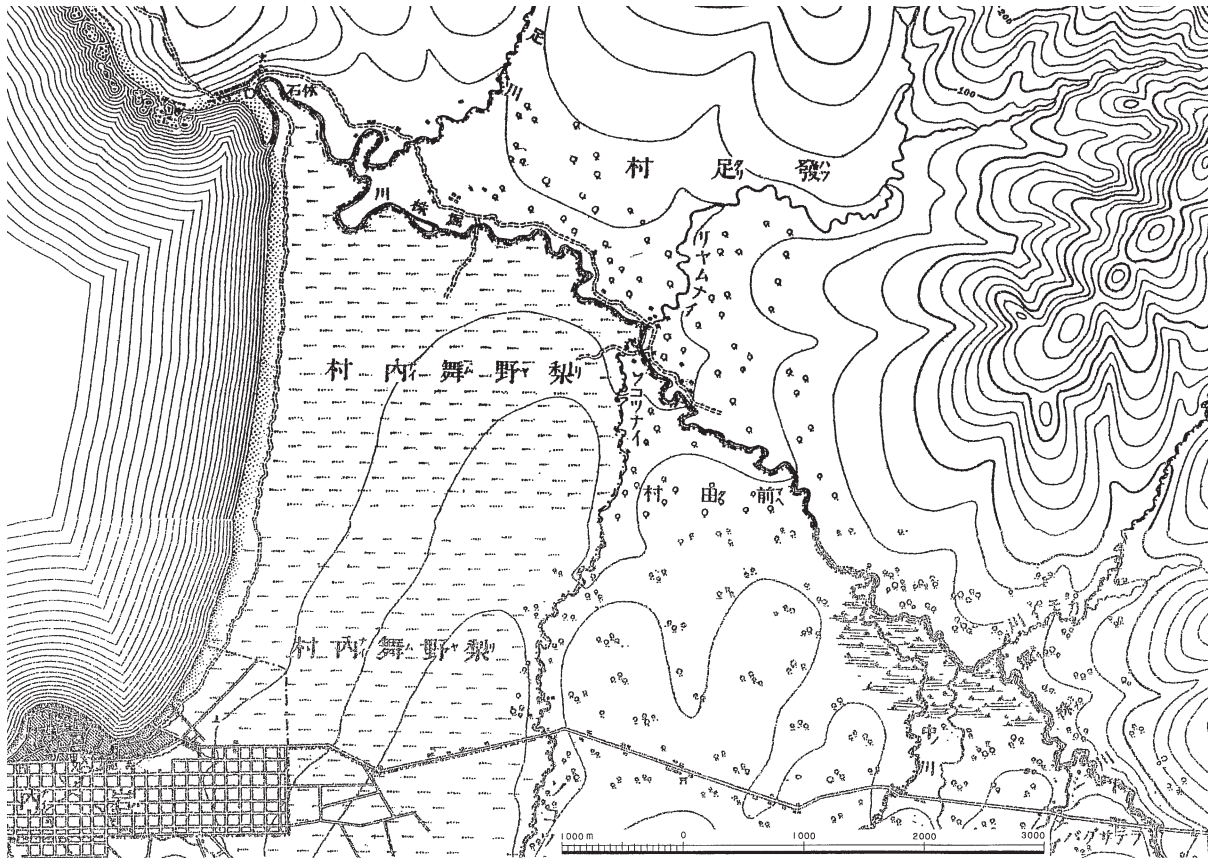
永田方正の『北海道蝦夷語地名解』では「Riyam nai リヤム ナイ 越年川」とみえ、「秋ヨリ来春ニ至ルマデ越年シテ鮭ヲ漁スル ヲ得故ニ名ク今梨野舞納村ト称ス」とある。

山田秀三氏は『地名解』を引用したうえで「riyaは越年する、越冬する意であるが、riyamともいうかを知らない。何か後に語があったのかもしれない。」(山田1984)とし、本来的なアイヌ語の形としては疑問が残ることを付け加えている。

梨野舞納村は明治15年(1883)に堀株村から分かれて成立し同39年まで存続した岩内郡内の村である。梨は犁(犂)とも記される。前田村に合併後は大字名となり、昭和46年(1971)の町制施行に伴い大字を字名に替え、再編された(永井編2003)。2万5千分の1地形図等を見ると堀株川南岸の発



図Ⅱ-1-1 松浦武四郎著『東西蝦夷山川地理取調圖』



図Ⅱ-1-2 旧版5万分の1地形図(1)

(この図は大日本帝国陸地測量部明治29年製版の假成5万分の1地形図「八内岳」「岩内」を複製したものである)





図Ⅱ-1-3 旧版5万分の1地形図(2)

(この図は大日本帝国陸地測量部大正6年測図、大正9年発行の5万分の1地形図「岩内」「茅沼」を複製したものである)



図Ⅱ-1-4 旧版5万分の1地形図(3)

(この図は国土地理院昭和32年測量、昭和36年発行の5万分の1地形図「岩内」「茅沼」を複製したものである)

足地区にカタカナ表記での通称が残るが、北岸は漢字で表記されている（図 I-1-1）。

堀株川筋では多くの村が合併、分離を繰り返している経緯があり、梨野舞納（リヤムナイ）が隣接する岩内町の字名と誤認される場合も多いようである。遺物の採集地として「岩内町字リヤムナイ」「岩内町リヤムナイ」と記されている報告が見られる。なお地名表記としては「利野無内」が、堀株川北岸<sup>はったり</sup>発足にあるダムの名にみえる。

#### (4) 江戸期の日誌、地図にみえる梨野舞納（リヤムナイ）

##### 松浦武四郎の日誌

松浦武四郎は弘化3年（1846）と安政3年（1857）の二度、スツツ（寿都）から岩内、積丹へと日本海沿岸を北上している。また安政4年には、山越えの道（現在の国道5号線である）を通り岩内から、エナヲ峠（稲穂峠）を越え余市へと向かっている（『丁巳曾宇津計日誌』）。その前年、難所として知られた稲穂峠の掘削改修工事が行われ、峠付近に「笹小屋」と呼ばれる宿泊所が設けられ、夏期も通行できるようになっていた。

ここでは松浦武四郎の日誌をもとに当時の遺跡周辺、特に海岸部の様子を見ていくこととする。

最初の日誌である『再航蝦夷日誌』（松浦著・吉田武三校註1970）には弘化年間（1844～48年）の海岸部の賑わう様子がよく描かれている。岩内運上屋から追分へ出て、浜通りを先へ進むとシリフカ（堀株）までの砂浜には鯨漁のため出稼ぎに来た人々の小屋が多く立ち並んでいた。この辺りの地名として「ホロレウケ」「ヲタルエフル」、「マタルエサン」、「ルエサン」が並び、次のように記されている。

「ホロレウケ 二八小屋多く七連多しと聞り。越えて浜中。此辺り凡そ毎年人間三千人斗づ、入込候由。其帳面前三千人ならば又隠れもの又三千人も有る也。これにて此処の繁華しるべし。」

ここで云う「二八（取り）」とは、江差・福山の凶漁で蝦夷地近場所（現在の熊石以北歌棄<sup>うたすつ</sup>付近まで）に入漁するようになった漁民を指してと呼ぶもので、場所請負人に対して漁獲した鯨の2割を納め、自らは8割取るという当時の取り決めから生じた言葉である。岩内運上屋が掌握した正式な漁民の数は3000人余りであるが、帳簿に載らない隠れ漁民もまた3000人も居るほどの記述である。

さらに「七連、按摩。髪結床等有。其余また小間もの店も有る」と続き、七連（娼妓）も多く商家が連なり、ひとつの町を成すほどの賑わいである。

『北海道史略年表』（北海道編1988）の安政2年（1856）12月の条に、この年箱館奉行所が、下役元締の妻女を伴った宗谷への赴任を許可したとある。弘化年間<sup>しやこたん</sup>は積丹半島突端<sup>かむいみき</sup>の神威岬以北への婦女を伴った通行が禁止されていたのである。そのためフルウ（古宇）、シヤコタン（積丹）、さらに奥へ入る船はここで停泊していくことになる。その繁盛ぶりについては「此処のにぎやかなること実に筆状しがたし」という言葉で結ばれている。

浜通りにみえるアイヌ語地名については、知里真志保の『地名アイヌ語小事典』（知里1993）と『アイヌ語入門』（知里1984）を参考にすると以下のようなになる。

ホロレウケは「horo-rewke 大きく・曲がっている（処）」、ヲタルエフルは「ota-ru-e-huru 砂浜の・道・そこにでる・丘」、マタルエサンは「mata-ru-e-sann 冬・道・そこで・（浜へ）おりる・処」である。ルエサンは「ru-e-sann 道・そこで・（浜へ）おりる処」である。そしてルエサン辺りからは後方羊蹄<sup>しりべし</sup>（羊蹄山）が見え、岩内岳<sup>うま</sup>が午の方角にみえた（『西蝦夷日誌』）。

安政3年の記録である『武四郎廻浦日記』には「この間浜中と云也。平野内四十五六丁にて奥行二里の間少しもさえぎるものなし。」とある。また『西蝦夷日誌』にはこの海岸部の様子について「追

分（従イワナイ左）より濱通りを行、平野凡一里半奥式里もあり、黒百合・沙参（つりがねにんじん）多し」と書いてある。

和名「浜中」といわれた梨野舞納の海岸部は現在では想像もできないほどの賑わい振りであったが、その奥はさえぎるものが何もない茫漠とした原野だったのである。

### 「伊能図」

松浦武四郎の最初の紀行から遡ること四半世紀、文政4年（1821）に完成した伊能忠敬の日本地図『伊能中図』（縮尺21万6000分の1）では、今から200年ほど前の海岸部の様子を知ることができる。この「積丹・岩内」の部分は間宮林蔵の測量といわれているが、これを見るとユワナイ（岩内）からシルンカ（堀株）までの海岸部は砂浜をあらわす黄土色で帯状に表現され、「ヲタノシケ」となっている（口絵カラー2）。

ヲタノシケはアイヌ語で（ota-noshke 砂浜の・中央）と解釈され、梨野舞納のみならず北海道各地で和名「浜中」と意識されるところが多い。そして砂浜の中ほどには、沼（青色）があったようである。図上10mmを2160mとして計測すると、海岸線から400mほど内陸部、北緯43度線を挟み南北に1500m、東西に900m前後の大きさであろうか。海岸線から1.2kmほどの距離にあるリヤムナイ3遺跡（北緯42度59分50秒）が丁度含まれる。

遺跡の南側と北東側にそれぞれ、現状では水田として利用されている「沼地形」が認められる。いずれかが『伊能図』の沼に相当する可能性があるが判然としない。

## 2 周辺の遺跡

### (1) 共和町内の遺跡

現在、共和町には29か所の遺跡が登録されている。旧石器時代から縄文時代各期、続縄文時代、擦文文化期、アイヌ文化期のものがある。調査された遺跡が少ないことから内容の詳細が不明な遺跡が多い。遺跡は堀株川河口付近の標高の低い沖積地や海岸砂丘、堀株川に注ぐ北支流の河岸段丘上、また海岸砂丘地帯の背後にある標高20～30m前後の海成段丘に多く存在する。岩陰遺跡もある。

以下、時代・時期ごとに記すこととする。なお、（ ）内の番号は道教委の登録番号のD-12-1に続く固有番号で、図番号と同一である（図II-2-1、表II-1）。また、隣接する岩内町と泊村の遺跡については昨年度の報告書に一覧表と概要を掲載してある。

旧石器時代の遺跡は、上リヤムナイ遺跡（2）では頁岩製の石刃、彫刻刀が採集されている（大場・桐井1958）。小沢遺跡（5）はセトセ川左岸の標高45mほどの微高地にある。地元小沢中学校が廃校になる前は生徒が遺物を多数採集していたという。また、リヤムナイ川の左岸の段丘上にあるリヤムナイ川左岸1（19）・リヤムナイ左岸2（20）の両遺跡は旧石器時代の可能性がある。

縄文早期～前期前半期の遺跡は少ない。今年度調査した上リヤムナイ遺跡（本書）では、土器は出土していないが早期の土器に対応される細身で長手の石鏃とすり石、石皿が出土している。リヤムナイ3遺跡（本書）は前期前半の春日町式を主体とした遺跡で、この時期の遺構が多数検出されている。東北地方から搬入されたと見られる大木2 a式土器も出土している。前期後半期は上リヤムナイ、リヤムナイ3、宮丘1遺跡（7）に円筒下層式土器c式～d式の資料がある。梨野舞納段丘1遺跡（4）は縄文前期～中期が主体である。

縄文中期から縄文晩期にかけて遺跡の分布は多くなる。宮丘1遺跡は中期後半の円筒上層式と天神山式期が主体でこの時期の遺構がある。宮丘1遺跡では円筒上層式系統の土器に大木8 b式が伴っている。発足柏木遺跡（1）は泊村との境界にある中期の集落跡で泊村の堀株4遺跡（D-14-16）と



図II-2-1 共和町内の遺跡

表II-1 共和町の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	所在地	立地(標高)	時期	内容・文献等
1	発足柏木	A	宮丘129-1~3ほか	堀株川右岸高位段丘上(20~40m)	縄文前期・中期(円筒土器上層式)	泊村D-14-16(堀株4)に同じ。大場・桐井(1958)北海道教育委員会(1963)。過去に竪穴状のくぼみがあったという
2	上リヤムナイ	A	梨野舞納70-1ほか	梨野舞納段丘の北端(25m)	先土器、縄文早期~後期	昭和31年調査。上下2層の包含層。円筒下層期の住居跡。採集資料として旧石器あり。大場・桐井(1958)本書
3	下リヤムナイ	C	梨野舞納68-1ほか	堀株川左岸海成砂丘列上(10m)	縄文中期~晩期、続縄文(恵山式)、擦文文化期	昭和32年調査 擦文期の竪穴と晩期~続縄文にかけての貝塚。大場・桐井(1958)竹田(1969)
4	梨野舞納段丘1	B	梨野舞納103-1~5ほか	梨野舞納段丘(30m)	縄文前期・中期	多量の遺物(北海道式石冠、石皿、ナイフ土器)
5	小沢	A	国富335-2	セトセ川左岸段丘の微高地(45m)	先土器	
6	発足岩陰	D	宮丘63-7・8	堀株川右岸 海蝕崖(基盤5m)	縄文晩期、続縄文(恵山式・後北式)、擦文文化期	昭和37・38年調査 竹田(1963・1969) 晩期、続縄文、擦文土器土器と石器、骨角器
7	宮丘1	A	宮丘20-6・7,51-2	旧堀株川右岸低位段丘(?) (5m)	縄文前期後半~晩期中葉、続縄文、擦文文化期	昭和59年調査 中期後半期の住居跡、土壇、小ピット群 吉田ほか(1985a・1986)、北海道教育委員会(1963)
8	戸隠神社	B	宮丘168-1ほか	発足川右岸段丘(20m)	縄文中期・後期	竪穴様くぼみが4か所ある。
9	十棒川1	A	宮丘26-1~4ほか	十棒川右岸段丘(15m)	縄文時代	剥片
10	発足川1	A	宮丘5-7・27	発足川左岸段丘(10~15m)	縄文時代	繊維土器
11	宮丘2	A	宮丘42-1~6ほか	旧堀株川右岸段丘上(15~20m)	縄文中期	石核、石鏃、剥片、土器
12	宮丘3	A	宮丘34-1・4	発足川右岸段丘(25~30m)	縄文時代	石鏃片、石槍片、
13	宮丘4	A	宮丘45-13~15ほか	発足川右岸段丘(20~25m)	縄文時代	石槍、剥片、土器
14	宮丘5	A	宮丘329	発足川右岸段丘(17m)	縄文時代	剥片、大半が破壊されている。
15	発足川2	A	宮丘5-5・6	発足川左岸段丘(20m)	縄文時代	剥片、土器片
16	発足川3	A	宮丘5-1ほか	発足川左岸段丘(20m)	縄文時代	石鏃、ナイフ、剥片
17	十棒川2	A	宮丘425-1・4・6・7	十棒川右岸段丘(20m)	縄文時代	北海道式石冠、剥片
18	発足神社	A	発足3-4ほか	ヤチナイ川右岸段丘(35m)	縄文時代	剥片
19	リヤムナイ川左岸1	A	発足393-1	リヤムナイ川左岸の独立段丘(15m)	先土器?	剥片
20	リヤムナイ川左岸2	A	発足252-1~6,393-5	リヤムナイ川左岸の独立段丘(15~20m)	先土器?、縄文時代	ポイント、剥片
21	梨野舞納砂丘	A	梨野舞納251-8ほか	海岸砂丘列上(10m)	縄文中期	土器、剥片
22	梨野舞納段丘2	A	梨野舞納259-1~3ほか	梨野舞納段丘(30m)	縄文時代	土器、剥片
23	梨野舞納段丘3	A	梨野舞納94ほか	梨野舞納段丘(30m)	縄文時代、擦文文化期	土器、北海道式石冠、石皿、剥片、糸切り底の土器
24	梨野舞納段丘4	A	梨野舞納37ほか	梨野舞納段丘南向き緩斜面(30m)	縄文時代	剥片
25	発足砂丘	A	梨野舞納84ほか	旧発足川と現発足川とに挟まれた海岸砂丘(10m)	縄文後期、晩期、擦文・アイヌ文化期	平成9年試掘調査。擦文の集落跡、アイヌ文化期の貝塚。田才・田部(1998)
26	東山4	A	老古美41-1・2・6・8	ボン岩内川右岸段丘(20m)	縄文時代	岩内町D-13-4に続く。
27	リヤムナイ1	A	梨野舞納76,220-1	海岸砂丘(10m)	擦文文化期	土器片。大半は砂採取で削平。
28	リヤムナイ2	A	梨野舞納373-1	海岸砂丘(5m)	縄文晩期	平成11年調査 吉田・田才(2000)。剥片集中
29	リヤムナイ3	A	梨野舞納19-2,151-11	海岸砂丘後背部、D-12-21と同一砂丘列(7~10m)	縄文前期・中期	平成16年道埋文センター調査。石器集中、剥片集中、集石、焼土 本書

\* 表の番号は図番号に一致する。また、北海道教育委員会の登録番号「D-12-」に続く固有番号と同じである。

\* 遺跡の種別は次のとおりである。A：遺物包含地 B：集落跡 C：貝塚 D：岩陰

縄文後期は宮丘1遺跡、発足砂丘遺跡(25)で土器が出土している。

縄文晩期は宮丘1遺跡で前葉・中葉の土器が、下リヤムナイ遺跡、発足岩陰遺跡(6)で土器が、発足砂丘遺跡(25)で土器、遺構が検出されている。

続縄文時代の遺跡は下リヤムナイ、発足岩陰、宮丘1遺跡がある。発足岩陰遺跡では恵山式と後北式土器が、上リヤムナイ遺跡で後北式土器が採集されている。

擦文文化期はリヤムナイ遺跡で竪穴住居が調査され、土器、石器、ガラス玉、土製品等が出土している(大場・桐井1957)。発足岩陰遺跡、発足砂丘遺跡で土器が出土している。

アイヌ文化期は、発足砂丘遺跡で貝塚が確認されている。

次にこれまで調査された遺跡を中心にその内容を簡単に記載することとする。

発足岩陰遺跡は堀株川右岸の海食崖に開口する岩陰で、昭和36年(1961)、松下巨氏によって発見された。昭和37年・38年の二次にわたって小樽市博物館の竹田輝雄氏らにより調査された。縄文晩期、続縄文(恵山式・後北式)、北大式を含む擦文土器や石器、骨角器が見つまっている(竹田1963)。

宮丘1遺跡は旧堀株川の右岸、現海岸線から800mほどのところにある。北海道電力泊原子力発電所建設にかかる包蔵地確認調査で新しく確認された遺跡で、昭和59年(1984)に本調査が行われた。主体となる時代は縄文中期後半で、縄文前期後半～晩期中葉、続縄文時代、擦文時代の遺物、遺構が検出されている。住居跡は中期後半期のものである(吉田ほか1985a・1986)。

発足砂丘遺跡は堀株川河口付近北岸標高5～18mほどの砂丘上にある。平成9年に北海道教育委員会により試掘調査が行われている。この結果、砂堤列から擦文時代の竪穴住居跡16軒、土壇3基、焼土4か所と擦文土器4個、土師器1個が検出されている。住居跡1件は火災住居である。当所が擦文期の拠点集落であることが想定されている。また、アイヌ文化期の貝塚からは鉄鍋片も出土している。ほかに縄文晩期中葉のいわゆる浜中大曲式に相当する胴部が張った鉢が出土している(田部・田才1998)。

リヤムナイ2遺跡は平成11年度の調査で縄文時代晩期の土壇14基と杭跡1基が検出されている(吉田・田才ほか2000)。

## (2) 下リヤムナイ遺跡と「浜中大曲式」

「－浜中遺跡略報－北海道南部の亀ヶ岡式土器について」(吉崎1952)と題されたひとつの報告を通して、「下リヤムナイ遺跡」と「浜中大曲式」との関連が明らかになったのでここに記すこととする。

### 下リヤムナイ遺跡

下リヤムナイ遺跡(登載番号D-12-3)は昭和31年(1958)、岩内町東山遺跡の調査の際に、上リヤムナイ遺跡と同時期に予備的な調査が行われ、その概要は『岩内遺跡』に報告されている(大場・桐井1958)。

遺跡は岩内郡共和村(当時)、堀株川左岸下流域にある(図II-2-2の④)。茅沼炭<sup>かやぬま</sup>専用鉄道(当時)を西側すぐ傍らに見る位置にあり、砂丘地帯の中で「本地点のみが、範囲凡そ千坪に亘小丘陵地帯に存在しており、標高は凡そ20米位である」(大場・桐井前掲書)。昭和32年発行の5万分の1地形図ではこのあたりは「大曲」の表記である。遺跡のある土地の所有者は藤森要作氏。古くからその存在が知られていたことから愛好家達の蒐集の対象となっており、荒廃しているとの記述がある。写真では、この小丘陵は線路側が切り立っており人為的に削平されたように見える(同報告書p20の写真39)。表面採集では円筒上層式、野幌式(手稲式)、亀ヶ岡式、恵山式の土器が発見されている。1958年の調査では擦文土器と石鏃、石べら、砥石、石斧等の石器、ガラス玉、土器片を利用した垂飾

が出土し、炉をもつ竪穴住居跡が検出された。

ほかに下リヤムナイ遺跡出土参考品として桐井力蔵氏所有の縄文晩期の完形土器が3点写真で紹介されている（同報告書p 22・23の写真44・45）。

これとは別に、昭和27年（1952）8月26日、「前田村下リヤムナイ浜中の藤森氏所有の砂丘遺跡の試掘」が行われたことが同報告書中の考古学的研究の歴史の章に記載されている。この時のメンバーは法政大学資料室嘱託松平義人氏、明治大学学生吉崎昌一氏、他明治大学学生二名、江差高等学校生徒三名とある。

また、報告書では「下リヤムナイ大曲遺跡」、「下リヤムナイ浜中（大曲）、藤森要作氏所有地内の遺跡」、「…大曲浜中の（各）遺跡」の名称が再三現れるが、これらは異なる遺跡ではなくて、おそらく同一箇所を示すものであろう。

### 浜中大曲式

「浜中大曲式」は桐井力蔵・吉崎昌一氏らによって仮称された縄文時代晩期中葉大洞C<sub>2</sub>式並行の土器形式である。積丹半島<sup>しやこたん</sup>地域に分布する在地色の強い土器として、「口縁下に平行のほそい沈線とそのあいだをうずめる連続刺突文、地文としての縄文のかわりの縦位に付された平行沈線様の擦痕などによって代表される、異形土器の多い土器群」として紹介された（吉崎1965）。双口土器が1点図示されたほかは報告書作成前に資料が火災で消滅したこともあって、遺跡の位置を含めその詳細な内容は不明なところも多かった。「名取武光・松下亘らによる桃内式土器（名取・松下1964）もこの土器の仲間である」とされ、これも内容を知るひとつの手がかりであった（吉崎前掲書）。

その後、石狩町シビシウス第4遺跡で墓に伴ってまとまって出土し（石橋編1979）、同じ内容をもつ資料として認識されるようになった（野村1981）。余市町、泊村など積丹半島周辺部の遺跡での類例も増え（余市町大川遺跡、泊村波井遺跡等）、また礼文島の浜中2遺跡（西本編2000）、北檜山町（現せたな町）生淵2遺跡（道埋文2005b）など日本海沿岸の広い範囲で出土し報告例が蓄積されたことから、そのひろがりや内容が少しずつ明らかになっている。最近では「浜中大曲式」を全道的な視点で捉え、系統論から位置づける試み（福田2003）や形式内容そのものの再検討も提唱されている（芝田2005）。

その一方で遺跡の所在地については、ほとんど注意されることがなかった。

### 「浜中遺跡略報」

ここに「－浜中遺跡略報－北海道南部の亀ヶ岡式土器について」（吉崎1952）と題されたガリ版刷りの報告要旨がある。この昭和27年度の『明治大学考古学研究会報告要旨』は、表紙を除き全体は40ページであり、中に16の調査報告が載っている。「浜中遺跡略報」は目次の2番目にあり、この報告の発表者は当時三年に在学中の吉崎昌一氏である（図II-2-3）。

今回、野村崇氏からこの資料の複写を頂戴し、また中村齋氏からは原本そのものを拝借することができたので、ここに原文を再録するものである。これまでこの「略報」の存在は、「浜中大曲式」の類例を紹介する野村崇氏の論文により知られてはいたが、全体の内容を知る機会がなかったものである（野村1981・1985）。この報告が浜中大曲式（土器が出土した遺跡）の内容を最初に示したものといてよい。

50年以上の時を経ているため字がかすれ、前後の文脈から読み取らなければならない箇所もあった。ここでは本文は縦書きを横書きにし、用字は現行漢字に改めてある（25ページ）。

なお、大沼忠春氏からは『Arctic Anthropology IV-1』（Okada, Okada and Chard 1967）の「An Annotated Bibliography of The Archaeology of Hokkaido」にこの略報の英文抄録（769）

があることを教えていただいた。

### 浜中遺跡の位置

「浜中遺跡略報」から知り得ることは以下のとおりである。

- ① この調査は『岩内遺跡』の記述にみえる昭和27年8月26日の調査である。
- ② 遺跡の一部を破壊した「砒業線引込み」とは、茅沼炭鉱専用鉄道と考えられる。この鉄道は昭和21年に当時の国鉄岩内駅から終点の<sup>はったり</sup>発足までの間6300mに敷設され、石炭や資材を輸送していたもので、同39年に廃止されている。路線は昭和32年発行5万分の1地形図に見える。岩内駅を出ると山崎（リヤムナイ3遺跡付近）までは国鉄岩内線と並行して走り、その後方向を北に変え浜中を過ぎ、大曲のあたりで最も海寄りとなり、やがて堀株川を渡る（図Ⅱ-1-4）。

浜中遺跡はこの路線上のうち、つまりは「字浜中、俗称大曲」にある。昭和27年当時は岩内郡前田村である。その位置は鉄道が川を渡る少し手前あたり（南側）と考えてよいであろう。

- ③ 「上リヤムナイ」とあるのは下リヤムナイの単純な誤認であろう。
- ④ <sup>かもえ</sup>神恵川はリヤムナイ川よりも上流にある北支流である。河口から5、6kmほど内陸で本流と合流する小河川で、地形図で見るとかぎり周辺に旧河道にあたる痕跡は見当たらない。ところで堀株川は昭和8年（1933）に下流側の<sup>かもえ</sup>大曲を日本海に直接流出させる切り替え工事が行われている。文中の旧河道とは堀株川のものではないだろうか。また、砒業線との位置関係、砂層や貝塚の存在から遺跡が内陸部にある可能性は低い。このことから略報で「神恵川」と呼称された川は現堀株川である可能性が高い。
- ⑤ 下リヤムナイ遺跡は「下リヤムナイ浜中（大曲）の遺跡」「大曲浜中の遺跡」と呼称されている。また、土地所有者は下リヤムナイ遺跡、浜中遺跡ともに藤森（要作）氏である。

以上のことから、吉崎昌一氏らが調査を行った「浜中遺跡」は現在「下リヤムナイ遺跡」として登載されている遺跡に含まれる、もしくはごく近接した場所であることはほぼ間違いないと考える。下リヤムナイ遺跡は縄文時代から続縄文、擦文文化期、アイヌ文化期に及ぶ包蔵地範囲の広い遺跡である。詳細な地点は特定できないが浜中大曲式の標式遺跡として良いと思われる。

最後に下リヤムナイ遺跡と浜中大曲式との関連を補強する資料を紹介する

一つは『岩内遺跡』のなかで下リヤムナイ遺跡出土品として写真で紹介されていた土器である。やや不鮮明な写真ではあるが舟形土器を含む3点である。口縁部と肩部に連続する刻み目の付けられている縦行縄文地の舟形（異形）土器、縄文地に沈線による紋様が描かれ、頸部に刻み列のある注口土器、縦行縄文で口縁部の一箇所に山形突起部のある下ぶくれの壺形土器である（前掲書p22・23の写真44・45）。

もう一つは竹田輝雄氏が『新版考古学講座』のなかで小樽市博物館所蔵の岩内郡共和村下リヤムナイ出土として報告した資料である。大洞C<sub>2</sub>式並行の土器として他の日本海岸沿岸の遺跡出土の



図Ⅱ-2-2 下リヤムナイ遺跡の位置  
（『岩内遺跡』所収）



資料とともに掲載され以下のような説明がなされている（竹田1969）。

「このグループには、双口やアワビ形の異形土器が出現する。（中略）条痕文土器はこの時期の特色として、北海道西南部、とくに日本海岸沿岸地帯で発見されている。厚沢部 Loc. 4、全修寺、下リヤムナイ、照岸洞窟の下層で発見され、中でも桃内第三類土器は豊富な内容をもっている。」

図版の出土地には「5 リヤムナイ」とあるが文脈から判断し「下リヤムナイ」と解釈してよいと思われる。掲載されている資料は胴部がやや張り出す壺形土器。体部は縦行縄文で頸部には無文帯を有し、口縁部、頸部、肩部に連続する刻み目のあるものである（竹田前掲書 p 301第二図-5）。

これらの資料はその特徴から浜中大曲式と考えてよいものである。

### (3) リヤムナイ採集として報告された資料について

ここではリヤムナイ採集としてこれまで報告されてきた資料や遺跡の内容を紹介する。梨野舞納（リヤムナイ）は砂丘のある海岸部から背後の段丘上までを含む広い範囲を指す字名、地区名である。そして再三述べるが岩内町の字名と誤認されることが多い。

以下の①～⑤の資料は共和村あるいは前田村、梨野舞納村と採集・出土地点が明記された報告ではないが、いずれも現共和町内出土の資料とみなされるものである。

① 昭和12年（1937）、大山史前学研究所の池上啓介は「北海道後志国岩内郡岩内町利野無納遺跡の遺物（其一）」と題して『史前学雑誌』に資料を紹介している（池上1937）。

これらの資料は、当時北海道庁立小樽中学で工作の教師をしていた松平義人が在職中に蒐集し、史前学研究所に持参したものである。池上啓介は北海道の石器時代研究の一端を担うべく、これらの石器の研究に取り掛かったようである。前段階として遺物入手の来歴や遺跡の位置、遺物の概要などを報告したのが「其一」である。

その後、池上啓介が出征したことで中断され、さらに昭和15年の除隊後もワケあって報告ができなくなったことから、2回目以降は所長である大山柏に引き継いだのである。遺物は少数の土器片を除くと石器ばかりで、「小形の整理箱二十五箱に満々して」あり、優に数千点に達するほどで完形品も数百点はあった（大山1941）。

大山柏は「北海道岩内町リヤムナイの遺物（第二回）」題としてまず、自身が刺突鏃（大半を占める）、斬突鏃と分類した217点の石鏃について様々な属性を通して形態分類している。写真図版9枚に140点あまりが示してある。第三回は石鏃以外の粗造石鏃、石鏃類品、細石器近似品について取りまとめたものである（大山1942）。前回同様、自ら規定した粗造不規則形石鏃とその類似品を第1グループ、細石器近似品を第2グループに分類、それぞれをさらに群に分け考察している。第2グループについては外国の細石器、続細石器（これも大山柏の造語である）、石屑の写真も紹介し、外国の研究と照らし合わせこれらの石器のもつ意義について解説している。これら合わせて45点あまりの石器には、写真図版から判断すると石鏃の未成品、あるいは石錐に類するものなどが認められる。

結果として石鏃とそれに類するもの以外は示されず、リヤムナイの石器の研究報告はこの第三回で終わっている。

ところで、最初の報告（池上1937）から理解される遺跡の概略は以下のとおりである。

位置は海岸から約1丁半の近距離で、急崖をなして海岸に望む台地上にある。アスパラガスの畑で20坪ほどの範囲に、8か所ほど遺物の散布地があり、竪穴と見られる凹みもある。表面採集できる石器は石鏃（とくに形の良いものが多い）、石槍、石匙（大型のものが目立つ）が多く、次いで石冠、石棒、土器片である。土器片が局所的にまとまって発見できるところもある。

報告要旨  
—主として1952年度の調査—  
1952・10・15  
新考古学研究会  
新考古学研究所

1. 北海道上の国材調査と遺跡	一年	中村 春
2. 浜中遺跡の略報	二年	吉崎 昌一
3. 陸中国大湯のストーン・ツール遺跡並ニ調査	四年	石川 康典
4. 環濠式土器遺跡上米倉の土器遺跡概説	一年	松本 品
5. 戦後大陸考古学界の動向	二年	李 達 臨
6. 河内盆地遺跡先鋒の概説	一年	藤代 明彦
7. 筑前板付遺跡調査に就いて		大塚 初重
8. 埴原と面影の土器の調査	二年	望月 重弘
9. 大和上山石器遺跡調査	一年	池 中 早
10. 陸奥に於ける土器の考古学的知見	二年	西川 宏
11. 群馬県小豆原古墳	一年	坂田 光
12. 筑前中津の土器遺跡調査に就いて	一年	渡辺 康彦
13. 白河の遺跡 — そのメソリリスに就いて —		岡本 芳
14. 福沢遺跡の概説	一年	戸 沢 亮 則
15. 筑前大津遺跡の調査		戸 沢 亮 則
16. 北海道上の国材調査の概説	二年	石川 康典

— 中村 —

昭和二十七年年度

調査発表録

中村 春

「浜中遺跡略報」は、昭和二十七年（一九五二年）の調査結果を報告するものである。この報告は、吉崎昌一氏の調査結果に基づき、中村春氏がまとめたものである。報告の目的は、この遺跡の位置、規模、出土品、年代、およびその文化背景を明らかにすることである。

この遺跡は、北海道の浜中町に位置し、面積は約一ヘクタールに達する。調査の結果、縄文時代の遺跡であることが確認された。出土品には、土器、石器、骨器などが多く見出された。特に、土器の形状や文様から、この遺跡が縄文時代の中期に属するものであることが推定された。

また、この遺跡からは、縄文時代の生活様式や社会構造に関する貴重な資料も発見された。例えば、土器の製作技術や、石器の加工技術など、当時の技術水準を窺うことができた。さらに、出土品の分析から、当時の食生活や交易関係についても推察することができた。

以上のように、この調査は、北海道の縄文時代の歴史を明らかにする上で重要な役割を果たした。今後の調査を通じて、この遺跡のさらなる研究が進められ、北海道の縄文時代の歴史がより詳しく明らかになることを期待する。

「浜中遺跡略報」は、昭和二十七年（一九五二年）の調査結果を報告するものである。この報告は、吉崎昌一氏の調査結果に基づき、中村春氏がまとめたものである。報告の目的は、この遺跡の位置、規模、出土品、年代、およびその文化背景を明らかにすることである。

この遺跡は、北海道の浜中町に位置し、面積は約一ヘクタールに達する。調査の結果、縄文時代の遺跡であることが確認された。出土品には、土器、石器、骨器などが多く見出された。特に、土器の形状や文様から、この遺跡が縄文時代の中期に属するものであることが推定された。

また、この遺跡からは、縄文時代の生活様式や社会構造に関する貴重な資料も発見された。例えば、土器の製作技術や、石器の加工技術など、当時の技術水準を窺うことができた。さらに、出土品の分析から、当時の食生活や交易関係についても推察することができた。

以上のように、この調査は、北海道の縄文時代の歴史を明らかにする上で重要な役割を果たした。今後の調査を通じて、この遺跡のさらなる研究が進められ、北海道の縄文時代の歴史がより詳しく明らかになることを期待する。

図II-2-3 「浜中遺跡略報」  
(昭和27年(1952)度『明治大学考古学研究会報告要旨』から)

### —浜中遺跡略報—

北海道南部の亀ヶ岡式土器について

三年 吉 崎 昌 一

昨年春、松平義人氏より積丹半島周辺の縄文文化の興味ある遺跡の話を知り、北海道に於ける縄文文化終末の問題を検討するために今夏、松平義人、岩宇郷土研究会、江差高校の諸氏の応援を得て予備的な調査を行った。

浜中遺跡は北海道後志国岩内郡上リヤムナイ字浜中、俗称大曲に位置する。

遺跡は神恵川の旧河道に沿った東にのびる舌状台地上にある。かつて遺跡の一部は砦業線引込のために破壊され、その際大量の土器が出土した事がある。

遺物が割に豊富なために中心は乱掘されているのでそれをさけ、台地の北端を二米×四米及び貝層が認められる南西の部分とを試掘した。

#### 貝 塚

表土十糎、アワビと大量の魚骨からなる貝層十五糎～二十五糎、貝層下有機土層四十糎以下は砂をまじへた無遺物層である。

遺物は稀で時々鉄器片が出土する程度である。貝層下は亀ヶ岡式土器類似のものが発見される。

#### 包含地

貝塚以外の部分は殆んど純粋に亀ヶ岡式類似のもののみを出土する。

表土三十糎その下に四十糎～五十糎の黒色の包含層が認められる。層位は認められなかった。単純な深鉢形土器が圧倒的に多く、ツボはわずか、皿は全くとって云っていい程見当らない。地紋に縄文を有するものが全体の3/4を占めあとは條線文と無文である。口縁部にキザミを有し、又口縁部直下に竹管様のもので平行沈線、列点をつけるもの及び頸部にも同様の施紋があるものが主体をなす。雲形紋其の他は数片しかない。石器は安山岩製?の粗雑なflake tool—おそらくはサイドスクレイパー—が最も多く出土した。

我々が調査した際には貝塚に関する遺物は少なかったが、昨年大高・齊藤両氏の調査された時にはキセル、玉、骨製モリ、ヤス等が発見されている。

これらの遺物から推して“主としてキセルから”この貝塚を残した人達は江戸時代のアイヌであろうと考えたい。又貝層を形成しているアワビはその殆んどに直径一～二糎の穴が空いている。アワビの採集方法が主としてヤスによるものであろう事は間違いない。発見された土器は殆ど同一時期と考えても良い様に思われる。

その紋様が極めて直線的であること、又この地方の他の遺跡から出土する様な大洞B～B・C、A類類似のものが検出されない事等から考えて浜中遺跡の主体をなす土器群は亀ヶ岡後半のものと考えられる。

海岸までの距離は幾分異なっているが地形等から判断すると、松平義人氏が石器を採集した地点は梨野舞納段丘1遺跡、同2遺跡、同3遺跡を含むその周辺部である可能性が高い(図Ⅱ-2-1参照)。

この段丘上は明治期の開墾の頃から、石器や土器が多数出土することで知られていた(大場・桐井前掲書)。現在でも収穫の終わった畑を歩くと石皿や石器、土器片を拾うことができる。そして梨野舞納段丘1遺跡横の町道傍らには北海道式石冠等を含む多数の礫石器が無造作に置かれているのを目にすることができる。

なお、松平義人氏の人となり、北海道の遺跡との関係については三橋誠之氏、宮宏明氏による紹介がある(三橋・宮2004、宮2005)

②「桃内遺跡」(名取・松下1964)の報告には小樽市博物館所蔵の縄文晩期の土器片10点の拓本が掲載されている。条痕文を地文とする桃内第三類土器の参考資料として報告されているもので、頸部に2、3条の沈線で区画された無文帯のあるものがあり、口唇に連続して刻みを加えるもの、斜めに刻むものが8点ある(同書p52第14図)。条痕は縦行するものである。山本岩亀氏が岩内町字リヤムナイで採集したものとの記載がある。

③ 同じく小樽市博物館所蔵のもので石川直章氏により岩内町域リヤムナイ出土の「動物意匠をもつ土器」として紹介された資料がある(石川2004)。発掘資料ではなく、収蔵歴の不明な資料とあり「リヤムナイ Y. Yamamoto」と書かれたラベルがテープで留められていたとの記載がある。

現存する大きさは縦4.5cm、横6.5cm、高さ4.2cm、平面形は虫メガネ状、側面観は把手つきのスプーン状で体部は無文、手捏ねのものである(同書p52写真5)。示された図をみると口唇部とその下位に連続した不均一な刻み目があり、把手部分の2か所に孔が穿たれ、先端部には切込みがある。底部は不安定で、すわりの悪い丸底である(同書p50第2図)。続縄文期のもので海棲哺乳類または鳥類の上半身を模したものと推測されている。

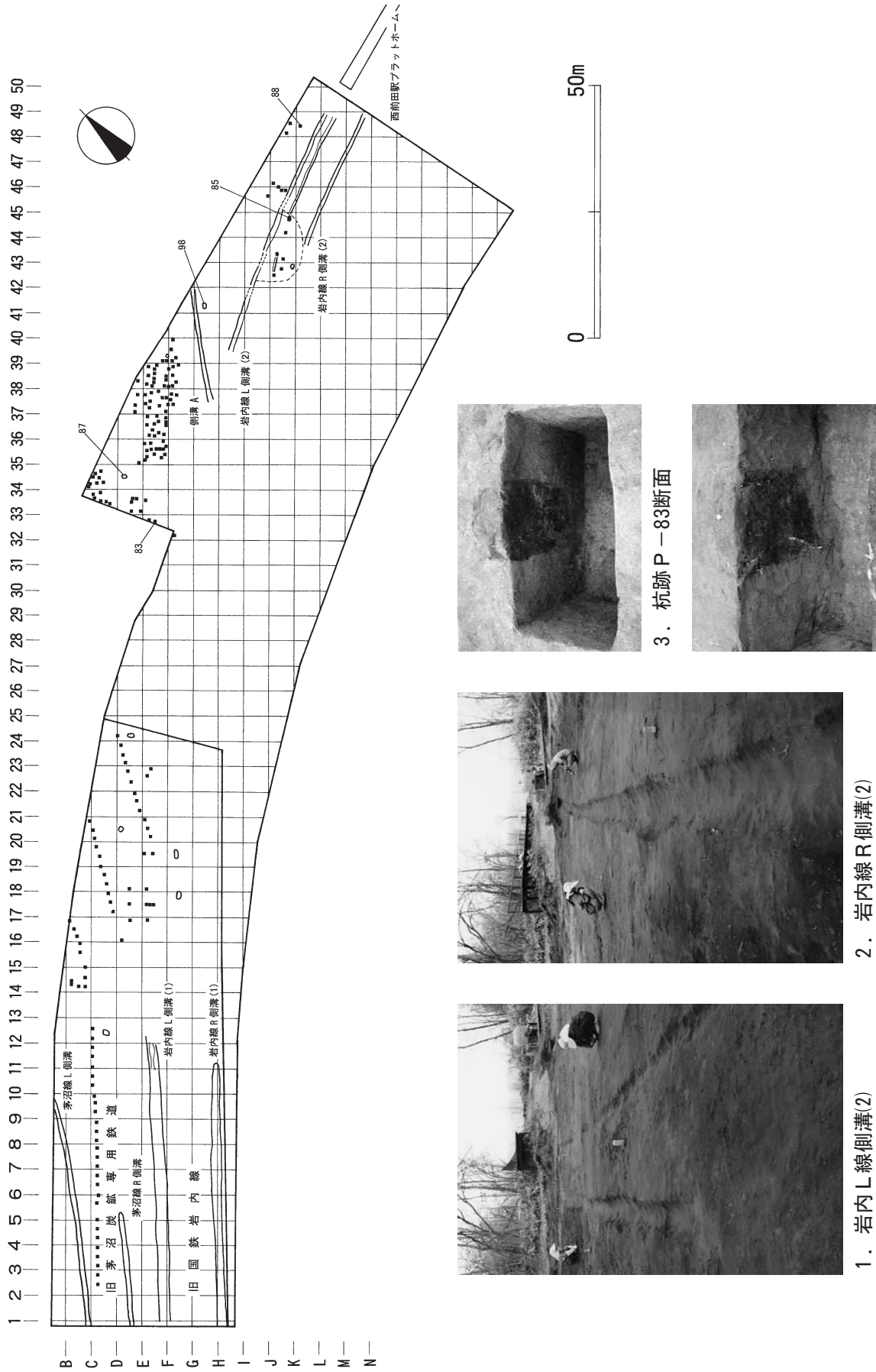
ところで平成13年に調査された泊村堀株<sup>ほりかづぶ</sup>1遺跡には縄文晩期(第Ⅱ群2類)の取っ手付き浅鉢として報告されている資料がある(田部・村上2004)。第Ⅲ群2類土器は晩期前半上ノ国式、札苺Ⅰ・Ⅱ群の系統を引くものと分類されているもので、複数の土器形式のものが混在するが、これらの資料の中にこの③リヤムナイ採集資料に平面観、前面観がよく似るものがあり(同報告書p139第89図113、114、115など)、把手の2か所に孔の穿たれたものもある(同113)。無文と施文のあるものがあり、口唇部、体部に刻み目列がほどこされたものもある(同書第89図112、114、115、116)。

特異な形の土器であること、連続した刻み目を加える特徴があること、堀株1遺跡に類例が求められること、さらにリヤムナイ採集であることも考えあわせると、この資料はいわゆる浜中大曲式に類するもので、縄文時代晩期中葉の土器である可能性がある。

ラベルの「Yamamoto」は人名と思われるが、②で紹介した資料の採集者山本岩亀氏と関連があるのかどうか判断するだけの資料は持ち合わせていない。

④ 北海道開拓記念館には熊野喜蔵氏が採集した資料がある。『熊野喜蔵氏資料目録・Ⅱ』(北海道開拓記念館1980)では岩内町リヤムナイ遺跡とあり、収蔵番号は42,100である。縄文晩期の復元土器6点と石斧・石のみ37、垂飾2、矢柄研磨器2、剥片石器は搔器が多く、石鏃、石匙、石槍、石錐など211点、合計258点である。礫石器はない。土器には異形土器が2点有り、整理番号2456には「沈線、アワビ貝がモチーフ?」、整理番号2458には「雲形沈線、一端有孔」と摘要欄に記載がある。このほか斜行縄文の壺形土器、小型の長頸壺形土器、無文の浅鉢、小型で刻文のある鉢形がそれぞれ1点である。

現在(平成18年1月)、収蔵先である北海道開拓記念館ではアスベスト除去工事を行っていること



1. 岩内L線側溝(2)

2. 岩内線R側溝(2)

3. 杭跡P-83断面

4. 杭跡P-88断面

図II-3-1 鉄道関連の遺構



1. 八幡製鐵所1915年1月（2月？）製レール



2. 八幡製鐵所1918年3月製レール



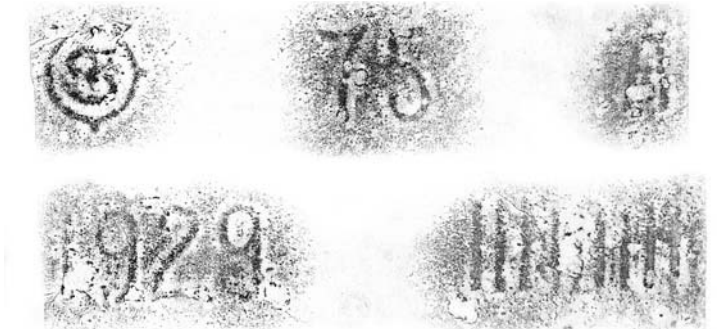
3. 八幡製鐵所1929年10月製レール



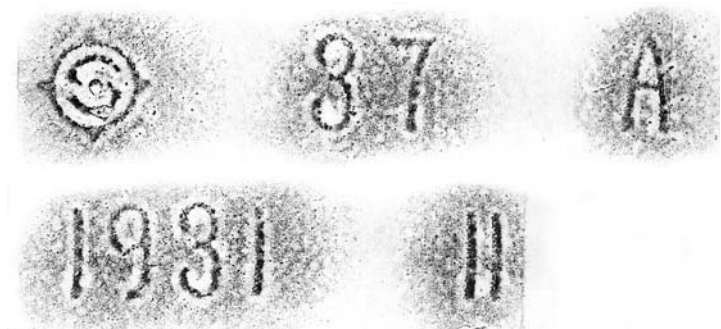
拓本1 八幡製鐵所1915年1月（2月？）製レール



4. 八幡製鐵所1931年2月製レール



拓本2 八幡製鐵所1929年10月製レール



拓本3 八幡製鐵所1931年2月製レール

図II-3-2 古レールの刻印

から、これらの資料を実見することができなかった。

### 3 鉄道関連の遺構

#### (1) 杭跡と側溝跡

前年度の調査に引き続き、旧国鉄岩内線に関連する側溝跡、杭跡等が検出された（図Ⅱ-3-1）。側溝は路盤の機能維持のための排水溝である。杭跡は大雨などで軟弱になった路盤等を強化するため土留めとして打ちこまれた枕木の埋設跡、また保線小屋などの簡単な建物の柱穴である（道埋文2005c）。杭跡は112基検出された。33ラインと40ラインの間に集中している。ここは標高8mほどある小高い地形で、線路（東）側に向かって傾斜しているところである（図Ⅴ-3-1）。このうち35ライン～40ライン間のものにはほぼ1m前後の間隔で直線上に並列して配されているものも認められるが、周辺部に数多くあり密集している。傾斜地であることから土留めを多く必要としたのであろう。杭跡の形状は隅丸方形や円形・楕円形で、開口部での大きさは直径が40cmに納まり、上部は削平されているが50cm程度の深さがあり、直立する。岩内線側溝L(2)の傍らにある7基の杭跡（点線の範囲 P-85等）は深さ10cm～40cmのもので、中にはこぶし大の川原石が多量に充填されていた。

側溝跡は37ラインより東側の範囲から3本検出された。岩内線側溝R(2)と岩内線側溝L(2)と側溝Aである。側溝Aは岩内線L側溝(2)と斜めに交差するように北側に延びるもので調査区外に続いている。確認面からの深さは10～15cmである。

このほか方形の土壌が2基検出された。P-87は一辺が1mほどの正方形、P-98は1m×0.55mの長方形である。国鉄岩内線が運行していた時期のものとして推定されるが、使用目的は捉えきれない。

#### (2) 西前田駅プラットホーム

調査区の北東側に隣接して西前田駅簡易プラットホームがある（図Ⅱ-3-1）。昭和38年に無人駅として開設され、昭和60（1985）年6月の岩内線の廃止に伴いそのまま残されたものである。

廃線から20年を過ぎ、昇降階段はすでに無く手すりや土台の鉄骨も赤くさび付いている。しかし旧国鉄ローカル線への愛着、廃線後もそのままの姿で残るという稀少性故か、このホームを見学に鉄道マニアがしばしば訪れる。

ところでこのホームを支える鉄骨には古いレールが利用されている。今回、北海道北広島西高等学校の山浦修教諭から、このレールに製造会社や製造年等の刻印が認められるものがあるとの指摘を受けた。灌木や腰丈ほどに伸びた雑草を刈り、ホームの下にもぐり込みようやく確認できたのは5か所である。官営八幡製鐵所製のものがあり、アメリカ製のレールも1本認められた（図Ⅱ-3-2）。

刻印はレール断面のくびれたところに浮き上がり記号で4、5センチの間をおいて記されている。八幡製鐵所製のものは10年程度を一区切りとしてその内容に変化が見られるという。

以下に記す古レールの刻印の解説、および製造の歴史については、太田幸夫著『レールの旅路』（富士書院1994）、西野保行著『鉄道線路の話』（成山堂書店1994）と福田敏一著『新橋駅発掘』（雄山閣出版2004）、およびインターネットのWebページ『古レールのページ』を参照にした。

No.1（拓本1）は1915年（大正4）1月（あるいは2月か）製造のもの。一番右端の縦棒の刻印が製造月をあらわす。実に製造後1世紀近くを経たもので刻印は磨滅していた。先頭にある上下左右の4か所に光ぼうが伸びた円形に「S」の字、通称「マルSマーク」は官営八幡製鐵所を表している。「60」は1ヤードあたりの重量が60ポンドであること示す「A」は断面形状を表す規格「ASC E型」で、American Society of Civil Engineers：アメリカ土木学会の略である。60ポンド第3種レール

である。ちなみに「B」の刻印は第2種（旧型が第1種）である。

No.2は1918年（大正7）3月製造の60ポンド第3種レール。No.1に認められた「NO」の刻印はない。この刻印があるのは1916年（大正5）7月～9（？）月期製造のものまでで、その後は略されたという。拓本は採取していない。

No.3（拓本2）は1929年（昭和4）10月製75ポンド第3種レール。

No.4（拓本3）は1931年（昭和6）2月製、37kg第3種レールである。37キログラムレールは1929年（昭和4）製から単位メートルあたりのキログラム表示となったという。No.3は1929年製であるがポンド表示である。75（ポンドレール）はキログラム表示では37となる。

八幡製鐵所が国産レールの製造を開始したのは明治34年（1901）のことである。その後1906年頃には主要線路のレールのほとんどが国産となり、八幡製のレールが輸入品を駆使するのは1928年以降である。大正時代までのものは、炭素量が少ないため材質がやわらかく容易に加工することができたという。古レールをホームの上屋、人道跨線橋等に利用することはめずらしいことではなかったが、近年、老朽化や駅舎の建て替えなどで撤去されるものもあり、こうした建造物とともに古レールは姿を消しつつある。

拓本、写真ともに掲載していないが、唯一確認できたアメリカ製のレールには以下の刻印が認められた。

OH TENNESSEE 6040 ASCE □□1923 工

アメリカ合衆国USスチール・テネシー社、1923年製造である。製造月は一般に年号の前にアラビア数字で刻印されるが不明瞭で読み取れなかった。「OH」はOpen Hearth（平炉）の略で平炉を用いて製鋼したことを表している。4桁数字のうち「60」は1ヤードの重量60ポンドをあらわす。下2桁の数字は不明である。「ASCE」はレール断面形状に関するアメリカ土木学会規格である（前出）。最後の「工」は官鉄発注を示すマークである。テネシー社のレールは日本各地でかなり一般的に見られる輸入レールであるという。

西前田駅のプラットホームは道路建設用地内にあるため、いずれは撤去されることになる。なお町内の前田には『幌<sup>ほろ</sup>似鉄道記念公園』がある。 （遠藤香澄）



## Ⅲ 調査の方法

### 1 発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては小樽開発建設部岩内道路事務所の一般国道276号岩内共和道路工事の用地平面図（縮尺1：1000）を使用した。基軸線は工事予定中央線のS T A 880とS T A 900を結び、基準のEラインとした。縦方向の基軸線はS T A 1000のEラインと90° 直交する線で、これを24ラインとした。南東にE・F・G・H…と進行しアルファベットが一巡した後は、前に0をつけ、0 A、0 B…とした。また、上リヤムナイ遺跡はリヤムナイ3遺跡の東方にあって、0 Rから始まり0 S・0 T…と続き、アルファベットの大文字が一巡することから、小文字a、b…を用いて設定している。

両遺跡ともに発掘区は5 m×5 m方眼とし、西端交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称している。（例E 26、E 27等）。また、今回の調査では5 m方眼の発掘区を2.5m方眼に4分割した小発掘区を基準に、遺構の実測、遺物の取り上げをおこなっている。小発掘区は杭のある側（西端）から時計回りにa、b、c、dを付し「E 26 a、E 26 b」のように呼称した（図Ⅲ-1-1）。

Eラインの真北はN-44° - Eである。

この方眼の平面直角座標は第X i系で以下のとおりである（世界測地系による）。

S T A. 880（調査区杭番号E 0）	X = -111201.085	Y = 23617.544
S T A. 900（調査区杭番号E 4）	X = -111186.630	Y = 23631.366
S T A. 1000（調査区杭番号G 24）	X = -111121.264	Y = 23707.702
S T A. 1100（調査区杭番号N 43）	X = -111076.789	Y = 23798.652

（笠原 興）

### 2 整理の方法

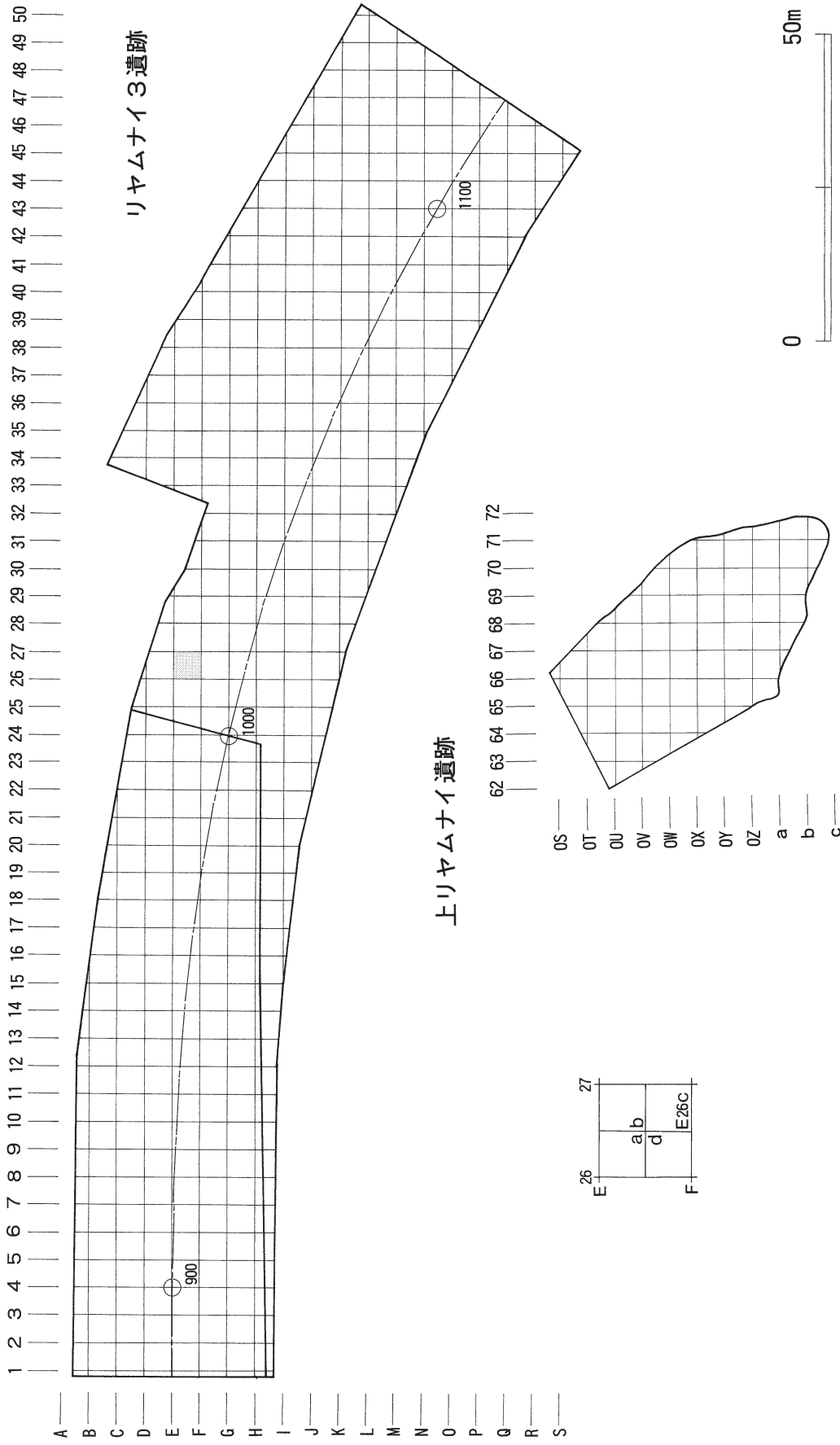
現場作業と並行し遺物の水洗作業を行った。その後大まかな分類を行い遺物カードおよび、遺物台帳を作成した。遺物台帳は基本的には小発掘区毎に作成している。リヤムナイ3遺跡については、平成16年度は土器、石器の区別なく小発掘区毎に作成したが、平成17年度は土器と石器それぞれに分けて遺物台帳を作成し、基本的には小発掘区内の取り上げ順に遺物番号を付した。したがって土器、石器それぞれに同じ遺物番号のものがあることになる。上リヤムナイ遺跡については土器、石器の区別はしていない。台帳整理が終わった遺物については順次注記作業を行った。土器片、礫石器のすべておよび遺構出土のものについては剥片石器、剥片についても行っている。ただし10円玉以下ほどの細片については注記していない。注記の要領は遺跡名の略記以外は共通で、以下のとおりである。

略称は上リヤムナイ遺跡が「上リヤム」、リヤムナイ3遺跡は「リヤム3」である。層位の略記は基本土層のローマ数字（I、II、III、IV、V）である。「III層」は「Ⅲ」、「IV層2回目」は「IV 2」、V層上位を「V上」等としている。また、リヤムナイ3遺跡において図面を作成して取り上げた遺物については、その図面番号を取り上げ層位のあとに続けて記した。

たとえばリヤムナイ3遺跡、包含層出土遺物「H 20 c区、遺物番号22、IV層6回目、図面（取り上げ）番号16」のものは「リヤム 3. H 20 c. 22. IV 6. 図16」である。

また遺構出土のものは、上リヤムナイ遺跡の剥片集中（F C）「F C - 1、遺物番号5、III層」の場合は、「上リヤム. F C・1. 5. Ⅲ」である。なお、石器集中は「石中」と略記してある。

注記の終わった土器については小発掘区ごと、あるいは取り上げ番号（図面）ごとに仮収納し順次



図III-1-1 発掘区設定図

江別のセンターへ搬送した。なお、台石・石皿、すり石、たたき石については現場段階で全点の形態計測を行っている。また、剥片集中から出土した剥片の接合作業も一部行っている。

最終的に手書きによる遺物台帳、礫台帳のデータは集計、分布図作成の簡略化を図るために現場段階でパーソナルコンピュータに入力した。

#### フローテーション作業

遺構（焼土・剥片集中）調査中に採取した炭化物・骨片などを含む土壌や倒立して出土した土器の中に充填されていた土壌等についてはフローテーション（浮遊選別）処理を行った。採取した試料は土嚢袋263個分である。

これらの土壌は10リットル入りバケツを使用し容積を量り「処理票」に記入後、新聞紙を敷いた角型ザルへ移し野外で乾燥させた。適宜攪拌しながら十分に乾燥させた後、風乾容積を量り、簡易テントの中に設置した専用の装置で処理を行った。浮遊物は2mm、および0.425mm、沈殿物（残渣）については1mmの篩により回収した。十分に水洗した後、浮遊物はキャラコの上に、また沈殿物はコンテナ等に移し室内にて乾燥させた。乾燥後はそれぞれの試料番号と篩目の大きさを明記したラベルを貼付した封筒に移し変え、コンテナへ仮収納した。

その後冬期の二次整理作業において、肉眼あるいはルーペ等を用い観察し遺物等を選別した。なお、選別の終了した試料の中から一部を動物遺存体鑑定と放射性炭素年代測定に供している（VI章-1・2）。また、遺構の土壌のうち焼土のフローテーション成果については表に示してある（表V-12）。

（遠藤香澄）

#### 上リヤムナイ遺跡の土器・石器の整理

一次整理を終えた遺物は台帳との照合、修正を行い、報告書掲載遺物を抽出した。遺構であるFC-1は検出時に位置が動いた剥片以外は出土位置と標高を点取りしたもので、台帳修正のときに若干の属性観察を行った。報告書刊行までの時間が短かったため、接合作業は行っていない。

#### リヤムナイ3遺跡

##### 土器の整理

現地調査と並行して一次整理を行い、7月から江別のセンターに遺物を運び、二次整理作業を行った。土器については遺物と台帳の照合、修正、注記の修正、カードの点検、分類変更して接合作業を行った。現地調査を終えた11月からは接合作業と並行しながら復元作業を開始し、12月には拓影図の作成、1月には出土状況図と合わせて図版・写真図版の作成を行った。

リヤムナイ3遺跡は縄文時代前期前半の遺構・遺物が主体である。発掘調査では層位別に生活面の検出とそれに伴う土器の特徴の変化を捉えるため、土器がまとまって出土したときは、検出順から通し番号を付けて出土状況を写真撮影し図化して記録した。通し番号を付けたものは1～113までである。検出から取り上げまで、土器は壊さぬよう慎重に扱った。取り上げには5cm～15cm深さのコンテナを用いて一次整理を行う場所に運んだ。しかし脆弱なものは一次整理作業の扱いで復元が不可能になったものが多い。一次整理が終了したこれらの土器は分類変更、台帳との照合、修正、注記修正を行った。そして層位別、地文の縄文別、施文別にし、遺物の出土傾向が分かれるグリットライン30を境に南北に分けて接合作業を行った。接合作業を行った中で復元可能なもの・器形や特徴の判るもの・土器の全体像が判りにくいものなどを5段階にランク分けした。ランクの低いものは高いものにするため、包含層調査で層位ごとにグリット上げた土器をつき合わせて更に接合を展開した。以上の作業を経て復元を行い、層位毎に土器の特徴が反映できるよう、報告書掲載遺物の抽出に努めた。

（袖岡淳子）

## 石器の整理

二次整理では、台帳と照合、現場での分類の見直し、台帳の修正を行った後、必要な計測、属性観察を行った。遺構出土のものについては出来るかぎり報告書に掲載することとした。包含層の石器では、分類した器種の中で、定形的で器体の残存状態の良好なものを選択し実測を行った。掲載石器に関しては、機能部にこだわらず最大長・最大幅・最大厚・重量を計測した。なお、たたき石とすり石については、現場段階で長さ重量を計り、形態の特徴を観察し分類した。同様に台石・石皿も計測してある。

整理作業後の収納は、報告書掲載のものとはそれ以外のものに分けて行った。報告書掲載のものについては挿図に対応するように1点ずつ報告書名、図番号、図版番号を明記したシールを貼付したチャック付きポリ袋に収納した。それ以外のものについては分類毎に遺構別あるいは包含層の場合は小発掘区の単位別に分け収納した。

(笠原)

## 3 遺物の分類

### (1) 土器

分類基準は当センター通有の大別（縄文時代五大別と続縄文・擦文時代にそれぞれⅠ～Ⅶ群を付す）を踏襲し、主体時期は細分した。

Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群（出土していない）。

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群。

Ⅱ群 a 類 縄文の施された尖底を特色とするもの。春日町式に相当するもの、高屋敷川1遺跡Ⅱ群 B 2 類に相当する円筒土器下層式直前の平底のものも含めた。

Ⅱ群 b 類 円筒土器下層式に相当するもの。

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群。

Ⅲ群 a 類 円筒土器上層式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するもの（今回の調査では出土していない）。

Ⅲ群 b 類 天神山式、柏木川式、ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの。

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群（出土していない）。

Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群（出土していない）。

Ⅵ群 続縄文時代に属する土器群。

後北式に相当するもの。

Ⅶ群 擦文時代に属する土器群（出土していない）。

(袖岡)

### (2) 石器等

石器はたたき石とすり石を除き大分類にとどめた。石器は遺跡内で出土したものに対してその器種の名称と定義を述べることとし、以下に記した。

#### 石鏃

剥片を素材にし、押圧剥離によって両面調整された尖頭形で三角形に近い形状を呈するもの。

#### 石槍またはナイフ

剥片を素材にし、押圧剥離によって両面調整され茎のある尖頭形を呈するもの。

#### 石錐

剥片を素材にし、端部に錐状の突出部を有するもの。

**つまみ付ナイフ**

剥片を素材にし、素材の長軸端部につまみ部が作り出されたもの。

**スクレイパー**

剥片を素材にし、側縁に調整剥離面が連続して加えられたもの。

**両面調整石器**

剥片を素材にし、剥離が素材の両面に施されるもので篋状または尖頭形ではないもの。

**Rフレイク**

剥片を素材にし、加工痕の見られる不定形なもの。

**Uフレイク**

剥片を素材にし、使用痕の見られる不定形なもの。

**剥片（フレイク）**

石核あるいは石器から剥離されたもので、二次的な剥離を受けていないもの。

**石核**

石器の素材になりえる大きさで、形状の剥片を剥離した痕跡が複数あるもの。

**石斧**

剥片あるいは礫を素材にし、敲打、打ち欠き、研磨により整形され、斧状の刃部があるもの。

**たたき石**

礫を素材にし、敲打痕があるものの中で、能動的と考えられるもの。

I 類：円礫

II 類：棒状礫

**すり石**

礫を素材にし、すり跡があるものの中で、能動的と考えられるもの。

I 類：断面三角形

II 類：その他

**石鋸**

薄い礫を素材にし、機能部の断面形がU字またはV字状で長軸方向に擦痕があるもの。

**石錘**

扁平な円礫の長軸または短軸の両端に打ち欠きによる抉りが入れられるもの。

**砥石**

素材に研磨面をもつもので、砥面が平滑かあるいは溝状の凹みがあるもの。

**台石・石皿**

すり痕もしくは敲打痕があるものの中で、受動的と考えられるもの。

(笠原)

**(3) 礫について**

リヤムナイ3遺跡では出土した礫については、遺構を構成しているもの（たとえば集石など）および包含層で土器とともに出土し取り上げ番号を付したものを除き、「遺物台帳」とは別に「礫台帳」を作成した。

包含層から出土した礫・礫片は13,047点である。このうち遺物台帳で取り上げ、遺物番号を付したものは210点、残り12,837点は礫台帳で取り上げたものである。石鋸等の素材となる板状礫や、加工

した痕跡のある礫は従来どおり番号を付けて取り上げた。すなわち、資料として有為性の低いものは「礫台帳」での数量的把握にとどめた。

礫台帳は日付け毎に作成し、取り上げた小発掘区、層位、点数を記入した。その際、大まかな形状と大きさに分けそれぞれ点数を数えた。扁平か否かで大きく分け、扁平のものではその平面形状（円・楕円形・四角形、おむすび形など）など観察した。棒状、球形など適宜備考に記載した。また大きさについては傍らに基準となる礫を置き次のように区別した。小：5 cm以下、中：5～10cmに納まるもの、大：10cm以上である。36-2 B コンテナにほぼ満杯になった段階で重量を計測した。ただし鉄道施設に伴うものを含め I 層のものについては点数のみを数えた。

このように調査現場において点数を数え形状の観察、重量を計測した礫・礫片については現場に残置した。

礫台帳により処理した礫12,837点を含め、層位ごとの集計は表V-6に示してある。発掘区ごとの集計は行っていない。I層出土のもの3,800点あまりを除くとその半数近くがIV層から出土している。総重量は1183.5kgである。中位の大きさのものがやや多くおよそ3,600点、小礫が3,400点、大礫が1,800点、礫片が400点ほどである。扁平、やや厚みのある扁平のものが多く円形、楕円形とその形状は様々である。棒状のものが300点ほどあり、いびつな球形に近いものも多くある。大型の礫の中には、ハンドボール程の大きさで重さが6、7kgもある球礫が3点あった。また断面の形状がすり石によく似るものが100点近くあった。礫片には火を受けて割れているものがあり、黒色のタール状の物質が付着するものも比較的目についた。このほか赤鉄鉱の破片などもある。 (遠藤)

## IV 上リヤムナイ遺跡の調査

### 1 発掘調査の方法

重機による表土除去後、Ⅲ層面の精査でジョレンかけを行った。ここで黒曜石製の剥片のまとまり（FC-1）を検出した。地形を測量した後、調査面積25%の調査を行い、遺構、遺物の有無の把握に努めた。遺物包含層であるⅢ層土は非常に硬くしまりがあり、移植ゴテやスコップでの掘り下げは困難であった。つるはしを用い、土を砕きながら調査を行った。この25%調査で頁岩製のフレイク集中（FC-2）を検出した。遺物はⅢ層を20cm前後掘削したところから出土した。調査では20cm以上掘削したが遺物は出土しなかった。Ⅲ層では黒曜石製の石鏃5点、フレイク数点、台石とすり石が各1点出土した。遺物が出土した周辺を掘り広げ包含層調査を行ったが、遺構、遺物は認められなかった。

### 2 基本土層

基本土層はⅠ～Ⅴ層に分けた。Ⅰ層：表土、Ⅱ層：にぶい黄褐色土、Ⅲ層：褐色土、遺物包含層、Ⅳ層：褐色土、Ⅴ層：黄褐色土。調査範囲ではⅢ層まで削平されている。土地所有者によれば、この西側にはかつて沼があり、南東側にある沢へと通じていた。この沼地は現在埋め立てられており、草地となっている。調査区内の削平された土はおそらく沼地の埋め立てに用いられたのではないかと推察する。

### 3 遺構と遺構出土の遺物

#### (1) 剥片集中

FC-1（図IV-3-1～3、図版1、表IV-1・2）

位置 0W-65-b・c 規模 0.31×0.25/0.13

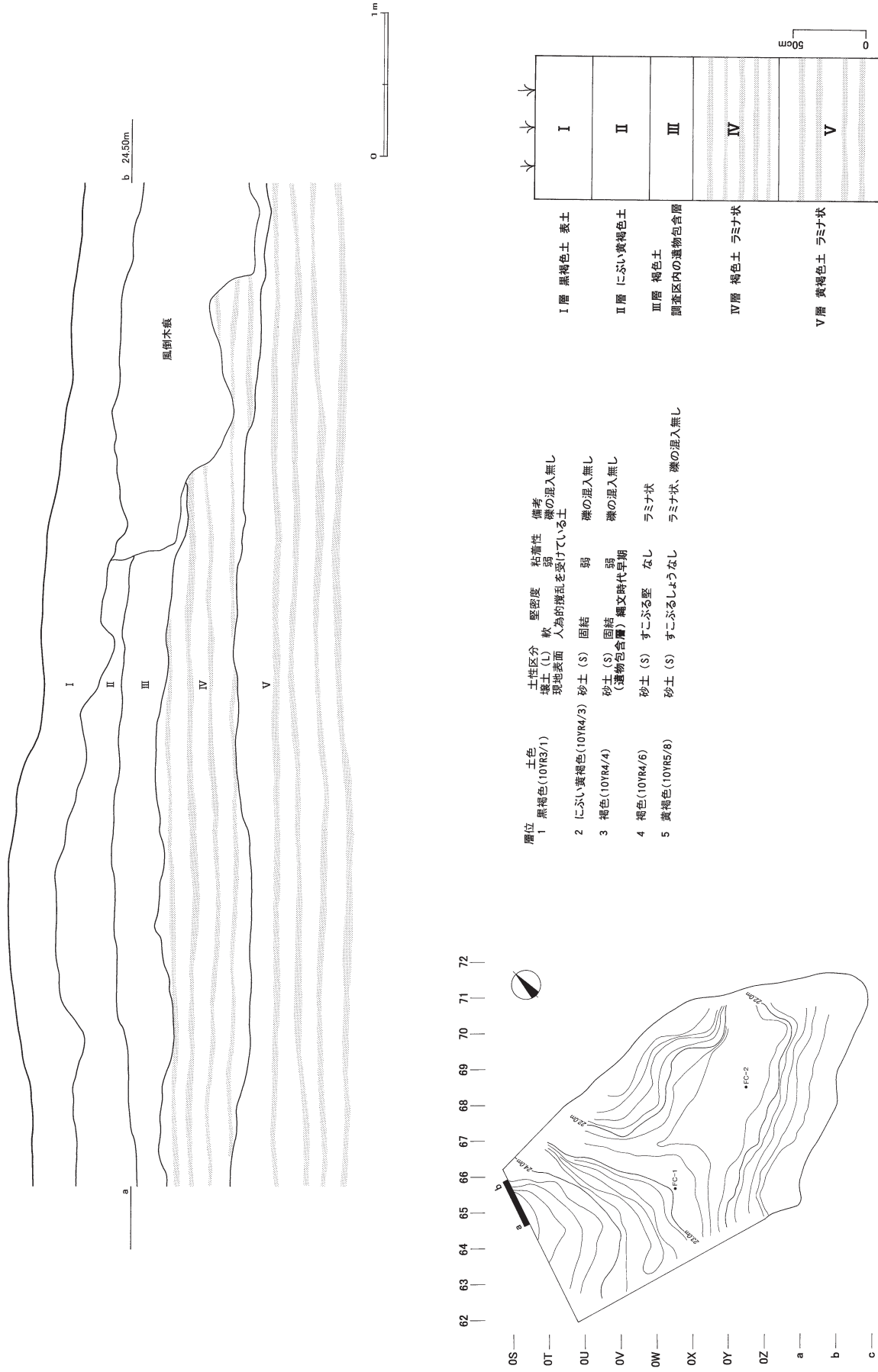
**確認・調査** 重機による表土除去後、ジョレンかけを行い精査したところ、黒曜石製の剥片のまとまりを検出した。小トレンチによって半截したところ、柱状に黒曜石の剥片が詰まっている状況を検出した。剥片のほか、掘り込みや土坑のような底や壁の立ち上がりは確認できない。遺物は肉眼観察によりすべて赤井川産の黒曜石のもので、スクレイパー4点、石核1点、粗工両面調整石器10点、Uフレイク4点、Rフレイク53点、フレイク472点の、合計544点が出土した。チップのような微細な剥片は全く出土しなかった。

**時期** 遺構内やその周辺からは時期を特定する遺物は出土していない。調査区内の同じ層位からは肉眼観察により赤井川産の黒曜石製の石鏃を検出している。この石鏃の形態的特色から判断すると、縄文時代早期の遺構と思われる。

**遺物** 報告書作成までの時間が短かったため、剥片の接合作業は行っていない。点取りした遺物について、剥片の球顆の混入度合いにより3つのグループ（①球顆がわずかに混じるもの47.3%、②球顆が少ないもの35.4%、③球顆が多いもの17.3%）にわけ、打面、背面、剥片の形状、二次加工の有無を観察し重さを量った。

#### ①球顆がわずかに混じるもの（図IV-3-3-1～4、図版3～5・9、表IV-1・2）

出土したフレイクのほぼ半数を占める。97.4%がフレイク、2.6%がRフレイクを含む石器類である。礫皮を残すものは49.8%で、剥片の形状は縦長のものが47.9%、横長のものが35.1%、その他折れなどによる形状が不明瞭なもの17.0%である。打点は礫打面33.9%、次いで打面欠落のもの28.0%、切



図IV-2-1 上リヤムナイ遺跡の土層断面図



子打面15.1%、小打面のもの22.0%、平坦打面1.1%である。平均的な重量は8.1gである。背面に残る礫皮面から、素材はあまり大きくない角礫が用いられている。打点の観察から、黒曜石原石から礫皮面を取り去ることと、小打面のものがあることから粗工両面加工の石器を取る工程で剥離されたものとする。剥片剥離作業が進むことによって切子打面を持つ剥片が出たことが推測できる。これらは石器の素材を得るときにでた剥片であることが考えられ、ほぼ同じ大きさの剥離で素材を整形した後の剥片とみられる。打面欠落のものが3割近くを占めるのは、出土状況と合わせて考えると、剥片の再利用、別の石器素材のための剥片にしたことが推測できる。包含層から出土した細身に薄い石鏃であれば、素材になるものと思われる。

1はスクレイパーで剥片背面の左側縁を刃部とする。背面には礫皮面が残る。2、3はRフレイク。2は礫皮面の残る剥片の背面左側縁と下端に調整痕がある。3は背面に調整痕の残るもの。4はフレイク。上端に礫皮面の残るもの。

#### ②球顆が少ないもの（図IV-3-3-5~8、図版6・7・9）

①に次いで多く出土したフレイクである。93.7%がフレイク、Rフレイクを含む石器類が6.3%である。そのうち礫皮面を残すものは38.5%である。剥片の形状は縦長のものが48.3%、横長のもの30.8%、折れや形状不明瞭なものが21.0%である。打点は礫打面のものが27.0%、小打面のものが19.7%、切子打面のものが19.1%、打面欠落のものが34.2%である。平均的な重量は8.6gである。①に比べ、礫皮面を残すものは少なくなる。小打点、切子打点のものがあることから①と同様の粗工両面調整石器を取るために出た剥片とみられる。剥片がやや大型化し、打面欠落ものが増える。5、6は粗工両面調整石器とした。5は破損しているもの。共に礫皮面が残る。7、8は角礫の礫皮面が残るもの。

#### ③球顆が多いもの（図IV-3-3-9~12、図版8・9）

中で最も少ないものである。フレイクが92.5%、7.5%がRフレイクを含む石器類である。そのうち、礫皮面を残すものは42.0%である。剥片の形状は縦長のものが49.3%、横長のものが26.1%、折れや形状が不明瞭なもの24.6%である。打点は礫打点のものが53.9%、切子打面のものが23.1%、小打面のものが15.4%、打面欠落のものが7.7%である。平均的な重量は10.4gである。素材はあまり大きくない角礫を用いている。剥片そのものはさらに大型化している。

9、10はRフレイク。9は上端、背面、左側縁に礫皮面を残すもの。素材は小さな角礫で、礫皮面をとるためのものと思われる階段状の剥離が左側縁に顕著に見られる。10は剥片背面の上端に階段状の調整がある。11、12はフレイク。12の下端には礫皮面が残る。

①~③の観察から、剥片そのものは角礫から礫皮面を取り去り、両面加工の石器を取る際に出た剥片が主体であるが、遺構からの出土状況から、チップがまったく出土していないこと、その周辺からも無いこと、打面欠落のものが比較的多いこと、ほぼ同じ大きさのものが出土したことから、剥片石器の素材としてまとめられていたことが推測される。

#### FC-2（図IV-3-3、図版2）

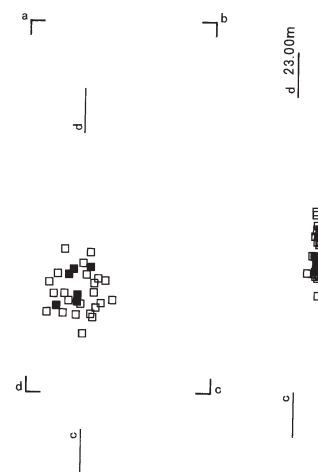
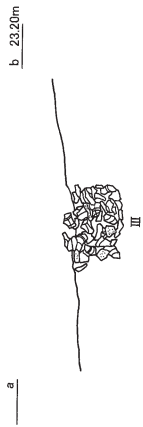
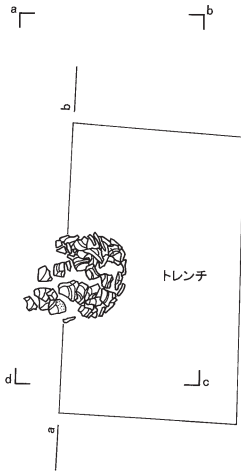
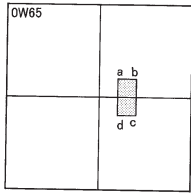
位置 0Y-68-c・d 規模 0.90×0.42

確認・調査 包含層であるⅢ層を掘り下げていたところ、頁岩のフレイク・チップのまとまりを検出した。周辺の精査を行ったが、これに関連する遺構、遺物は検出しなかった。遺物は全て頁岩製のフレイク・チップで、264点出土している。

遺物 図示する遺物はない。

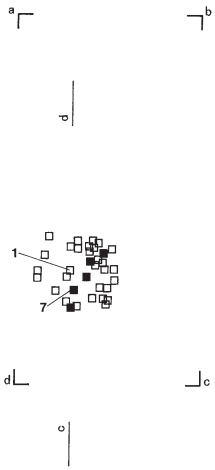
時期 検出した層位がFC-1と同じことから縄文時代早期のものとする。

FC-1



FC-1 出土状況

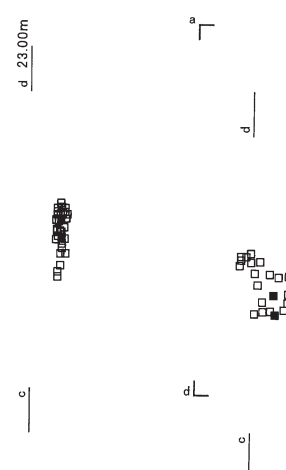
1 回目



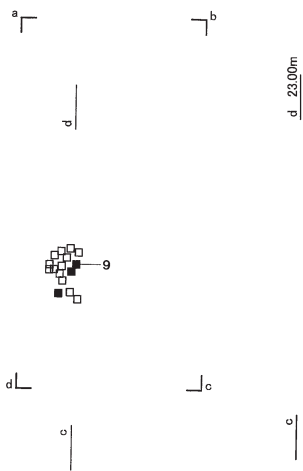
2 回目



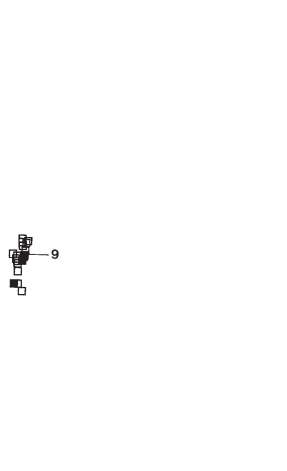
3 回目



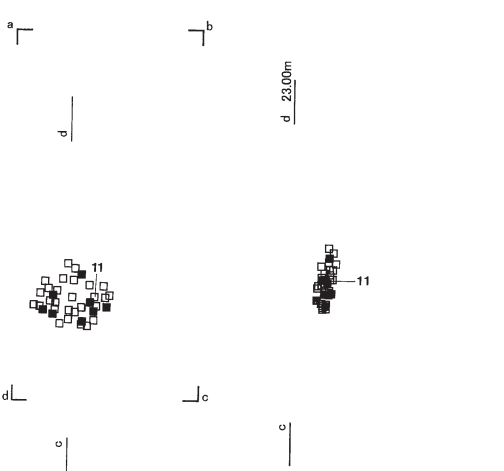
4 回目



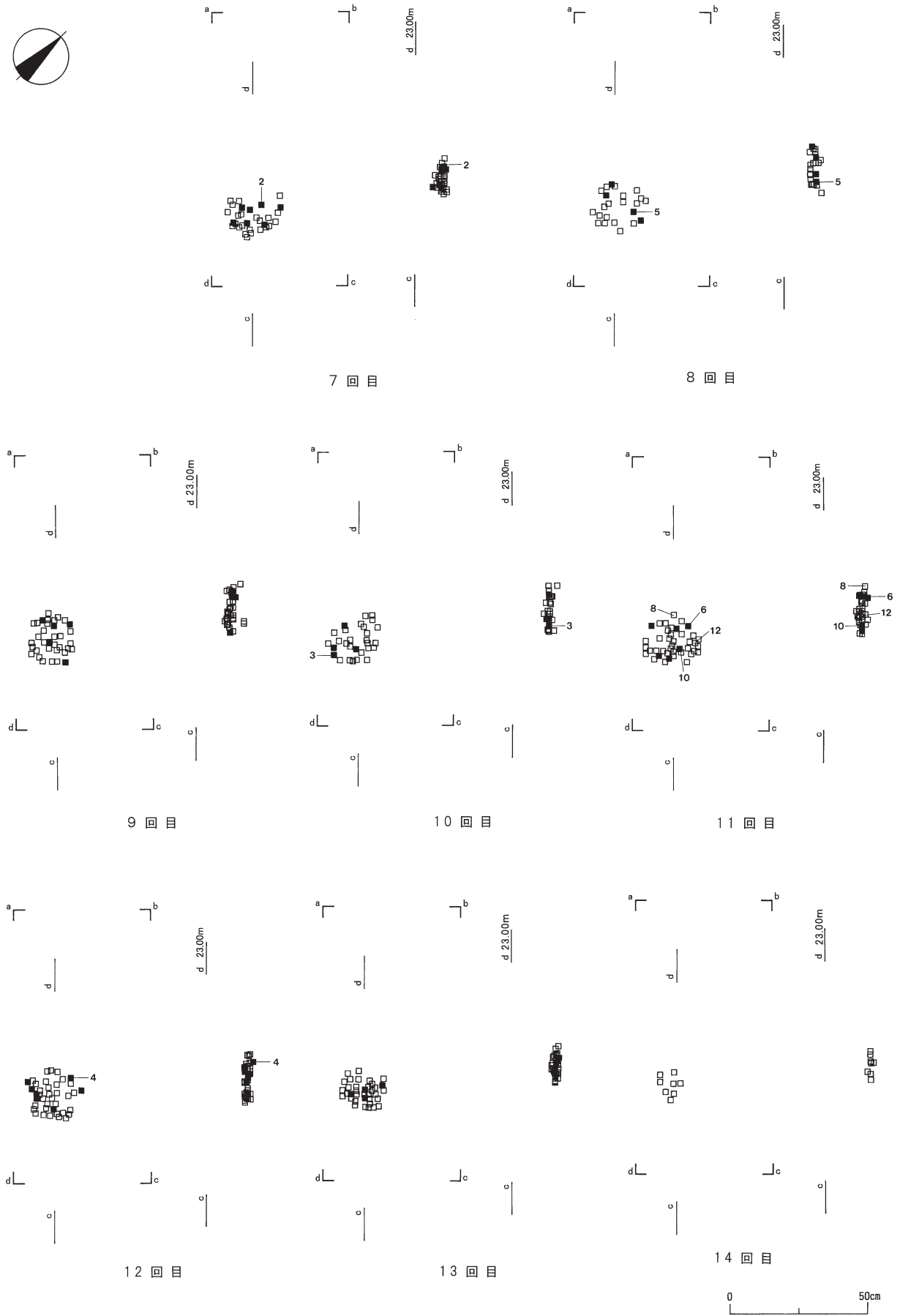
5 回目



6 回目



図IV-3-1 FC-1(1)

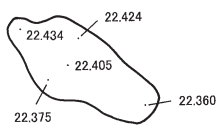
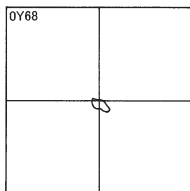


図IV-3-2 FC-1(2)



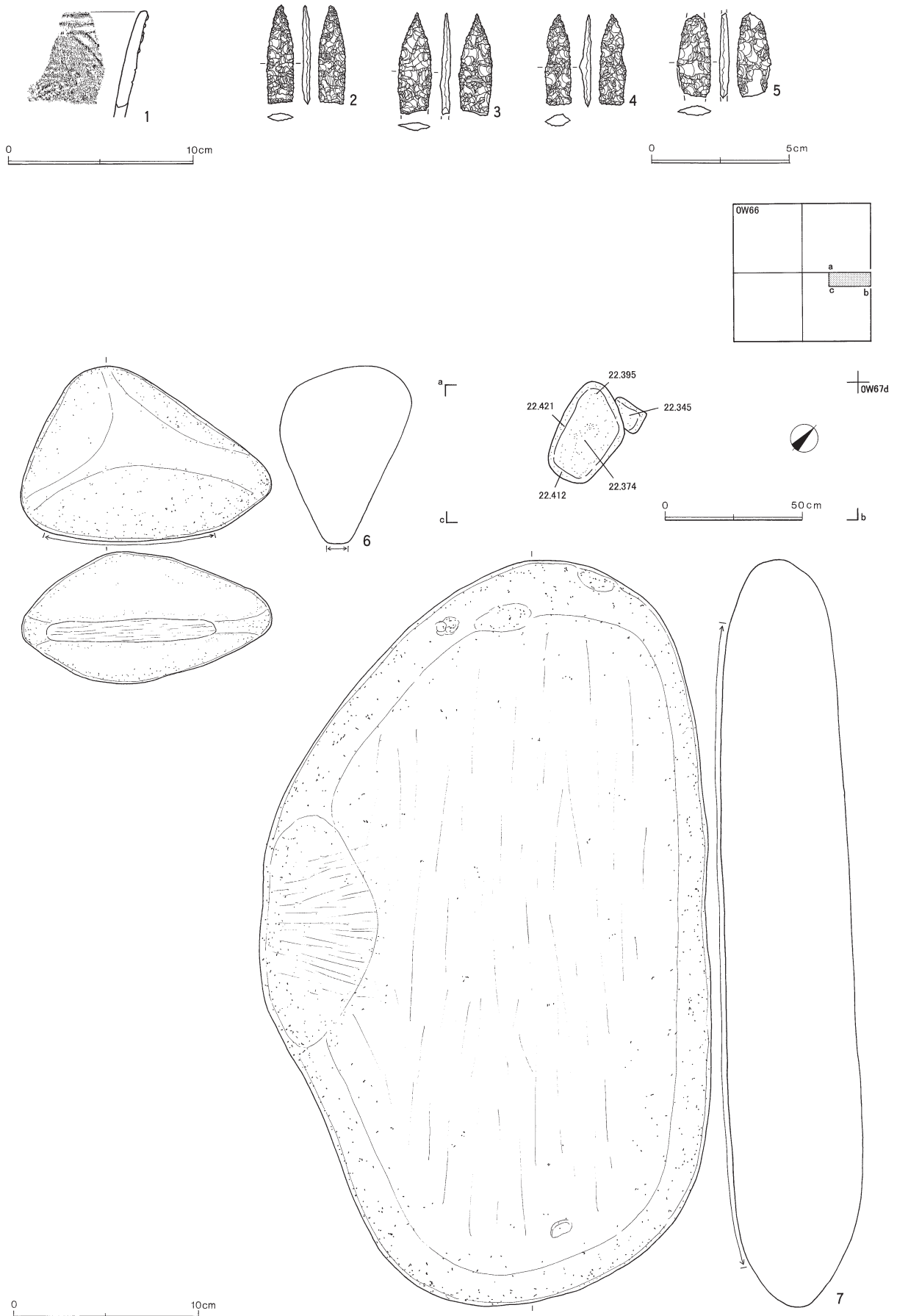
FC-2

0Y69a



0 1m

图IV-3-3 FC-1(3)·FC-2



図IV-3-4 包含層の出土遺物と出土状況

#### 4 包含層出土の遺物

包含層からは、土器1点、石鏃5点、たたき石1点、すり石1点、石皿1点、Uフレイク1点、フレイク6点、礫6点の合計22点が出土した。

##### 1. 土器 (図IV-3-4-1、図版10、表IV-3)

土器は縄文時代のものが1点出土している。表土除去のときに抜根できなかつた大木の根の周りの黒色土を精査したときに検出した。1はVI群土器の口縁部破片。表面の摩滅が著しい。口唇部から2本一組の微隆起線文が施され、胴部に向かい縞縄文とそれに並行する列点文が施される。後北C～C2-D式に相当するもの。

##### 2. 石器 (図IV-3-4-2～7、図版10、表IV-3)

2～5は石鏃。細身で薄く、柳葉形のもの。いずれも肉眼観察により赤井川産の黒曜石製とみなされる。球顆は粒子が細かく、少ない。2、4の先端部はわずかに歪んでいる。3は基部を欠損している。4は左側縁に抉りがある。5は先端部と基部を欠損する。6はすり石。断面が三角形となる礫の稜を擦り面としている。安山岩製。7は石皿。平滑で広い使用面がある。安山岩製。6と共に出土した。(袖岡)

表IV-1 検出遺構一覧

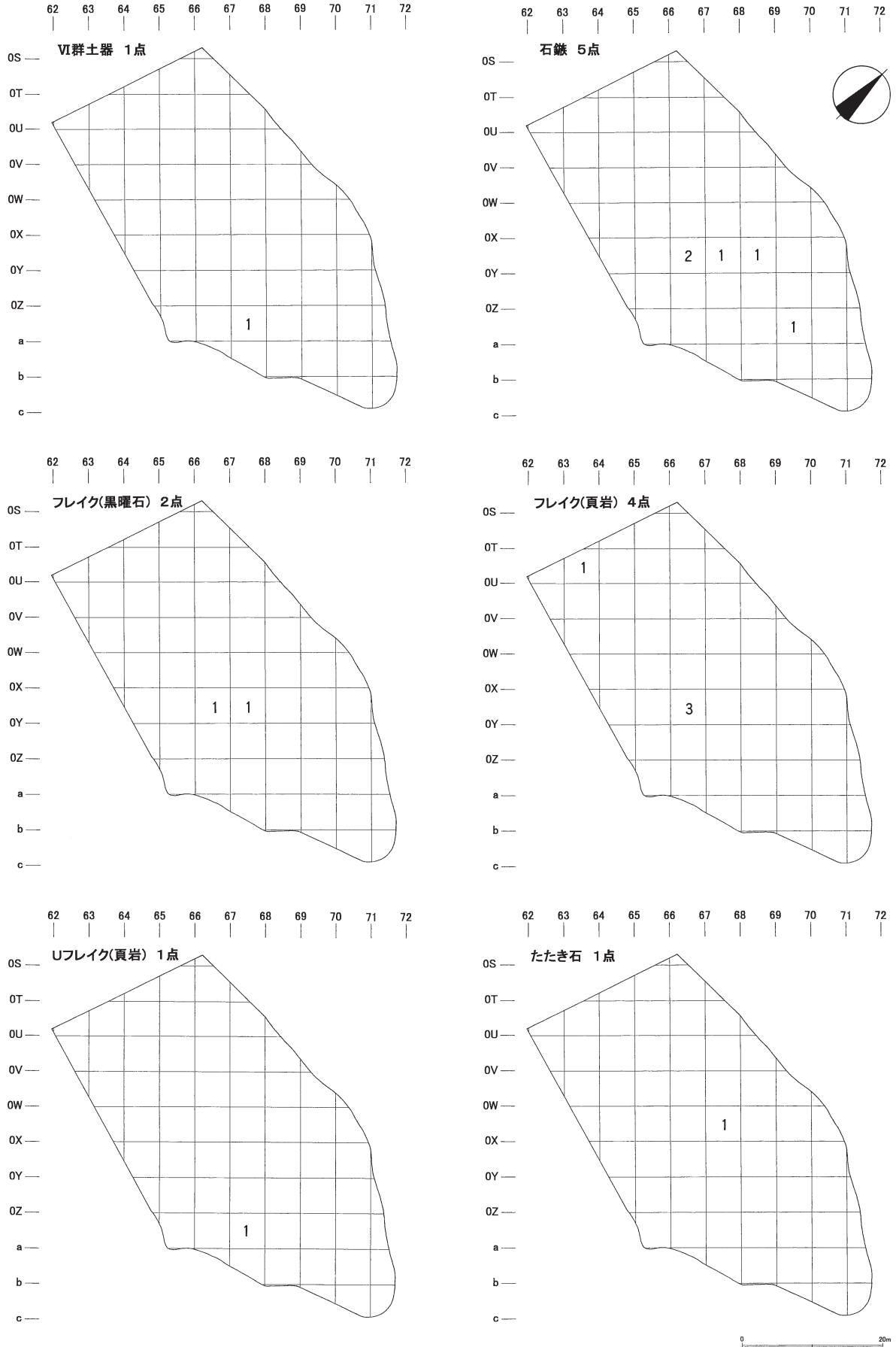
遺構名	遺構種類	発掘区	検出層位	規模(m)	時期
FC-1	剥片集中	0W-65b・c	Ⅲ層	0.31×0.25	縄文時代早期
FC-2	剥片集中	0Y-68-c・d	Ⅲ層	0.90×0.42	縄文時代早期

表IV-2 遺構掲載遺物一覧

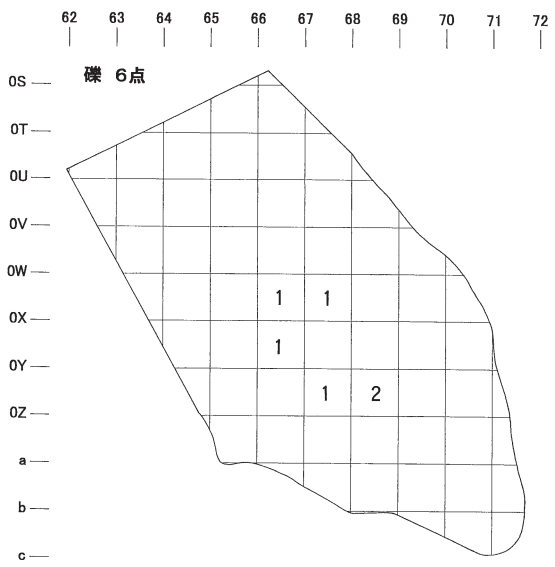
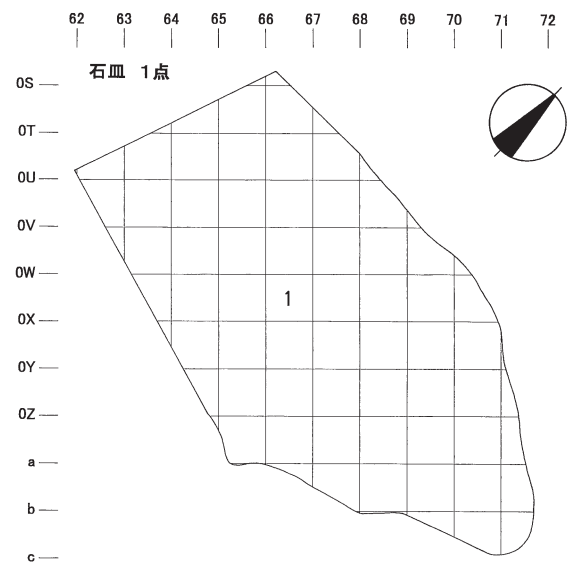
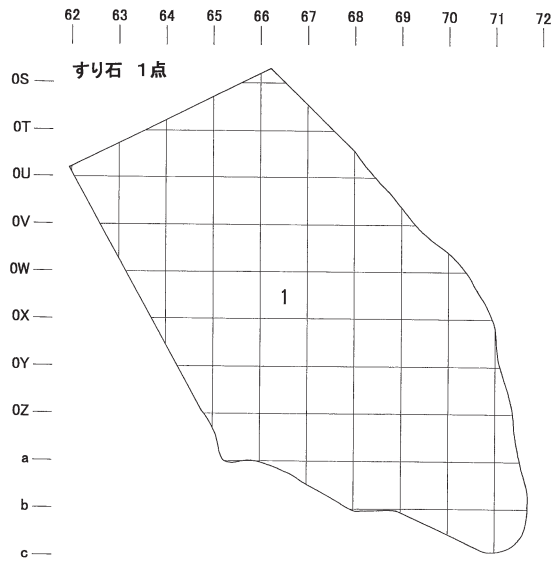
遺構名	図番号	遺物名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号
FC-1	図IV-3-3-1	スクレイパー	31	Ⅲ層	5.0	4.1	1.4	17.0	黒曜石	9
	図IV-3-3-2	Rフレイク	290	Ⅲ層	5.4	3.1	0.9	12.6	黒曜石	9
	図IV-3-3-3	Rフレイク	207	Ⅲ層	4.8	3.2	1.0	13.2	黒曜石	9
	図IV-3-3-4	フレイク	361	Ⅲ層	5.2	2.7	0.5	6.3	黒曜石	9
	図IV-3-3-5	粗工両面調整石器	223	Ⅲ層	(3.9)	3.5	1.0	(14.0)	黒曜石	9
	図IV-3-3-6	Rフレイク	336	Ⅲ層	6.3	4.2	1.6	35.3	黒曜石	9
	図IV-3-3-7	フレイク	32	Ⅲ層	5.2	3.3	1.6	21.9	黒曜石	9
	図IV-3-3-8	フレイク	301	Ⅲ層	4.6	2.9	1.2	16.4	黒曜石	9
	図IV-3-3-9	Rフレイク	126	Ⅲ層	5.3	3.8	1.4	31.6	黒曜石	9
	図IV-3-3-10	Rフレイク	319	Ⅲ層	4.6	2.9	1.2	13.3	黒曜石	9
	図IV-3-3-11	フレイク	151	Ⅲ層	5.6	3.5	0.5	12.0	黒曜石	9
	図IV-3-3-12	フレイク	342	Ⅲ層	2.7	4.4	0.6	9.2	黒曜石	9

表IV-3 包含層掲載遺物一覧

図番号	遺物名	発掘区	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号
IV-3-4-1	VI群土器	OZ-67	2	攪乱							10
IV-3-4-2	石鏃	OZ-68-a	1	Ⅲ層	3.5	1.0	0.3	1.2	黒曜石		10
IV-3-4-3	石鏃	OX-66-b	1	Ⅲ層	(3.6)	1.2	0.3	(1.1)	黒曜石	OZ-66-b-2と接合	10
IV-3-4-4	石鏃	OZ-67-b	1	Ⅲ層	3.2	0.9	0.4	1.0	黒曜石		10
IV-3-4-5	石鏃	OZ-69-c	1	Ⅲ層	(0.3)	1.2	0.4	(1.2)	黒曜石		10
IV-3-4-6	すり石	0W-66-c	1	Ⅲ層	13.4	9.6	7.0	980.0	安山岩		10
IV-3-4-7	石皿	0W-66-c	2	Ⅲ層	40.4	24.2	6.8	11,180	安山岩		10



図IV-3-5 遺物の分布(1)



図IV-3-6 遺物の分布(2)



## V リヤムナイ3遺跡の調査

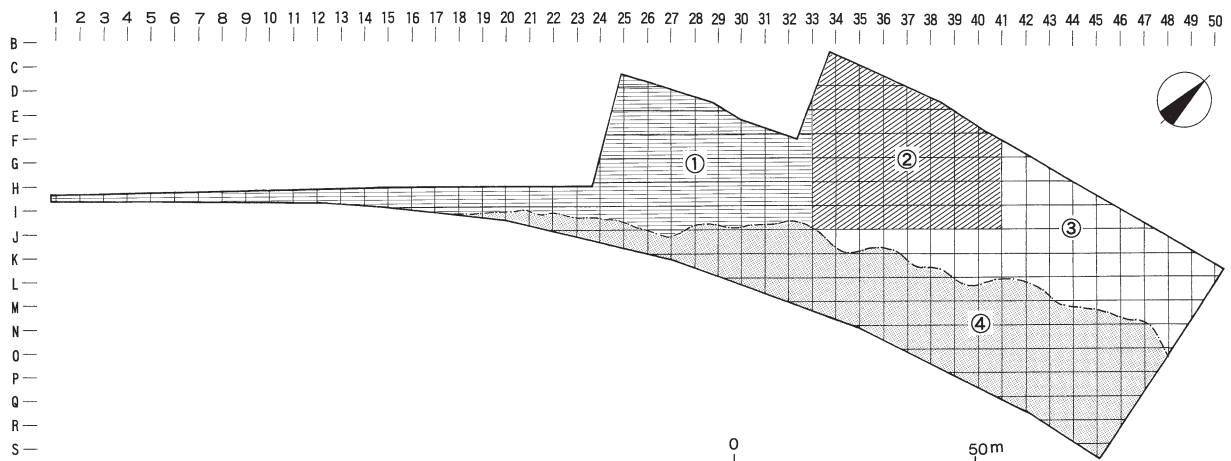
### 1 発掘調査の方法

I章で記載したとおり、調査区を大きく4つの範囲(①~④)に区分し調査することとした。表土除去後Iラインより南東側では深度耕作が広範囲に確認され、堆積する砂の様相が他の区域と異なることや遺物が出土しないことが分かった。このため土層の堆積状況を把握するために5列のトレンチを設定し、人力で掘削可能な標高5m付近まで階段状に掘削した(図I-4-1、図版14)。この結果、調査区南東部22~49ラインの間(④)では標高5m付近まで平行ラミナが発達する遺物等を含まない細粒の砂が堆積していることが判明した。N45区1号トレンチの土層断面の一部には、ほぼ垂直に削平されたような痕跡が認められ包含層が削られていた。これは断層等の自然営力かあるいは人為的なものか判断に迷うものであった。その後、現地を訪れた道都大学鈴木正章氏ら複数の方からの御教示により、これが水流により浸食されたものと判断できた。調査区の南東側が古い河川や沼等の水辺あるいは流路であり、この堆積が水成起源のもので無遺物層であると推測できた。この砂層中には砂鉄を多く含み、以前この付近では「砂鉄が採取されていた」と言う周辺住民の言質とも合致するものであった(図V-2-5、図版14-1)。仮称“河道跡”の堆積物はトレンチ調査終了後、重機を導入し、包含層と水際との境界部分を検出する作業を行なった(図版34-4)。

また、包含層の深度を確認する25%程度の深掘り調査では、24ラインから32ライン間(①)はIV層からV層までほぼ途切れることなく遺構や遺物が見つかった。遺跡の主体部となるこの地区については、排水ポンプを稼働させるなど可能な限り冠水面まで人力による調査を行うこととした。

32ラインから42ラインの北西側(②)は、砂丘の末端にあたるところで、最も標高が高い(約8m)地区である。IV層上面からV層上面にかけて遺物は散見していたが、その下位の間層(Va層)からは遺物は出土しなかった。Va層はF34区附近でV層と交差し、北西方向にやや傾斜するように堆積する(図V-2-5土層断面④)。25%調査では、現地表面下1.7~1.8m程掘削した時点で遺物が出土する状況であった。このことから遺物・遺構が稀薄なVa層は重機を用い除去し、その下位から冠水面まで人力による調査をすることとした。

43ラインから北東側地区(③)では、IV層上位から遺物が僅かに出土するものの、その下からは遺物はほとんど出土していない状況であった。遺構や遺物の分布が稀薄であると判断し、この地区につ



図V-1-1 調査の方法別区分図

いてはIV層上位、一部IV層中位まで人力で調査を行うこととした。

(笠原)

## 2 基本土層

今年度の調査区は16年度調査区の延長部分にあるため、基本になる層序そのものにおおきな違いはない。地形的に見ると、今年度調査区には標高約8mの丘状の高まりがあって、これは砂丘の末端と考えられる部分である(図V-1-1-②)。また、旧河川あるいは湖・沼の跡と考えられる水の浸食等によって包含層が大きく削られる境界部分が見つかったこと(図V-1-1の④、図版14-1~4・34-4)等、地形的な特徴が見られた。河川堆積物として表したこの層は、ラミナの発達が顕著で多くの砂鉄を含んでいる無遺物層である。図V-2-1に基本土層図を示し各層位について以下に記した。

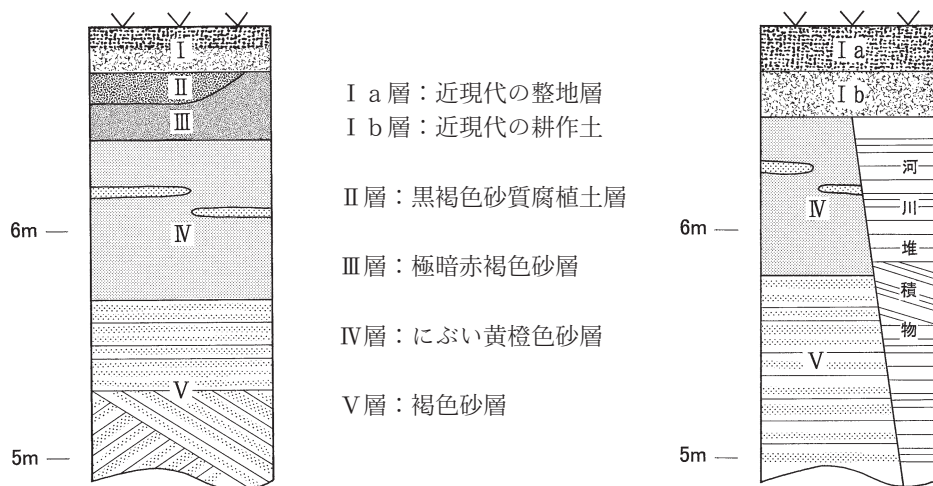
I層は近現代の耕作土とその上位の整地層で、今年度調査区東端では幾筋かの深度耕作が見られた。

II層は黒褐色砂質腐植土層で、16年度調査区も含めて岩内線跡を除いた調査区の北西端と南西端に主に堆積していた。これは調査区内を縦断していた岩内線着工の際に、II層の一部を削平して鉄道が敷設されたため両端にしか残っていなかった事が考えられる。本来この層はI層と当遺跡の主体である包含層のIII・IV層との間に形成されていたものと思われる。層厚は約10cmで縄文時代後期頃~続縄文期に生成されたと考えられる「クロスナ層」である(福田・小嶋・野上編1984)。昨年度調査区のG1区では層厚が約20cmある部分があって、粒度等からIIa・IIbの2枚に分け記録した部分がある(北埋調報220)。平成16年、17年の2か年にわたってこの時期の遺物は出土していない。

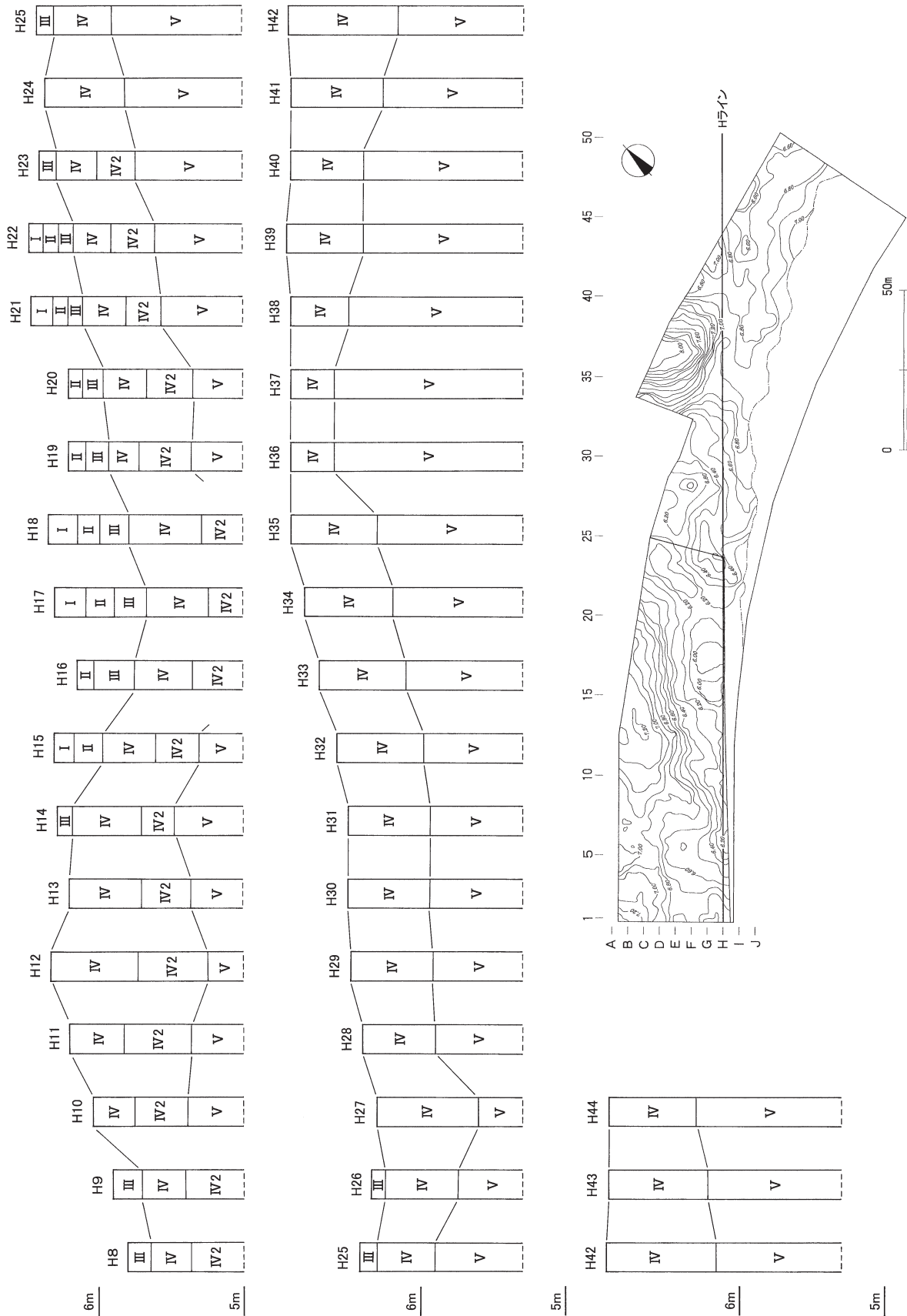
III層は基本的にはIV層が鉄道の影響等で酸化の進んだ部分を区分けしたもので細粒の極暗赤褐色を呈した砂層である。特に岩内線直下においては硬くしまり、酸化が顕著で漸移的である。本層からV層まで、縄文時代前期前半頃の資料が出土する。

IV層は当遺跡で主体になる遺物包含層で、にぶい黄橙色の細粒砂層である。粘着性はまったくない。図V-1-1の②で示した部分は微高地で、層厚が約70cmを計るところもある。場所によっては薄いラミナを挟み、2つに分けたところもある(図V-2-2)。V層は褐色の細粒砂層でラミナの発達が顕著である。IV層と比較して水分をやや含み、標高の低い部分ほどラミナ一枚一枚が水平に堆積し、やや厚い傾向にある。これは水による影響によって形成されたことが考えられる。また、微高地で観察される本層はラミナが薄く、乾燥が進み風等の作用で運ばれ堆積していったことが推察され、斜交ラミナも観察することができた。

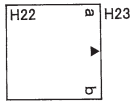
(笠原)



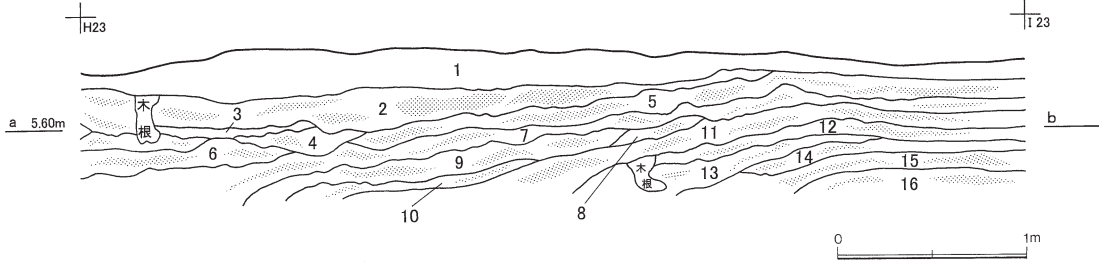
図V-2-1 基本土層



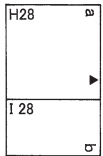
図V-2-2 Hライン土層柱状図



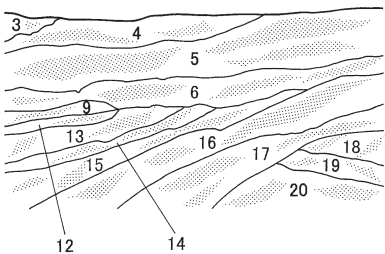
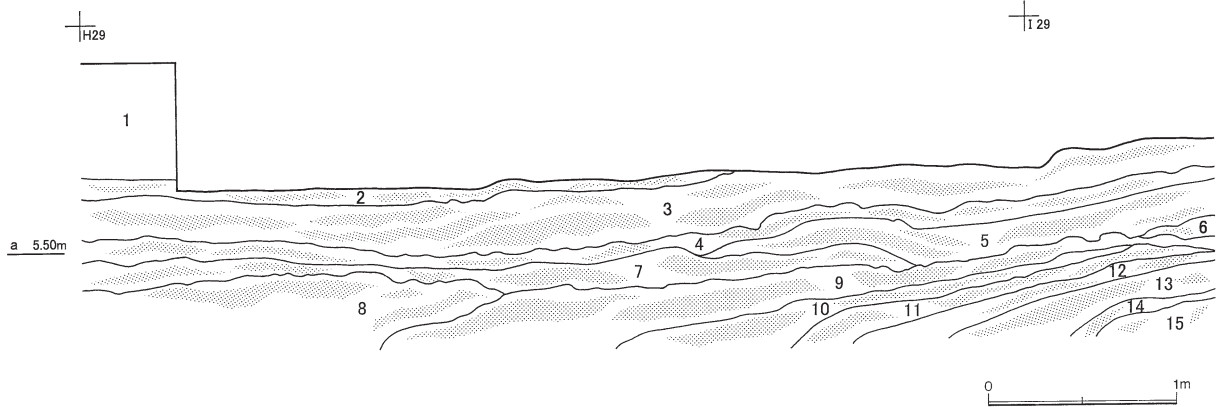
土層断面① H23ライン



1 : 明褐色(7.5YR7/2)	砂土(S)	IV層	堅密度	しよう	粘着性	なし	炭化物わずかに含む
2 : 灰褐色(7.5YR5/2)	砂土(S)	V層	堅密度	しよう	粘着性	なし	暗灰色の砂鉄が含まれる
3 : 明褐色(7.5YR7/2)	砂土(S)	IV層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄わずかに含む
4 : にぶい褐色(7.5YR5/3)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄わずかに含む
5 : 灰褐色(7.5YR4/2)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄多く炭化物含む
6 : 褐灰色(5YR4/1)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄多く含む
7 : 灰褐色(5YR4/2)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄多く沈着する
8 : 明褐色(7.5YR7/2)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄多い
9 : 黒褐色(10YR3/1)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄多い
10 : 明褐色(7.5YR7/2)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄多い
11 : 黒褐色(10YR3/0)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄多い
12 : 灰褐色(7.5YR4/2)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄多く鉄分が沈着する
13 : 灰褐色(7.5YR5/2)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄多い
14 : 黒褐色(10YR3/2)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄多い
15 : 褐灰色(5YR4/1)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄多い
16 : 灰褐色(7.5YR4/2)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	砂鉄少ない



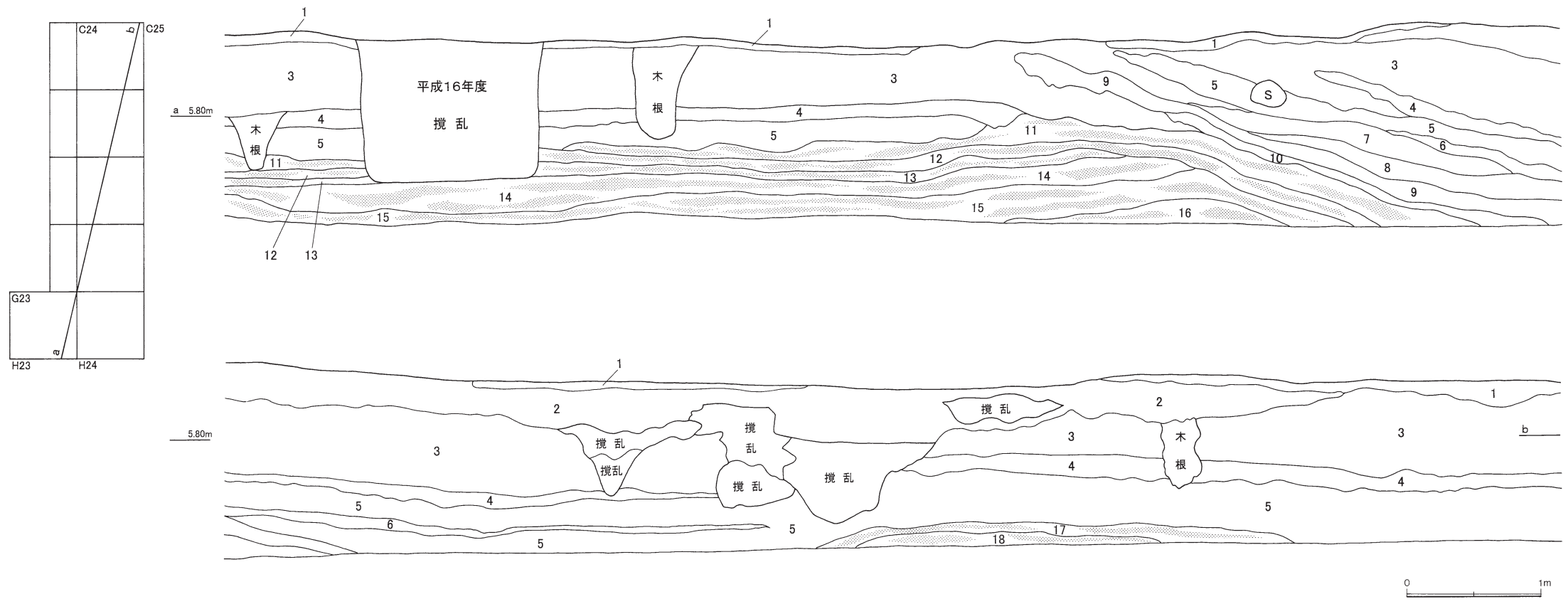
土層断面② H29ライン



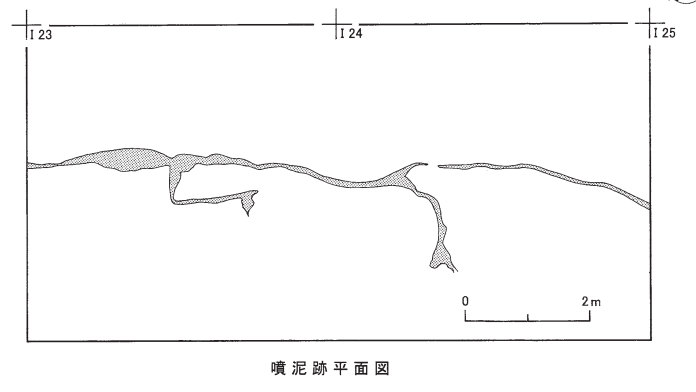
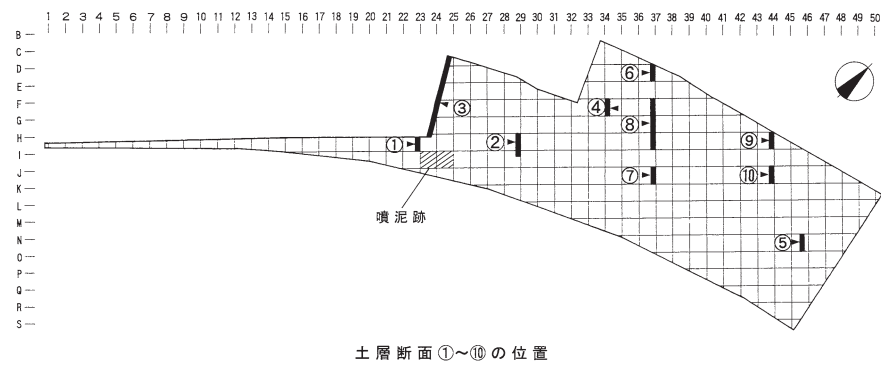
1 : 明褐色(7.5YR7/2)	砂土(S)	IV層	堅密度	軟	粘着性	なし	
2 : 褐灰色(7.5YR5/1)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
3 : 黒褐色(7.5YR3/5)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
4 : 灰褐色(7.5YR6/2)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
5 : 褐灰色(7.5YR4/1)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
6 : 灰褐色(7.5YR4/2)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
7 : 褐灰色(7.5YR4/1)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
8 : 暗褐色(7.5YR3/3)	砂土(S)	V層	堅密度	軟	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
9 : 黒褐色(7.5YR3/2)	砂土(S)	V層	堅密度	堅	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
10 : 黒褐色(7.5YR2/2)	砂土(S)	V層	堅密度	堅	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
11 : 黒褐色(7.5YR3/1)	砂土(S)	V層	堅密度	堅	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
12 : 灰褐色(7.5YR3/1)	砂土(S)	V層	堅密度	堅	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
13 : 黒褐色(7.5YR3/1)	砂土(S)	V層	堅密度	堅	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
14 : 灰褐色(7.5YR4/2)	砂土(S)	V層	堅密度	堅	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
15 : 黒褐色(7.5YR3/1)	砂土(S)	V層	堅密度	堅	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
16 : 灰褐色(7.5YR3/1)	砂土(S)	V層	堅密度	堅	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
17 : にぶい褐色(7.5YR5/3)	砂土(S)	V層	堅密度	堅	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
18 : 灰褐色(7.5YR3/1)	砂土(S)	V層	堅密度	堅	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
19 : 灰褐色(7.5YR5/2)	砂土(S)	V層	堅密度	堅	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混
20 : 黒色(7.5YR2/1)	砂土(S)	V層	堅密度	堅	粘着性	なし	フミンが発達する、砂鉄混

図V-2-3 H23、H29ライン土層断面

土層断面③ 前年度調査区との境界

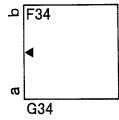


- |                     |       |                |                           |
|---------------------|-------|----------------|---------------------------|
| 1 : 褐灰色(7.5YR4/1)   | 砂土(S) | 平成16年度調査区の埋め戻し |                           |
| 2 : 暗赤灰色(10R3/1)    | 砂土(S) | II層 堅密度 堅      | 粘着性 なし 旧期クロスナ層? 縄文後期~統縄文? |
| 3 : にぶい褐色(7.5YR5/3) | 砂土(S) | IV層 堅密度 堅      | 粘着性 なし                    |
| 4 : 暗褐色(7.5YR3/3)   | 砂土(S) | IV層 堅密度 堅      | 粘着性 なし                    |
| 5 : 黒褐色(7.5YR3/2)   | 砂土(S) | IV層 堅密度 堅      | 粘着性 なし                    |
| 6 : 黒褐色(7.5YR3/1)   | 砂土(S) | IV層 堅密度 堅      | 粘着性 なし                    |
| 7 : 極暗褐色(7.5YR2/3)  | 砂土(S) | IV層 堅密度 堅      | 粘着性 なし                    |
| 8 : 暗褐色(7.5YR3/3)   | 砂土(S) | IV層 堅密度 堅      | 粘着性 なし                    |
| 9 : 黒褐色(7.5YR3/1)   | 砂土(S) | IV層 堅密度 堅      | 粘着性 なし                    |
| 10 : 黒色(7.5YR2/1)   | 砂土(S) | IV層 堅密度 堅      | 粘着性 なし                    |
| 11 : 暗褐色(7.5YR3/3)  | 砂土(S) | V層 堅密度 堅       | 粘着性 なし ラミナが発達する、砂鉄混       |
| 12 : 灰褐色(7.5YR4/2)  | 砂土(S) | V層 堅密度 堅       | 粘着性 なし ラミナが発達する、砂鉄混       |
| 13 : 黒褐色(7.5YR3/2)  | 砂土(S) | V層 堅密度 堅       | 粘着性 なし ラミナが発達する、砂鉄混       |
| 14 : 黒褐色(7.5YR3/1)  | 砂土(S) | V層 堅密度 堅       | 粘着性 なし ラミナが発達する、砂鉄混       |
| 15 : 灰褐色(7.5YR4/2)  | 砂土(S) | V層 堅密度 堅       | 粘着性 なし ラミナが発達する、砂鉄混       |
| 16 : 黒色(7.5YR2/1)   | 砂土(S) | V層 堅密度 堅       | 粘着性 なし ラミナが発達する、砂鉄混       |
| 17 : 黒褐色(7.5YR3/1)  | 砂土(S) | V層 堅密度 堅       | 粘着性 なし ラミナが発達する、砂鉄混       |
| 18 : 褐灰色(7.5YR4/1)  | 砂土(S) | V層 堅密度 堅       | 粘着性 なし ラミナが発達する、砂鉄混       |

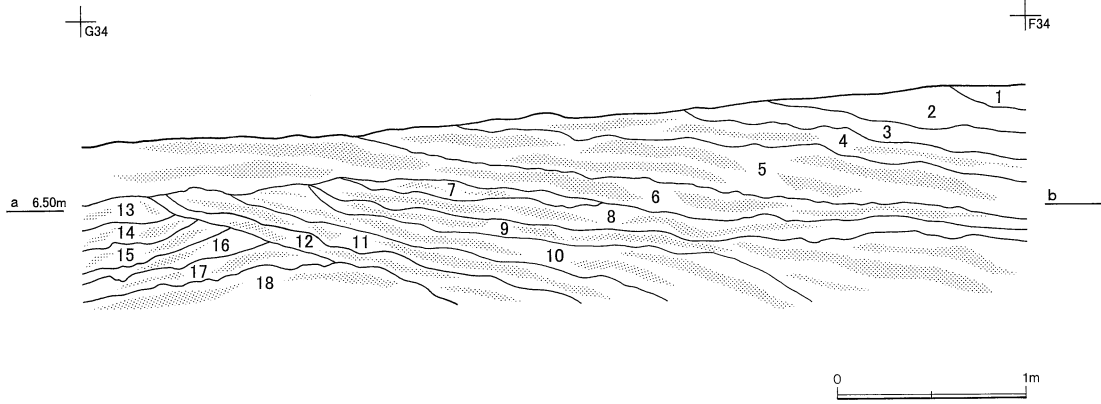


図V-2-4 前年度との境界部分の土層断面、噴泥跡平面図

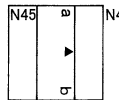




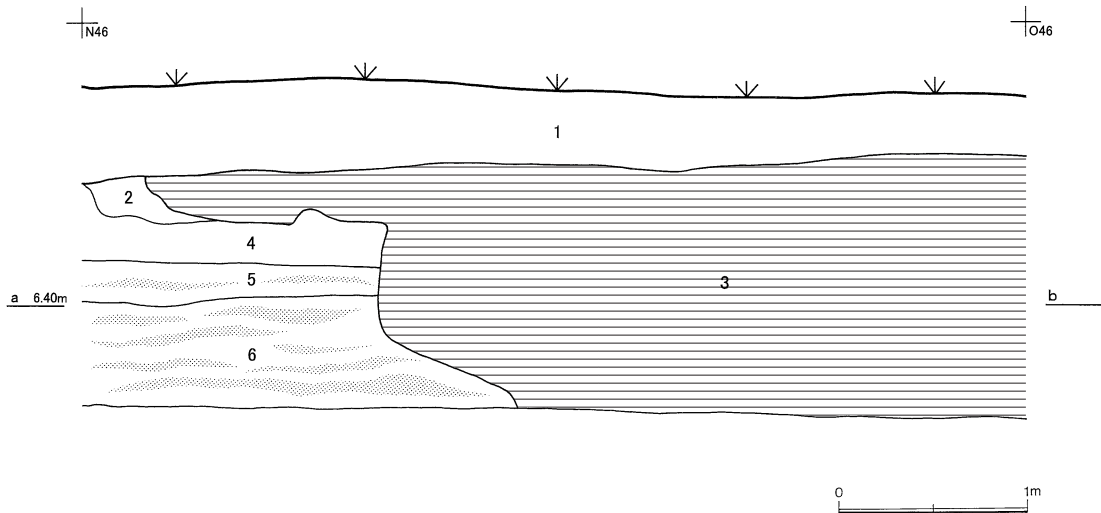
土層断面④ F34ライン



1 : 灰褐色(7.5YR4/2)	砂土(S)	IV層	堅密度 軟	粘着性 なし	
2 : にぶい褐色(7.5YR5/3)	砂土(S)	IV層	堅密度 軟	粘着性 なし	
3 : 明褐色(7.5YR7/2)	砂土(S)	IV層	堅密度 軟	粘着性 なし	
4 : 暗灰色(7.5YR3/1)	砂土(S)	V層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
5 : にぶい黄褐色(10YR7/2)	砂土(S)	V層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
6 : 明褐色(7.5YR7/1)	砂土(S)	V層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
7 : 暗灰色(7.5YR3/1)	砂土(S)	Va層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
8 : 明褐色(7.5YR7/2)	砂土(S)	Va層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
9 : 褐色(7.5YR5/1)	砂土(S)	Va層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
10 : 灰褐色(7.5YR6/2)	砂土(S)	Va層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
11 : 明褐色(7.5YR7/2)	砂土(S)	Va層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
12 : 褐色(7.5YR5/1)	砂土(S)	Va層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
13 : にぶい黄褐色(10YR7/2)	砂土(S)	V層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
14 : 明褐色(7.5YR7/2)	砂土(S)	V層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
15 : 暗灰色(7.5YR3/1)	砂土(S)	V層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
16 : 明褐色(7.5YR7/2)	砂土(S)	V層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
17 : にぶい黄褐色(10YR7/2)	砂土(S)	V層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する
18 : 明褐色(7.5YR7/2)	砂土(S)	V層	堅密度 しよう	粘着性 なし	ラミナが発達する

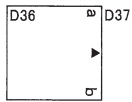


土層断面⑤ N45区1号トレンチ

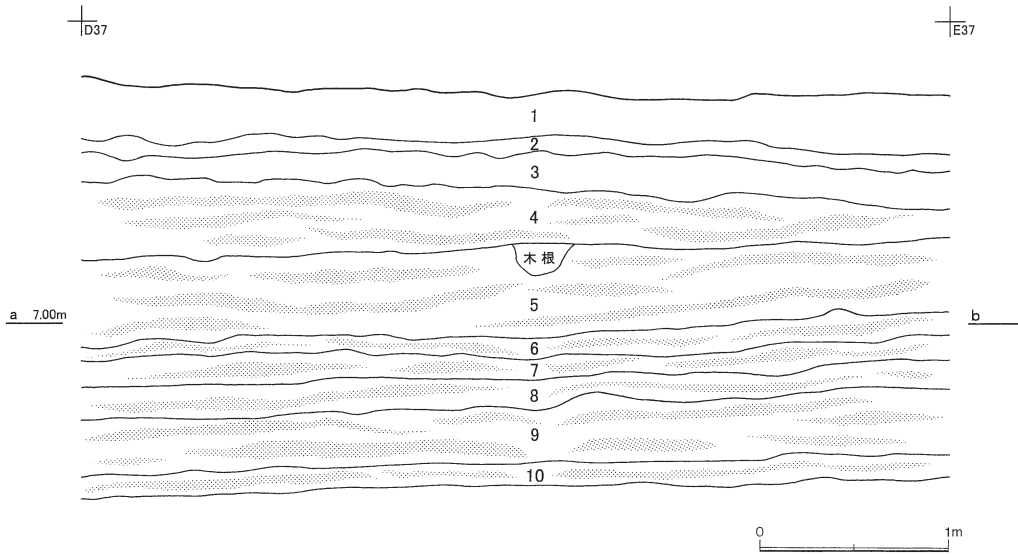


1 : にぶい褐色(7.5YR5/3)					近現代の整地層
2 : 暗褐色(10YR3/4)					近現代の耕作土
3 : 褐色(7.5YR5/1)	砂土(S)	河川堆積物	堅密度 すぐるしよう	粘着性 なし	無遺物層で砂鉄多くラミナが発達する 包含層をほぼ垂直に削平する部位がある
4 : にぶい褐色(7.5YR6/4)	砂土(S)	IV層	堅密度 堅	粘着性 なし	遺物包含層
5 : にぶい褐色(7.5YR5/3)	砂土(S)	IV層	堅密度 堅	粘着性 なし	ラミナが見られる
6 : 褐色(7.5YR4/1)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する

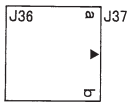
図V-2-5 F34ライン・N45区1号トレンチ土層断面



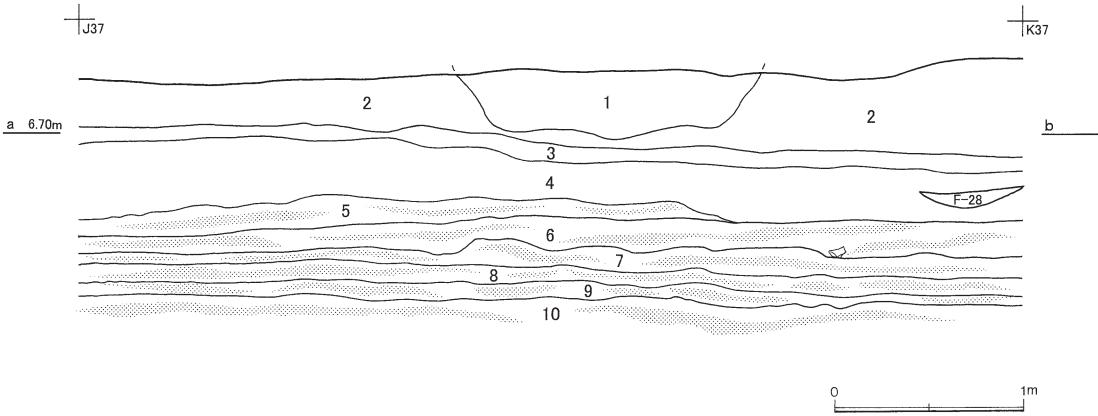
### 土層断面⑥ D37ライン



- |                     |       |      |       |        |               |
|---------------------|-------|------|-------|--------|---------------|
| 1 : 明褐色(7.5YR7/2)   | 砂土(S) | IV層  | 堅密度 堅 | 粘着性 なし |               |
| 2 : 灰褐色(7.5YR5/2)   | 砂土(S) | IV層  | 堅密度 堅 | 粘着性 なし |               |
| 3 : 明褐色(7.5YR7/2)   | 砂土(S) | IV2層 | 堅密度 堅 | 粘着性 なし |               |
| 4 : 灰褐色(7.5YR6/2)   | 砂土(S) | V層   | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達する      |
| 5 : 明褐色(7.5YR7/2)   | 砂土(S) | V層   | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達する      |
| 6 : 褐灰色(7.5YR6/1)   | 砂土(S) | V層   | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達する      |
| 7 : にぶい褐色(7.5YR6/3) | 砂土(S) | V層   | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達、IIa類包含 |
| 8 : 灰褐色(7.5YR6/2)   | 砂土(S) | V層   | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達する      |
| 9 : 褐灰色(7.5YR6/1)   | 砂土(S) | V層   | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達する      |
| 10 : 灰褐色(7.5YR6/3)  | 砂土(S) | V層   | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達する      |



### 土層断面⑦ J37ライン



- |                   |       |     |       |        |            |
|-------------------|-------|-----|-------|--------|------------|
| 1 : 暗褐色(7.5YR3/3) | 砂土(S) | I層  | 深度耕作  |        |            |
| 2 : 明褐色(7.5YR7/2) | 砂土(S) | IV層 | 堅密度 堅 | 粘着性 なし |            |
| 3 : 褐灰色(7.5YR5/1) | 砂土(S) | IV層 | 堅密度 軟 | 粘着性 なし |            |
| 4 : 明褐色(7.5YR7/2) | 砂土(S) | IV層 | 堅密度 堅 | 粘着性 なし | F-28(焼土)包含 |
| 5 : 褐灰色(7.5YR4/1) | 砂土(S) | V層  | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達する   |
| 6 : 灰褐色(7.5YR6/2) | 砂土(S) | V層  | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達する   |
| 7 : 明褐色(7.5YR7/2) | 砂土(S) | V層  | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達する   |
| 8 : 褐灰色(7.5YR6/1) | 砂土(S) | V層  | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達する   |
| 9 : 褐灰色(7.5YR5/1) | 砂土(S) | V層  | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達する   |
| 10 : 黒褐色(10YR3/1) | 砂土(S) | V層  | 堅密度 軟 | 粘着性 なし | ラミナが発達する   |

図V-2-6 D37、J37ライン土層断面



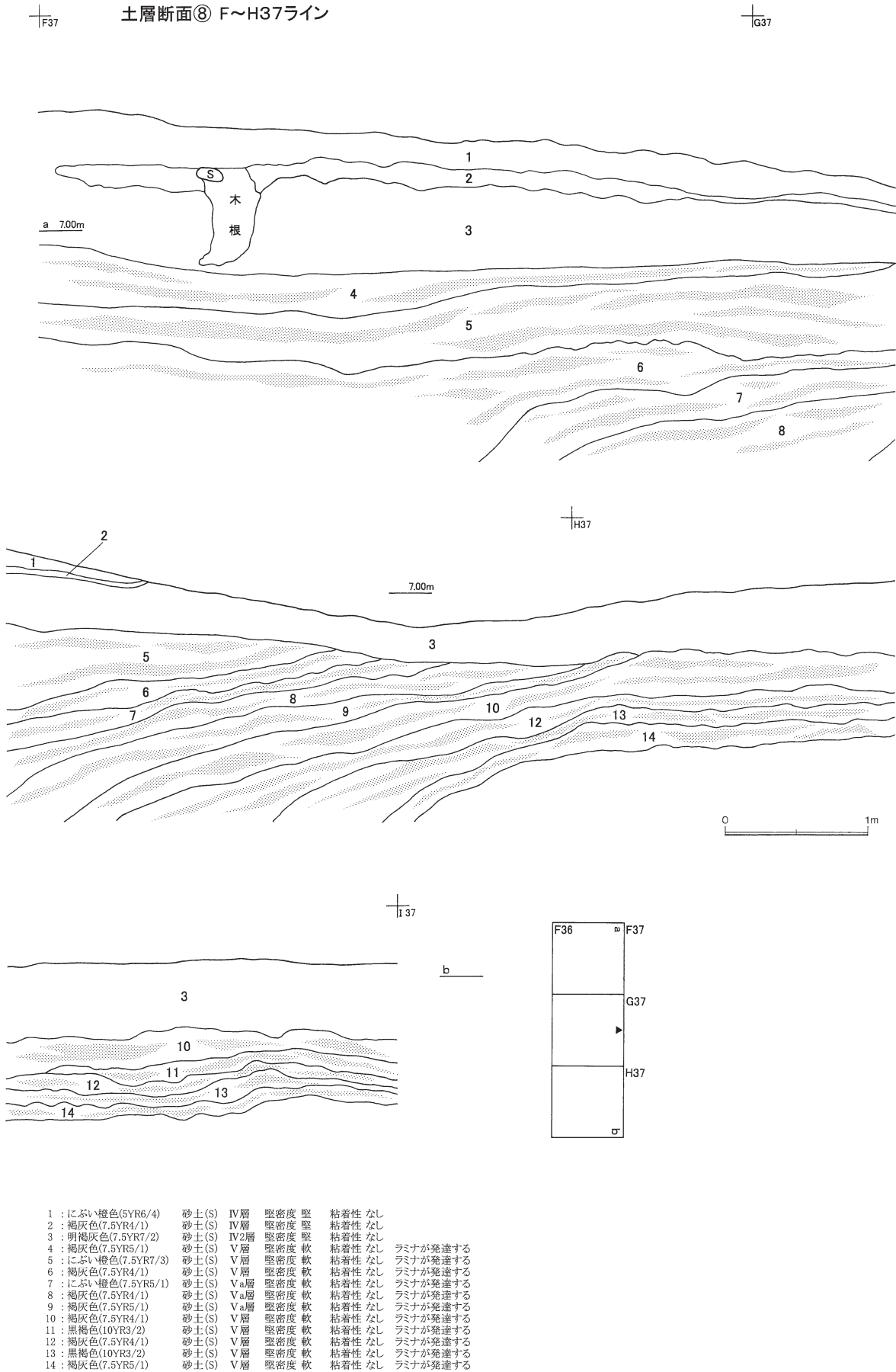
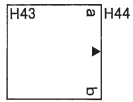
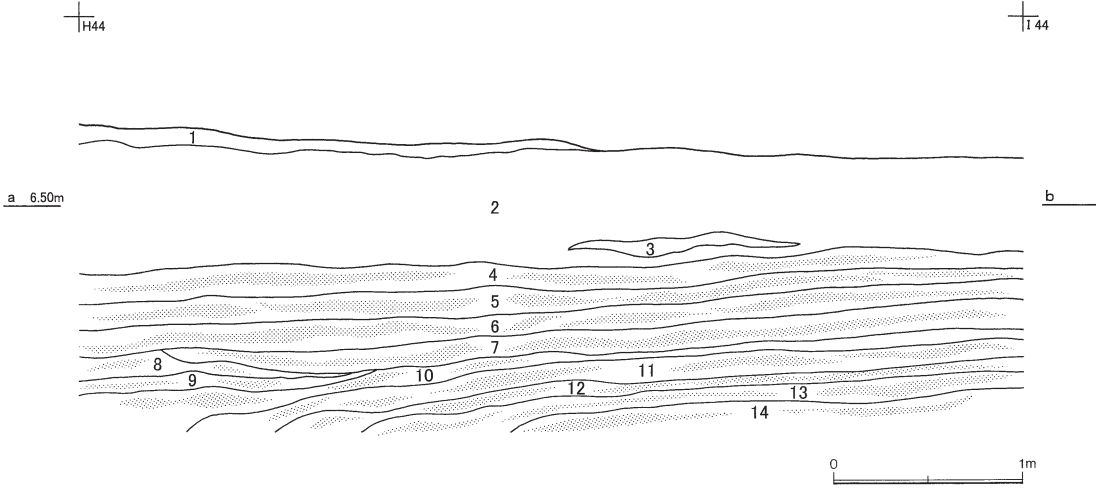


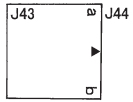
図 V-2-7 F~H37ライン土層断面



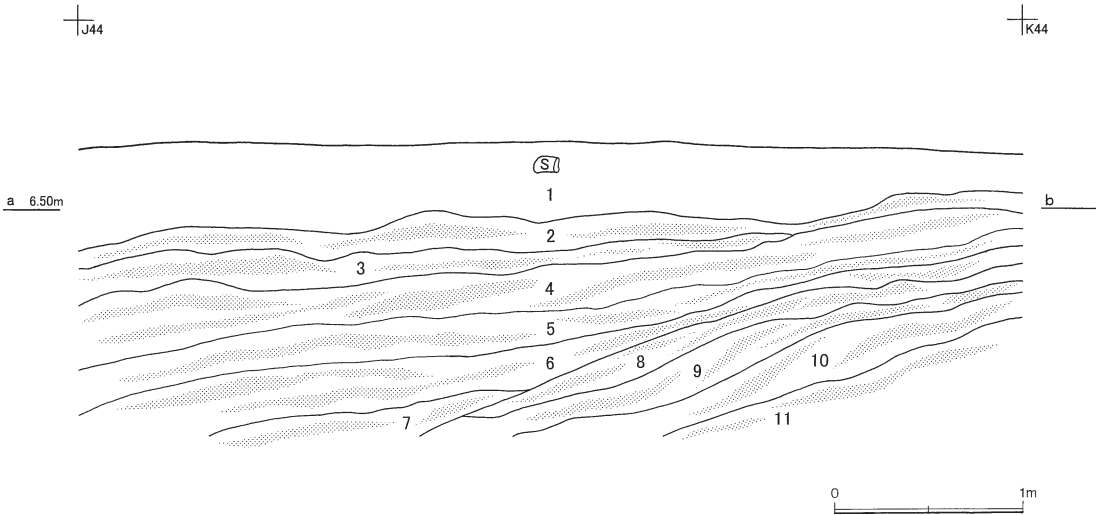
### 土層断面⑨ H44ライン



1	: にぶい赤褐色(2.5YR4/4)	砂土(S)	III層	堅密度 堅	粘着性 なし	
2	: 明褐灰色(7.5YR7/2)	砂土(S)	IV層	堅密度 堅	粘着性 なし	
3	: 褐灰色(7.5YR5/1)	砂土(S)	IV層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
4	: 灰褐色(7.5YR5/2)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
5	: 褐灰色(7.5YR4/1)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
6	: 褐灰色(10YR6/1)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
7	: 褐灰色(7.5YR5/1)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
8	: 灰褐色(7.5YR5/2)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
9	: 褐灰色(7.5YR4/1)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
10	: 灰褐色(7.5YR4/2)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
11	: 褐灰色(7.5YR4/1)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
12	: にぶい褐色(7.5YR5/3)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
13	: 灰褐色(7.5YR5/2)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
14	: にぶい褐色(7.5YR5/3)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する



### 土層断面⑩ J44ライン



1	: 明褐灰色(7.5YR7/2)	砂土(S)	IV層	堅密度 堅	粘着性 なし	
2	: 灰褐色(7.5YR6/2)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
3	: 暗灰色(N3/)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
4	: 明褐灰色(7.5YR7/2)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
5	: 褐灰色(7.5YR5/1)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
6	: 灰褐色(7.5YR4/2)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
7	: にぶい褐色(7.5YR5/3)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
8	: 灰褐色(7.5YR4/2)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
9	: 黒褐色(7.5YR3/1)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
10	: 灰褐色(7.5YR4/2)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する
11	: 黒褐色(7.5YR3/1)	砂土(S)	V層	堅密度 軟	粘着性 なし	ラミナが発達する

図V-2-8 H44、J44ライン土層断面

### 3 遺構と遺構出土の遺物

#### 概要

今年度の調査で検出した遺構は石器集中1か所、集石(S)15か所、剥片集中(FC)63か所、焼土(F)60か所である。このうち灰集中(F-63)と炭化物集中(F-64)は焼土として扱った。

今回検出された遺構はすべて縄文時代前期前半期に属するもので、43ラインより北東側を除いてほぼ全域に分布する。また標高で見ると5m~8mほどの間、高低差約3mという中にこの時期のものが含まれている。遺構の特徴については調査結果の概要の項でも述べている。

なお、(2)集石、(3)剥片集中、(4)焼土に関しては概要の記載のほかに、図示した遺物について遺構毎に説明を行っている。各遺構の位置、検出層位、規模等は表V-3、出土遺物の内容については表V-4に示してある。また、2か年の調査で検出された遺構の総数については表I-1に示した。(笠原)

#### (1) 石器集中1 (図V-3-4~7、図版18-1~4・35~38、表V-3・4・7・8)

位置 H33a 規模 0.1×0.65/0.22

**確認・調査** 包含層のIV層を掘り下げていたところ、小型の土器1個体と、長さ6cmほどの大型の黒曜石製、あるいは頁岩製の石鏃やスクレイパーなどの剥片石器、礫石器のまとまりを検出した。周辺を精査し、出土位置と高さを記録し、順次遺物を取り上げた。落ち込みなどは認められなかった。さらに掘り下げたところ、剥片石器類と石斧が北側にまとまって出土し、南側に焼土の広がりがあった。焼土の断面と石器の垂直分布を把握するため半截した。結果、焼土は10cmほどの厚さであり、石器はこの焼土の中と、そこから外れたところからも検出した。遺物の垂直分布をみると、20cm程度の範囲である。掘り込みなどは検出しなかった。

**遺物** 遺構のそばから土器が1点出土している。剥片石器類は石鏃20点、石槍またはナイフが1点、つまみ付きナイフ4点、スクレイパー19点、ピエス・エスキュー2点、石核7点、Rフレイク5点、頁岩フレイク145点、黒曜石フレイク73点、そのほかのフレイク3点出土している。石斧は6点、礫石器類ではすり石3点、石鋸2点、スコリア1点、礫・礫片4点の合計296点出土している。

**土器**：1は小型の土器。底部は尖り気味となり、胴部へ向かいやや広角度に開く。口唇部は平縁に近い波状か、いびつな平縁のものと思われる。地文は単節の斜行縄文が施されている。(袖岡)

**石器**：剥片を除き、定形石器として分類されたものはすべて図示した。

**石鏃**：2~21はすべて石鏃として扱った。全体に大型で三角形の凹基形を呈する。いずれも非常に丁寧に作出され、器体の残存状態は良好でほぼ完形品である。大きさは平均すると長さ4.4cm、幅3.1cm、厚さ0.65cm、重さ7.1gである。昨年調査では長さ5cm未満のものを石鏃として扱っていたが、この遺構出土の中で5cmを上回るものが17~21の5点含まれている。中でも21は長さ6.4cm、幅3.25cm、厚さ0.7cm、重さ12gを計る。石材別に見ると黒曜石製のものが13点で、2・7・8・10~16・18~20。頁岩製のものは7点で3~6・9・17・21である。形態ごとの観察では4~9は腹面または背面に素材面を大きく残すが、器体周辺の加工は丁寧に調整されている。3・5・10は基部の握りが浅いもの。11・13の尖頭部はわずかに欠けていると思われる。17・18・19の両側縁部はほぼ直線的に刃縁が作出されている。

**石槍またはナイフ**：22は頁岩を石材にし、一部に原石面を残す。

**つまみ付きナイフ**：すべて頁岩製である。23は主に背面の頸部から両側縁にかけて加工が施される。24は厚みのある剥片を素材にし、背面からの加工が丁寧に、急角度な調整を両側縁にかけて加えてい

る。25は折断面のある剥片を素材にし、つまみ部と右側縁に加工が施されるもの。

**スクレイパー**：26は黒曜石製。27～40は頁岩製である。26～34はいずれも厚みのある剥片を素材にし、両面または片面を主体に加工が加えられたもの。これらは左右がほぼ対称で上方が狭く下方に向かってやや広がる筥状を呈する。両面からの加工が顕著なものは26～29・33。このうち27・29は先端部に急角度の調整が施されているもの。素材の剥離面を残し、片面からの加工が主なものは30～32・34。また、29の腹面と32の背面には原石面が残る。35は尖頭状であるがスクレイパーとして扱った。特に側縁から先端部にかけて連続した入念な調整が施されている。36～40は剥片素材の形態を生かし、縁辺あるいはその一端に刃部が作出されるもの。38は接合したもので左側縁にやや急角度の調整が施されている。

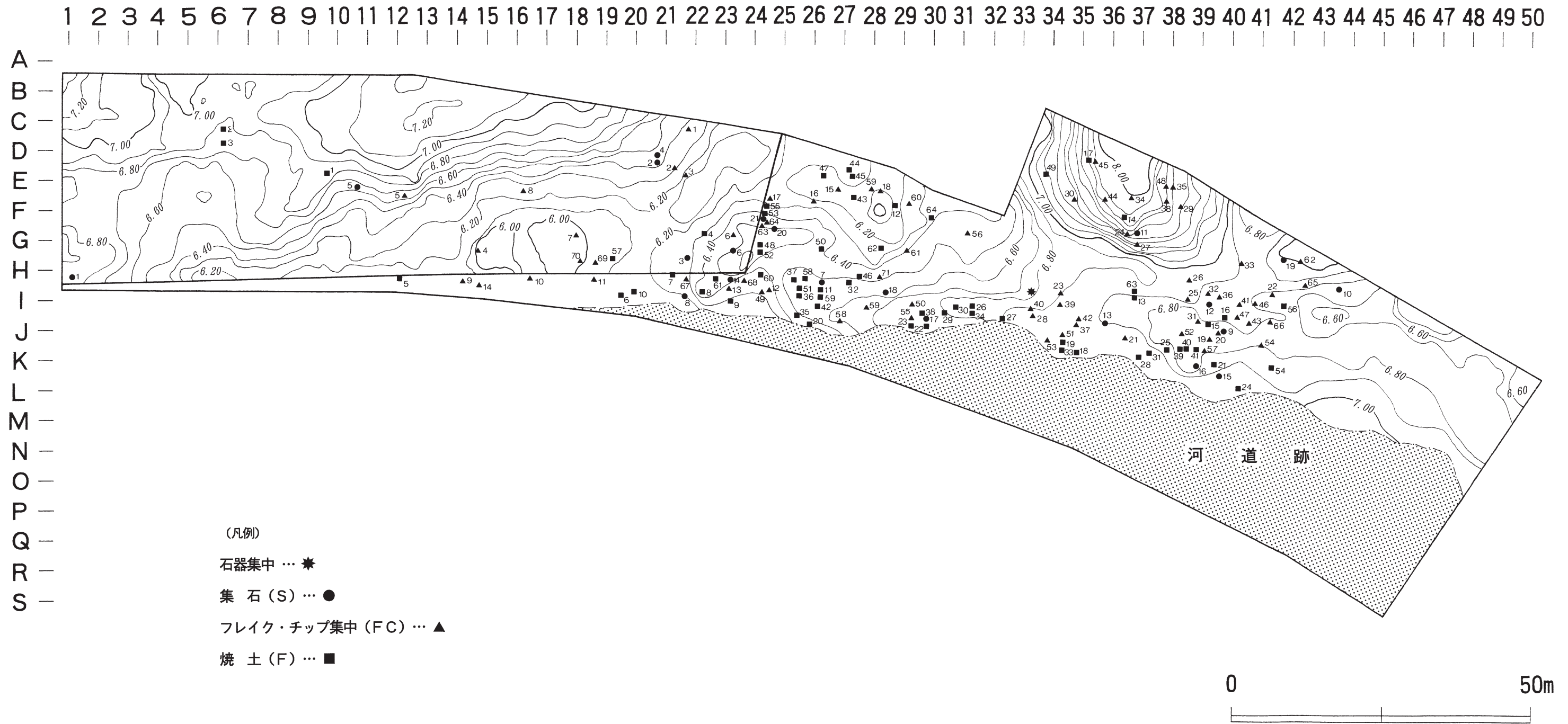
**ピエス・エスキーユ**：41・42は黒曜石製で、いずれも長軸方向の両端から対向する剥離が観察される。

**石斧**：石材はいずれも緑色泥岩で、器形が良く残っている。43は基端が細く、縦断面形は器体の中央に膨らみがある。刃部は両刃で全体の研磨は入念である。44も両刃で刃部の一端がわずかに欠損する。45は縦長で全身を入念に研磨している。刃部は片刃である。46は素材そのものに大きな調整は加えず、刃面にのみ研磨が施されている。47の素材は平坦で一方が外湾する。刃部は片刃である。48は長さが7.5cmで最も短い。基部の両面には剥離した凸凹があるが、その表面から刃部にかけて研磨が加えられている。

**すり石**：49・50はともに安山岩製。49は小型で断面が三角形を呈したすり石で、擦痕が顕著である。50は断面が円みを呈した小型の円礫で、顕著な擦り痕は認められないがすり石と分類した。

**石鋸**：51・52は輝石安山岩製。51は板状礫を素材にし、その一辺を機能部として使用している。52も板状礫を素材とするが短軸方向の上下端の二辺を機能部として使用している。

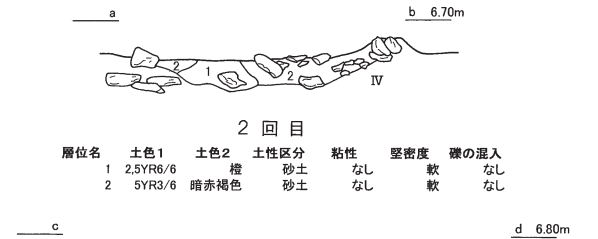
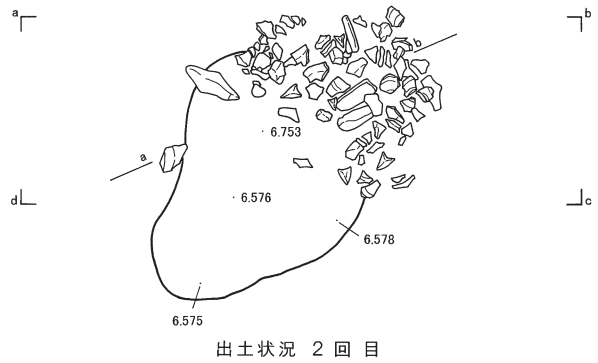
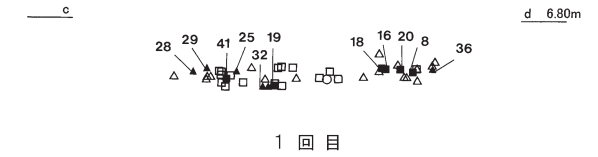
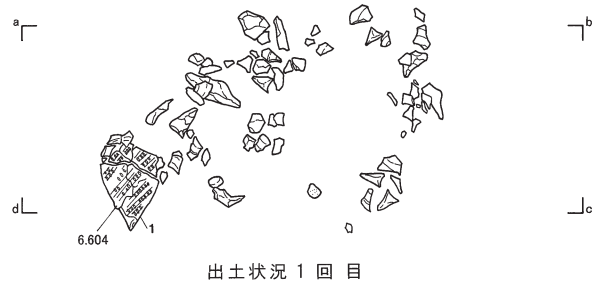
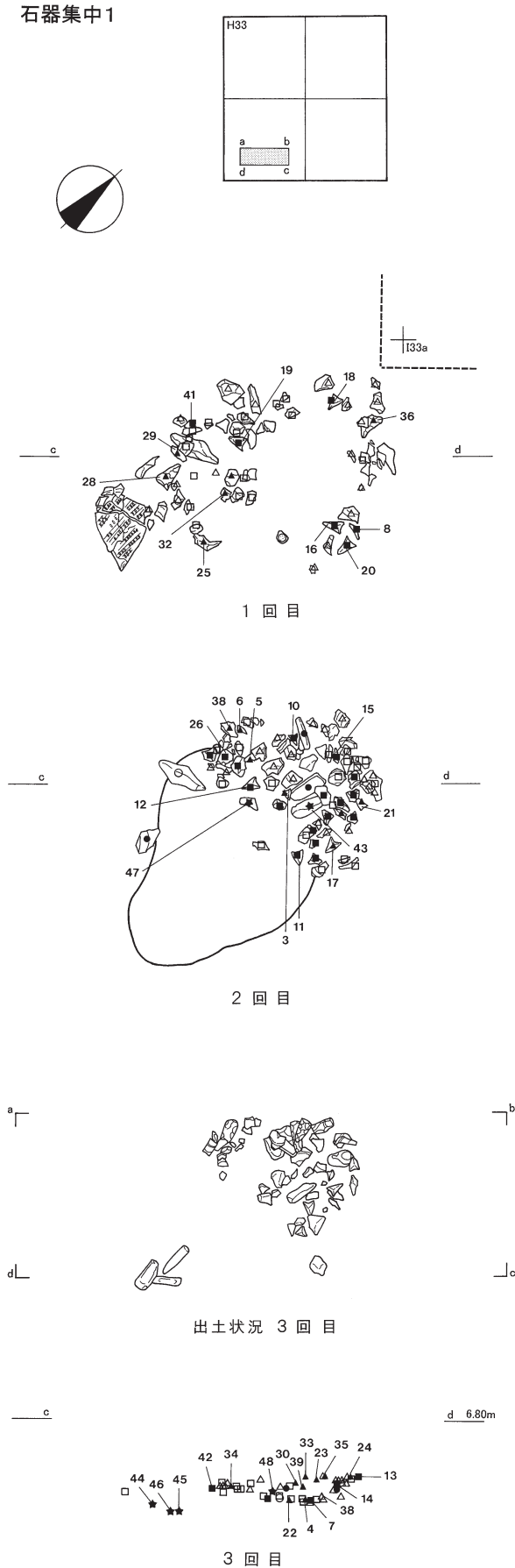
**原石**：53～55は赤鉄鉱。同一個体の可能性はあるが接合には至らなかった。なお、この赤鉄鉱については、道立地質研究所においてXRD・X線解析装置を用いた分析を行った。『この試料は大部分が「赤鉄鉱 (hematite)」から構成されており、少量の「石英 (quartz)」が含まれている』との結果を得た。  
(笠原)



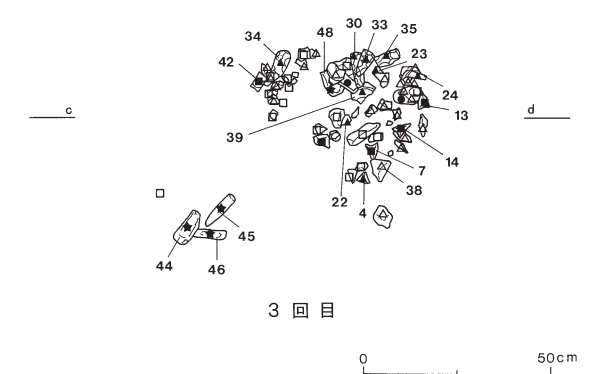
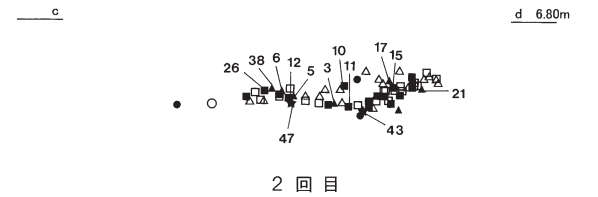
図V-3-1 Ⅲ層上面の地形と遺構位置図



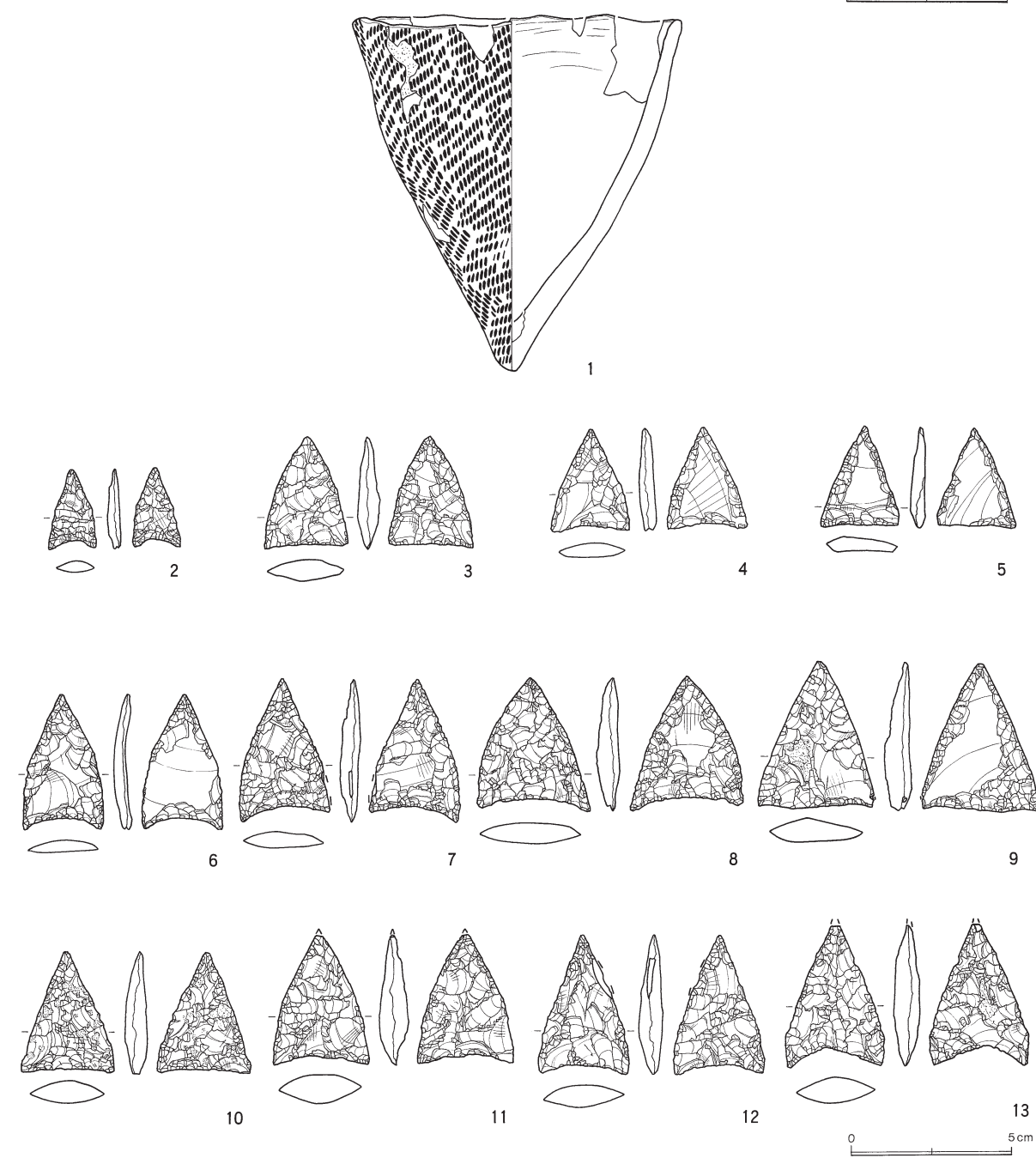
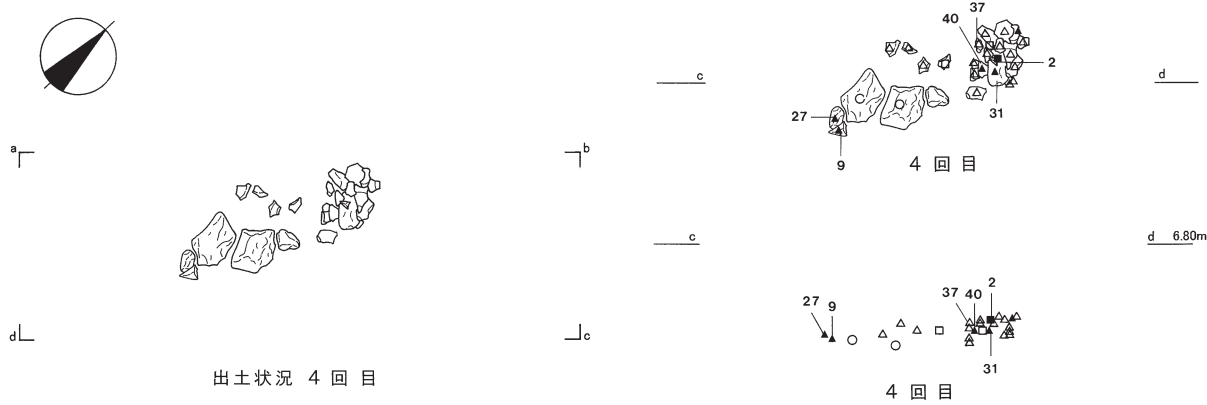
石器集中1



層位名	土色1	土色2	土性区分	粘性	堅密度	礫の混入
1	2.5YR/6	橙	砂土	なし	軟	なし
2	5YR/3/6	暗赤褐色	砂土	なし	軟	なし

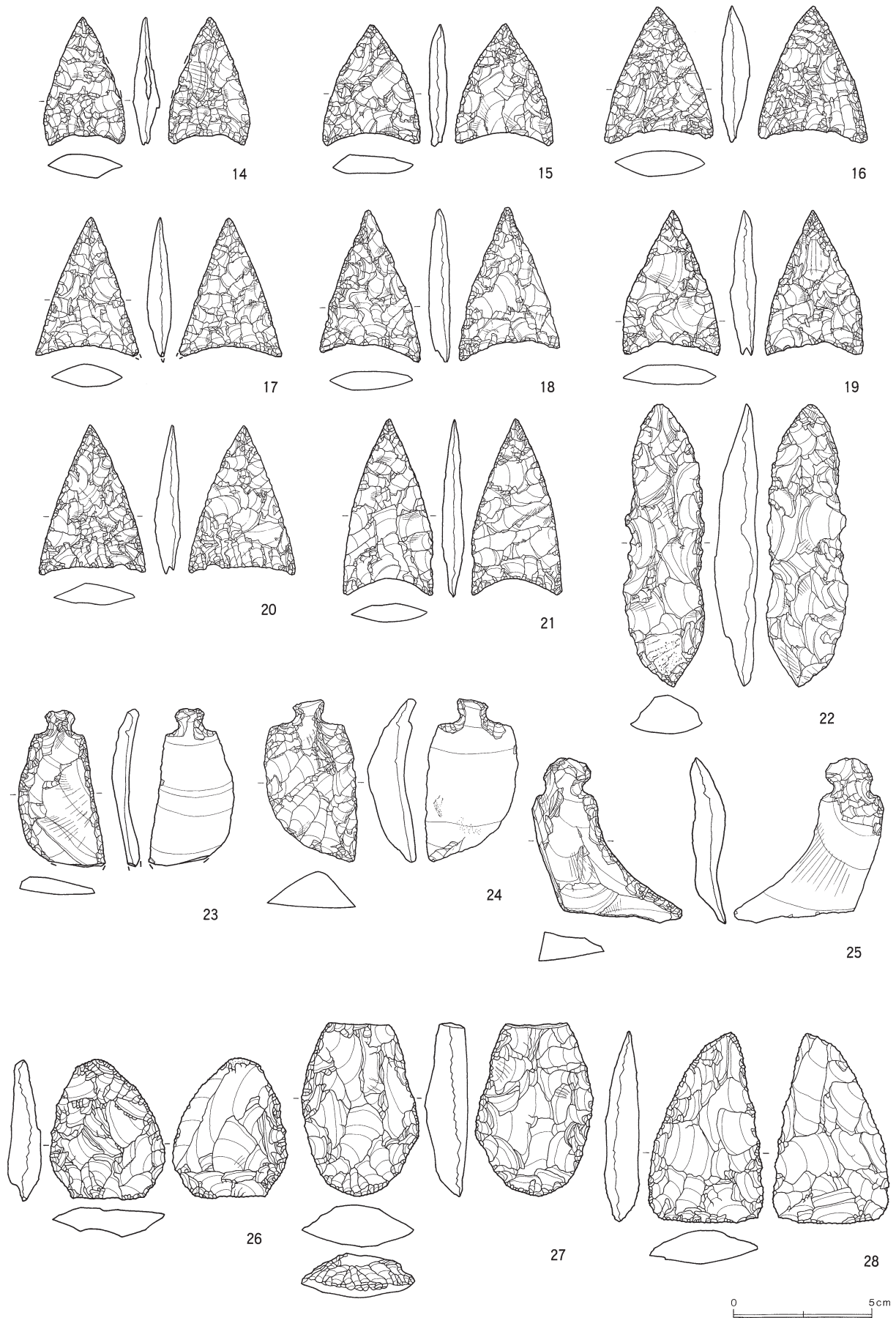


図V-3-2 石器集中1

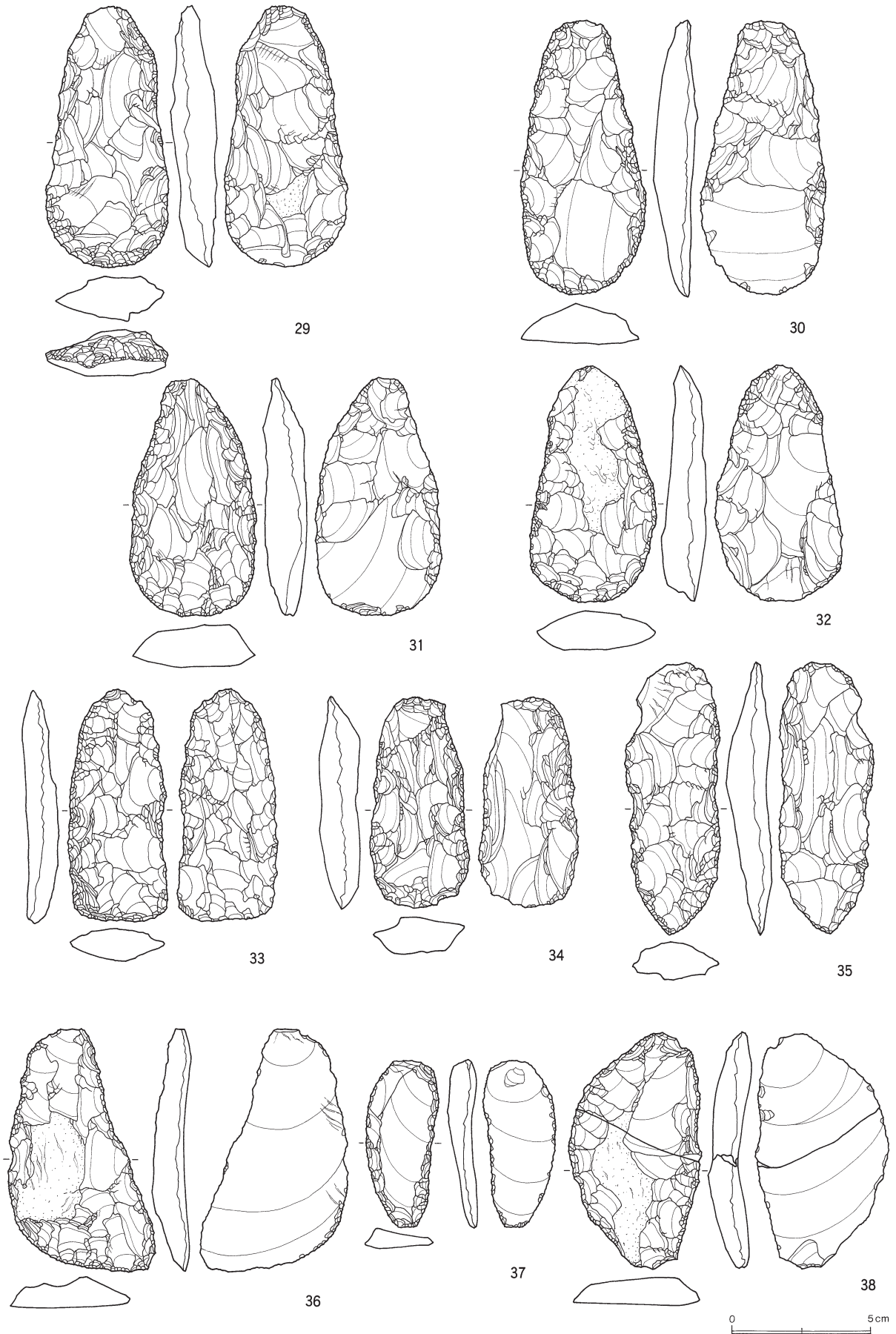


図V-3-3 石器集中1と出土遺物(1)

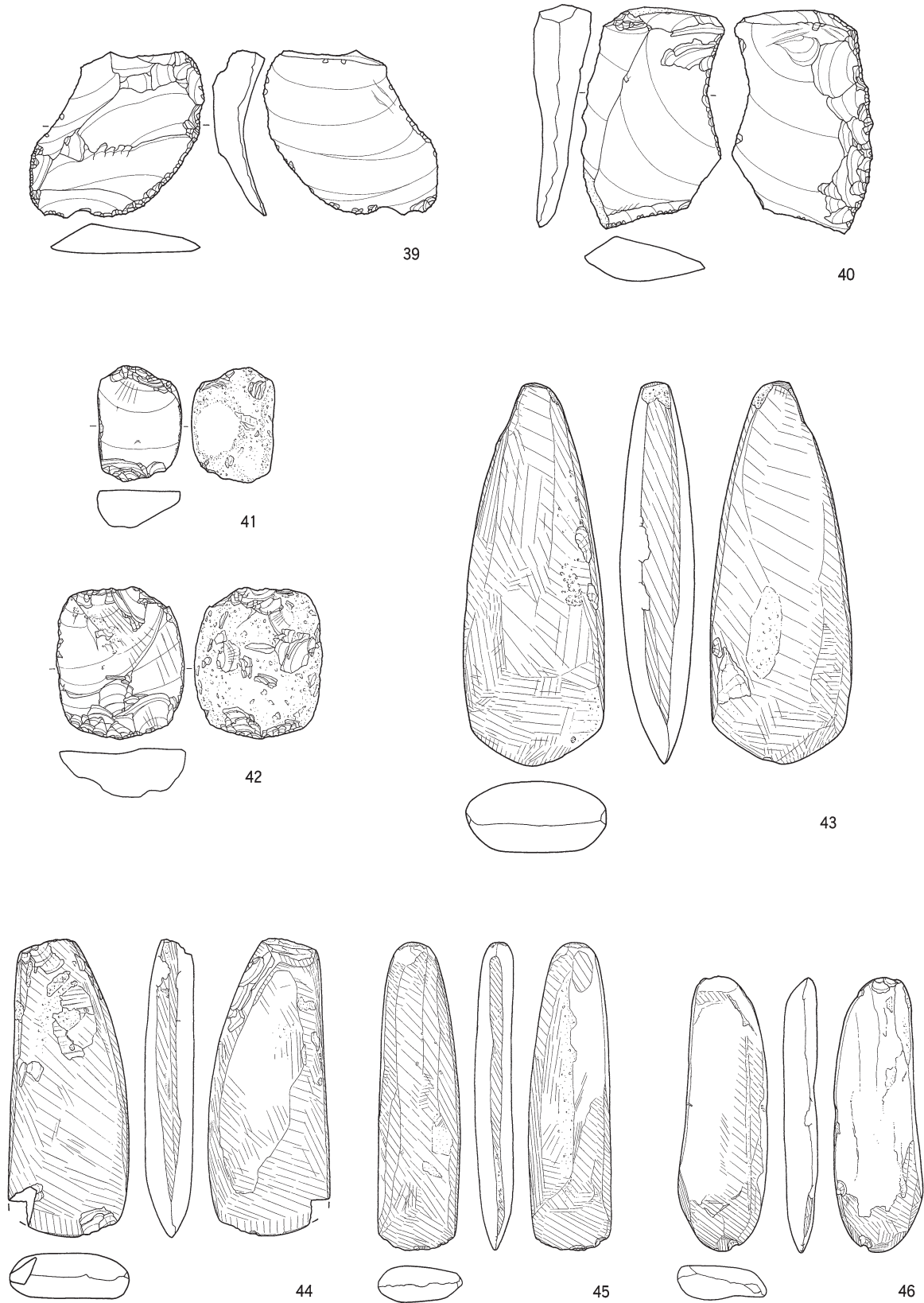




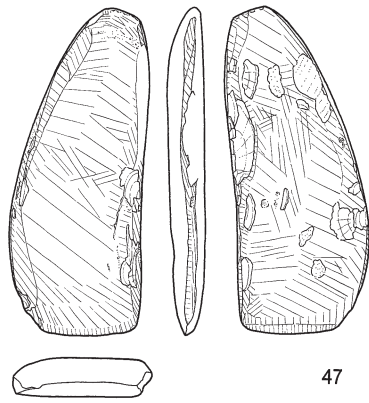
図V-3-4 石器集中1の出土遺物(2)



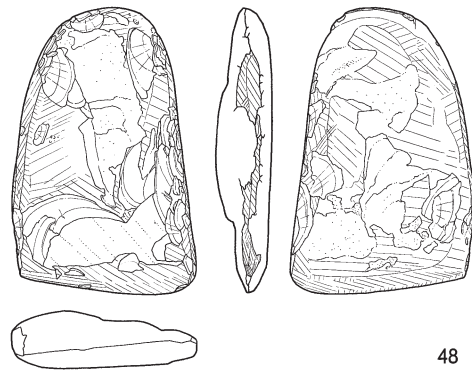
図V-3-5 石器集中1の出土遺物(3)



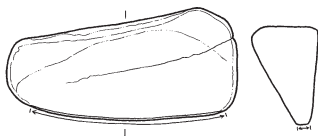
図V-3-6 石器集中1の出土遺物(4)



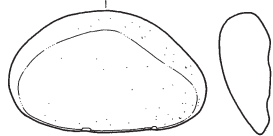
47



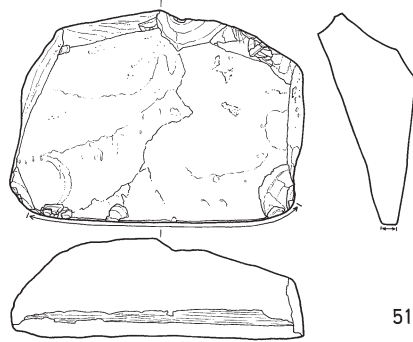
48



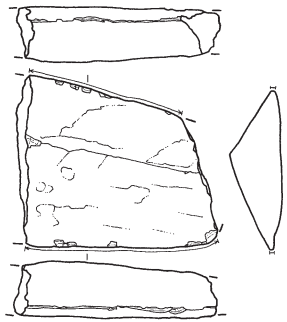
49



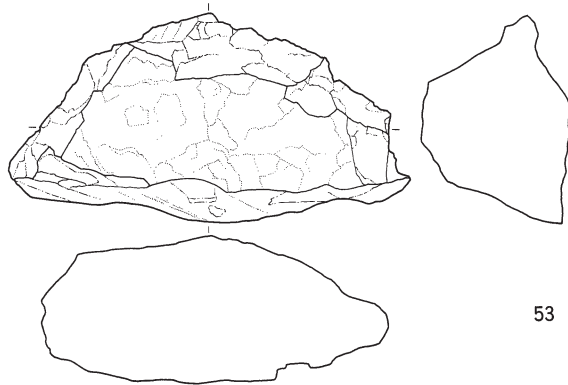
50



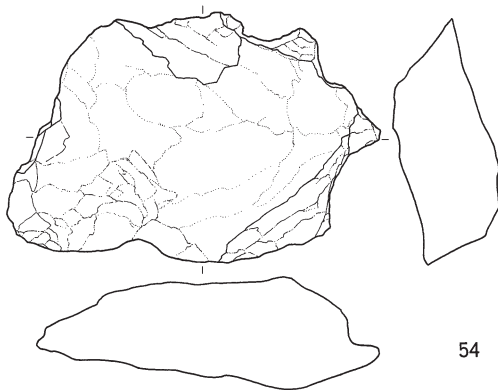
51



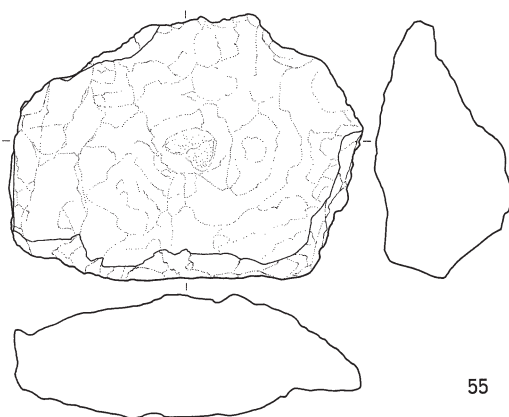
52



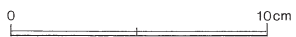
53



54



55



図V-3-7 石器集中1の出土遺物(5)

## (2) 集石 (図V-8~15、図版20~22・39~45、表V-3・4・7・8)

## 概要

検出された集石(S)は15か所(S-7~S-21)で、いずれも縄文時代前期前半期のものである。S-7はH26a区で検出した石斧の集中である。30cm程の狭い範囲に積み重ねられるように14点がまとまって出土した。明瞭な掘り込み等は認められなかった。性格は不明である。また、被熱したために表面が焼け弾けのような剥離痕の認められるものが14点中、13点に認められた。破片資料が多いことも特徴である。昨年出土したS-1も石斧の集中でこれに類似した遺構である(北埋調報220、IV章-1)。

S-8は径の平均が10cm程の円礫が59点まとまって出土した。被熱しているものが多い。このうちたたき石に分類されたものが18点、台石が2点含まれる。S-9も円礫の集中で、径の平均が約10cmの礫が33点出土した。このうちたたき石に分類されるもの20点、石錘が1点含まれる。S-10はたたき石が7点、すり石1点、台石が9点、礫7点がまとまって出土した。S-11は小型の円礫が7点まとまって出土したもので、たたき石に分類されたものが4点含まれる。S-12は15点の円礫がまとまって出土した。このうちたたき石に分類されたものが4点含まれる。S-13は小型の円礫が11点まとまって出土した。定形石器は含まれない。S-14は6点の台石が3点ずつ向かい合うように出土した。S-15は2つに割れた台石とたたき石2点、すり石片1点のまとまりである。S-16は剥片石器や礫石器等が24点まとまって出土した。石鏃が1点、つまみ付ナイフ1点、スクレイパー1点、石斧1点、すり石4点、たたき石3点、台石が2点含まれる。

S-17は台石が2点、たたき石2点、礫が3点まとまって出土した。S-18は小型の円礫が9点まとまって出土した。このうちたたき石が6点含まれる。S-19はたたき石を主体とした集中で、計24点出土した。このうち台石が1点含まれる。S-20は9点出土した。台石片5点とたたき石2点、石皿1点、礫が1点である。S-21はやや広範囲に分布するもので、剥片石器や剥片、礫石器等を含む53点が出土した。礫が最も多く、石槍片やたたき石等も含まれている。

以下、図示した遺物について記載する。

(笠原)

## S-7 (図V-3-8~9、図版39-1、表V-7・8)

**土器**：1は単節の斜行縄文地に断面が円形の棒状工具により斜め方向からの刺突文が施されている。

(袖岡)

**石器**：14点出土した。破片資料が多く、被熱による焼け弾けのような表面剥離痕が2を除くすべてに認められた。6は泥岩製、他はすべて緑色泥岩を素材としている。器体の残存状況は、ほぼ完形品と考えられるもの3・4・9・10の4点である。器体の1/2程度が残存するものは11~14で4点。器体の残存が1/3以下のものは2・5~8・15の6点である。2は刃部附近を残し、基部から上を欠損する。片刃で刃部の研磨は入念に仕上げられている。焼け弾けのような表面の剥離痕は認められない。3は刃部を僅かに欠損する。全体の研磨は入念である。4・9は素材の器形を生かし、比較的粗い調整で仕上げられたもの。5・6は片面の一部が残存するもの。7は刃部のみ残存するもので、表面の焼け弾け痕が著しい。8は基端から基部にかけて片面のみ残存するもので、焼け弾け痕が顕著である。10は基端から刃部にかけて残存する。片刃で表面の剥落が目立つ。11は全体の研磨は入念であるが、表面の剥落が著しい。12は刃部から基部にかけて片面だけ残るもの。側面観では長軸方向に長く節理様の割れが3本見られる。13は刃部を大きく欠損するもの。14・15は基端にかけて上端側を欠損する。

## S-8 (図V-3-10、図版40-1、表V-8)

**石器**：たたき石4点を図示した。1~4は安山岩製の扁平礫を素材にする。1・3・4は扁平礫の周

縁部に顕著な敲打痕が見られるもの。2は敲打痕が周縁端部の他、正裏両面の平坦面にも認められる。

S-9 (図V-3-10、図版40-2、表V-8)

石器：たたき石2点、石錘1点を図示した。1・2は安山岩製の扁平礫を素材にし、周縁部に顕著な敲打痕が認められる。3は石錘で長軸の2ヵ所に抉りがあるもの。石質は安山岩。

S-10 (図V-3-11、図版18-5、表V-8)

石器：すり石1点、台石1点を図示した。1は安山岩を素材にし、扁平礫の下端部に顕著な擦り痕が認められるもの。2は断面形が三角形を呈し、正裏両面の平坦面に顕著な擦り痕が認められるもの。接合資料で約半分を欠損する。素材は安山岩。(笠原)

S-14 (図V-3-12、図版41-1、表V-7)

土器：1は波状口縁のもの。表面の調整が雑で、凹凸があり、いびつである。口唇の断面は丸～丸みを帯びる角形である。地文は単節の縦走縄文が施されている。器形はあまり開かない尖底土器と考えられる。2は地文が単節の斜行縄文のもの。口唇の断面はやや薄く、丸みを帯びている。(袖岡)

S-15 (図V-3-11、図版42-1、表V-8)

石器：すり石1点、たたき石1点、台石1点を図示した。いずれも素材は安山岩製である。1は断面形が三角形を呈し、下端部に顕著な擦り痕がある。左右を大きく欠損する。2は棒状礫を素材にし、正面側に軽微な敲打痕が散見する。3は台石で接合資料。正裏両面の平坦面に擦痕または敲打痕が認められる。

S-16 (図V-3-13、図版43-1、表V-8)

石器：石鏃1点、つまみ付ナイフ1点、スクレイパー1点、すり石3点を図示した。1は黒曜石を素材にした無茎凹基である。2は頁岩を素材にし、背面からの加工は入念に施され急角度に調整されている。特に左側縁の縁辺加工は連続的である。3は頁岩を素材にし、背面からの器体の成形はやや粗い加工であるが先端刃部の調整は連続的で急角度に仕上げられている。4～6は安山岩を素材にし、ほぼ断面の形態が三角を呈するものである。いずれも下端部を主体に顕著な擦り痕が認められ、擦り痕の幅も広い。

S-17 (図V-3-13、図版44-1、表V-8)

石器：たたき石1点、台石1点を図示した。1は安山岩製の扁平礫で、下端部に顕著な敲打痕がある。正面平坦部にも軽微な敲打痕が散見される。2は安山岩製の台石で、中央に明瞭な擦痕が認められ平滑化しており、さらに敲打痕も認められる。

S-19 (図V-3-14、図版44-2、表V-8)

石器：たたき石3点を図示した。1～3は安山岩を素材にし、いずれも周縁部か端部に顕著な敲打痕が認められるもの。

S-20 (図V-3-14、図版45-1、表V-8)

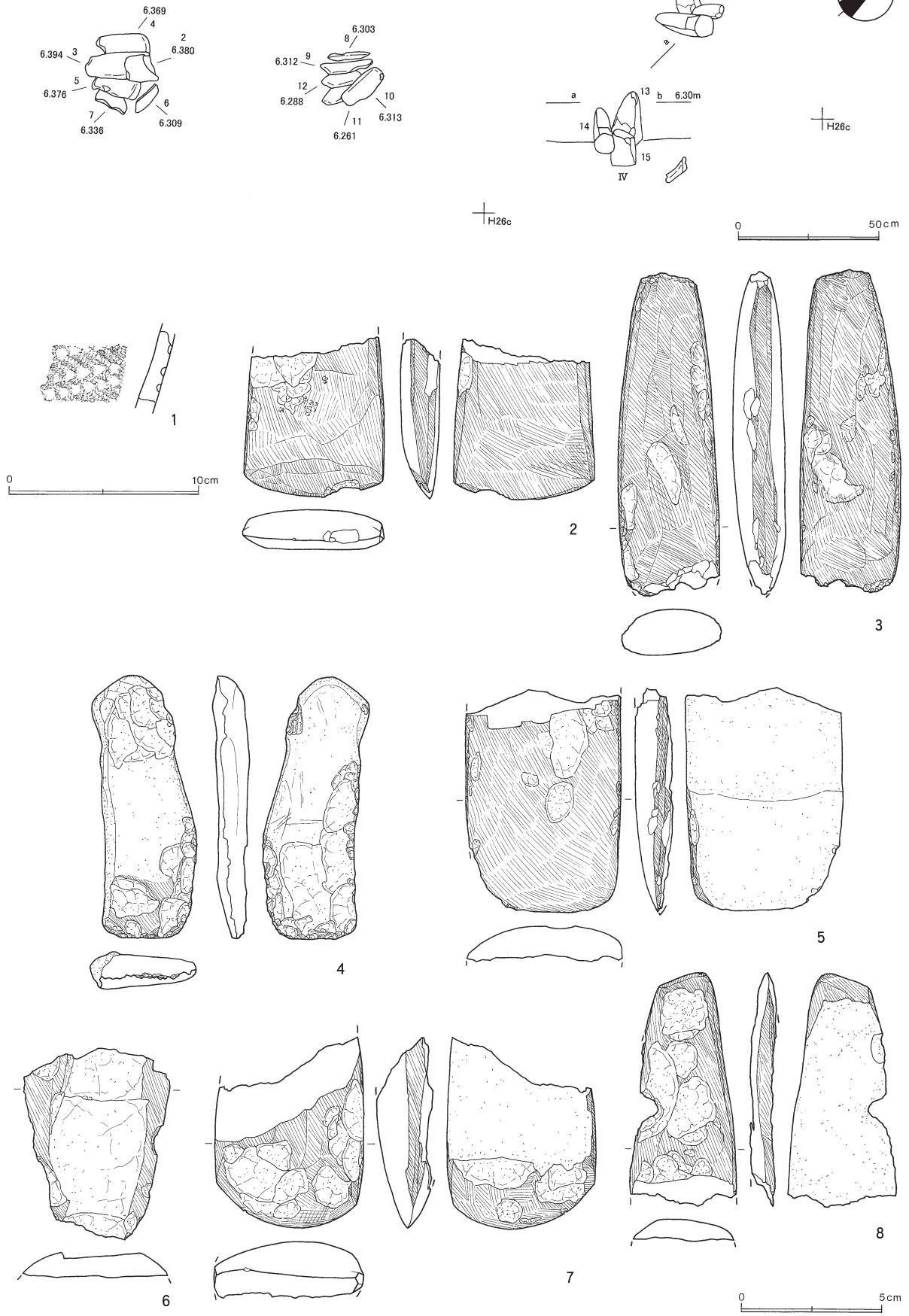
石器：石皿1点を図示した。石材は安山岩で、やや大形の剥離した礫片を二次的に利用したものと考えられる。厚さが1.5cmと極端に薄く正裏両面のほぼ全面に擦痕が認められる。(笠原)

S-21 (図V-3-15、図版45-2、表V-7・8)

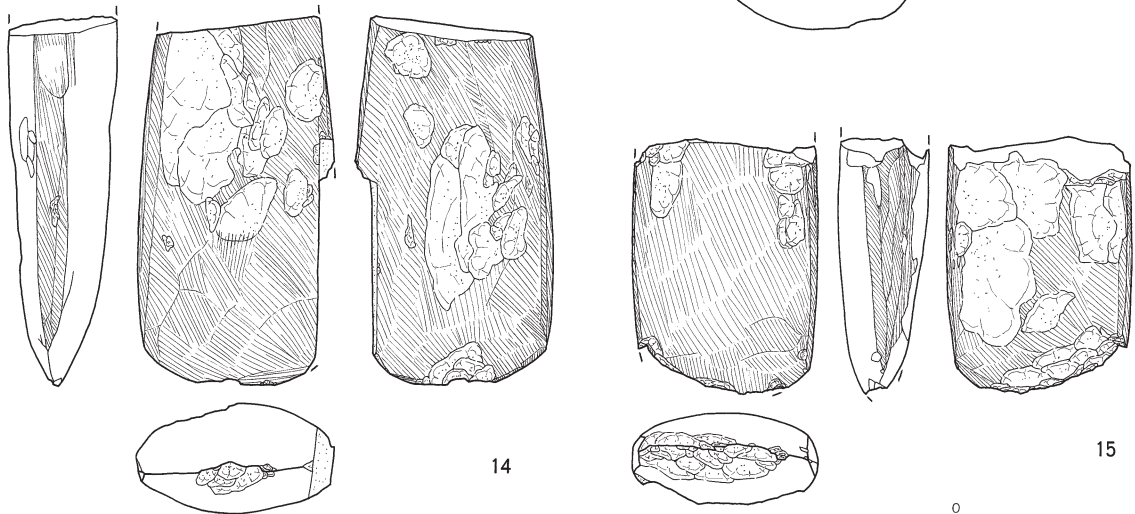
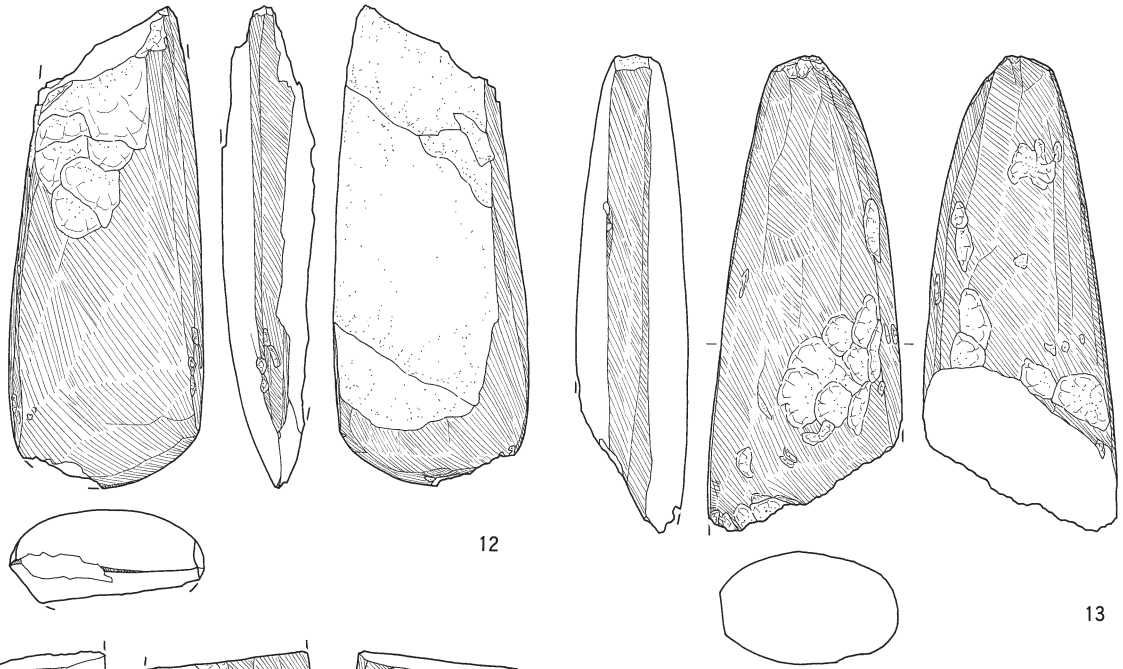
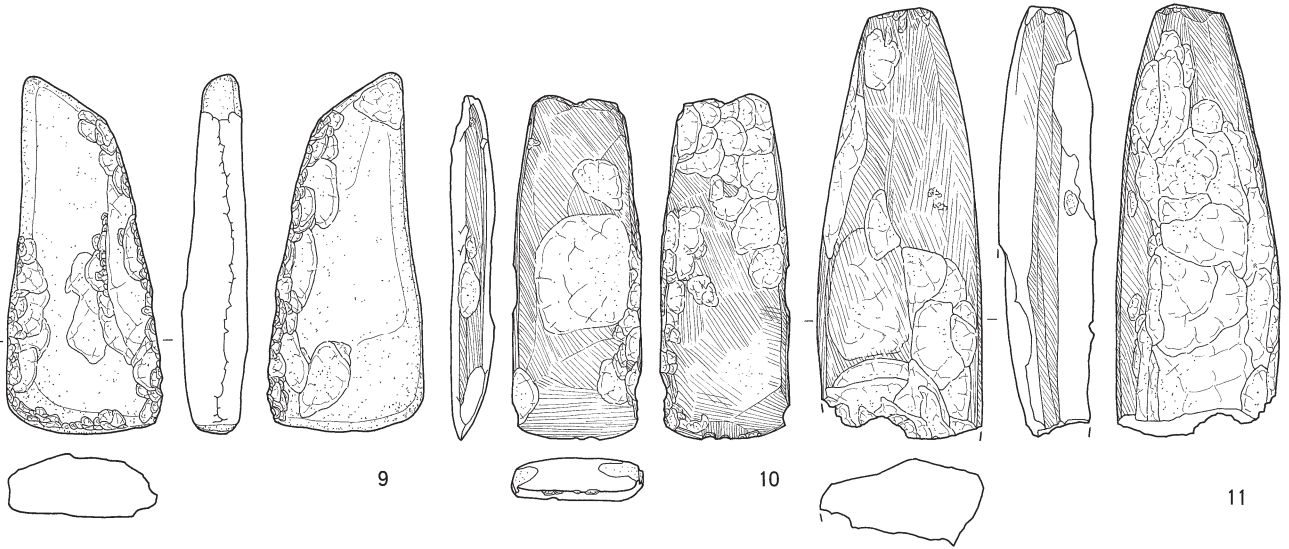
土器：1は斜行縄文が施されている底部付近の破片。(袖岡)

石器：石斧1点、たたき石1点を図示した。2の素材は片麻岩で、基端部と刃部の一部が欠損する。表面の研磨は入念に仕上げられている。3の素材は安山岩で、下端部に集中して敲打痕が認められる。(笠原)

S-7

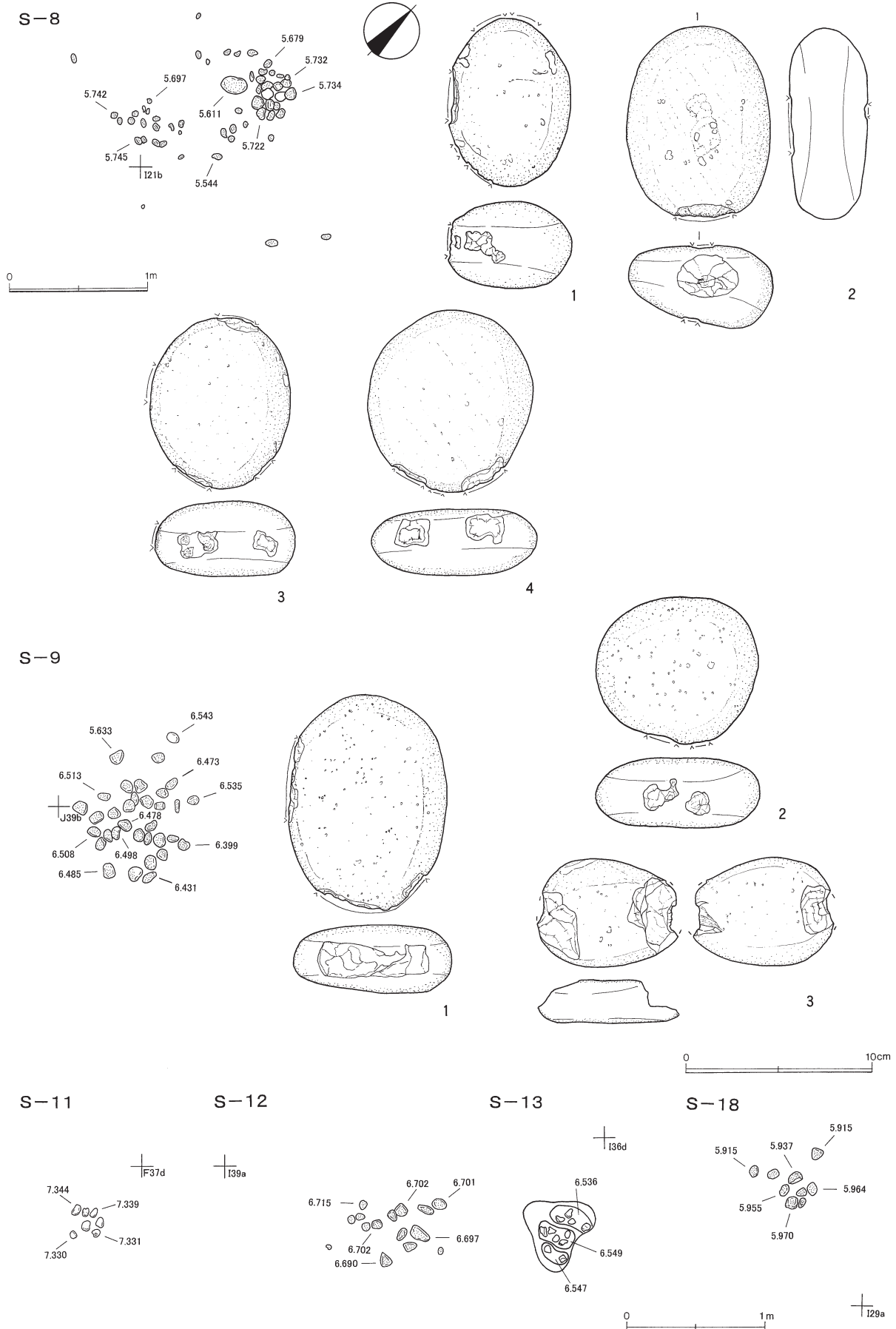


図V-3-8 S-7と出土遺物(1)

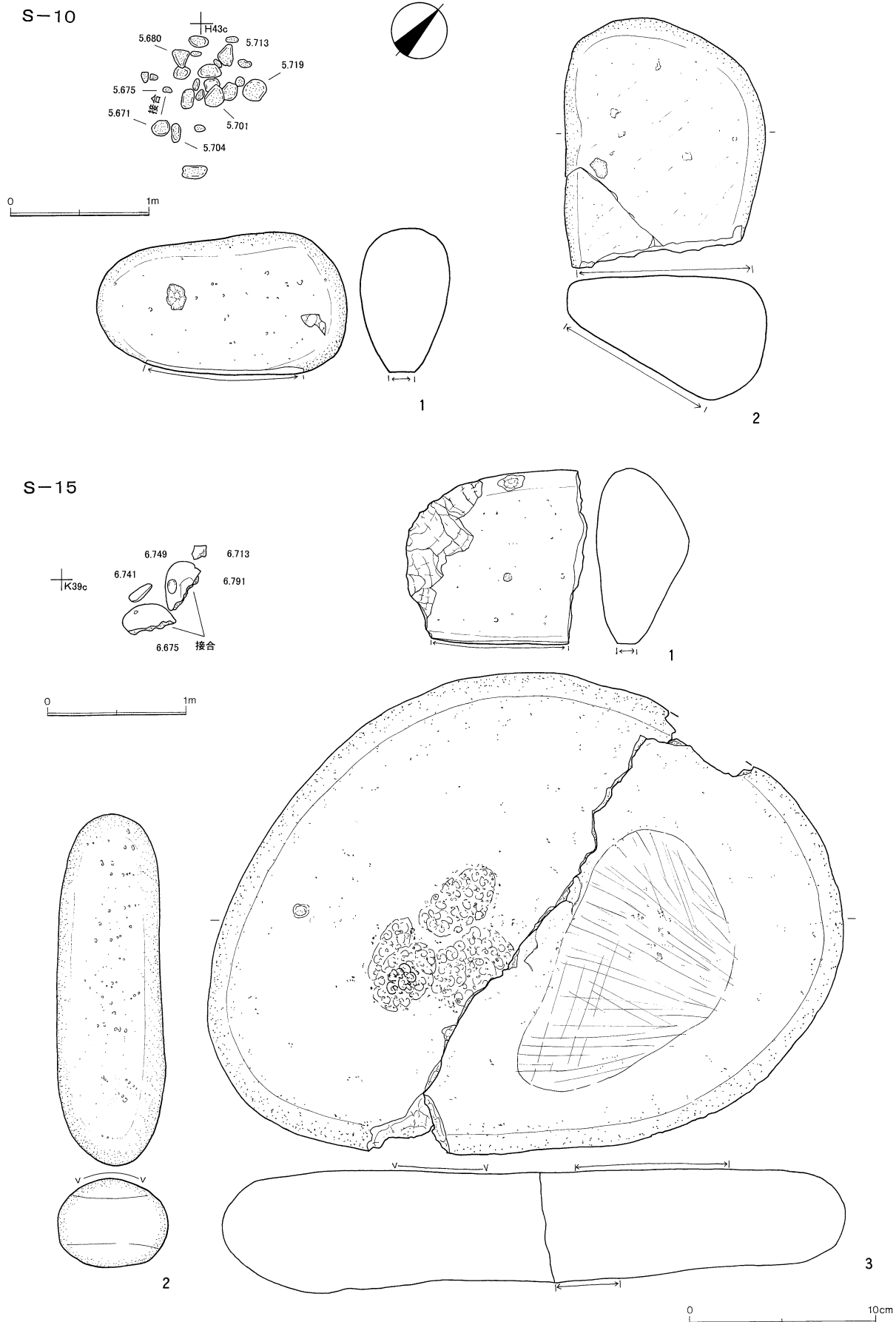


图V-3-9 S-7 出土遗物(2)

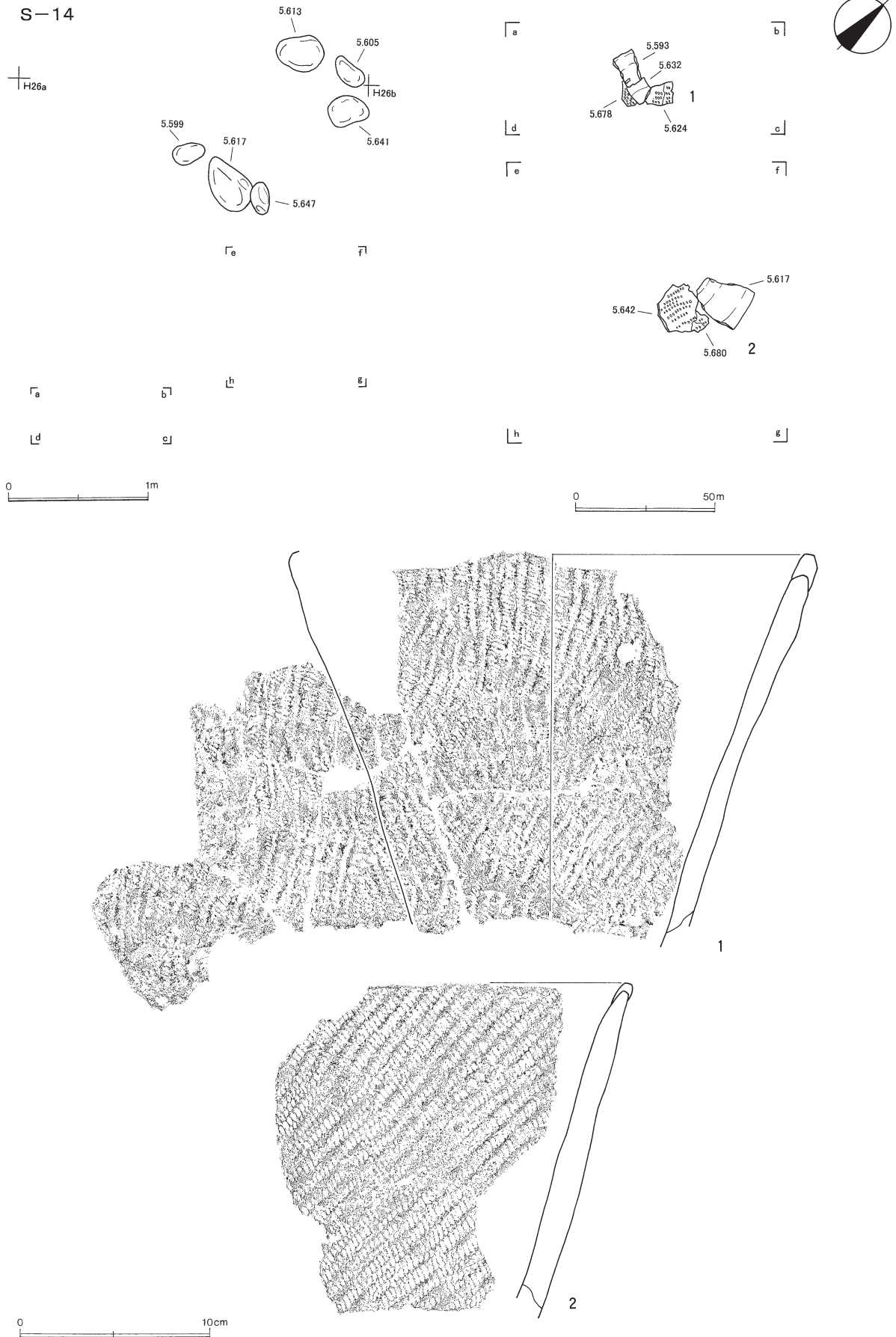




図V-3-10 S-8・9・11~13・18と出土遺物



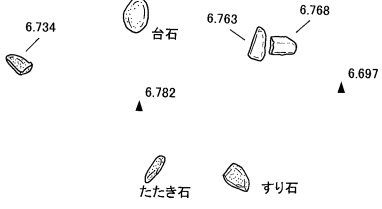
図V-3-11 S-10・15と出土遺物



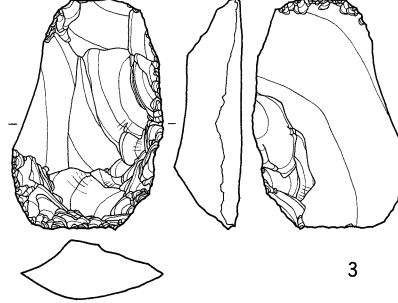
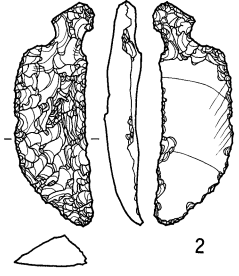
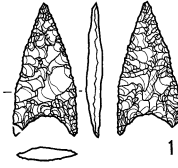
図V-3-12 S-14と出土遺物

S-16

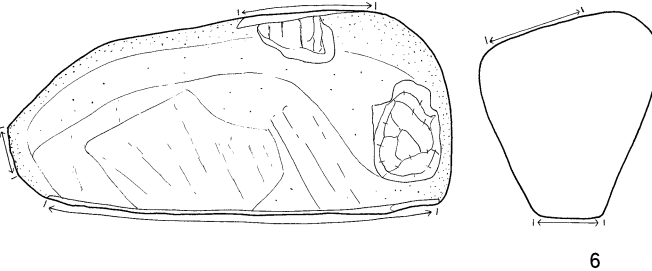
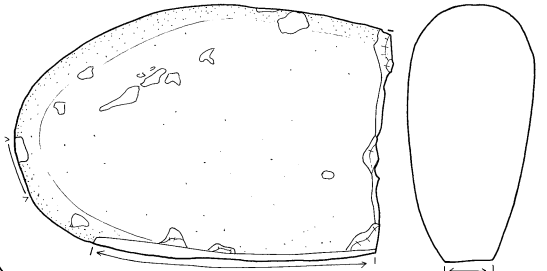
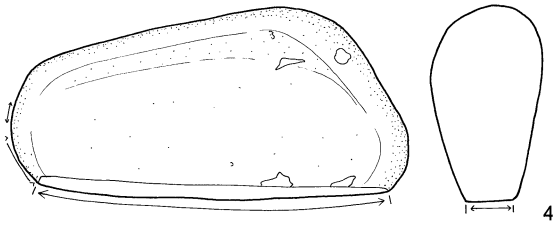
▲ 6.736 K38b



0 1m

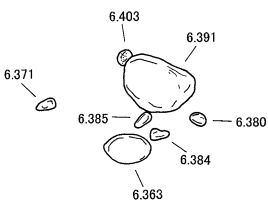


0 5cm

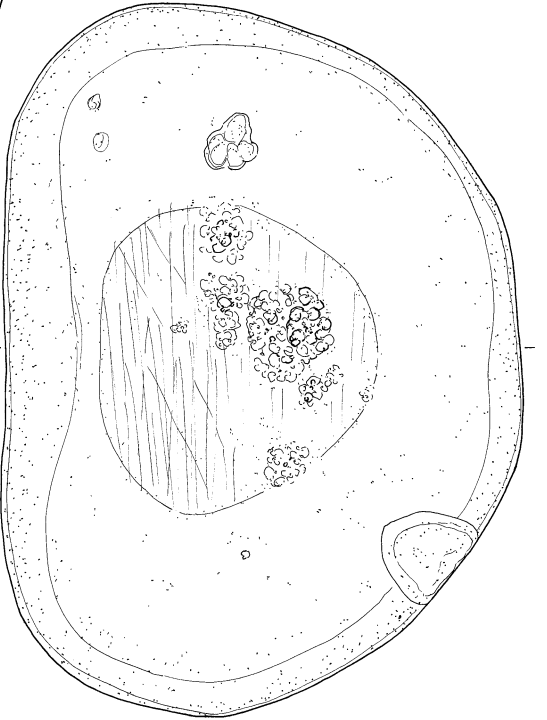
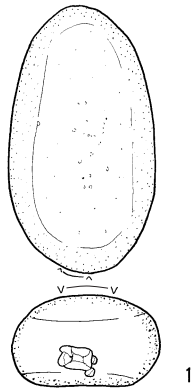


S-17

129c

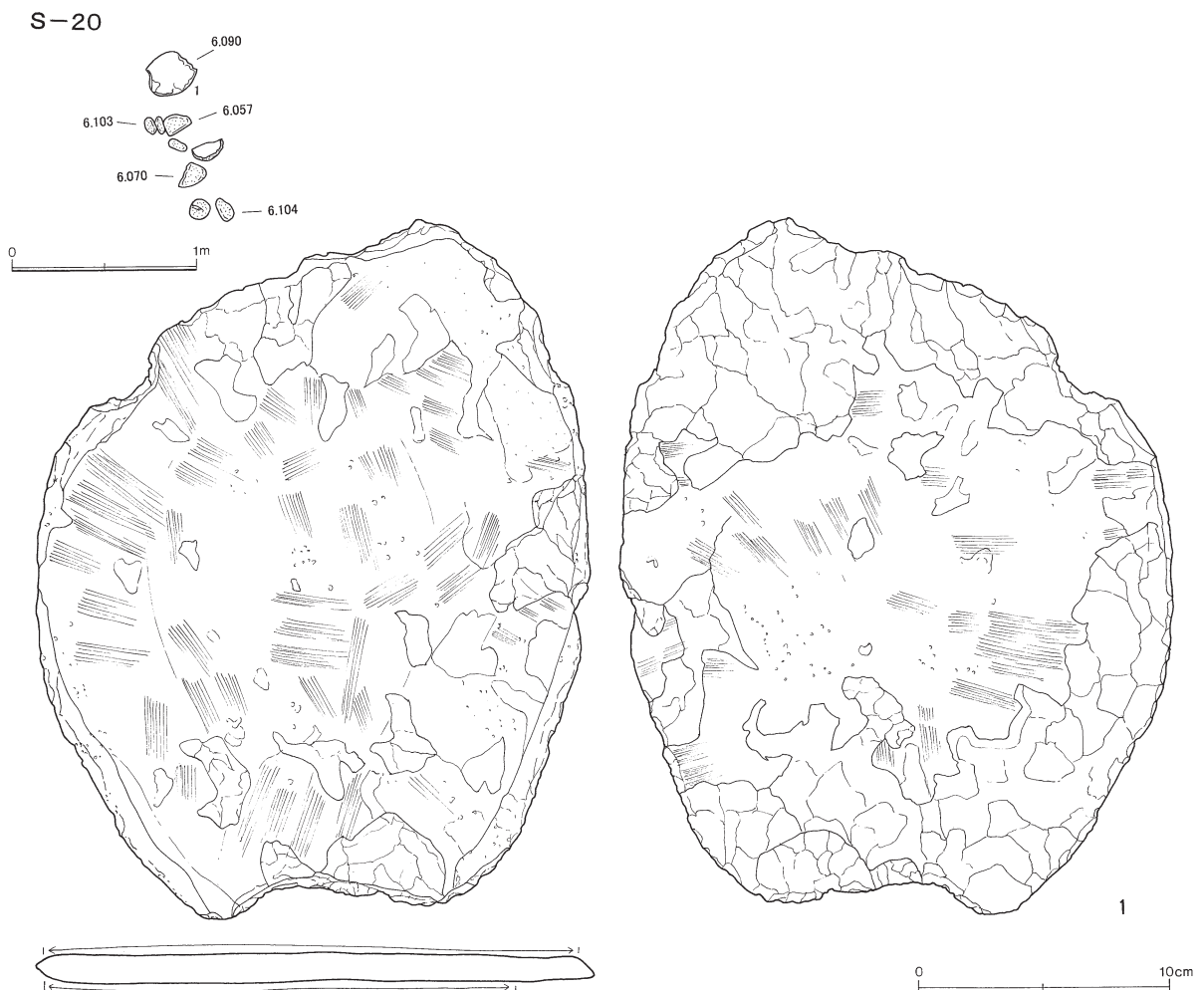
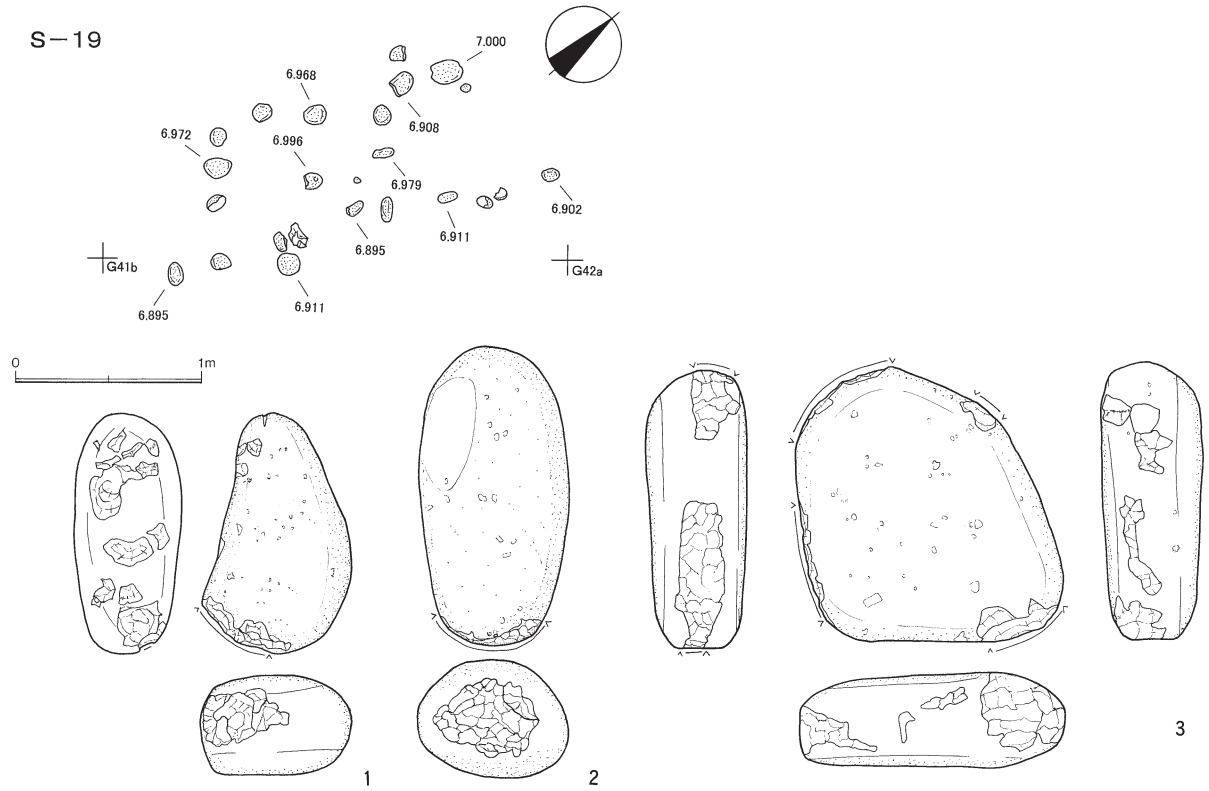


0 1m



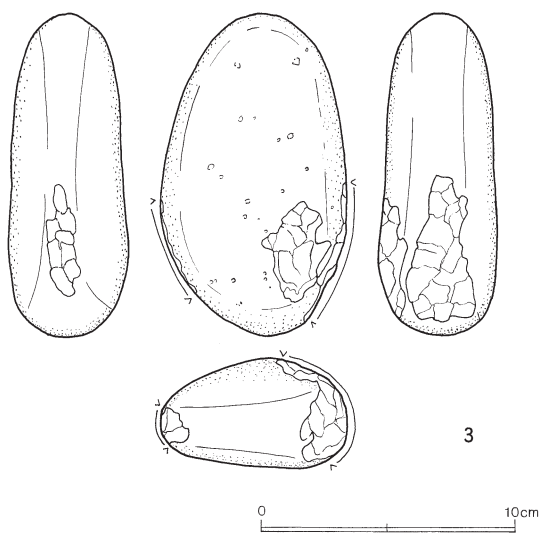
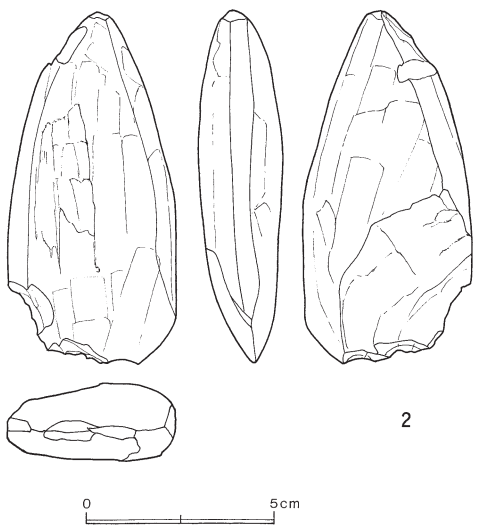
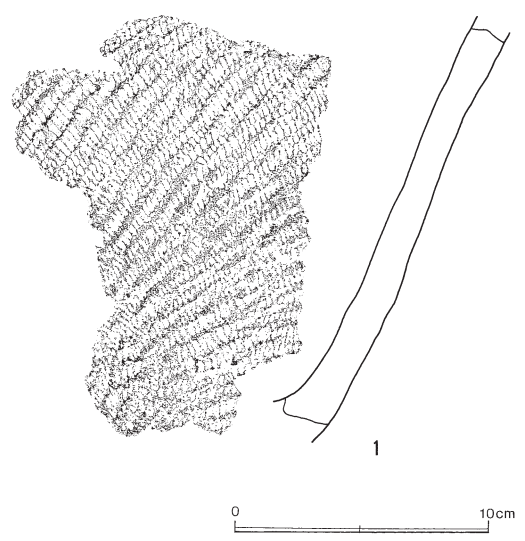
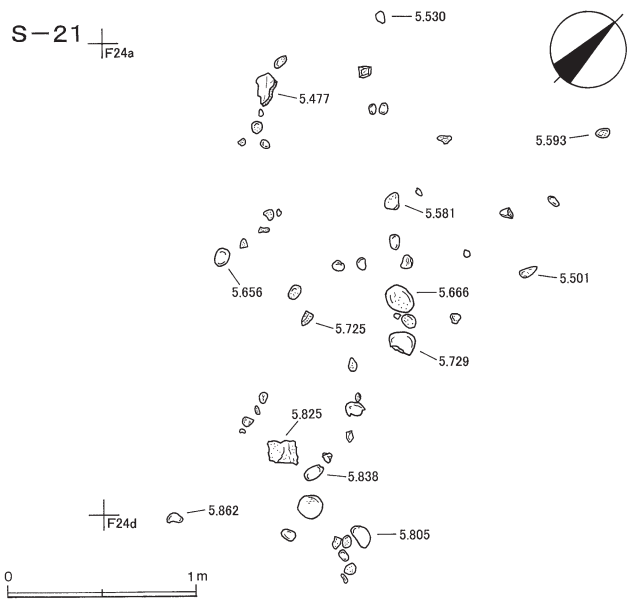
0 10cm

図V-3-13 S-16・17と出土遺物



図V-3-14 S-19・20と出土遺物

S-21  
F24a



図V-3-15 S-21と出土遺物

## (3) 剥片集中 (図V-3-16~25、図版22~28・46~51、表V-3・4・7・8)

## 概要

検出された剥片集中 (FC) は63ヵ所 (FC-9~FC-71) でいずれも縄文時代前期前半のものである。43ラインから北東側を除くほぼ全域に分布する。頁岩の集中が多く、黒曜石だけで構成される集中は少ない。黒曜石は肉眼観察ですべて赤井川産のものと判断できる。

頁岩だけで構成されるものはFC-9・11・15~17・19・20・22・24・26・27・30・32・34~36・38・44~46・48~51・53・56・59・61・62・64・66・69・71があって、全体の52%を占める。

黒曜石だけで構成されるものはFC-23・58・63・70の4ヵ所だけで全体の1%に満たない。これらのうち比較的大型の剥片を含む資料にFC-18・30・40・57がある。これらについては一部接合作業を行なったが、時間的な制約から図示には至っていない。

以下、図示した遺物について記載する。

## FC-10 (図V-3-16、図版20-5、表V-8)

**石器**：4点図示した。1は頁岩の縦長剥片を素材にし、腹背両面から調整が施された筥状を呈するもの。2・3は断面形が三角形を呈するすり石で、いずれも擦痕は顕著で擦り面の幅が約2.5cmを計る。4は半月状に近い礫片を素材にした石鋸と考えられるもの。短軸の左側縁部に軽微な加工を施し整形されている。刃部と思われる部分は円みを帯び、内湾する。素材は砂岩である (笠原)

## FC-17 (図V-3-17、図版46-2、表V-7)

**土器**：1は口縁部破片平縁のもの。口唇の断面は丸みを帯びている。地文は単節の斜行縄文が施されている。

## FC-20 (図V-3-18、図版47-1、表V-7)

**土器**：1は内面に縄文が施されている土器 (1a) とその胴部破片 (1b)。地文は単節の斜行縄文が施されている。口唇の断面は角形である。 (袖岡)

## FC-23 (図V-3-19、図版21-8、表V-8)

**石器**：すり石1点を図示した。石材は安山岩で、断面形が三角形を呈する。下端部に顕著な擦痕がある。

## FC-24 (図V-3-19、図版22-1、表V-8)

**石器**：石鏃1点、たたき石1点を図示した。1の石材は頁岩で三角形凹基形のもの。背面に素材面を残す。2の石材は安山岩で、扁平礫の短軸方向端部の一ヵ所に敲打痕がある。 (笠原)

## FC-27 (図V-3-19、図版47-3、表V-8)

**土器**：1は胴部破片。単節の斜行縄文地に押引文が施されている。 (袖岡)

## FC-29 (図V-3-19、図版22-3、表V-8)

**石器**：たたき石1点を図示した。1の石材は安山岩で、扁平礫の長軸方向端部の一ヵ所に敲打痕がある。

## FC-31 (図V-3-20、図版22-5、表V-8)

**石器**：石鏃1点、石製品1点、両面調整石器1点を図示した。1の石材は黒曜石で三角形凹基形のもの。器体の調整は丁寧であるが、左側縁部が右側縁より長いために偏りが見られる。2の石材も黒曜石で、短軸の両端に抉りが施されるもの。長軸の断面形は背面側に浅く外湾する。背面からの加工は入念に施されており、抉り部には摩滅痕が観察される。3は頁岩を素材にし、やや粗い加工に留まっている。腹面からの刃部調整は連続的に施されている。 (笠原)

**FC-33** (図V-3-20、図版48-3、表V-7)

**土器**：1は山形の頂部を持つ小波状口縁の土器。口唇の断面は丸～丸みを帯びる角形である。地文は単節の斜行縄文が施されている。(袖岡)

**FC-40** (図V-3-21、図版50-1、表V-8)

**石器**：3点図示した。いずれも頁岩を素材にした石槍である。1は基部を欠損する。全体の調整は入念で薄手に仕上げられており、側縁は鋭利に仕上げられている。2は完形品で、器体上部に最大幅があって断面の形態は半月状を呈する。基部と尖頭部の正裏両面の調整は入念に施され、尖頭部は薄手で鋭利に仕上げられている。(笠原)

**FC-43** (図V-3-22、図版49-1、表V-7)

**土器**：1は口縁部破片。口唇の断面は角形である。地文は太い縄による深い押圧によって節の大きな斜行縄文が施されている。内面には同じ原体によって縄文が横走している。2は口唇部に刺突文が施されているもの。緩やかな小波状の口縁。地文は単節の斜行縄文が施されている。

**FC-45** (図V-3-23、図版50-2、表V-7)

**土器**：1は縄線文が施されている波状口縁の大型のもの。口唇の断面は丸～丸みを帯びる角形である。地文は単節の斜行縄文が施されている。

**FC-56** (図V-3-24、図版51-1、表V-7)

**土器**：1bが遺構出土のもの、1a、1cが包含層から出土した同一個体の破片である。すべて胴部破片で、単節と見られる斜行縄文を施文後、ナデ調整が施されている。2条の沈線と竹管状の工具により斜めからの刺突文が縦位に施されている。

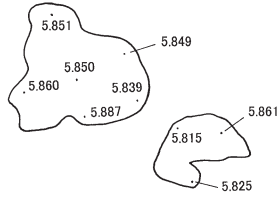
**FC-64** (図V-3-25、図版51-2、表V-7)

**土器**：1は山形の頂部を持つ小波状の口縁のもの。口唇の断面は丸～丸みを帯びる角形である。地文は単節の斜行縄文が施されている。(袖岡)



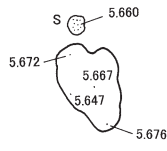
FC-9

H14a



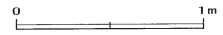
FC-11

H18b



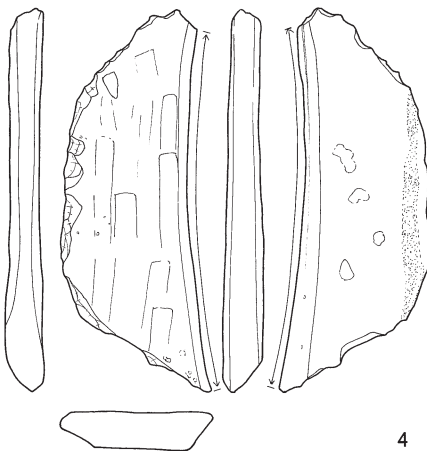
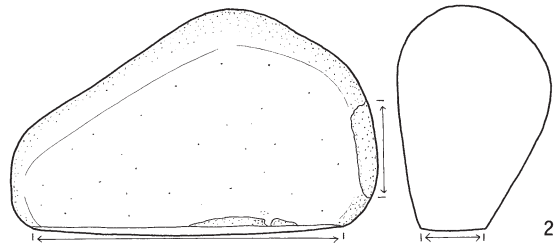
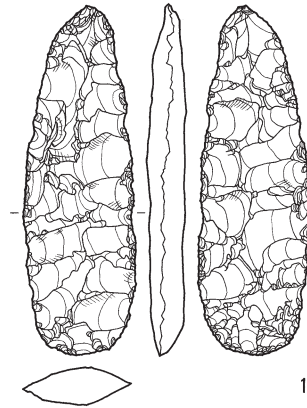
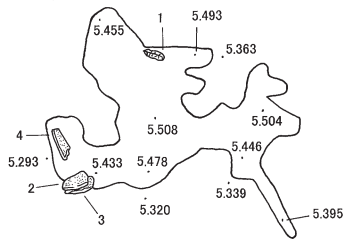
FC-12

H24c

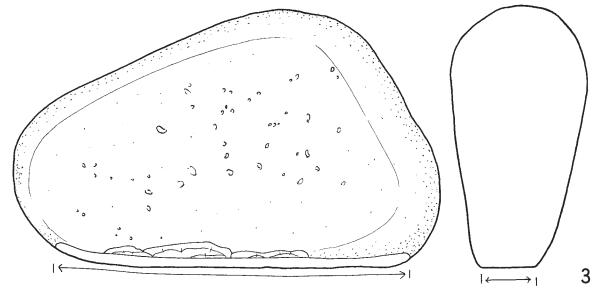


FC-10

H16b



4

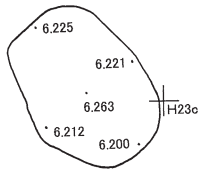


3

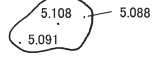


図 V - 3 - 16 FC - 9 ~ 12 と出土遺物

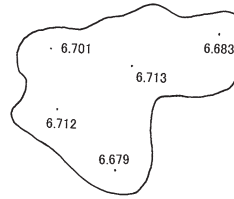
FC-13



FC-14



FC-15



E27a

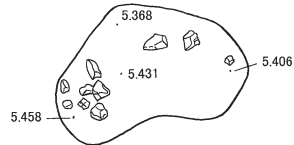


FC-16

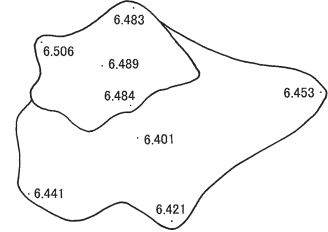


F26a

FC-18



FC-19



J39b



FC-17

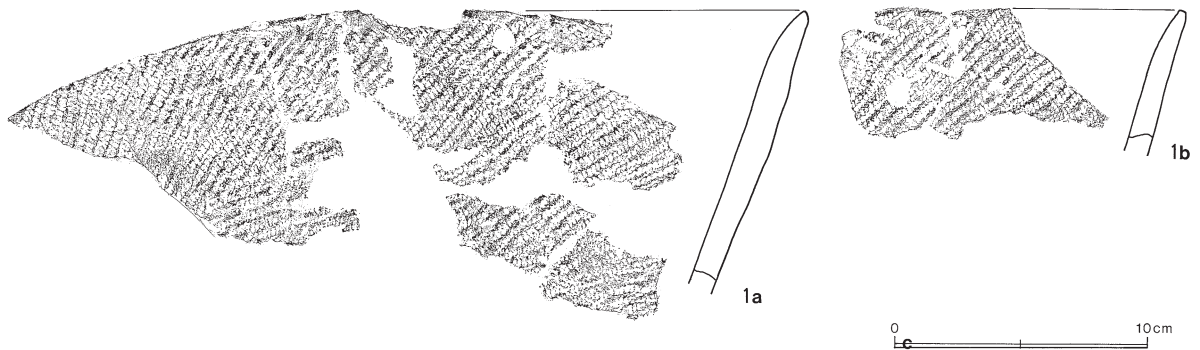
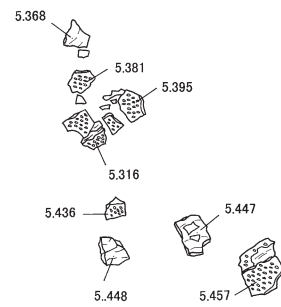
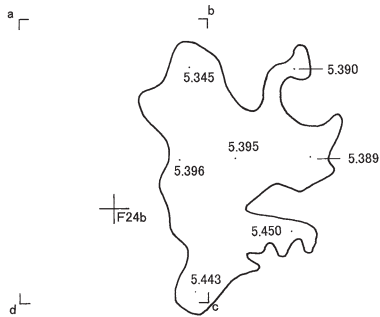
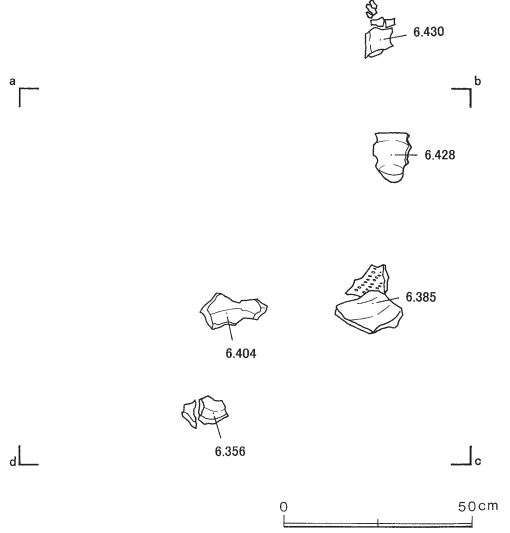
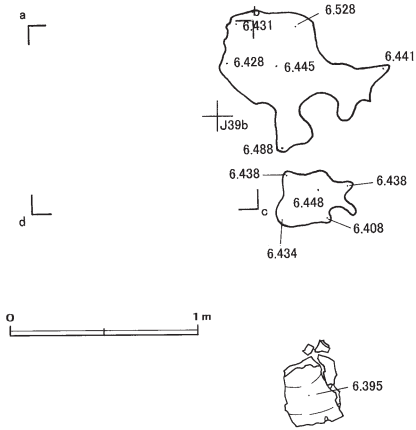
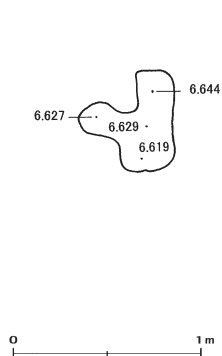


図 V - 3 - 17 FC-13~19と出土遺物

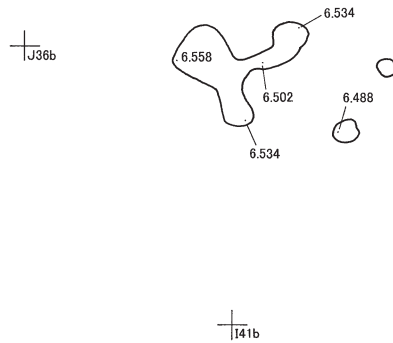
FC-20



FC-21



FC-22



FC-25

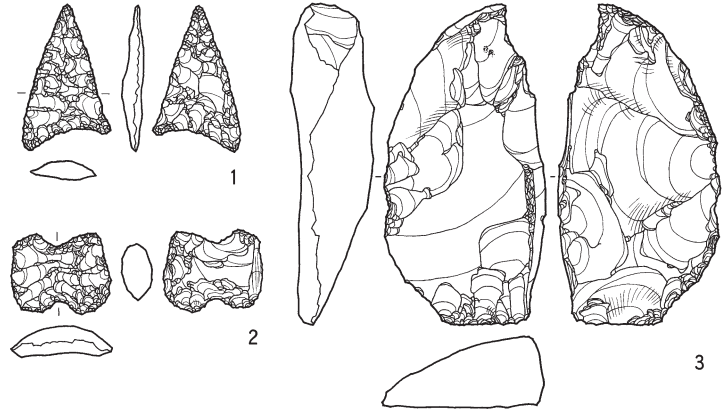


図 V - 3 - 18 FC-20~22・25と出土遺物

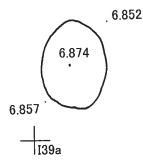


FC-31

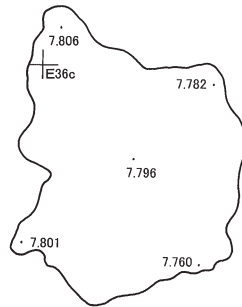
138c



FC-32



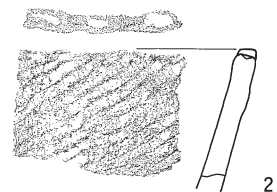
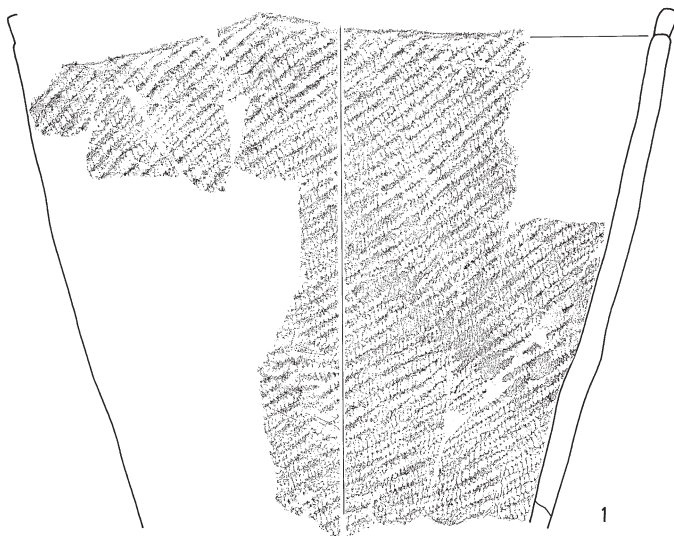
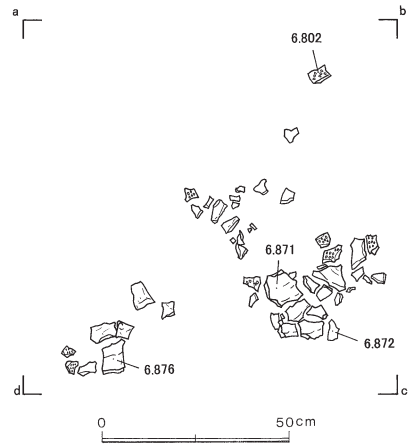
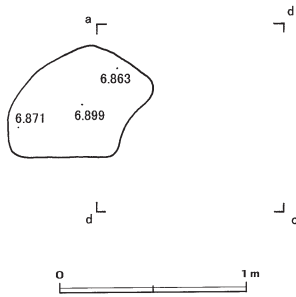
FC-34



0 5cm

FC-33

G40d



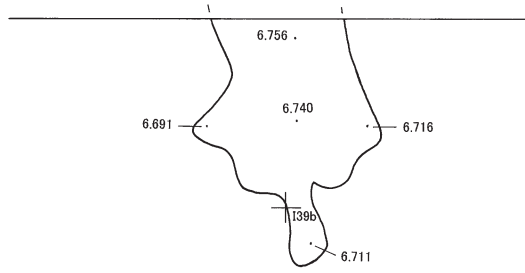
0 10cm

図V-3-20 FC-31~34と出土遺物

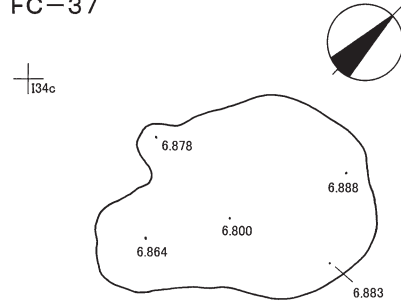
FC-35



FC-36



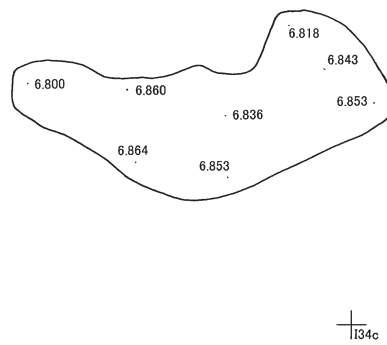
FC-37



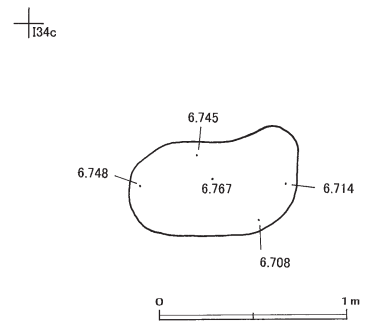
FC-38



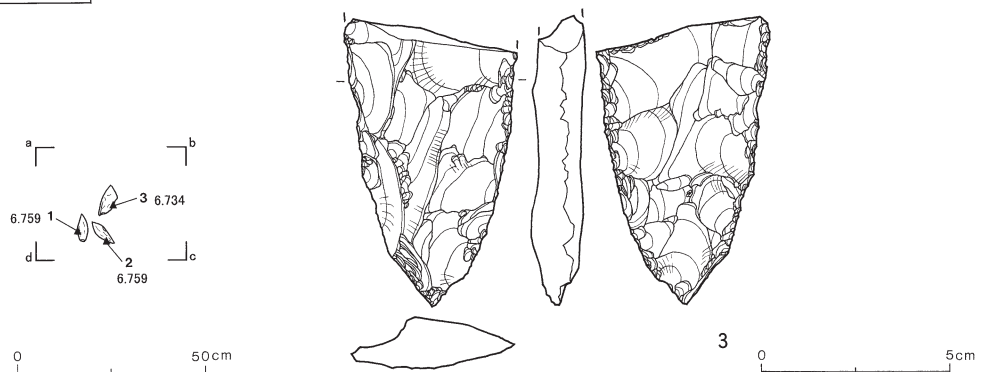
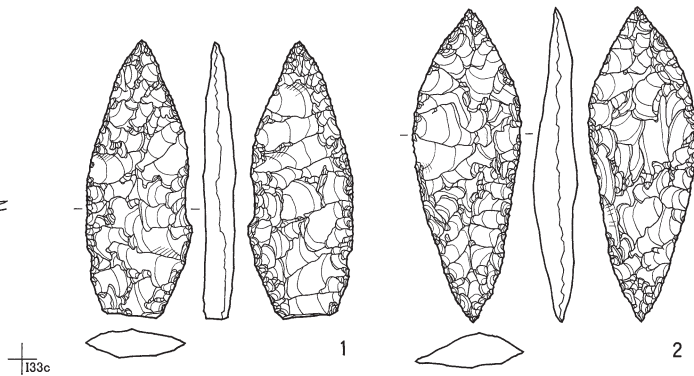
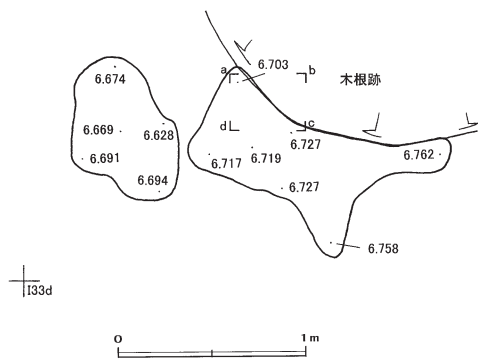
FC-39



FC-42

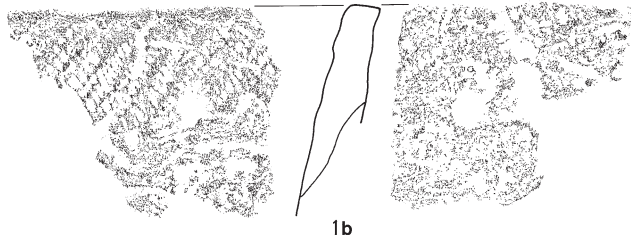
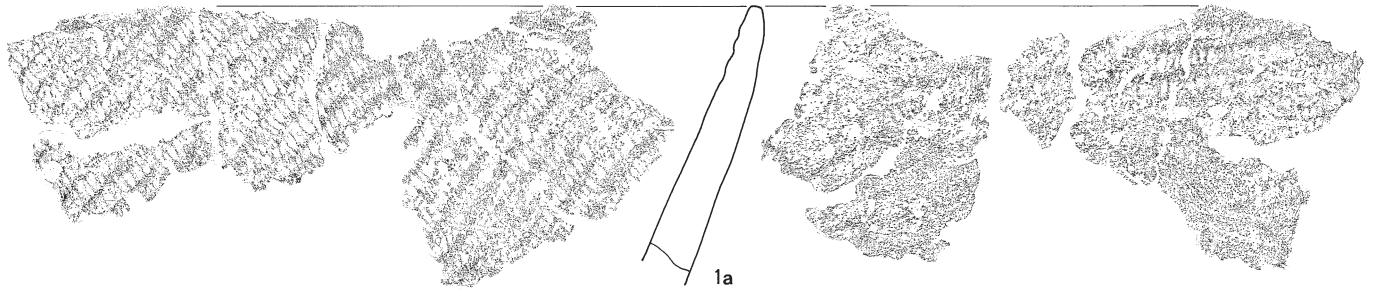
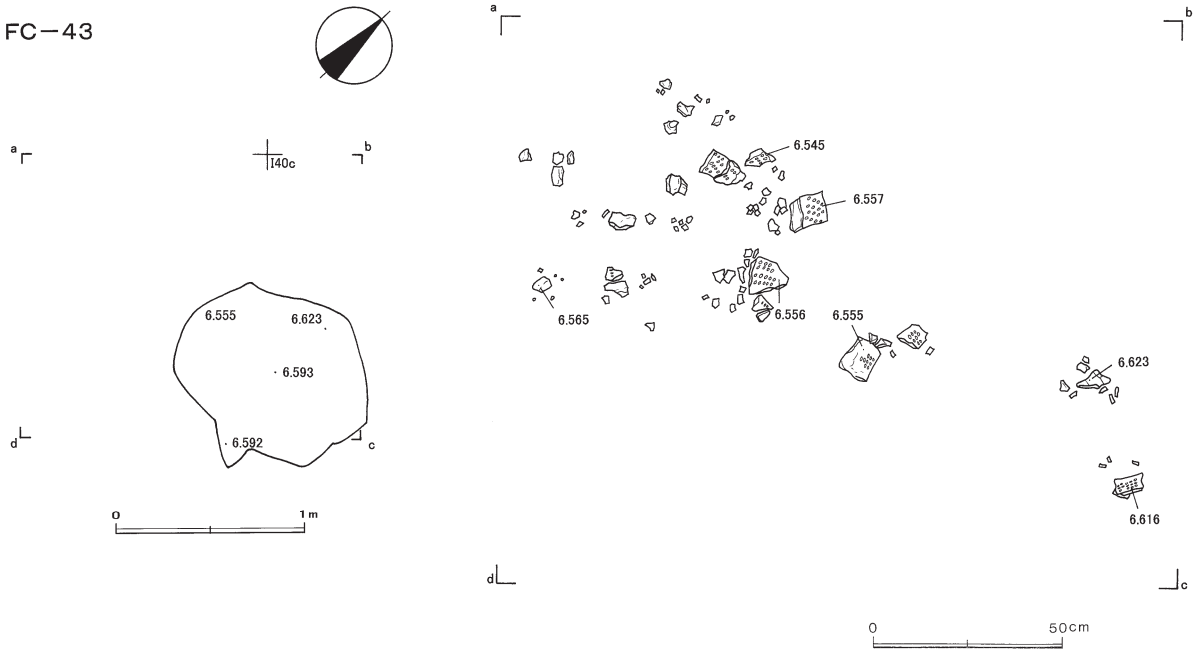


FC-40

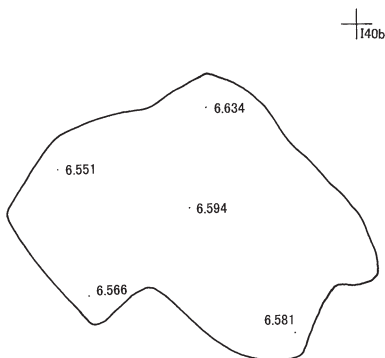


図V-3-21 FC-35~40・42と出土遺物

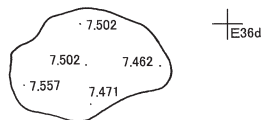
FC-43



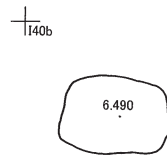
FC-41



FC-44

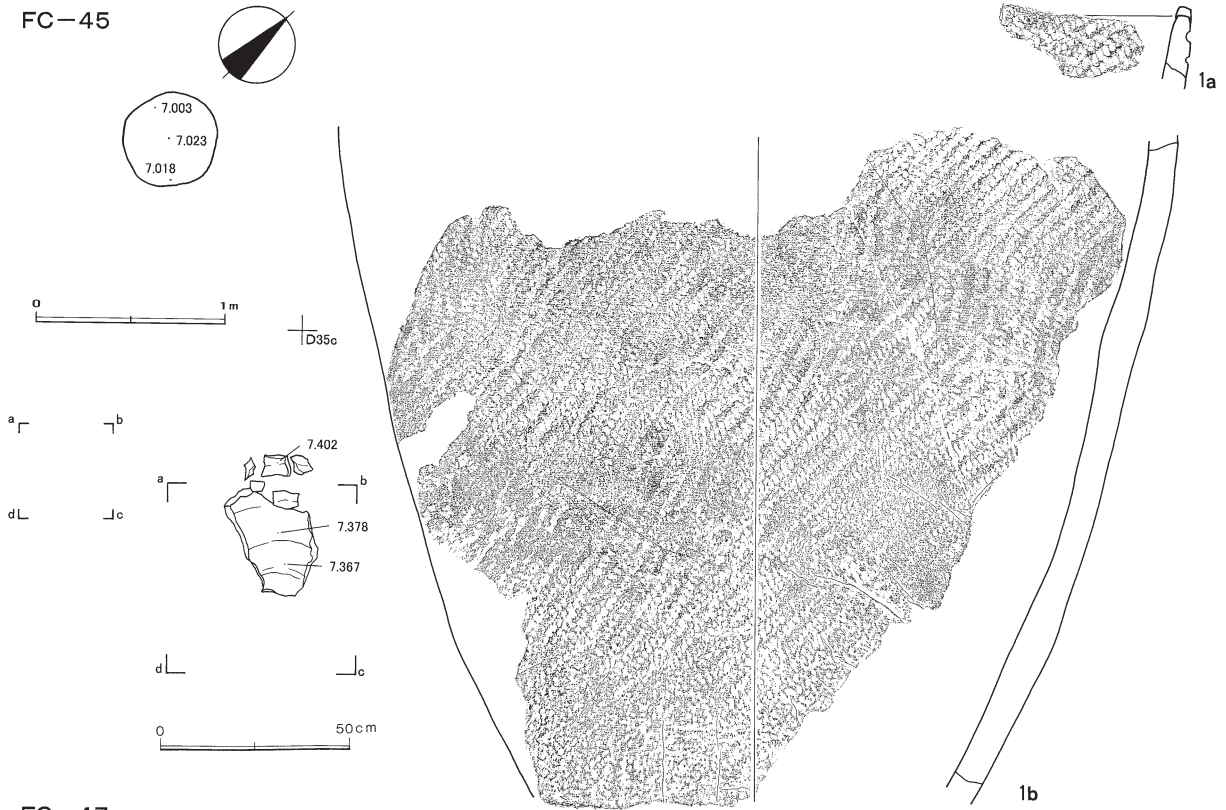


FC-46

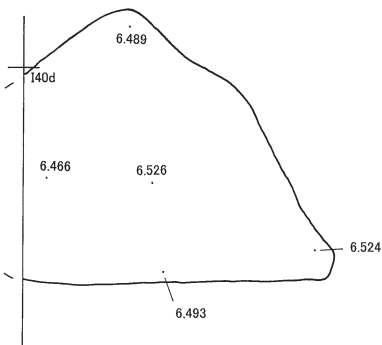


図V-3-22 FC-41・43・44・46と出土遺物

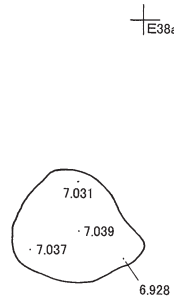
FC-45



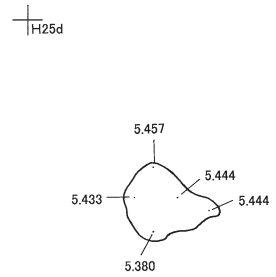
FC-47



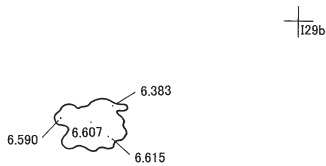
FC-48



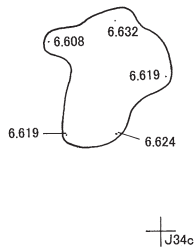
FC-49



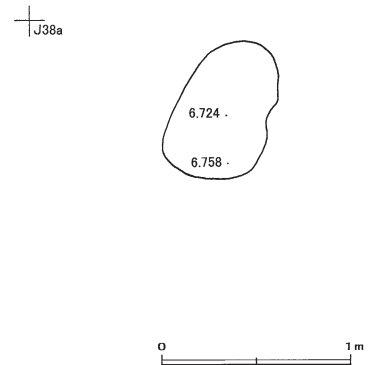
FC-50



FC-51



FC-52



図V-3-23 FC-45・47~52と出土遺物



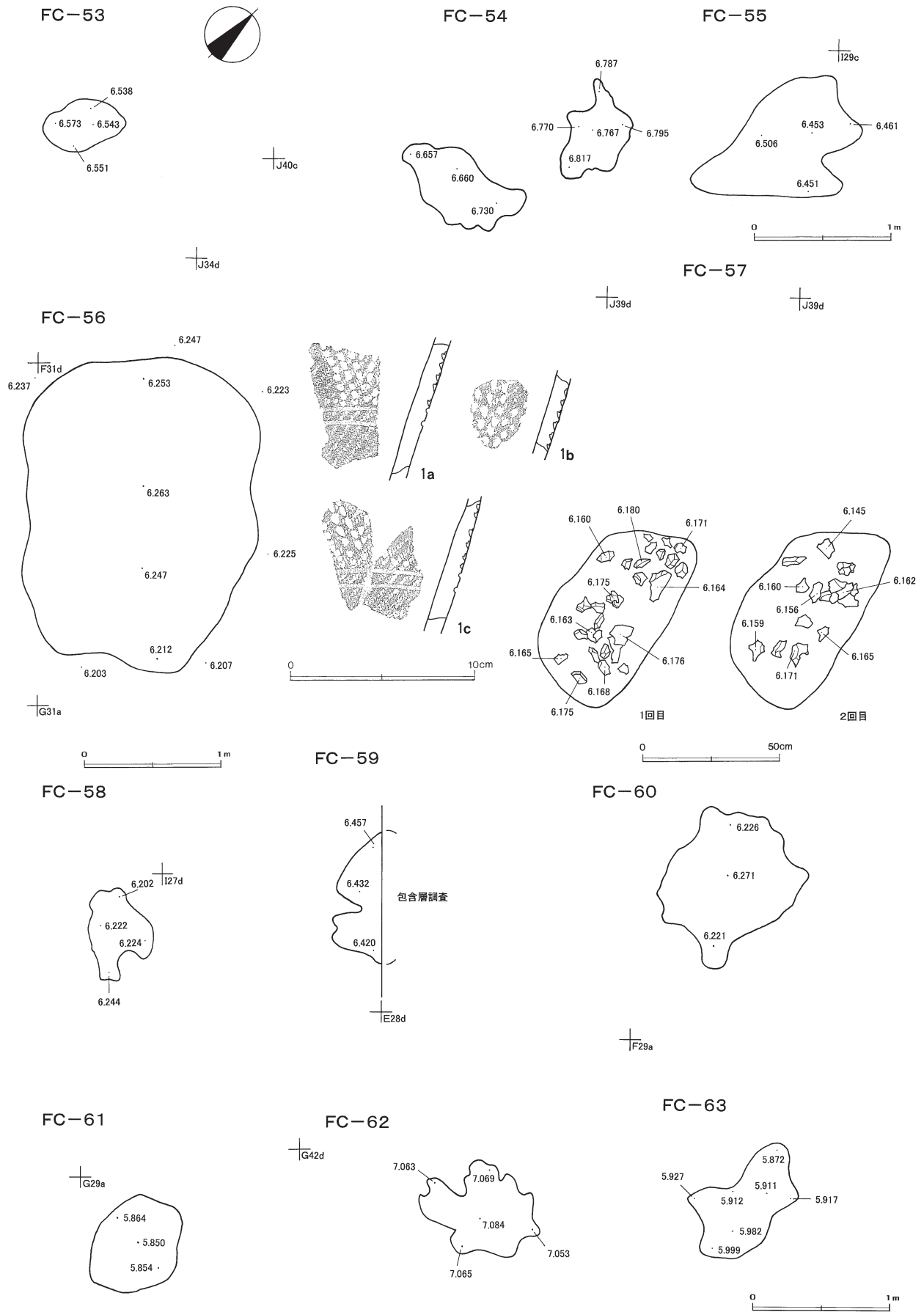
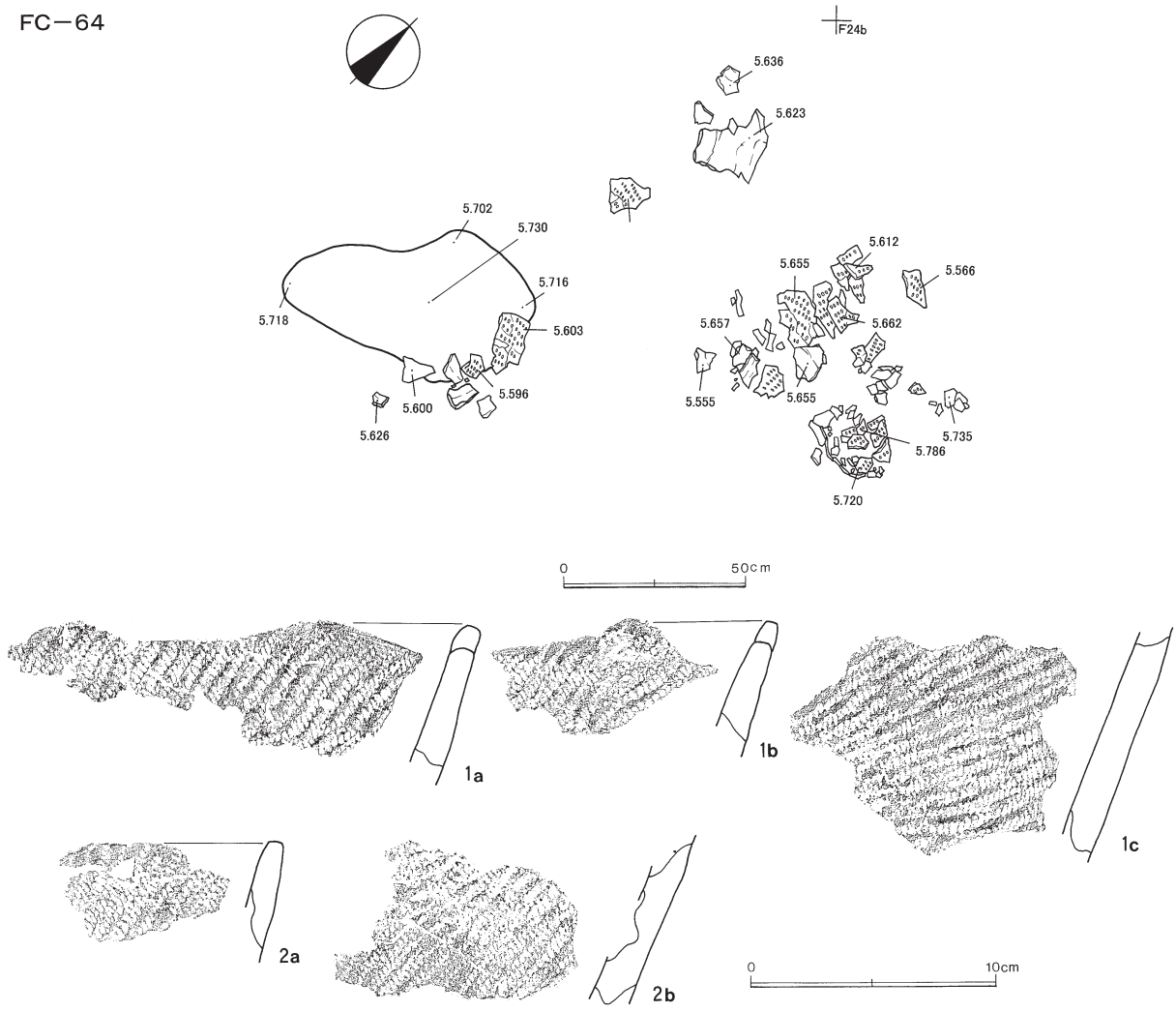
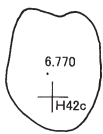


図 V - 3 - 24 FC - 53 ~ 63 と出土遺物

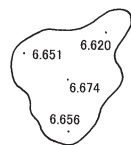
FC-64



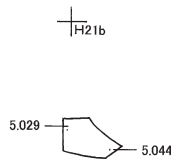
FC-65



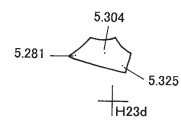
FC-66



FC-67



FC-68



FC-69

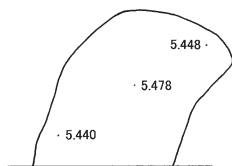
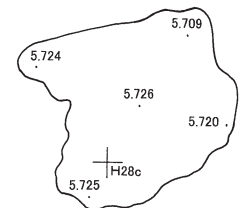


J41a

FC-70



FC-71



包含層調査



図 V-3-25 FC-64~71と出土遺物

## (4) 焼土 (図V-3-26~31、図版28~30・51・52、表V-3・4・7・8)

## 概要

焼土(F)は平成17年度調査では60か所検出した。平成16年度の調査と合わせると64か所である。これらは縄文時代前期前半の遺構である。

焼土の分布を見ていくと、①調査区南側の旧河道に面した付近、②東側の旧河道に面した付近、標高6.8mのところを最も濃く、ついで③西側に向かって低くなるグリットラインGより北、24~30の地形が低くなる場所に多く見られる。④調査区北側の小高い丘は3か所である。以下、この焼土を検出した区域を①~④で示す。

検出した層位でみていくと、①ではIV層の上位からV層を50cmほど掘り下げたところまで満遍なくみられる。②ではIV層の上位からV層上面にかけて検出した。③では、IV層下位からの遺構である。④では南に面する斜面上にあり、IV層中位~V層にかけて検出した。

調査は、包含層を掘り下げたときに暗赤褐色~暗褐色土の広がりを検出すると、周辺を精査した後、平面を記録、半截し土層断面を記録した。残り半分の焼土はフローテーションサンプルとして取り上げ、浮遊物と残渣を採取した(表V-12)。この作業で得られたF-9、F-24の焼骨片は動物遺存体同定により大形の陸獣、魚類のアイナメ属などという結果が出ている(VI章1節)。また、焼土から得られた炭化物片を試料に放射性炭素年代を測定した結果、以下の結果が得られている(VI章2節)。

## ①調査区南側の旧河道に面したところ

F-8 標高5.8m IV層1回目検出5,350±40 (yrBP)

F-23 標高6.5m V層3回目検出5,530±40 (yrBP)

F-46 標高5.7m V層3回目検出5,390±40 (yrBP)

F-61 標高4.6m V層3回目検出5,510±40 (yrBP)

## ②調査区東側で旧河道に面したところ

F-46 標高6.7m V層3回目検出5,390±40 (yrBP)

## ③西側の地形が低くなる場所

F-49 標高5.6m V層10回目検出5,370±40 (yrBP)

なお、平成16年度の調査ではIV層から検出した土器のなかから得られた炭化クルミ殻を試料にして測定したものは5,415±30 (yr±1σ)と、その下位から出土した炭化クルミ殻では5,345±30 (yr±1σ)、5,340±30 (yr±1σ)という結果が得られている。

以下、図示した遺物について記載する。

(袖岡)

## F-11 (図V-2-26、図版51-3、表V-7)

土器：1は口縁部破片。単節の斜行縄文が施されている。口唇部は内面が摩滅しており、形は不明瞭である。

(袖岡)

## F-14 (図V-3-27、図版51-4、表V-8)

石器：たたき石1点を図示した。石材は安山岩で、扁平な円礫の周縁端部に軽微な敲打痕が認められる。

(笠原)

## F-18 (図V-3-27、図版52-1、表V-7)

土器：1は底部。地文は単節の縄文が横走するもの。底部はやや丸みを持つ。

## F-23 (図V-3-28、図版52-3、表V-7)

土器：1は底部に近い胴部破片。尖底と考えられる。地文は単節の斜行縄文が施されている。

(袖岡)

F-26 (図V-3-28、図版52-2、表V-7)

**土器**：1は尖底土器の底部。単節の縄文地に押引文が施されている。(袖岡)

F-27 (図V-3-29、図版52-6、表V-8)

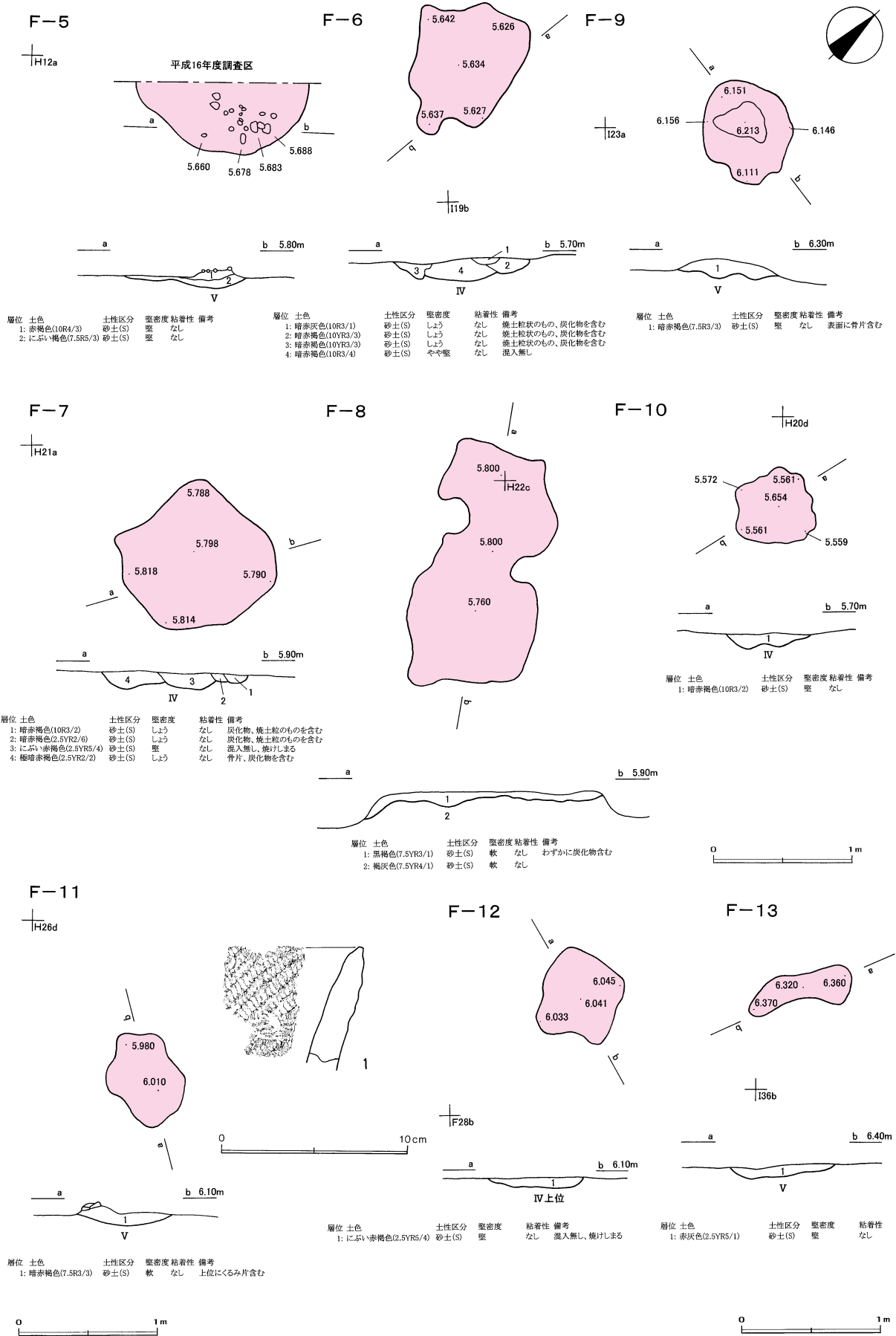
**石器**：つまみ付ナイフ1点、石斧2点を図示した。1の石材は頁岩で、ほぼ長軸方向の線につまみ部が作られている。背面右側縁の調整は急角度で、左側縁からは連続的な縁辺加工が先端部にかけて施されている。2の石材は片岩で基部の加工はやや粗い。刃縁には縦方向の線状痕が両面に観察され、両刃である。3の石材は緑色泥岩で、基端部をわずかに欠損する。全体の研磨は入念で、とりわけ刃部においては左上方向からの線状痕が両面に観察される。両刃である。

F-37 (図V-3-30、図版52-5、表V-8)

**石器**：石鏃1点を図示した。1の石材は頁岩で三角形凹基形のもの。全体的に薄くやや平坦で、主に周縁加工で整形されている。先端部をわずかに欠損する。(笠原)

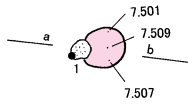
F-41 (図V-3-31、図版52-4、表V-7)

**土器**：1は胴部破片。単節の斜行縄文が施されているもの。(袖岡)

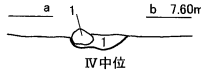


図V-3-26 F-5~13と出土遺物

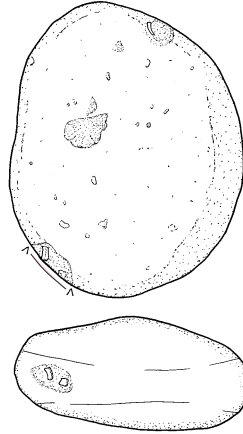
F-14



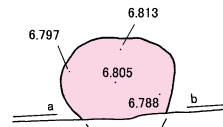
F36c



層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(5YR3/6) 砂土(S) しましよ なし 混入無し

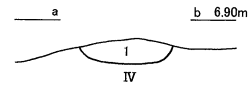


F-15



包含層調査

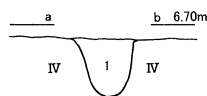
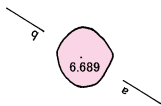
J39a



層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(2.5YR3/2) 砂土(S) 堅 なし 礫の混入無し

F-16

I39c

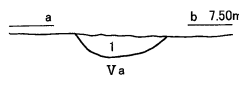


層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: にぶい赤(7.5R4/4) 砂土(S) 軟 なし 炭化材、くろみ片含む

F-17

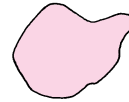


D35d

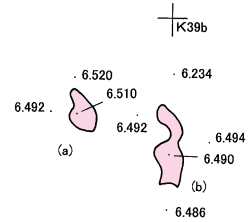


層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 赤褐色(1.25YR4/6) 砂土(S) やや軟 なし 礫の混入無し

F-20

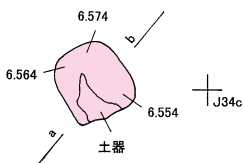


F-21

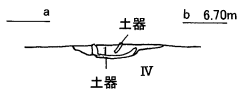


J26a

F-18



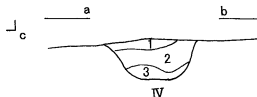
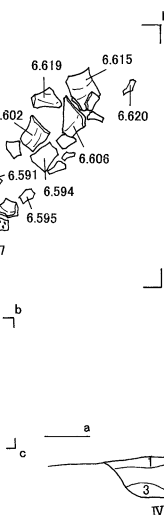
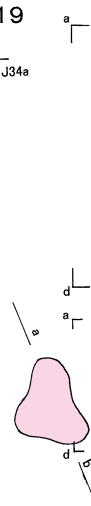
J34c



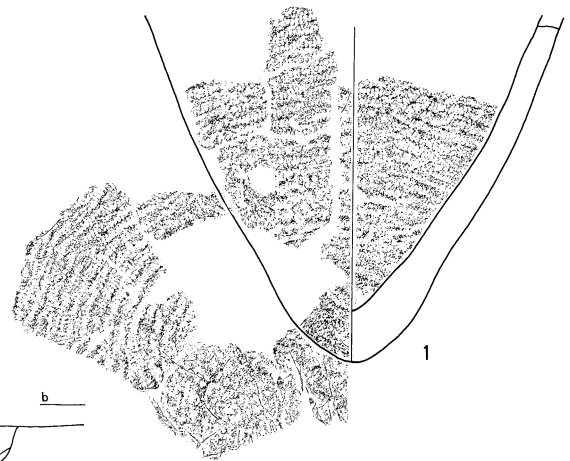
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 明赤褐色(5YR5/6) 砂土(S) すこぶるしよなし

F-19

J34a



層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 明赤褐色(5YR5/6) 砂土(S) すこぶるしよなし 炭化物を少量含む  
 2: 赤褐色(5YR5/8) 砂土(S) 堅 なし  
 3: 褐色(5YR6/6) 砂土(S) すこぶるしよなし

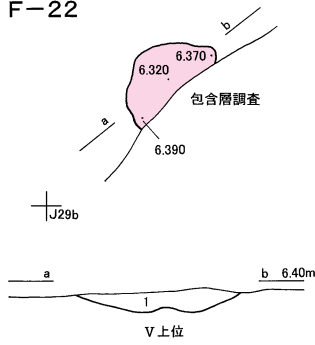


0 10cm

0 1m

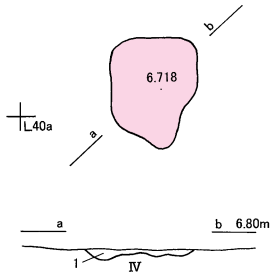
図V-3-27 F-14~21と出土遺物

F-22



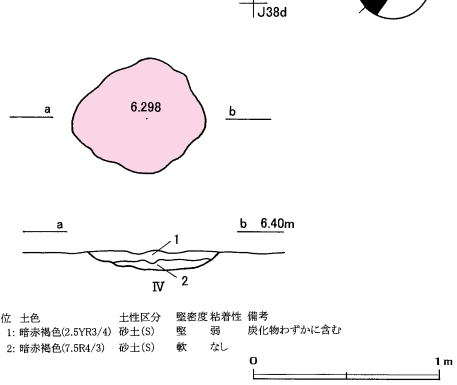
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性  
 1: 暗赤褐色(2.5YR3/6) 砂土(S) すこぶるしようなし  
 備考 炭化物をわずかに含む、礫の混入無し

F-24



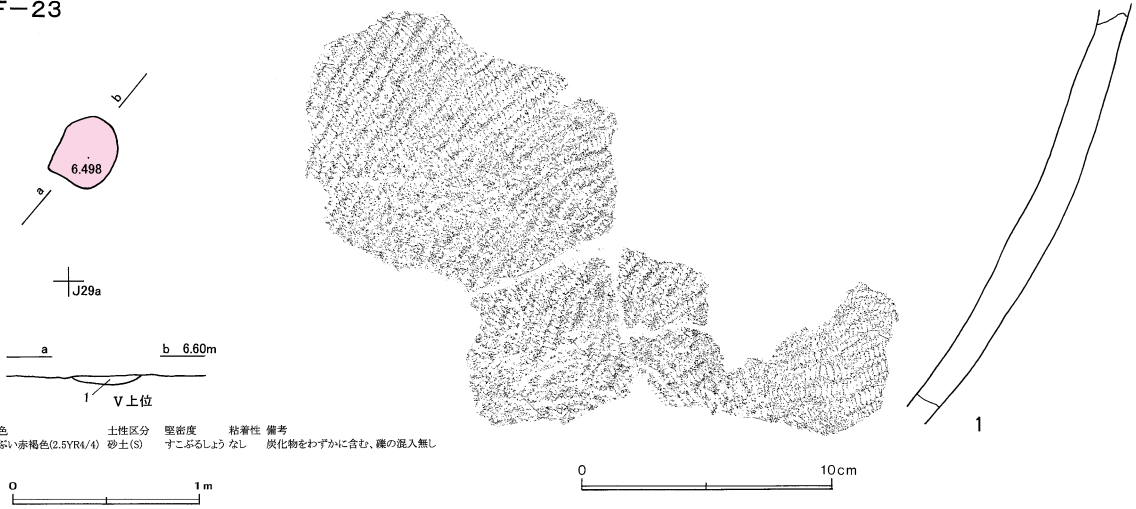
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(2.5YR3/3) 砂土(S) 堅 なし

F-25



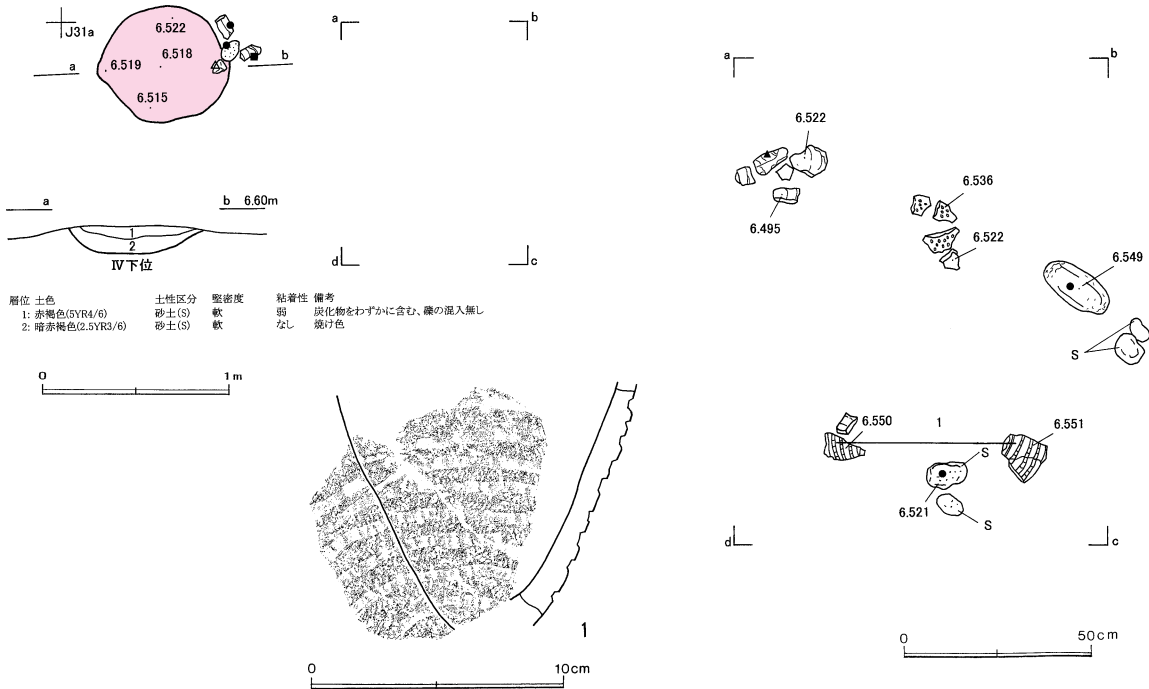
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(2.5YR3/4) 砂土(S) 堅 弱 炭化物をわずかに含む  
 2: 暗赤褐色(7.5R4/3) 砂土(S) 軟 なし

F-23



層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: にがい赤褐色(2.5YR4/4) 砂土(S) すこぶるしようなし 炭化物をわずかに含む、礫の混入無し

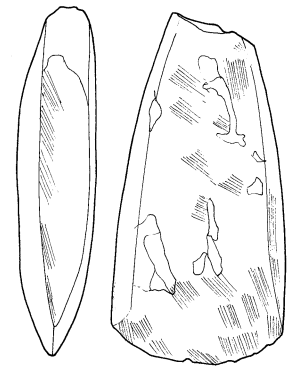
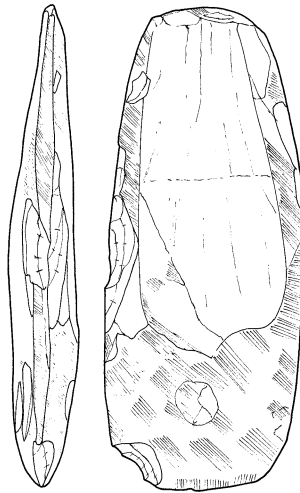
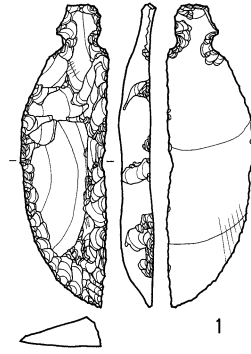
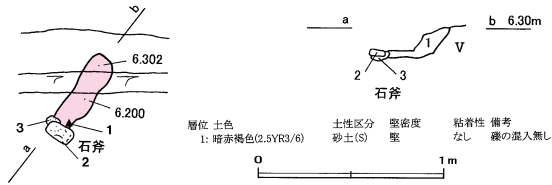
F-26



層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 赤褐色(5YR4/6) 砂土(S) 軟 炭化物をわずかに含む、礫の混入無し  
 2: 暗赤褐色(2.5YR3/6) 砂土(S) 軟 なし 焼け色

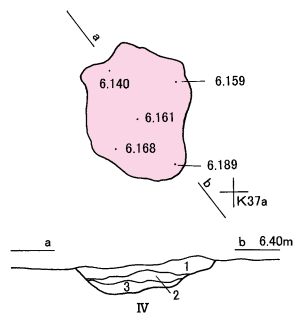
図V-3-28 F-22~26と出土遺物

F-27



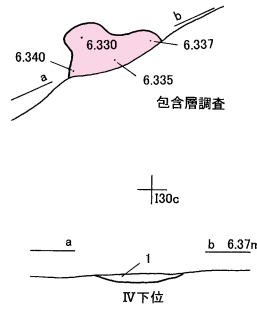
0 1m

F-28



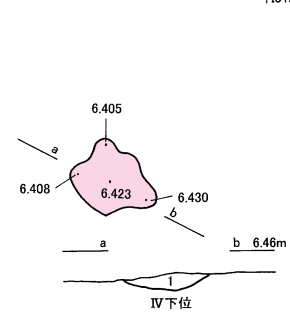
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(2.5YR3/4) 砂土(S) 堅 なし 炭化物わずかに含む  
 2: 暗赤褐色(5YR5/4) 砂土(S) しよう なし  
 3: 暗赤褐色(10R5/2) 砂土(S) しよう なし

F-29



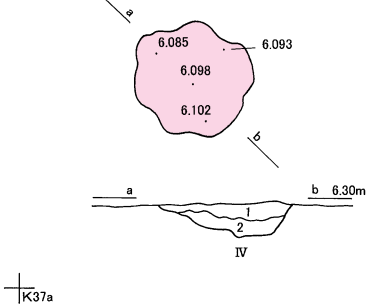
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 赤灰色(2.5YR4/2) 砂土(S) しよう なし 炭化物少量混、礫無し

F-30



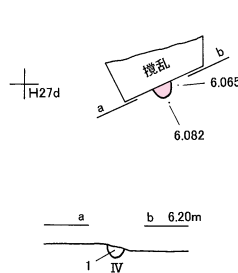
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 赤灰色(2.5YR4/3) 砂土(S) しよう なし 炭化物少量混、礫無し

F-31



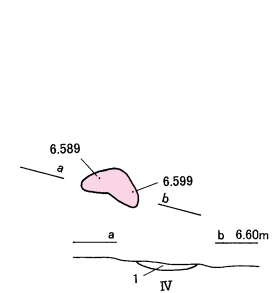
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(5YR5/4) 砂土(S) 堅 なし  
 2: 暗赤褐色(10R5/2) 砂土(S) しよう なし

F-32



層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 赤色(10R5/8) 砂土(S) すこぶるしよう なし 灰土では無いと推測、赤色の顔料?

F-33

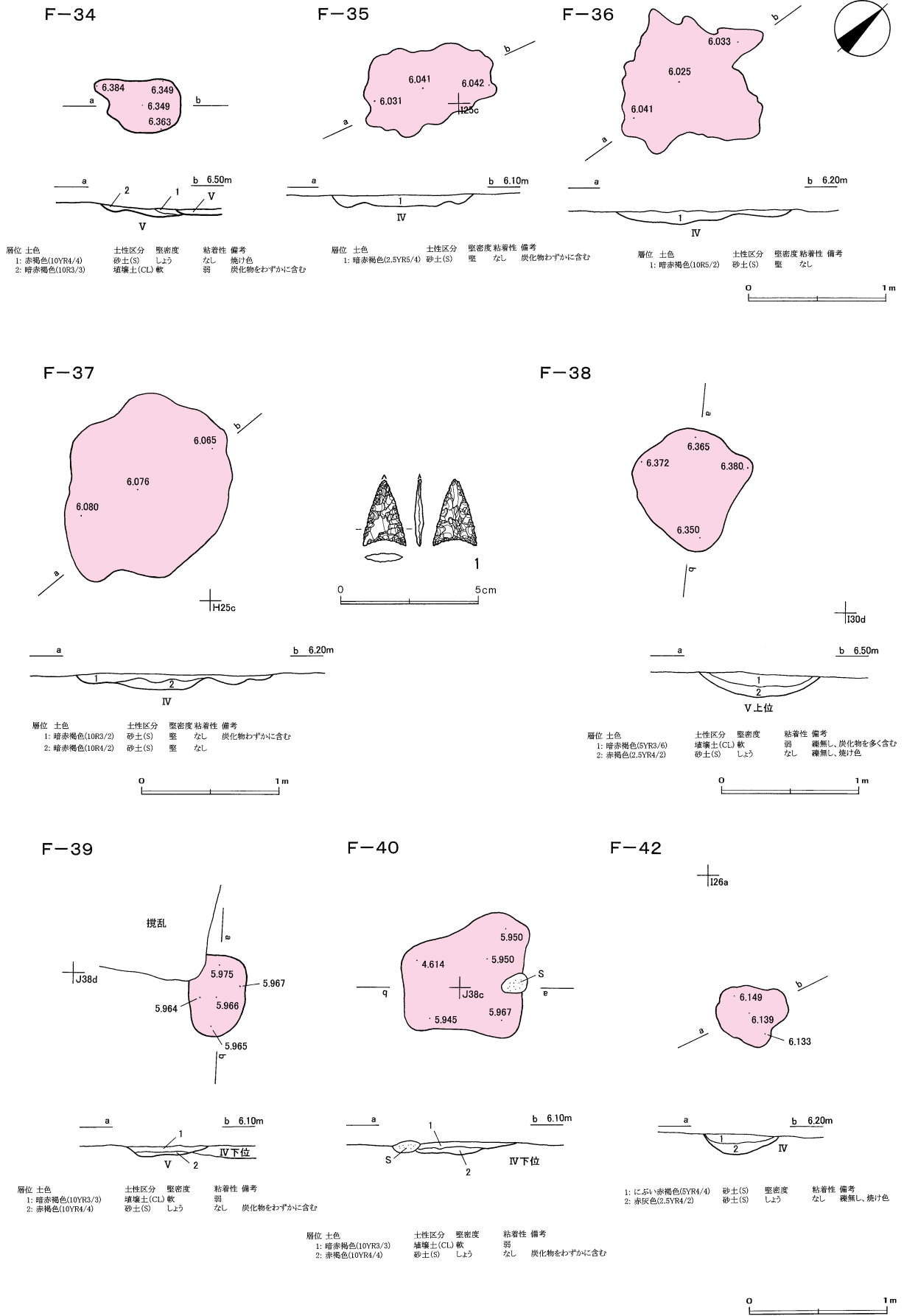


層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 明赤褐色(5YR5/6) 砂土(S) すこぶるしよう なし

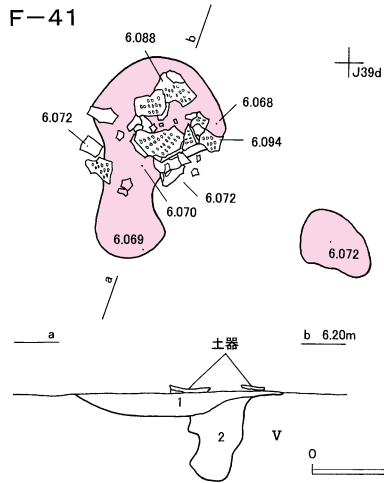
0 1m

図V-3-29 F-27~33と出土遺物

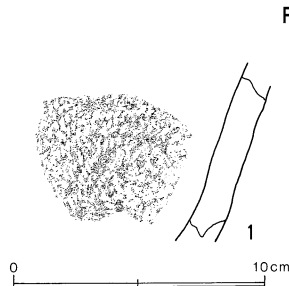




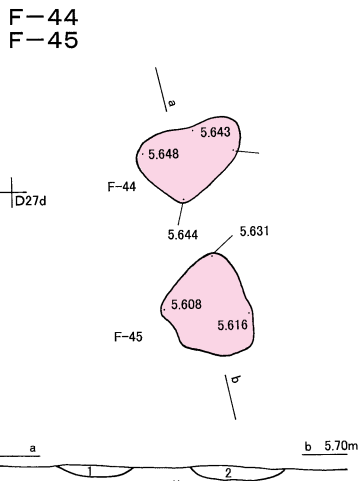
図V-3-30 F-34~40・42と出土遺物



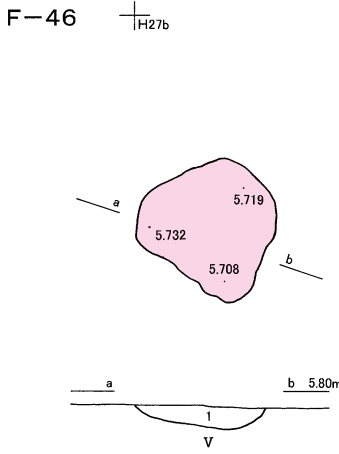
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 赤褐色(10YR4/3) 砂土(S) しょう なし 礫の混入無し、焼土  
 2: 暗赤褐色(10YR2/6) 砂土(S) しょう なし 礫の混入無し、焼土



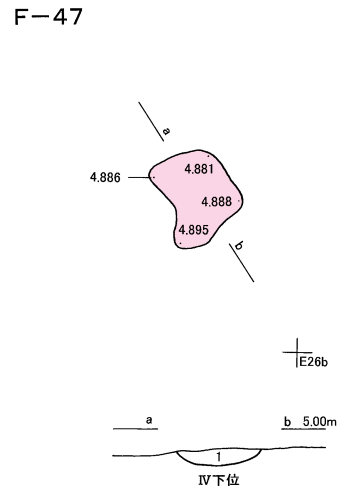
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(2.5YR3/1) 壤壤土(CL) しょう なし 老化物を含む  
 2: にぶい赤褐色(2.5YR4/3) 砂土(S) すこぶるしょう なし 混入無し、焼け色



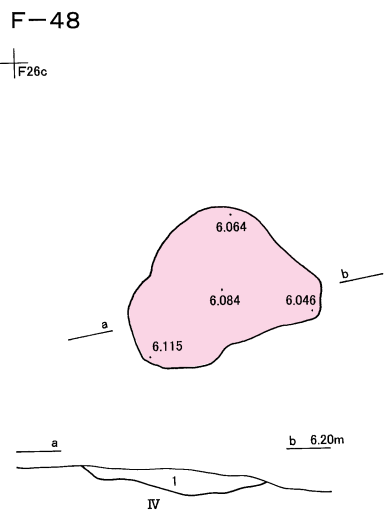
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 赤褐色(10YR4/3) 砂土(S) すこぶるしょう なし 混入無し、焼け色  
 層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 赤褐色(10YR4/4) 砂土(S) すこぶるしょう なし 混入無し、焼け色



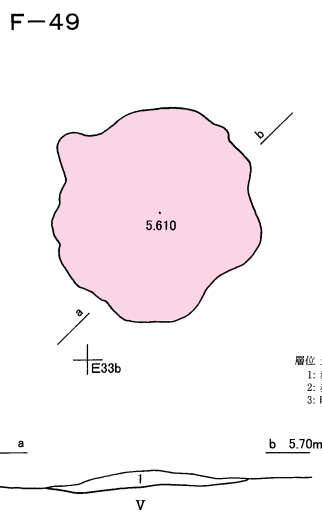
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 黒褐色(10YR3/1と10YR4/4の斑状) 砂土(S) しょう なし  
 備考 くるみの炭化物を多く含む、礫の混入無し



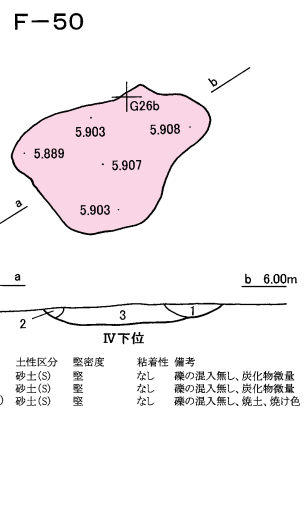
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 赤褐色(10R4/4) 砂土(S) しょう なし 混入無し、焼無し、焼け色



層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(7.5R4/4) 砂土(S) 堅 なし 頁岩剥片3点、炭化物わずかに含む



層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(7.5R5/3) 砂土(S) 堅 なし 鉄分の花着がみられる、礫2点、

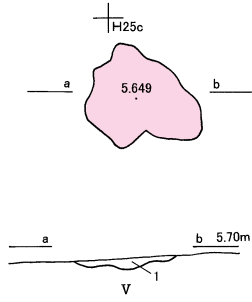


層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 赤黒色(2.5YR2/1) 砂土(S) 堅 なし 礫の混入無し、炭化物微量  
 2: 赤黒色(2.5YR2/1) 砂土(S) 堅 なし 礫の混入無し、炭化物微量  
 3: 暗赤褐色(2.5YR3/3) 砂土(S) 堅 なし 礫の混入無し、焼土、焼け色



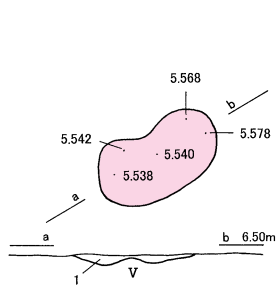
図V-3-31 F-41・43~50と出土遺物

F-51



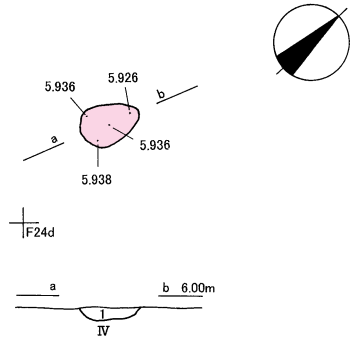
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(7.5R3/3) 砂土(S) しま なし 炭化物わずかに含む

F-52 G24a



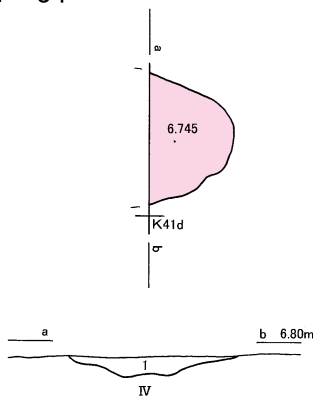
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1,2: 暗赤褐色(2.5YR3/6) 砂土(S) しま なし 雑草し、炭化物をわずかに含む

F-53



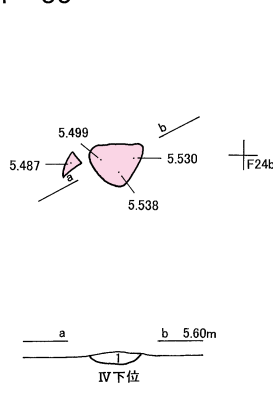
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: にぶい赤褐色(7.5R4/4) 砂土(S) 堅 なし

F-54



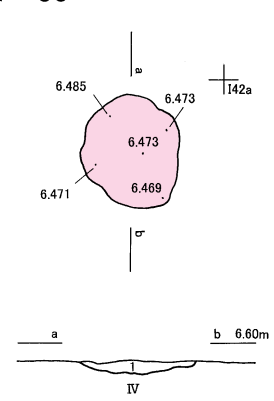
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(7.5R4/4) 砂土(S) 堅 なし

F-55



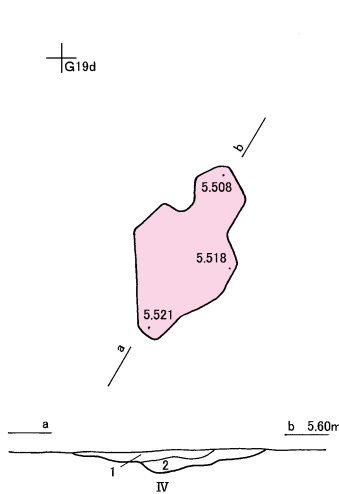
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 赤褐色(2.5YR4/6) 砂壤土(SL) 軟 弱 炭無し、炭化物少量

F-56



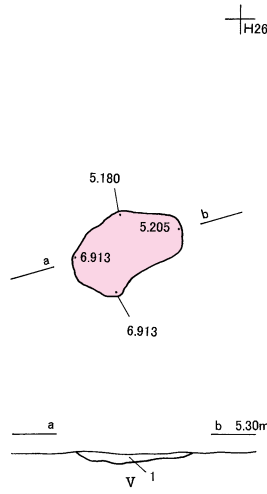
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(7.5R4/5) 砂土(S) 堅 なし

F-57



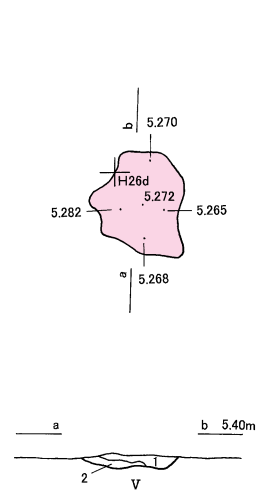
層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(10R4/4) 砂土(S) 堅 なし 礫2点  
 2: 暗赤褐色(2.5YR4/4) 砂土(S) 堅 なし

F-58



層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(7.5R4/4) 砂壤土(SL) 軟 なし 燧炭を含む  
 2: 暗赤褐色(7.5R3/1) 砂壤土(SL) 軟 なし

F-59



層位 土色 土性区分 堅密度 粘着性 備考  
 1: 暗赤褐色(10Y4/6) 砂土(S) 固結 なし 褐鉄鉱により固くしめる  
 2: 暗赤褐色(7.5R4/3) 砂土(S) 堅 なし

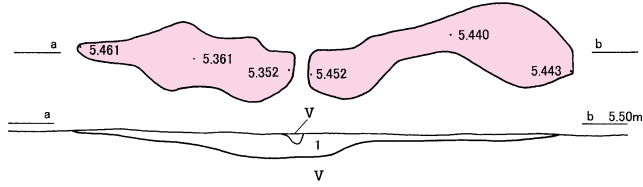


図V-3-32 F-51~59

F-60

H24a

H24b



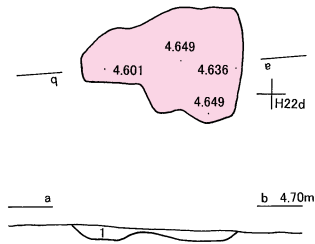
層位 土色  
1: 暗赤褐色(2.5YR3/6)

土性区分  
砂土(S)

堅密度  
軟

粘着性 備考  
弱 炭化物を多く含む

F-61



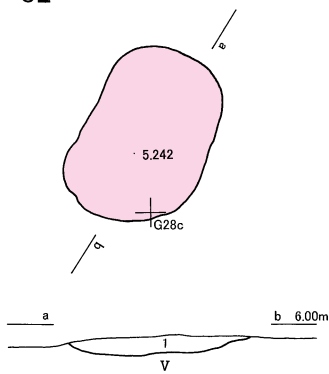
層位 土色  
1: にぶい赤色(7.5R4/4)

土性区分  
砂土(S)

堅密度  
軟

粘着性 備考  
なし 大きな炭化物粒

F-62



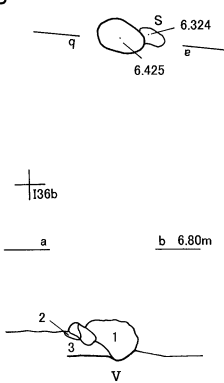
層位 土色  
1: 赤褐色(2.5YR4/8)

土性区分  
砂土(S)

堅密度  
軟

粘着性 備考  
なし 礫無し、炭化物を少量含む

F-63



層位 土色  
1: 黄褐色(2.5Y5/4)  
2: 赤褐色(2.5YR4/6)  
3: 赤灰色(2.5YR4/2)

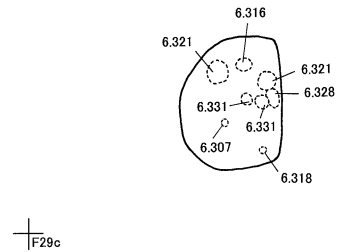
土性区分  
壤土(C)  
砂土(S)  
砂土(S)

堅密度  
固結  
堅  
堅

粘着性  
中  
なし  
なし

備考  
礫の混入無し  
礫の混入無し、粘土  
礫の混入無し

F-64



層位 土色  
1: 黒色土(7.5YR2/1)

土性区分  
砂土(S)

堅密度  
軟

粘着性 備考  
なし 炭化物(くさみ)集中



図 V-3-33 F-60~64

#### 4 包含層出土の遺物

##### (1) 土器 (図V-4-1~45、図版53~73、表V-9・10)

土器は縄文時代前期前半のものが33,966点、前期後半のものが10点、中期後半のものが15点出土している。縄文時代前期前半が主体であり、前期後半、中期後半のものは調査区内に点在している。中期後半のものは攪乱からの出土である。16年、17年の調査からリヤムナイ3遺跡は縄文時代前期前半が主体の遺跡である。16年度はⅢ層下位~Ⅳ層上面から平底の土器が多く出土した。17年度の調査では、Ⅳ層上位から平底の土器が復元できたもので1個体、破片が3の計4個体のみ出土、Ⅳ層からⅤ層にかけて尖底土器だけが出土している。底部の形態はほとんどが円錐形をなす。押引文が施されている尖底土器については概ね春日町式に相当するものが出土した。内面に縄文が施されているものは大津2群、静内中野式に相当し、平底、綾絡文のあるものは大津3群、戸井町(現函館市)高屋敷川1遺跡のⅡ群B2類土器、森町森川3遺跡、森川4遺跡のⅡ群b-1類土器と同じ円筒土器下層式直前のものに相当する。土器は文様別に特徴を先に述べ、出土状況については後にまとめた。

##### 縄文時代前期の土器

##### Ⅱ群a類 (図V-4-1~24・26~45、図版53~73、表V-9・10)

##### 概要

34,014点出土している。各層位の内訳は、Ⅰ層から2,232点、Ⅲ層から4,205点、Ⅳ層から23,070点、Ⅴ層から4,269点、攪乱・表採から238点である。平成16年度との総点数は36,114点である。分布は17年度の調査区で標高6.2m~6.5mのグリットライン32を境に北東と北西に分かれている。これは遺構の分布域と重なる。

##### 押引文・沈線文・刺突文が施されるもの (図V-4-1・2、図版53)

1の器形は底部から胴部へ向かい、鋭角に開くもの。口縁部を欠損し、尖底部が摩滅している。地文に単節と見られる縄文が施され、棒状工具によって押引文が施される。器表面はナデ調整されている。内面は風化している。2は平縁で、胴部がわずかに膨らみ、底部でわずかにすぼまり、尖るもの。口唇部には爪による刻みが加えられている。口唇の断面は角形で、ナデ調整が施されている。単節の斜行縄文地で、口縁部には押し引きによる沈線が数段施されているが、摩滅により不明瞭である。表面には繊維の痕跡が多く見られる。内面は横方向にナデ調整されている。3は小型で緩やかな小波状の口縁のもの。平縁に近い。底部から口縁に向かい比較的鋭角に開く。胴部は張り出さない。口唇の断面は角形で、ナデ調整されている。単節の斜行縄文地で、口縁部には竹管状の工具により、2条一組の刺突文が3cmの長さで施され、同じ間隔を空けて刺突を繰り返し、破線状になるように施文されている。内面には指頭によって横方向にナデ調整が施されている。4は間隔の狭い小波状の口縁。底部は復元できなかったが、尖底のものと考えられる。大きく開く。胴部は張り出さない。口唇部の断面は角形で、ナデ調整が施されている。地文は単節の斜行縄文であるが、胴部中位に複節縄文が施されている。縄文施文後には地文がつぶれない程度のナデ調整が施されている。口縁部には平坦な工具で等間隔に8条の押し引き沈線文と、それを斜位に区切るように押引文が施されている。内面は横方向のナデ調整がみられるが、ほとんどが風化している。

##### 刺突文が施されているもの (図V-4-13-27~35、図版60)

27は波状口縁のもので、口唇の断面は尖り、切り出し状になっている。口縁部は無文地に、竹管状の工具によって斜め方向から刺突文が連続して施されている。胴部には単節の斜縄文が施されている。胎土には繊維の痕跡がわずかに観察できる。28は波状口縁と思われ、口縁部はナデ調整による無文地に断面が円形の棒状工具によって連続した刺突が施されている。胴部には単節の縄文地に刺突文が弧

を描くように施されている。胎土には繊維の痕跡がわずかにみられる。29は波状口縁、30は胴部に刺突文が施されている。いずれも単節の斜行縄文地のもの。31は大型土器の破片。小波状の口縁部とその胴部。口唇はわずかに尖る。口縁から胴部上半にかけて単節の斜行縄文地に、円形の棒状工具による、連続する刺突文が2条一組で6列施されている。胴部下半には結束羽状縄文が結束部分を境にして縄文が重なるように施されている。内面は、口縁部が横方向、胴部下半が縦方向にナデ調整されている。32は口縁部破片で口唇部がやや外反するもの。単節の斜行縄文地に沈線が施され、沈線上に円形の棒状工具により垂直に刺突文が加えられる。34は沈線上に竹管状の工具によって刺突文が施されているもの。33は口縁部に沈線が施され、沈線間に竹管状の棒状工具によって垂直に刺突が加えられている。35は円形の刺突文のほかに、半截竹管状の工具によって（ ）のような刺突が加えられている。

#### 押引文が施されているもの（図V-4-13-36~42、V-4-14、図版60~62）

36は胴部破片。無文地に、繊維質で先端が粗く切断されたヘラ状の工具によって押引文が施されている。37は口縁部破片で、単節の斜行縄文地に細いヘラ状の工具によって横方向と斜めに押引文が施されている。38は口唇部と口縁部に円形の棒状工具によって押引文が施されているもの。地文は単節の斜行縄文とみられる。39は波状口縁の頂部。縄文地に押引文が施されている。40は波状口縁の表、裏面に結束羽状縄文が施されているもの。口唇部は角形でヘラ状工具の角による刺突が加えられている。口縁には同じくヘラ状工具によって刺突に近い押引文が施されている。内面には地文と同じ縄文が斜めに施文されている。41は羽状縄文地に円形の棒状工具を2本一組にして刺突に近い押引文が施されている。表面は地文の縄文がつぶれない程度にナデ調整が施されている。42は結束のある斜行縄文地に押引文が施されているものと考えられる。43は尖底土器とみなされるもの。単節の斜行縄文地にヘラ状工具によって刻みのような施文と、わずかに押し引く施文がある。底部に近いところは1段の縄を折り曲げて刺突している。土器表面は地文の縄文がつぶれない程度にナデ調整が施されている。44は単節の斜行縄文地に、押引文がヘラ状工具により横方向と、破片上部では一部縦方向に施されている。土器表面は縄文地がつぶれない程度にナデ調整されている。45は単節の斜行縄文地に断面が円形の棒状工具によって刺突に近い押引文が施されているもの。46は口縁に近い胴部破片と考えられるもの。羽状縄文地に断面が円形の棒状工具によって押し・引きの間隔が短い押引文が施されている。土器表面は地文の縄文がつぶれない程度にナデ調整がされている。47は波状口縁のもの。口縁の断面は丸みをおびた角形である。口縁部は無文地に、半截竹管状の工具によって押し・引きの間隔が短い押引文が施されている。胴部には結束のある羽状縄文が施されている。48は波状口縁のもの。地文は0段多条の縄を、縦方向に羽状（48a）もしくは交差（48b）するように施文方向を変えて施されているもの。口唇の断面は角形で、ナデ調整がされている。口縁はヘラ状工具により間隔の短い押引文が施されている。49・50は口唇が外反するもの。共に間隔の短い押引文が施されている。51は口縁部に近い胴部破片。地文は0段多条の縄を、回転方向を変えて縄文が交差するように施文している。

#### 単節の縄文地に沈線もしくは沈線に近い押引文が施されているもの（図V-4-15-52~58、図版62・63）

52は先端を粗く切断した棒状工具によって刺突と沈線が施されているもの。底部はすぼまり、厚みを持ち尖っている。胴部は張り出す。口縁部付近でわずかにくびれているものと推測する。土器表面は地文がつぶれない程度にナデ調整がされている。内面は、底部に向かい横方向にナデ調整されている。尖底部の内面は繊維の痕跡が多く観察できる。53は底部に近い胴部破片。沈線と押引文が施されている。表面は地文の縄文がつぶれない程度にナデ調整されている。54、55は押し・引きの間隔が長

い押引文が施されている。55は口縁部が外反する。56は波状口縁のもので、波頂部を欠損する。口唇は角である。口縁部には沈線と、沈線に近い押引文が施されている。表面には地文の縄文をつぶさない程度のナデ調整がされている。57は口縁部で、ヘラ状工具によって沈線が施されているもの。58はヘラ状工具によって押引文と縄の圧痕が施されているもの。

#### 複節の縄文地に押引文・沈線文が施されているもの（図V-4-15-59~64、図版63）

59は口縁部で、沈線が施されている。口唇は内面が丸みを帯びる。60は細い工具によって破線状に押引文が施されている。表面は地文をつぶさない程度のナデ調整が施されている。61、64は断面が円形の棒状工具によって沈線が施されている。62は沈線と破線状の沈線を施している。表面はナデ調整されている。63は小型の土器で細い棒状工具によって押引文が施されている。

#### ループ文が施されているもの（図V-4-3-6、V-4-15-65~67、図版54・63）

6は小型の土器。緩やかで間隔の短い小波状のもので、平縁に近い。底部を欠損する。口唇の断面は丸～丸みを帯びる角形である。口縁はあまり開かず、胴部も張り出さない。地文は口縁の一部に羽状縄文が施されている。65、67は胴部破片。67は大型のものと思われる。66は複節縄文である。土器表面は地文の縄文がつぶれない程度にナデ調整が施されている。

#### 地文に結束羽状縄文が施されているもの（図V-4-4-7、V-4-16、図版63・64）

7は大型の土器で波状口縁のもの。口唇の断面は丸～丸みを帯びる角形である。口縁はあまり開かず、胴部も張り出さない。内面は横方向のナデ調整が施されている。表面は風化している。68は底部にやや近いと見られる胴部破片。内面は横方向のナデ調整されている。69は大型の土器の破片。口縁は平縁か、緩い波状のものと考えられ、尖底の土器である。口唇の断面は角形である。内面には横方向のナデ調整がされている。70はいびつな尖底土器か、平底に近いものと考えられるもの。表面は地文が消えない程度のナデ調整が施されている。底部の周辺になると、ヘラ状工具による押引文か刺突文が縦に施されていたものとみられるが、ナデ調整により不明瞭である。

#### 単節の斜行縄文が施されているもの（図V-4-5・6・17・18、図版55・56・65）

8は大型の土器で、底部が欠損しているもの。すぼまる底部から、胴部はやや張り出し気味となる。口縁部でわずかにくびれ、口唇は外反する。内面は横方向のナデ調整がされているが、表面が風化している。胎土には繊維の痕跡と砂の混入がみられる。9は小型のもので、底部が欠損しているもの。胴部は張り出さず、口縁はあまり開かない。口唇の断面は丸～丸みを帯びる角形である。口縁部は単節の縄文が縦行し、胴部は同じ縄文が横走する。内面は口縁部付近が横方向、胴部から底部に向かい縦方向にナデ調整が施されている。10は緩い波状口縁のもの。平縁に近い。口唇は角形である。内面は口縁部付近が横方向、胴部から底部に向かい縦方向のナデ調整されている。11は緩く、間隔の短い小波状の口縁のもの。口唇の断面は波頂部に相当するところが角になり、厚みを持つ。波状の低いところは薄く、断面も丸になる。地文の縄文がつぶれない程度のナデ調整がされている。内面は横方向のナデ調整が施される。71は11と同一個体のもの。72は地文の縄文がつぶれない程度のナデ調整がされている。73は口縁が内湾するもの。74は口唇が外反する。12は地文の縄文の節が大きなもの。内面は胴部が横方向、底部付近で縦方向にナデ調整が施されている。13は底部を欠損するもの。地文の縄文は斜め～縦行気味になっている。内面は丁寧なナデ調整がされている。外反する。75は緩く、間隔の短い小波状のもの。77は小型の土器で、縄文施文後にナデ調整されている。口唇の断面は角形である。図示しなかったが、80の内面には半截竹管状工具の弦でなでたような擦痕もしくは調整痕のようなものがみられる。

#### 地文の縄文が縦行気味になるもの（図V-4-7-14、16、V-4-8-19、V-4-19・20、図版

56・57・65・68)

14は口縁部と底部が欠落するもの。器形はややいびつになる。地文の縄文はやや雑に施されている。16は小型の土器で、間隔の短い小波状の口縁と、尖底部が尖り気味になっているもの。表面は地文の縄文がつぶれない程度のナデ調整がされている。尖り気味の底部から胴部に向かいわずかにふくらみを持つ。口縁はあまり外反しない。口唇の断面は、波頂部の断面は角形で、低くなるところは指頭により押されて厚みを持っている。内面は縦方向に調整が施されている。19は地文の縄文が斜～縦行気味のもの。底部と口縁部が欠落するもの、土器表面はわずかにナデ調整が施されている。82は尖底部がやや丸みを持つもの。83、84は地文の縄文施文後にナデ調整がされているもの。84は砂の混入がみられる。85は尖底部が尖り気味のもの。胎土には小礫の混入は無い。86は尖底部が欠落するもの。縄文施文後にナデ、ミガキの調整が施されている。粘土の継ぎ目で表面が剥落しているところから縄文がみられる。87は器形がややいびつになる。地文の縄文はやや雑に施されている。内面は横方向に雑な調整がみられる。88は、口縁から胴部にかけて、倒立した状態で出土したものであるが、脆弱で一次整理の扱いにより復元不可能になったもの。口縁は平縁に近い、間隔の短い小波状のものである。地文の縄文は斜～縦走気味に施されている。

**縄の圧痕文が施されているもの** (図V-4-3-5、図V-4-21-89~94、図版54・69)

5は小さな山形の突起を持つ小波状の土器で、底部を欠損する。底部付近には押圧の浅いループ文が施されている。地文は縦に羽状縄文が施されている。底部から胴部に向かいわずかに張り出し、口縁部付近で外反する。口唇の断面は角形である。89は無文地に縄の圧痕文が施されている。口唇の断面は角形である。90は複節地に縄の圧痕文が施されているもの。口唇の断面は角形である。92は口縁部に羽状縄文が施され、その上に縄の圧痕文が横方向と縦に施されている。93は単節斜行縄文が施されている底部付近に縄の圧痕文が加えられている。

**小型の土器で、表面が磨かれているもの** (図V-4-21-95~97、図版69)

95は山形の波状口縁。口唇の断面は丸である。95bは単節の斜行縄文が施された後に磨かれているもの。96、97は突底部が鋭角に尖るもの。突端部が欠損している。96は単節の縄文が縦行している。地文の縄文はかすかな痕跡しかない。97は地文に複節の斜行縄文が施されている。

**地文の縄文が、同一原体での多方向施文・重複施文されているもの** (図V-4-7-15、V-4-21-98~101、図版56・67・69)

15は小さな山形の突起を持つ小波状の土器。地文は0段多条の縄によって縄文が施され、一部は不整な羽状縄文になっている。表面剥落が著しい。口唇の断面は丸みを帯びた角形である。口唇はわずかに外反する。胴部は張り出さず、底部はわずかに丸みを帯びる。98、99は波状口縁のもので口唇の断面が角形である。100は波状口縁の口縁部に縦走気味の縄文と、胴部には横走る縄文が施されている。口唇の断面は切り出し状になっている。内面には横方向の調整が施されている。

**地文の縄文が横走するもの** (図V-4-7-17・18、V-4-8-20、V-4-21-102、図版56・57・67)

17は間隔の短い小波状のもので、底部が欠損している。口唇の断面は切り出し状となっている。口縁部に斜行する縄文が施され、胴部は横走している。口縁部は弱く外反し、胴部はわずかに張り出している。18は胴部上半が欠損しているもの。底部から胴部に向かい広角度で開く器形となっている。20は土器の断面の厚さが1.5~2.5cmある、厚みを持った土器。102は縄文の押圧が浅いもの。

**太い縄の原体による、深い押圧で節の大きい斜行縄文が施されているもの** (図V-4-8-22-103~107、図版58・70)



103～105まで口縁部破片。口唇の断面は角形である。103は口縁部が内湾するもの。胎土には繊維の痕跡がみられる。103、104には小礫が含まれていないが、105には直径3～8mmの礫が少量含まれている。106は丸みを帯びた底部。106、107共に繊維の痕跡と、小礫の混入が少量みられる。

**内面に縄文が施されているもの**（図V-4-9・10、V-4-8-22-108・109、図版57・58・71・72）

21は波状口縁で胴部下半が欠損しているもの。口縁はわずかに開き気味で、胴部は張り出さない。口唇の断面は丸みを帯びた角である。地文の単節斜行縄文を施した後にナデ調整されている。内面には地文と同じ縄文が胴部半ばまで横走気味に施文される。胎土には繊維の痕跡と直径2～5mmの小礫が含まれている。22は土器の表面が剥落しており、その下にも縄文がみられるもの。胎土には繊維の痕跡と、小礫の混入が少量みられる。23は平縁で底部が欠損しているもの。胴部は張り出さず、口縁は開かない。土器の表面が剥落している跡にも縄文がみられる。内面の縄文は口縁部に近いところが横走し、胴部に向かい斜行している。胎土には繊維の痕跡と直径5mmの小礫が少量含まれている。108は胴部破片で、太い縄の原体による、深い押圧で節の大きい斜行縄文が施されているもの。内面の縄文は押圧が浅い。胎土には繊維の痕跡と直径5mmの小礫が少量含まれている。109は口縁～胴部下半までの破片。口唇の断面は角である。地文は口縁部付近が深い押圧で節の大きい斜行縄文が施されているもので、胴部下半になると縄文の押圧が浅くなっている。内面の縄文は押圧が深い。胎土には繊維の痕跡と、直径1～2mmの小礫、砂が多く含まれている。

**地文の縄文が複節のもの**（図V-4-11・23、図版59・70・71）

24は尖る底部の先端が欠損しているもの。胴部はふくらみを持ち、張り出す。口縁部付近と見られる上部には2本の横走する沈線が施されている。25は尖底部の内面に黒曜石の剥片がみられるもの。剥片には背面に垂角礫の礫皮面が残っている。器形は、底部から胴部に向かい広角度で広がる。110、111は口縁部の破片で内面にも縄文が施されている。共に口唇が外反している。112は地文の縄文が横走するもの。113は底部から胴部に向け広角度で開くもの。地文をつぶさない程度にミガキによる調整が施されている。115は口唇に刻みが加えられている。

**綾絡文が施されているもの**（図V-4-24-116～118、図版72）

116・118は単節の斜行縄文地に綾絡文が施されている。117a～cは同一個体のもので胴部破片。複節の斜行縄文地に縄端の刺突（a、b）と綾絡文（c）が施されている。いずれも胎土には繊維の痕跡があり、砂が含まれている。

**大木2a式に相当するもの**（図V-4-24-119～122、図版72）

119は小型の土器で波状のもので、波頂部が欠損している。半截竹管の弦に相当する部位で鋸歯状と波状の沈線が施されている。120は半截竹管状の工具でCの字状の刺突が施されているもの。121、122は結節回転文が施されているもの。共に口縁部が内湾している。119～122まで胎土はわずかに繊維を含むが砂や礫の混入は無く、春日町式相当のものとは違い精選されているものが用いられている。

**平底のもの**（図V-4-12-26、V-4-24-123～126、図版59・73）

26は地文が単節の斜行縄文で、胴部下半までナデ調整が施されている。口唇の断面は丸味を帯びている。胴部はあまり張り出さず、底部付近でくびれ、上げ底となる。底面には縄文が施されている。内面にはへら状工具によるものとみられる、横方向に擦痕のような調整が施されている。胎土には繊維と、砂の混入がみられる。123～125まで、地文が単節の斜行縄文で上げ底のもの。底面にも縄文が施されている。いずれも胎土には繊維と、砂の混入がみられる。126は極小の平坦部を持つもの。地文は複節の斜行縄文で、底面にも縄文が施されている。胎土には繊維の痕跡がみられる。

## 出土状況について（図V-4-26～45、図版30～34）

包含層調査においては遺跡が砂地で包含層が厚く遺構、遺物が多く出土することが判明した。層位の把握と生活面を把握するため、土器が復元できる状態もしくは個体が把握できる状況で出土したものは周辺を精査し、出土状況を記録した。土器は石皿や礫石器・剥片石器等と出土することが多かった。遺物は図示していない。調査の結果、土器の特徴を把握できた個体については以下の5か所から出土しており、それぞれ分布するところとその土層の堆積状況に特徴があるためここで述べる。

### 分布

- ① 調査区南側の旧河道に面した付近
- ② 調査区東側の旧河道に面した付近
- ③ 調査区西側の16年度調査区と接するところ
- ④ 調査区北側の小高い丘、砂丘の末端
- ⑤ 調査区南端の旧沼地に面して低くなるところ

### 土層

調査区全域でIV層は平均にして60cm程度の層厚がある。IV層の間に2～3の灰色を呈した間層を挟むが、これを連続した面として捉えることはできない。V層はラミナが続く。多方向から入り組んで堆積しており、IV層同様、これを連続した面として捉えることはできない。

- ①と②：遺構が多く検出された近辺ではラミナの発達しているV層がいくぶん高まりをなしており、標高は20cmほど高くなる。
- ③：標高6.5mより低いところでⅢ層から包含層が残っていた。ここではグリットライン24～25にかけて図V-2-4にみるように、西側の緩い沢状地形によりV層を切っているIV層の二次堆積がみられる。出土する遺構、遺物は遺跡全体にプライマリーに見られるIV層のものと大幅な差は無いことから出土する遺物もIV層として取り扱った。
- ④：Ⅲ層下位とIV層上位の赤黒い漸移層から包含層が残存していた。ここと①、②の間、旧鉄道跡ではIV層上位が削られている。
- ⑤：基本土層と同様であるが、掘削し標高が5.5m以下になると湧水する。

### 単節縄文(1)出土状況 V層（図V-4-26・27）

⑤の近辺から多く出土している。ついで①、②、④の順である。14、15などのつくりが粗雑な感のある、地文の縄文が縦走するものと、10、13の単節の斜行縄文のものがある。84は④のV a層出土のもの。尖底部破片が倒立した状態で出土している。

### 押引文(1)・沈線文 出土状況 IV層（図V-4-28・29）

分布の偏りはない。⑤のIV層中～下位で押引文が多用されている1、2が出土している。④ではIV層を15cmほど掘り下げた段階で、地文の縄文が0段多条の縄で施文方向を変えて縄文が交差するものに押引文が施されているもの48が出土している。⑤では沈線文と刺突文のあるものが出土している。

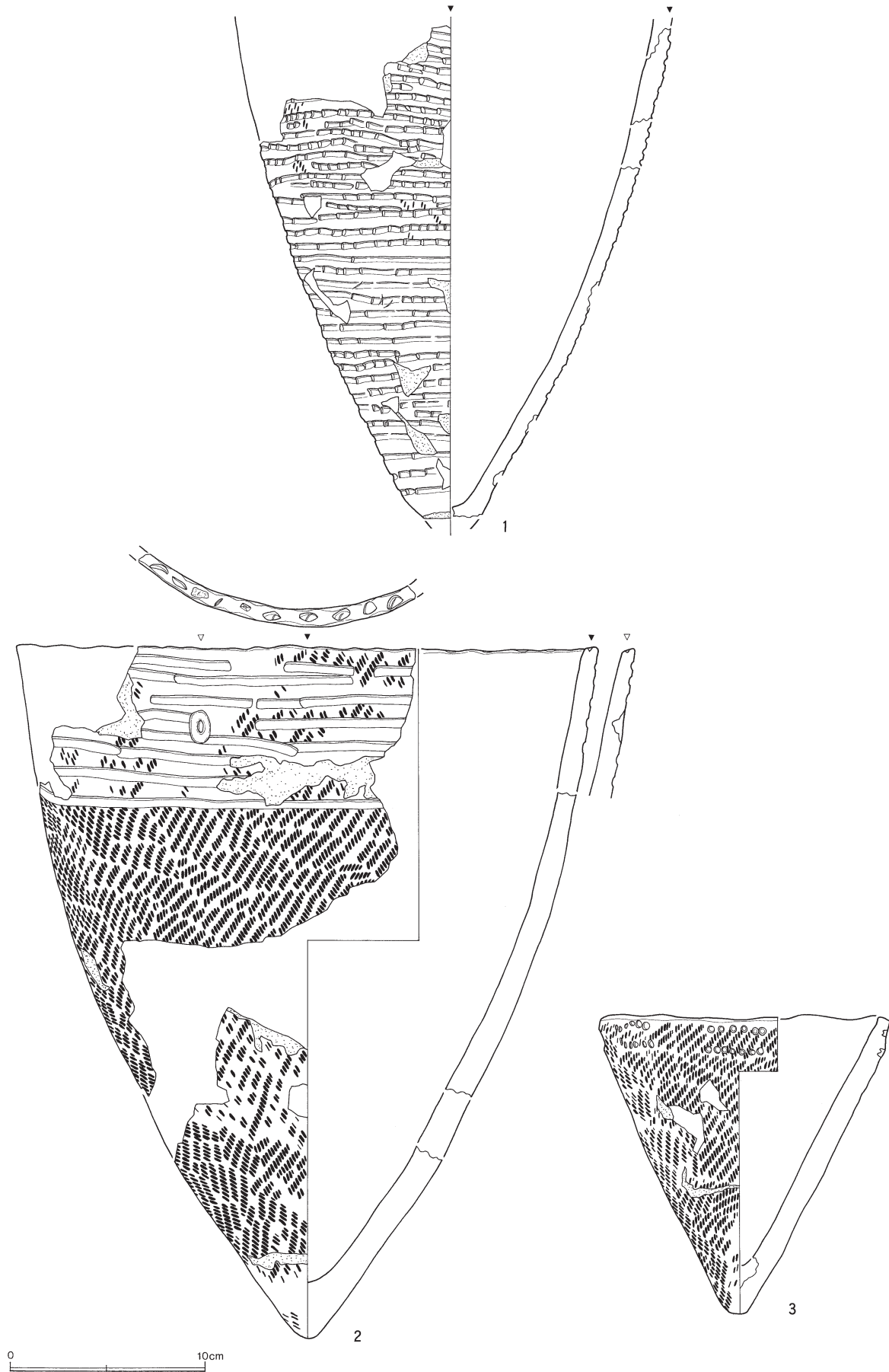
### ループ文(1)・結束羽状縄文・単節縄文(2) IV層（図V-4-30～38）

①、②、④の北側斜面、⑤に多く検出した。焼土の分布と重なる。

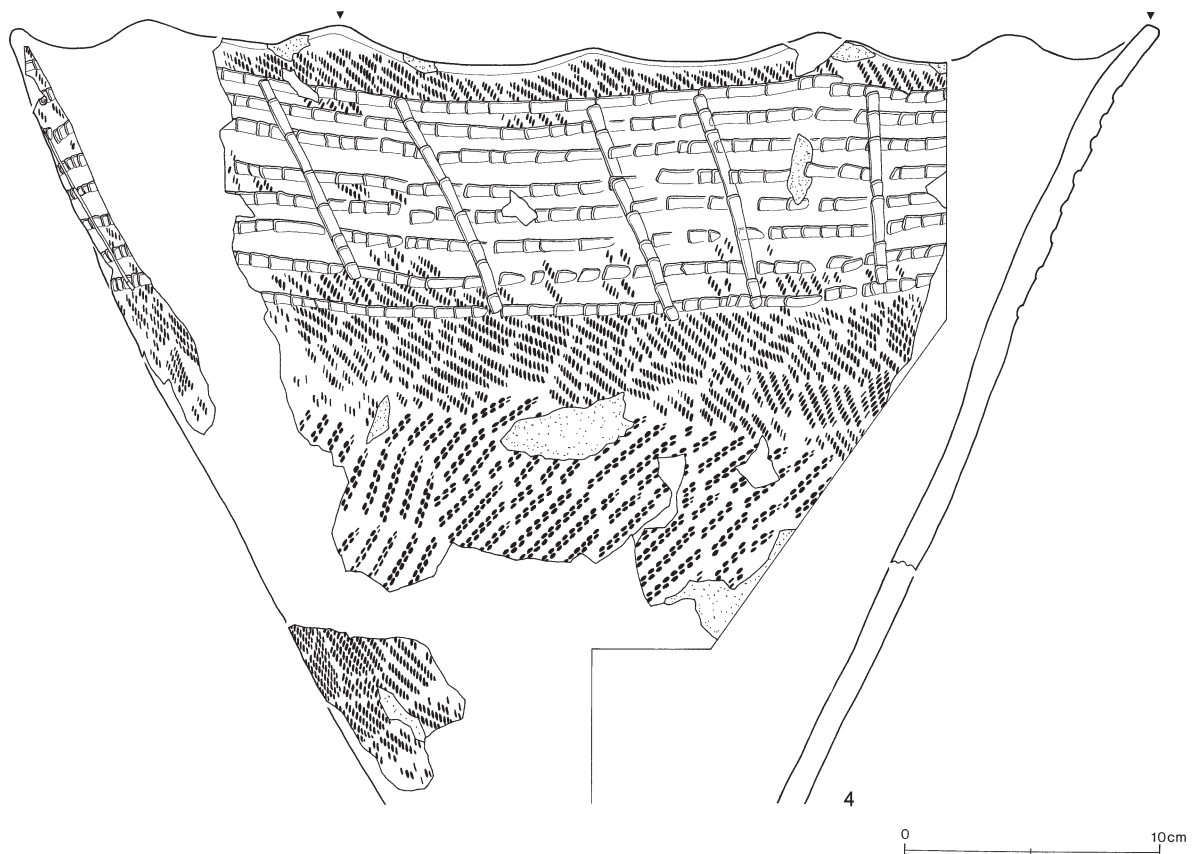
ループ文の6は④の北東側斜面のIV層中から、単節の斜行縄文のものと出土している。

結束羽状縄文のものは、7が②、69が③、70が①から出土している。

単節縄文のものは、破片を含め倒立して検出しているものが6個体ある。11（71と接合）、20、72、80、83、86、88、102、については①、③、⑤から出土している。この土器の中の土はフローテーションサンプルとして取り上げ、浮遊物と残渣を採取した。11の近くから検出した骨片集中からはエゾシ



図V-4-1 包含層出土の土器(1)



図V-4-2 包含層出土の土器(2)

カの角の破片が出土している（VI章2節）。88の土器のなかから得られた炭化クルミ片を試料に放射性炭素年代を測定したところ $5,400 \pm 40$ （y r BP）という結果が得られた（IV章1節）。

0段多条の縄によるもの100、それに伴う単節斜行縄文のもの8、小型で波状の単節縦走縄文の土器16は②から出土した。100は土器内部とその周辺から焼土を検出している。この土や、ほかの、倒立して出土した土器内部の土はフローテーションサンプルとして取り上げている。

内面に縄文が施されている土器は、23が④、22と109は③で、グリットライン24～25にかけてのIV層の二次堆積層中からの出土である。109は周辺から剥片石器、礫石器等が出土した。

**複節縄文・押引文(2)・縄の圧痕文・ループ文(2)・綾絡文・大木2a式・平底土器 出土状況**（図V-4-39～43）

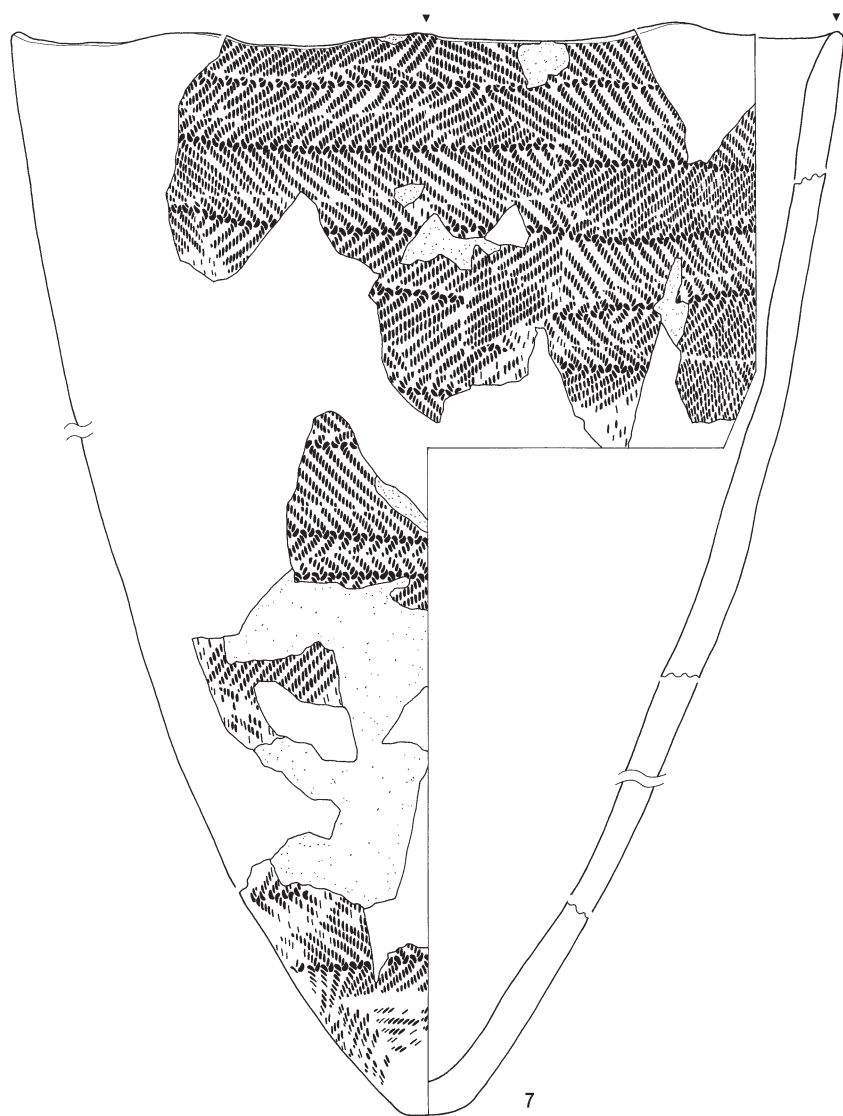
平成16年度調査区のⅢ層、IV層と、③のIV層上位、④のIV層上面から検出した。分布を見ると、複節のものはほとんどIV層から出土している。器形は全て尖底のものである。

縄の圧痕文とループ文が施されているもの5、複節縄文と押引文が施されているもの4、竹管状の工具による刺突文が施されているもの3は④から出土した。

綾絡文117は③と④の間から、内面に縄文が施されているもの21と、地文に単節の斜行縄文が施されている土器19と共に出土している。大木2a式のもの121も、ここより10mほど南西に行ったところから破片で出土している。平底のものは昨年度の調査区（図V-4-42）とその近辺①からわずかに出土している。17年度の平底土器は全て単節の縄文が施されている。

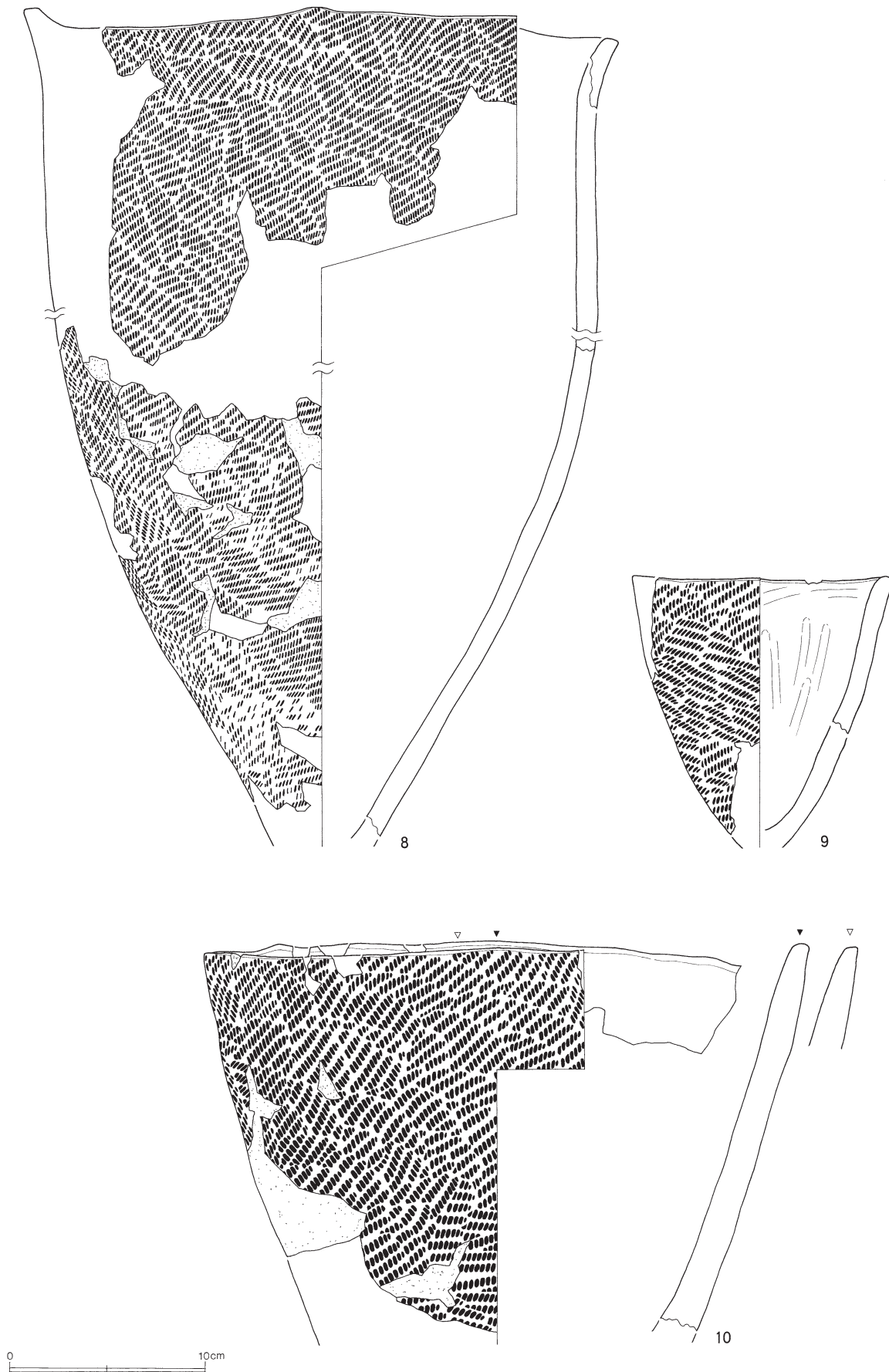


図V-4-3 包含層出土の土器(3)



0 10cm

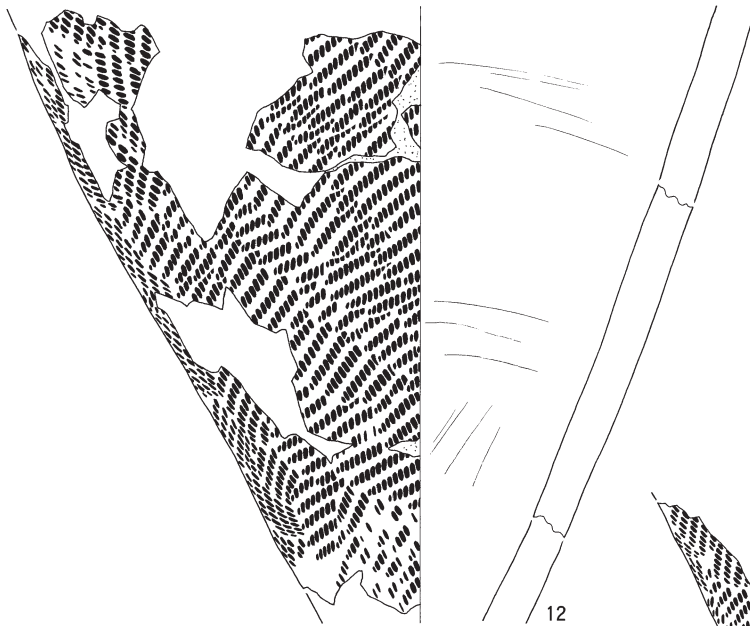
図V-4-4 包含層出土の土器(4)



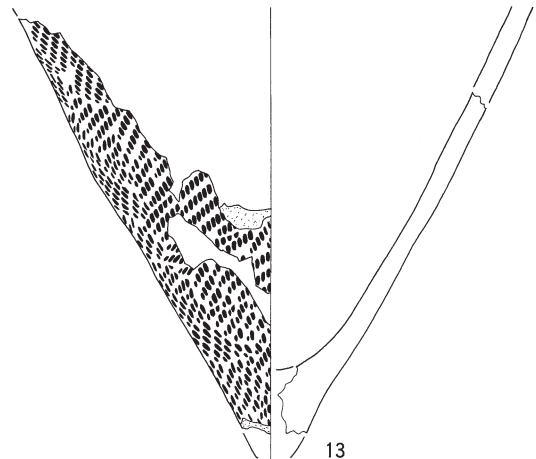
図V-4-5 包含層出土の土器(5)



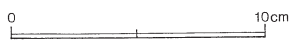
11



12

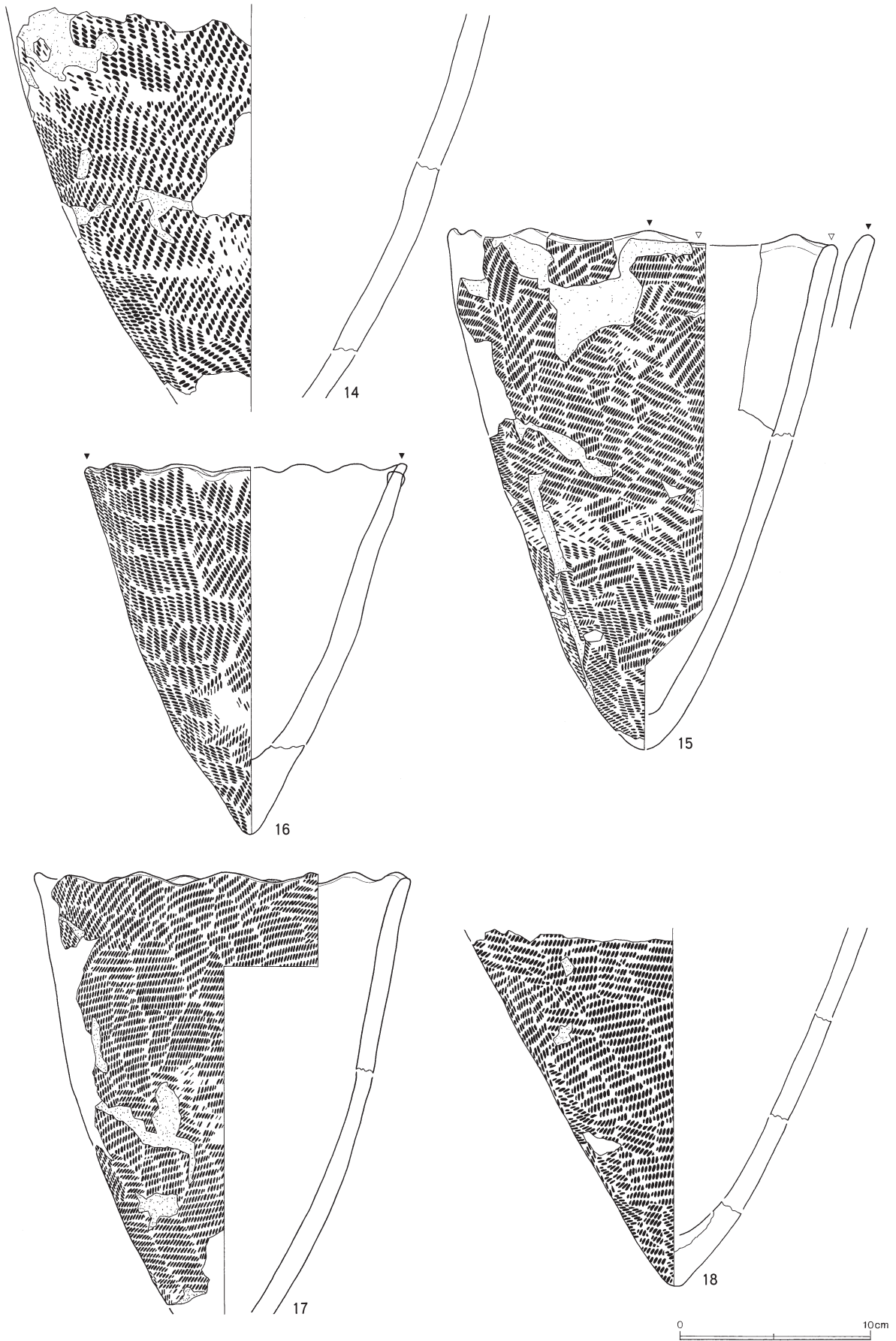


13



図V-4-6 包含層出土の土器(6)

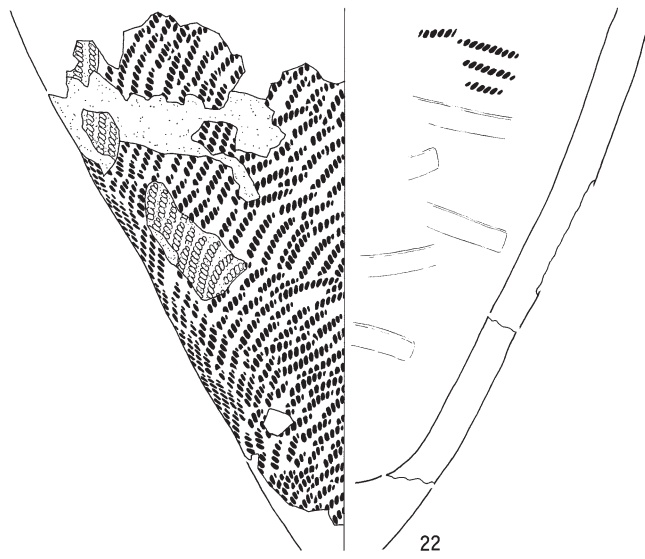




図V-4-7 包含層出土の土器(7)



図V-4-8 包含層出土の土器(8)



図V-4-9 包含層出土の土器(9)



図V-4-10 包含層出土の土器(10)

平成16年度調査区ではⅢ層下位～Ⅳ層上面から平底の土器が多く出土した。これからは円筒土器下層式直前の土器で、高屋敷川1遺跡Ⅱ群B2類のものに相当する。今回は③、④のⅣ層上面から平底の土器と、Ⅳ層を5～10cm前後掘り下げたところで地文が複節の尖底土器が出土した。内面に縄文が施されている土器は、層位的に確認できるところで③のⅣ層の二次堆積土中からのもの109が静内中野式に相当するものかと思われる。内面に縄文が施されている21は綾絡文が施されている土器117と出土している。土層断面と対比できる③の周辺をみると、Ⅳ層上面から平底の土器、この下のⅣ層中から静内中野式に相当するものが出土している。春日町式の特徴をもつものは春日町二群A～C類に相当するもののほかに、大木2a式、綾絡文が施されているもの、層位的に上位から出土する複節地のあることから時間幅のあるものとみなされ、リヤムナイ3遺跡の前期前半の土器は春日町式から円筒土器下層式直前の土器群へ過渡的な変化が見られる資料と考えられる。

**Ⅱ群b類土器** (図V-4-25-127・128、図版73、表V-10)

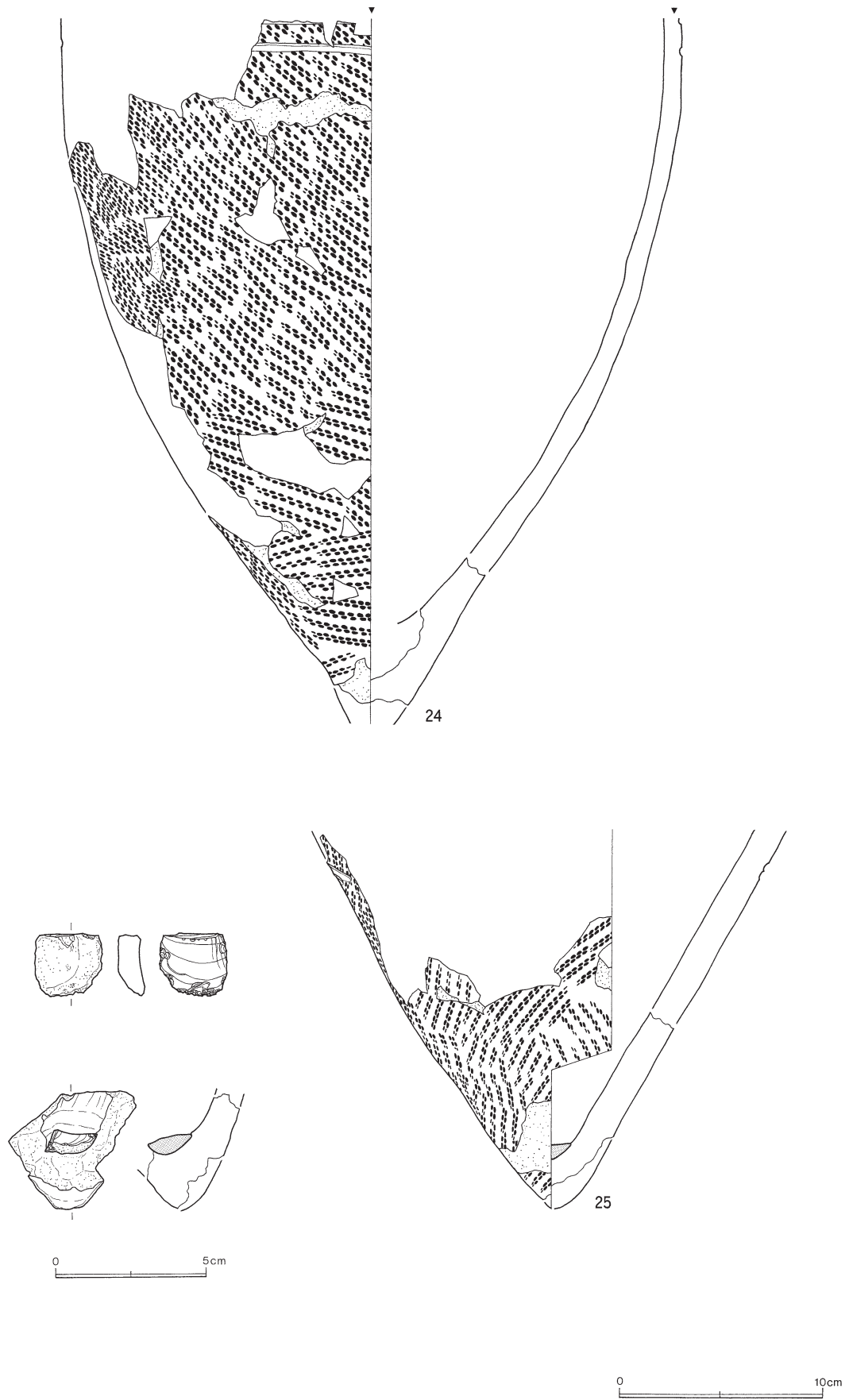
10点出土した。16年度と合わせると83点である。

127は胴部破片で木目状とみられる撚糸文が施されているもの。128は隆帯に竹管状工具による円形の刺突文が施されているもの。いずれも円筒土器下層式のもの。

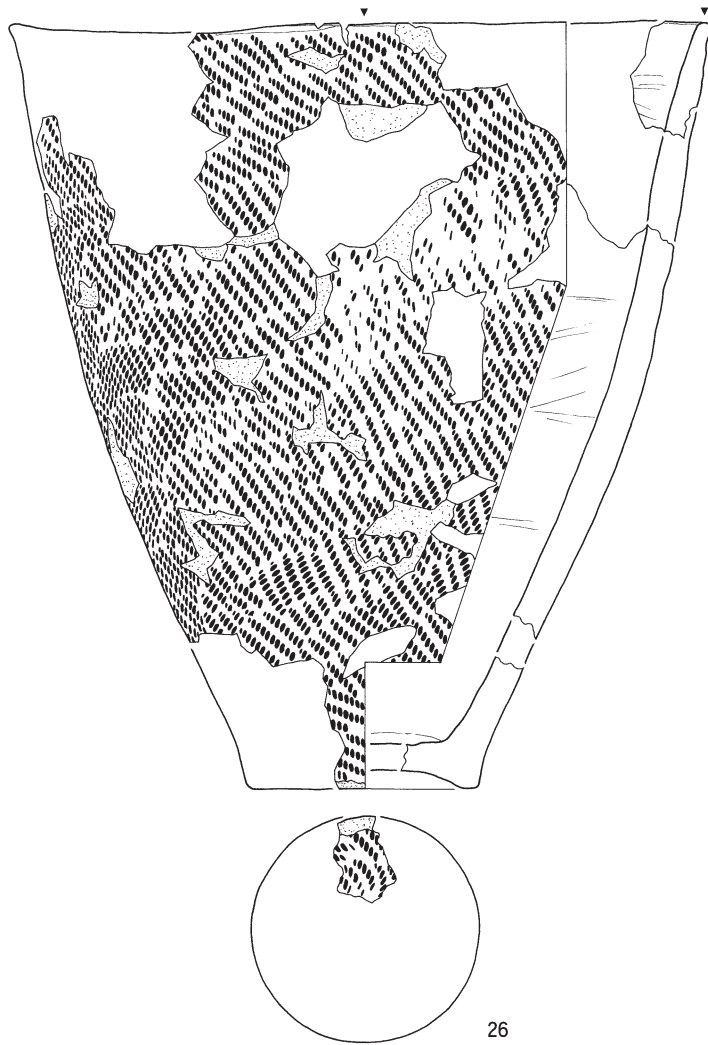
**Ⅲ群b類土器** (図V-4-25-129、図版73、表V-10)

15点出土した。16年度と合わせると17点である。

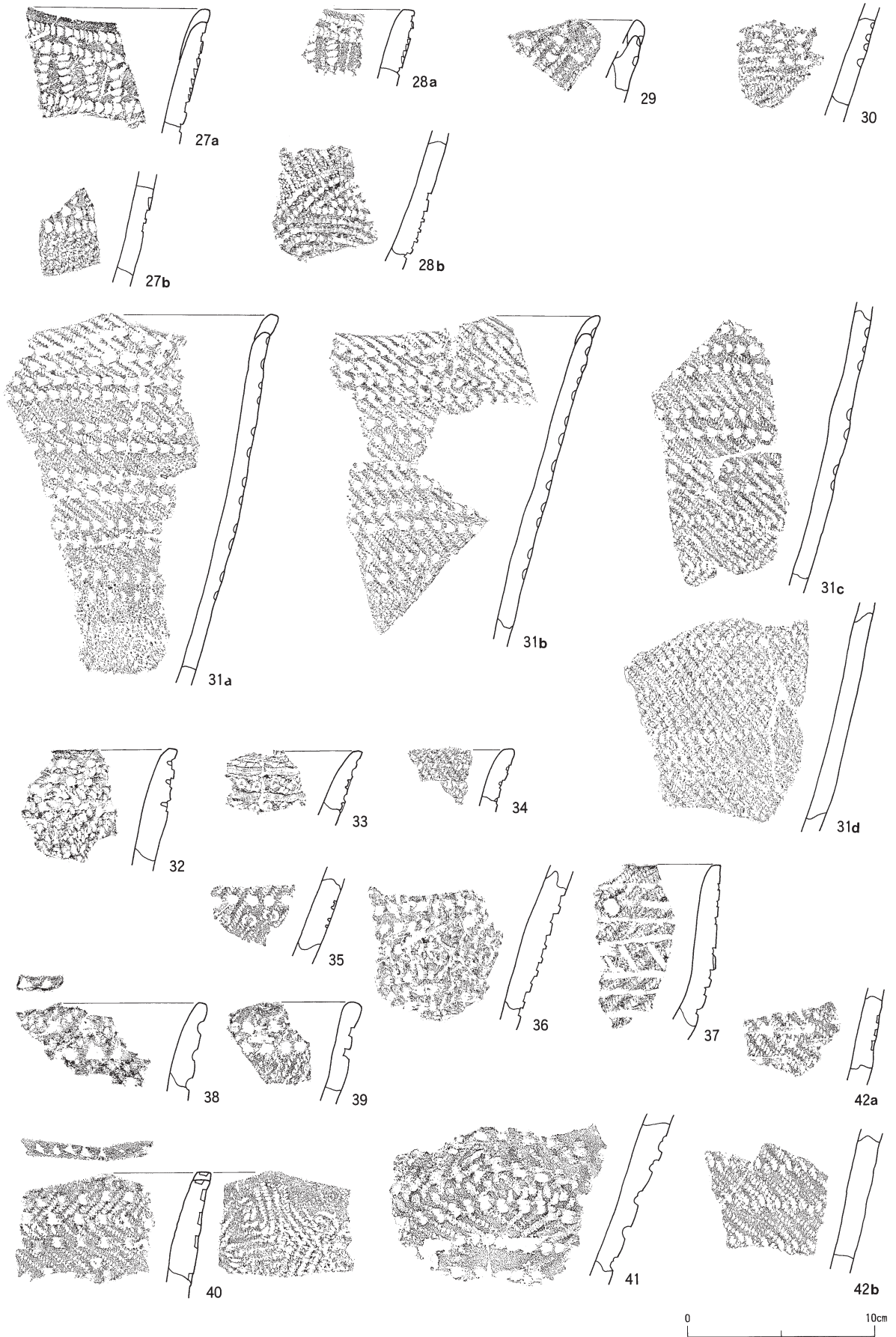
129は口縁部破片。波状口縁のもの。棒状の突起を持ち、口唇部は肥厚させている。口唇部と胴部には半截竹管状の工具で斜めからの刺突と、沈線が施されている。天神山式に相当する。(袖岡)



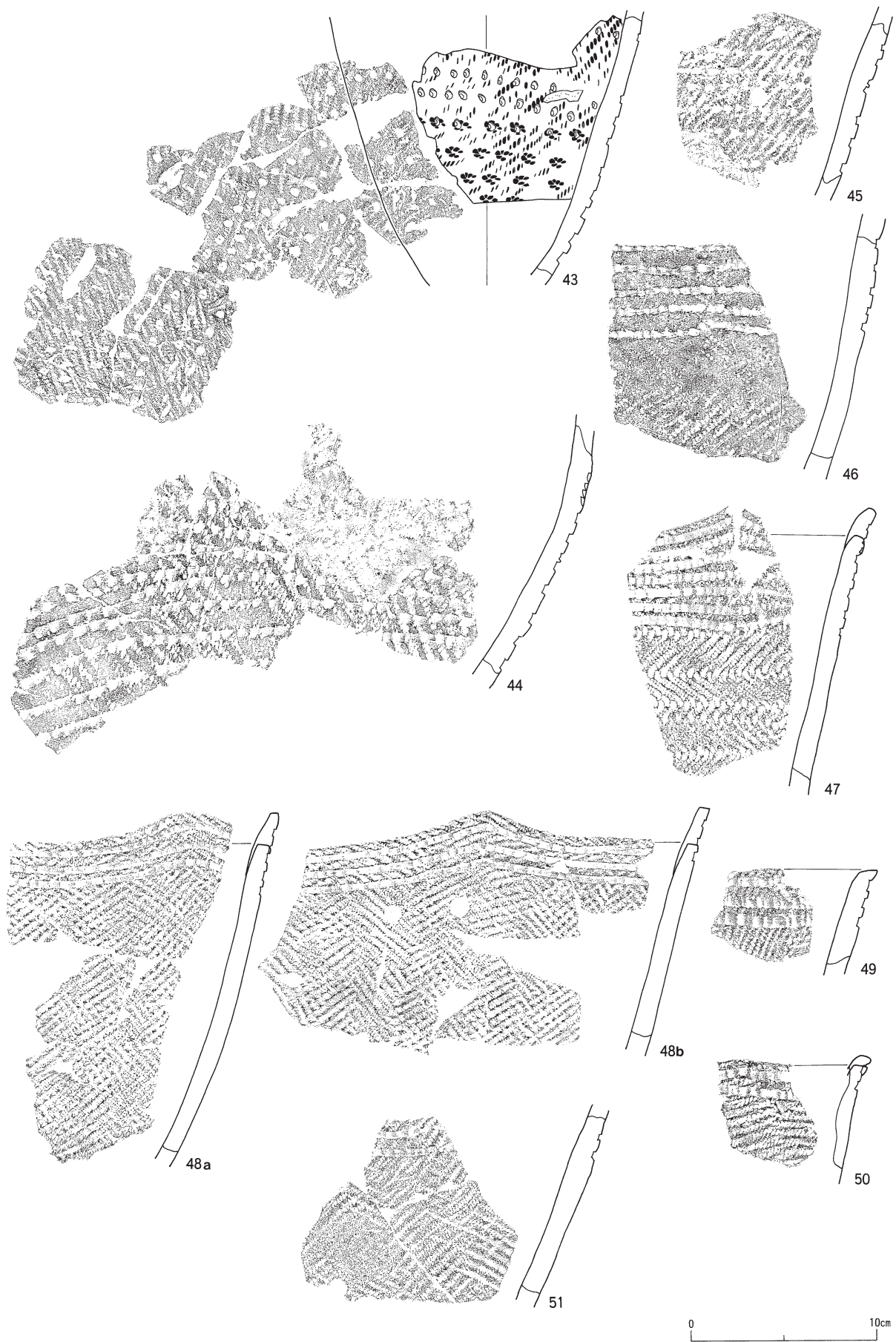
図V-4-11 包含層出土の土器(1)



図V-4-12 包含層出土の土器(12)

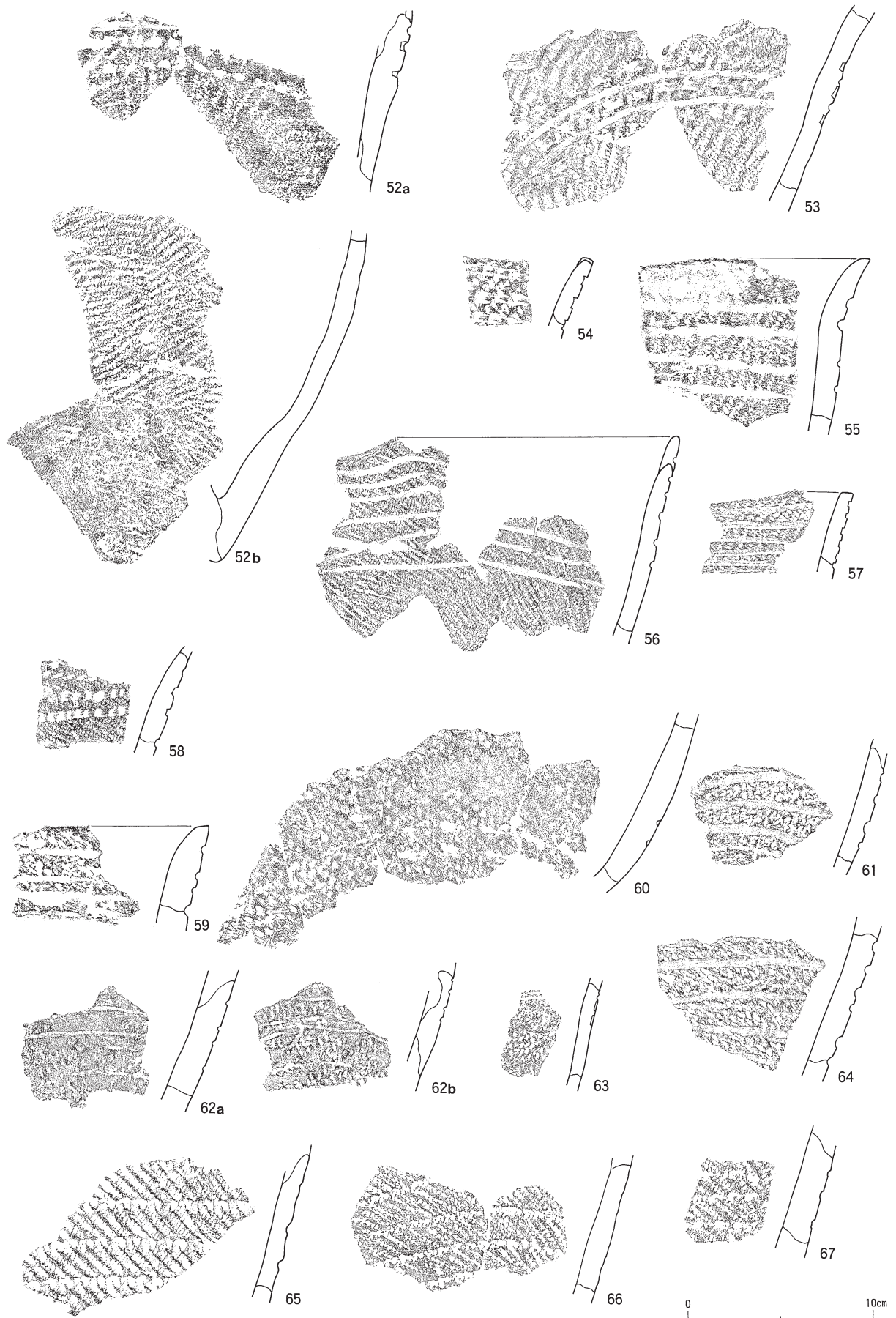


図V-4-13 包含層出土の土器(13)

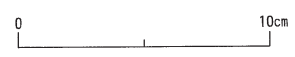
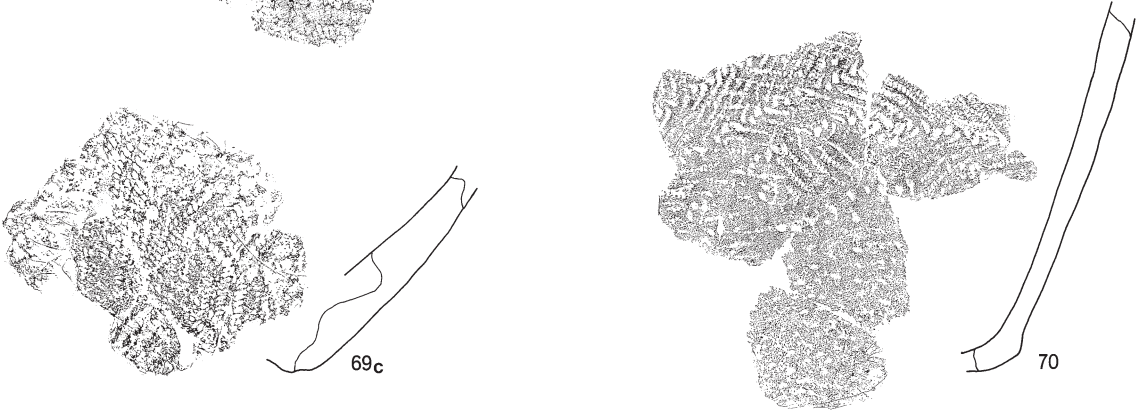
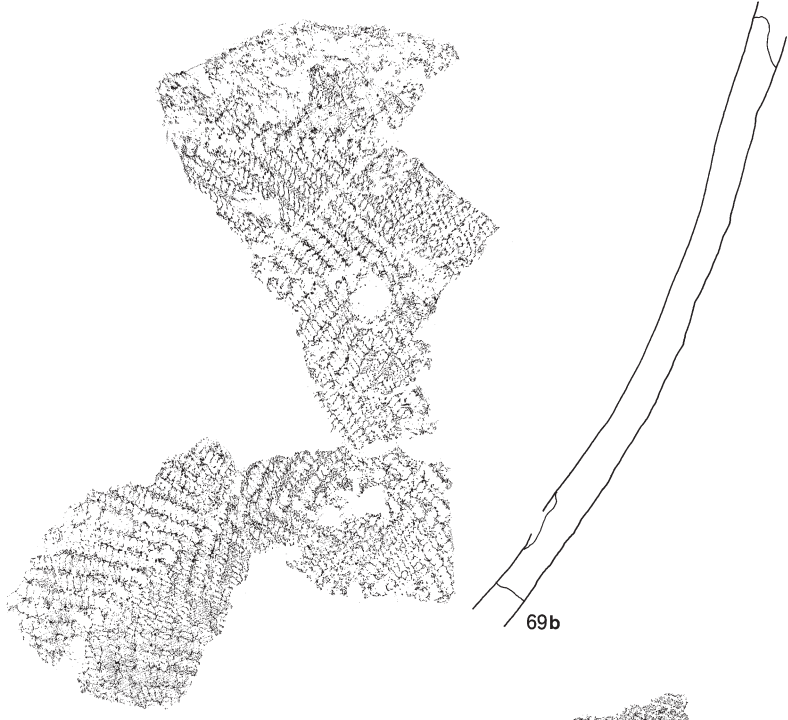
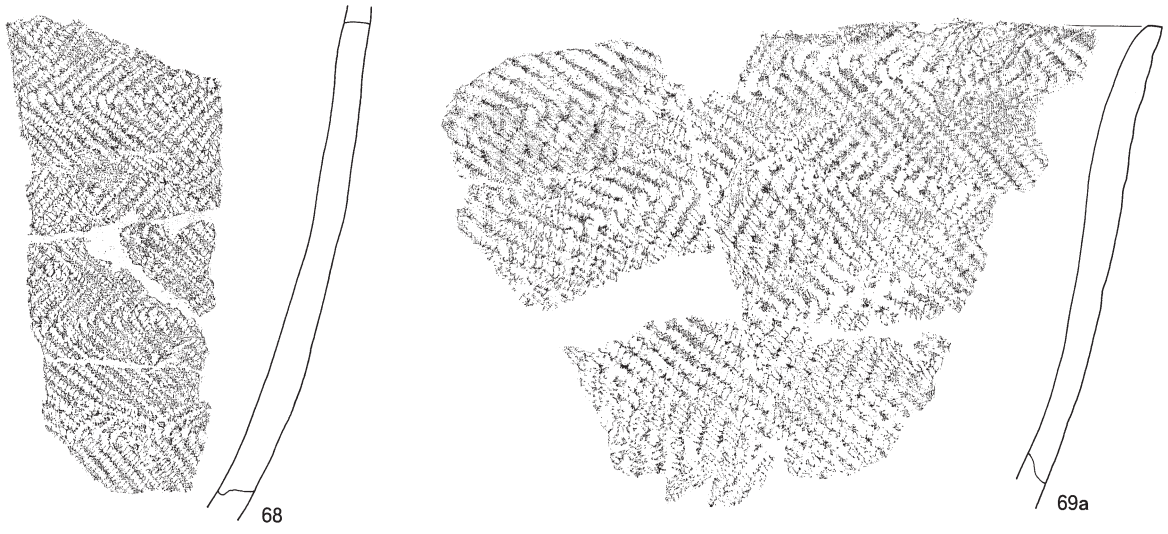


図V-4-14 包含層出土の土器(14)





図V-4-15 包含層出土の土器(15)

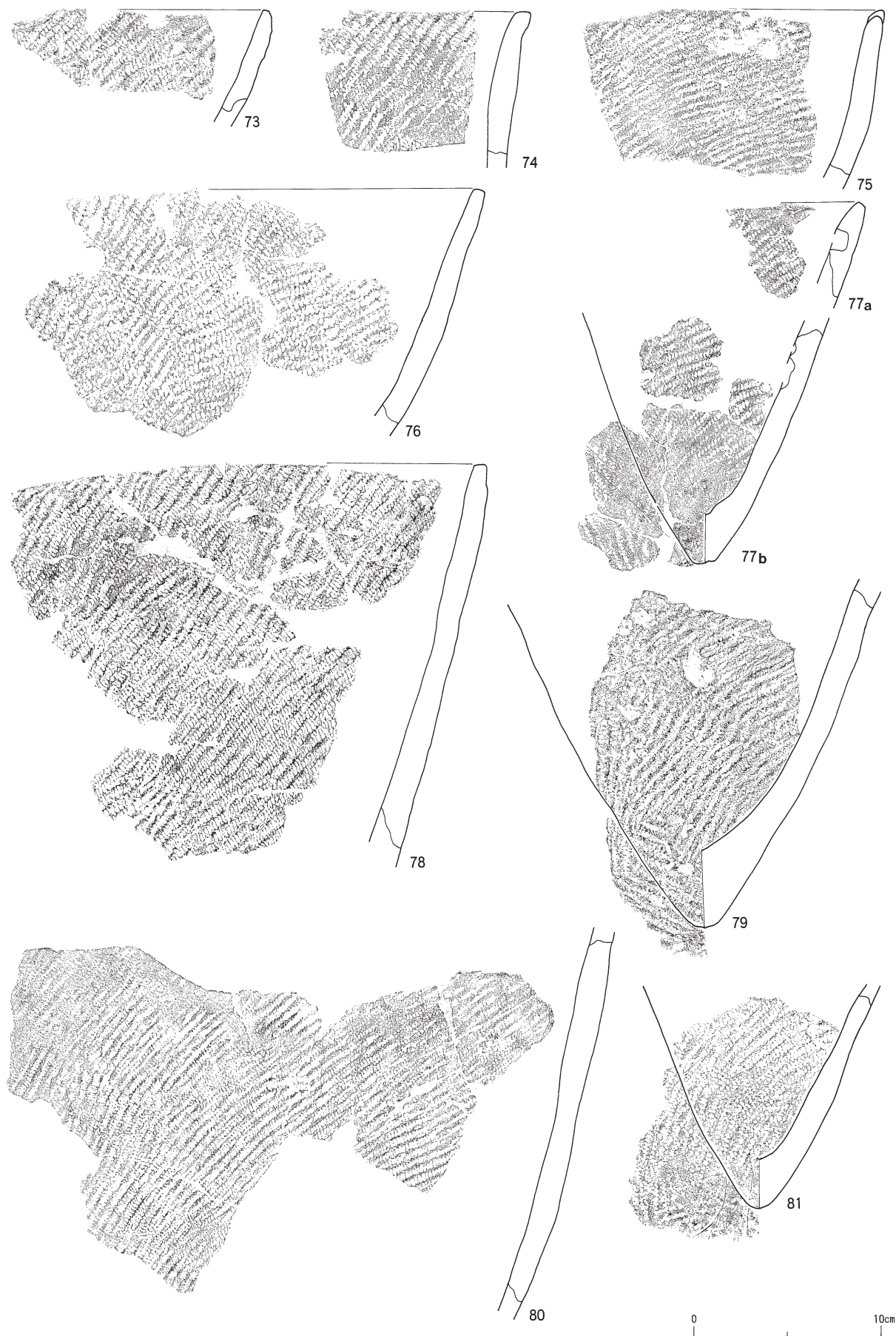


図V-4-16 包含層出土の土器(16)

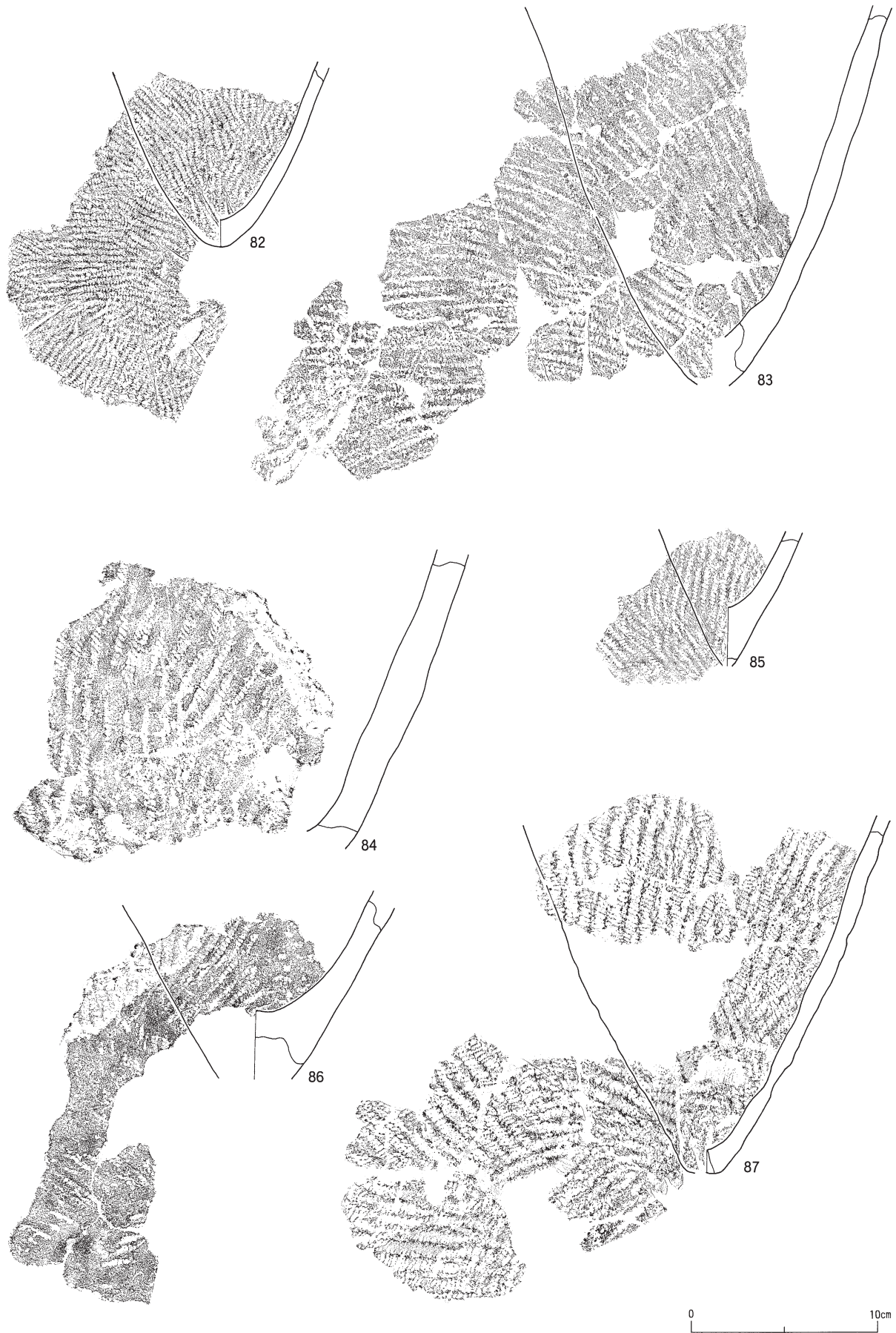


0 10cm

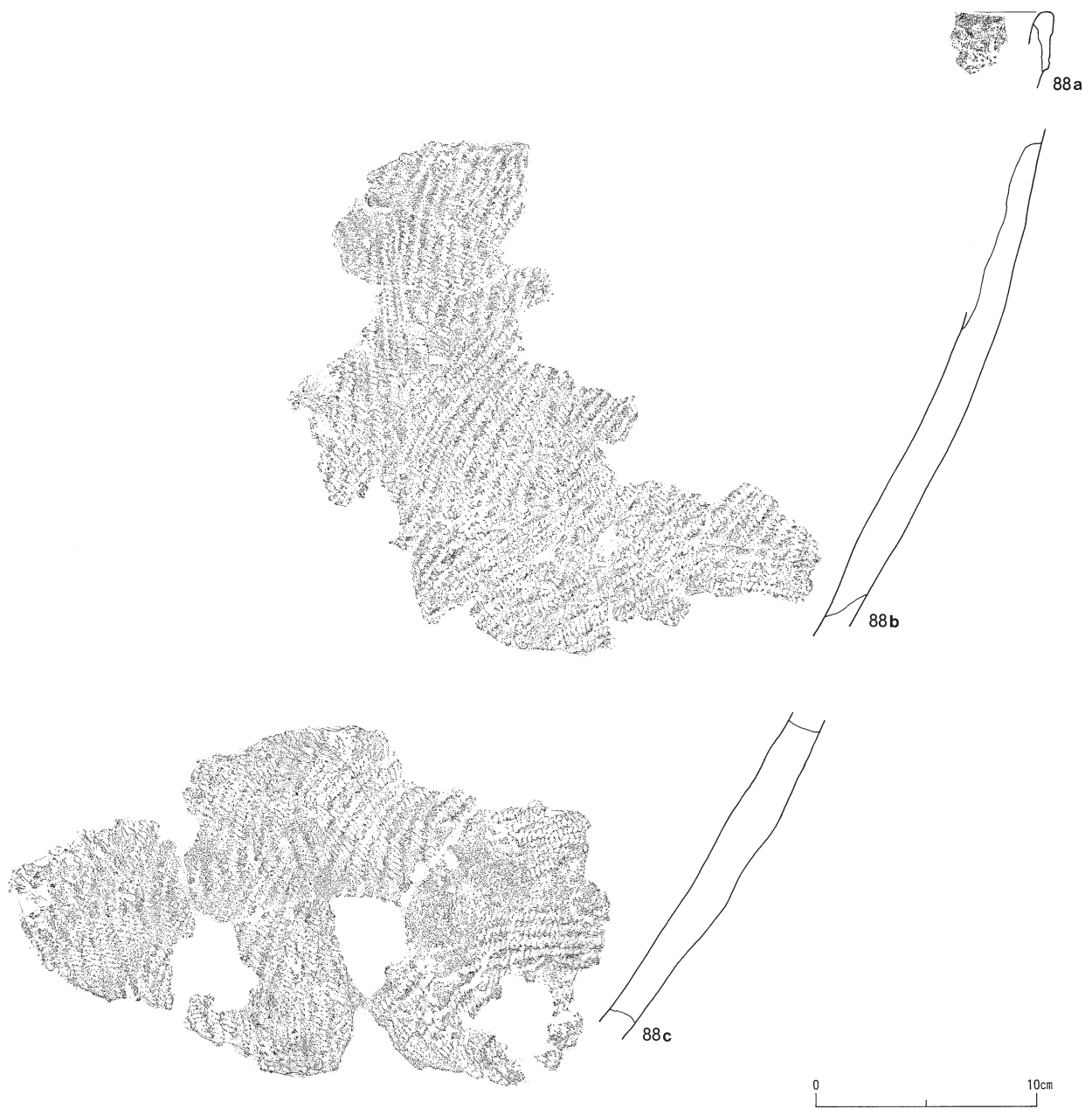
図V-4-17 包含層出土の土器(17)



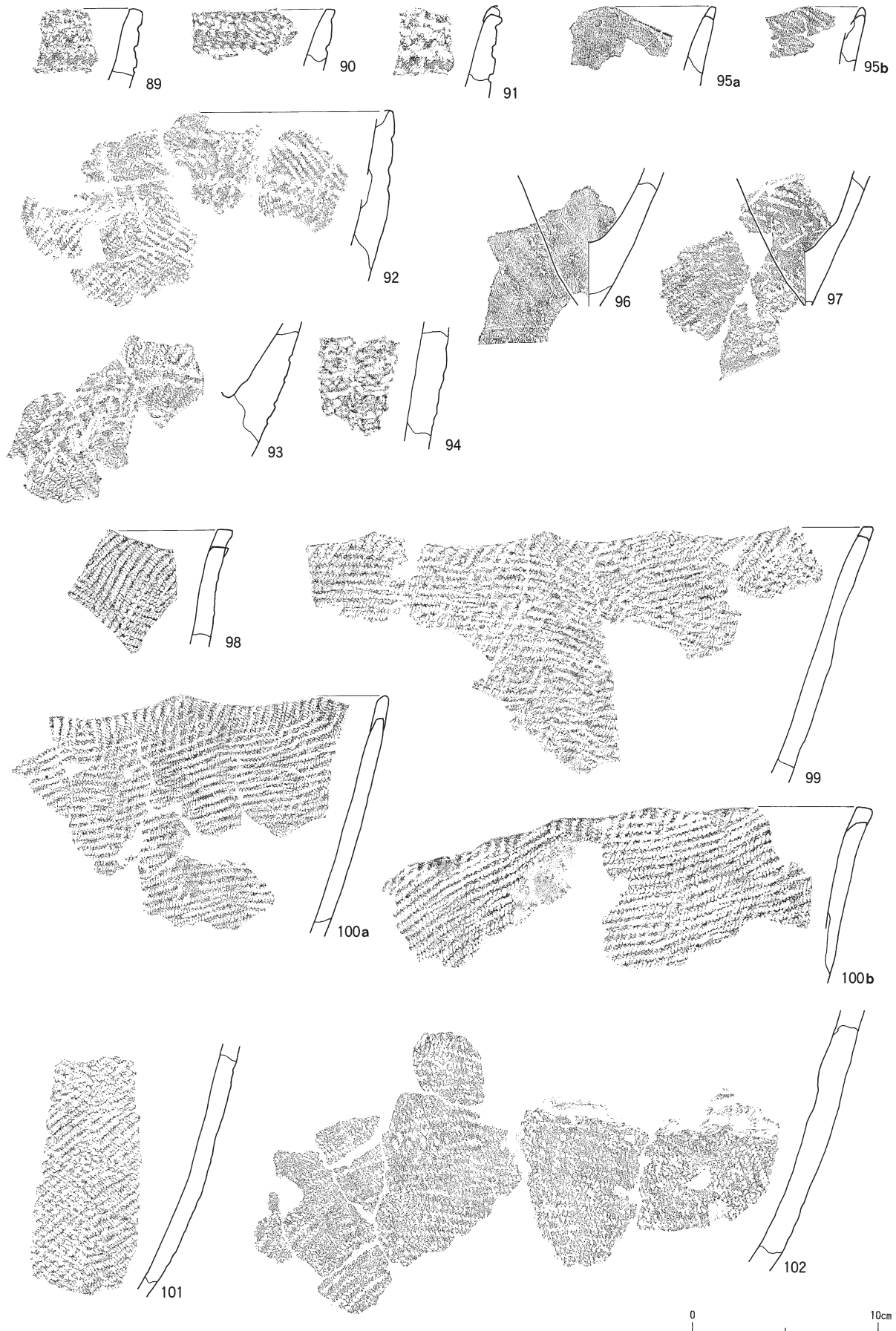
図V-4-18 包含層出土の土器(18)



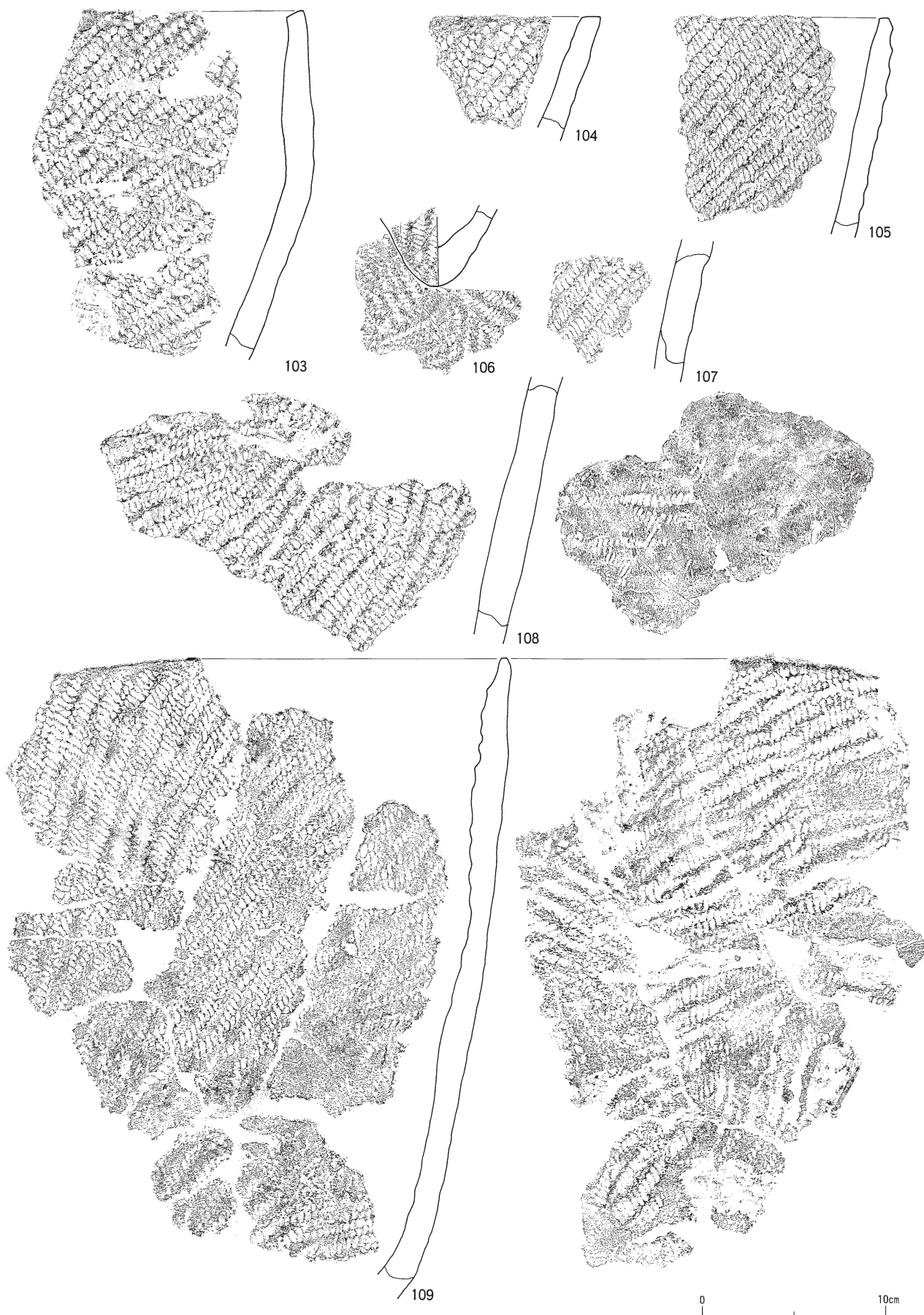
図V-4-19 包含層出土の土器(19)



図V-4-20 包含層出土の土器(20)

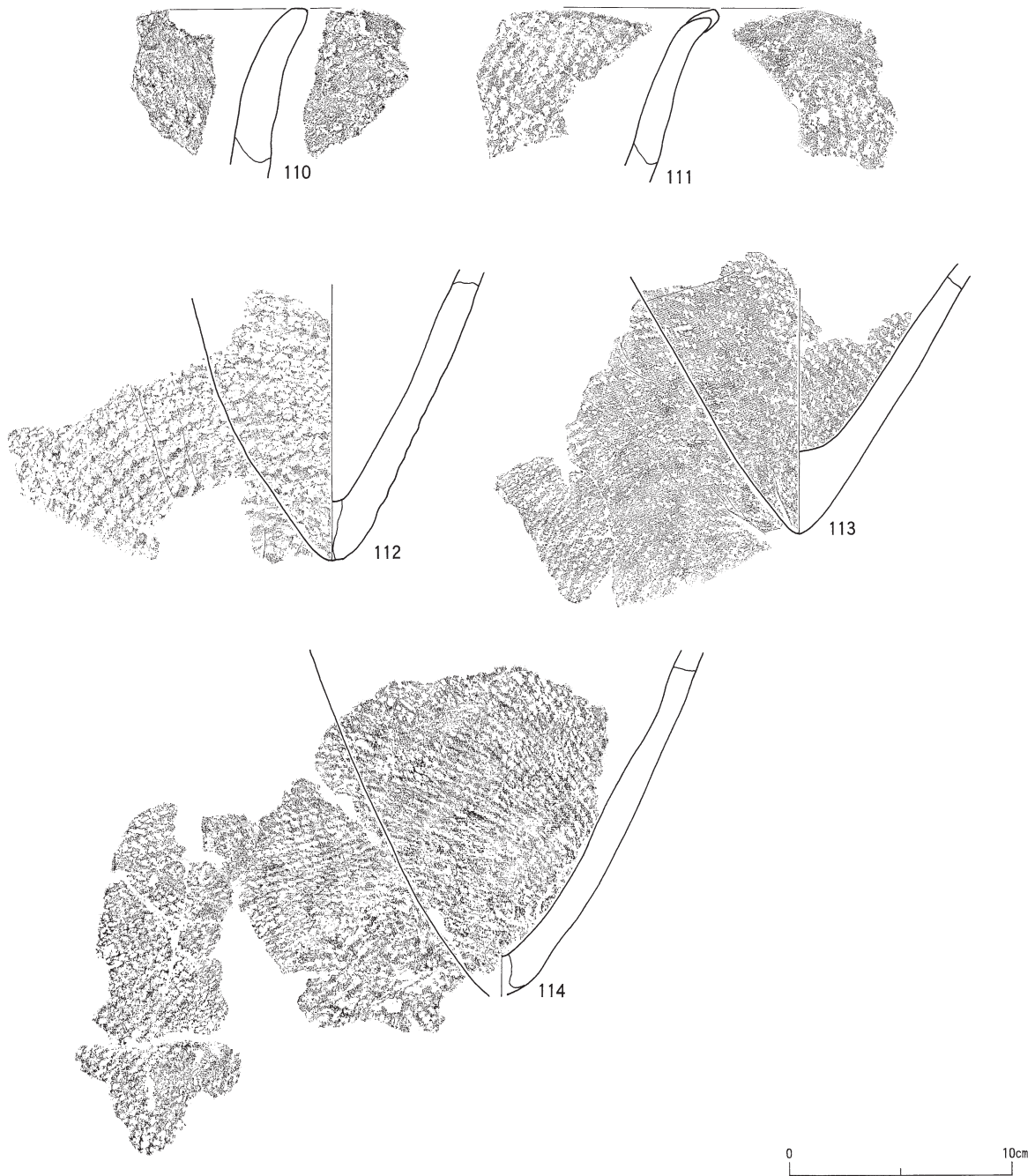


図V-4-21 包含層出土の土器(2)

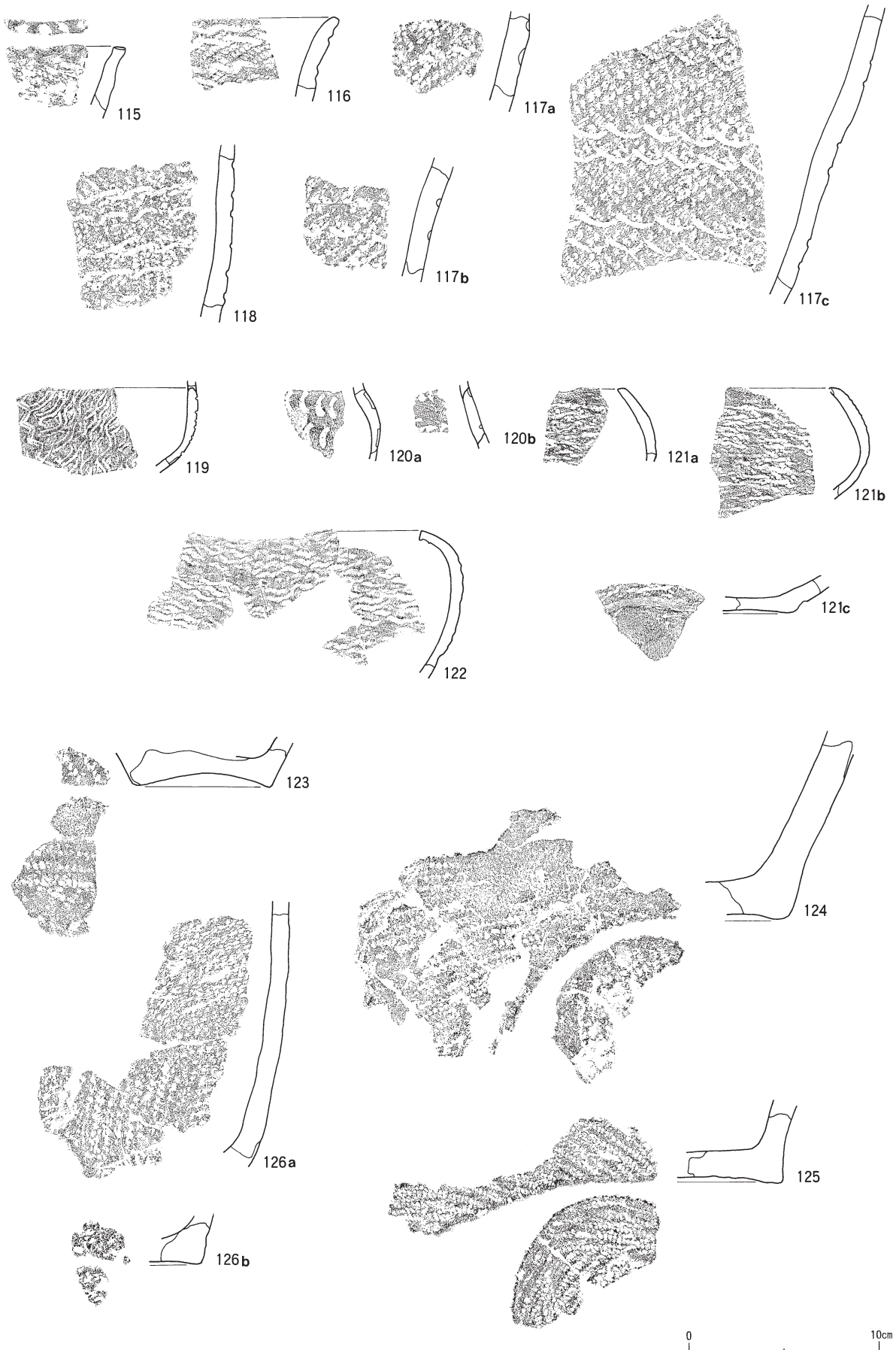


図V-4-22 包含層出土の土器(2)

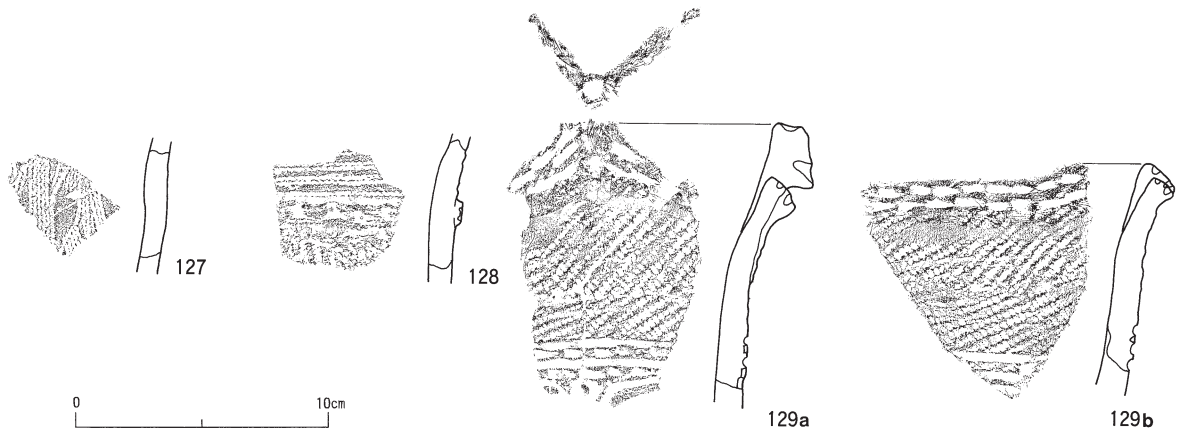




図V-4-23 包含層出土の土器(23)

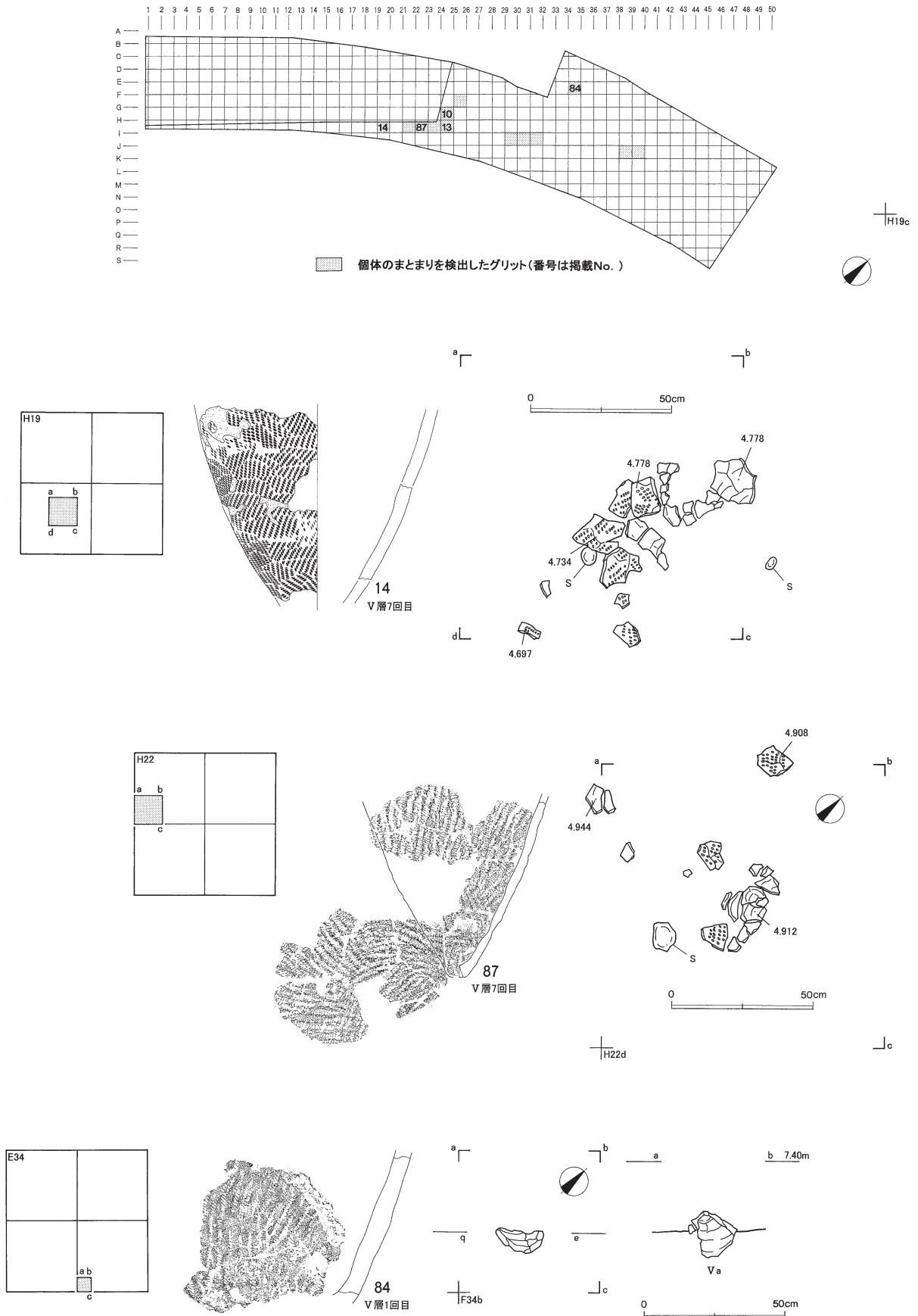


図V-4-24 包含層出土の土器(24)

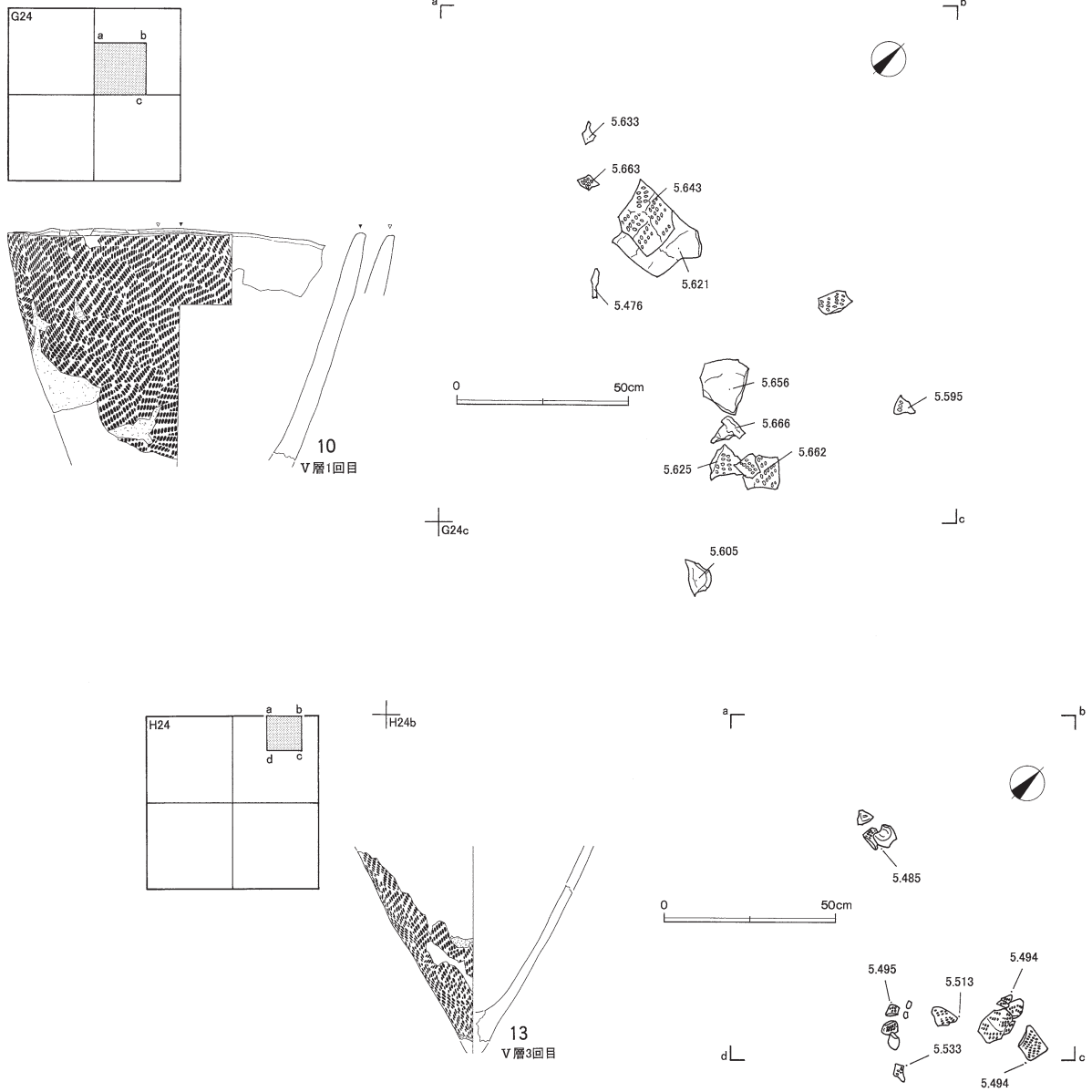


図V-4-25 包含層出土の土器(25)

単節縄文(1) 出土状況 V層

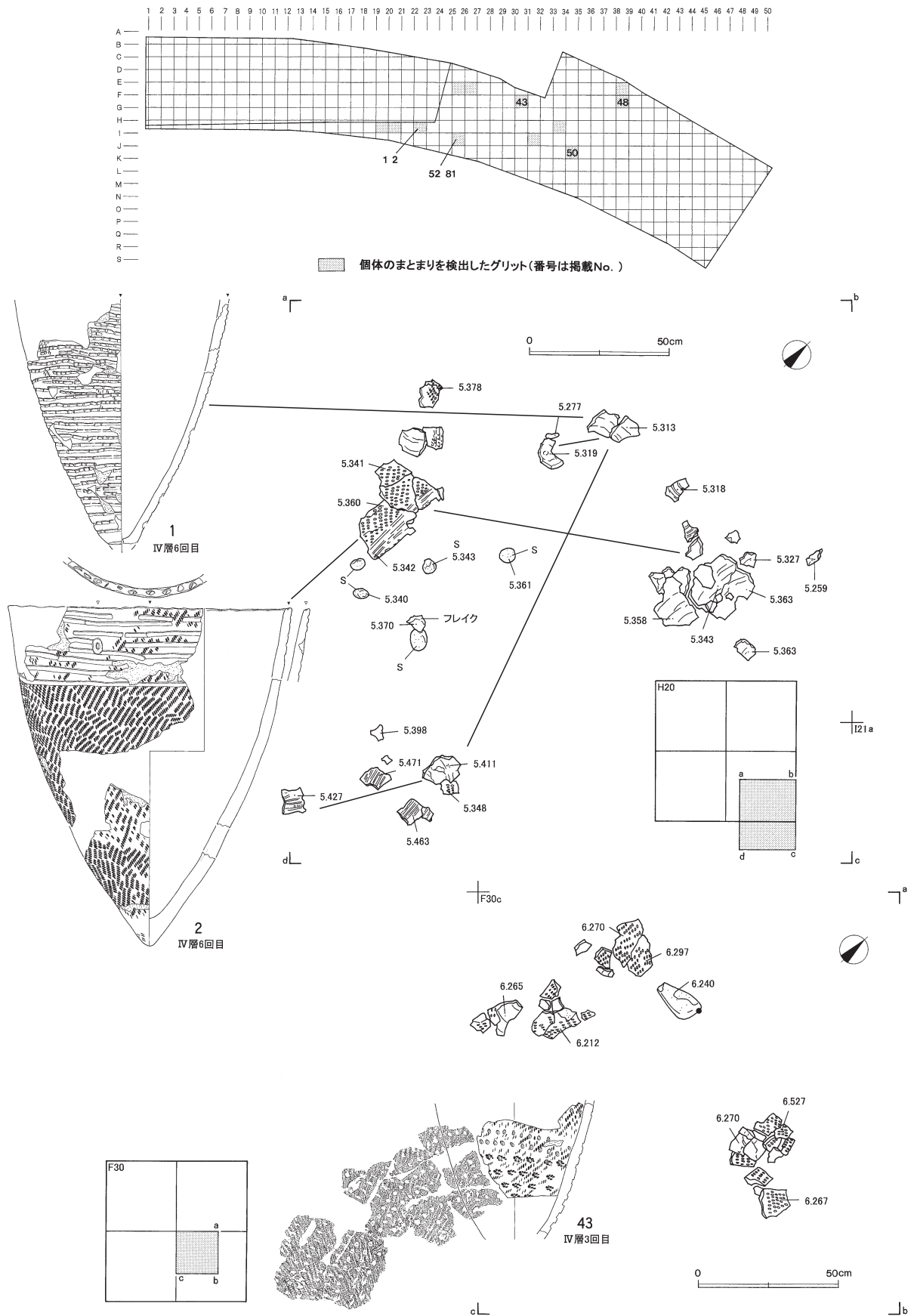


図V-4-26 II群a類土器の出土状況(1)

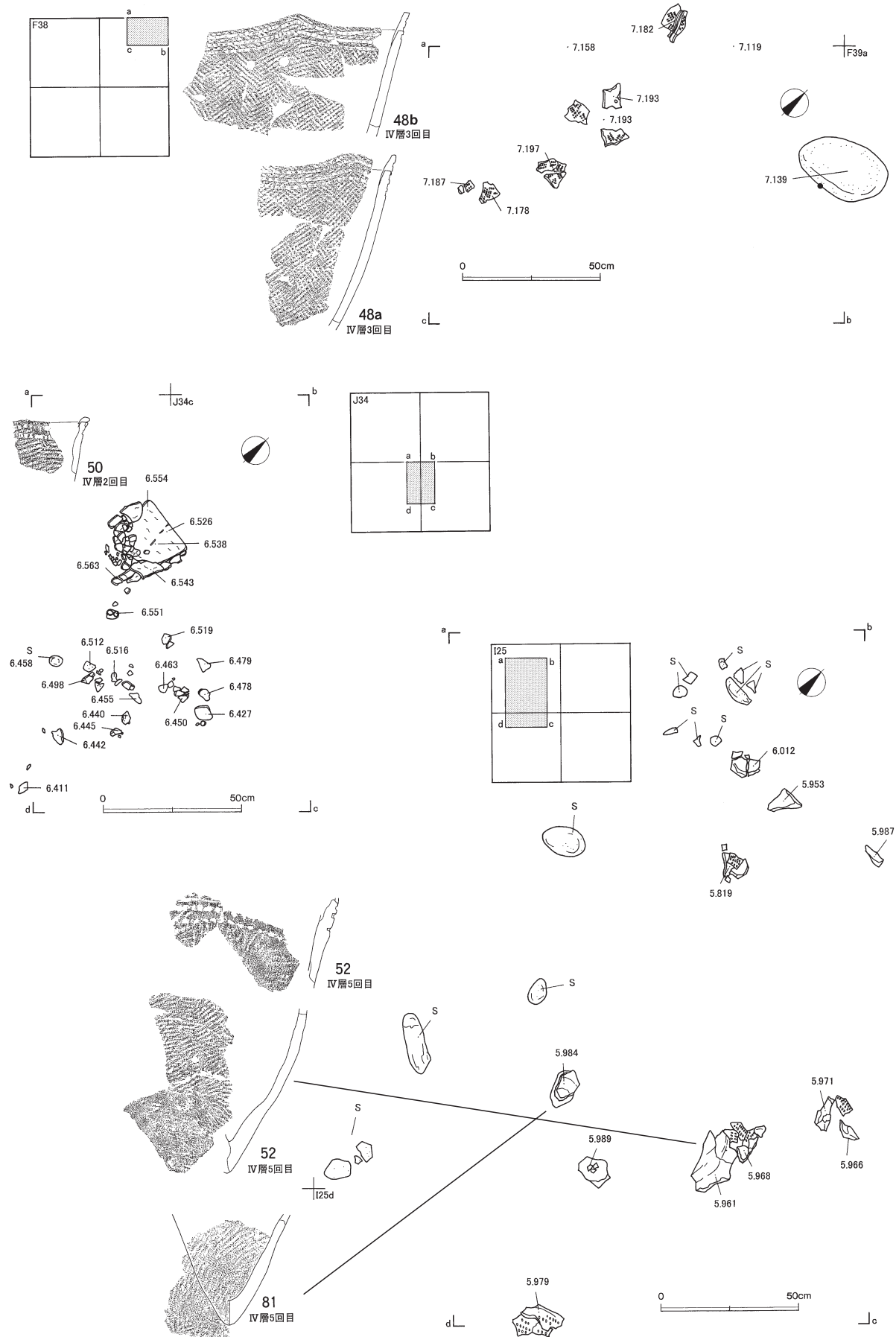


図V-4-27 II群a類土器の出土状況(2)

押引文(1)・沈線文 出土状況 IV層

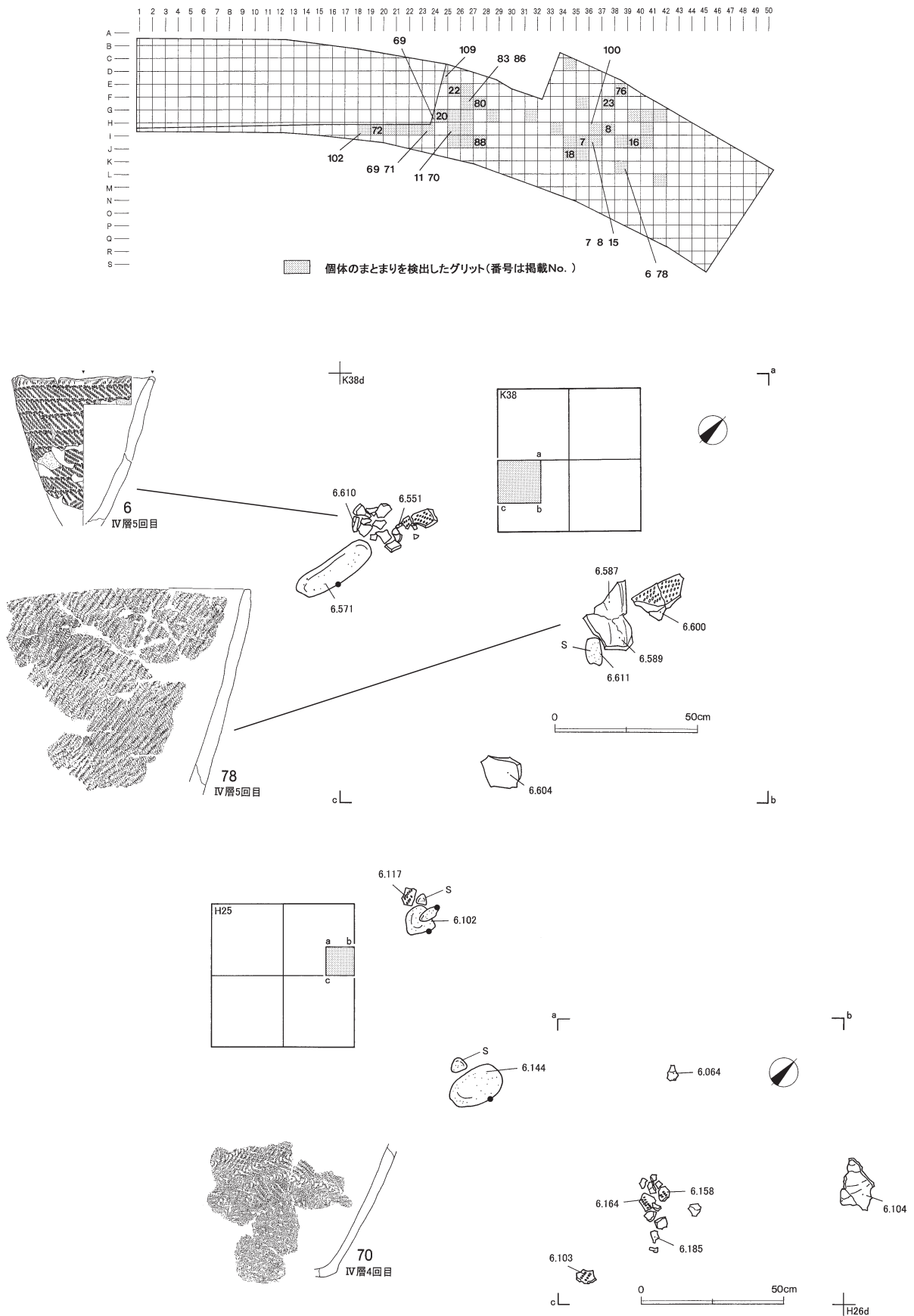


図V-4-28 II群a類土器の出土状況(3)



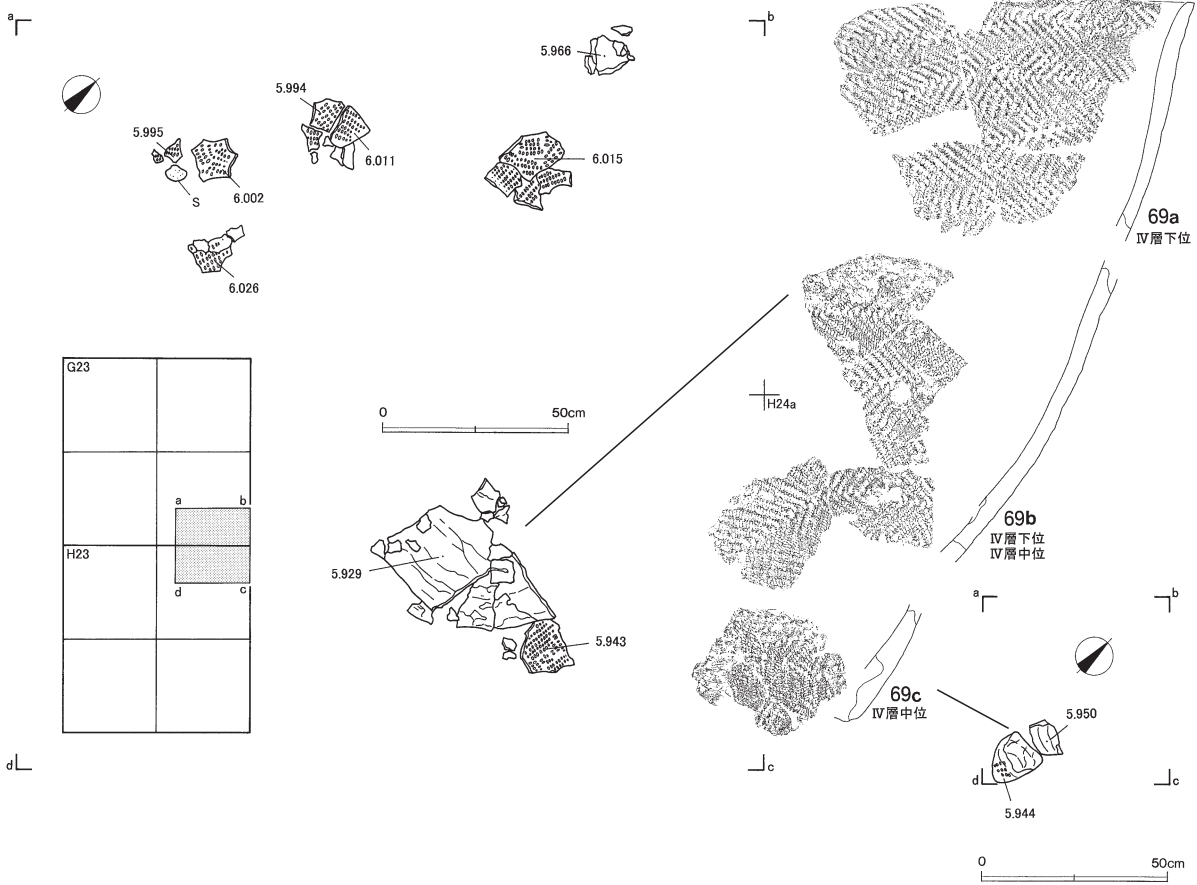
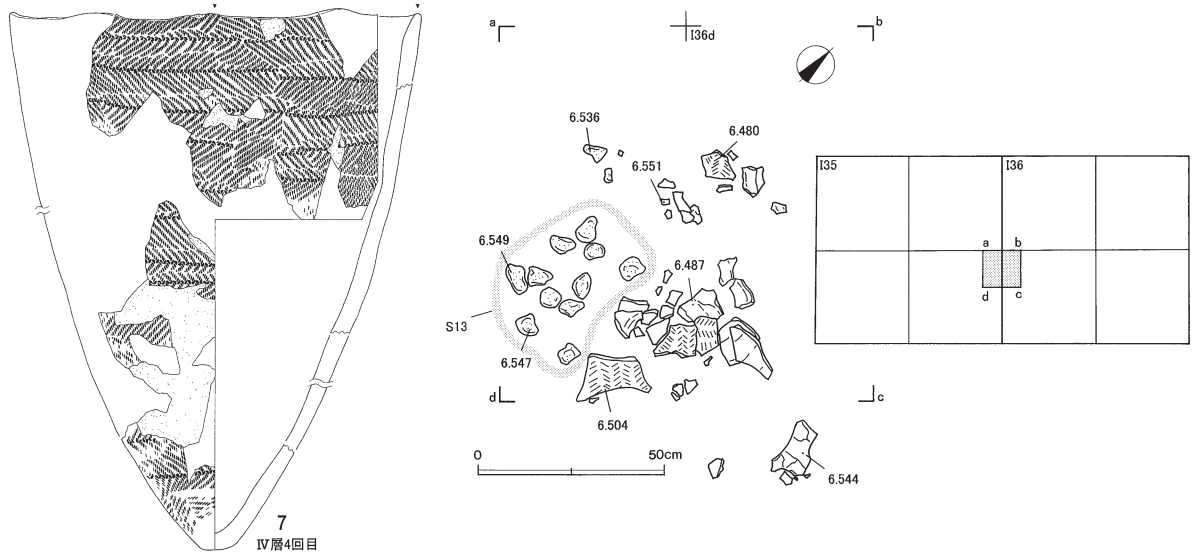
図V-4-29 II群a類土器の出土状況(4)

ループ文(1)・結末羽状縄文・単節縄文(2) 出土状況 IV層

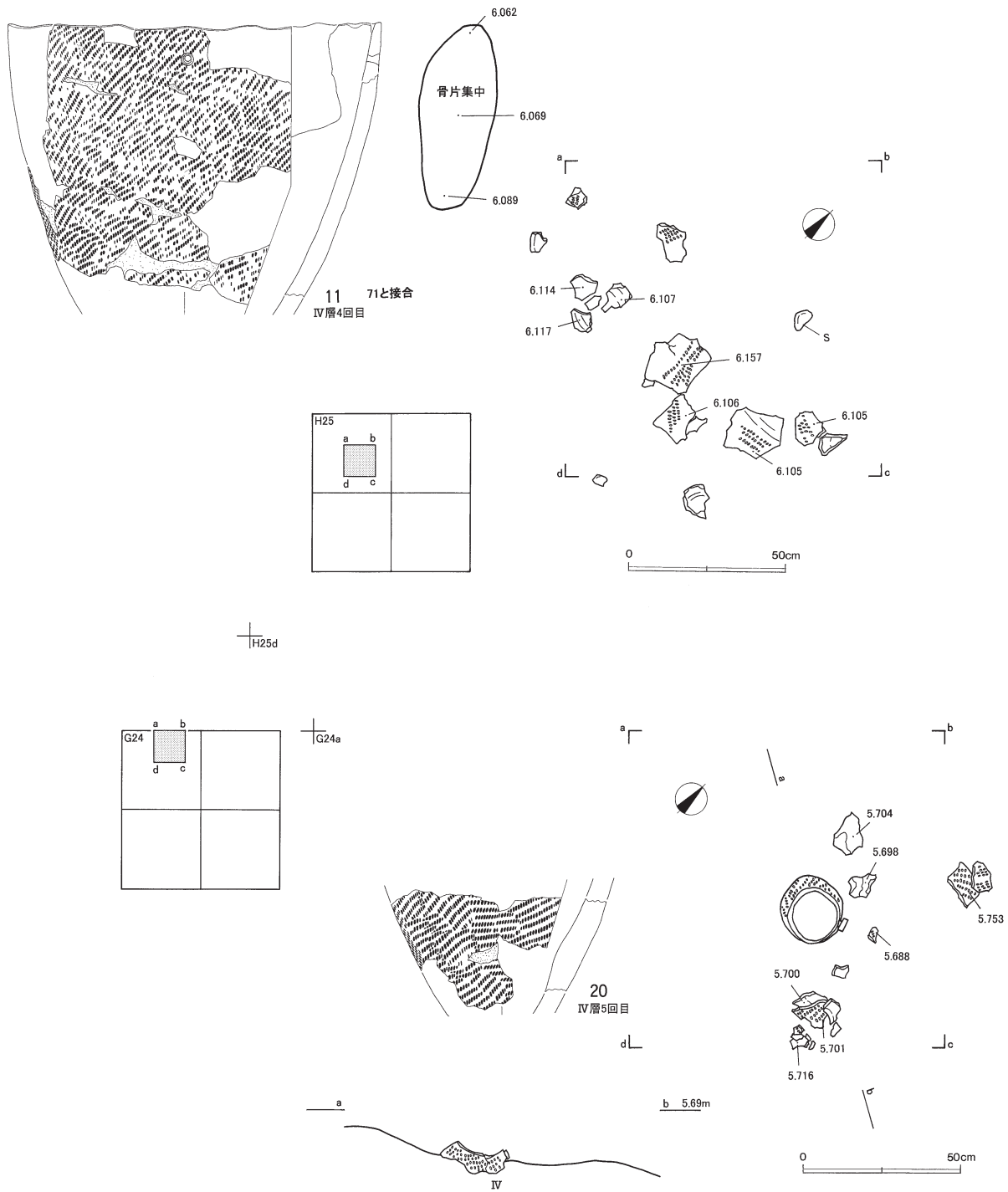


図V-4-30 II群 a類土器の出土状況(5)

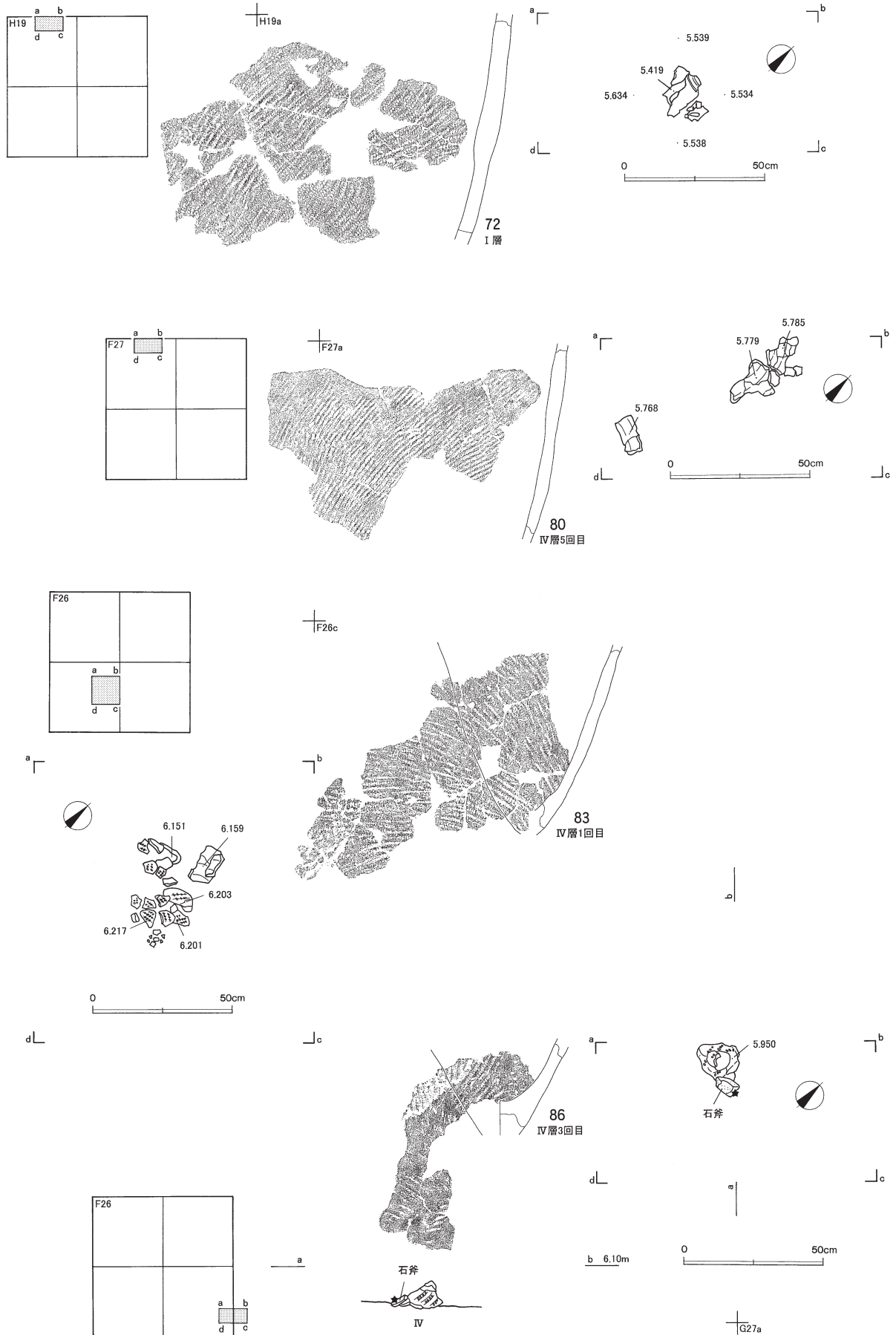




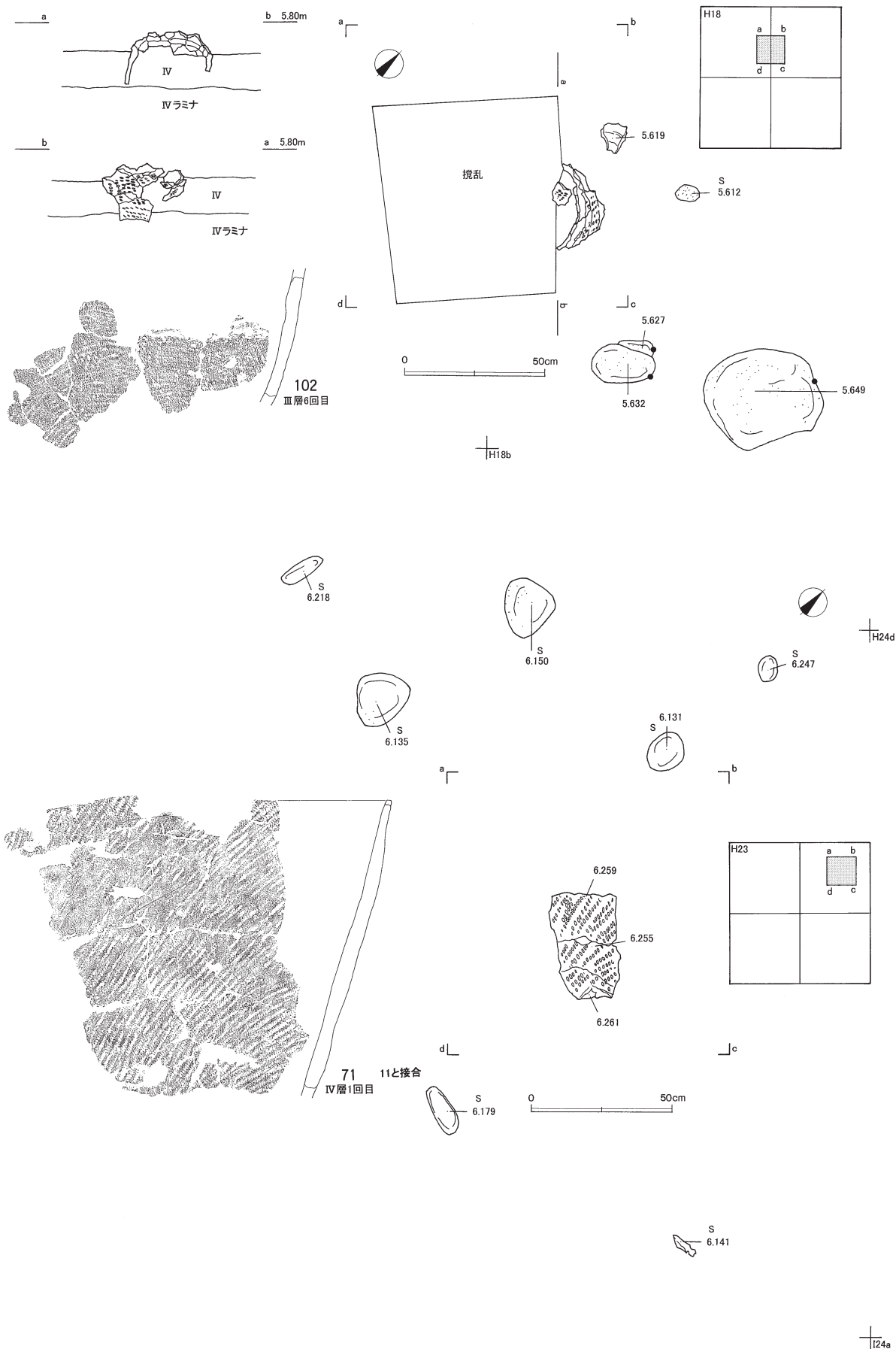
図V-4-31 II群a類土器の出土状況(6)



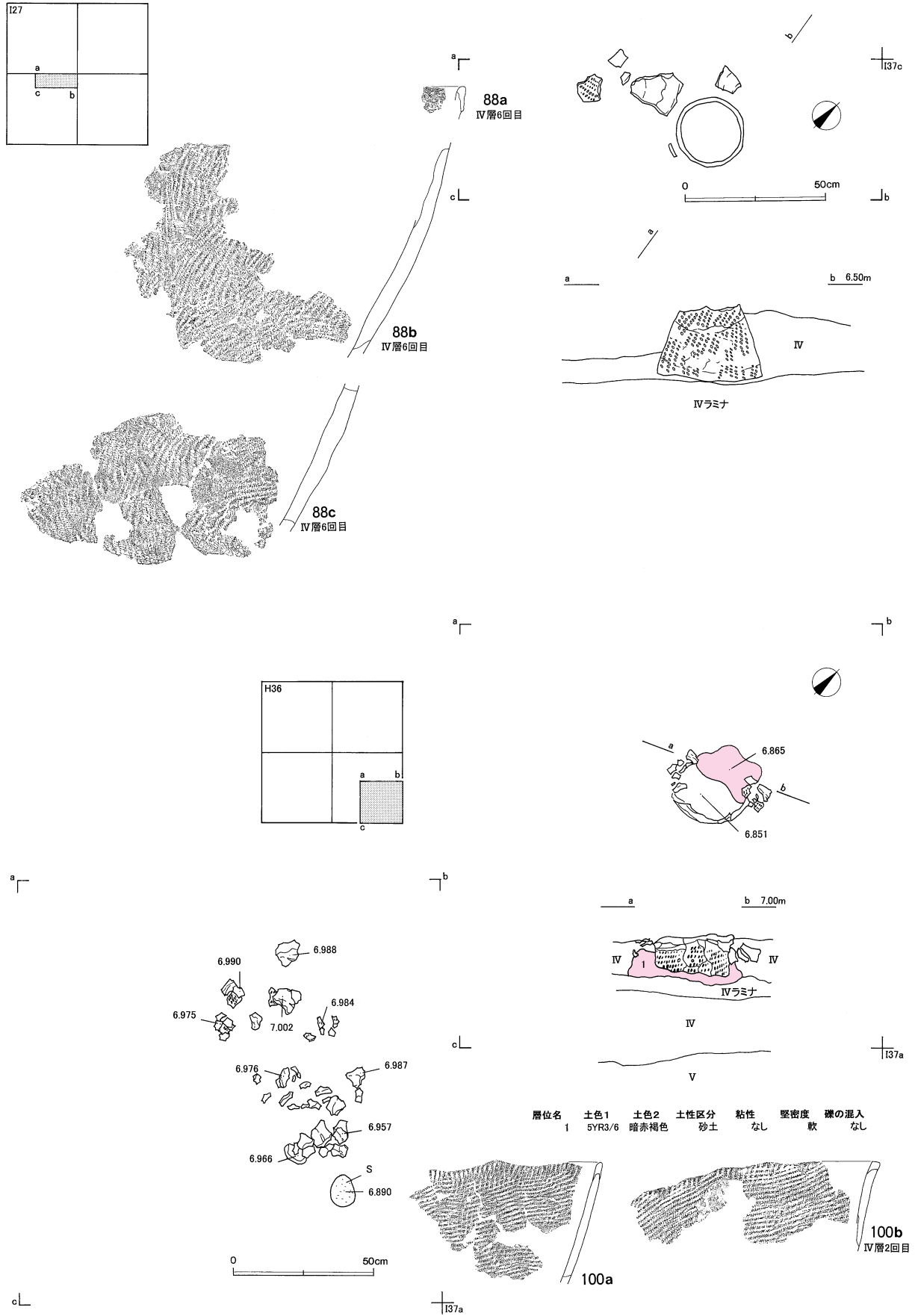
図V-4-32 II群a類土器の出土状況(7)



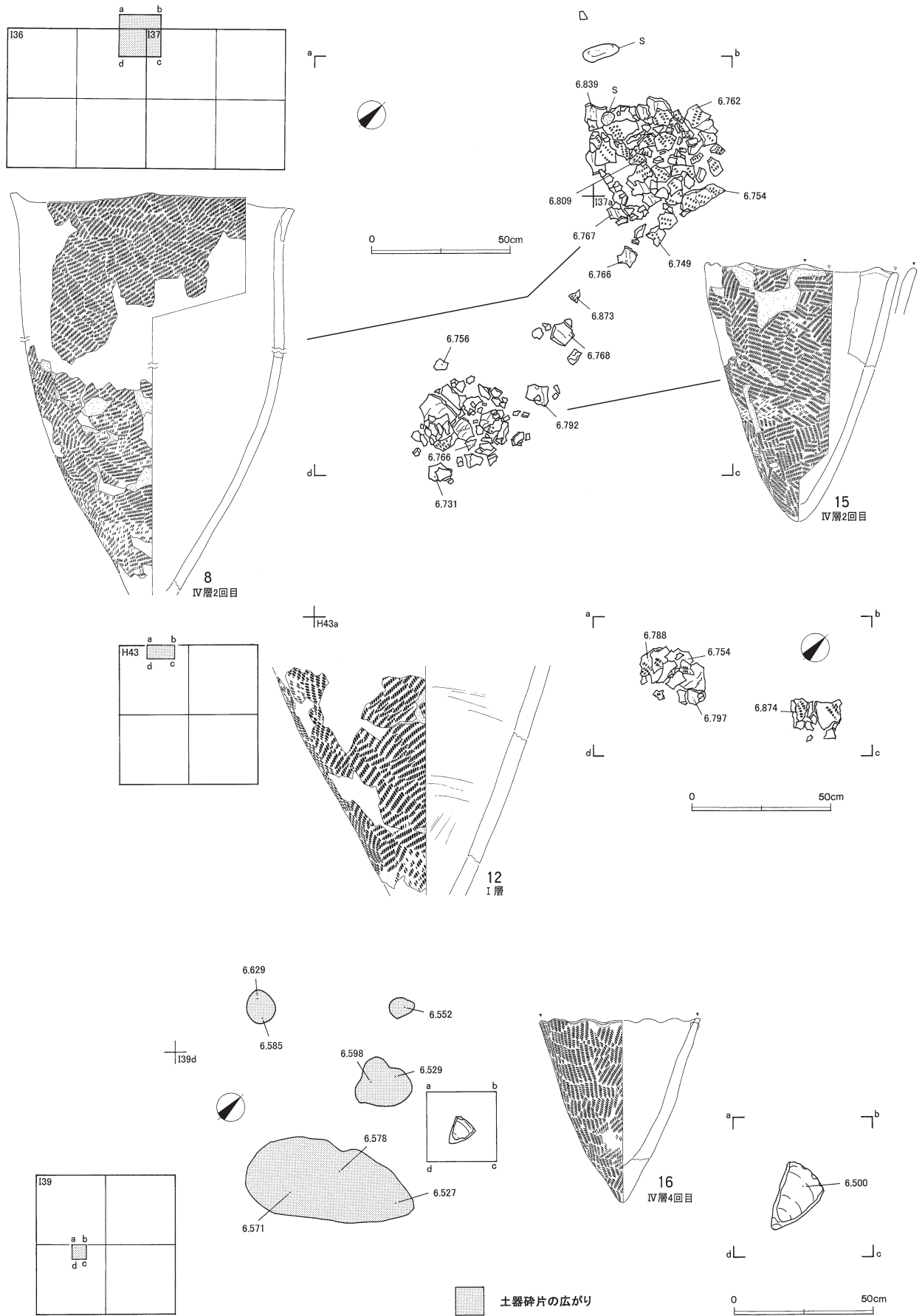
図V-4-33 II群 a類土器の出土状況(8)



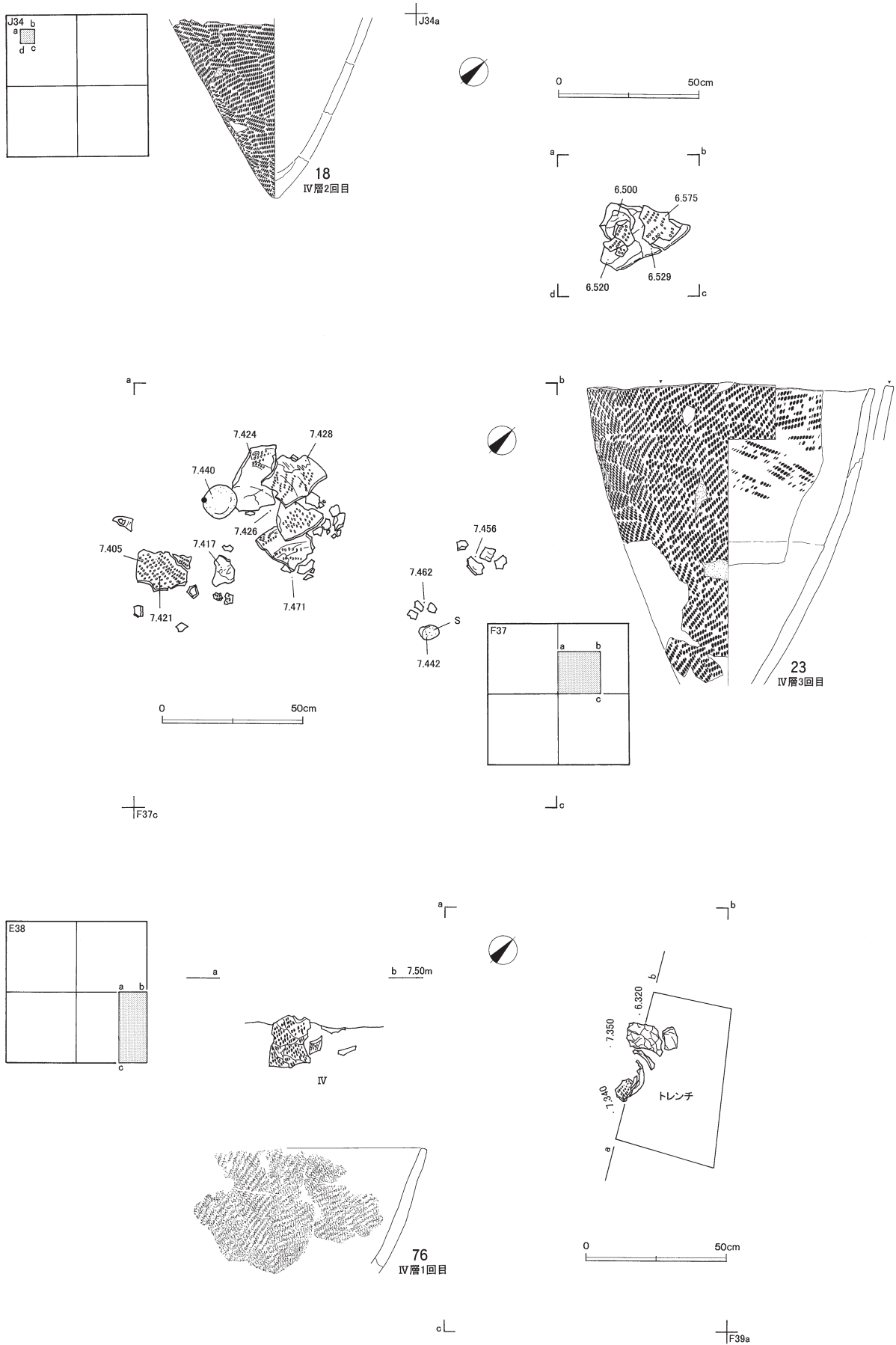
図V-4-34 II群a類土器の出土状況(9)



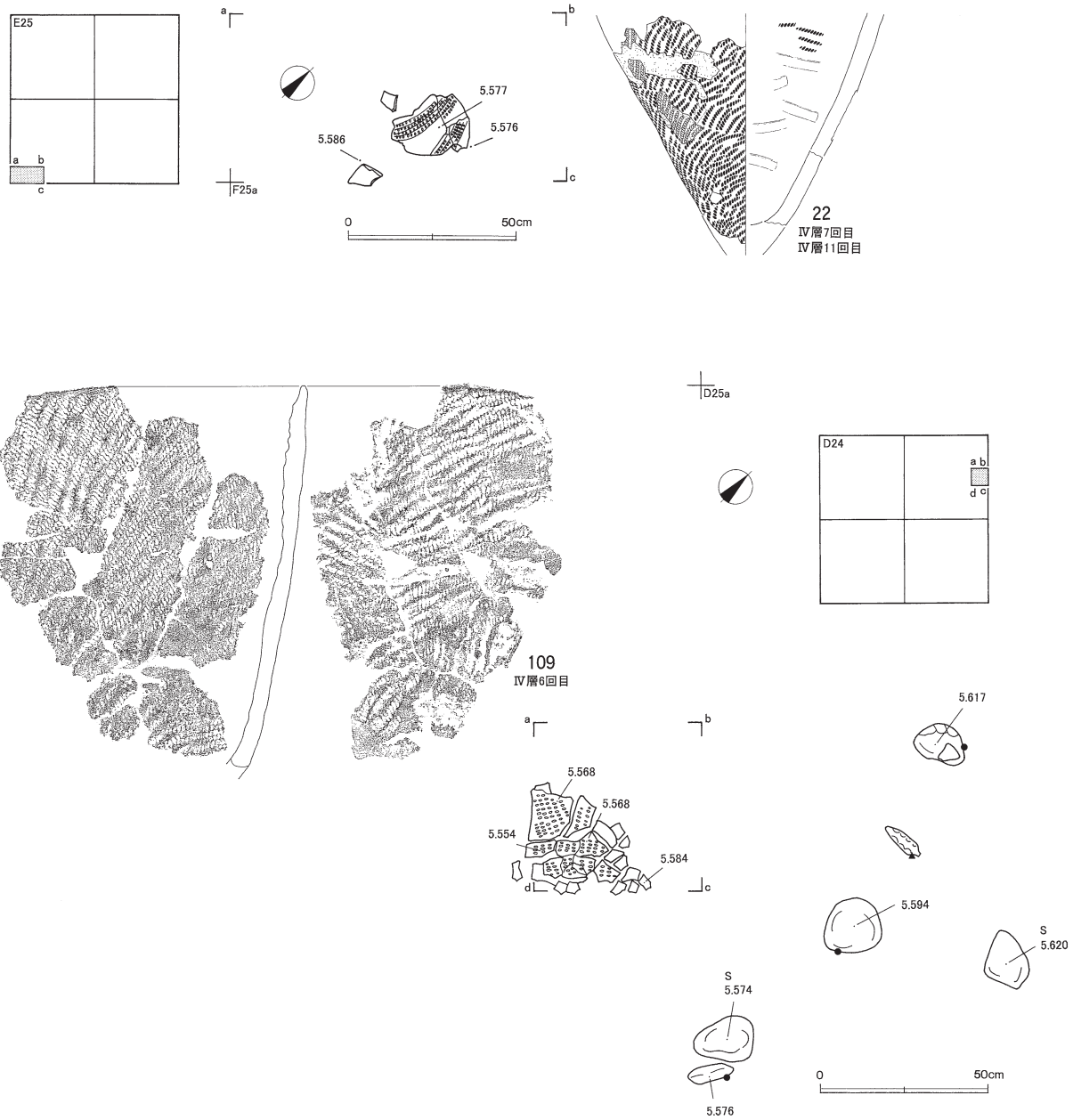
図V-4-35 II群a類土器の出土状況(10)



図V-4-36 II群a類土器の出土状況(11)



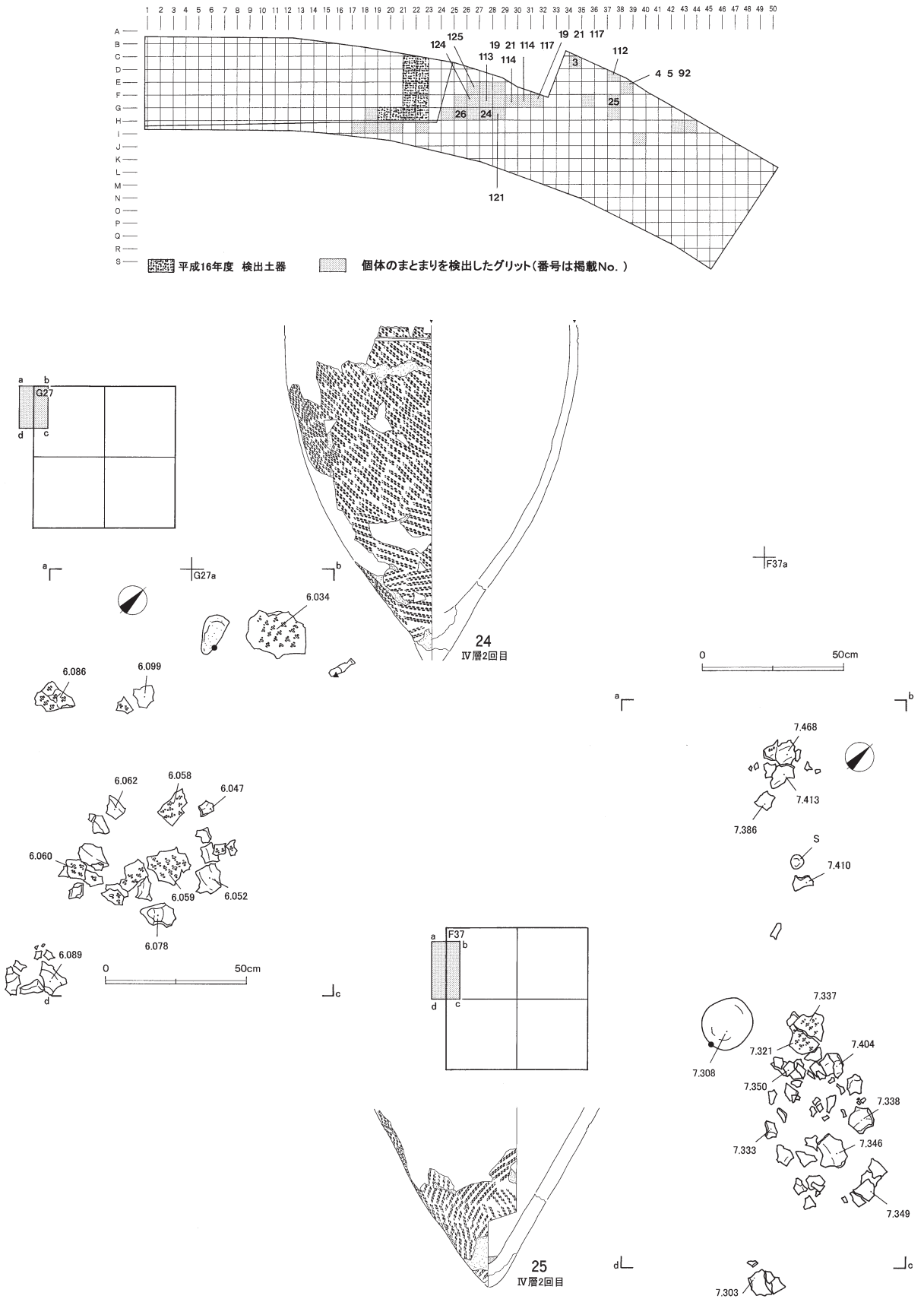
図V-4-37 II群a類土器の出土状況(12)



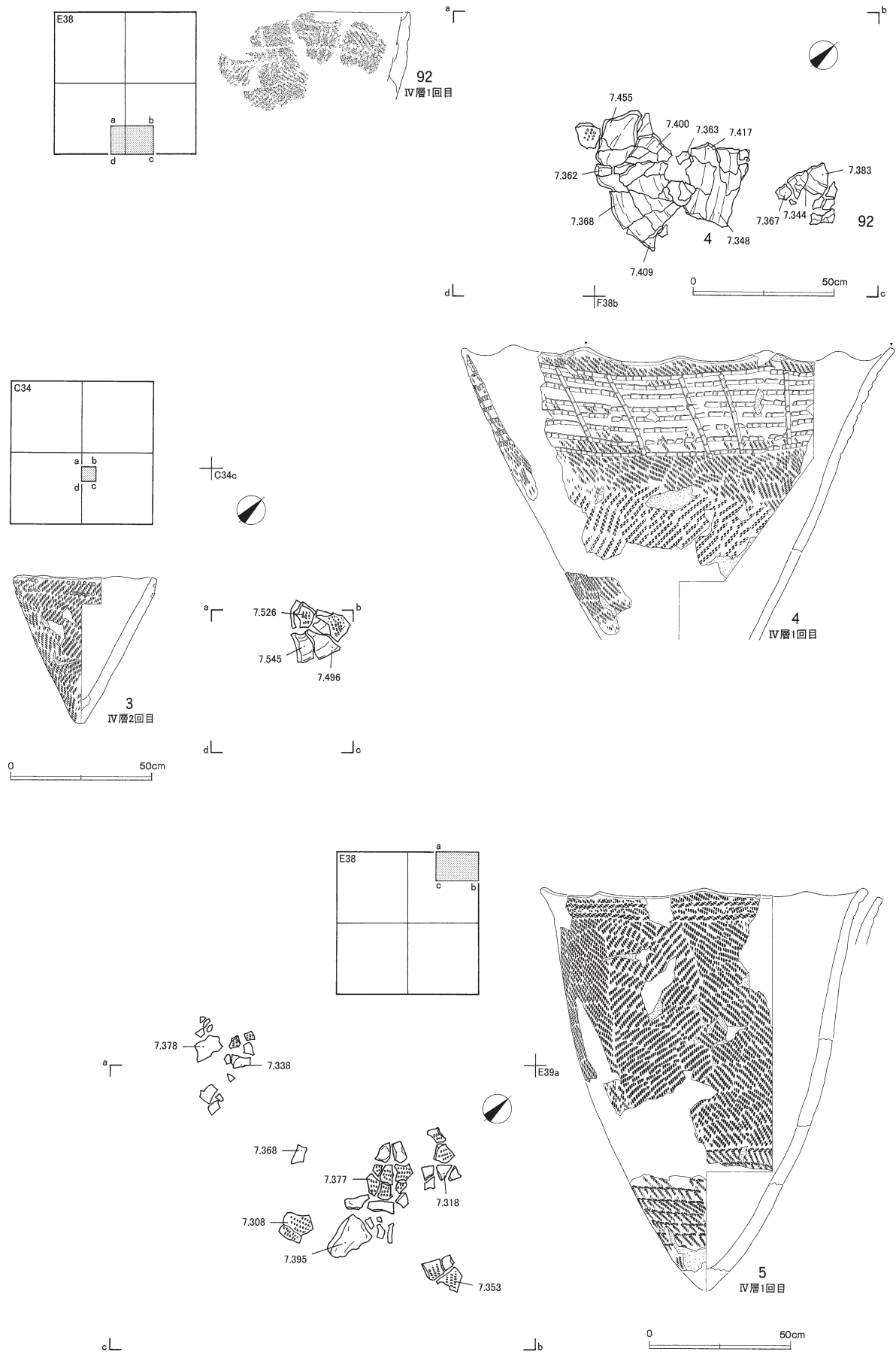
図V-4-38 II群a類土器の出土状況(13)



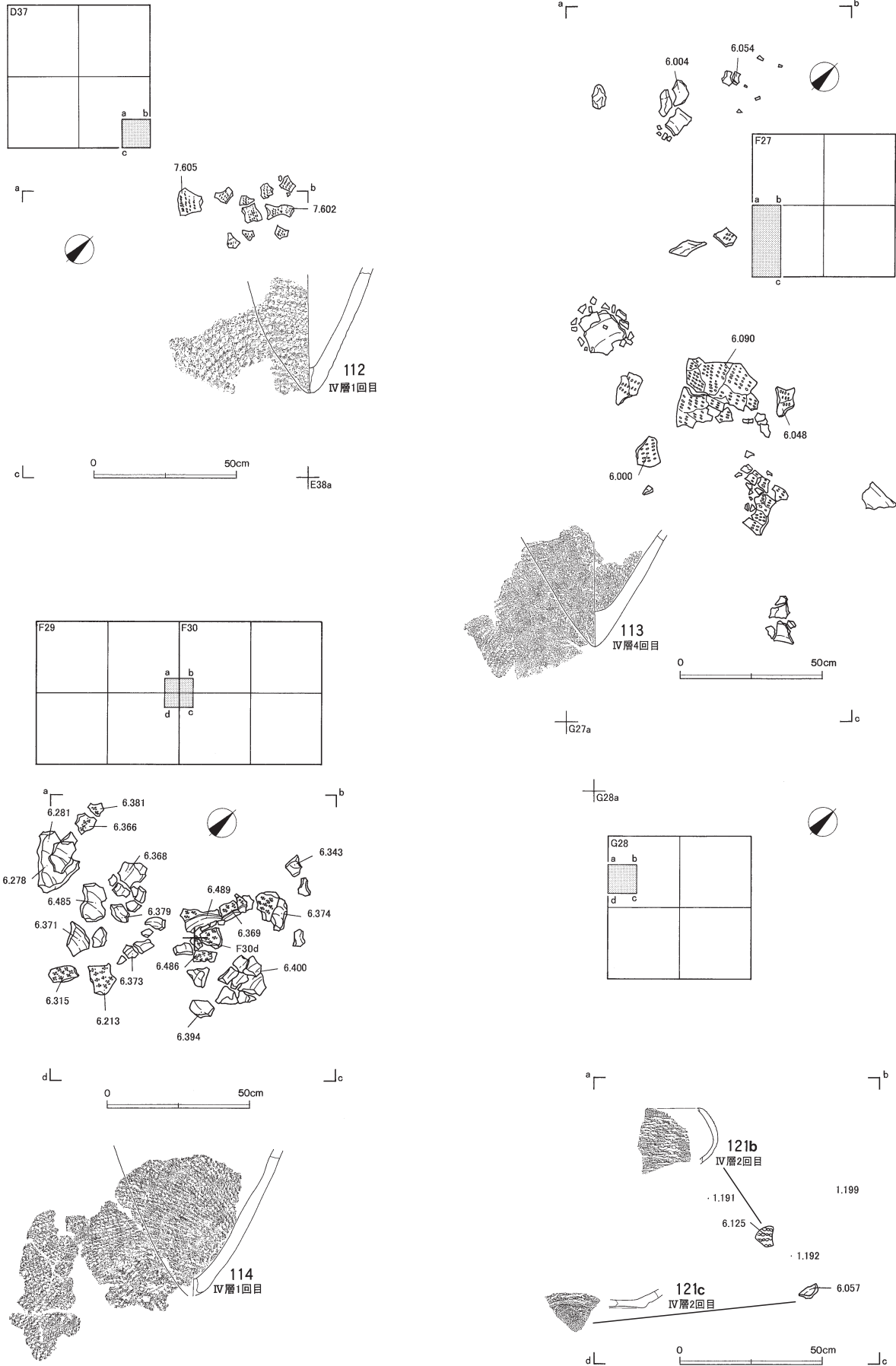
複節縄文・押引文(2)・縄の圧痕文・ループ文(2)  
 綾絡文・大木2a式・平底 出土状況 IV層



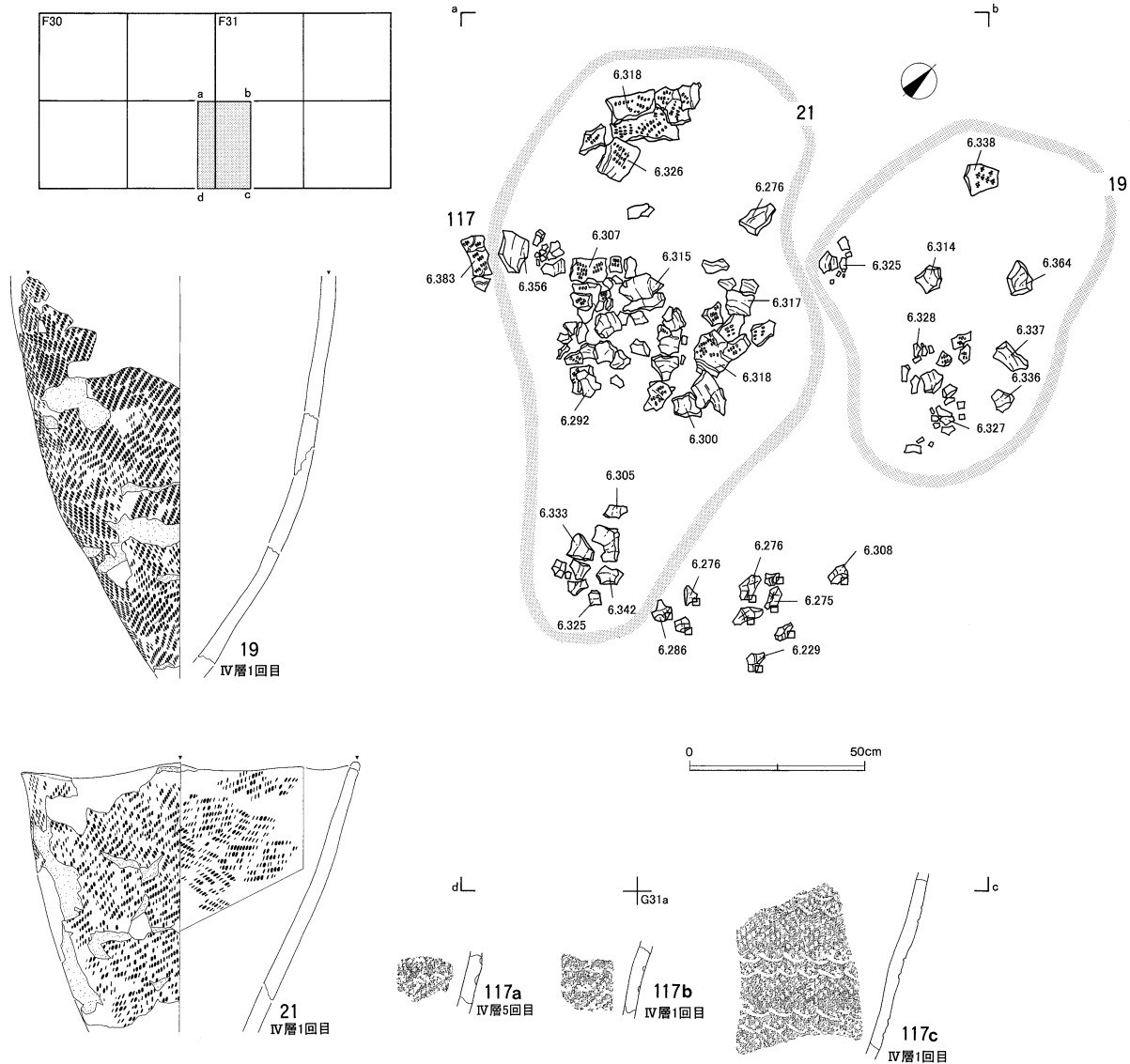
図V-4-39 II群 a類土器の出土状況(14)



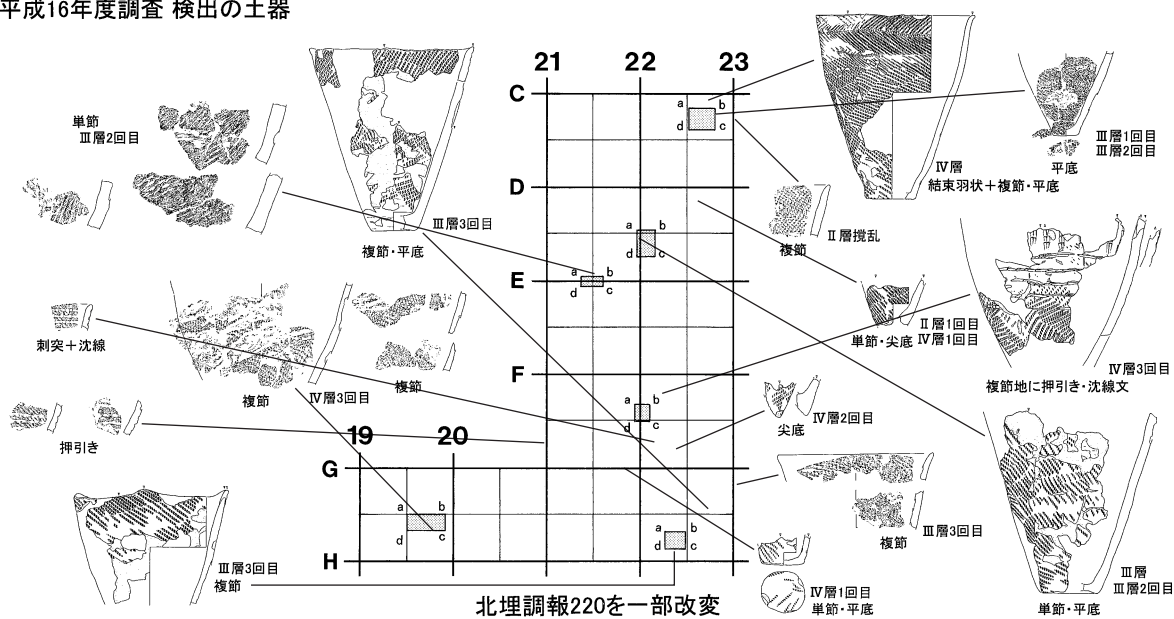
図V-4-40 II群 a類土器の出土状況(15)



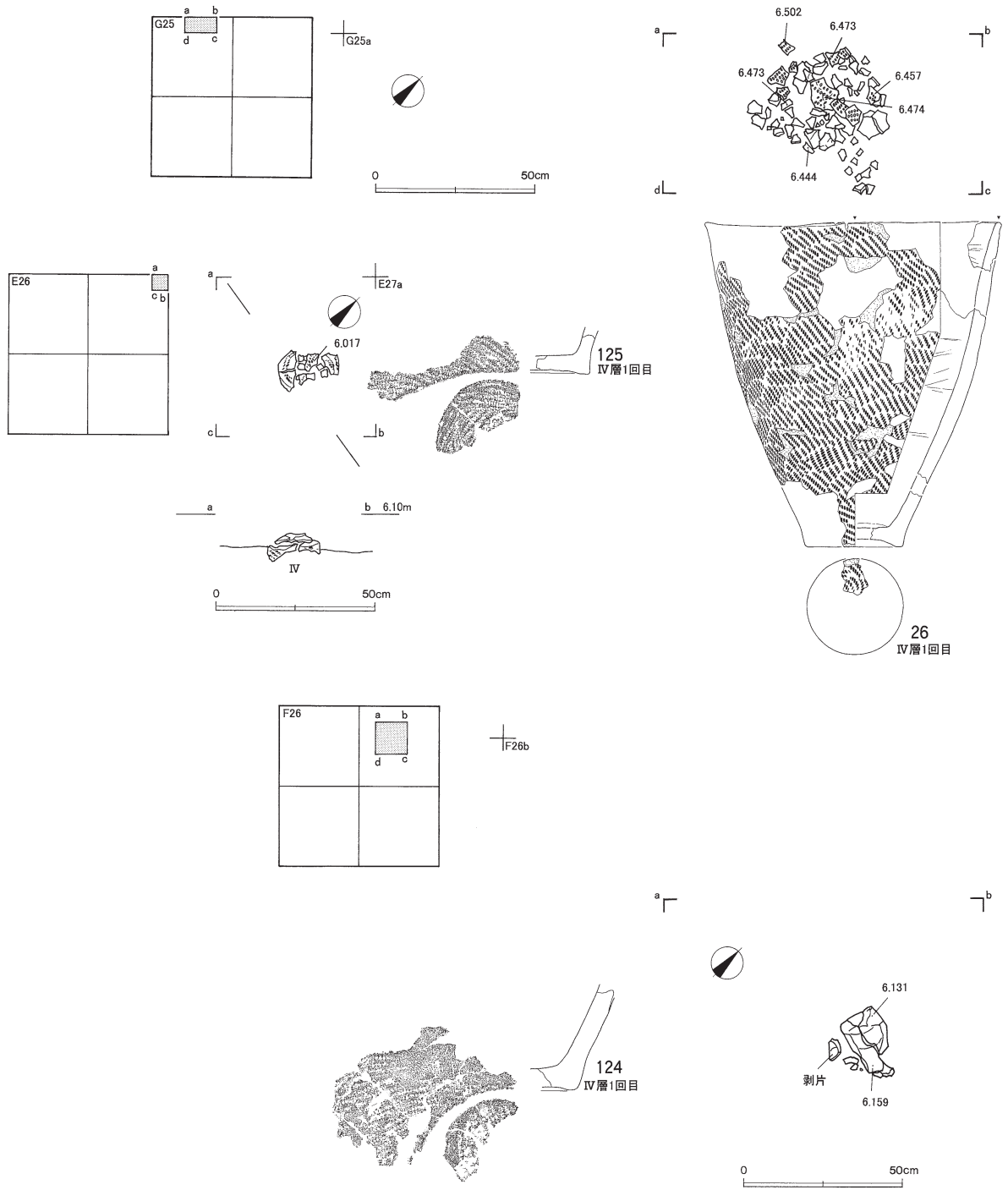
図V-4-41 II群a類土器の出土状況(16)



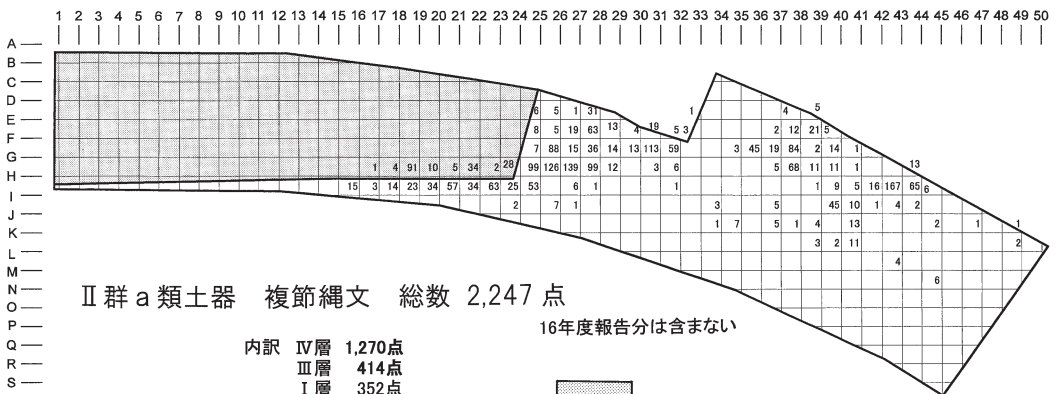
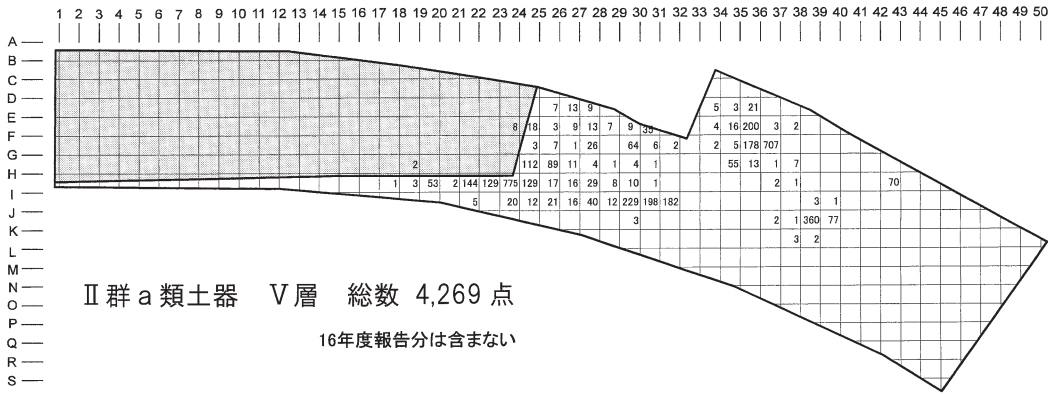
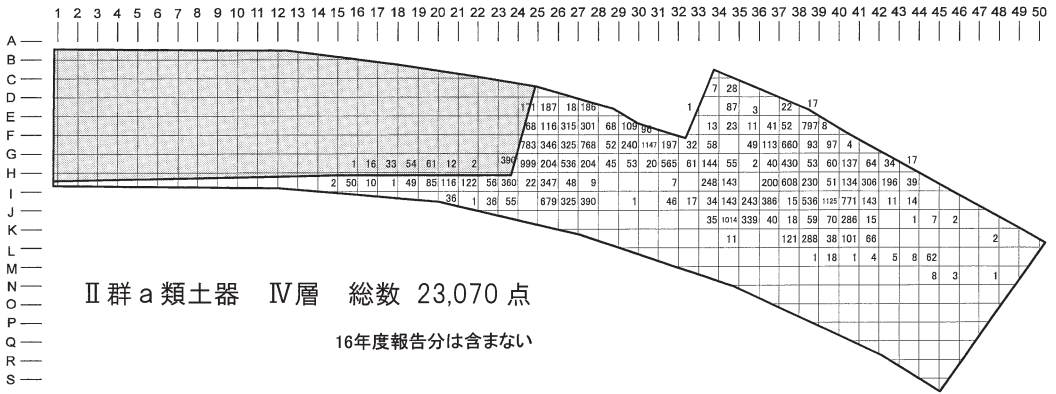
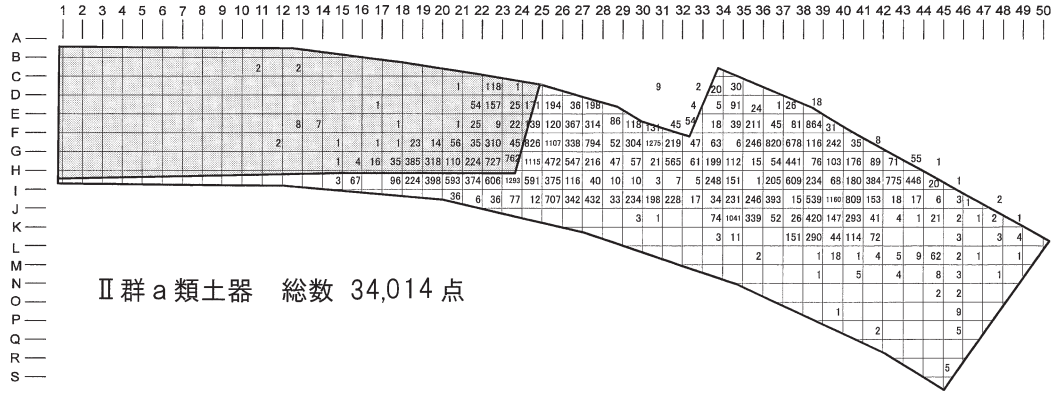
平成16年度調査 検出の土器



北埋調報220を一部改変  
図V-4-42 Ⅱ群a類土器の出土状況(17)



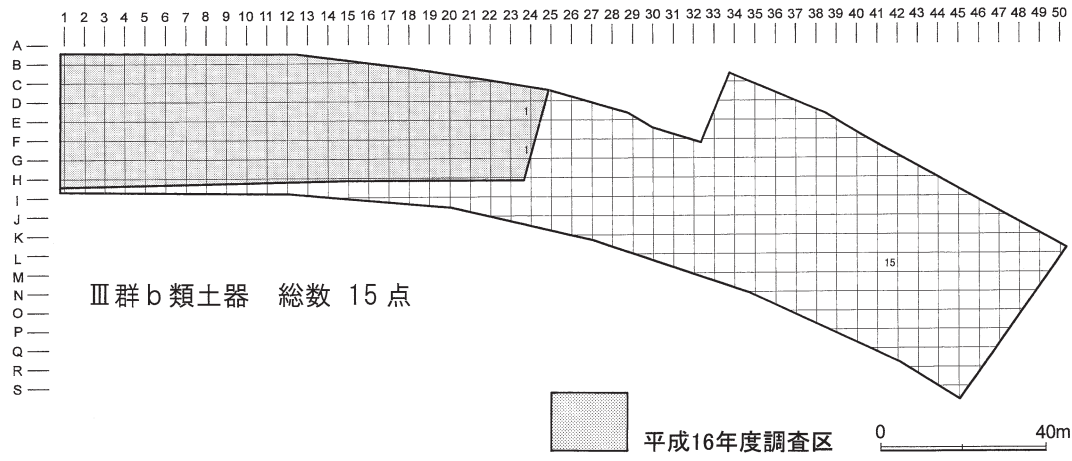
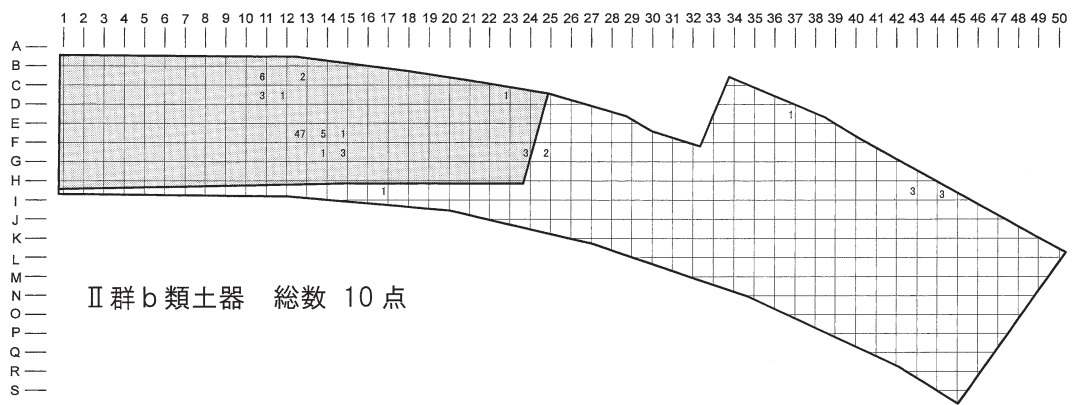
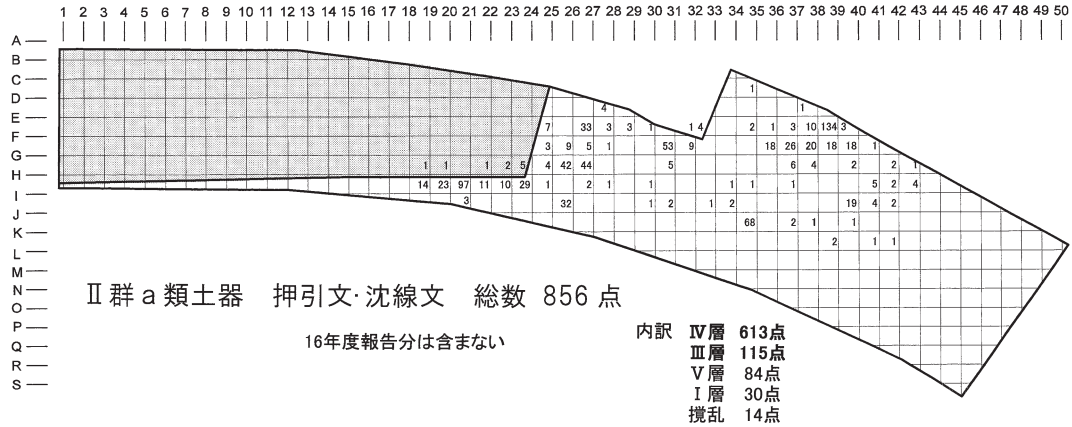
図V-4-43 II群a類土器の出土状況(18)



- 内訳 IV層 1,270点
- III層 414点
- I層 352点
- V層 112点
- 攪乱 99点

平成16年度調査区 0 40m

図V-4-44 土器の分布(1)



図V-4-45 土器の分布(2)

## (2) 石器等

包含層から出土した石器等の総数は167227点である。このうち定形石器に分類したものは3027点で、全体の2%である。最も多いものは石器製作に関連する剥片や碎片（フレイク・チップ）で、150327点と全体の90%を占めている。内訳は頁岩の剥片が125294点（83%）、黒曜石の剥片24862点（16%）である。この他に玄武岩の剥片等がわずかに出土している。礫や礫片も多く13214点を数え全体の8%である。定形石器の内訳では、たたき石の出土が最も多く1128点を数え、次にスクレイパーが313点、石鏃294点、台石・石皿258点、石核225点、すり石198点、つまみ付ナイフ169点、石斧99点、石錐78点、石錘67点、両面調整石器64点、石槍62点、砥石28点、石鋸16点等である。

なお、たたき石とすり石については形態から二つに分類し、表V-1と表V-2に示した。

### 石鏃（図V-4-46-1～28、図版74-1、表V-11）

28点図示した。1～11までは黒曜石製。12～28は頁岩製である。いずれも三角形を呈し、茎のない凹基形のものである。特に5～7は基部の抉りが深い。抉りが顕著なタイプは二等辺三角形で側縁から尖頭部にかけてやや長いものが多い。逆に抉りが浅いものは9～11・21・25～28があって、これらは全体の形状がほぼ正三角形に近い形態をしているものが目立つ。28は最も大型で長さ5.8cm、幅3.3cm、厚さ0.7cm、重さ10.8gを計る。

### 石槍またはナイフ（図V-4-46-29～31、図版74-1、表V-11）

3点図示した。29は有茎で、器体は薄手に仕上げられ、側縁は鋭利に加工されている。特に茎部の調整は入念である。石質は頁岩。30は茎部と身部の顕著な境はない。周縁の調整は連続的で、やや急角度に仕上げられている。腹面には素材面がわずかに残り、横断面形はやや厚い半月状を呈する。石質は頁岩である。31も入念な調整によって器体が薄手に仕上げられ、側縁は鋭利に仕上げられている。背面の右側縁部は左側縁と比較してやや外湾している。石質は頁岩である。

### 石錐（図V-4-46-32～41、図版75-1、表V-11）

10点図示した。37の石材は黒曜石で、その他はすべて頁岩を素材にしている。32～41はいずれも棒状で顕著なつまみ部がないものである。丁寧に作られているものが多い。32は3cmに満たない小型のもの。身部から先端の機能部にかけて回転による摩耗が見られる。33は背面からやや急角度の剥離を加えて整形し、腹面からの調整は機能部を主体に調整されている。34は背腹両面に剥離面を残し、腹面の調整は左側縁部を主体に加工が施されている。35の腹面にも剥離面が残るが、周縁部から機能部まで連続した調整が加えられる。刺突部が僅かに欠損する。36・37は上端が欠損するが全体の調整は丁寧である。38～41は背腹両面に素材面が大きく残るもので機能部には回転による摩耗が見られる。

### つまみ付ナイフ（図V-4-47-42～54、図版75-1、表V-11）

13点図示した。53・54の石材は黒曜石で、他はすべて頁岩である。42は最も大きいもので長さ10.6cm、幅2.7cm、厚さ0.9cm、重さ37.1gを計る。特に背面からの調整が入念で、並行に近い剥離が連続して施され、大きく内湾する右側縁部は特に急角度に仕上げられている。腹面の加工はつまみ部周縁を主体に施される。ルーペを用いた観察では特に外湾する左側縁に摩滅するような部位が連続して認められ、一部光沢も観察される。43・46・47は素材の厚みを生かし背面から入念な加工を施して急角度の刃部が作出されるもの。断面形は三角形を呈する。44は背面に大きく素材面を残し、薄型で側縁部を主体に急角度の調整が施されるもの。左側縁が外湾するのに対し、右側縁はほぼ直線的に仕上げられている。45・48も背面に素材面を残し、薄形であるが側縁の調整は入念で急角度に仕上げられている。49は先端部が尖らず幅の広い形態のもの。背面の両側縁部を主体に加工が行なわれ、やや急角



度の調整が施される。腹面末端部の形状は丸みを持つ。50は背面に素材面を残し幅広で厚みがある。両側縁には急角度の調整が施されている。51・52は長軸方向の線上につまみ部が作られ縦形を呈するもの。51は厚みがあり、急角度の調整が施されている。52はやや薄型で両面から加工されている。53の石材は黒曜石で、いわゆる“花十勝石”を素材としている。2か年の調査で、当遺跡から出土した花十勝を素材とした定形石器はこれだけである。石槍またはナイフの項で扱うことも検討したが、形態や刃部の調整等から判断しここに含めた。長さは9.2cm、幅3.6cm、厚さ1.3cm、重さ35.6gである。全体に非常に丁寧な加工が両面に施されており、側縁はやや急角度に調整され刃部は鋭利である。54も黒曜石製である。やや小型で先端部に抉りが施されている。背腹両面の周縁部を主体に加工が施されている。

#### スクレイパー (図V-4-47・48・49-55~77、図版76-1・77-1、表V-11)

23点図示した。黒曜石製の75、玄武岩製の64を除いて他はすべて頁岩製である。55~57は平面形が楕円形を呈するもので背面だけに加工が行なわれるもの。55は背面全体に丁寧な調整が施され、特に左側縁からの加工は連続的で先端部まで急角度に調整されている。56は背面に大きく素材面が残り、背面の周縁部にのみ加工が施されるもの。57はやや大型で特に背面の周縁部にやや粗い調整が施される。58~64は平面形態が篋状を呈するもので、上端部が細く下端部に向かって幅が広がる。片面加工が主体である。58・59は背面の全体に丁寧な加工が加えられ、58の腹面には両側縁から上部にかけても調整が施されている。60は両面加工であるが、形態などからここに含めた。背面の左側縁には連続する細かな加工が施され、先端部にはやや幅広の剥離が加えられて急角度に仕上げられている。61は背面に素材面を残す。先端部は急角度に仕上げられている。62・63は平坦な打面が残るもので、いずれも背面周縁部の加工が主体である。64の石材は玄武岩である。65は背面の全体に最厚部から周縁部にかけて急角度の加工が施されるもの。66・69は側面形態が背面側に湾曲するもの。いずれも側縁の加工は急角度である。67・68はつまみ付ナイフのつまみ部が欠損したものの可能性があるもの。68の両側縁は急角度の調整が施され、先端部は鋭利である。70は薄い剥片を素材にして、主に周縁部に加工が施されるもの。71・72は平面形態が不整形であるもの。71は背面最厚部から急角度の加工が施される。72は最厚部が下端にあってこれを生かして左側縁部に急角度の調整が施されている。73は背面周縁部にだけ調整が加えられるもの。74は大型でやや粗い加工が施されるもの。下端部が欠損する。75は黒曜石製で、背面全体に原石面が残る。右側縁を主体に加工されている。76・77は縦長剥片を素材にしたものである。76は背面の両側縁に加工が施される。77は右側縁を主体に急角度の調整が施され、端部が尖頭状に仕上げられている。

#### 両面調整石器 (図V-4-49-78~80、図版77-1、表V-11)

3点図示した、78の石材は頁岩で、平面形態が篋状である。両面の加工はやや粗く下端部がやや内湾するところが特徴である。79は赤井川産と考えられる特徴をもった黒曜石を素材にしている。

80は大形で、平面形態は78と類似するが先端部は欠損したものと思われる。

#### 石斧 (図V-4-50-81~89図版77-1、表V-11)

9点図示した。81~85の石材は緑色泥岩である。いずれも全体に入念な研磨が施されている。83は刃部の一端が欠損するもので、全体に赤茶色に変色し、表面が一部剥離することから被熱していることが考えられる。85はやや粗い作りのもので、研磨は施されているものの整形時の剥離痕が観察される。86~88は安山岩を素材にしている。86は基端部と刃部の一部を欠損するが全体の整形は丁寧である。87は薄形で、ほぼ全体に研磨が施されているがわずかに敲打痕が基端部に残っている。

88・89は未製品と思われるもの。周縁部に大まかな形状を整えるための粗割が加えられたもので、

整形剥離や敲打、研磨といった過程を踏む前に廃棄されたものと考えられる。89の石材は片岩である。  
**たたき石** (図V-4-51・52-90~99、図版79-1、表V-11)

10点図示した。石材はいずれも安山岩である。90~94は主に扁平礫の周縁部を主体に顕著な敲打痕が見られるもの。93は正裏両面の平坦面にも敲打痕がある。94・95は長軸方向の両端が敲打によって潰れている。96は扁平な礫の両端部に敲打痕があり、正裏両面には幾筋かのU字状を呈した擦痕が見られる。97~98は棒状礫を素材にしたもの。97は正裏両面に顕著な敲打痕があり、側縁部にも軽微な敲打痕がある。98は正裏両面と下端部に顕著な敲打痕がある。99は接合資料で、いわゆる“くぼみ石”と呼ばれるもの。先端部が欠損するが、正裏両面に顕著な敲打痕が数か所に渡って見られる。両面先端附近には黒色の付着物が認められ、図ではスクリーントーンで表した。

**すり石** (図V-4-52-100~105、図版80-1、表V-11)

6点図示した。石材はすべて安山岩で、いずれも断面形態が三角形を呈するもの。100のすり面はやや狭いが、101~105のすり面は顕著で幅広である。

**石鋸** (図V-4-52-106~109、図版81-1、表V-11)

4点図示した。いずれも石材は安山岩で、素材剥片の一端に直線的なすり面を有するもの。106は半円形に整形された扁平な礫を素材にしている。機能部の擦痕は顕著ですり幅は広くL字状に認められる。107は礫片素材の形を大きく変えることなく、そのまま利用したもので擦痕はU字状を呈する。またすり面の縁辺には剥離が連続的に認められる。108・109も薄い礫片の一端を機能部に利用したものの。109の右側縁にはわずかに剥離が認められ鋸歯状である。

**石錘** (図V-4-53-110~116、図版81-1、表V-11)

7点図示した。素材は110~115の石材は安山岩で116は泥岩を素材にしている。110~115は扁平な礫の長軸と短軸の4か所に打ち欠きがあるものである。これら6点の平均重量は471gである。116は素材になる礫片の長軸方向両端に正裏両面から打ち欠きを加えられ、これを結ぶ中央にはU字状の擦痕がある。左上端部に剥離が見られる。

**砥石** (図V-4-53・54-117~121、図版82-1、表V-11)

5点図示した。117の石材は泥岩である。縦長の垂角礫の周縁全面に長短複数の溝状を呈した浅い擦痕やすり面が見られるもの。118は砂岩を素材にしている。正裏両面の研磨面は内湾し、使い込まれたすり面を有する。119・120・121の素材は軽石である。119は接合資料で、円礫の割面に平滑な擦面を有する。また正裏両面の中央部と両端には凹み状の潰れが見られる。特に正面中央部の凹みは深い。120は素材の割れ面と表面の一部に長短複数の溝状の擦痕があるもの。121は素材の片側一面がほぼ平滑化するすり面を有し、中央部には凹み状の潰れがある。

**石製品** (図V-4-54-122~123、図版82-2、表V-11)

2点図示した。122の石材は球形の軽石で、穿孔が施されるもの。素材の外形に凸凹があり整形されたような痕跡は見られない。孔の直径は両側ともに約9mmである。123の石材も軽石で穿孔が施されるが半分欠損する。素材の表面は滑らかで、残存する部分の孔の直径は両側ともに約9mmである。

**土製品** (図V-4-54-124~126、図版82-3、表V-11)

いずれもⅡ群a類土器片を利用し、打ち欠きにより整形している。124・125は土器片錘。124は長軸方向に挟りこみがある。125は4か所にあるもので、長軸の1か所にごく細い溝状の切り込みがある。126は円盤状土製品。(笠原)

表 V-1 たたき石形態別グラフ

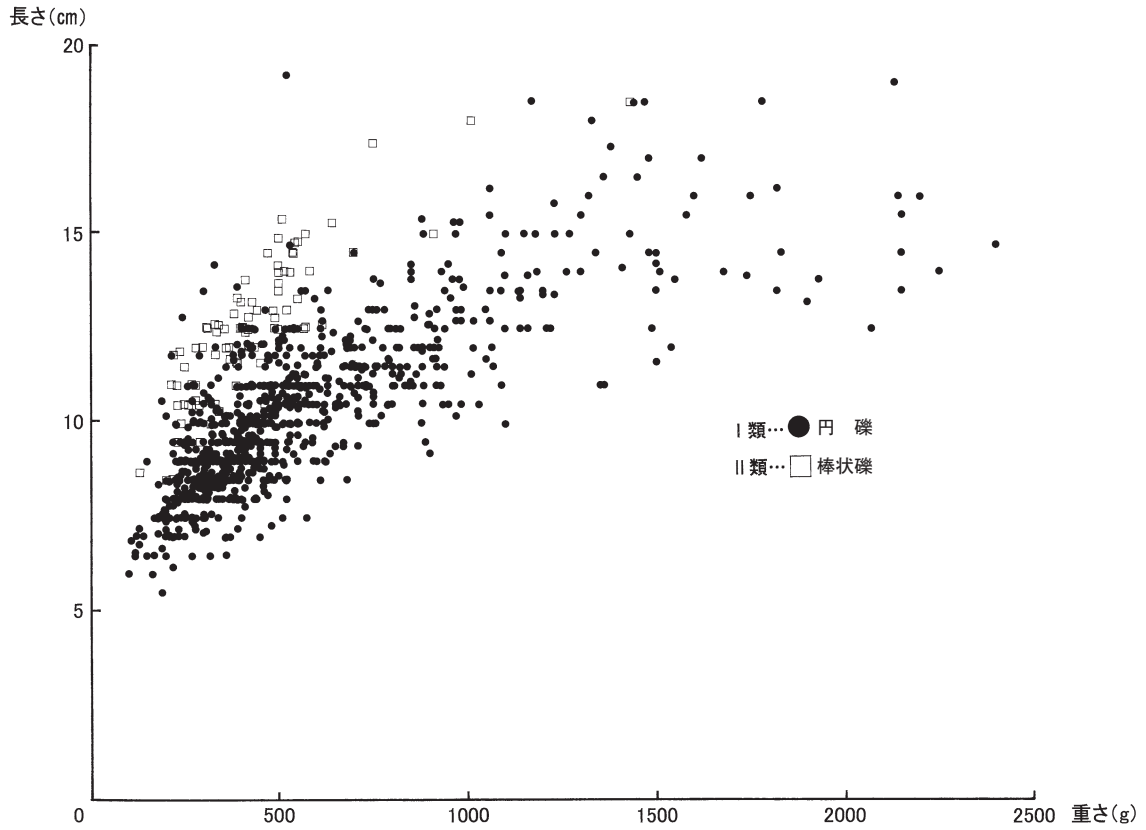
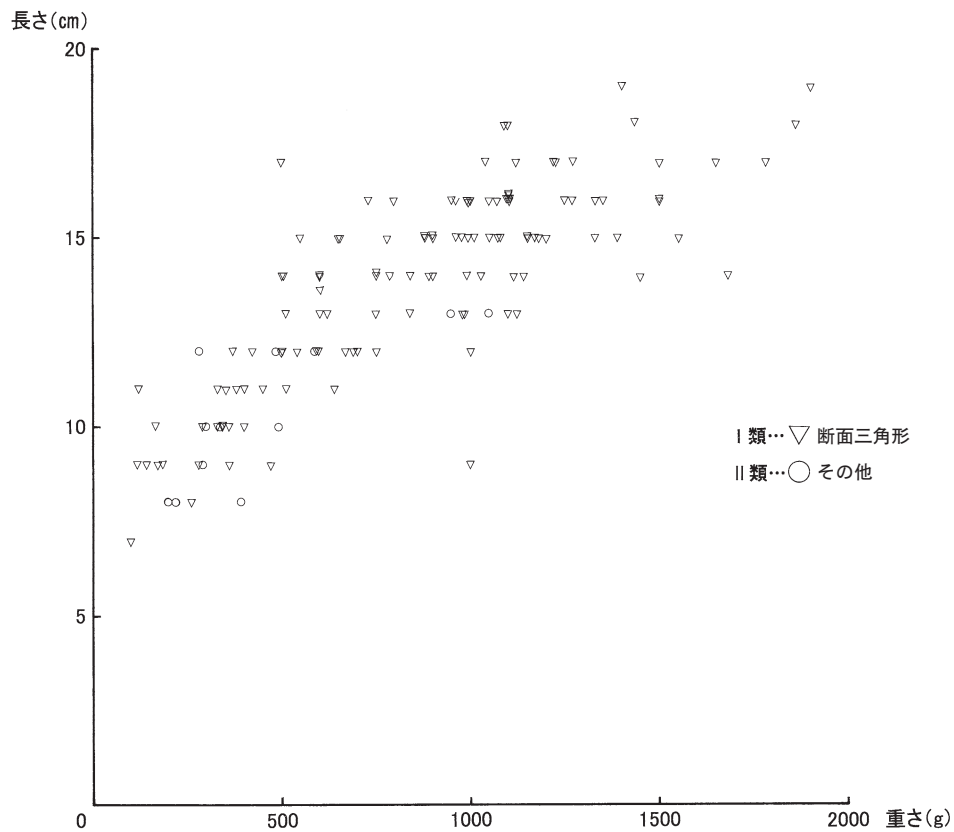
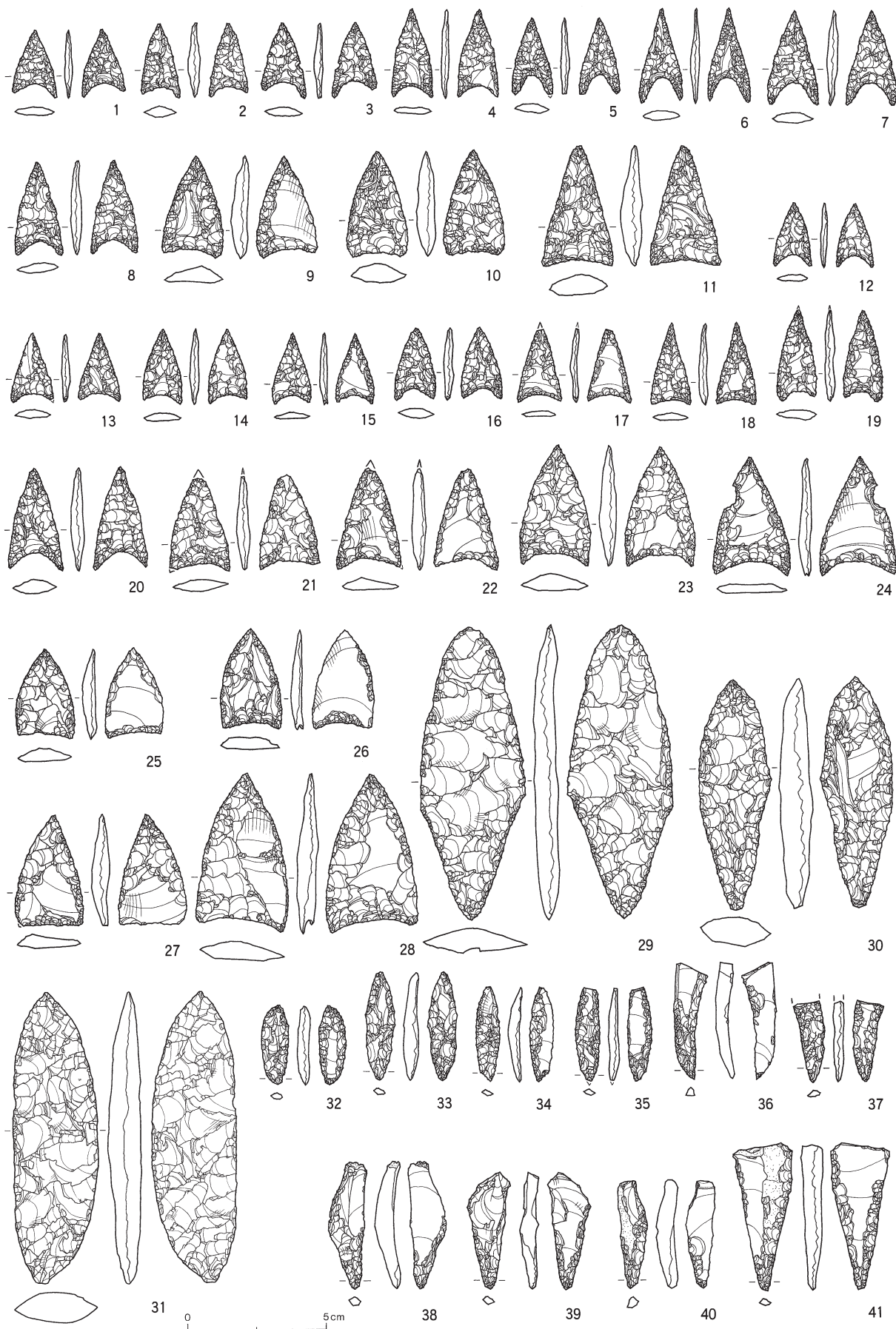
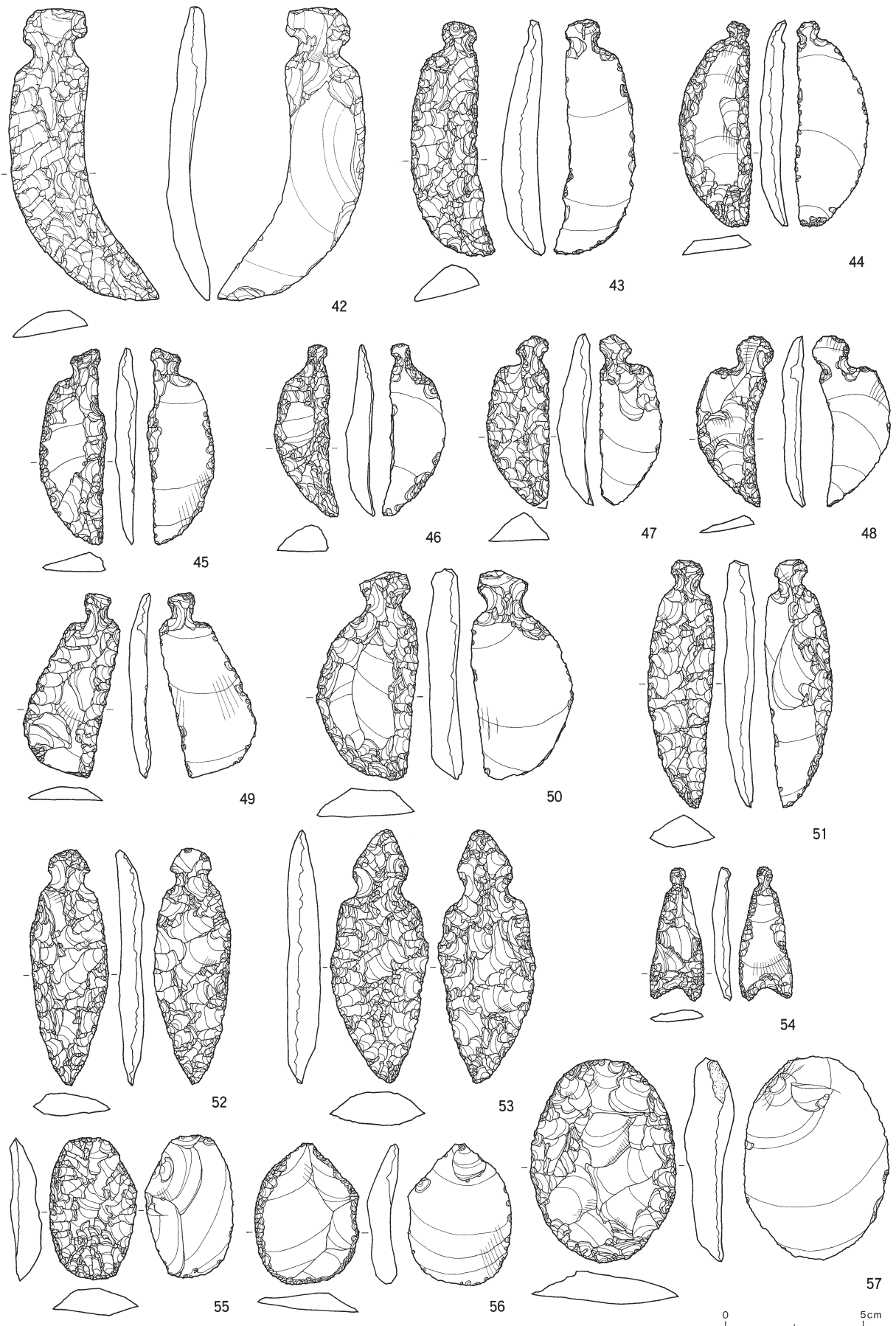


表 V-2 すり石形態別グラフ

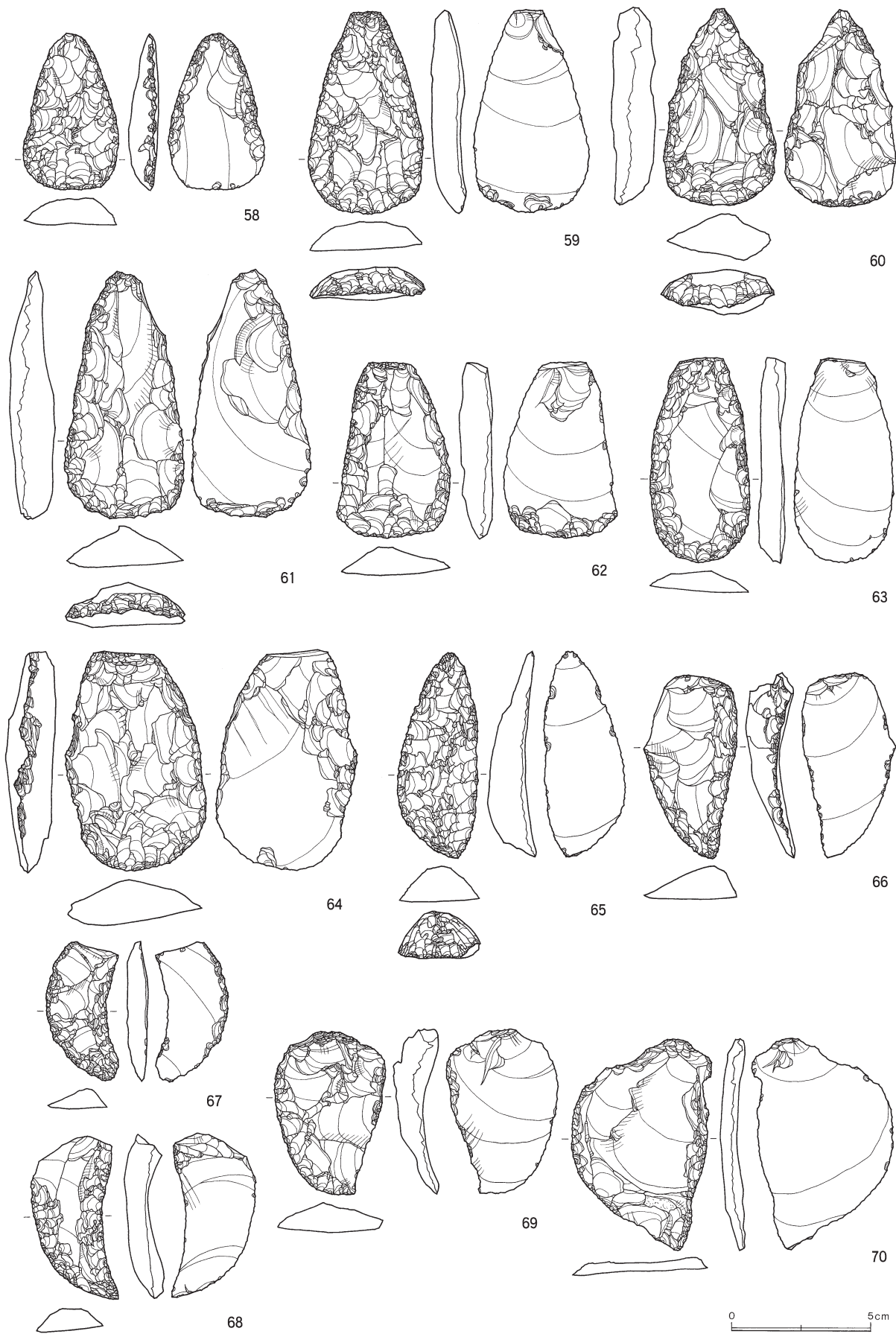




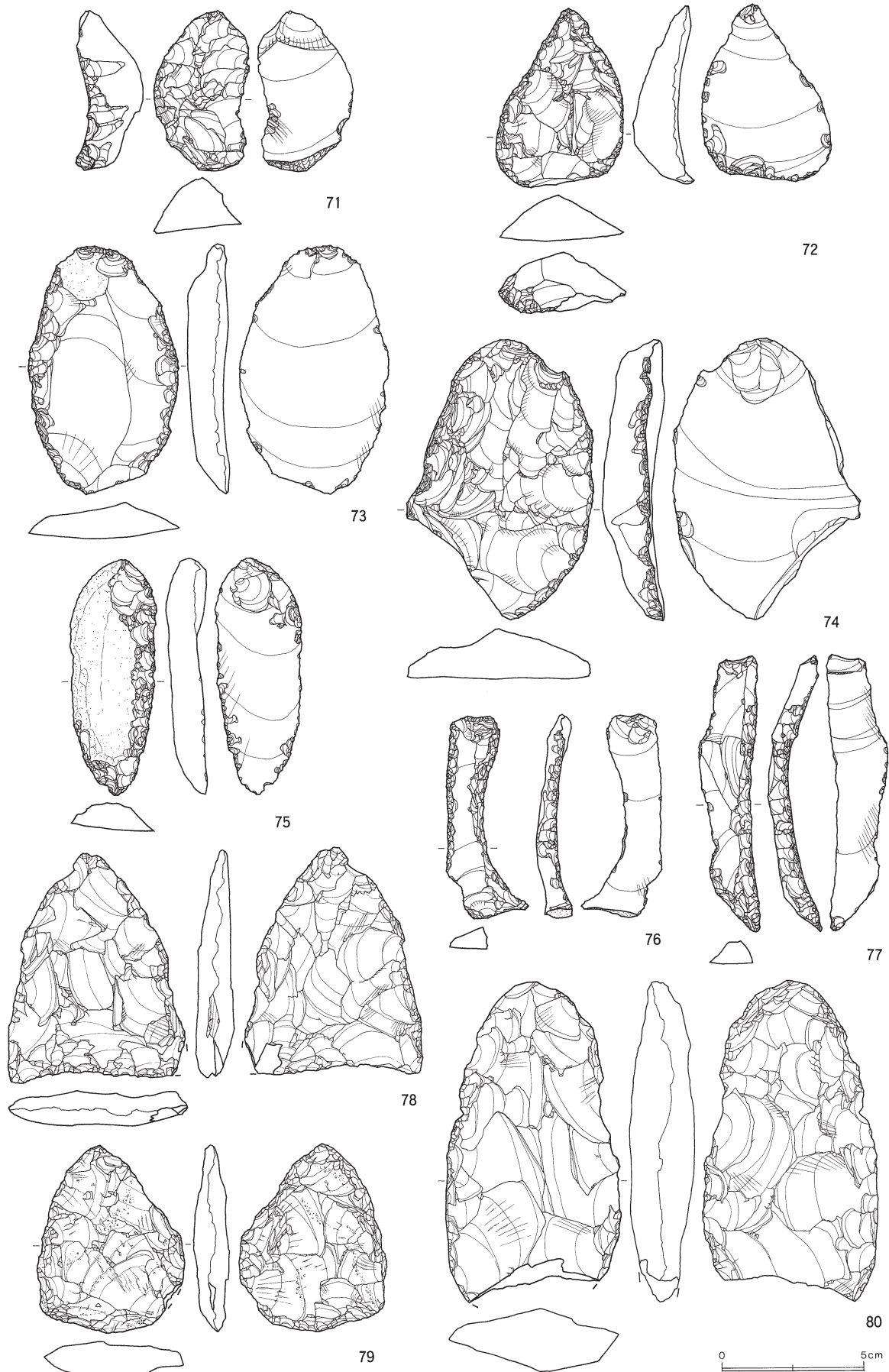
図V-4-46 包含層出土の石器(1)



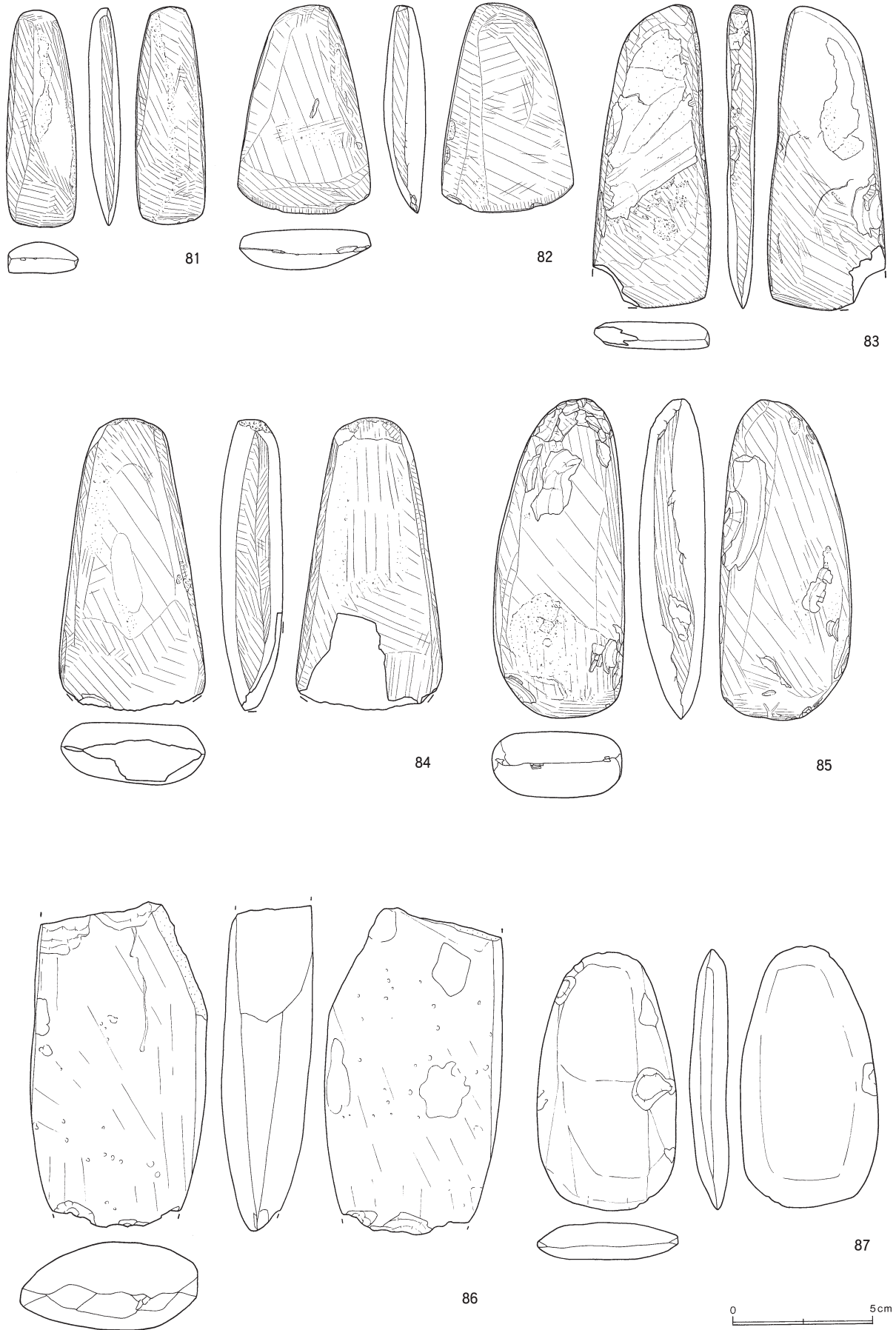
図V-4-47 包含層出土の石器(2)



図V-4-48 包含層出土の石器(3)

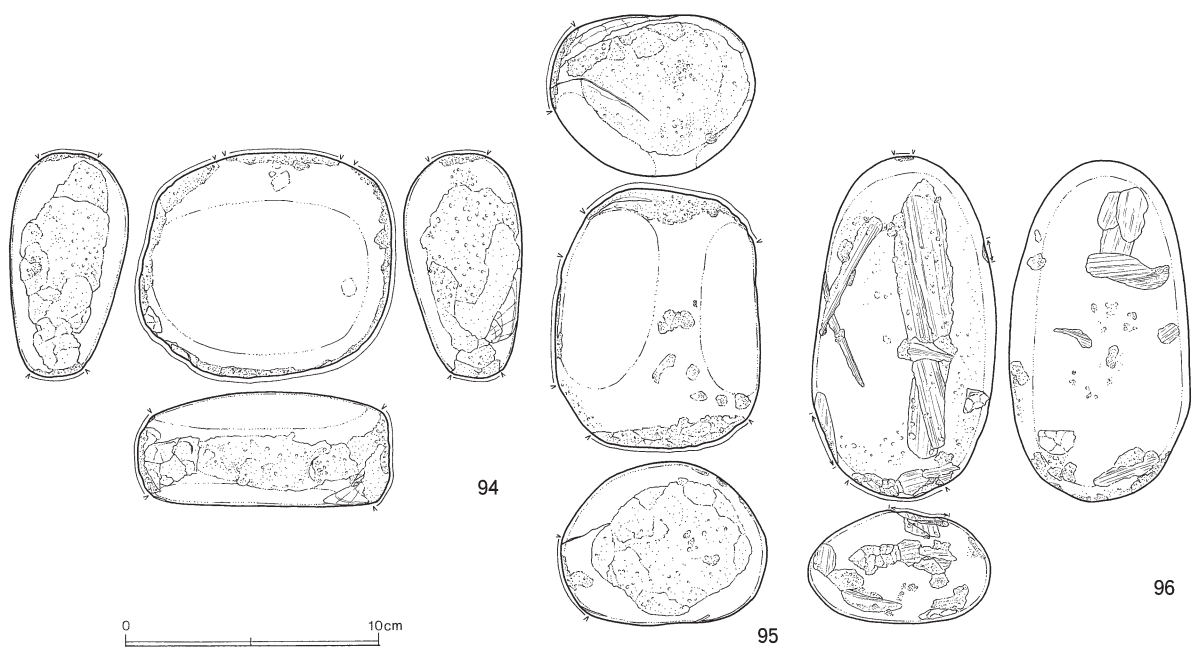
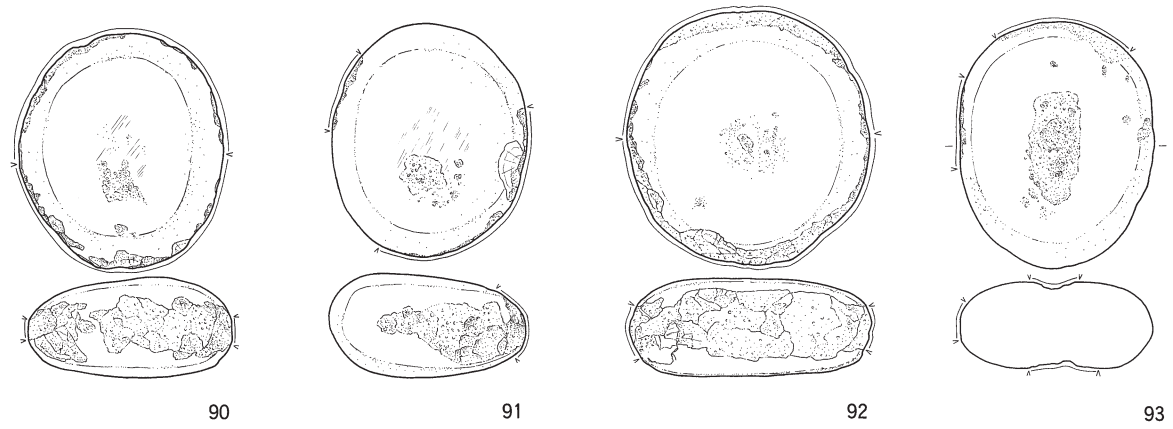
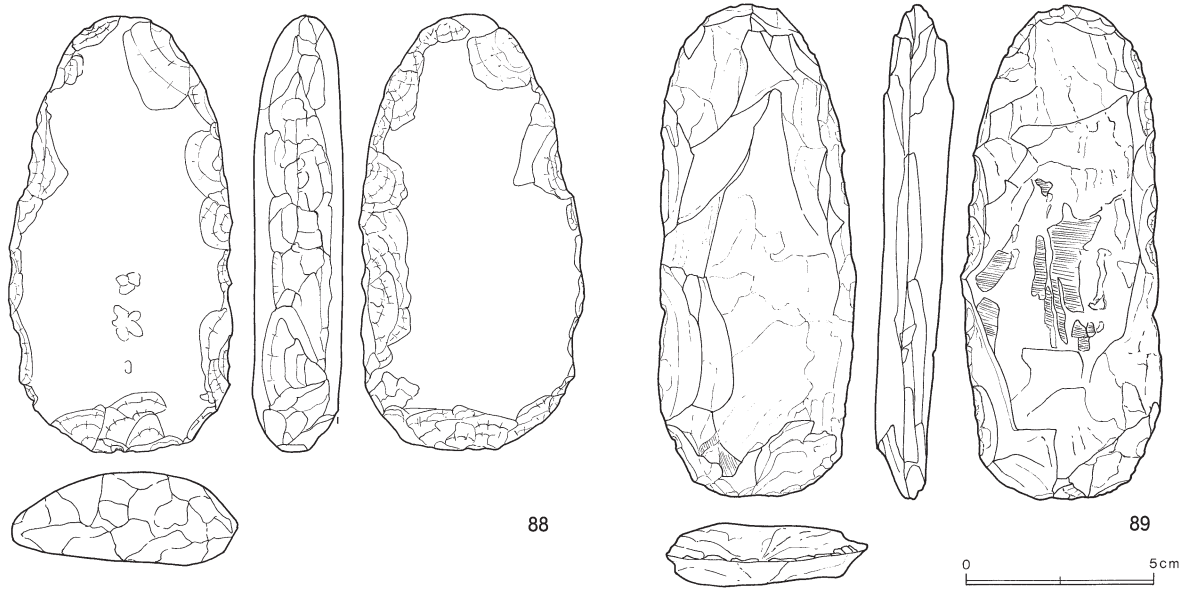


図V-4-49 包含層出土の石器(4)

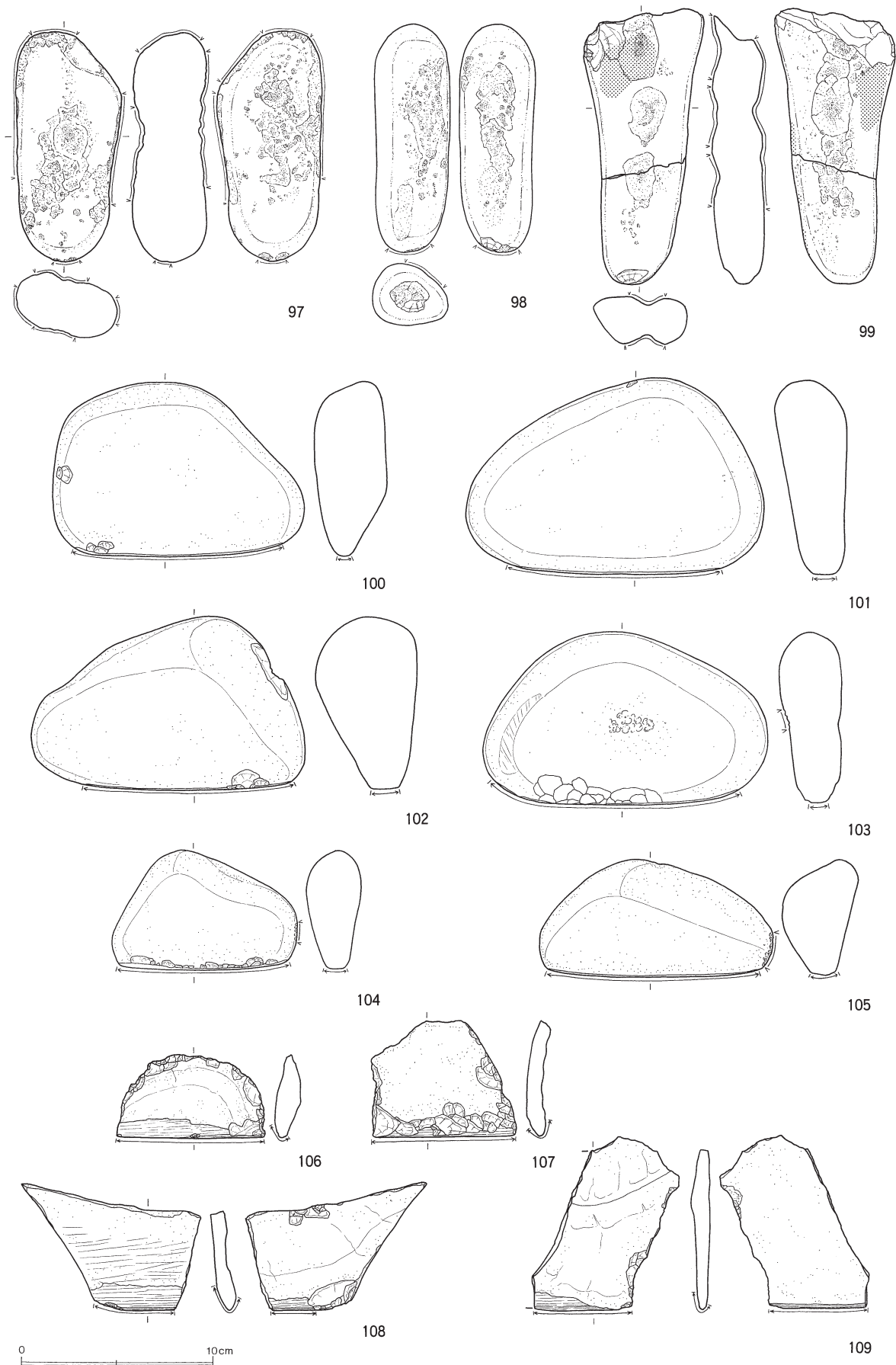


図V-4-50 包含層出土の石器(5)

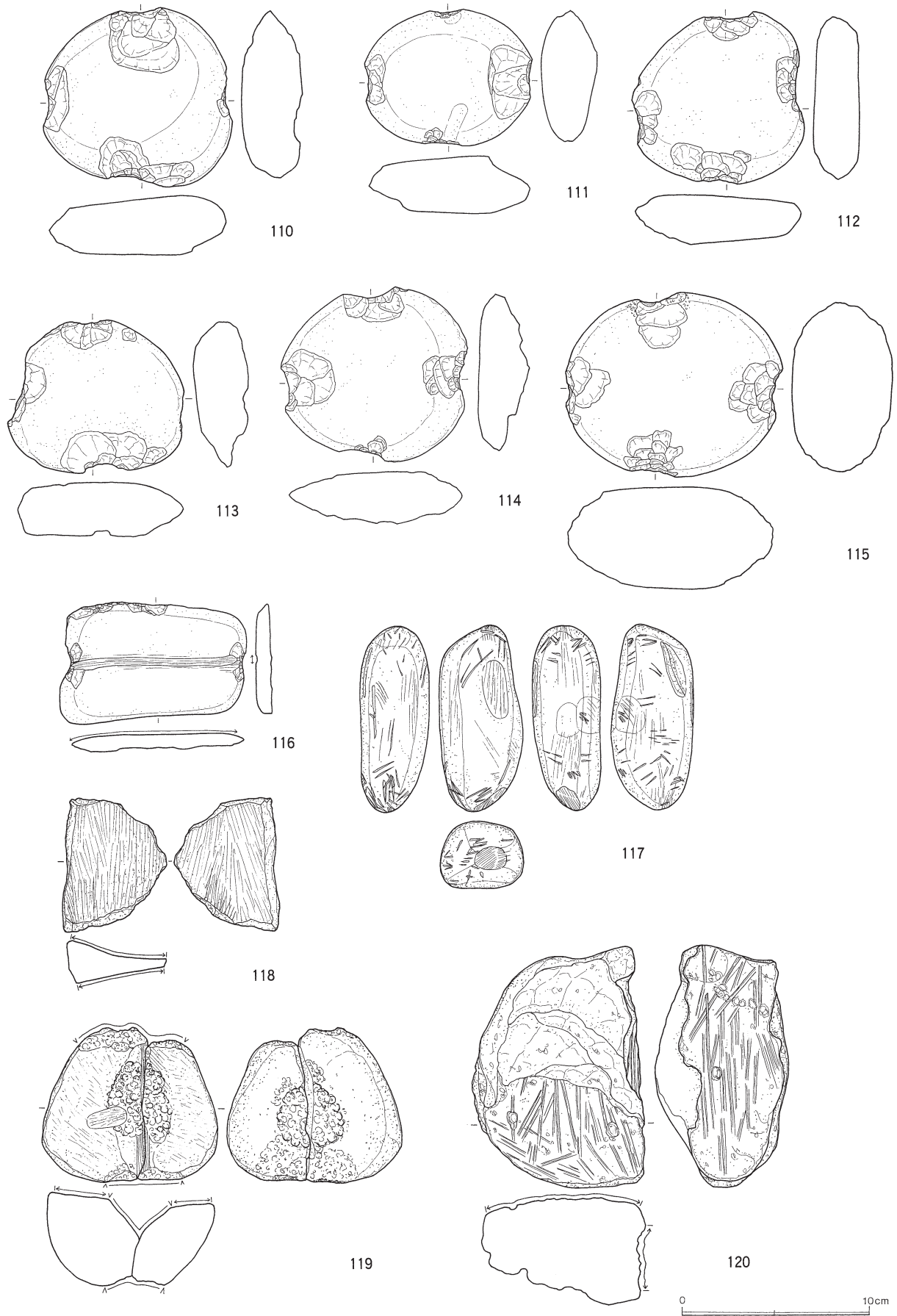




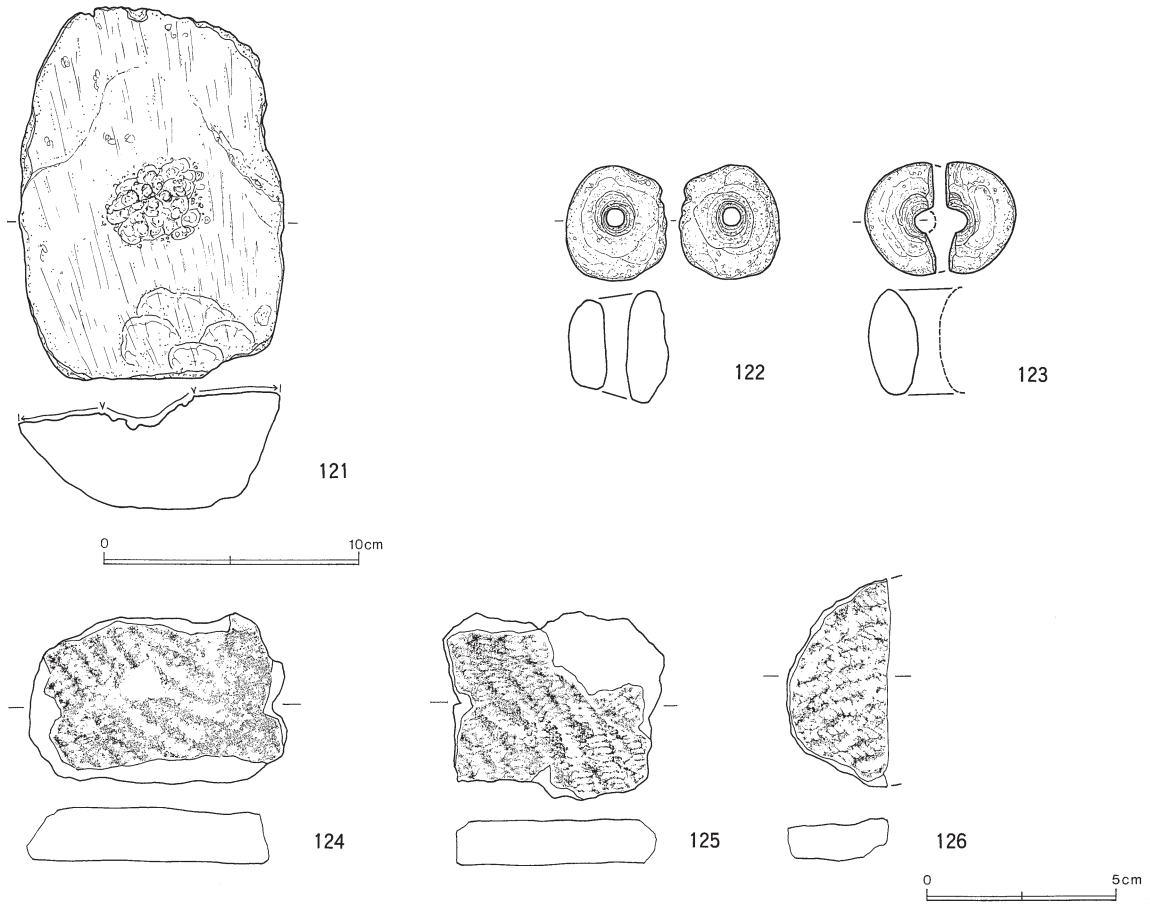
図V-4-51 包含層出土の石器(6)



図V-4-52 包含層出土の石器(7)



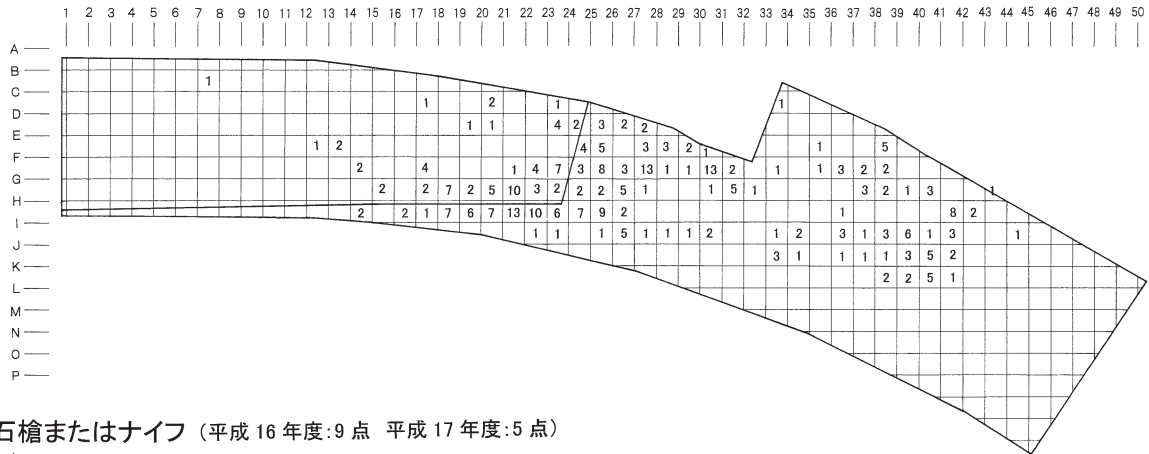
図V-4-53 包含層出土の石器(8)



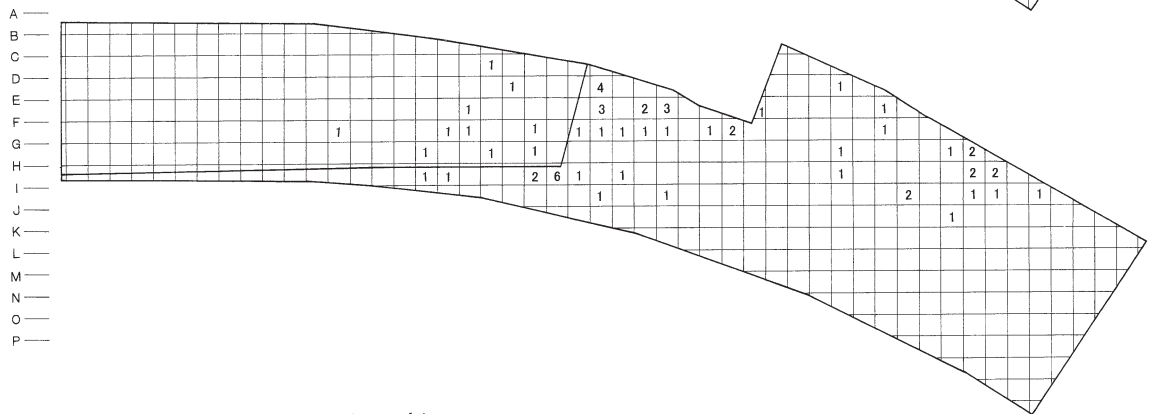
図V-4-54 包含層出土の石器(9)、石製品、土製品



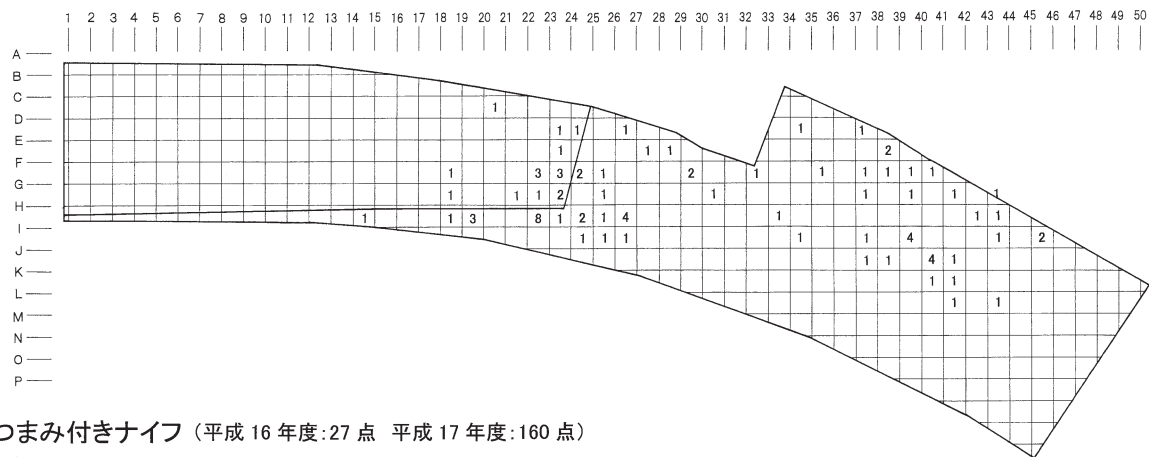
石鏃 (平成 16 年度:58 点 平成 17 年度:266 点)



石槍またはナイフ (平成 16 年度:9 点 平成 17 年度:5 点)



石錐 (平成 16 年度:13 点 平成 17 年度:75 点)



つまみ付きナイフ (平成 16 年度:27 点 平成 17 年度:160 点)

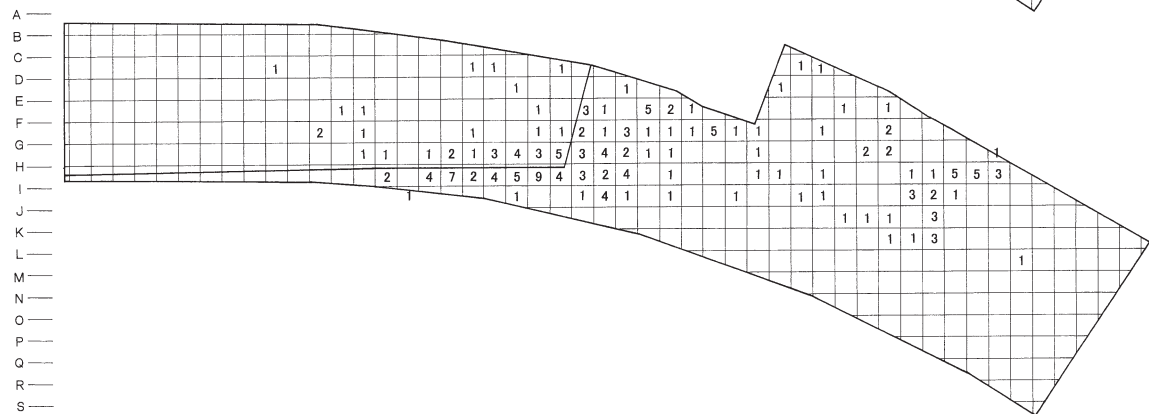
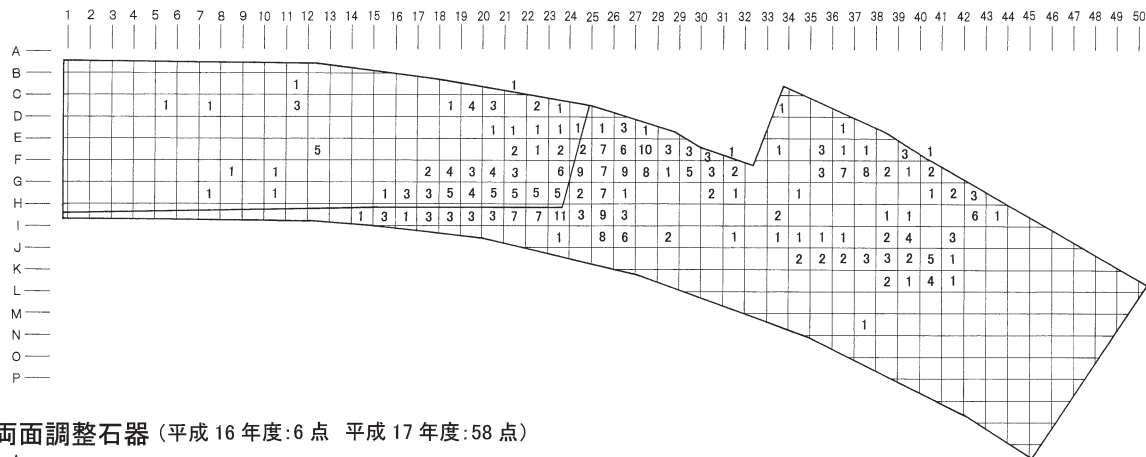
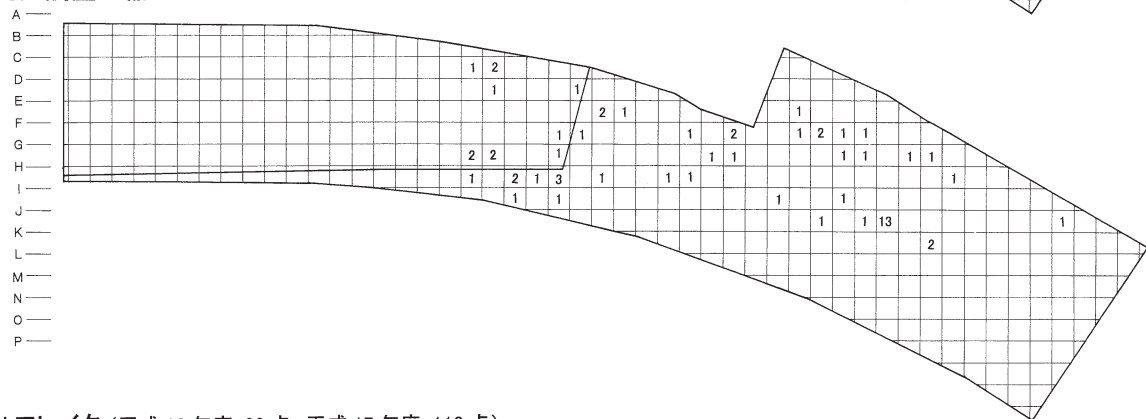


図 V - 4 - 56 石器分布図(2)

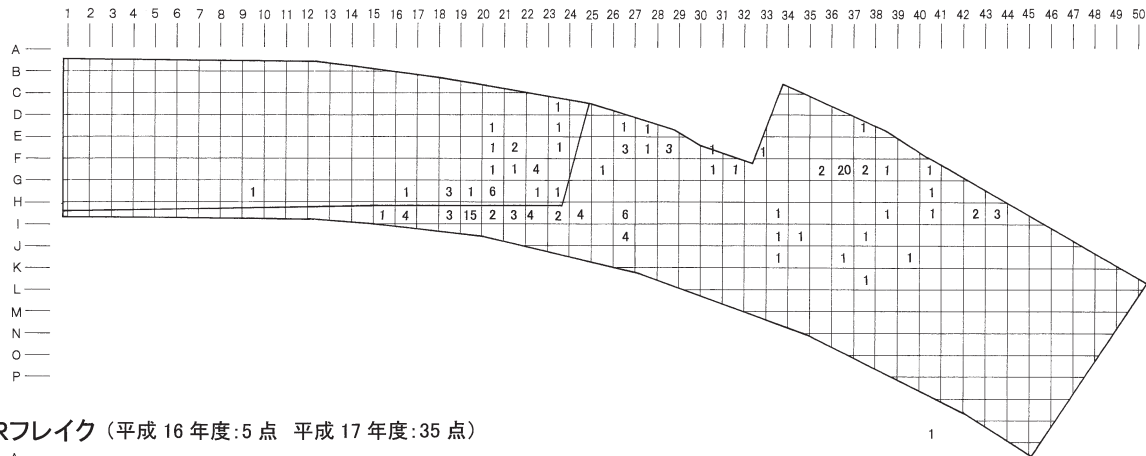
スクレイパー (平成16年度:83点 平成17年度:283点)



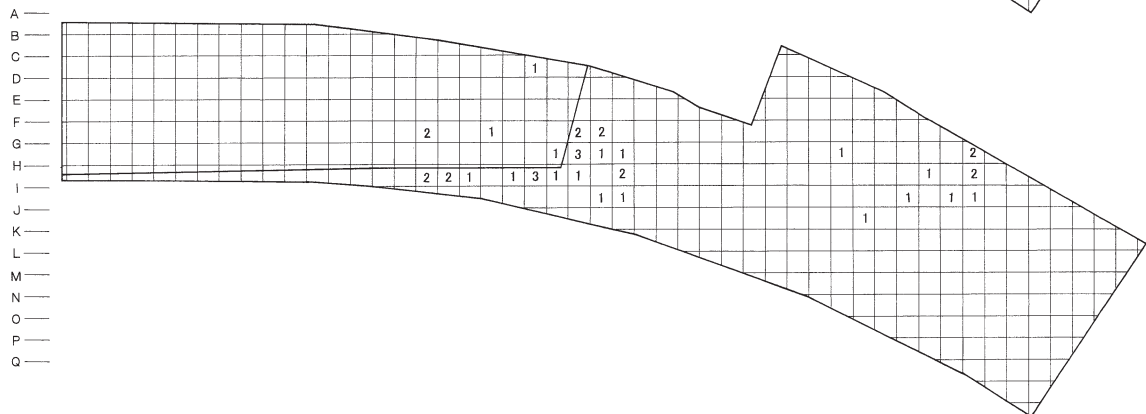
両面調整石器 (平成16年度:6点 平成17年度:58点)



Uフレイク (平成16年度:23点 平成17年度:113点)

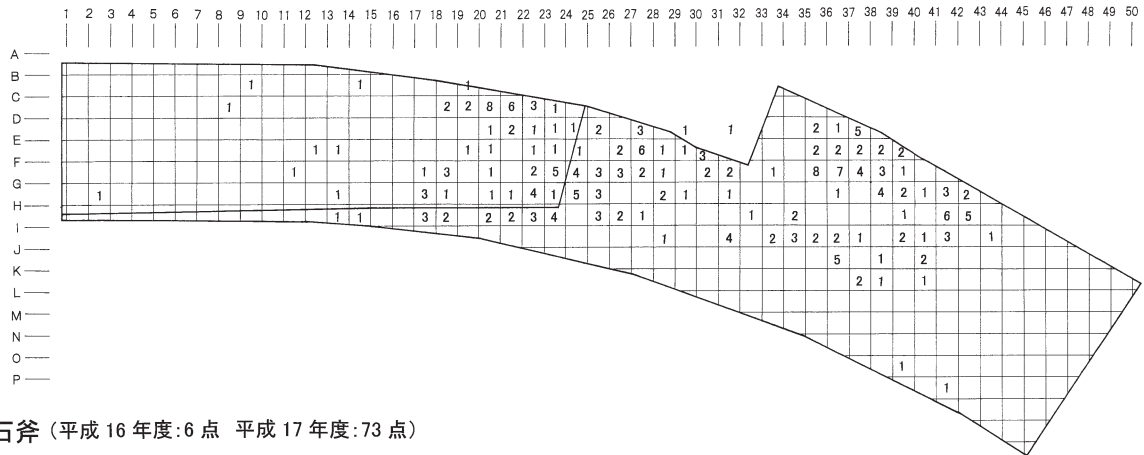


Rフレイク (平成16年度:5点 平成17年度:35点)

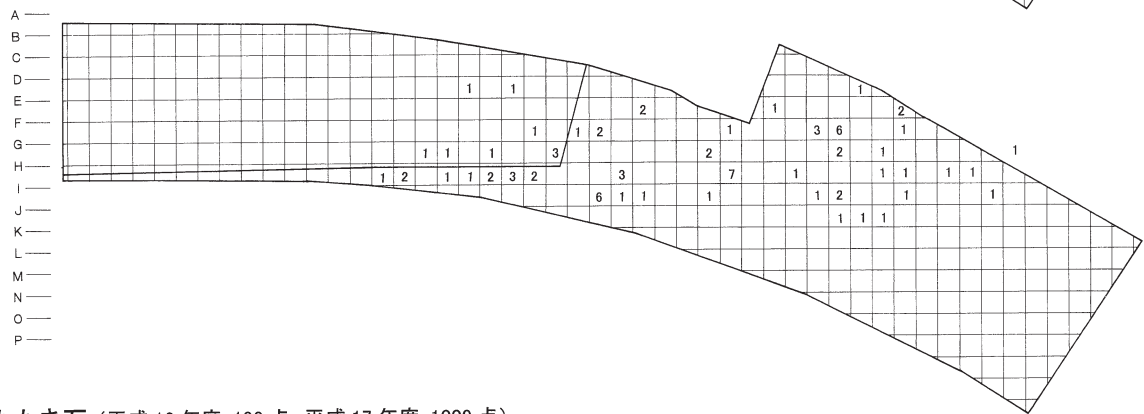


図V-4-57 石器分布図(3)

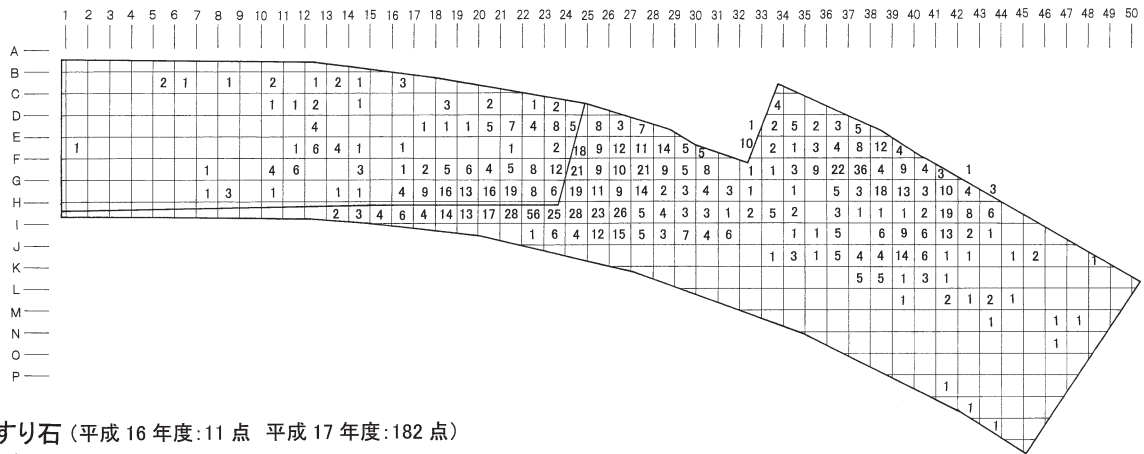
石核 (平成16年度:61点 平成17年度:189点)



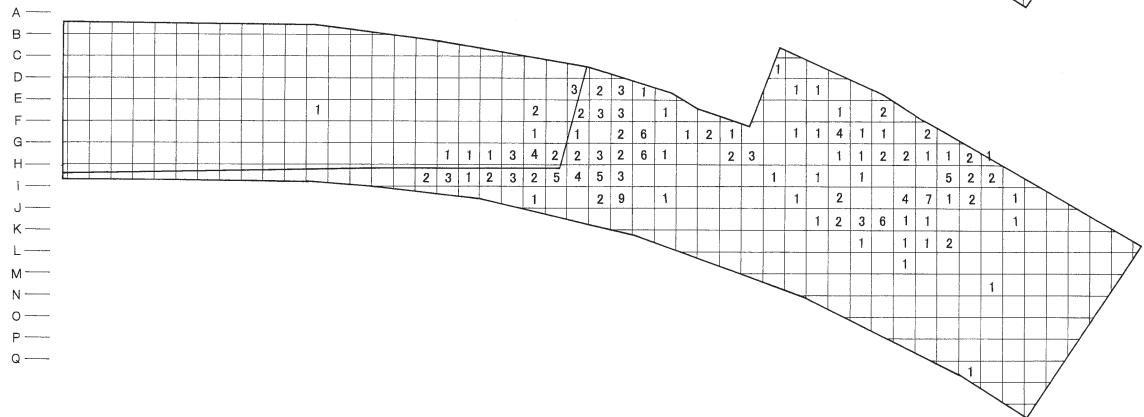
石斧 (平成16年度:6点 平成17年度:73点)



たたき石 (平成16年度:199点 平成17年度:1009点)



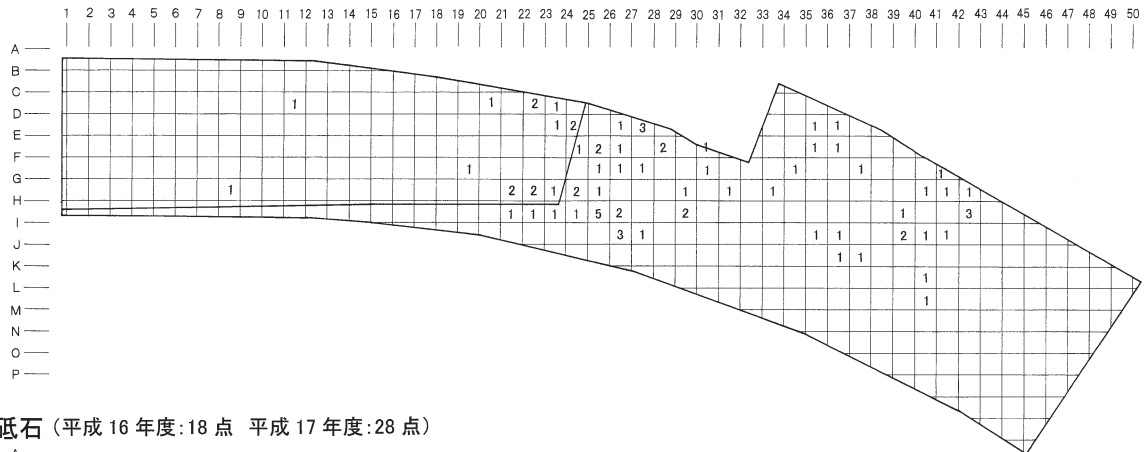
すり石 (平成16年度:11点 平成17年度:182点)



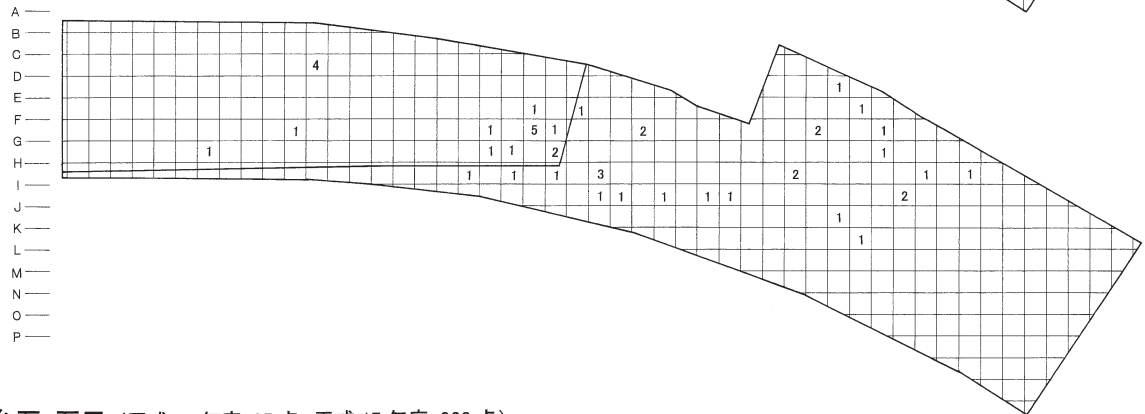
図V-4-58 石器分布図(4)



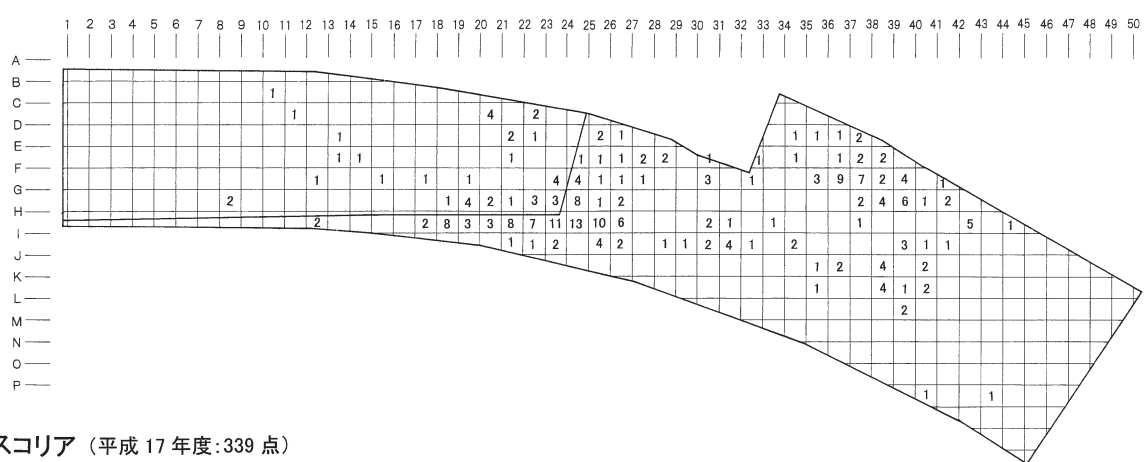
石錘 (平成16年度:12点 平成17年度:65点)



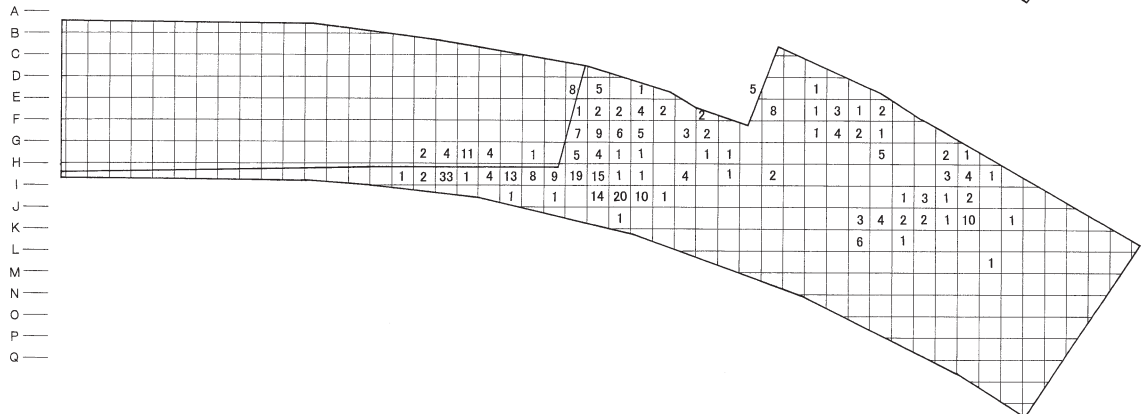
砥石 (平成16年度:18点 平成17年度:28点)



台石・石皿 (平成16年度:35点 平成17年度:223点)



スコリア (平成17年度:339点)



図V-4-59 石器分布図(5)



表V-3 検出遺構一覧

遺構名	遺構種類	発掘区	検出層位	規模(m) 長軸長×短軸長/最大厚	時期
石器集中1	石器集中	H33 d	IV層2回目	1.00×0.65/0.22	縄文時代前期前半
S-7	集石	H26 a	Ⅲ層	0.30×0.22/0.214	縄文時代前期前半
S-8	集石	H21 c・d	IV層	1.34×0.80	縄文時代前期前半
S-9	集石	I 39 c、J 39 a・b	IV層4～5回目	1.17×0.88	縄文時代前期前半
S-10	集石	H43 c・d	IV層1～2回目	1.04×0.81	縄文時代前期前半
S-11	集石	F 36 c	IV層下位	0.27×0.16	縄文時代前期前半
S-12	集石	I 39 a	IV層2回目	0.86×0.68	縄文時代前期前半
S-13	集石	I 35 c	IV層4回目	0.40×0.26	縄文時代前期前半
S-14	集石	G 26 d、H 26 a	V層6回目	1.48×0.80	縄文時代前期前半
S-15	集石	K 39 b・c	IV層1回目	0.73×0.35	縄文時代前期前半
S-16	集石	K 38 b	IV層4回目	2.30×1.72	縄文時代前期前半
S-17	集石	I 29 c	V層3回目	0.91×0.57	縄文時代前期前半
S-18	集石	H 28 c	V層13回目	0.50×0.47	縄文時代前期前半
S-19	集石	F 41 c、G 41 b	IV層1回目	2.10×1.13	縄文時代前期前半
S-20	集石	F 24 c	IV層2回目	0.97×0.40	縄文時代前期前半
S-21	集石	F 24 a・d	IV層5回目	3.13×0.63	縄文時代前期前半
FC-9	剥片集中	H 14 a	IV層1回目	(1) 0.65×0.48 (2) 0.46×0.23	縄文時代前期前半
FC-10	剥片集中	H 16 a・b	IV層上位	1.57×0.52	縄文時代前期前半
FC-11	剥片集中	H 18 b	IV層中～下位	0.50×0.27	縄文時代前期前半
FC-12	剥片集中	H 24 c・d	IV層	1.56×0.42	縄文時代前期前半
FC-13	剥片集中	H 23 a・d	IV層上位	0.90×0.63	縄文時代前期前半
FC-14	剥片集中	H 14 b	V層上位	0.46×0.26	縄文時代前期前半
FC-15	剥片集中	E 26 b	IV層下位	1.31×0.53	縄文時代前期前半
FC-16	剥片集中	E 26 d	V層上位	0.45×0.33	縄文時代前期前半
FC-17	剥片集中	E 24 c、F 24 b	IV層8回目	1.28×0.75	縄文時代前期前半
FC-18	剥片集中	E 28 a	V層上1回目	1.55×0.33	縄文時代前期前半
FC-19	剥片集中	J 39 a	IV層3回目	1.70×1.05	縄文時代前期前半
FC-20	剥片集中	I 39 c・d、J 39 b	IV層3～4回目	(1) 0.85×0.52 (2) 0.46×0.45	縄文時代前期前半
FC-21	剥片集中	J 36 a	IV層3回目	0.54×0.49	縄文時代前期前半
FC-22	剥片集中	H 41 c・d	IV層7回目	(1) 0.61×0.34 (2) 0.14×0.12 (3) 0.11×0.09	縄文時代前期前半
FC-23	剥片集中	H 34 d	IV層1回目	(1) 0.25×0.14 (2) 1.20×0.86 (3) 0.71×0.44	縄文時代前期前半
FC-24	剥片集中	F 36 c	IV層下位	(1) 0.40×0.29 (2) 0.14×0.18 (3) 0.13×0.10	縄文時代前期前半
FC-25	剥片集中	H 38 c・d、I 38 a～c	IV層1回目	(1) 2.25×0.09 (2) 0.69×0.46	縄文時代前期前半
FC-26	剥片集中	H 38 b	IV層2回目	1.45×0.74	縄文時代前期前半
FC-27	剥片集中	G 36 b	IV層2回目	0.07×0.53	縄文時代前期前半
FC-28	剥片集中	I 33 a	IV層1回目	0.62×0.56	縄文時代前期前半
FC-29	剥片集中	E 38 d	IV層上位	1.05×0.41	縄文時代前期前半
FC-30	剥片集中	E 34 b・c	IV層3回目	0.80×0.44	縄文時代前期前半
FC-31	剥片集中	I 38 c	IV層3回目	1.66×0.97	縄文時代前期前半
FC-32	剥片集中	H 39 d	IV層上面	0.46×0.35	縄文時代前期前半
FC-33	剥片集中	G 40 d	IV層1回目	0.83×0.54	縄文時代前期前半
FC-34	剥片集中	E 36 a～d	IV層2回目	1.60×1.10	縄文時代前期前半
FC-35	剥片集中	E 37 b、E 38 a	IV層1回目	0.63×0.28	縄文時代前期前半
FC-36	剥片集中	H 39 c・d、I 39 b	IV層2回目	(1.31)×0.71	縄文時代前期前半
FC-37	剥片集中	I 34 c	IV層1回目	1.54×1.06	縄文時代前期前半
FC-38	剥片集中	E 37 c	IV層4回目	0.30×0.27	縄文時代前期前半
FC-39	剥片集中	I 34 a・b	IV層1回目	2.02×0.64	縄文時代前期前半
FC-40	剥片集中	I 33 a	IV層2回目	2.02×0.47	縄文時代前期前半
FC-41	剥片集中	I 40 a	IV層5回目	1.98×1.08	縄文時代前期前半
FC-42	剥片集中	I 34 c	IV層2回目	0.94×0.55	縄文時代前期前半
FC-43	剥片集中	I 40 c・d	IV層2回目	1.09×0.85	縄文時代前期前半
FC-44	剥片集中	E 35 b・c	IV層4回目	0.95×0.57	縄文時代前期前半
FC-45	剥片集中	D 35 a	IV層2回目	0.53×0.30	縄文時代前期前半
FC-46	剥片集中	I 40 b	IV層7回目	0.62×0.48	縄文時代前期前半
FC-47	剥片集中	I 40 a・d	IV層7回目	(1.91)×1.43	縄文時代前期前半
FC-48	剥片集中	E 37 b	IV層5回目	0.70×0.59	縄文時代前期前半
FC-49	剥片集中	H 25 d	V層6回目	0.52×0.45	縄文時代前期前半
FC-50	剥片集中	I 29 a	V層4回目	0.49×0.34	縄文時代前期前半
FC-51	剥片集中	J 34 a	IV層1回目	0.76×0.42	縄文時代前期前半

遺構名	遺構種類	発掘区	検出層位	規模 (m)	時期
				長軸長×短軸長/最大厚	
F C-52	剥片集中	J 38 a	IV層3回目	0.79×0.46	縄文時代前期前半
F C-53	剥片集中	J 33 b	IV層4回目	0.60×0.46	縄文時代前期前半
F C-54	剥片集中	J 40 b・c	IV層2回目	(1) 0.95×0.47 (2) 0.70×0.46	縄文時代前期前半
F C-55	剥片集中	I 29 c・d	V層3回目	1.29×0.63	縄文時代前期前半
F C-56	剥片集中	F 31 d	IV層3回目	2.34×1.73	縄文時代前期前半
F C-57	剥片集中	J 38 c、J 39 d	IV層13回目	1.40×0.76	縄文時代前期前半
F C-58	剥片集中	I 26 c	IV層6回目	0.68×0.44	縄文時代前期前半
F C-59	剥片集中	E 27 b	IV層6回目	0.93× (0.33)	縄文時代前期前半
F C-60	剥片集中	E 29 d	IV層1回目	1.18×1.02	縄文時代前期前半
F C-61	剥片集中	G 29 a	IV層4回目	0.81×0.62	縄文時代前期前半
F C-62	剥片集中	G 42 d	IV層1回目	0.91×0.58	縄文時代前期前半
F C-63	剥片集中	F 24 a	IV層5回目	0.99×0.35	縄文時代前期前半
F C-64	剥片集中	F 24 a	IV層7回目	0.70×0.30	縄文時代前期前半
F C-65	剥片集中	H 42 a～d	IV層3回目	0.69×0.52	縄文時代前期前半
F C-66	剥片集中	I 41 d	IV層1回目	(1) 0.80×0.54 (2) 0.09×0.98	縄文時代前期前半
F C-67	剥片集中	H 21 b	V層2回目	0.32×0.16	縄文時代前期前半
F C-68	剥片集中	H 23 a・b	IV層2回目	0.33×0.15	縄文時代前期前半
F C-69	剥片集中	G 18 c	IV層2回目	(1.20)×0.76	縄文時代前期前半
F C-70	剥片集中	G 18 d	IV層2回目	0.56×0.37	縄文時代前期前半
F C-71	剥片集中	H 28 a～d	V層4回目	1.22×1.14	縄文時代前期前半
F-5	焼土	H 12 a	IV層1回目	1.25×(0.49)/0.12	縄文時代前期前半
F-6	焼土	H 19 c・d	IV層上位	1.08×0.76/0.15	縄文時代前期前半
F-7	焼土	H 21 a	Ⅲ層中～下位	1.20×0.98/0.07	縄文時代前期前半
F-8	焼土	H 22 a～d	IV層	1.63×0.58/0.10	縄文時代前期前半
F-9	焼土	H 23 d、I 23 a	Ⅲ層2回目	0.73×0.65/0.12	縄文時代前期前半
F-10	焼土	H 19 c、H 20 d	IV層2回目	0.64×0.55/0.09	縄文時代前期前半
F-11	焼土	H 26 d	IV層4回目	0.68×0.45/0.10	縄文時代前期前半
F-12	焼土	E 28 c	IV層上面	0.73×0.60/0.07	縄文時代前期前半
F-13	焼土	H 36 c	V層1回目	0.78×0.19/0.08	縄文時代前期前半
F-14	焼土	F 36 a	IV層3回目	0.25×0.20/0.07	縄文時代前期前半
F-15	焼土	I 39 d	IV層1回目	0.61×(0.43)/0.08	縄文時代前期前半
F-16	焼土	I 39 c	IV層3回目	0.31×0.29/0.30	縄文時代前期前半
F-17	焼土	D 35 a	IV層4回目	0.51×0.45/0.11	縄文時代前期前半
F-18	焼土	J 34 a・d	IV層1回目	0.50×0.38/0.07	縄文時代前期前半
F-19	焼土	J 34 a	IV層4回目	0.32×0.22/0.21	縄文時代前期前半
F-20	焼土	I 25 c	IV層4回目	0.69×0.42	縄文時代前期前半
F-21	焼土	K 39 a・b	IV層4～5回目	(1) 0.25×0.14 (2) 0.04×0.09	縄文時代前期前半
F-22	焼土	I 29 c	IV層3回目	0.56×(0.26)/0.11	縄文時代前期前半
F-23	焼土	I 29 d	IV層3回目	0.75×(0.55)/0.10	縄文時代前期前半
F-24	焼土	K 40 d、L 40 a	IV層3回目	0.60×0.45/0.04	縄文時代前期前半
F-25	焼土	J 37 c	IV層7回目	0.71×0.58/0.10	縄文時代前期前半
F-26	焼土	I 31 d、J 31 a	IV層4回目	0.71×0.61/0.15	縄文時代前期前半
F-27	焼土	I 32 d	V層1回目	(0.41)×0.12/0.10	縄文時代前期前半
F-28	焼土	J 36 c	IV層8回目	(1) 0.21×0.20 (2) 0.70×0.54/0.14	縄文時代前期前半
F-29	焼土	I 30 a・b	IV層下位	0.53×0.25/0.04	縄文時代前期前半
F-30	焼土	I 30 b	IV層下位	0.49×0.33/0.09	縄文時代前期前半
F-31	焼土	J 37 d	IV層8回目	0.64×0.56/0.19	縄文時代前期前半
F-32	焼土	H 27 d	IV層5回目	0.09×(0.06)/0.05	縄文時代前期前半
F-33	焼土	J 34 d	IV層2回目	0.32×0.14/0.04	縄文時代前期前半
F-34	焼土	I 31 a	V層1回目	0.65×0.49/0.05	縄文時代前期前半
F-35	焼土	I 25 a～d	IV層5回目	0.97×0.53/0.08	縄文時代前期前半
F-36	焼土	H 25 c・d	IV層5回目	0.97×0.85/0.07	縄文時代前期前半
F-37	焼土	H 25 a・b	IV層5回目	1.34×1.16/0.10	縄文時代前期前半
F-38	焼土	I 29 b	V層4回目	0.90×0.77/0.16	縄文時代前期前半
F-39	焼土	J 38 a・d	IV層12回目	0.59×0.40/0.07	縄文時代前期前半
F-40	焼土	J 38 a～d	IV層12回目	1.11×0.87/0.07	縄文時代前期前半
F-41	焼土	J 38 c、J 39 d	V層1回目	(1) 0.54×0.18 (2) 0.22×0.13/0.24	縄文時代前期前半
F-42	焼土	I 26 a	IV層6回目	0.53×0.39/0.14	縄文時代前期前半
F-43	焼土	E 27 a・d	IV層7回目	0.70×0.48/0.09	縄文時代前期前半
F-44	焼土	D 27 a・d	IV層9回目	0.57×0.43/0.06	縄文時代前期前半
F-45	焼土	D 27 d	IV層9回目	0.54×0.43/0.07	縄文時代前期前半
F-46	焼土	H 27 b	V層3回目	0.78×0.74/0.07	縄文時代前期前半
F-47	焼土	D 26 d	IV層7回目	0.52×0.49/0.09	縄文時代前期前半



遺構番号	剥片石器群											礫石器群											合計			
	土器	石鍬	石槍またはナイフ	石錐	つまみ付きナイフ	スクレイパー	両面調整石器	ピエス・エスキュー核	石核	Rフレイク	真岩フレイク	黒曜石フレイク	フレイクその他	石斧	たたき石	すり石	石錘	石鋸	石台	石皿	スコリア	原石		軽石	礫・礫片	石製品
FC-20	2								1																	3
FC-21									1	4	39															44
FC-22				1						152																153
FC-23	70										856				1											927
FC-24		1			1	2				1972	15				1											1992
FC-25	21									1932	58				1											2012
FC-26	3								1	397																401
FC-27	3									1698																1701
FC-28										6363	11															6374
FC-29										10	441				2											453
FC-30								2	1	6105																6108
FC-31	9	1					1	2		1081	3				1						3			1	1102	
FC-32										400																400
FC-34								2		1313																1315
FC-35										2460																2460
FC-36							1	1		710																712
FC-37										1310	2360															3670
FC-38										293																293
FC-39							1			6	4358															4365
FC-40			3					1		51	3860															3915
FC-41		1				3		1	1	7593	1175										1					8775
FC-42										898	1288															2186
FC-43								1		7265	7															7273
FC-44								1		2671																2672
FC-45								1		12843																12844
FC-46								1		253																254
FC-47	23	1				1		1		634	1															661
FC-48										593																593
FC-49										524																524
FC-50										1428																1428
FC-51										3899														1		3900
FC-52										3196	2															3198
FC-53										105																105
FC-54	4									2	1243															1249
FC-55						1		2		16	41															60
FC-56	6						1			992											1					1000
FC-57	1					1				3588	4															3594
FC-58											790															790
FC-59	5									630																635
FC-60	2									1535	8															1545
FC-61										238																238
FC-62							1			286					1											288
FC-63	29										8															37
FC-64										63																63
FC-65				1						70	2															73
FC-66										3235					1											3236
FC-67										5	2183				1											2189
FC-69	1									9071																9072
FC-70								1			340															341
FC-71										5856																5856
合計	340	9	6	3	5	11	6	0	29	4	100617	20159	3	20	119	13	2	3	34	1	8	1	2	163	1	121854

表V-5 層位別出土土器一覧（包含層・遺構）

	I・II層	III層	IV層	V層	Va層	攪乱	表採	遺構	合計
II群a類	2,232	4,205	23,030	3,341	966	190	50	340	34,354
II群b類	6	2	2						10
III群b類			15						15
合計	2,238	4,207	23,047	3,341	966	190	50	340	34,379

表V-6 層位別出土石器等一覧

器種	I・II層	III層	IV層	V層	Va層	攪乱	トレンチ	表採	包含層小計	遺構	合計
石 鏃	23	32	181	28		1	1		266	28	294
石槍またはナイフ	7	6	33	8			1		55	7	62
石 錐	11	9	45	8		1	1		75	3	78
つまみ付きナイフ	13	33	96	13		2	2	1	160	9	169
スクレイパー	18	38	191	29		2	3	2	283	30	313
両面調整石器	3	5	36	9	3		2		58	6	64
ピース・エス・キーユ		2	1	2					5	2	7
石 核	25	11	124	13	10	1	3	2	189	36	225
R フレイク	2	4	22	7					35	3	38
U フレイク	12	35	54	9			3		113	6	119
フレイク	3683	3416	19365	1643	282	120	128	689	29326	121001	150327
石斧・石斧片	7	9	50	5	2				73	26	99
すり石	14	23	122	15	2	2	3	1	182	16	198
たたき石	99	144	583	154	9	1	17	2	1009	119	1128
石 錘	4	7	33	20	1				65	2	67
砥石	4	1	19	4					28		28
石 鋸	2	3	5			1			11	5	16
台石・石皿	24	34	120	32	7	4	2		223	35	258
スコリア		20	230	84	3	2			339	9	348
原石	6	2	4	4					16	1	17
軽石	13	5	97	16	1				132	2	134
礫器	1	1	6	1					9		9
加工痕・すり切り痕ある礫		4	2						6		6
石製品			5						5	1	6
土製品				2			1		3		3
礫・礫片	3865	1334	4674	1624	224	1326			13047	167	13214
計	7836	5178	26098	3730	544	1463	167	697	45713	121514	167227

## フレイク内訳

石質 \ 層位	I・II層	III層	IV層	V層	Va層	攪乱	トレンチ	表採	包含層小計	遺構	合計
フレイク 頁岩	3199	2908	16012	1396	207	109	107	594	24532	100762	125294
フレイク 黒曜石	443	440	3303	241	75	11	21	95	4629	20233	24862
フレイク 玄武岩	10	9	12	4					35		35
フレイク その他	31	59	38	2					130	6	136
計	3683	3416	19365	1643	282	120	128	689	29326	121001	150327

表V-7 遺構出土掲載土器一覧

遺構番号	図番号	掲載番号	復元・接合・破片				同一個体未接合破片				図版番号	胎土		
			調査区・遺構	層位	遺物番号	接合点数	調査区・遺構	層位	遺物番号	接合点数		繊維	礫	砂
石器集中1	図V-3-3	1	H33d	IV 1 図26	1	34	H33d	IV 1 図26	1	7	35	○	×	×
S-7	図V-3-8	1	S-7	Ⅲ 3 図15	15	1					39	○	△	×
S-14	図V-3-12	1	H23d	V 6 図16-2	13	10					41	○	×	×
			H23d	V 2	16	2								
S-14	図V-3-12	2	H23a	V 6 図61-1	14	1	H23a	V 6 図61-1	14	16	41	○	×	△
S-21	図V-3-15	1	S-21	IV 5 図55	55	1	S-21	IV 5 図55	55	3	45	○	小~中 △	△
						未注記		1						
FC-17	図V-3-17	1 a	FC-17	IV 8 図	1	10	FC-17	IV 8 図	1	21	46	○	小 ○	×
				未注記		1	F 24 a	IV 7	5	1				
			1 b	FC-17	IV 8 図	1	2	未注記						
FC-20	図V-3-18	1 a	J 39 a	V 1 図25	1	3	H 26 d	IV 2	4	1	47	○	小~中 △	△
			J 39 a	V 1 図25	1	8	J 35 c	IV 2	2	1				
		1 b					J 38 b	IV 10	5	1				
							J 39 a	V 1 図25	1	12				
							未注記			3				
FC-27	図V-3-19	1	FC-27	IV 2	3	1				47	○	×	△	
FC-33	図V-3-20	1	G 40 d	I	3	2	G 32 a	IV 3	3	1	48	○	×	△
			G 40 d	IV 2 図43	6	19	G 35 b	IV 6	1	2				
							G 36 b	IV 5	5	1				
							G 36 b	V a	7	3				
							G 39 a	IV 1	4	1				
							G 39 c	IV 2	4	2				
							G 39 d	IV 4	7	1				
							G 40 d	I	3	10				
							G 40 d	IV 1	4	17				
							G 40 d	IV 3	5	1				
				G 40 d	IV 2 図43	6	26							
FC-33	図V-3-20	2	G 40 d	IV 2 図43	6	1				48	○	×	×	
FC-43	図V-3-22	1 a	I 40 d	IV 5 図51	6	8	I 40 d	IV 5 図51	6	66	49	◎	小~中 ○	×
		1 b	I 40 d	IV 5 図51	6	2	未注記		1					
FC-45	図V-3-23	1 a	D 35 c	V a 1 図54	1	2	D 35 c	V ol 図54	1	2	50	○	×	△
		1 b	D 35 c	V a 1 図54	1	5								
FC-56	図V-3-24	1 a	E 37 b	IV 3	4	1	F 24 d	IV 6	4	1	51	○	中 ◎	×
		1 b	FC-56	IV 3	3	2								
		1 c	E 35 a	V a 3	2	1								
FC-64	図V-3-25	1 a	F 24 a	IV 7 図108-1	4	8	F 24 a	IV 7 図108-1	4	3	51	○	×	×
		1 b	F 24 a	IV 7 図108-1	4	2								
		1 c	F 24 a	IV 7 図108-1	4	1								
FC-64	図V-3-25	2 a	F 24 a	IV 7 図108-2	5	2	F 24 a	IV 7 図108-2	5	48	51	○	×	×
		2 b	F 24 a	IV 7 図108-2	5	2	F-55	IV 7	1	16				
							未注記		3					
F-11	図V-3-26	1	F-11	IV 3	1	1					51	○	小○	○
F-18・19	図V-3-27	1	J 34 a	IV 1 図64	2	12	J 34 a	IV 1 図64	2	35	52	○	小~中 ○	○
							未注記		5					
F-23	図V-3-28	1	I 29 d	V 3 図71	6	5	I 29 d	V 3 図71	6	27	52	○	×	○
							未注記		2					
F-26	図V-3-28	1	I 31 a	IV 4 図72	2	3	I 31 a	IV 4 図72	2	21	52	○	小○	○
F-41	図V-3-31	1	J 38 c	V 1 図77	7	1					52	○	×	×

礫の大きさによる区分

小 1~2mm  
中 2~5mm

◎ 多く含む  
○ 含まれる  
△ 少量含まれる  
× なし



表V-8 遺構出土掲載石器等一覧

石器集中1

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-3-2	石 鏃	176	IV層2回目	2.5	1.5	0.3	1.0	黒曜石		35	
図V-3-3-3	石 鏃	79	IV層2回目	3.5	2.6	0.6	4.5	頁岩		35	
図V-3-3-4	石 鏃	85	IV層2回目	3.2	2.5	0.5	3.2	頁岩		35	
図V-3-3-5	石 鏃	118	IV層2回目	3.1	2.4	0.3	2.2	頁岩		35	
図V-3-3-6	石 鏃	135	IV層2回目	4.2	2.5	0.4	3.7	頁岩		35	
図V-3-3-7	石 鏃	88	IV層2回目	4.5	2.8	0.5	4.9	黒曜石		35	
図V-3-3-8	石 鏃	35	IV層2回目	4.2	3.5	0.6	7.4	黒曜石		35	
図V-3-3-9	石 鏃	200	IV層2回目	4.6	3.6	0.7	9.8	頁岩		35	
図V-3-3-10	石 鏃	119	IV層2回目	3.8	2.9	0.7	5.1	黒曜石		35	
図V-3-3-11	石 鏃	49	IV層2回目	(4.0)	3.0	0.9	7.5	黒曜石		35	
図V-3-3-12	石 鏃	126	IV層2回目	4.4	2.8	0.7	6.0	黒曜石		35	
図V-3-3-13	石 鏃	98	IV層2回目	4.4	3.1	0.8	7.3	黒曜石		35	
図V-3-4-14	石 鏃	95	IV層2回目	4.6	3.0	0.8	7.1	黒曜石		35	
図V-3-4-15	石 鏃	133	IV層2回目	4.4	3.5	0.6	8.0	黒曜石		35	
図V-3-4-16	石 鏃	37	IV層2回目	5.0	4.0	0.9	12.4	黒曜石		35	
図V-3-4-17	石 鏃	58	IV層2回目	5.0	3.7	0.8	9.5	頁岩		35	
図V-3-4-18	石 鏃	27	IV層2回目	5.5	3.7	0.7	9.8	黒曜石		35	
図V-3-4-19	石 鏃	20	IV層2回目	5.2	3.5	0.8	10.3	黒曜石		35	
図V-3-4-20	石 鏃	36	IV層2回目	5.4	3.9	0.7	10.4	黒曜石		35	
図V-3-4-21	石 鏃	66	IV層2回目	6.4	3.3	0.7	12.0	頁岩		35	
図V-3-4-22	石 槍	92	IV層2回目	10.2	2.9	1.4	39.9	頁岩		35	
図V-3-4-23	つまみ付きナイフ	144	IV層2回目	(5.7)	2.7	0.6	10.0	頁岩		36	
図V-3-4-24	つまみ付きナイフ	136	IV層2回目	6.0	3.2	1.3	22.5	頁岩		36	
図V-3-4-25	つまみ付きナイフ	1	IV層2回目	7.3	2.5	0.8	15.0	頁岩		36	
図V-3-4-26	スクレイパー	113	IV層2回目	5.1	4.2	1.2	19.4	黒曜石		36	
図V-3-4-27	スクレイパー	201	IV層2回目	6.2	4.3	1.6	41.2	頁岩		36	
図V-3-4-28	スクレイパー	7	IV層2回目	6.8	4.1	1.2	30.5	頁岩		36	
図V-3-5-29	スクレイパー	11	IV層2回目	9.3	4.4	1.7	60.8	頁岩		36	
図V-3-5-30	スクレイパー	165	IV層2回目	9.9	4.5	1.6	56.2	頁岩		36	
図V-3-5-31	スクレイパー	189	IV層2回目	8.6	4.6	1.5	61.4	頁岩		36	
図V-3-5-32	スクレイパー	19	IV層2回目	8.5	4.6	1.6	50.1	頁岩		36	
図V-3-5-33	スクレイパー	145	IV層2回目	8.3	3.5	1.2	40.2	頁岩		36	
図V-3-5-34	スクレイパー	152	IV層2回目	7.6	3.5	1.5	39.9	頁岩		36	
図V-3-5-35	スクレイパー	166	IV層2回目	9.8	3.4	1.4	45.1	頁岩		36	
図V-3-5-36	スクレイパー	32	IV層2回目	8.7	5.2	1.2	47.7	頁岩		37	
図V-3-5-37	スクレイパー	182	IV層2回目	6.0	2.6	0.9	10.1	頁岩		37	
図V-3-5-38	スクレイパー	84	IV層2回目	8.5	4.8	1.1	47.4	頁岩	No.108と接合	37	
図V-3-6-39	スクレイパー	169	IV層2回目	5.5	5.8	1.2	29.5	頁岩		37	
図V-3-6-40	スクレイパー	191	IV層2回目	7.4	4.7	1.9	43.7	頁岩		37	
図V-3-6-41	ピエス・エス・キーク	16	IV層2回目	3.4	2.7	1.3	15.9	黒曜石		37	
図V-3-6-42	ピエス・エス・キーク	164	IV層2回目	5.0	4.3	1.5	39.0	黒曜石		37	
図V-3-6-43	石 斧	77	IV層2回目	12.7	4.7	2.5	220.3	緑色泥岩		37	
図V-3-6-44	石 斧	174	IV層2回目	9.8	3.8	1.6	108.8	緑色泥岩		37	
図V-3-6-45	石 斧	172	IV層2回目	10.2	2.6	1.2	57.6	緑色泥岩		37	
図V-3-6-46	石 斧	173	IV層2回目	9.1	2.7	1.0	48.7	緑色泥岩		37	
図V-3-7-47	石 斧	125	IV層2回目	8.7	3.4	0.9	50.7	緑色泥岩		37	
図V-3-7-48	石 斧	170	IV層2回目	7.5	4.4	1.4	76.7	緑色泥岩		37	
図V-3-7-49	すり石	121	IV層2回目	9.1	4.1	2.2	122.7	安山岩		38	
図V-3-7-50	すり石	142	IV層2回目	7.8	4.8	1.8	101.3	安山岩		38	
図V-3-7-51	石 鋸	78	IV層2回目	11.2	8.6	2.8	391.7	輝石安山岩		38	
図V-3-7-52	石 鋸	104	IV層2回目	7.2	6.7	2.0	115.2	輝石安山岩		38	
図V-3-7-53	礫	105	IV層2回目	15.9	8.1	5.9	860.0	赤鉄鉱		38	
図V-3-7-54	礫	203	IV層2回目	13.0	9.8	3.8	690.0	赤鉄鉱		38	
図V-3-7-55	礫	202	IV層2回目	13.8	10.5	5.1	910.0	赤鉄鉱		38	

## S-7

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-8-2	石 斧	1	Ⅲ層3回目	(5.7)	5.0	1.4	61.8	緑色泥岩		39	基部欠損
図V-3-8-3	石 斧	2	Ⅲ層3回目	(11.4)	3.6	1.8	116.0	緑色泥岩		39	刃部欠損
図V-3-8-4	石 斧	3	Ⅲ層3回目	9.3	3.3	1.2	57.0	緑色泥岩		39	
図V-3-8-5	石 斧	4	Ⅲ層3回目	(7.9)	5.5	(1.3)	74.7	緑色泥岩		39	基部欠損(裏面はほぼ全体欠損)
図V-3-8-6	石 斧 片	5	Ⅲ層3回目	(6.7)	(5.2)	(0.8)	26.5	泥 岩		39	裏面全体欠損
図V-3-8-7	石 斧	6	Ⅲ層3回目	(6.7)	5.3	(2.0)	70.0	緑色泥岩		39	基部欠損
図V-3-8-8	石 斧	7	Ⅲ層3回目	(8.3)	(3.8)	(0.8)	28.4	緑色泥岩		39	刃部欠損(裏面はほぼ欠損)
図V-3-9-9	石 斧(未成品)	8	Ⅲ層3回目	9.3	4.2	1.7	92.9	緑色泥岩		39	
図V-3-9-10	石 斧	9	Ⅲ層3回目	9.1	3.4	1.2	56.8	緑色泥岩		39	
図V-3-9-11	石 斧	10	Ⅲ層3回目	(11.5)	4.3	(2.6)	165.3	緑色泥岩		39	刃部欠損あり
図V-3-9-12	石 斧	11	Ⅲ層3回目	(12.7)	5.1	(2.5)	197.4	緑色泥岩		39	裏面剥落
図V-3-9-13	石 斧	12	Ⅲ層3回目	(12.6)	5.1	3.0	249.6	緑色泥岩		39	刃部欠損
図V-3-9-14	石 斧	13	Ⅲ層3回目	(9.6)	(5.1)	2.9	215.6	緑色泥岩		39	基部欠損
図V-3-9-15	石 斧	14	Ⅲ層3回目	(6.6)	4.9	2.4	120.7	緑色泥岩		39	基部欠損

## S-8

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-10-1	た た き 石	2	Ⅳ層下	9.1	6.7	4.7	425.0	安山岩		40	
図V-3-10-2	た た き 石	55	Ⅳ層下	10.2	8.8	4.5	556.0	安山岩		40	
図V-3-10-3	た た き 石	28	Ⅳ層下	9.3	7.7	4.1	455.0	安山岩		40	
図V-3-10-4	た た き 石	11	Ⅳ層下	9.8	9.0	3.6	510.0	安山岩		40	

## S-9

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-10-1	た た き 石	28	Ⅳ層4回目	11.8	8.7	3.8	600.0	安山岩		40	
図V-3-10-2	た た き 石	22	Ⅳ層4回目	8.9	8.0	4.9	420.0	安山岩		40	
図V-3-10-3	石 錘	14	Ⅳ層4回目	7.6	5.9	2.5	160.0	安山岩		40	

## S-10

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-11-1	す り 石	3	Ⅳ層2回目	13.5	7.7	4.9	760.0	安山岩		40	
図V-3-11-2	台 石 片	12	Ⅴ層2回目	13.4	11.1	6.5	1,290.0	安山岩	№4Ⅳ-2と接合	40	

## S-15

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-11-1	す り 石	1	Ⅳ層1回目	9.8	9.5	4.9	610.0	安山岩		42	
図V-3-11-2	た た き 石	4	Ⅳ層1回目	18.8	6.0	4.8	925.0	安山岩		42	
図V-3-11-3	台 石	2	Ⅳ層1回目	50.0	34.7	9.6	23,500.0	安山岩		42	

## S-16

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-13-1	石 鏃	20	Ⅳ層4回目	3.0	1.7	0.4	1.7	黒曜石		43	
図V-3-13-2	つまみ付きナイフ	17	Ⅳ層4回目	6.0	1.9	0.9	9.7	頁 岩		43	
図V-3-13-3	スクレイパー	9	Ⅳ層4回目	6.1	3.8	1.8	31.8	頁 岩		43	
図V-3-13-4	す り 石	1	Ⅳ層4回目	15.9	7.9	4.5	930.0	安山岩		43	
図V-3-13-5	す り 石	5	Ⅳ層4回目	15.9	10.3	5.1	1,300.0	安山岩		43	
図V-3-13-6	す り 石	4	Ⅳ層4回目	17.6	8.3	7.3	1,578.0	安山岩		43	

## S-17

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-13-1	た た き 石	4	Ⅴ層3回目	10.7	6.0	3.8	400.0	安山岩		44	
図V-3-13-2	台 石	1	Ⅴ層3回目	38.0	27.9	9.7	16,000.0	安山岩		44	

## S-19

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-14-1	た た き 石	12	Ⅳ層1回目	9.7	6.1	4.1	350.0	安山岩		44	
図V-3-14-2	た た き 石	20	Ⅳ層1回目	11.9	6.1	4.7	515.0	安山岩		44	
図V-3-14-3	た た き 石	16	Ⅳ層1回目	11.2	10.6	3.9	830.0	安山岩		44	

## S-20

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-14-1	石 皿	9	Ⅳ層5回目	28.1	22.5	1.5	1,025.0	安山岩		45	

## S-21

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-15-2	石 斧	32	Ⅳ層5回目	9.4	4.5	2.4	125.0	片麻岩		45	
図V-3-15-3	た た き 石	10	Ⅳ層5回目	12.8	5.2	4.4	620.0	安山岩		45	

## FC-10

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-16-1	ナイフ	1	IV層2回目	9.3	3.0	1.0	26.2	頁岩		46	
図V-3-16-2	すり石	5	IV層2回目	14.5	9.0	6.0	1,100.0	安山岩		46	
図V-3-16-3	すり石	6	IV層2回目	15.9	10.5	5.5	1,550.0	安山岩		46	
図V-3-16-4	石鋸	4	IV層2回目	15.3	6.0	2.2	101.0	砂岩		46	

## FC-23

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-19-1	すり石	1	IV層1回目	12.0	5.9	3.0	335.0	安山岩		47	

## FC-24

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-19-1	石鏃	1	IV層下	3.0	1.5	0.4	1.2	頁岩		47	
図V-3-19-2	たたき石	2	IV層下	11.0	8.1	3.6	510.0	安山岩		47	

## FC-29

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-19-1	たたき石	2	IV層2回目	10.1	7.1	3.0	355.0	安山岩		48	

## FC-31

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-20-1	石鏃	3	IV層3回目	3.4	2.4	0.5	2.9	黒曜石		48	
図V-3-20-2	石製品	2	IV層3回目	2.7	2.1	0.8	4.4	黒曜石		48	
図V-3-20-3	両面調整石器	1	IV層3回目	8.6	4.3	2.1	78.2	頁岩		48	

## FC-40

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-21-1	石槍又はナイフ	6	IV層2回目	7.3	2.8	0.9	17.0	頁岩		50	
図V-3-21-2	石槍又はナイフ	7	IV層2回目	8.3	2.9	1.2	20.7	頁岩		50	
図V-3-21-3	石槍又はナイフ	5	IV層2回目	(6.9)	4.6	1.3	42.5	頁岩		50	上頭先端欠損

## F-14

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-27-1	たたき石	1	IV層3回目	11.8	9.4	4.6	750.0	安山岩		51	

## F-27

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-29-1	つまみ付きナイフ	3	V層1回目	8.1	2.3	0.9	15.9	頁岩		52	
図V-3-29-2	石斧	1	V層1回目	12.8	5.3	1.7	157.0	片岩		52	
図V-3-29-3	石斧	2	V層1回目	9.3	4.6	2.2	150.0	緑色泥岩		52	

## F-37

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-3-30-1	石鏃	1	V層3回目	2.4	1.6	0.3	0.9	頁岩		52	

表V-9 包含層出土掲載復元土器一覽

図番号	掲載番号	復元・接合・破片				同一個体未接合破片				復元個体 (cm)			備考	分類	図版番号	胎土		
		調査区	層位	遺物番号	接合点数	調査区	層位	遺物番号	接合点数	口径	底径	器高				繊維	礫	砂
図V-4-1	1	H20c	IV 6 図16-1	16	21	H20c	IV 6 図16-1	16	1	(22.5)cm		(25.5)cm	II群a類	53	○	小 ○	○	
		H20c	IV 6 図16-2	17	6	H20c	IV 6 図16-2	17	6									
		I 20 b	IV 6 図16-3	1	4	I 20 b	IV 6 図16-3	1	4									
		未注記			6													
図V-4-1	2	H20c	IV 6 図16-2	17	5	H20c	IV 5	13	1	(30.2)cm		(36.0)cm	II群a類	53	○	×	×	
		I 20 b	IV 6 図16-3	1	2	H20c	IV 6 図16-2	17	5									
		H20c	IV 6 図16-2	17	10	H21a	III 8	4	2									
						H21c	IV 7	15	3									
						H22b	V 8	14	1									
図V-4-1	3	C34c	IV 2 図33	2	15					15.0cm		15.6cm	II群a類	53	○	×	○	
図V-4-2	4	E38c	IV 1	3	1	E38c	IV 1 図30-1	5	8	(42.0)cm		(30.0)cm	II群a類	53	○	中 ◎	◎	
		E38c	IV 1 図30-1	5	106	E38c	IV 2	7	1									
		未注記			19	E38c	IV 3	8	6									
						E38d	III 3	3	4									
						E38d	IV 1	5	1									
						E38d	IV 3	8	1									
図V-4-3	5	E38b	I	2	3	D38c	IV 2	1	1	(34.5)cm		(42.0)cm	II群a類	54	○	×	×	
		E38b	IV 1 図28	5	40	E37b	IV 4	2	1									
		E38b	I	1	3	E38b	I	1	1									
		E38b	I	3	1	E38b	I	2	2									
		E38b	IV 1 図28	5	5	E38b	IV 1 図28	5	10									
未注記			2															
図V-4-3	6	K38d	IV 4	2	1	K38d	IV 4	2	2	(14.6)cm		14.0cm	II群a類	54	○	×	×	
		K38d	IV 5 図70	3	13	K38d	IV 5 図70	3	7									
		K38d	IV 8	5	1	未注記			2									
		未注記			9													
図V-4-4	7	I 35c	IV 4 図59	6	56	I 35c	IV 4 図59	6	51	(33.0)cm		(43.9)cm	II群a類	55	○	×	○	
図V-4-5	8	H37d	IV 2 図55	3	19	H37d	IV 2 図55	3	63	(30.4)cm		(42.5)cm	II群a類	55	○	×	○	
		未注記			1													
		H37d	IV 2 図55	3	88													
未注記			11															
図V-4-5	9	H37c	V 1	3	2					13.7cm		(14.0)cm	II群a類	55	○	×	×	
図V-4-5	10	G24b	V 1 図107	8	32	G24b	V 1 図107	8	3	(31.0)cm		(20.0)cm	II群a類	55	○	小△	×	
図V-4-6	11	H25a	IV 4 図66	6	16	H25a	IV 4 図66	6	5	(35.3)cm		(26.0)cm	II群a類	55	○	×	×	
		I 25c	IV 4	2	1													
		H40b	III 1	3	1													
図V-4-6	12	H41c	I	5	2					(29.7)cm		(24.0)cm	II群a類	56	○	小~中 ◎	×	
		H42a	IV	11	12													
		H42b	I	3	3													
		H42b	I	4	1													
		H42b	IV 1	6	4													
		H42b	IV 2	7	4													
		H42b	V	9	10													
		H42c	IV	8	2													
		H43d	I 図3	5	1													
		G24b	V 5	7	1													
図V-4-6	13	G24b	V 6	9	2					(20.3)cm		(16.5)cm	II群a類	56	○	×	×	
		G24c	V 4	6	4													
		H24b	V 3 図60	4	17													
図V-4-7	14	H19d	V 7 図113	10	18	H19d	V 7 図113	10	19	(25.6)cm		(20.5)cm	II群a類	56	○	×	×	
図V-4-7	15	I 36b	IV 2 図56	4	34	I 36b	IV 2 図56	4	9	(20.7)cm		(27.0)cm	II群a類	56	○	中 ○	×	
図V-4-7	16	未注記			26					(17.1)cm		19.7cm	II群a類	56	○	×	×	
		I 39d	IV 4 図48	6	1	I 39d	IV 4 図48	6	1									
図V-4-7	17	I 34d	I	3	38	I 34d	I	3	11	(20.0)cm		(23.0)cm	II群a類	56	○	×	×	
		I 35d	IV 3	1	3	I 36b	IV 2	2	1									
図V-4-7	18	未注記			4					(21.3)cm		(18.9)cm	II群a類	57	○	×	×	
		J 34a	IV 2 図73	5	18	I 37d	IV 1	1	1									
						I 39b	IV 5	7	13									
図V-4-8	19	F30c	IV 1 図36-1	6	50	F30c	IV 1 図36-1	6	12	(27.6)cm		(33.5)cm	II群a類	57	○	×	×	
図V-4-8	20	G24a	IV 5 図98	4	10	G24a	IV 5 図98	4	11	(20.5)cm		(11.5)cm	II群a類	57	○	×	×	
		G24c	V 2	4	1	G24a	IV 9	6	5									
		F30c	IV 1 図36-1	6	43	F30c	IV 1 図36-1	6	19									
図V-4-9	21	未注記			4	未注記				(28.7)cm		(21.5)cm	II群a類	57	○	小 ○	×	
図V-4-9	22	E25d	IV 7 図95-1	4	4	E25d	IV 7 図95-7	10	2	(25.5)cm		(20.1)cm	II群a類	58	○	小 △	×	
		E25d	IV 7 図95-2	5	1	E25d	IV 11 図109	13	1									
		E25d	IV 7 図95-3	6	5													
		E25d	IV 7 図95-4	7	2													
		E25d	IV 7 図95-5	8	1													
		E25d	IV 7 図95-6	9	1													
		E25d	IV 7 図95-9	11	1													
		E25d	IV 11 図109	13	10													
図V-4-10	23	F37b	IV 3 図46	6	20	F37b	IV 3 図46	6	15	30.4cm		(31.6)cm	II群a類	58	○	中 △	×	
図V-4-11	24	G26b	IV 2	2	2	G27a	IV 2 図89	3	22	(31.0)cm		(34.0)cm	II群a類	59	○	×	×	
		G26b	IV 3	3	1													
		G27a	IV 2 図89	3	42													
		F37d	IV 2 図87	8	14	F37d	IV 2 図87	8	48									
図V-4-11	25									(23.5)cm		(18.7)cm	II群a類	59	○	中 △	×	
図V-4-12	26	G25a	IV 1 図88	2	50	G25a	IV 1 図88	2	55	(27.4)cm	(9.0)cm	30.2cm	II群a類	59	○	×	○	

表V-10 包含層出土掲載拓本土器一覧

図番号	掲載番号	復元・接合・破片				同一個体未接合破片				分類	図版番号	胎 土		
		調査区	層位	遺物番号	接合点数	調査区	層 位	遺物番号	接合点数			織 維	礫	砂
図V-4-13	27 a	I 33 d	IV 3	2	2					II群 a類	60	○	×	○
	27 b	G 30 a	V 1	3	1									
図V-4-13	28 a	G 26 b	V 2	6	1					II群 a類	60	△	×	×
	28 b	G 26 b	V 2	6	1									
図V-4-13	29	E 29 c	IV 1	1	1					II群 a類	60	○	×	×
図V-4-13	30	I 39 d	IV 1	3	1					II群 a類	60	○	小 △	△
図V-4-13	31 a	F 35 c	V 1	6	2	E 37 c	V 5	7	1	II群 a類	60	△	小~中 ◎	×
		F 35 d	IV 4	2	2	F 36 b	V a 3	10	1					
	31 b	E 36 c	V a 5	7	1	F 39 a	I	2	1					
		F 36 a	V a 4	8	1	J 39 b	V 2	5	1					
	31 c	F 36 b	V a 1	8	1									
		E 34 c	V a 1	1	1									
	31 d	F 35 c	V 1	6	4									
		F 36 a	IV 2	1	3									
図V-4-13	32	H 29 d	V 1	1	1				II群 a類	60	◎	小 △	○	
図V-4-13	33	H 21 a	V	14	2				II群 a類	60	○	小~中△	△	
図V-4-13	34	H 26 d	III 2	2	1				II群 a類	60	◎	小~中△	△	
図V-4-13	35	表採		2	1				II群 a類	60	○	×	×	
図V-4-13	36	F 25 c	III 1	3	3				II群 a類	60	○	×	×	
図V-4-13	37	H 23 a	V 16	26	2				II群 a類	60	○	×	×	
図V-4-13	38	D 27 d	IV 4	8	2	D 27 d	IV 4	8	1	II群 a類	60	○	×	×
図V-4-13	39	E 26 b	IV 7	6	1					II群 a類	60	○	×	△
図V-4-13	40	F 36 a	V a 3	6	1					II群 a類	60	○	小 △	△
図V-4-13	41	E 26 a	IV 8	7	3	E 26 a	IV 8	7	2	II群 a類	61	○	小 △	△
図V-4-13	42 a	G 36 b	IV 4	4	1					II群 a類	61	○	×	×
	42 b	G 36 b	IV 4	4	2									
図V-4-14	43	F 30 c	IV 3 図81	10	16	F 30 c	IV 3 図81	10	21	II群 a類	61	○	×	×
図V-4-14	44	H 19 a	IV 3 図13	5	5	H 19 a	IV 3 図13	5	9	II群 a類	61	○	×	×
		H 19 b	III 6	8	6	H 19 b	III 6	8	3					
図V-4-14	45	H 18 a	IV 2	4	1					II群 a類	61	○	×	×
図V-4-14	46	K 38 d	IV 5 図70	3	1					II群 a類	61	○	×	×
図V-4-14	47	F 35 a	V a 2	5	5					II群 a類	61	○	×	×
		F 35 a	V a 3	8	1									
図V-4-14	48 a	F 38 b	IV 3 図50	5	8	E 28 c	V 3	4	1	II群 a類	62	○	×	×
		E 34 a	V 7	2	1	E 38 a	IV 4	6	1					
	E 38 a	IV 4	6	7	E 38 b	IV 1	4	1						
	F 38 b	IV 3 図50	5	3	E 39 c	I	3	1						
					F 38 b	IV 3 図50	5	5						
					F 39 b	I	5	2						
				F 39 c	IV 1	8	1							
図V-4-14	49	F 38 a	IV 5	6	1					II群 a類	62	○	×	×
図V-4-14	50	J 34 c	IV 2 図75	2	1	J 34 c	IV 2 図75	2	67	II群 a類	62	○	×	×
図V-4-14	51	H 40 d	IV 4	4	1					II群 a類	62	○	×	◎
		H 40 d	IV 6	5	2									
図V-4-15	52 a	I 25 a	IV 5 図79-1	4	2	I 25 a	IV 5 図79-1	4	25	II群 a類	62	○	小 △	×
	52 b	I 25 a	IV 5 図79-1	4	5									
図V-4-15	53	G 41 c	IV 1	8	1					II群 a類	62	○	×	×
		G 42 d	IV 2	4	1									
		H 42 a	IV 5	10	1									
図V-4-15	54	F 30 d	IV 4	11	1					II群 a類	62	○	×	△
図V-4-15	55	D 37 d	IV 3	2	1					II群 a類	62	○	小 ○	○
図V-4-15	56	I 39 d	IV 4	11	5	I 39 d	IV 4	11	11	II群 a類	63	○	小~中◎	×
図V-4-15	57	E 32 a	I	3	3					II群 a類	63	○	×	×
図V-4-15	58	E 39 c	I	3	1					II群 a類	63	○	×	×
図V-4-15	59	F 36 c	IV 8	5	2	F 36 c	IV 8	5	1	II群 a類	63	○	×	×
図V-4-15	60	F 25 c	IV 5	9	1	F 39 d	I	1	2	II群 a類	63	○	×	×
		G 26 a	IV 1	2	3	G 26 a	IV 1	2	26					
図V-4-15	61	F 31 d	IV 1	2	3					II群 a類	63	○	×	×
図V-4-15	62 a	G 23 d	III 3	2	1					II群 a類	63	○	×	×
	62 b	G 23 d	III 3	3	1									
図V-4-15	63	E 27 c	IV 4	4	2					II群 a類	63	○	×	×
図V-4-15	64	G 30 b	IV 6	5	1					II群 a類	63	○	×	×
図V-4-15	65	E 24 c	IV 2	5	1	E 24 c	IV 2	5	5	II群 a類	63	○	×	×
図V-4-15	66	E 36 c	IV 4	3	1					II群 a類	63	○	小 △	×
		J 36 d	I	1	1									

復元・接合・破片						同一個体未接合破片				分類	図版番号	胎 土		
図番号	掲載番号	調査区	層位	遺物番号	接合点数	調査区	層位	遺物番号	接合点数			織 維	礫	砂
図V-4-15	67	E38b	I	2	1					II群a類	63	○	×	×
図V-4-16	68	F38d	IV3	8	4					II群a類	63	○	小○	○
図V-4-16	69a	H23b	IV下図18-2	6	8	F25c	Ⅲ1 図100	2	3	II群a類	64	○	小~中○	○
		69b	G23b	IV下図18-1	6	5	G23b	IV下図18-1	6					
	G23c		IV中図102	4	1	G23c	IV下図102	4	13					
	69c	G23c	IV中図102	4	6	G24d	V1	6	2					
						G27a	IV	8	1					
						G27b	IV5	4	1					
						H23b	IV下図18-2	6	42					
				H23c	IV1	5	1							
				H23c	V6	12	1							
図V-4-16	70	H25b	IV4 図67	3	3	H25b	IV4	2	2	II群a類	64	○	小~中○	○
		H25c	IV2	1	1	H25b	IV4 図67	3	25					
						H25c	IV2	1	2					
図V-4-17	71	H23c	IV1 図12-1	4	38	H23c	Ⅲ1	2	1	II群a類	65	○	×	×
						H23c	IV1 図12-1	4	2					
						H24c	Ⅲ4	1	1					
図V-4-17	72	H43d	I	5	6	H41d	IV4	7	1	II群a類	65	○	×	×
		H43d	I 図3	6	11	H43b	I 図2	3	2					
						H43b	IV1	4	2					
						H43d	I 図3	5	6					
				H43d	I 図3	6	13							
図V-4-18	73	L44c	IV1	1	1					II群a類	65	○	×	×
		L45d	IV1	1	1									
図V-4-18	74	L39a	IV4	3	2					II群a類	65	○	小○	○
図V-4-18	75	H20d	V	8	2					II群a類	65	○	×	×
図V-4-18	76	E38c	IV1 図32	4	6	E38c	IV1 図32	4	17	II群a類	66	○	×	×
図V-4-18	77a	J40c	IV2	3	3	J40c	IV2	3	13	II群a類	66	○	×	×
		未注記			1									
77b	J40c	IV2	3	8										
図V-4-18	78	K38d	IV5 図70	3	19	K38d	IV5 図70	3	2	II群a類	66	○	小○	○
		未注記		4										
図V-4-18	79	F35b	Va2	4	1					II群a類	66	○	×	×
図V-4-18	80	F27a	IV5 図103	7	7	F27a	IV5 図103	7	33	II群a類	70	○	×	×
図V-4-18	81	I25a	IV5 図79-1	4	1	I25a	IV5 図79-1	4	6	II群a類	70	○	小△	○
図V-4-19	82	J35b	IV1	3	1					II群a類	69	○	×	○
図V-4-19	83	F26d	IV1 図99	1	22	F26d	IV1 図99	1	3	II群a類	67	○	×	×
図V-4-19	84	E34c	V1 図39	2	4	F33b	IV4	1	1	II群a類	65	○	×	×
						F35a	Va1	4	1					
						G41c	IV3	6	1					
図V-4-19	85	I25a	IV7	5	1					II群a類	65	○	×	×
図V-4-19	86	F36c	IV3 図101	13	3					II群a類	67	○	小~中◎	×
図V-4-19	87	H22a	V7 図112	12	26	H22a	V7 図112	12	15	II群a類	67	○	小△	×
図V-4-20	88a	I27d	IV6 図63	1	1	I27d	IV6 図63	1	60	II群a類	68	○	×	×
		I27d	IV6 図63	1	8	未注記			40					
	88c	I27d	IV6 図63	1	4									
図V-4-21	89	H25a	IV2	2	1					II群a類	69	○	×	×
図V-4-21	90	H42a	Ⅲ1	4	1	H42a	Ⅲ1	4	4	II群a類	69	○	×	×
図V-4-21	91	F37d	IV4	1	1					II群a類	69	○	×	×
図V-4-21	92	E38c	IV1 図30-2	6	6	E37b	IV4	2	1	II群a類	69	○	×	×
						E38c	IV1 図30-2	6	18					
図V-4-21	93	H41c	IV2	4	2					II群a類	69	○	×	×
		H41c	IV7	6	1									
図V-4-21	94	K47b	I	1	1					II群a類	69	○	×	×
図V-4-21	95a	G37b	IV4	8	3	G37b	IV4(未注記)	8	50	II群a類	69	○	×	×
		G37b	IV4	8	3									
図V-4-21	96	I38c	IV3	2	1					II群a類	69	○	×	×
図V-4-21	97	E26d	IV3	4	2					II群a類	69	○	×	×
		E26d	IV4	5	1									
図V-4-21	98	I36c	IV7	9	1					II群a類	69	○	小△	×
図V-4-21	99	I31a	V1 図74	3	8	I31a	V1 図74	3	31	II群a類	69	○	×	×
図V-4-21	100a	H39d	IV1	1	5	H36b	IV3 図24	2	76	II群a類	69	○	×	×
		H39d	V3	2	4	H36c	IV1	1	6					
	100b	H36c	IV2 図24	3	3	H36c	IV2 図24	3	42					
						H37b	IV1	1	2					
					H39d	V3	2	9		67				

復元・接合・破片						同一個体未接合破片				分類	図版番号	胎 土		
図番号	掲載番号	調査区	層位	遺物番号	接合点数	調査区	層位	遺物番号	接合点数			繊 維	礫	砂
図V-4-21	101	I 39 b	IV 5	7	1					II群 a類	67	○	×	×
		H18 b	III 6 図9	2	2	H18 b	III 6 図9	2	4	II群 a類	67	○	×	×
	H19 b	I	2	1	H19 a	III 5 図4	2	1						
	H19 b	III 5	6	1	H19 b	I	1	1						
	H19 b	III 7	9	1	H19 b	I	2	1						
	H19 d	III 9	6	3	H19 b	III 1	3	1						
					H19 b	I	5	2						
					H19 b	III 5	6	2						
					H19 b	I	7	3						
					H19 b	III 7	9	1						
				H19 c	III 3	3	1							
				H19 d	III 5	3	1							
				H19 d	III 9	6	6							
				H20 a	III 8	7	1							
図V-4-22	103	G29 b	IV 2	2	10					II群 a類	70	○	×	×
図V-4-22	104	G31 b	IV 2	1	1					II群 a類	70	○	×	×
図V-4-22	105	I 38 b	IV 4	4	1					II群 a類	70	○	中 △	×
図V-4-22	106	F36 b	V a 1	7	1					II群 a類	70	○	小 △	×
図V-4-22	107	J40 b	IV 5	6	1					II群 a類	70	○	小 △	×
図V-4-22	108	J40 b	IV 3	5	2					II群 a類	71	○	中 △	×
図V-4-22	109	D24 b	IV 6 図90	2	12	D24 b	IV 6 図90	2	9	II群 a類	72	○	小 ◎	◎
						未注記			7					
						E26 c	III 1	2	2					
						G17 b	IV 3	2	7					
								G18 a	IV 2	2	3			
図V-4-23	110	D37 d	IV 3	3	1					II群 a類	70	○	小 ◎	◎
図V-4-23	111	H21 c	I	1	2					II群 a類	71	○	小 ◎	◎
図V-4-23	112	D37 c	IV 1 図34	3	10	D38 b	III 1	1	1	II群 a類	71	○	×	×
		F27 d	IV 4 図96-4	5	8	F27 d	IV 4 図96-4	5	11	II群 a類	71	○	×	×
						F29 a	IV 1	4	1					
図V-4-23	114	F29 b	IV 1 図35-2	2	11	F29 b	IV 1 図35-2	2	36	II群 a類	71	○	×	×
						F29 b	IV 3	3	1					
図V-4-24	115	F30 c	IV10	5	1					II群 a類	72	○	×	○
図V-4-24	117 a	D27 c	IV10	7	1					II群 a類	72	○	×	○
		F25 c	IV 5	9	1					II群 a類	72	○	×	○
		F30 d	IV 1	3	1									
	117 c	F30 c	IV 1 図36-1	6	4									
図V-4-24	118	G20 c	IV 1	6	1					II群 a類	72	○	×	×
図V-4-24	119	I 39 b	IV 3	3	1					II群 a類	72	○	×	×
図V-4-24	120 a	E30 c	IV 3	3	1					II群 a類	72	○	×	×
		E27 a	IV 6	2	1									
図V-4-24	121 a	G28 a	III 1	1	1	G28 a	IV 2 図76	3	1	II群 a類	72	○	×	×
		G28 a	IV 2 図76	3	1									
		G28 a	IV 2 図76	3	1									
図V-4-24	122	L43 b	IV 1	1	1					II群 a類	72	○	×	×
		L43 b	IV 2	2	6									
		L43 c	I	1	1									
図V-4-24	123	F24 c	III 1	1	2	F24 c	III 1	1	5	II群 a類	73	○	×	○
						F24 c	IV 3	2	1					
						F25 b	III 1	1	1					
						未注記			1					
図V-4-24	124	F26 b	IV 1 図97	1	9	F26 b	IV 1 図97	1	5	II群 a類	73	○	×	○
図V-4-24	125	E26 b	IV 1 図17	1	2	E26 b	IV 1 図17	1	7	II群 a類	73	○	×	○
図V-4-24	126 a	F30 a	IV 3	5	4	F30 a	IV 3	5	2	II群 a類	73	○	×	×
		F30 a	IV 3	5	1									
図V-4-25	127	H16 a	I	2	1					II群 b類	73	—	—	—
図V-4-25	128	F24 a	III 2	2	1					II群 b類	73	—	—	—
図V-4-25	129 a	L41 b	IV 4 図110	2	1	L41 b	IV 4 図110	2	7	III群 b類	73	—	—	—
		L41 b	IV 4 図110	2	3	未注記			5					

礫の大きさによる区分

小 1~2 mm  
中 2~5 mm

◎ 多く含む  
○ 含まれる  
△ 少量含まれる  
× なし

表V-11 包含層出土掲載石器等一覧

図番号	器種名	発掘区	遺物番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	接合	図版 番号	備考
図V-4-46-1	石 鏃	H24b	7	Ⅲ層 2回目	2.4	1.5	0.3	0.7	黒曜石		74	
図V-4-46-2	石 鏃	H22d	15	Ⅳ層 2回目	2.7	1.4	0.5	1.0	黒曜石		74	
図V-4-46-3	石 鏃	H22a	23	Ⅲ層 5回目	2.7	1.6	0.4	0.8	黒曜石		74	
図V-4-46-4	石 鏃	H26c	24	Ⅳ層 1回目	3.2	1.5	0.3	1.0	黒曜石		74	
図V-4-46-5	石 鏃	H22a	24	Ⅲ層 5回目	(2.8)	1.4	0.3	0.8	黒曜石		74	先端欠損
図V-4-46-6	石 鏃	H20d	3	Ⅲ層 6回目	3.4	1.5	0.4	0.9	黒曜石		74	
図V-4-46-7	石 鏃	H21c	10	Ⅲ層 3回目	3.4	1.8	0.4	1.4	黒曜石		74	
図V-4-46-8	石 鏃	H16b	3	Ⅳ層 2回目	3.4	1.7	0.4	1.5	黒曜石		74	
図V-4-46-9	石 鏃	E24b	5	Ⅲ層 1回目	3.7	2.2	0.6	3.7	黒曜石		74	
図V-4-46-10	石 鏃	E24b	3	Ⅱ層 3回目	3.8	2.2	0.6	4.8	黒曜石		74	
図V-4-46-11	石 鏃	H24c	17	Ⅳ層 4回目	4.3	2.6	0.8	5.8	黒曜石		74	
図V-4-46-12	石 鏃	E24d	7	Ⅲ層 3回目	2.3	1.3	0.3	0.6	頁岩		74	
図V-4-46-13	石 鏃	H18b	16	Ⅳ層 1回目	2.5	1.5	0.3	0.7	頁岩		74	一部欠損
図V-4-46-14	石 鏃	H21d	24	Ⅳ層 6回目	2.7	1.4	0.4	1.1	頁岩		74	
図V-4-46-15	石 鏃	H22d	45	Ⅴ層 1回目	2.6	1.4	0.3	0.8	頁岩		74	
図V-4-46-16	石 鏃	H21a	11	Ⅲ層 8回目	2.6	1.4	0.4	1.1	頁岩		74	
図V-4-46-17	石 鏃	H20c	26	Ⅳ層 6回目	(2.7)	1.6	0.3	0.8	頁岩		74	先端欠損
図V-4-46-18	石 鏃	H21c	34	Ⅳ層 4回目	2.9	1.4	0.4	1.0	頁岩		74	
図V-4-46-19	石 鏃	H22b	1	Ⅲ層 1回目	3.3	1.4	0.4	1.3	頁岩		74	
図V-4-46-20	石 鏃	H19d	4	Ⅲ層 1回目	3.7	1.9	0.5	2.4	頁岩		74	
図V-4-46-21	石 鏃	H21c	25	Ⅲ層 9回目	(3.4)	(2.2)	0.5	2.5	頁岩		74	先端欠損
図V-4-46-22	石 鏃	G18d	20	Ⅳ層 3回目	(3.6)	2.3	0.5	3.3	頁岩		74	先端欠損
図V-4-46-23	石 鏃	H20c	14	Ⅳ層 2回目	4.4	2.5	0.6	5.2	頁岩		74	
図V-4-46-24	石 鏃	E28b	20	Ⅴ層 4回目	4.3	2.8	0.4	4.3	頁岩		74	
図V-4-46-25	石 鏃	E28b	5	Ⅳ層 3回目	3.3	2.1	0.5	3.0	頁岩		74	
図V-4-46-26	石 鏃	H21c	48	Ⅳ層 5回目	3.6	2.2	0.4	2.9	頁岩		74	
図V-4-46-27	石 鏃	H18a	21	Ⅳ層 2回目	4.0	2.4	0.6	4.9	頁岩		74	先端欠損
図V-4-46-28	石 鏃	H24d	10	Ⅳ層 3回目	5.8	3.3	0.7	10.8	頁岩		74	
図V-4-46-29	石槍又はナイフ	I43d	1	Ⅲ層 2回目	10.6	3.8	0.9	28.9	頁岩		74	
図V-4-46-30	石槍又はナイフ	H36b	1	Ⅳ層 1回目	8.3	2.6	1.2	23.6	頁岩		74	
図V-4-46-31	石 槍	I39c	24	Ⅳ層 2回目	10.5	3.1	1.2	37.6	頁岩		74	
図V-4-46-32	石 錐	E28d	4	Ⅳ層 1回目	2.8	1.0	0.4	1.4	頁岩		75	
図V-4-46-33	石 錐	H43a	23	Ⅲ層 1回目	3.9	1.1	0.6	2.0	頁岩		75	
図V-4-46-34	石 錐	H24b	4	Ⅲ層 1回目	3.4	0.9	0.4	1.1	頁岩		75	
図V-4-46-35	石 錐	H18b	24	Ⅳ層 3回目	(3.4)	0.9	0.4	1.2	頁岩		75	先端欠損
図V-4-46-36	石 錐	O39トレンチ	1	I層	4.2	1.1	0.6	2.7	頁岩		75	
図V-4-46-37	石 錐	H19c	7	Ⅲ層 2回目	2.9	1.0	0.4	1.1	黒曜石		75	
図V-4-46-38	石 錐	H22a	34	Ⅲ層 8回目	4.6	1.3	0.7	3.8	頁岩		75	
図V-4-46-39	石 錐	J41a	7	Ⅳ層 3回目	4.2	1.4	0.7	2.9	頁岩		75	
図V-4-46-40	石 錐	H24a	6	Ⅲ層 2回目	3.9	1.0	0.7	2.4	頁岩		75	
図V-4-46-41	石 錐	H22b	8	Ⅲ層 3回目	5.3	2.1	0.8	6.1	頁岩		75	
図V-4-47-42	つまみ付きナイフ	F30a	4	Ⅳ層 1回目	10.6	2.7	0.9	37.1	頁岩		75	
図V-4-47-43	つまみ付きナイフ	H43a	3	Ⅲ層 1回目	8.5	2.5	1.3	25.0	頁岩		75	
図V-4-47-44	つまみ付きナイフ	H26c	25	Ⅳ層 1回目	7.5	2.5	0.8	12.0	頁岩		75	
図V-4-47-45	つまみ付きナイフ	H24c	18	Ⅳ層 4回目	7.1	2.4	0.8	12.0	頁岩		75	
図V-4-47-46	つまみ付きナイフ	H22d	30	Ⅳ層 7回目	6.3	2.0	0.9	10.1	頁岩		75	
図V-4-47-47	つまみ付きナイフ	H21b	13	Ⅲ層 5回目	(6.2)	2.3	1.0	13.7	頁岩		75	先端欠損
図V-4-47-48	つまみ付きナイフ	E28d	5	Ⅳ層 1回目	6.2	2.2	0.8	8.3	頁岩		75	
図V-4-47-49	つまみ付きナイフ	H20c	27	Ⅳ層 6回目	6.7	2.9	0.7	13.6	頁岩		75	
図V-4-47-50	つまみ付きナイフ	H22b	39	Ⅳ層 7回目	7.6	3.5	1.2	32.1	頁岩		75	
図V-4-47-51	つまみ付きナイフ	H26c	1	Ⅲ層 2回目	9.0	2.4	1.1	21.3	頁岩		75	
図V-4-47-52	つまみ付きナイフ	H23b	5	Ⅲ層 3回目	8.6	2.8	0.9	20.1	頁岩		75	
図V-4-47-53	つまみ付きナイフ	H23c	9	Ⅳ層 1回目	9.2	3.6	1.3	35.6	黒曜石		75	花十勝
図V-4-47-54	つまみ付きナイフ	H19d	8	Ⅲ層 3回目	4.8	2.0	0.6	4.5	黒曜石		75	石鏃より転用
図V-4-47-55	スクレイパー	H14b	2	Ⅳ層 1回目	5.1	3.1	1.0	17.0	頁岩		76	
図V-4-47-56	スクレイパー	E26b	14	Ⅳ層 7回目	5.1	3.7	0.9	16.0	頁岩		76	
図V-4-47-57	スクレイパー	H23d	17	Ⅲ層 5回目	7.4	5.2	1.6	51.0	頁岩		76	
図V-4-48-58	スクレイパー	H19b	16	Ⅲ層 6回目	5.6	3.5	1.0	21.5	頁岩		76	
図V-4-48-59	スクレイパー	E39d	5	Ⅲ層 1回目	7.3	4.1	1.2	37.7	頁岩		76	
図V-4-48-60	スクレイパー	E28a	6	Ⅳ層 3回目	7.1	4.0	1.6	43.7	頁岩		76	
図V-4-48-61	スクレイパー	E28a	16	Ⅴ層 1回目	8.9	4.3	1.6	40.5	頁岩		76	
図V-4-48-62	スクレイパー	G19d	3	Ⅲ層 4回目	6.3	3.9	1.2	32.5	頁岩		76	
図V-4-48-63	スクレイパー	J40b	1	Ⅳ層 1回目	7.8	3.6	1.0	28.7	頁岩		76	
図V-4-48-64	スクレイパー	I39d	5	Ⅳ層 5回目	7.9	4.9	1.7	66.0	玄武岩		76	
図V-4-48-65	スクレイパー	F31d	1	Ⅳ層 2回目	7.4	2.9	1.5	26.3	頁岩		76	



図番号	器種名	発掘区	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図V-4-48-66	スクレイパー	F37a	10	IV層3回目	6.5	3.3	1.5	24.8	頁岩		76	
図V-4-48-67	スクレイパー	H18b	27	III層10回目	5.0	2.2	0.7	9.2	頁岩		76	
図V-4-48-68	スクレイパー	H15a	7	IV層1回目	5.6	2.7	1.2	18.2	頁岩		76	
図V-4-48-69	スクレイパー	E24d	2	III層1回目	5.9	4.0	1.4	24.3	頁岩		76	
図V-4-48-70	スクレイパー	H42c	1	I層	7.6	4.9	0.7	18.0	頁岩		76	
図V-4-49-71	スクレイパー	H21b	4	III層1回目	5.6	3.2	2.0	27.8	頁岩		77	擦痕あり
図V-4-49-72	スクレイパー	H23c	22	IV層4回目	6.1	4.5	1.6	37.6	頁岩		77	
図V-4-49-73	スクレイパー	E40b	1	I層	8.8	5.3	1.4	59.7	頁岩		77	
図V-4-49-74	スクレイパー	H24d	18	IV層3回目	9.9	6.5	1.8	113.2	頁岩		77	
図V-4-49-75	スクレイパー	H20c	11	IV層4回目	8.3	3.1	1.4	31.8	黒曜石		77	
図V-4-49-76	スクレイパー	H26a	1	III層1回目	7.2	2.2	0.9	10.1	頁岩		77	
図V-4-49-77	スクレイパー	H21c	11	III層3回目	9.7	1.9	0.9	14.6	頁岩		77	
図V-4-49-78	両面調整石器	M45トレンチ	4	I層	10.0	6.5	1.4	56.8	頁岩		77	
図V-4-49-79	両面調整石器	F31d	7	IV層1回目	6.6	5.2	1.3	36.5	黒曜石		77	土器取り上げNo.36付近 図あり
図V-4-49-80	両面調整石器	H19a	11	III層4回目	11.3	6.2	2.3	136.2	頁岩		77	
図V-4-50-81	石 斧	H21d	34	IV層1回目	7.8	2.5	1.1	34.3	緑色泥岩		78	
図V-4-50-82	石 斧	F39a	21	IV層2回目	7.5	4.7	1.5	72.2	緑色泥岩		78	
図V-4-50-83	石 斧	H26b	5	III層1回目	10.8	4.2	1.0	74.5	緑色泥岩		78	
図V-4-50-84	石 斧	H20b	21	IV層4回目	10.4	5.3	2.2	194.5	緑色泥岩		78	刃部欠損
図V-4-50-85	石 斧	H20a	8	III層9回目	11.4	4.7	2.3	196.0	緑色泥岩		78	
図V-4-50-86	石 斧	F24b	28	IV層6回目	11.7	6.3	3.2	315.0	安山岩		78	
図V-4-50-87	石 斧	I26d	12	IV層7回目	9.4	5.1	1.4	90.0	安山岩		78	
図V-4-51-88	石 斧	E27d	12	IV層5回目	17.5	9.0	3.7	805.0	安山岩		78	
図V-4-51-89	石 斧	I25a	28	IV層5回目	19.8	8.1	2.6	625.0	片岩		78	
図V-4-51-90	たたき石	E35d	9	Va層1回目	9.3	8.1	3.8	460.0	安山岩		79	
図V-4-51-91	たたき石	I26b	2	IV層1回目	9.3	8.0	4.1	450.0	安山岩		79	
図V-4-51-92	たたき石	F36d	33	Va層2回目	10.2	9.7	3.8	620.0	安山岩		79	
図V-4-51-93	たたき石	I25a	33	IV層5回目	9.9	7.8	3.6	400.0	安山岩		79	
図V-4-51-94	たたき石	H41c	22	IV層10回目	8.9	10.1	4.4	680.0	安山岩		79	
図V-4-51-95	たたき石	I35d	5	IV層4回目	10.3	8.1	6.4	870.0	安山岩		79	
図V-4-51-96	たたき石	F39a	6	III層1回目	13.6	7.2	4.3	630.0	安山岩		79	
図V-4-52-97	たたき石	G24a	12	IV層3回目	12.1	5.5	3.7	330.0	安山岩		79	
図V-4-52-98	たたき石	I40c	5	IV層3回目	11.9	3.8	2.4	240.0	安山岩		79	
図V-4-52-99	たたき石(くぼみ石)	E38d	7	IV層1回目	14.2	6.3	2.6	250.0	安山岩	J39d.4. IV-2と接合	79	
図V-4-52-100	すり石	G38b	8	I層	9.2	13.0	3.8	758.2	安山岩		80	
図V-4-52-101	すり石	G41c	4	I層	10.3	15.7	3.7	889.1	安山岩		80	
図V-4-52-102	すり石	H23a	25	III層5回目	9.1	14.3	5.4	940.0	安山岩		80	
図V-4-52-103	すり石	G38b	15	I層	9.1	15.0	3.3	787.0	安山岩		80	
図V-4-52-104	すり石	I40a	9	IV層4回目	6.2	9.7	2.9	252.5	安山岩		80	
図V-4-52-105	すり石	F35d	3	IV層4回目	6.2	12.3	3.6	367.7	石英片岩		80	
図V-4-52-106	石 鋸	H43b	3	III層1回目	4.4	7.8	1.3	52.9	安山岩		81	
図V-4-52-107	石 鋸	I45c	2	I層	6.1	7.6	1.0	67.8	安山岩		81	
図V-4-52-108	石 鋸	F40d	7	III層3回目	5.3	8.2	0.9	72.8	安山岩		81	
図V-4-52-109	石 鋸	H15b	10	IV層2回目	9.1	5.4	1.0	59.9	安山岩		81	
図V-4-53-110	石 錘	H24a	26	V層2回目	9.6	10.2	3.3	482.1	安山岩		81	
図V-4-53-111	石 錘	H26c	12	IV層4回目	7.4	9.0	3.2	292.0	安山岩		81	
図V-4-53-112	石 錘	F37b	5	III層1回目	9.1	9.0	2.7	356.7	安山岩		81	
図V-4-53-113	石 錘	H42d	11	III層1回目	8.2	9.4	3.0	296.2	安山岩		81	
図V-4-53-114	石 錘	G42c	1	III層1回目	9.4	9.9	2.8	321.9	安山岩		81	
図V-4-53-115	石 錘	F41c	4	III層1回目	9.9	11.7	5.5	835.8	安山岩		81	
図V-4-53-116	石 錘	H26a	7	III層2回目	6.5	9.9	0.9	109.3	泥岩		81	擦り切り痕あり2ヶ所打ち欠き
図V-4-53-117	砥石	G38a	7	I層	9.8	4.5	3.7	230.1	泥岩		82	
図V-4-53-118	砥石	H34b	5	IV層1回目	7.1	5.3	2.7	76.5	砂岩		82	
図V-4-53-119	砥石	F35c	15	IV層6回目	8.3	9.5	4.7	80.0	軽石	2点	82	
図V-4-53-120	砥石	D36c	3	IV層2回目	13.0	9.1	7.3	267.0	軽石		82	溝、多数あり
図V-4-54-121	砥石	H21d	35	IV層1回目	14.3	10.5	4.5	144.0	軽石		82	
図V-4-54-122	石製品	F37b	23	IV層4回目	3.1	2.7	2.9	3.8	軽石		82	有孔
図V-4-54-123	石製品	E38c	9	IV層2回目	3.0	(1.7)	2.8	2.2	軽石		82	有孔、半分欠損
図V-4-54-124	土製品	I23a	17	V層5回目	6.2	4.3	1.3	—	—		82	土器片錘
図V-4-54-125	土製品	G29d	4	V層2回目	5.3	5.0	1.1	—	—		82	土器片錘
図V-4-54-126	土製品	M45トレンチ	6	III層	(2.5)	5.5	0.9	—	—		82	円盤土製品・半欠

表V-12 焼土土壌フローテーション成果一覧

遺番 構号	風乾土 壤体積 (ℓ)	2.0mm 炭化物 重量(g)	0.425mm 炭化物 重量(g)	残 渣 重 量 (g)	骨 重 量 (g)	土 器 重 量 (g)	石 器 重 量 (g)	黒曜石 重量 (g)	頁 岩 重 量 (g)	褐鉄鈦 重 量 (g)	備 考
F-6	23.5	0.11	0.23	42.20	0.40	2.10	無	0.10	3.90	無	
F-7	24.0	0.86	0.33	27.60	0.10	無	無	0	0.60	無	
F-8	76.0	8.21	7.56	258.54	0	116.21	無	0.10	18.06	0.10	軽石9.89 g
F-9	25.0	0.03	0.05	13.85	5.23	2.37	無	0.14	0.25	無	軽石0 g
F-10	15.0	0.01	0.04	5.78	0	無	無	0.36	0.50	無	
F-11	3.0	0	0	1.02	0	0.45	無	0	0.03	無	
F-12	14.0	無	0.09	2.61	無	0.08	無	0.03	1.22	無	
F-13	8.5	0.01	0.04	5.78	無	無	無	0.71	0.49	21.72	軽石49.60 g
F-14	1.5	無	0	3.04	無	無	無	無	0	1.53	
F-15	18.0	0	0.04	11.03	0.17	無	無	0.07	0.77	0.04	軽石0.06 g
F-16	8.0	0.11	0.08	4.81	0.02	0.75	無	0	0.17	1.25	
F-17	9.0	無	0	0.14	無	無	無	0.01	0.02	0	
F-18	1.0	無	0	11.80	無	5.20	無	無	無	無	
F-19	6.0	0.24	0.10	62.40	無	4.74	無	0	0.09	無	礫54.34 g
F-22	4.0	0.05	0.05	3.23	無	2.62	無	0	0.09	0.02	
F-23	10.0	0.10	0.22	10.00	無	1.50	無	0.06	0.16	0.32	
F-24	18.4	0.85	0.24	1.14	0.14	0.20	無	無	0.40	0.29	
F-25	20.5	1.42	0.73	66.52	1.36	0.47	無	0.29	0.52	0.23	礫片43.01 g
F-26	8.0	0.04	0.29	15.40	0	無	無	無	0.12	0.94	
F-27	1.0	無	0	6.20	無	無	無	無	無	無	
F-28	41.0	0.33	0.61	61.03	0.29	1.19	無	0.10	0.28	無	
F-29	1.5	0.03	0.09	28.51	無	12.28	無	0.10	0.14	0.20	
F-30	2.0	0.02	0.04	0.55	0	無	無	0	0.02	0.02	
F-31	24.0	0.01	0.08	13.17	0.02	無	無	0	0.17	無	
F-33	1.5	0	0	4.43	無	無	無	無	無	3.42	
F-34	3.0	無	0.03	0.76	無	0.09	無	無	無	無	
F-35	5.5	0.62	0.16	0.95	0	無	無	無	0.07	無	
F-36	6.6	0.30	0.24	4.21	0.08	0.41	無	0.47	0.17	0.46	
F-37	10.0	0.37	0.65	8.11	0.64	2.31	無	0.09	0.28	0.21	
F-38	19.4	0.21	0.26	14.60	無	無	無	無	0.01	0.83	
F-39	7.0	0.22	0.23	6.84	0	無	無	無	0.39	0.06	
F-40	12.0	0.71	0.16	4.19	0	0.86	無	0.01	0.18	0.04	
F-41	10.0	0.06	0.01	47.77	無	20.08	無	無	0	6.08	
F-42	7.0	0.01	0.12	6.48	無	無	無	0	0.07	0.07	
F-43	6.0	0	0.04	21.04	0.04	8.03	無	0	0.19	0.43	
F-44	3.0	0	0	1.76	無	無	無	0.06	1.17	無	
F-45	7.0	0.20	0.09	1.93	無	無	無	無	0.37	無	
F-46	6.0	0.20	0.39	26.75	無	1.97	無	0.01	0.05	無	
F-47	2.0	0	0	32.72	無	無	無	0	0.04	無	礫31.64 g
F-48	9.0	0.12	0.04	17.66	無	無	16.45	3.20	13.34	無	
F-49	24.0	1.13	1.09	95.69	0	無	無	0.09	0.17	6.21	石英閃緑岩(37.60 g)
F-50	14.5	0.35	0.28	2.73	無	無	無	0.05	0.11	無	
F-51	6.0	0.01	0.02	0.72	0	無	無	0.08	0	無	
F-52	8.0	無	0.03	0.98	0	0.21	無	0	0	0.01	
F-53	2.0	0.01	0.03	2.85	無	2.00	無	無	0.05	0.07	
F-55	1.0	0.16	0.17	14.84	無	5.29	無	0	0.01	0.06	
F-56	10.5	0	0.05	0.05	無	無	無	0	0.01	無	
F-57	9.0	無	0.01	5.66	無	3.52	無	0.08	0	無	
F-58	5.0	0.50	0.12	19.80	0	無	無	無	0	無	
F-59	37.0	0.38	0.06	43.78	無	0.37	無	無	無	無	
F-61	6.0	0.17	無	1.53	0.00	無	無	0.02	0.03	0.41	
F-62	22.0	0.38	0.32	4.12	無	無	無	無	0	無	礫片0.08 g
合計	622.9	18.54	15.51	1,049.30	8.49	195.30	16.45	6.23	44.71	45.02	

## VI 自然科学的手法による分析

### 1. リヤムナイ 3 遺跡から検出された動物遺存体同定

株式会社パレオ・ラボ 黒澤 一男

#### 1) 対象試料および方法

北海道岩内郡共和町にあるリヤムナイ 3 遺跡から出土した動物遺存体について同定をおこなった。同定には国立歴史民俗博物館の西本研究室所蔵の現生標本との比較によりおこなった。なお同定に際し、国立歴史民俗博物館の西本豊弘教授に監修していただいた。この場をお借りして感謝の意を表す。

#### 2) 同定結果および考察

リヤムナイ 3 遺跡の 5 遺構 7 調査区から出土した動物遺体について同定した結果を表 VI-1 にまとめる。なお対象とした動物遺体はすべて焼骨であり、細片となっており、種や部位の同定が不可能なものが多い。以下に分類群毎の同定結果を記す。

##### ① 魚類

魚類はアイナメ属の 1 分類群のみ確認された。なお、魚類はこれ以外に検出されておらず、焼かれているため骨厚の薄い魚骨はより細片化してしまい、検出されなかったと考えられる。

##### アイナメ属 *Hexagrammos sp.*

アイナメ属は、腹椎が F-24 遺構より 1 点、尾椎が F-9 遺構より 1 点の計 2 点検出されている。

アイナメ属の椎骨による種同定は困難であるが、両椎骨ともアイナメ (*Hexagrammos otakii*) に酷似していることからおそらくアイナメである可能性が高く、体長 30cm の現生標本とほぼ同等の大きさであることから中型のアイナメである。

##### ② 鳥類

鳥類は骨幹の破片が 1 点 (F 26 c 調査区) 検出されている。

##### ③ 陸獣

陸獣は、4 遺構 5 調査区より複数検出されており、分類を行った試料の大半を占めている。種および部位の同定にいたったものは 4 点のみで大半が同定困難な破片である。それら同定困難な破片は概ね緻密質が厚いことから大型陸獣のものと考えられ、エゾシカやクマのような大型陸獣の骨片である。

##### エゾシカ *Cervus nippon yesoensis*

エゾシカは、角が H25 a と H42 a から各 1 点、橈骨と中手骨または中足骨が H25 a から各 1 点検出されている。

##### ④ 海獣

海獣は、2 遺構 5 調査区より複数検出されている。部位の同定にいたったものは 3 点のみであり、多くは同定にいたらない破片である。

##### 鰭脚類 *Pinnipedia*

鰭脚類は、指骨が S-9 遺構と H42 a 調査区、J 40 b 調査区より各 1 点検出されている。指骨であるため、種同定にはいたらないが、およそこれらの大きさからオットセイの雌ではないかと考えられる。

### 3) おわりに

リヤムナイ3遺跡から出土した動物遺体を同定した結果、アイナメ属、エゾシカ、鯨脚類の存在が確認された。しかし、焼骨であるため全体的に保存状態が悪く詳細な検討は困難であった。その中でも、北海道の縄文時代の遺跡においては一般的な種類であるエゾシカや鯨脚類については確認することができた。また、1分類群しか確認できなかったが、魚類では浅海の岩礁域に生息するアイナメ属が確認された。これらの動物群は遺跡を取り囲む近隣の環境に生息しているものであり、本遺跡の狩猟および漁撈などの生業範囲は近隣のあまり遠くない範囲であると考えられる。本遺跡から北西およそ6km先の縄文中期の茶津貝塚においても動物遺体よりその生業範囲を検討しているが、それによると積丹半島の西側がその範囲と考えており(西本, 1990)、それと矛盾はない。しかし、茶津貝塚ではシカが少なく、海獣が多いという傾向が認められ、本遺跡とは異なるが、焼骨であるため、残存しやすいものが多く検出されるため、異なる結果となったと考えられる。このような保存性を考慮すると、茶津貝塚における生業と類似した生業を営んでいたとも考えられる。

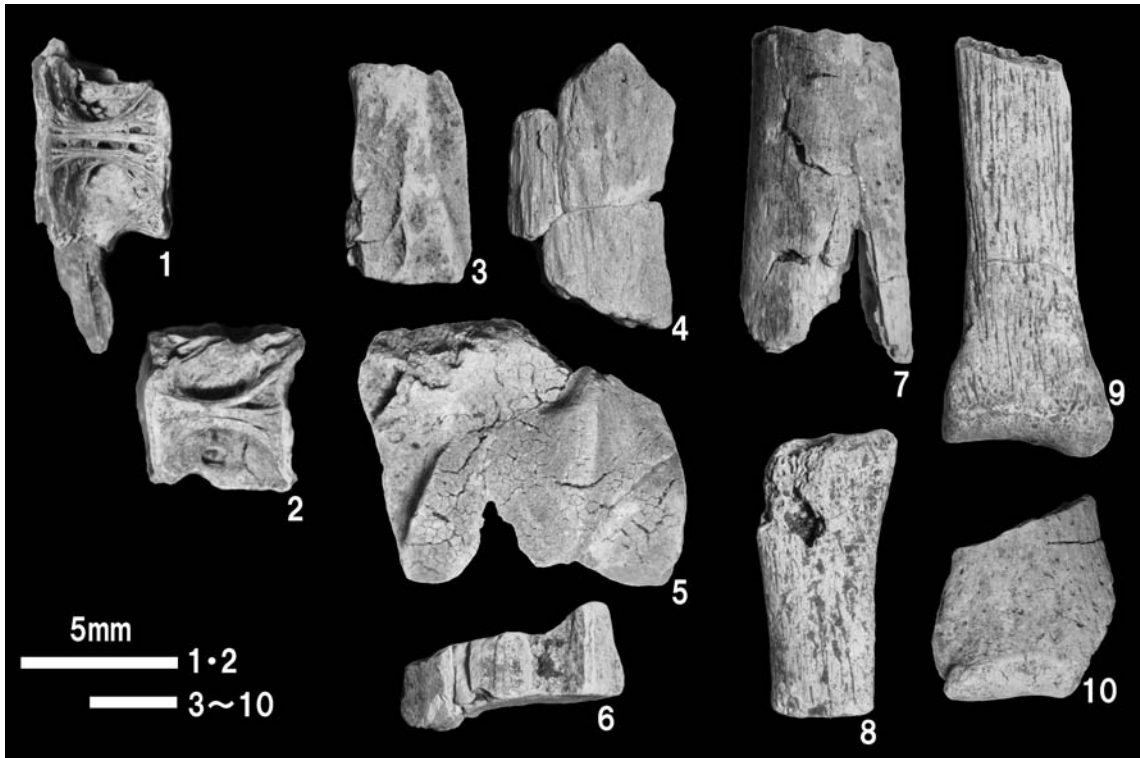
### 引用文献

西本豊弘(1990) 茶津貝塚の動物遺体. 北海道文化財研究所調査報告書第5集「茶津貝塚」, 186-203.

表VI-1 リヤムナイ3遺跡出土骨類一覧表

試料番号	遺構・調査区	層位	種類	部位(左右)	状態	備考	写真番号
2	F-9	III-2	大型陸獣	不明	骨片	複数有	
3	F-9	III-2	陸獣または大型鳥類	不明	骨幹部破片		
4	F-9	III-2	大型陸獣	不明	骨片	複数有	
5	F-9	III-2	大型陸獣	不明	関節部破片		
			アイナメ属	尾椎			2
6	F-24	IV-3	陸獣(若獣)	不明	骨幹部破片		
7	F-24	IV-3	アイナメ属	腹椎			1
8	F-37	IV-5	陸獣	不明	破片	複数有	
			陸獣	不明	関節部破片		
			海獣	指骨	骨幹~遠位部		10
9	S-9	IV-4		不明	破片		
			海獣	中指または中足骨	骨幹部破片		7
10	FC-63	IV-5	海獣	不明	破片	複数有	
			海獣	不明	破片	1点のみ	
11	F 24 a	IV-6	鳥類	不明	骨幹部破片		
12	F 26 c	IV-3	海獣	不明	破片		
13	F 26 c	IV-3	海獣	不明	破片		
14	H 25 a	IV-4	エゾシカ	角	破片		4
			エゾシカ	中足骨	骨幹部破片		6
15	H 25 a	V-3		橈骨(左)	遠位端破片		5
			陸獣	不明	破片	複数有	
16	H 25 d	IV-4	エゾシカ	角	破片		3
			海獣	指骨	骨幹~遠位部		9
17	H 42 a	IV-3		不明	破片		
			海獣	指骨	近位~骨幹部		8
18	J 40 b	IV-3		不明	破片		
			海獣	不明	破片	複数有	
19	J 40 c	IV-3	海獣	不明	破片	複数有	

1:測定不能



図版VI-1 リヤムナイ3遺跡出土骨類

1・2. アイナメ属 (1; 腹椎 2; 尾椎)

3～6. エゾシカ (3・4; 角 5; 左 橈骨 遠位端 6; 中足骨 骨幹)

7～10. 海獣 (7; 中手骨もしくは中足骨 骨幹 8～10; 指骨)

## 2. 放射性炭素年代測定結果

株式会社 加速器分析研究所

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。
- 2) B P年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出しています。  
複数回（通常は4回）の測定値について $\chi^2$ 検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。
- 4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもあります。  
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものです。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_s - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_s - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_s$ ：試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_s$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_s$

$^{14}\text{A}_R$ ：標準現代炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_R$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_R$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度（ $^{13}\text{A}_s = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、IAAでは加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ （‰）であるとしたときの $^{14}\text{C}$ 濃度（ $^{14}\text{A}_N$ ）に換算した上で計算した値です。(1)式の $^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算します。

$$^{14}\text{A}_N = ^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_s \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad (^{14}\text{A}_s \text{として} ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_N - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

$^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになります。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 \quad (\text{‰})$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算されます。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

表VI-2 放射性炭素年代測定結果

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-51611 #1083-1	試料採取場所：北海道岩内郡共和町字梨野舞納 試料形態：炭化物（炭化材） 試料名（番号）：RM-1（リヤムナイ3遺跡）	Libby Age(yrBP) : 5,350 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -26.91 ± 0.85 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -486.5 ± 2.6 pMC(%) = 51.35 ± 0.26
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -488.5 ± 2.5 pMC(%) = 51.15 ± 0.25 Age(yrBP) : 5,390 ± 40
IAAA-51612 #1083-2	試料採取場所：北海道岩内郡共和町字梨野舞納 試料形態：炭化物（クルミ片） 試料名（番号）：RM-2（リヤムナイ3遺跡）	Libby Age(yrBP) : 5,530 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -24.37 ± 0.77 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -497.7 ± 2.5 pMC(%) = 50.23 ± 0.25
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -497.0 ± 2.4 pMC(%) = 50.30 ± 0.24 Age(yrBP) : 5,520 ± 40
IAAA-51613 #1083-3	試料採取場所：北海道岩内郡共和町字梨野舞納 試料形態：炭化物（クルミ片） 試料名（番号）：RM-3（リヤムナイ3遺跡）	Libby Age(yrBP) : 5,390 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -25.65 ± 0.95 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -489.0 ± 2.6 pMC(%) = 51.10 ± 0.26
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -489.7 ± 2.4 pMC(%) = 51.03 ± 0.24 Age(yrBP) : 5,400 ± 40
IAAA-51614 #1083-4	試料採取場所：北海道岩内郡共和町字梨野舞納 試料形態：クルミ片 試料名（番号）：RM-4（リヤムナイ3遺跡）	Libby Age(yrBP) : 5,390 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -25.40 ± 0.95 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -489.0 ± 2.6 pMC(%) = 51.10 ± 0.26
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -489.4 ± 2.4 pMC(%) = 51.06 ± 0.24 Age(yrBP) : 5,400 ± 40
IAAA-51615 #1083-5	試料採取場所：北海道岩内郡共和町字梨野舞納 試料形態：クルミ片 試料名（番号）：RM-5（リヤムナイ3遺跡）	Libby Age(yrBP) : 5,370 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -29.50 ± 0.80 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -487.7 ± 2.5 pMC(%) = 51.23 ± 0.25
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -492.4 ± 2.4 pMC(%) = 50.76 ± 0.24 Age(yrBP) : 5,450 ± 40

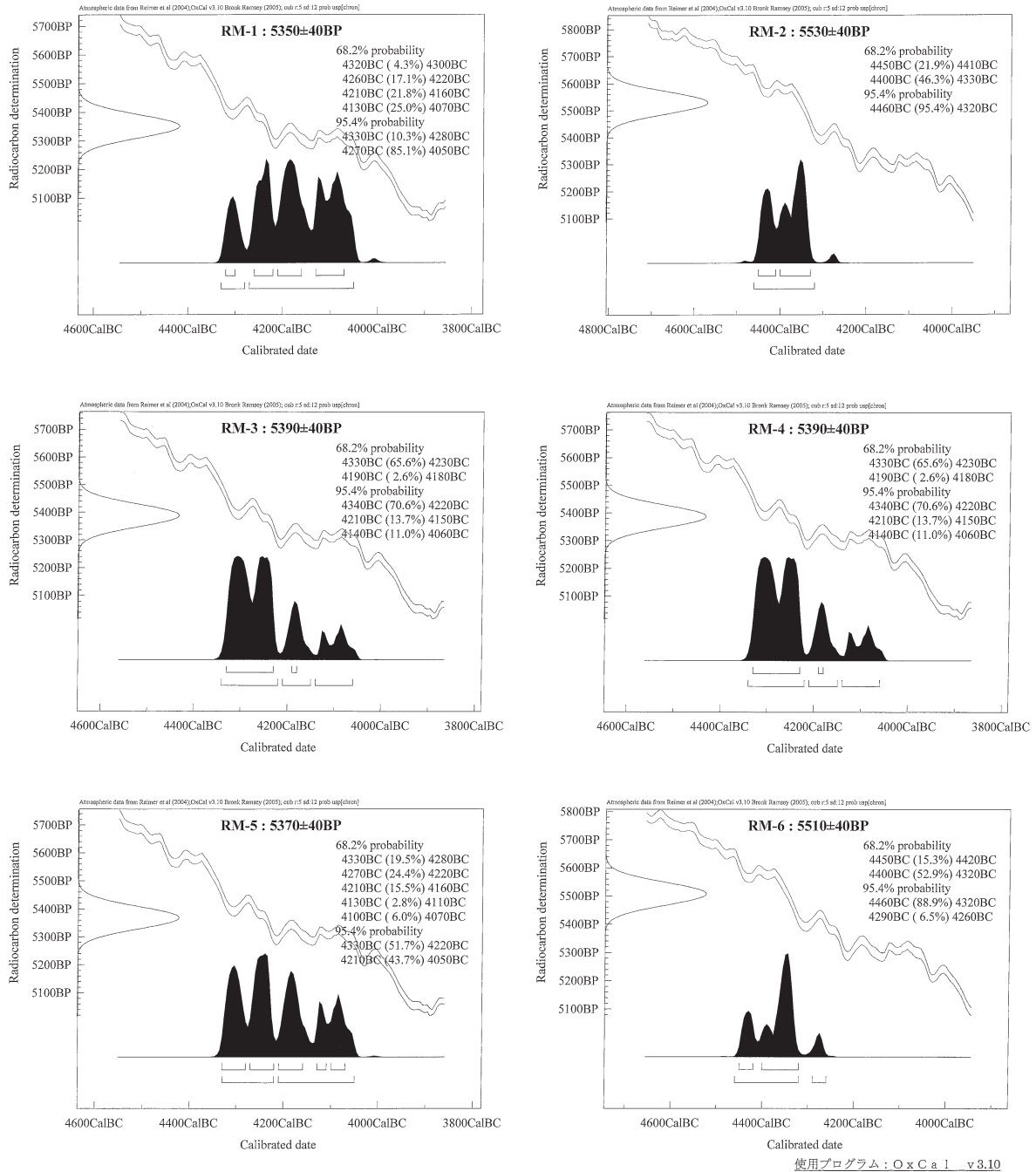
IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-51616 #1083-6	試料採取場所：北海道岩内郡共和町字梨野舞納 試料形態：炭化材 試料名(番号)：RM-6(リヤムナイ3遺跡)	Libby Age(yrBP) : 5,510 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -20.87 ± 0.83 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -496.3 ± 2.5 pMC(%) = 50.37 ± 0.25
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -492.1 ± 2.4 pMC(%) = 50.79 ± 0.24 Age(yrBP) : 5,440 ± 40
IAAA-51617 #1083-7	試料採取場所：北海道岩内郡共和町字梨野舞納 試料形態：炭化物(クルミ片) 試料名(番号)：RM-7(リヤムナイ3遺跡)	Libby Age(yrBP) : 5,320 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -26.43 ± 0.95 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -484.3 ± 2.5 pMC(%) = 51.57 ± 0.25
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -485.8 ± 2.2 pMC(%) = 51.42 ± 0.22 Age(yrBP) : 5,340 ± 40
IAAA-51618 #1083-8	試料採取場所：北海道岩内郡共和町字梨野舞納 試料形態：炭化物(クルミ片) 試料名(番号)：RM-8(リヤムナイ3遺跡)	Libby Age(yrBP) : 5,460 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -25.81 ± 0.87 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -493.1 ± 2.5 pMC(%) = 50.69 ± 0.25
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -494.0 ± 2.3 pMC(%) = 50.60 ± 0.23 Age(yrBP) : 5,470 ± 40
IAAA-51619 #1083-9	試料採取場所：北海道岩内郡共和町字梨野舞納 試料形態：炭化物(クルミ片) 試料名(番号)：RM-9(リヤムナイ3遺跡)	Libby Age(yrBP) : 5,330 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -23.91 ± 0.79 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -484.7 ± 2.5 pMC(%) = 51.53 ± 0.25
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -483.6 ± 2.4 pMC(%) = 51.64 ± 0.24 Age(yrBP) : 5,310 ± 40
IAAA-51620 #1083-10	試料採取場所：北海道岩内郡共和町字梨野舞納 試料形態：クルミ片 試料名(番号)：RM-10(リヤムナイ3遺跡)	Libby Age(yrBP) : 5,400 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -25.64 ± 0.92 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -489.6 ± 2.8 pMC(%) = 51.04 ± 0.28
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -490.3 ± 2.6 pMC(%) = 50.97 ± 0.26 Age(yrBP) : 5,410 ± 40



表VI-3 放射性炭素年代測定試料一覧

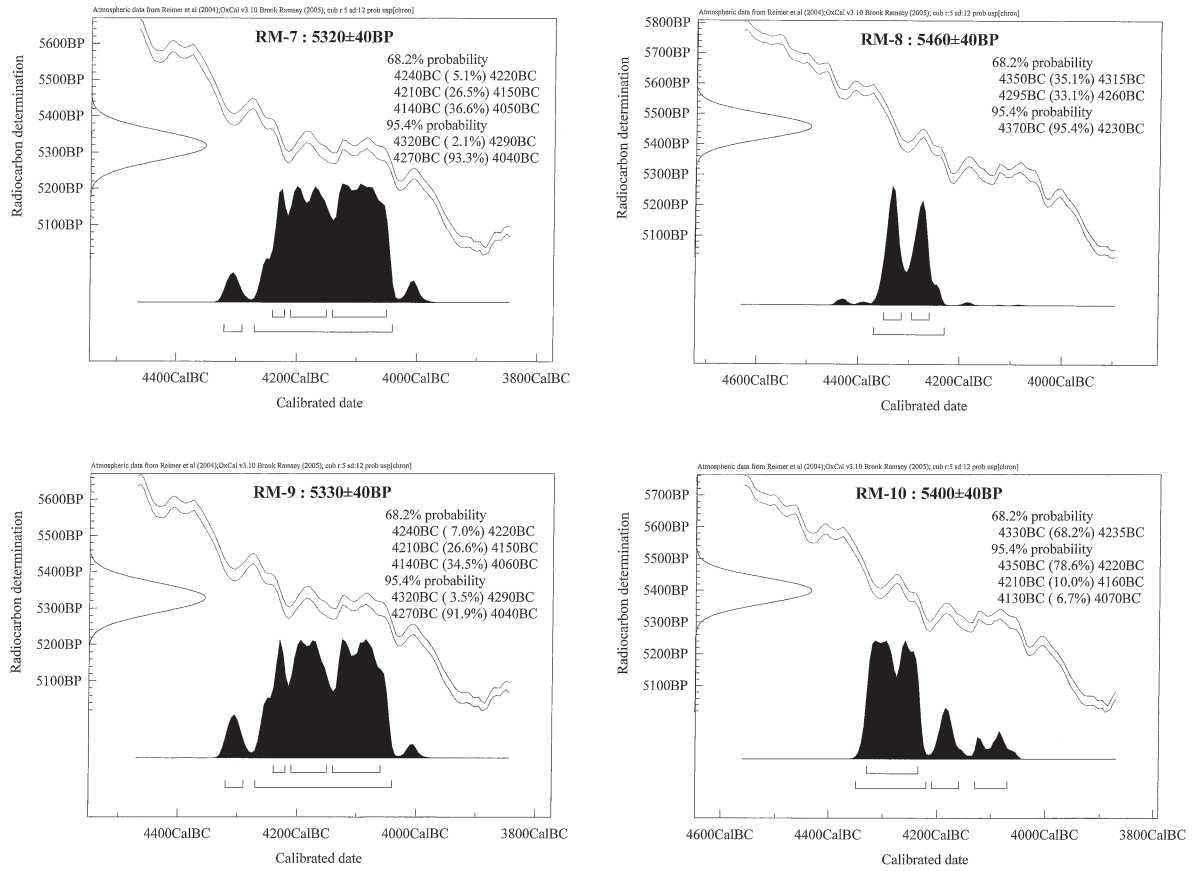
試料番号	遺構・調査区	検出層位	日付	種類	重量 (g)	備考
RM-1	F-8	IV-1	05. 06. 14	炭化材	0.11	焼土より採取
RM-2	F-23	V-3	05. 08. 23	クルミ	0.08	焼土より採取
RM-3	F-24	IV-3	05. 08. 23	クルミ	0.61	焼土より採取
RM-4	F-46	V-3	05. 09. 05	クルミ	0.25	焼土より採取
RM-5	F-49	V-10	05. 09. 26	クルミ	0.23	焼土より採取
RM-6	F-61	V-8	05. 10. 07	炭化材	0.12	焼土より採取
RM-7	F-64	IV-1	05. 09. 05	クルミ	0.17	炭化物集中より採取
RM-8	F C-61	IV-4	05. 09. 12	クルミ	0.10	剥片集中より採取
RM-9	F C-63	IV-5	05. 09. 27	クルミ	0.62	剥片集中より採取
RM-10	土器No. 63	IV-6	05. 08. 10	クルミ	0.07	土器の中の土より採取

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



図VI-1 暦年代較正結果(1)

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム：OxCal v3.10

図VI-2 暦年代較正結果(2)

## VII 小 括

### 1 石器について

平成16年、17年の2か年に亘る調査で9600㎡を調査した。検出された遺構は石器集中1か所、集石(S)21か所、剥片集中(F C)71か所、焼土(F)64か所であった。平成16年度の調査では、遺構や遺物の多くが調査区の東側に向かうほど増える傾向にあり、今年度調査区が遺跡の主体である可能性が高いことを予想していた。結果は24ラインから43ラインまで途切れることなく遺構や遺物が分布しており、43ラインから北東側が希薄であった(図V-3-1)。これらの遺構はIV層を主体にV層まで包含され、遺構や遺物はすべて縄文時代前期前半期のものである。地形的に見ると今年度の調査区には標高約8mの丘状の高まりがあって砂丘の末端と考えられる。土層断面の観察では、IV層の上位では地形に沿った堆積がみられるが、特にV層では斜行ラミナもみられ、ラミナ1枚1枚が薄く風の影響を強く受け形成された様子がかがえる。このような堆積はG26区附近から北西側で顕著に見られた(図版16-3)。これに対し、Hラインより南東側の低地では微高地と比較してラミナの互層がやや厚い傾向にあり、水による影響が考えられる。またI23区周辺では乾燥してブロック化した脈状の粘土層が確認された。この粘土層は河道跡においても散発的に認められ、地震等の影響によって噴出した噴泥跡と判断した(図V-2-4、図版34-3)。地形や土層についてはこのような特色が見られた。次に、石器等を中心に特徴をいくつか以下に記す。

今年度調査した代表的な遺構に石器集中1がある。1m×0.65m程の範囲から、296点の石器がまとまって出土した。このうち定形石器は57点で、その他は剥片等238点が出土した。内訳は表V-4遺構出土遺物一覧を参照されたい。このなかで最も特徴的なものは石鏃である。大型のものが目立ち大きさの平均は長さ4.4cm、幅3.1cm、厚さ0.65cm、重さ7.1gである。最も大きいものは長さ6.4cmで重さは12gを計る。いずれも形態は三角形状で基部に浅い抉りのあるものが多い。昨年調査では長さ5cm未満のものを石鏃として扱っていたが、長さが5cmを超えるものが6点含まれていた。これらは前年の定義づけから外れるものであるが、形態などからそのまま石鏃として記述した。また、拳大の赤鉄鏃も3点出土した(口絵6、表V-8)。表面は粗く、外観を見る限り顕著な加工痕はない。これらは同一個体のものが3つに割れた可能性もあったが接合には至らなかった。この赤鉄鏃の利用方法については不明であるが、顔料等の材料として持ち込まれた可能性が考えられる。

また、これに関連して焼土の砂については土壌サンプルを採取しフローテーションを用いた選別作業を行なった。その結果、26か所の焼土の中から褐鉄鏃様の微細な碎片も採取することができた(表V-12)。総重量は45.02gである。この褐鉄鏃様のものが焼土の中から検出されたことは意図的に生成されたものが残渣の中に残っていた可能性も考えられる。顔料の生成については後期旧石器時代以降の幾つかの遺跡で検討がされており、知内町湯の里4遺跡(北埋調報18)、千歳市柏台1遺跡(北埋調報138)、帯広市川西C遺跡(北沢1997)等が挙げられる。しかし、今回出土した土器や石器等にこれらが付着したようなものは見つかっていない。なお、表V-12では褐鉄鏃として記載した。また、フローテーション作業に伴い、土壌中から多くの骨片資料も採取する事ができた。この採取した動物遺存体の内、19件について種の同定を行った。骨片はすべて焼骨で残存状態は良くない。従って、種や部位の同定ができたものが少ない。分析の結果、エゾシカ等の大型陸獣や海獣(鰭脚類)、魚類(アイナメ属)、鳥類等の存在が確認された(VI章-1)。この結果を見ると大型陸獣が19件中11点を占め、次いで海獣(鰭脚類)が7点、アイナメ属2点であった。今回同定を行うことができなかった

た他の資料を、この同定結果を元に観察を試みた。その結果、大型陸獣と海獣（鱈脚類）の比率が多い事が推察される。このことは石器の組成とも関連する。石器群の特徴の一つとして、スクレイパーの存在が挙げられる。スクレイパーの多くは素材剥片の一部に急角度の刃部を持つものが多く認められ、これらが海獣や大型陸獣等に使用されたことが推定できる。

このほか、特徴的な遺構にS-1、S-7がある。いずれも石斧の集中でS-1は16年度の調査で出土した（北埋調報220）。S-1は調査区南端のトレンチ調査中に石斧5点とスクレイパー1点が積み重ねられた状態であった。標高は約6mで、ラミナの発達するV層中から出土した。この遺構の周囲からは遺物や遺構は見つかっていない。S-7は標高約6.3mのⅢ層下位から石斧だけが14点まとまって出土したものである。S-1が横位置に重ねられていたのに対し、S-7はほぼ縦位置に埋設されている状況であった。またS-7の14点中、13点に被熱による焼け弾けのような表面剥離が認められたことも特徴である。

最も多く出土した剥片は両年合わせて178,811点である。内訳は頁岩の剥片148,260点、黒曜石剥片29,308点、その他玄武岩等が1243点である。石材別にみると黒曜石は肉眼観察の結果、ほぼ100%赤井川産と推測することができる。当遺跡のある共和町の東北部には赤井川村があって、北海道の黒曜石四大産地の一つとして古くから知られている。赤井川産の黒曜石には、径0.5~1.5mmの流紋岩の球顆や燐灰石の結晶や気孔が多く観察される。これらは入り交じってほぼ平行に配列する流理構造を有する点に特徴がある。今回の調査で出土した黒曜石にはほぼこれらの特徴が認められる。

黒曜石以外の石器の産地については北埋調報220、第2章-1周辺の地質、図Ⅱ-6・7に「共和町の周辺の地質」を示し、地質の概略を掲載したので参照されたい。

定形石器の中で最も多く出土したものはたたき石で2か年の合計は1364点出土である。たたき石は扁平な円礫または垂円礫を素材にして、周縁部に敲打痕をもつものが多い。これらは使用痕が軽微なものも多く、平坦面にまで敲打痕が認められるものは少ない。希に、素材の両端が潰れる程使用されているものもある。今年度は包含層から出土したたたき石1009点のうち、976点について分類し、集計等も行ない形態別グラフを作成した（表V-1）。その結果、Ⅰ類の扁平な円礫または垂円礫を素材にしているものが810点（83%）を占め、Ⅱ類の棒状礫を素材にするものが95点（10%）であった。形態別グラフを見ると、長さ5~15cm、重さ500g前後に最も集中する。片手で持てる大きさである。

また、包含層から出土したすり石についても分類を行なった。すり石の2か年の合計は193点である。すり石は断面の形態が三角形を呈するものが多い。素材の一端に直線的なすり面を有するものが多い。今年度、包含層から出土したすり石の合計は182点でこのうち、134点について分類し、集計等を行なった（表V-2）。その結果、Ⅰ類の断面形が三角形を呈するものが121点（90%）と大半を占め、Ⅱ類のその他のものが13点であった。その他としたものはほぼ、円礫や垂角礫である。

形態別グラフを見ると、特にⅠ類は長さの規格が比較的揃っているものが多い。横並びの傾向にある。なお、たたき石、すり石ともに器体の約1/3以上を欠損しているものは計測の対象としなかった。また、すり石の一種として考えられる北海道式石冠が昨年調査でわずかに1点しか出土していない。このことはリヤムナイ3遺跡のこの時期にはまだ北海道式石冠が利用されていなかったことを示している。遺跡の背後には標高約30mの段丘があって、そこにはかつて“石冠ロード”と呼ばれた道がある。現在でも道路の傍らに石冠の個体や破片など多くの遺物を散見することが出来る。

（笠原）

## 2 リヤムナイ 3 遺跡の春日町式土器・円筒土器下層式直前の土器について

リヤムナイ 3 遺跡の調査では層位的な上下関係を保って、春日町式、大津 2・3 群、静内中野式に相当するもの、円筒土器下層式直前に位置づけられる高屋敷川 1 遺跡Ⅱ群 B 2 類に相当する土器が出土した。遺物包含層はⅢ、Ⅳ、Ⅴ層であり、①Ⅲ層下位～Ⅳ層上面から高屋敷川 1 遺跡Ⅱ群 B 2 類に相当する平底土器、②Ⅳ層上～中位では大津 2 群、静内中野式に相当もしくは類似のもの、春日町の中でも新しく位置づけられると考えられる、複節縄文と押引文が施されている尖底土器が出土し、③Ⅳ層中～下位では、春日町 A～C 類に相当する尖底土器が出土した。ここではその特徴と変遷についてまとめる。

### 春日町式土器

春日町式土器は道南部に多く出土している、押引文が施されている尖底土器であり、道央部、噴火湾沿いにも認められるものである。昭和 25 年、児玉・大場により函館市春日町遺跡から出土した土器を文様から二群 A、B、C 類に分けられている。その後昭和 35 年、佐藤達夫は春日町の分類をほぼ踏襲して青森県の早稲田貝塚から出土した土器を早稲田 6 群 A、B、C 類としている。この区分とその前後関係については、早稲田 6 類 C が A、B に先行するのではないかと類推する成田滋彦氏の考え（成田 1980）や武藤康弘氏の早稲田 6 類 A、B のなかで「口縁部に刺突文による文様帯を持たないもの」との論考（武藤 1988）がある。リヤムナイ 3 遺跡では春日町 A～C 類に相当するものが出土しているが、これらは平均して層厚 60 cm ある包含層の中から出土しており、土器の出土状況や同じ時期に属する周辺の遺構のあり方なども変化の無いことから、今回の調査では時期差を見出すことはできなかった。

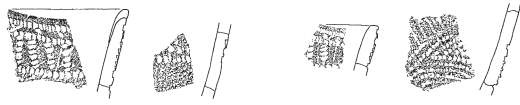
### 春日町式と大木 2 a 式・大津 2 群・静内中野式相当のもの

Ⅳ層上位からは地文が複節縄文のもの、地文に複節縄文が施されている春日町式、大木 2 a 式、大津 2 群、静内中野式に相当するものが出土した（図 V-4-42）。押引文をもつ土器で地文に複節縄文が施されているものは早稲田貝塚の C 類としているものの中に少数ある。表 VII-1 にみるように道南部の春日町式土器が出土する遺跡において複節縄文をもつものは少ない。リヤムナイ 3 遺跡では複節縄文に押引文や沈線文が施されているものが出土している。また、ここからは大木 2 a 式土器や綾絡文を持つ土器が出土している。綾絡文と押引文が施されている土器は青森県八戸市の和野前山遺跡から出土した 8 群土器がある。春日町式の中で、新しい段階のものは綾絡文のほか、複節縄文が多くなっていくと考えられる。森町森川 4 遺跡のⅡ群 a 類がこれに相当する。これらに伴い、単節縄文地で内面に縄文が施されているものは若生貝塚 c 類、大津 2 群、静内中野式に相当すると考える。複節縄文地の尖底土器底部に黒曜石の剥片がみられる土器は、そのあり方から偶発的なことと意図的なことの両方が考えられるが、意図的とすれば、札幌市発寒小学校遺跡の静内中野式のグループとしているものや伊達町若生貝塚 6 層出土のものと同じ時期のものであり、位置付けとしては妥当なものとする。

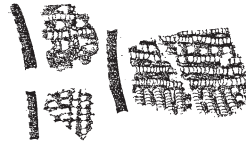
### 円筒土器下層式直前に相当するもの

Ⅲ層下位～Ⅳ層上面から出土した土器で、大木 2 b 並行の大津 3 群、高屋敷川 1 遺跡Ⅱ群 B 2 類、森町森川 3、4 遺跡のⅡ群 B-1 類に相当するものである。図 V-4-42 にみるように、平成 16 年度調査では波状口縁や平縁で、尖底や尖底に近い平底、上げ底気味のもので地文に複節と結束羽状縄文が施されているものや複節縄文が多く、綾絡文が施されている土器も出土している。高屋敷川 1 遺跡のⅡ群 B 2 類土器の地文に用いられている文様は茅野嘉雄氏による縄文原体の分析により、RL、LRL の単節縄文と複節縄文が多く、結束第 1 種羽状縄文も用いられている（茅野 2002）ことが明らかにされている。上磯町の茂別遺跡では春日町式土器のほか、綾絡文が施されている尖底土器や平底土器が出土している。また、内面に縄文が施されている土器や複節縄文のもの、内面に条痕があるも

春日町二群A類相当のもの



リヤムナイ3



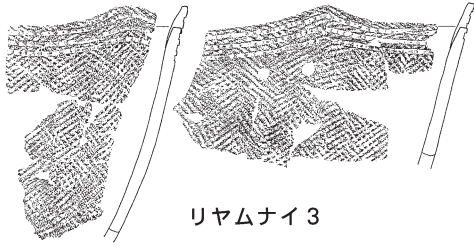
春日町



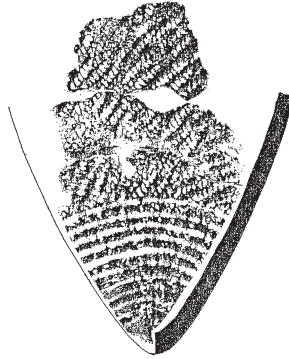
日ノ浜砂丘



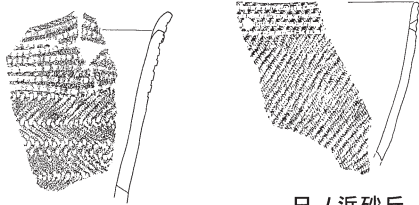
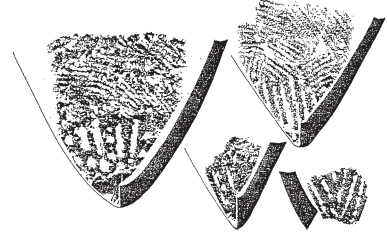
春日町二群B類相当のもの



リヤムナイ3

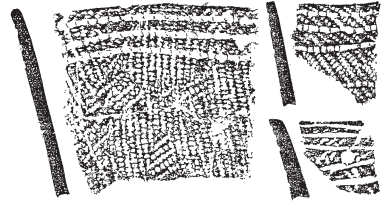


春日町



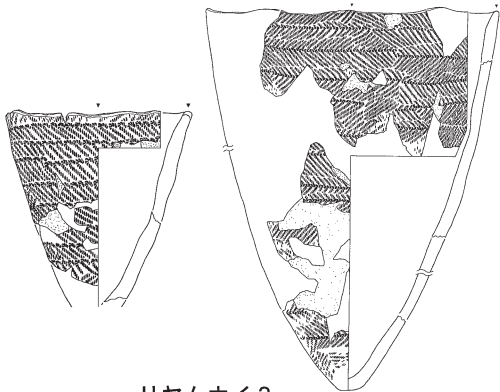
日ノ浜砂丘

リヤムナイ3

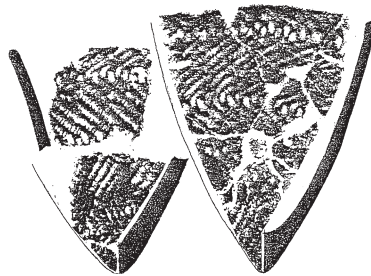


春日町

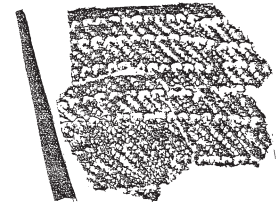
春日町二群C類相当のもの



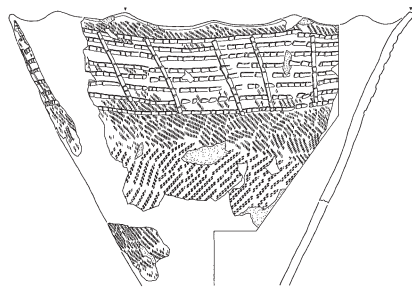
リヤムナイ3



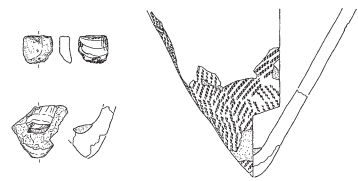
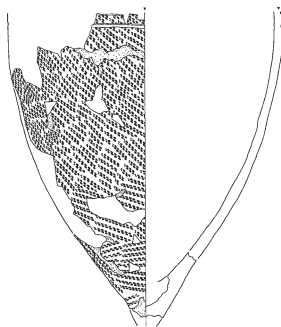
春日町



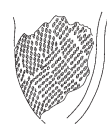
複節縄文の尖底土器



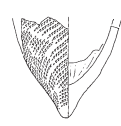
リヤムナイ3



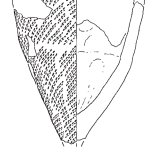
リヤムナイ3



高屋敷川1

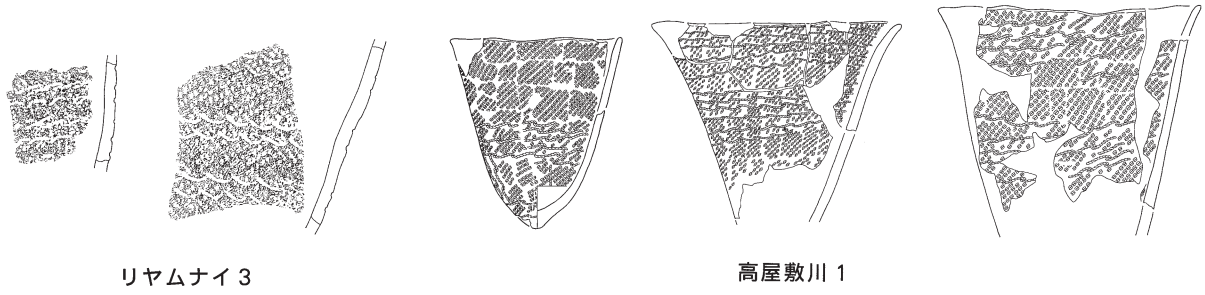


森川4



図VII-2-1 リヤムナイ3遺跡出土の土器と春日町式土器

綾絡文が施されているもの



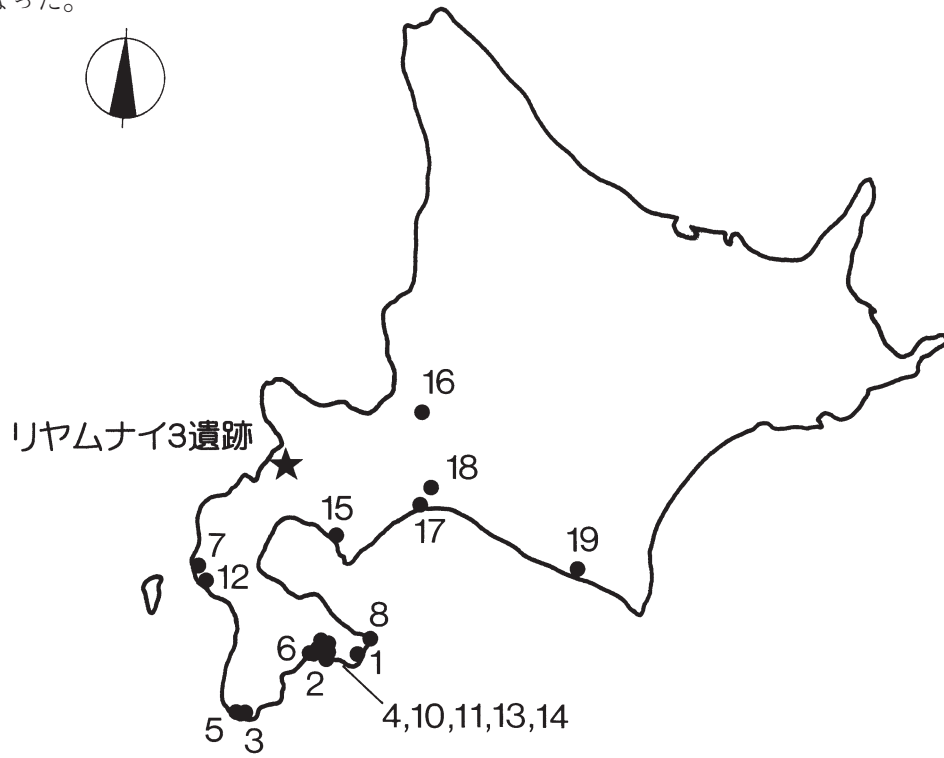
円筒土器下層式直前のもの・平底



図Ⅶ-2-2 リヤムナイ 3 遺跡出土の土器と円筒土器下層式直前のもの

の、大木2b式土器が出土しており、大木2a～2b式に相当するものが出土している。このことから、リヤムナイ3遺跡では複節縄文は春日町の新しい段階から多用され、大木2b式並行、円筒土器下層式直前の平底土器に過渡的に及んでいる傾向がある。このことは、今後の資料増加を待って検討していきたい。

この遺跡の調査で、後志地方では初めて縄文時代前期前半の春日町式～円筒土器下層式直前のものが出土した。また、遺跡の周辺には円筒土器下層式の集落である東山遺跡がある。このことから共和町は円筒土器文化圏にあり、縄文時代前期前半にも北海道南部と同様の特色を持つ地域であることが明らかとなった。(袖岡)



図VII-2-3 春日町式土器 出土遺跡

表VII-1 春日町式土器 出土遺跡

番号	遺跡名	押引文	沈線	ループ文	結束羽状縄文	羽状縄文	複節	綾絡文	平底	大木系	遺構	備考
1	日の浜砂丘1	○	○	○		○尖底		○	○ループ	○2a	竪穴	
2	中野A	○		○					○押引文		土坑	
3	白坂	○	○	○複節		○	②	○	○押引文	○2a		
4	豊原1	○		○		○縦走縄文						竪穴
5	高野	○					①					
6	茂別	○	○			○	①②	○尖底	○複節縄文	○2b	土坑	(綾絡のある尖底)
7	大谷地	○		○?								
8	蛭子川2	○刺突	○	○	○	○						
9	釜谷4遺跡	○			○				○押引文			
10	梁川町	○				○		○				
11	春日町	○	○	○	○							
12	豊岡6	○			○							
13	豊原2	○	○	○		○						
14	西桔梗1	○										
15	若生貝塚	○										
16	吉井の沢1		○	○	○	○						組紐圧痕文
17	美沢11	○		○								
18	美々4	○										組紐圧痕文
19	明和3											単節縄文破片のみ

①押引文を持たない ②押引文を持つ



# 写 真 図 版

上リヤムナイ遺跡 図版 1～10

リヤムナイ 3 遺跡 図版 11～82



1 上リヤムナイ遺跡調査状況（南西から）



2 FC-1 検出状況（東から）

図版 2



1 FC-2 検出状況 (南から)



2 土層断面 (南東から)



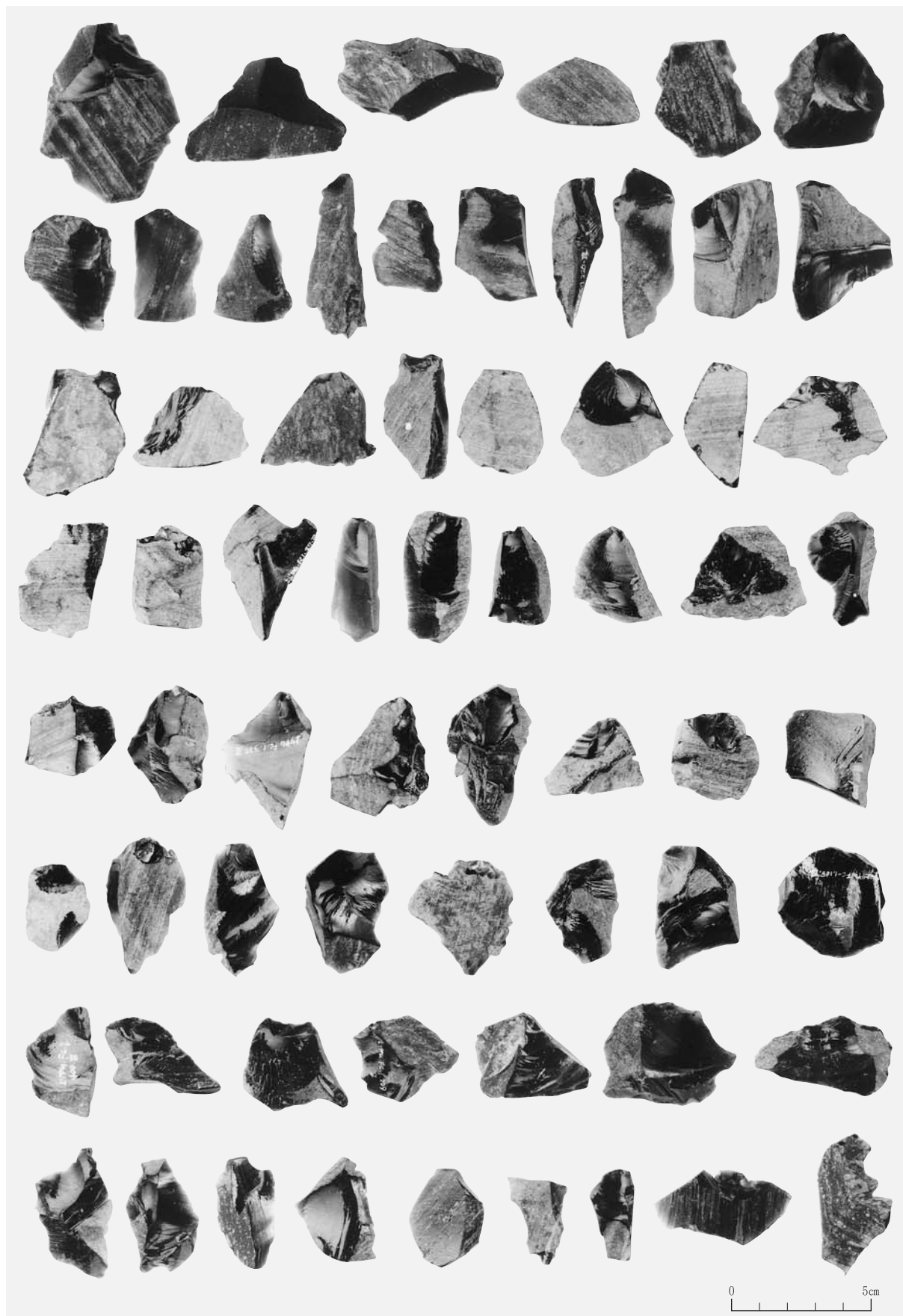
3 土層断面 (東から)



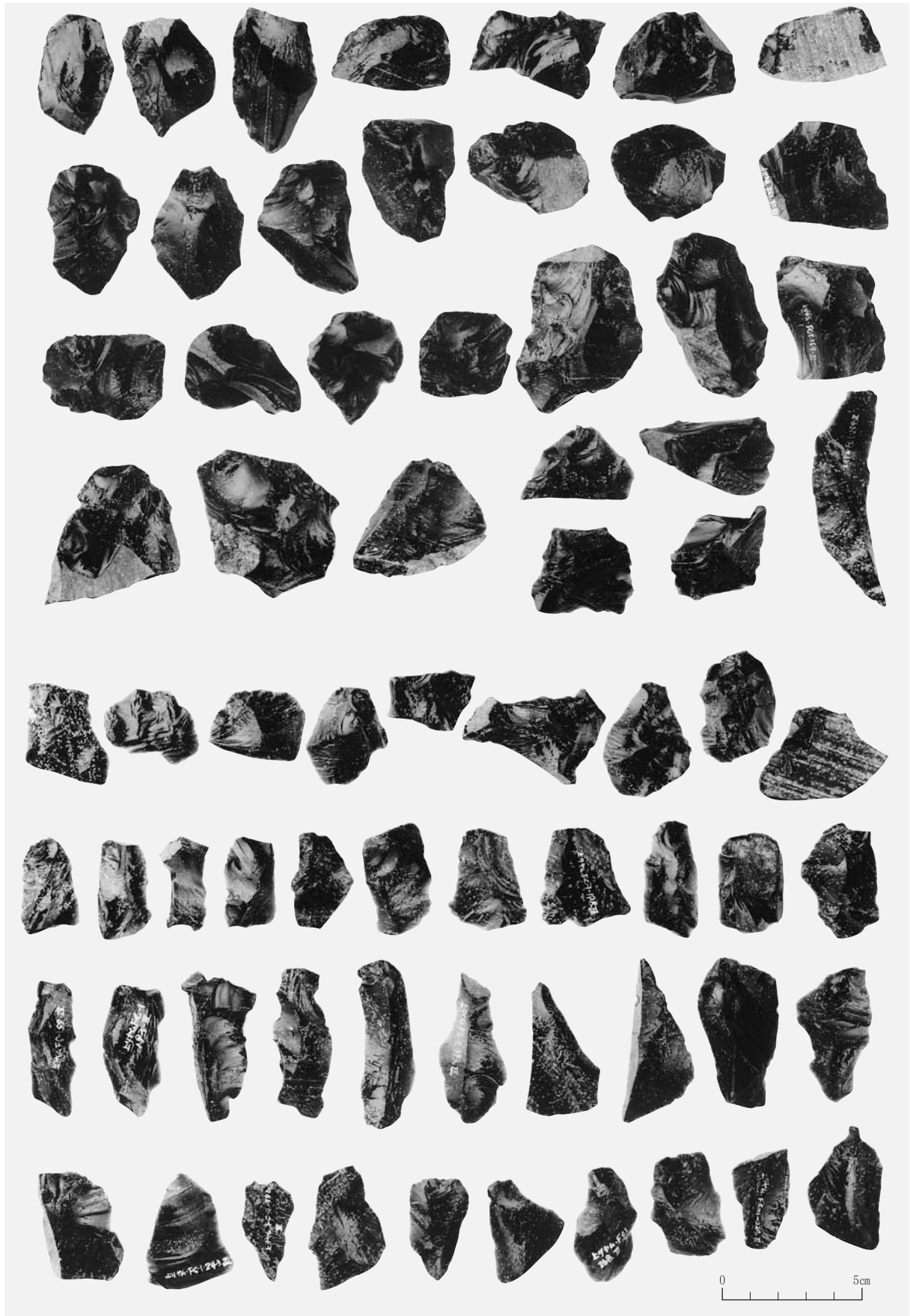
1 FC-1(1) ①球顆がわずかに混じるもの 石器等 剥片(1)



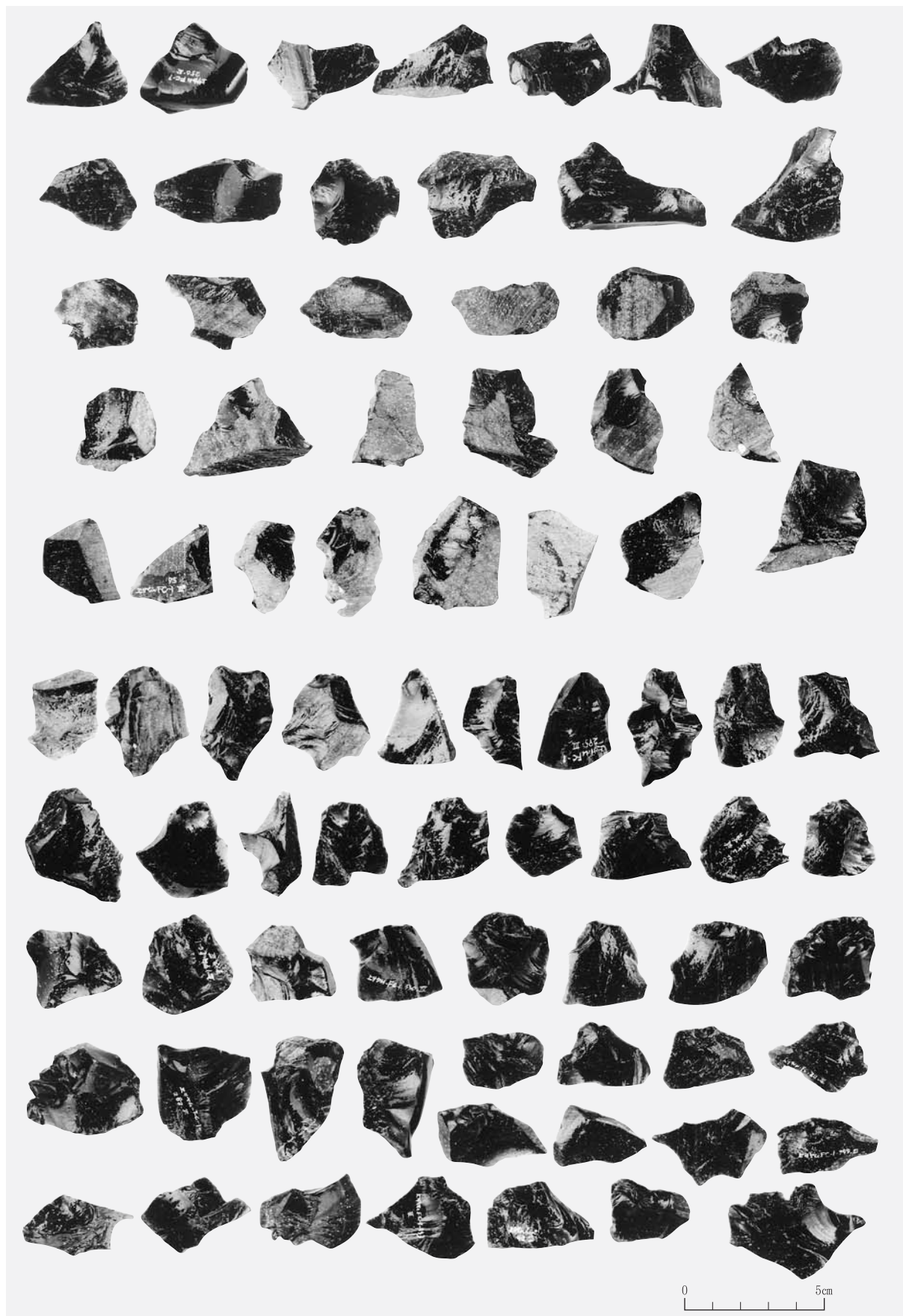
1 FC-1(2) ①球顆がわずかに混じるもの 剥片(2)



1 FC-1(3) ①球顆がわずかに混じるもの 剥片(3)

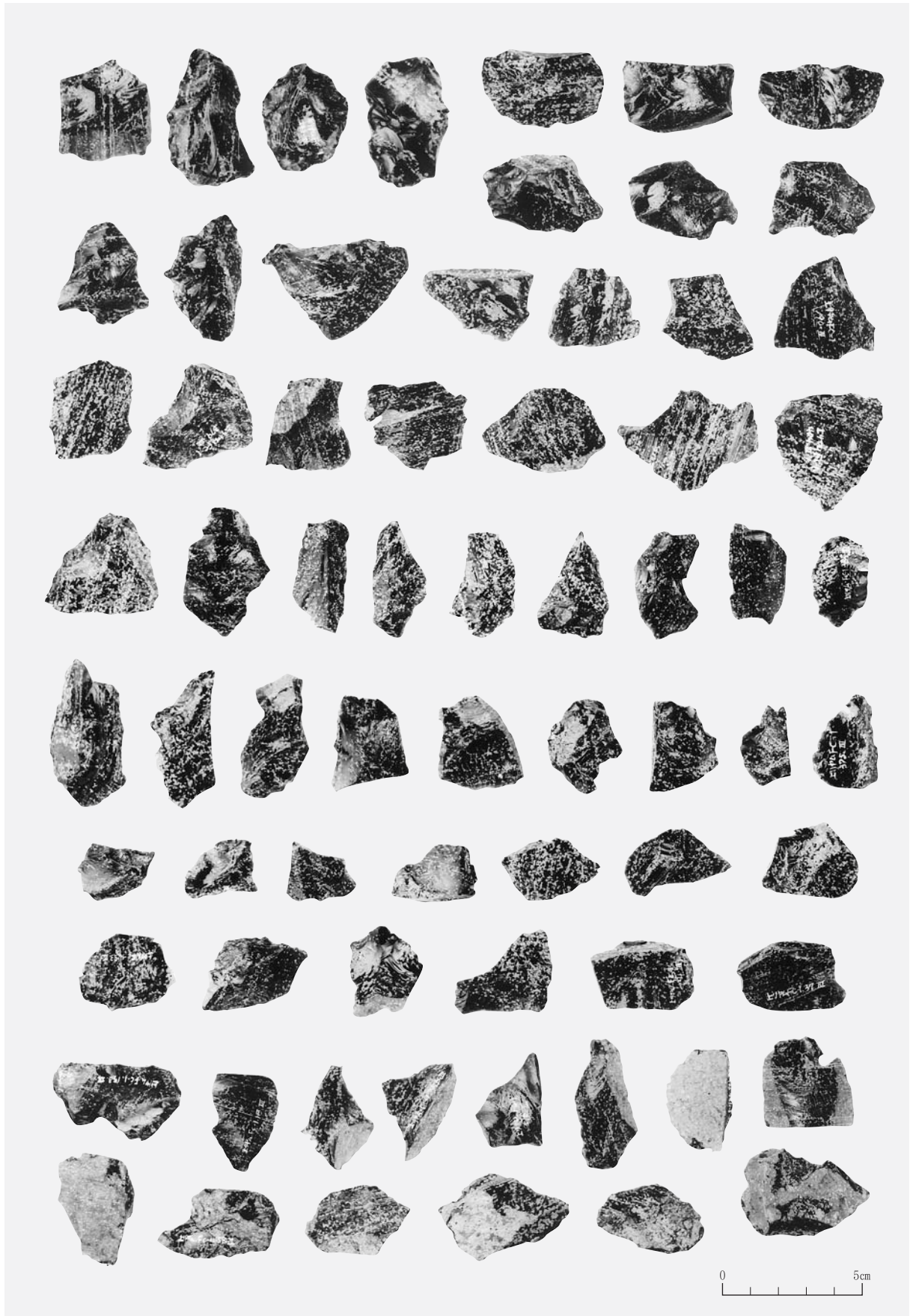


1 FC-1(4) ②球顆が少ないもの 石器等 剥片(1)

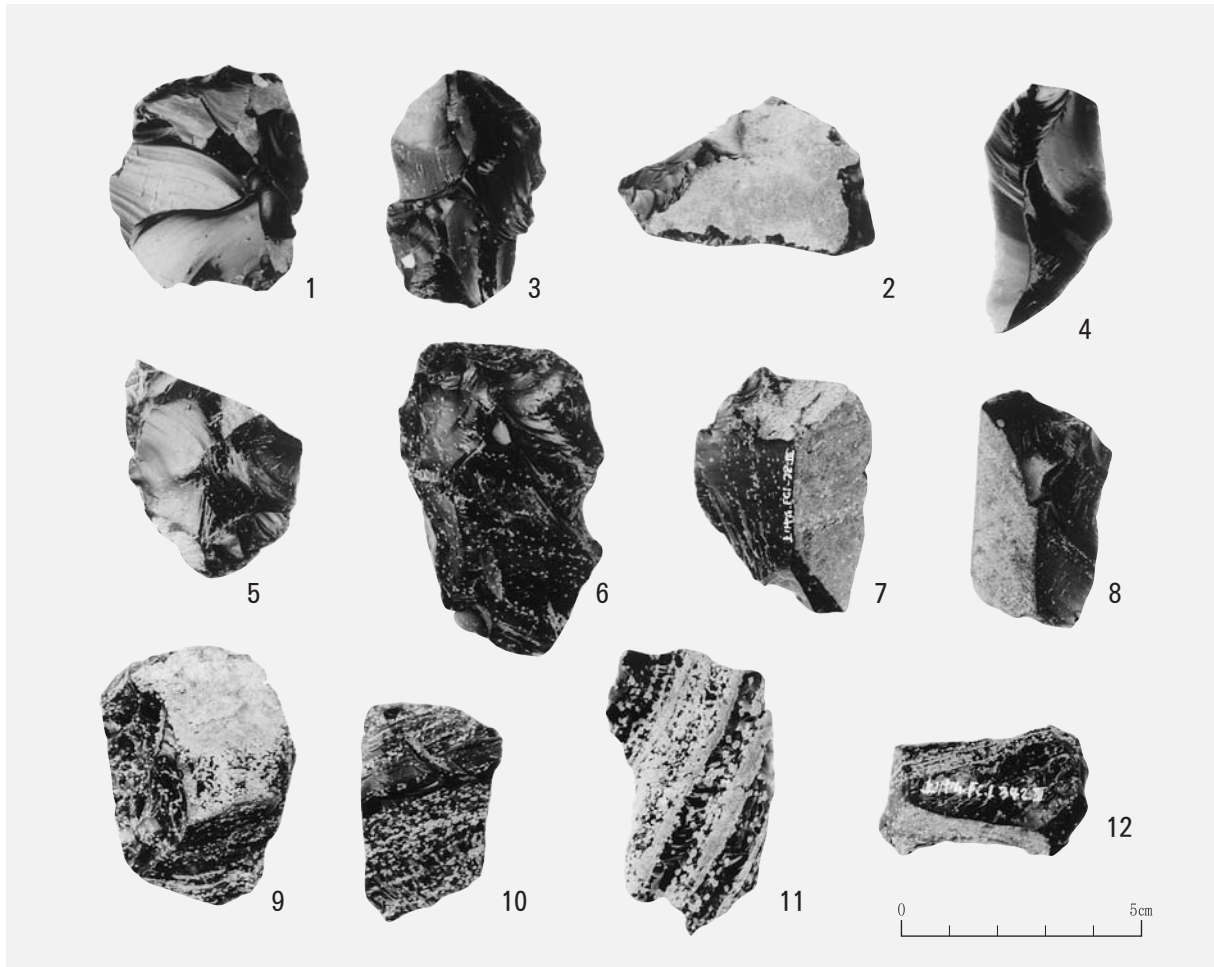


1 FC-1(5) ②球顆が少ないもの 剥片(2)

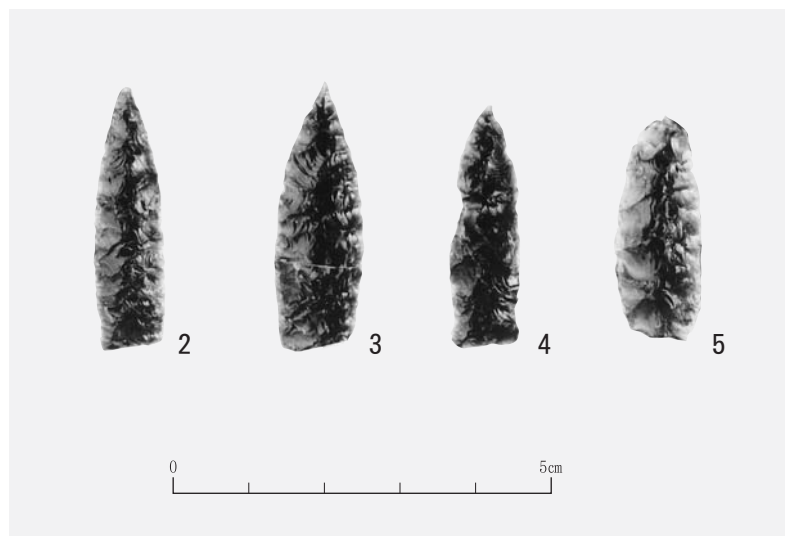
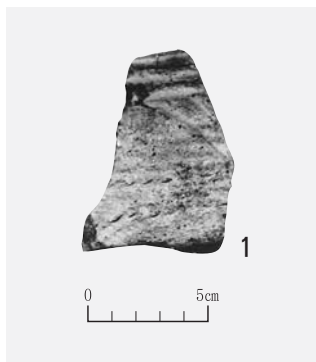




1 FC-1(6) ③球顆が多いもの 石器等 剥片

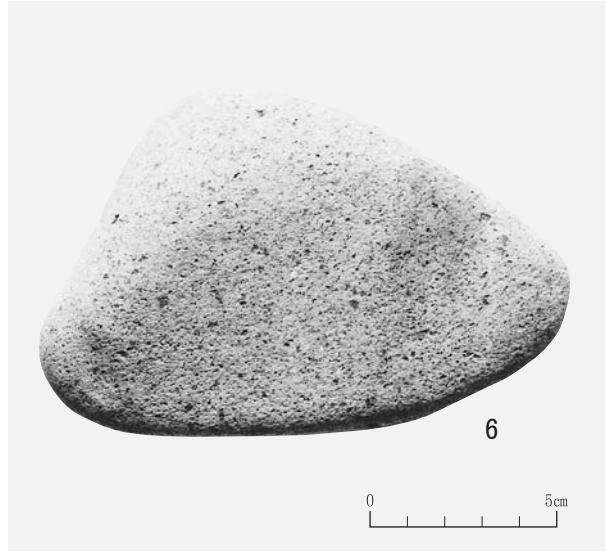


1 FC-1(7) 石器等 剥片



2 包含層出土の遺物(1)

図版10



1 包含層出土の遺物(2)と出土状況



1 リヤムナイ3遺跡全景（北から）



2 リヤムナイ3遺跡全景（西から）



1 リヤムナイ 3 遺跡調査風景（西から）



2 リヤムナイ 3 遺跡遺物出土状況（北から）



1 リヤムナイ 3 遺跡調査風景（東から）



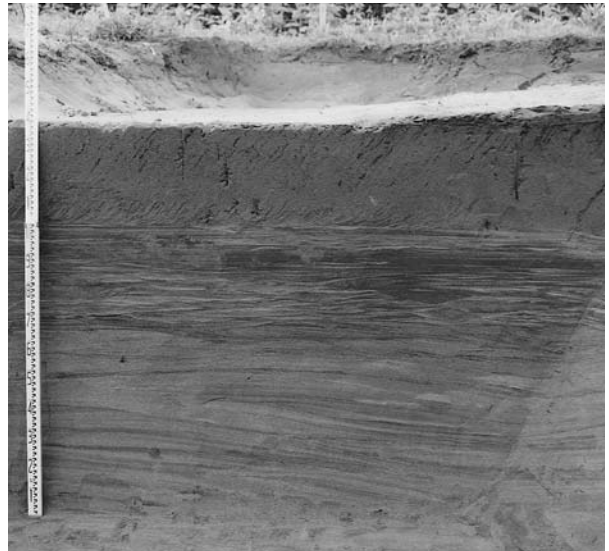
2 リヤムナイ 3 遺跡調査状況（西から）



1 N45区1号トレンチ土層断面（南西から）



2 M45・N46区1号トレンチ完掘（南から）



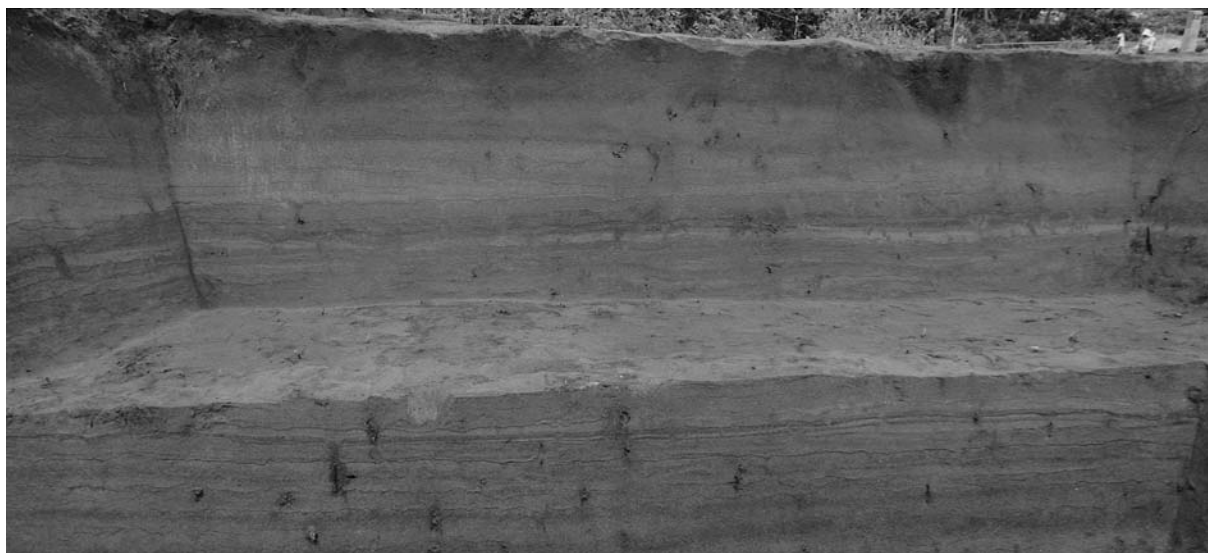
3 R45区1号トレンチ土層断面（北西から）



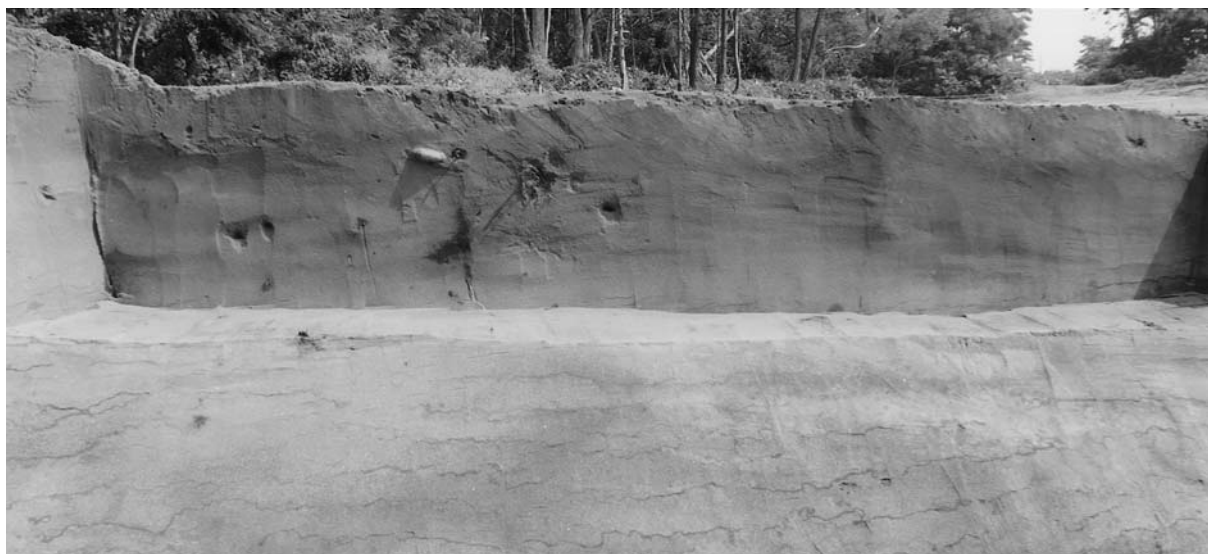
4 N45区1号トレンチ土層断面（北東から）



1 H23ライン土層断面（南西から）



2 D37ライン土層断面（南から）

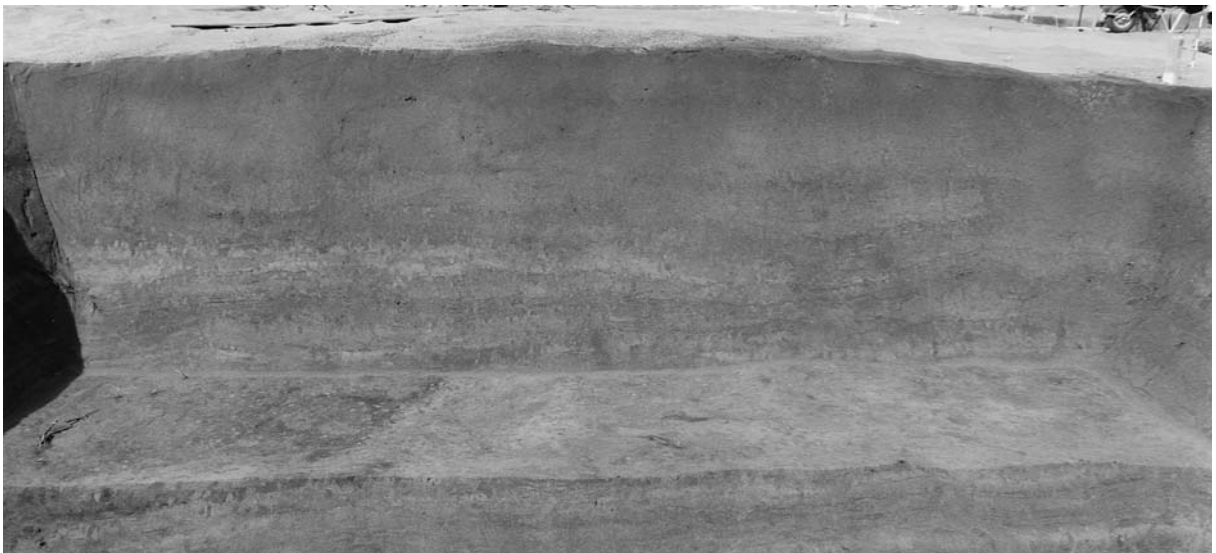


3 F37ライン土層断面（南西から）





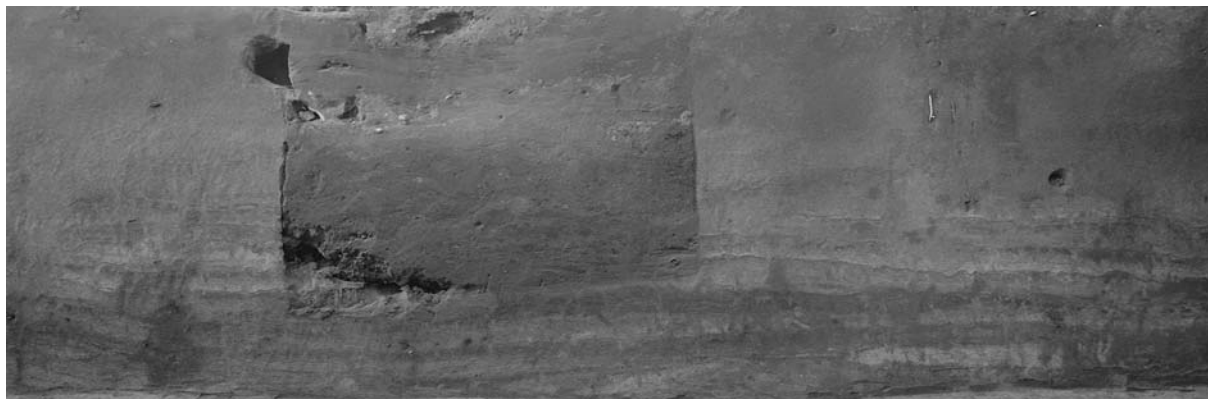
1 G37ライン土層断面（南西から）



2 H37ライン土層断面（南から）



3 J37ライン土層断面（南西から）



1 G24ライン土層断面（北東から）



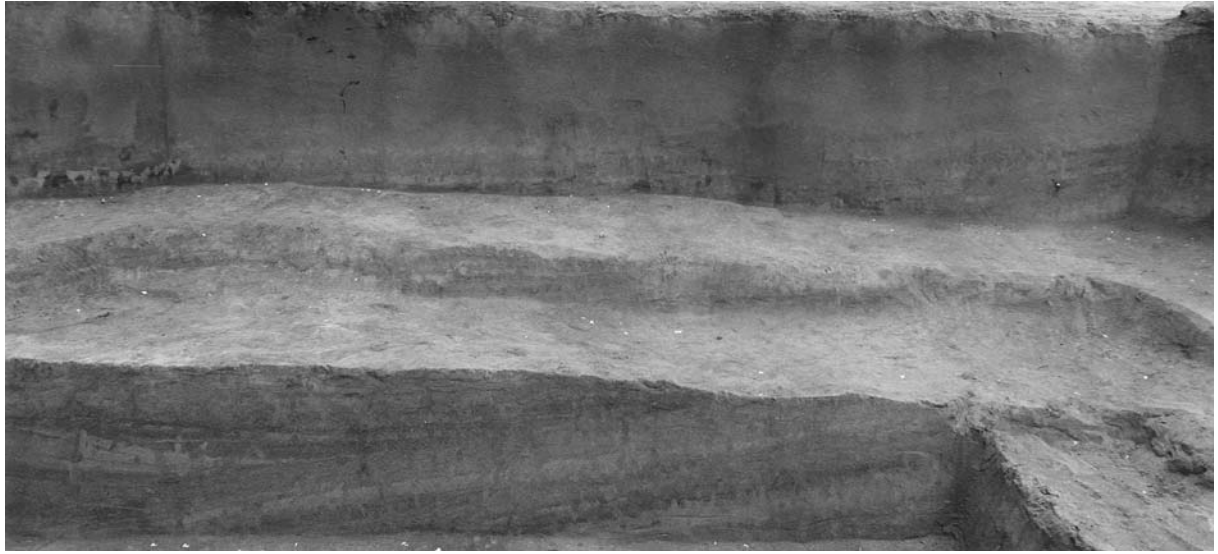
2 F24ライン土層断面（北東から）



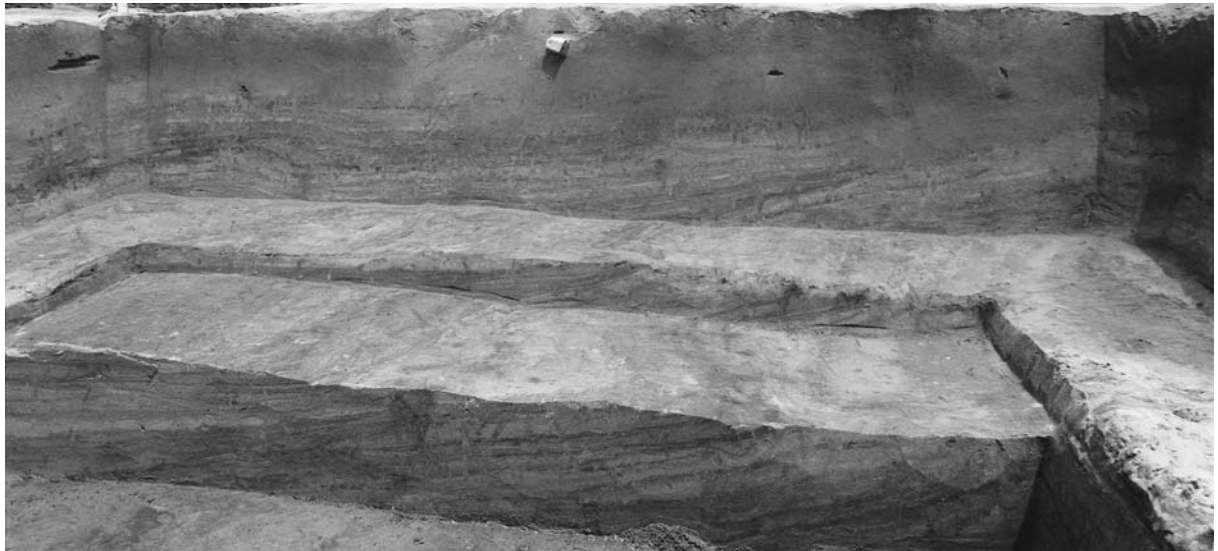
3 E24ライン土層断面（北東から）



4 D24ライン土層断面（北東から）



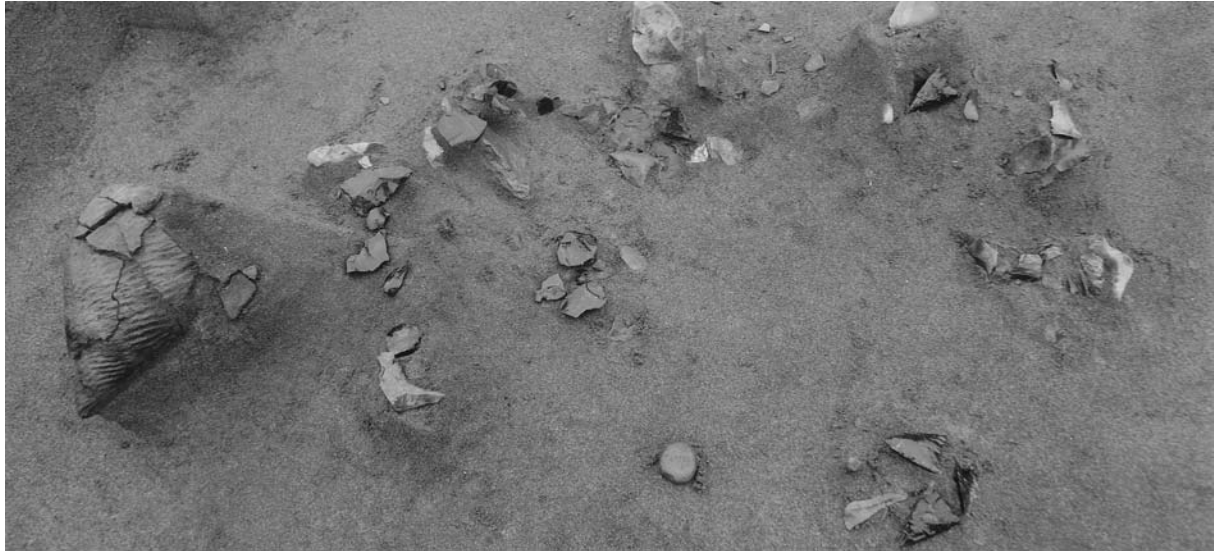
1 H44ライン土層断面（南から）



2 J44ライン土層断面（南から）



3 G26より北東側調査状況（南から）



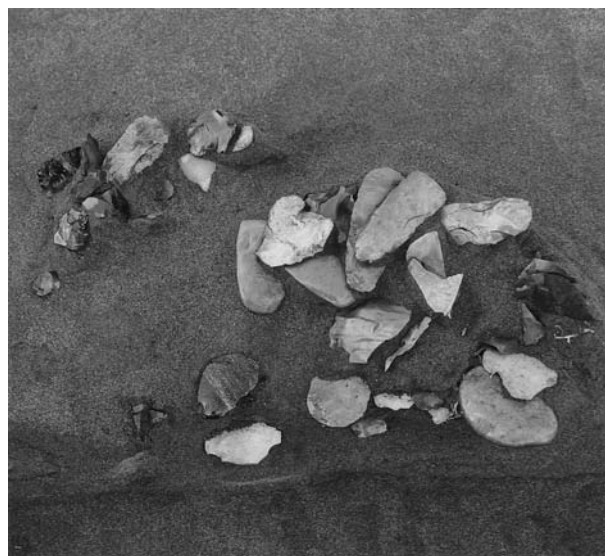
1 石器集中1出土状況（東から）



2 石器集中1土層断面（東から）



3 石器集中1（南から）



4 石器集中1（東から）



1 S-7 検出 (東から)



2 S-7 土層断面 (東から)



3 S-8 検出 (北から)



4 S-9 検出 (東から)



5 S-10 検出 (西から)



6 S-11 検出 (南西から)



1 S-12検出 (南から)



2 S-13検出 (南西から)



3 S-14検出 (西から)



4 S-15検出 (西から)



5 S-16検出 (西から)



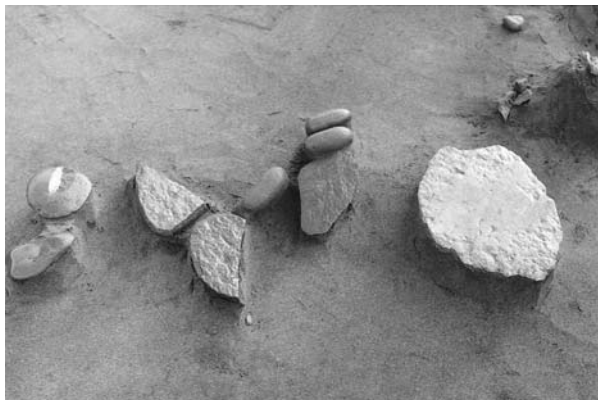
6 S-17検出 (西から)



1 S-18検出 (西から)



2 S-19検出 (西から)



3 S-20検出 (北から)



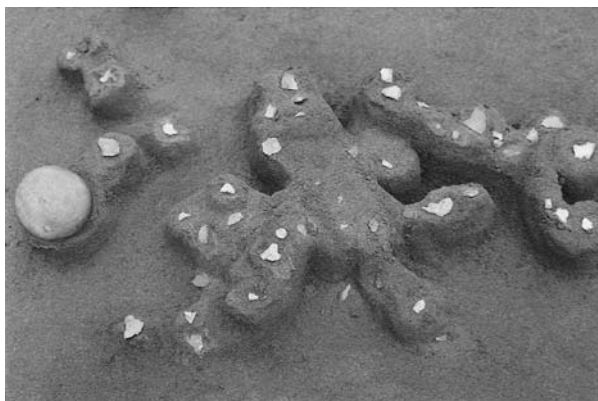
4 S-21検出 (北東から)



5 FC-9検出 (西から)



6 FC-10検出 (南から)



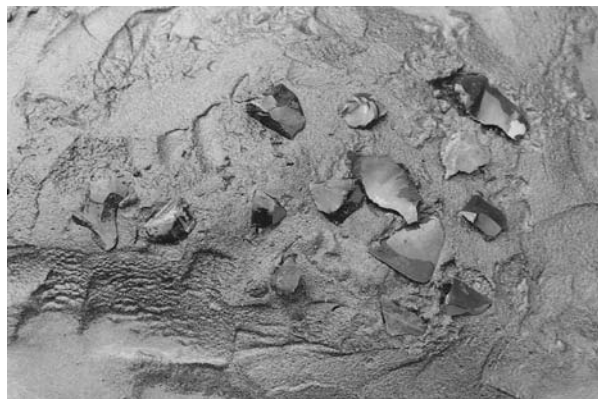
7 FC-11検出 (南から)



8 FC-12検出 (西から)



1 FC-13検出 (西から)



2 FC-14検出 (東から)



3 FC-15検出 (南から)



4 FC-16検出 (東から)



5 FC-17検出 (東から)



6 FC-18検出 (北西から)



7 FC-22検出 (南から)



8 FC-23検出 (東から)





1 FC-24検出 (南から)



2 FC-25検出 (南から)



3 FC-29検出 (東から)



4 FC-30検出 (南から)



5 FC-31検出 (北から)



6 FC-34検出 (北から)



7 FC-35検出 (北から)



8 FC-37検出 (西から)



1 FC-38検出 (東から)



2 FC-39検出 (西から)



3 FC-40検出 (東から)



4 FC-41検出 (北から)



5 FC-43検出 (東から)



6 FC-44検出 (西から)



7 FC-46検出 (南から)



8 FC-47検出 (南東から)



1 FC-49検出 (北西から)



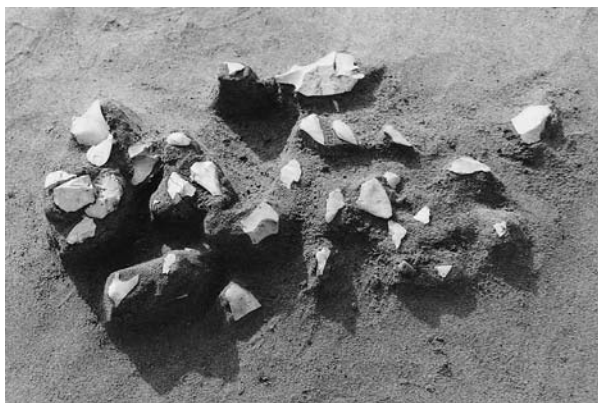
2 FC-50検出 (北西から)



3 FC-51検出 (東から)



4 FC-52検出 (東から)



5 FC-53検出 (東から)



6 FC-54検出 (西から)



7 FC-55検出 (東から)



8 FC-56検出 (南東から)



1 FC-57検出 (西から)



2 FC-58検出 (東から)



3 FC-60検出 (東から)



4 FC-61検出 (南西から)



5 FC-62検出 (北から)



6 FC-63検出 (北東から)



7 FC-64検出 (北から)



8 FC-65検出 (南東から)



1 FC-66検出 (南西から)



2 FC-67検出 (北東から)



3 FC-68検出 (東から)



4 FC-69検出 (北から)



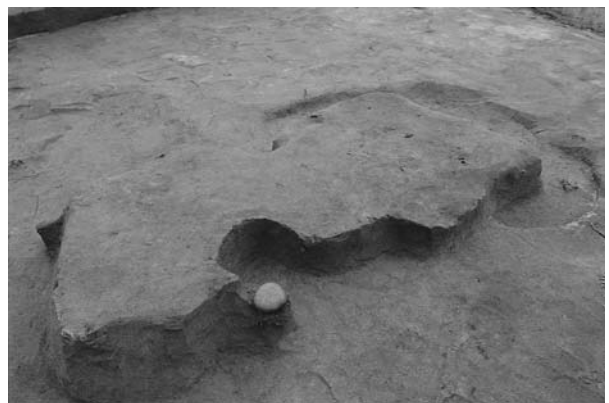
5 FC-70検出 (東から)



6 FC-71検出 (東から)



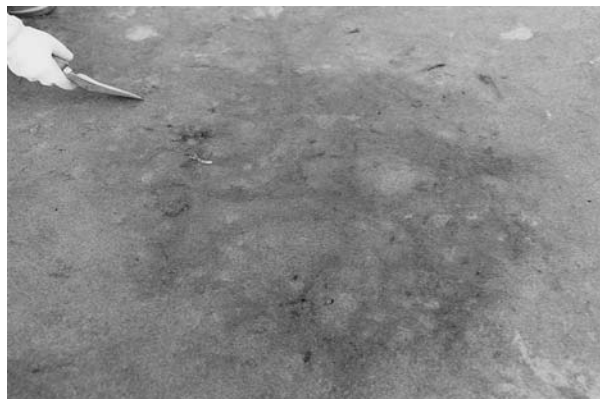
7 F-6検出 (西から)



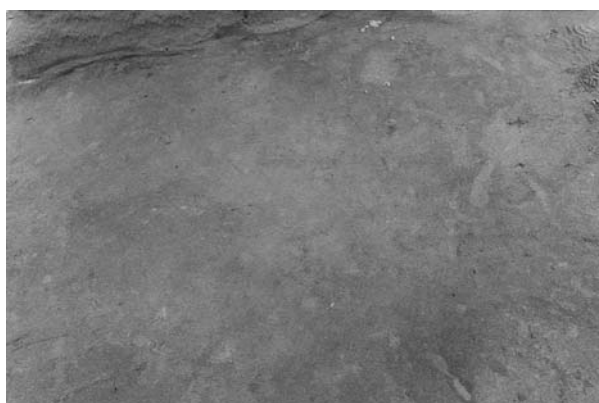
8 F-8検出 (西から)



1 F-9 検出 (南東から)



2 F-23 検出 (南から)



3 F-24 検出 (北東から)



4 F-37 検出 (西から)



5 F-46 検出 (西から)



6 F-49 検出 (北から)



7 F-61 検出 (西から)



8 F-64 検出 (東から)



1 F-63検出 (北西から)



2 F-63土層断面 (北西から)



3 図V-1-1-1 (西から)



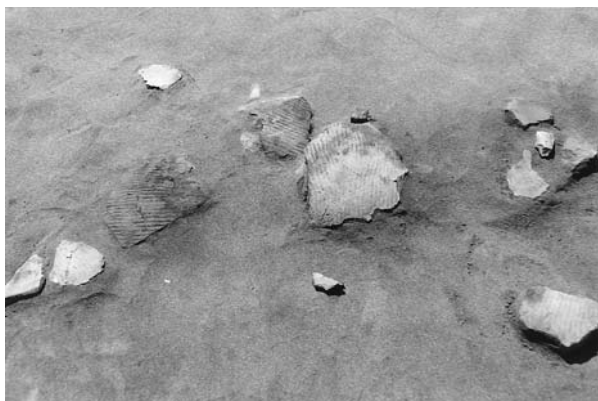
4 図V-4-1-2 (西から)



5 図V-4-1-3 (南東から)



6 図V-4-2-4、図V-4-21-92 (東から)



7 図V-4-6-11 (北から)



8 図V-4-3-6 (北から)



1 図V-4-4-7 (北東から)



2 図V-4-5-8 (東から)



3 図V-4-5-10 (北から)



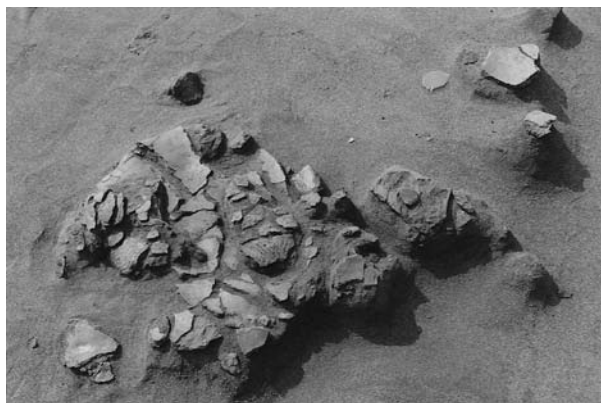
4 図V-4-6-12 (西から)



5 図V-4-6-13 (南東から)



6 図V-4-7-14 (西から)



7 図V-4-7-15 (東から)



8 図V-4-7-16 (南から)





1 図V-4-7-18 (西から)



2 図V-4-8-19 (南西から)



3 図V-4-8-20 (南から)



4 図V-4-10-23 (北から)



5 図V-4-11-24 (南から)



6 図V-4-11-25 (東から)



7 図V-4-12-26 (南東から)



1 図V-4-14-43 (東から)



2 図V-4-20-88 (東から)



3 図V-4-9-22 (北から)



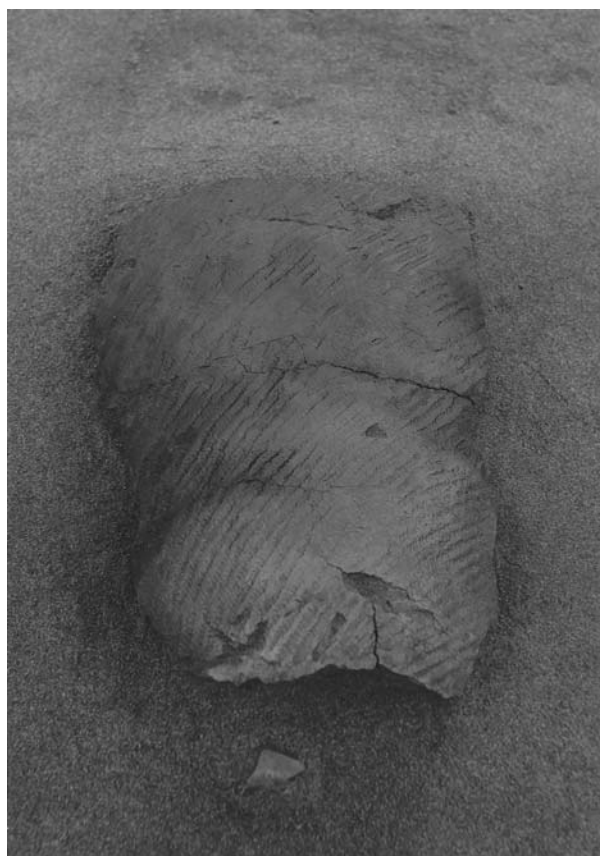
4 図V-4-16-69 (南から)



5 図V-4-19-86 (東から)



6 図V-4-21-100 (南から)



7 図V-4-17-71 (南東から)



1 図V-4-22-109 (西から)



2 図V-4-24-124 (北から)



3 噴泥跡検出 (南西から)



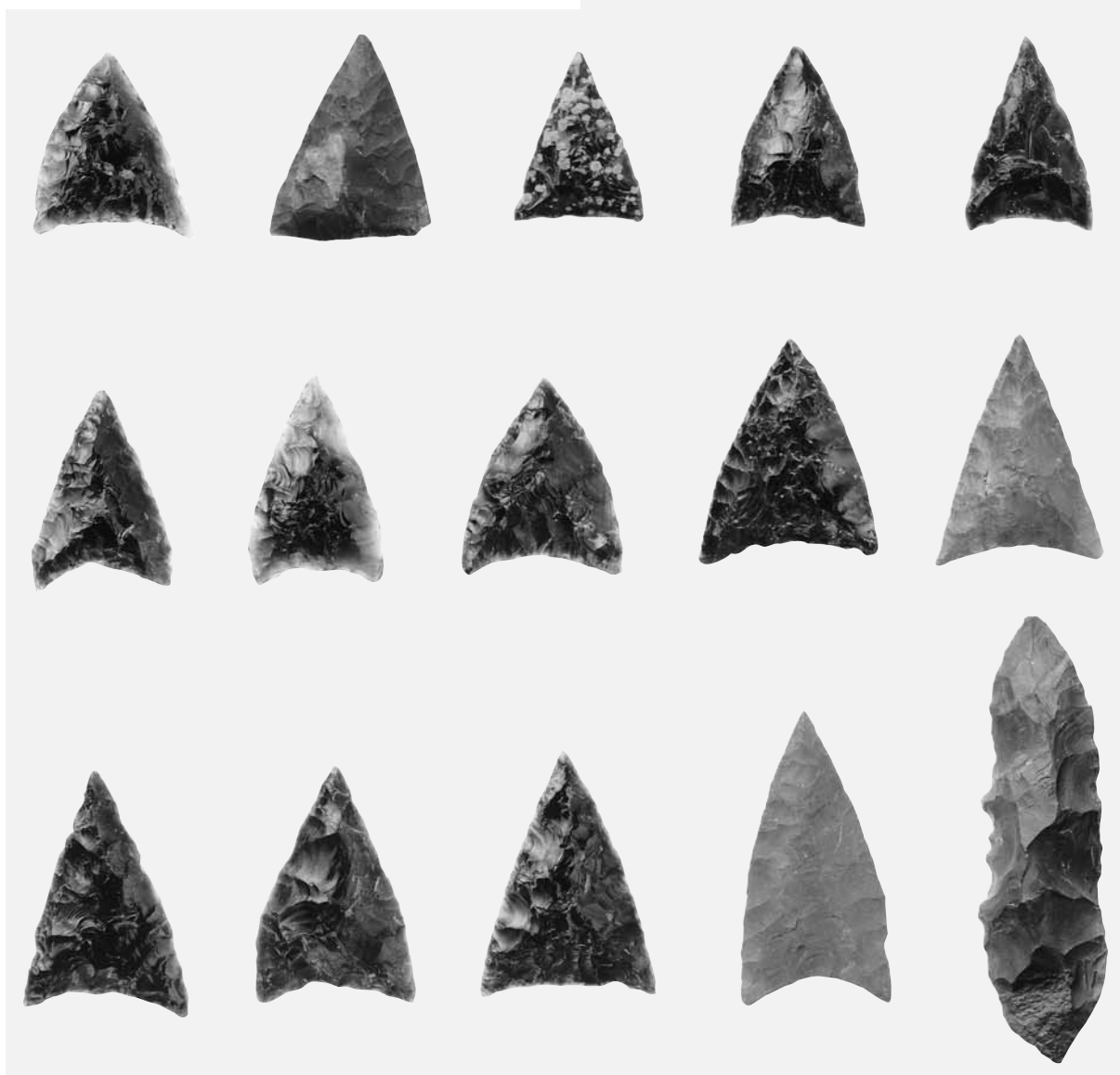
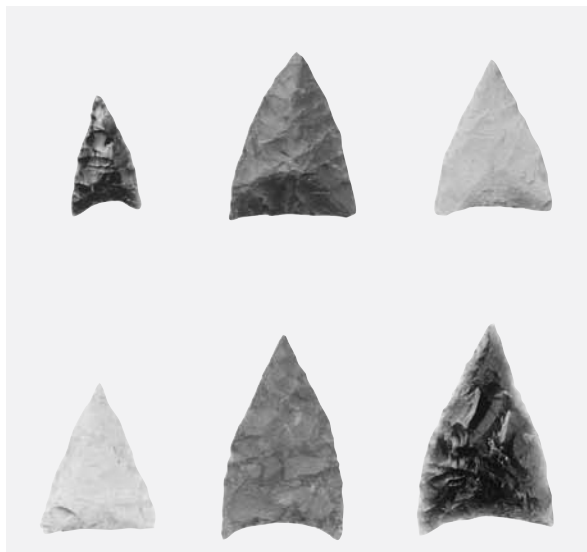
4 河川堆積物境界検出 (西から)



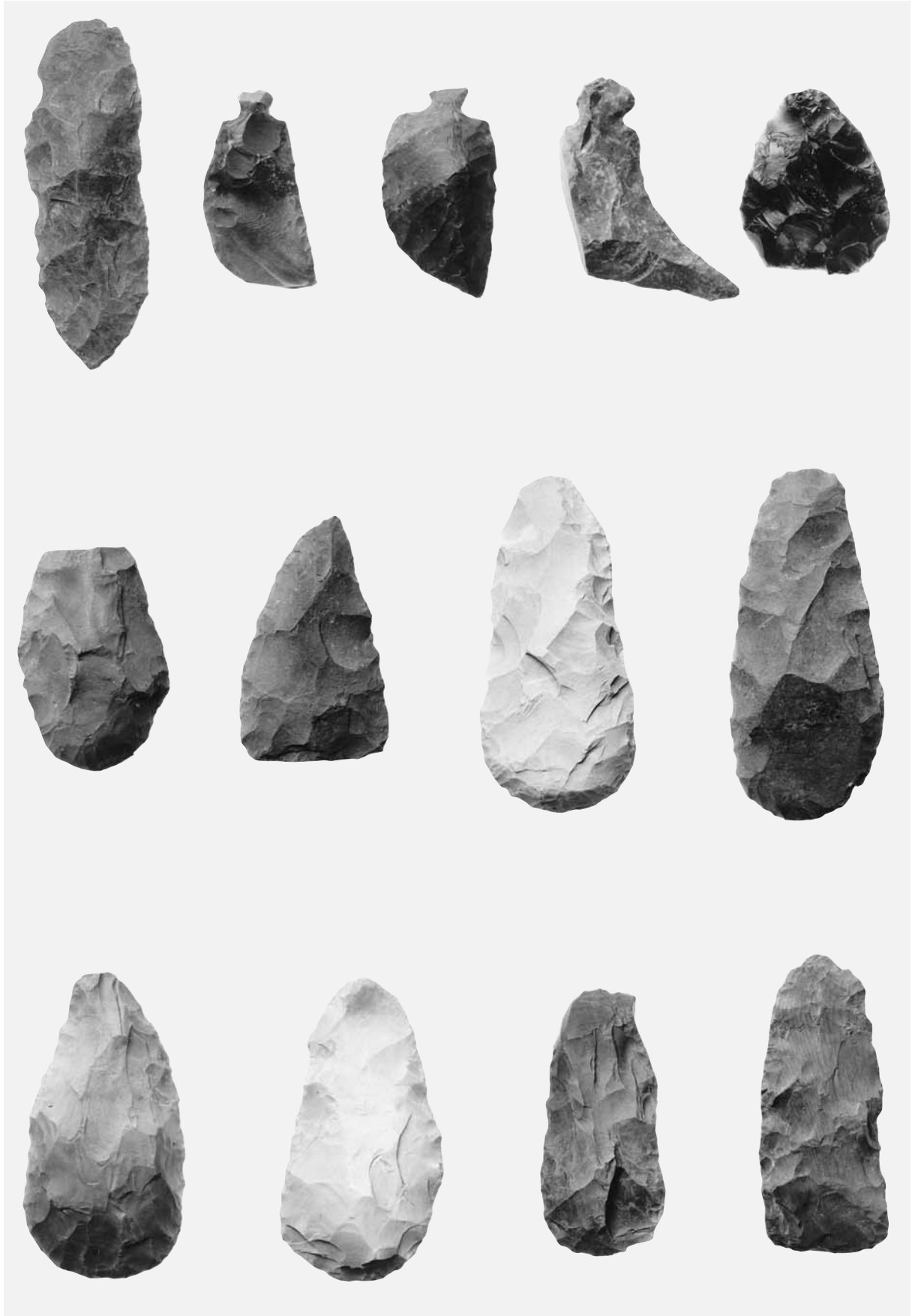
5 28ラインより西側完掘 (東から)



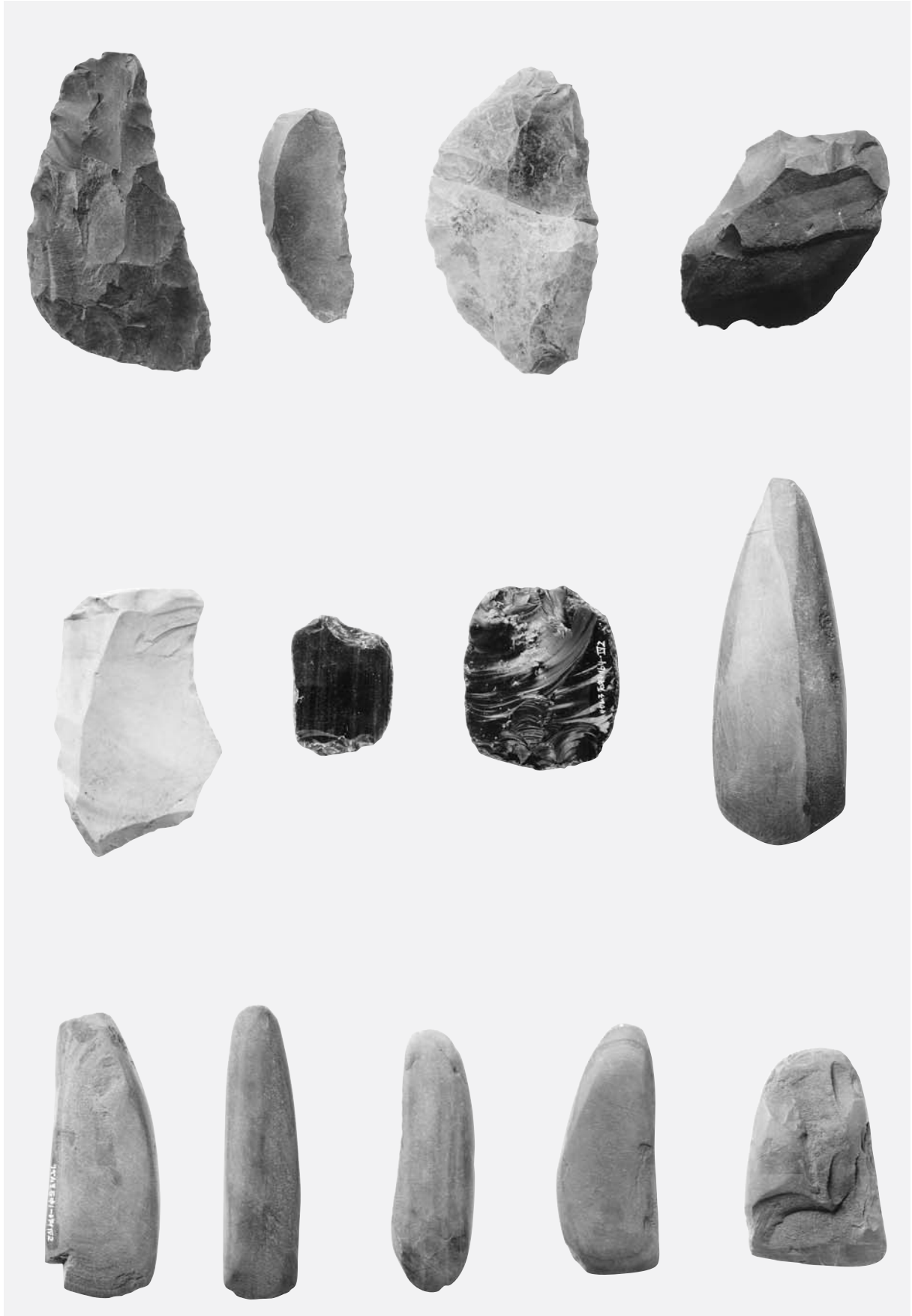
図V-3-3-1



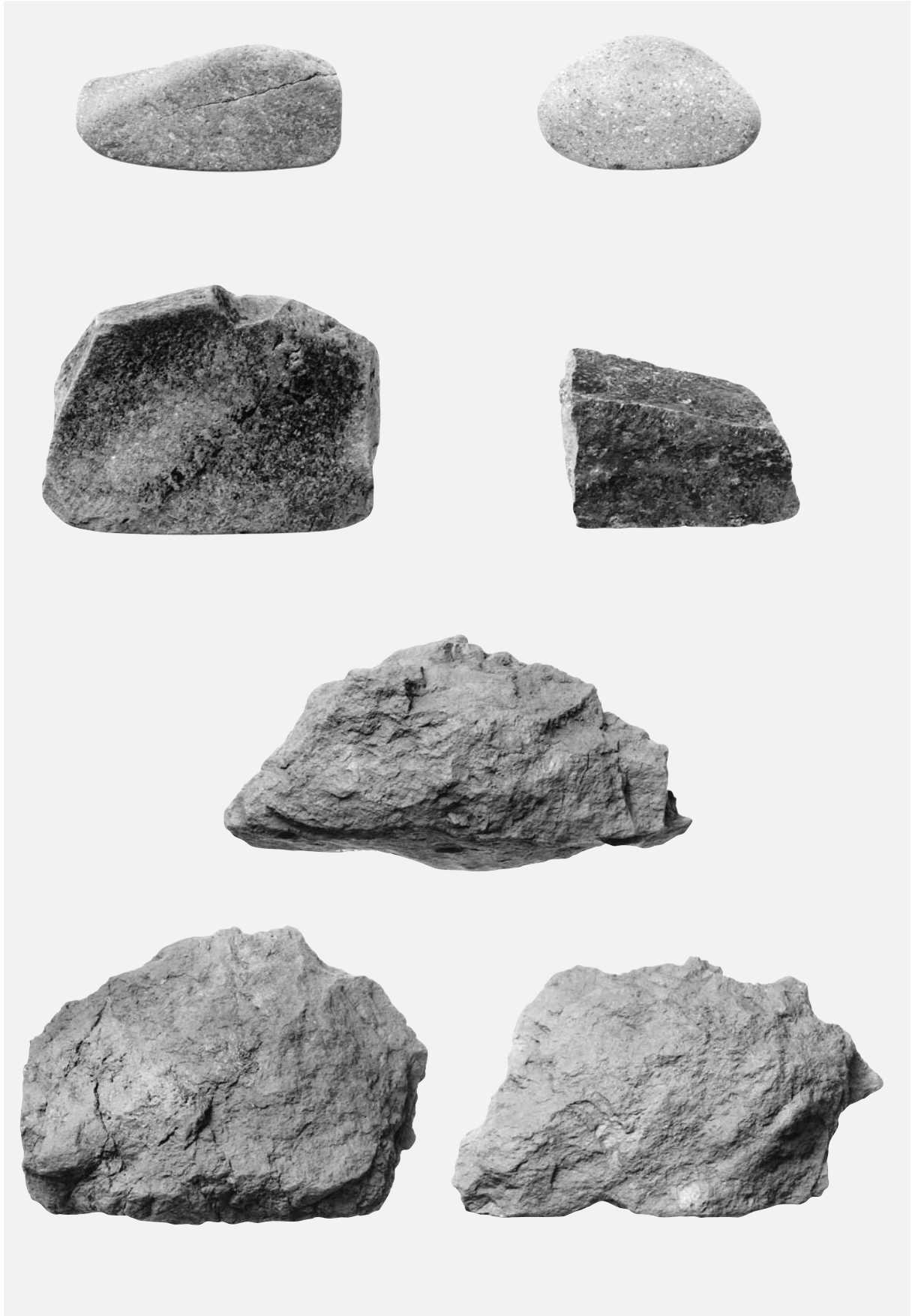
1 石器集中1出土の遺物(1)



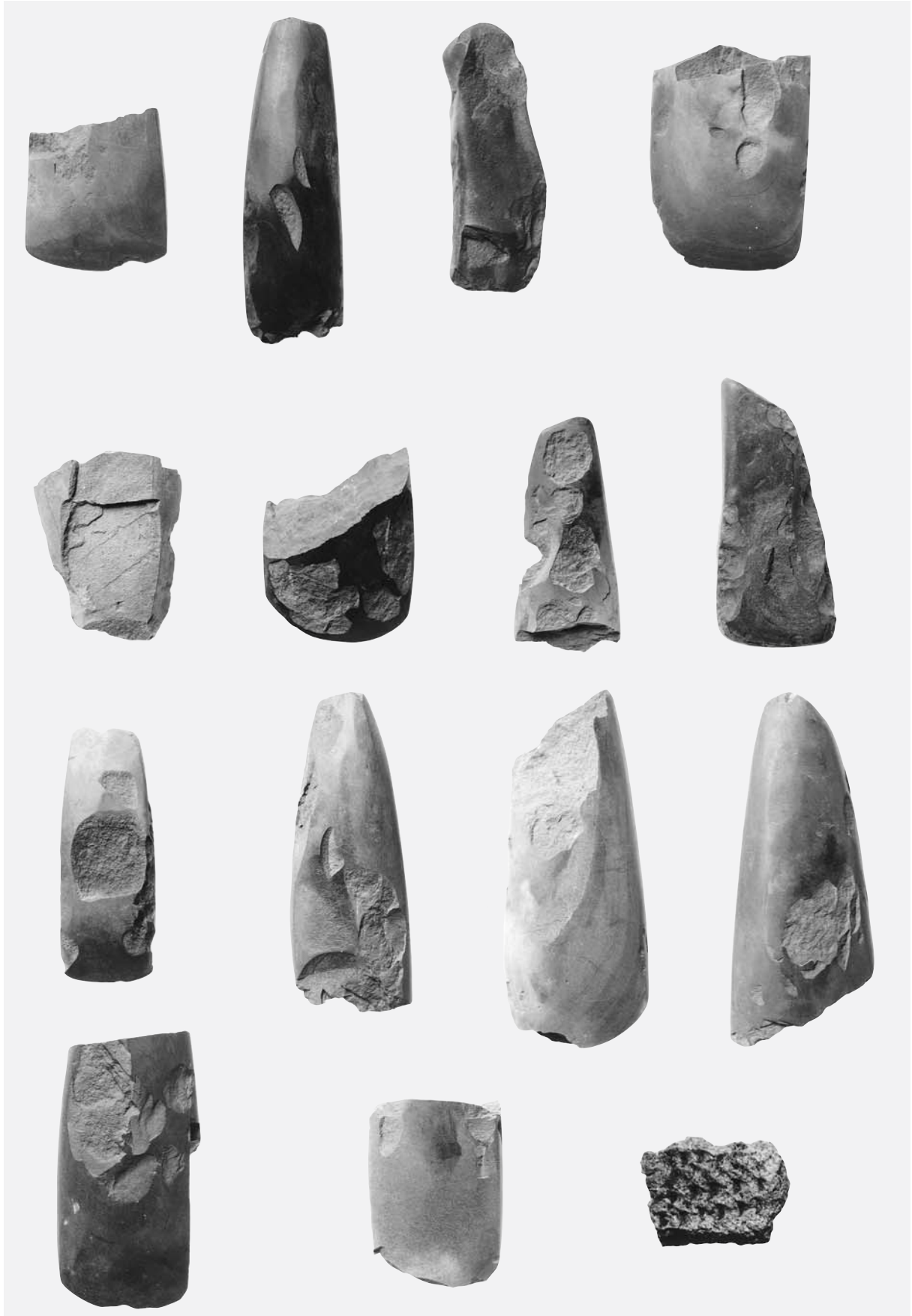
1 石器集中1出土の遺物(2)



1 石器集中1出土の遺物(3)



1 石器集中1出土の遺物(4)



1 S-7 出土の遺物





1 S-8 出土の石器



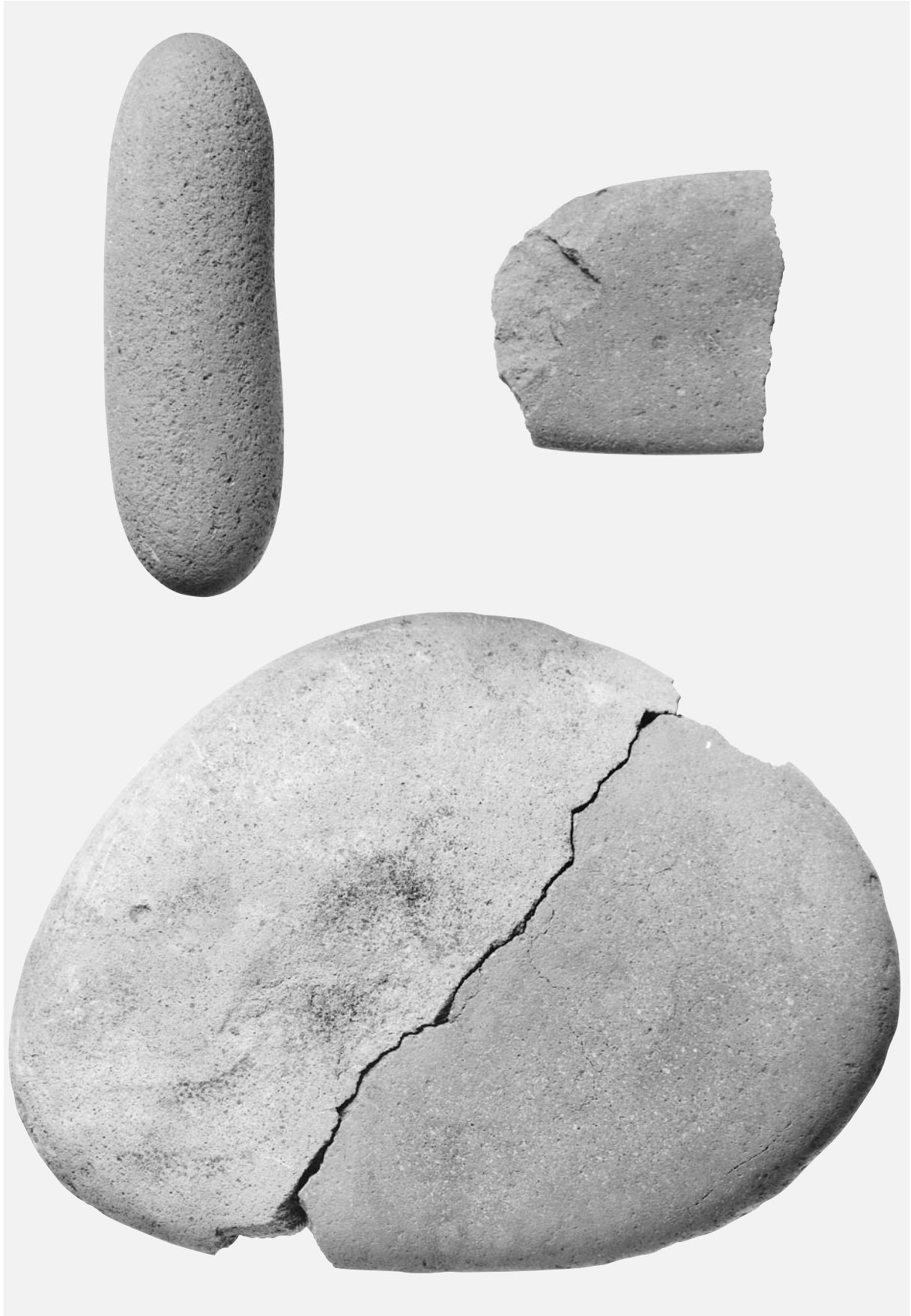
2 S-9 出土の石器



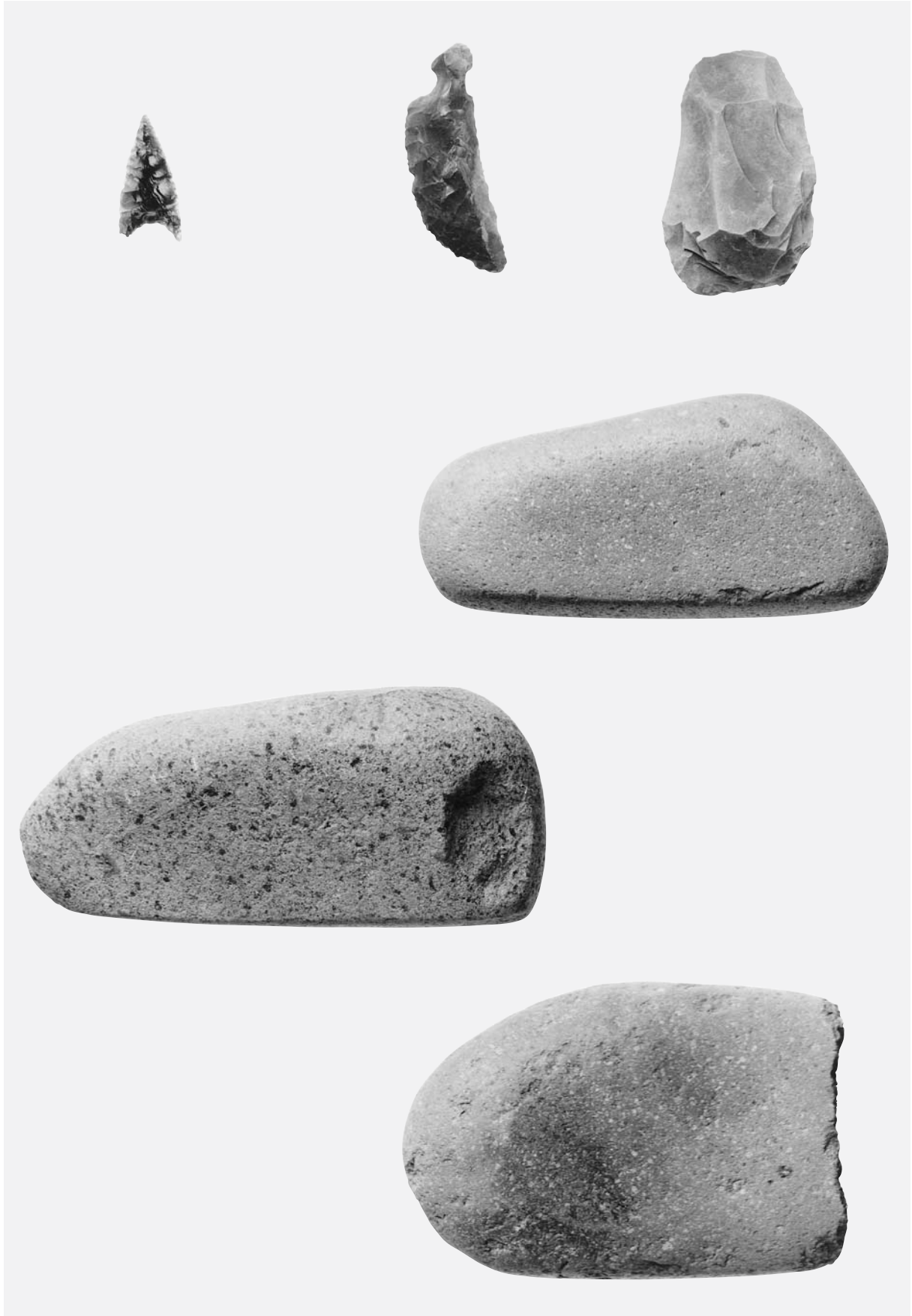
3 S-10 出土の石器



1 S-14出土の土器



1 S-15出土の石器



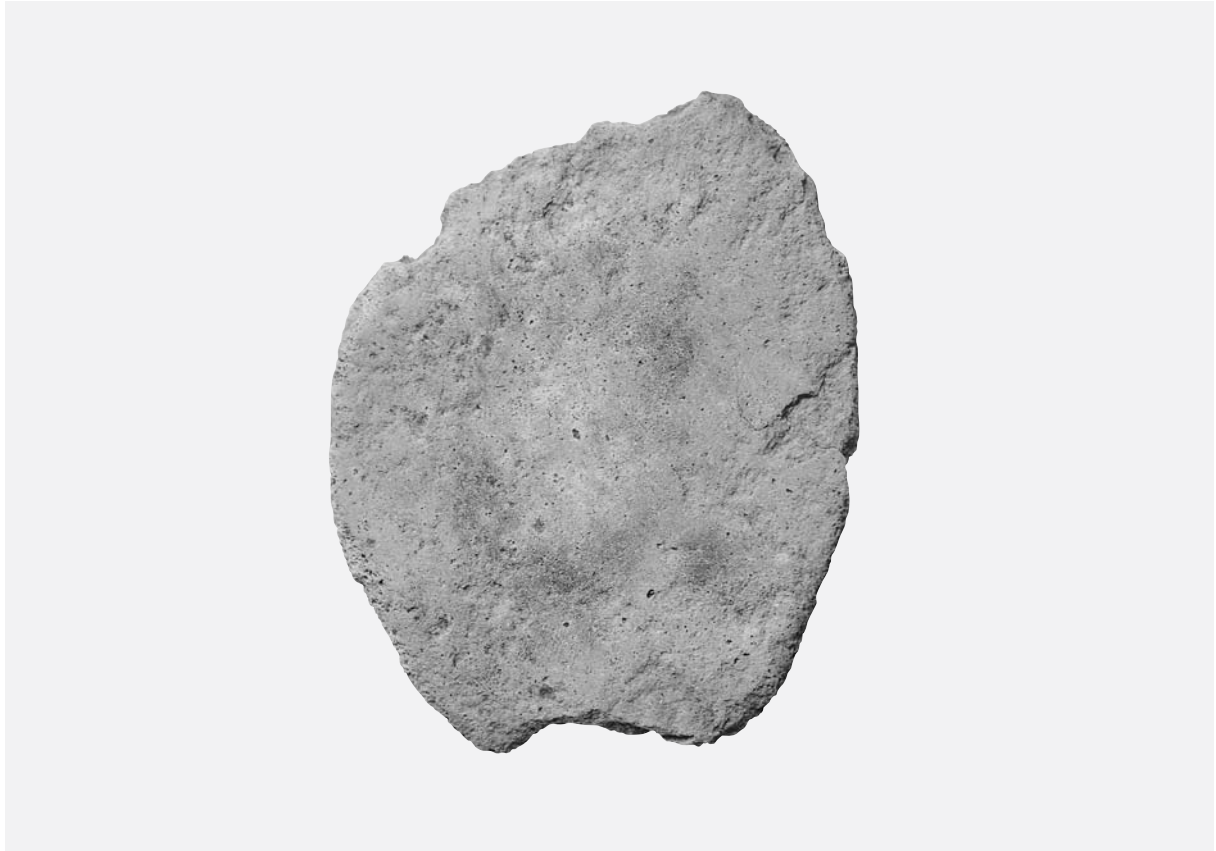
1 S-16出土の石器



1 S-17出土の石器



2 S-19出土の石器



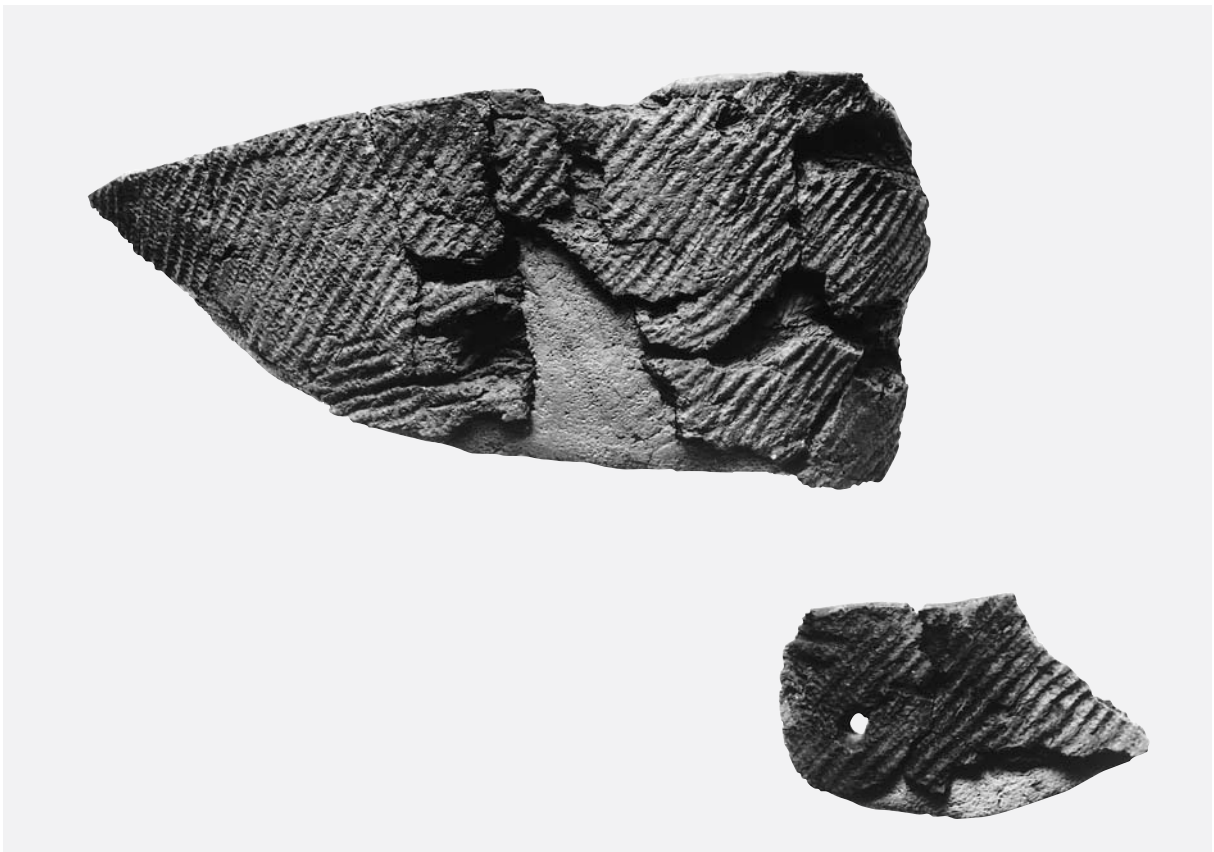
1 S-20出土の石器



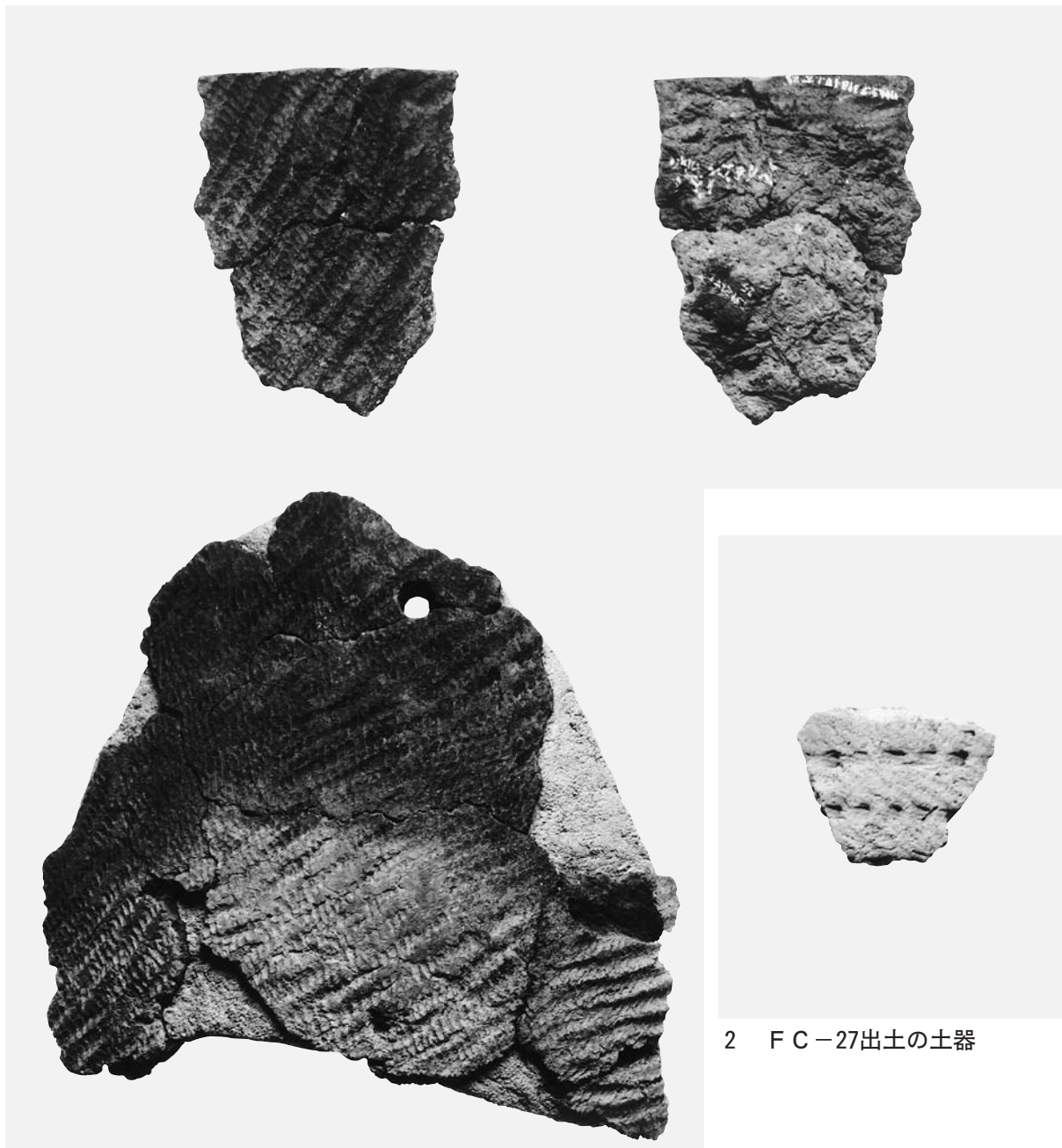
2 S-21出土の遺物



1 FC-10出土の石器



2 FC-17出土の土器



1 FC-20出土の土器

2 FC-27出土の土器



3 FC-23出土の石器

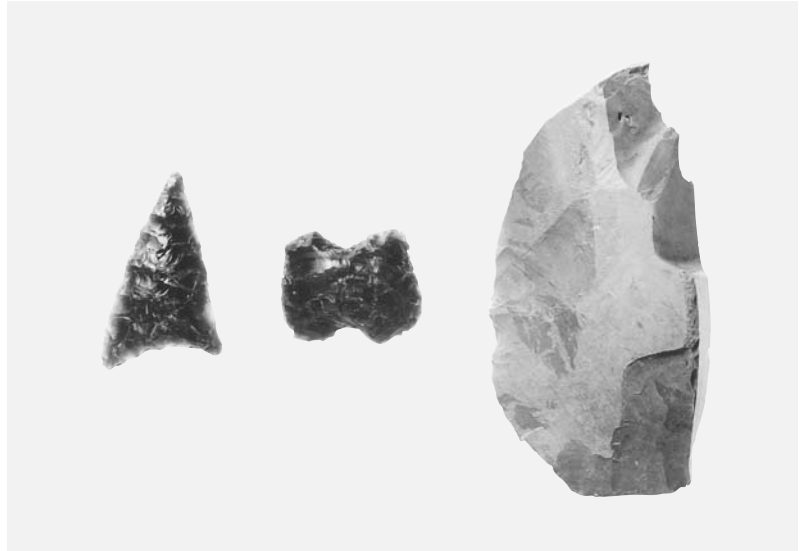


4 FC-24出土の石器

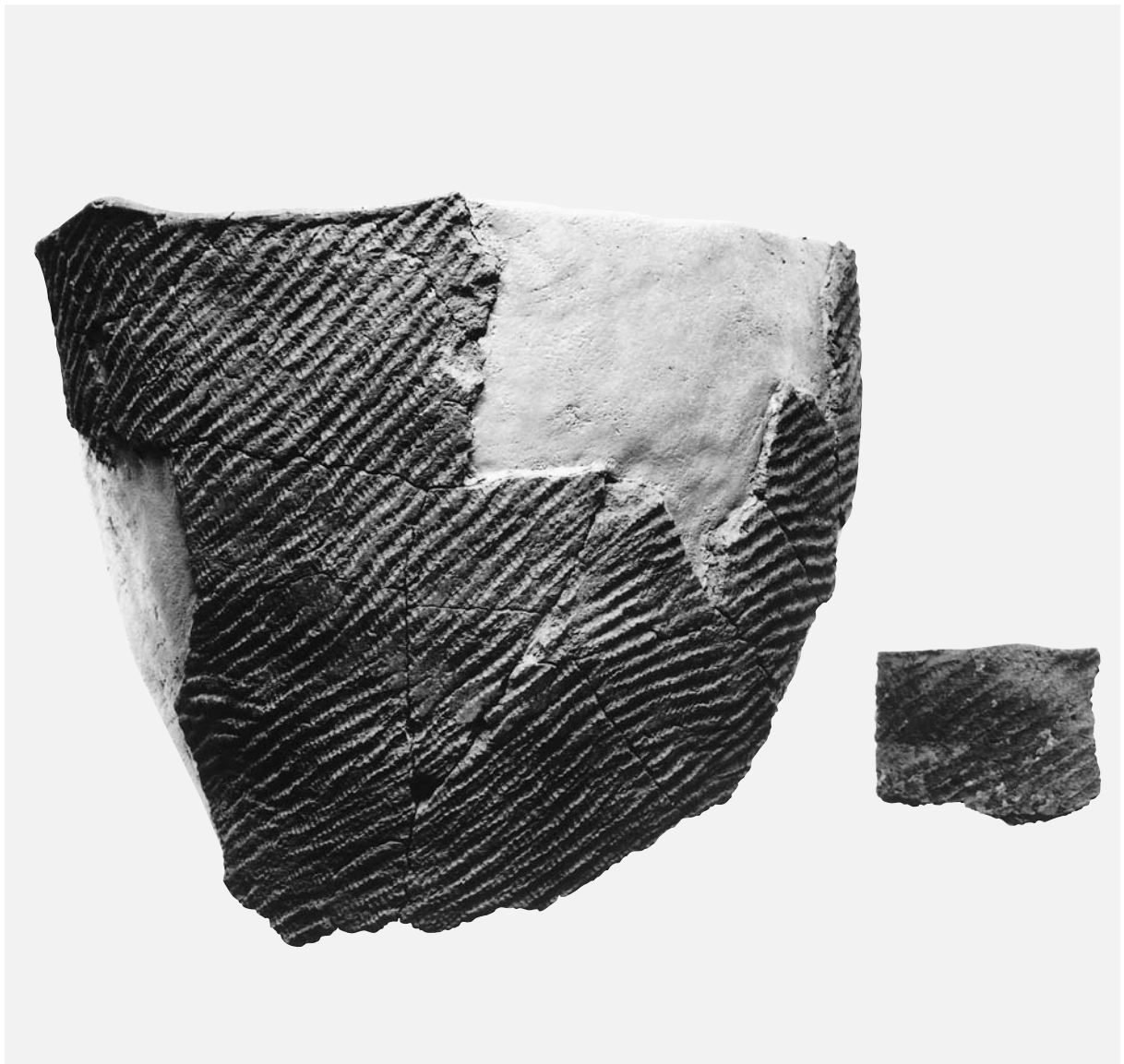




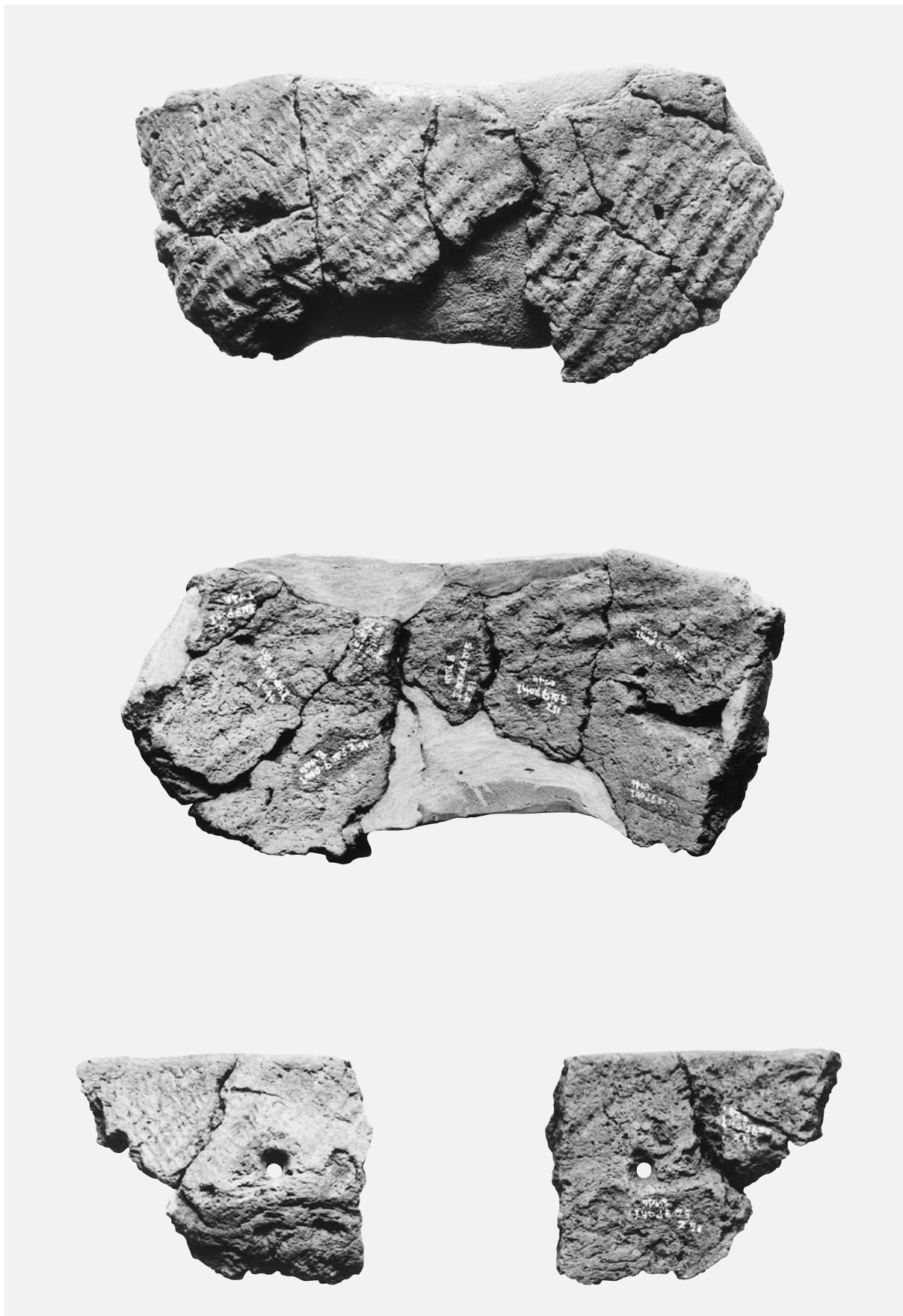
1 F C - 29出土の石器



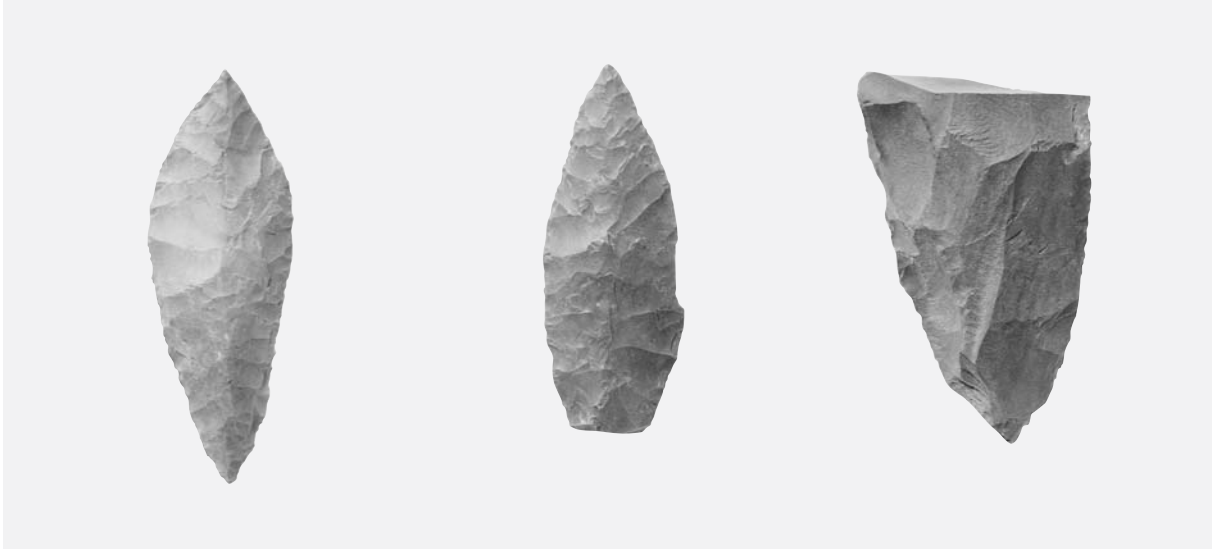
2 F C - 31出土の石器



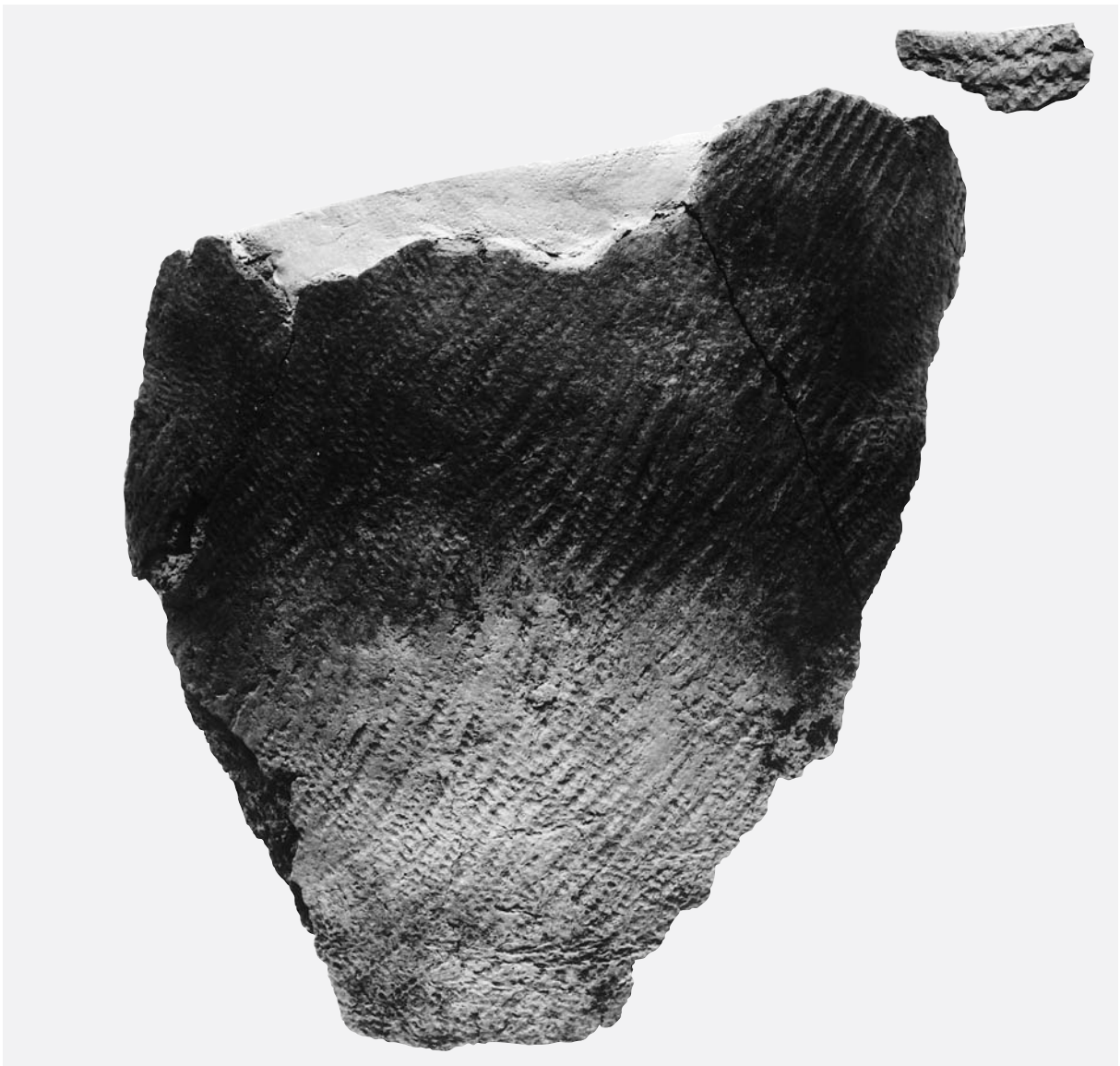
3 F C - 33出土の土器



1 FC-43出土の土器



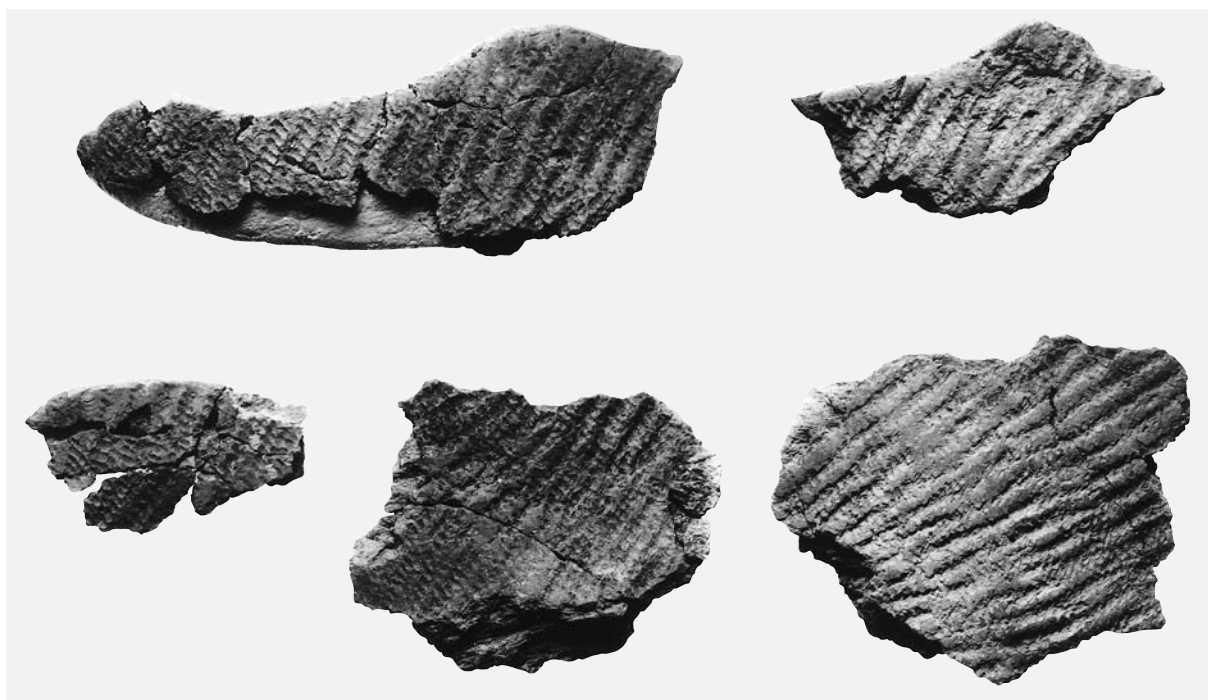
1 FC-40出土の石器



2 FC-45出土の土器



1 FC-56出土の土器



2 FC-64出土の土器



3 F-11出土の土器



4 F-14出土の石器



1 F-18・19出土の土器



2 F-26出土の土器



3 F-23出土の土器



4 F-41出土の土器



5 F-37出土の石器



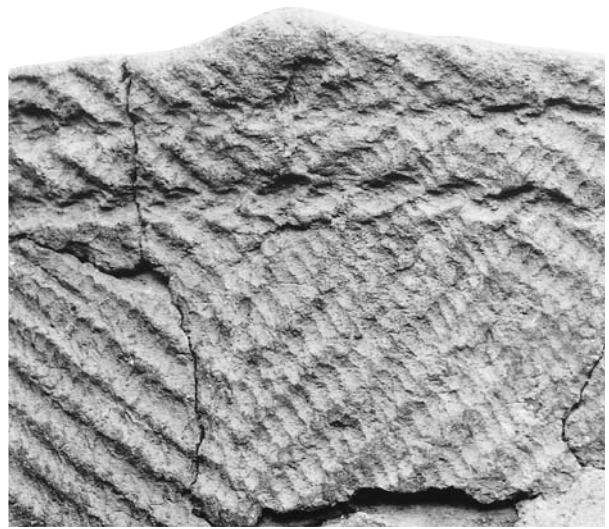
6 F-27出土の石器



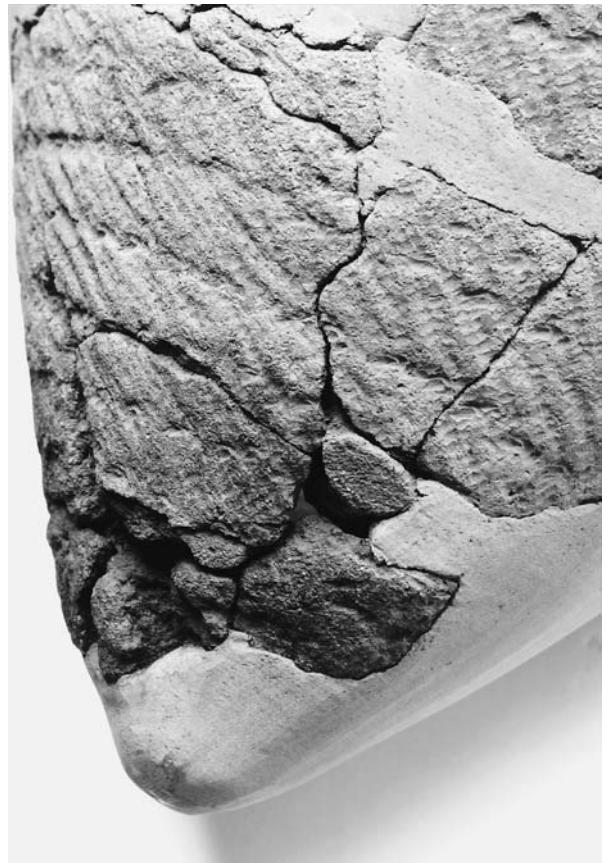
2 口唇部



1 包含層出土の土器(1) 図V-4-1・2



5 口縁部



5 底部

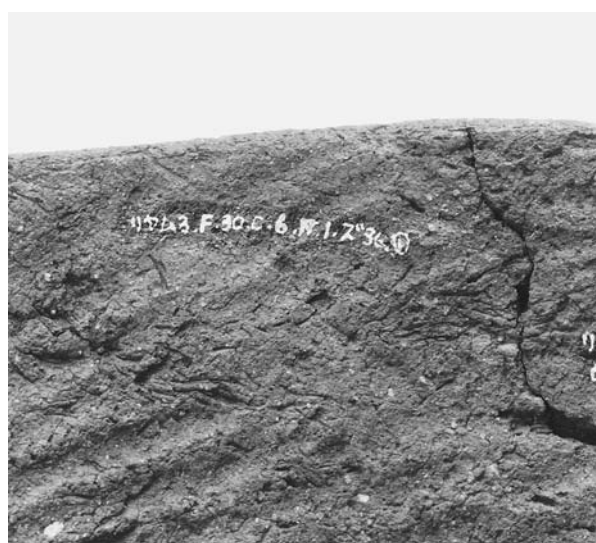


1 包含層出土の土器(3) 図V-4-4・5・6(1)





1 包含層出土の土器(4) 図V-4-6(2)・7(1)



21 内面の縄文



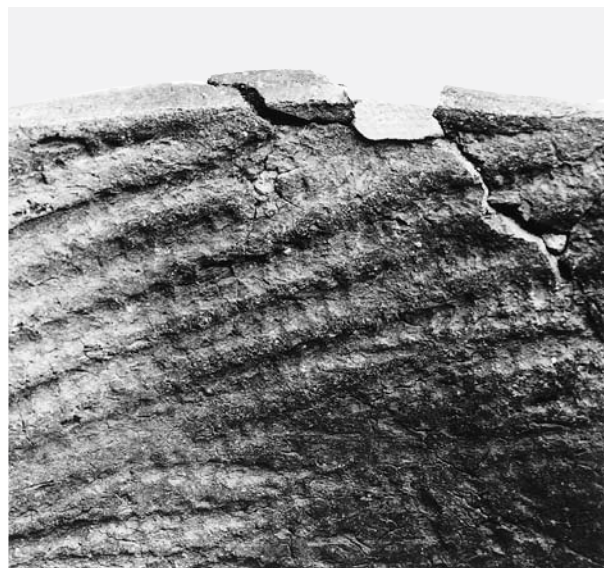
22



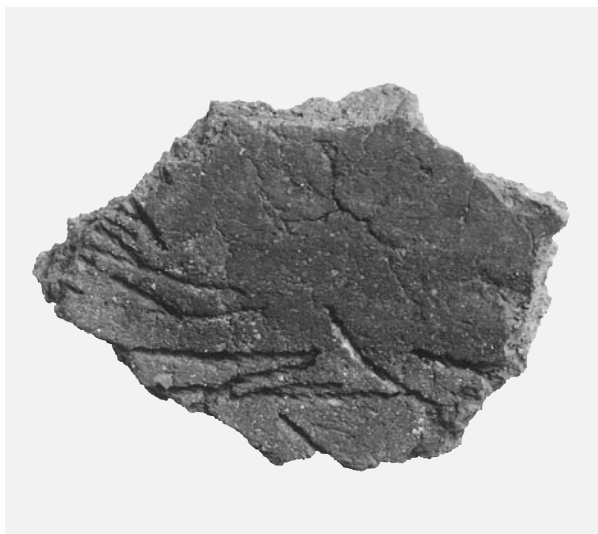
23



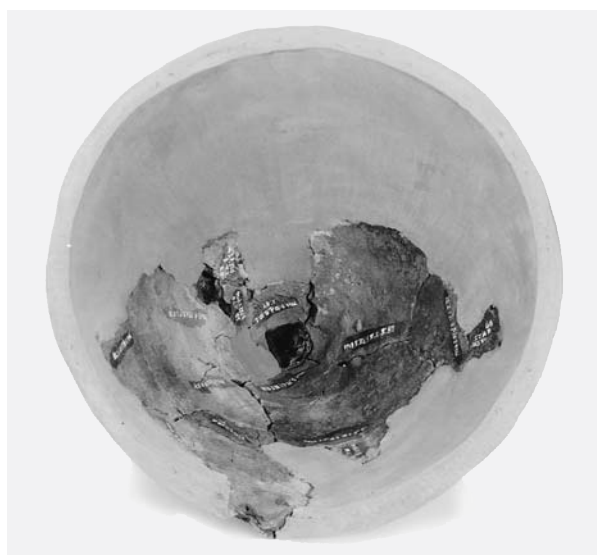
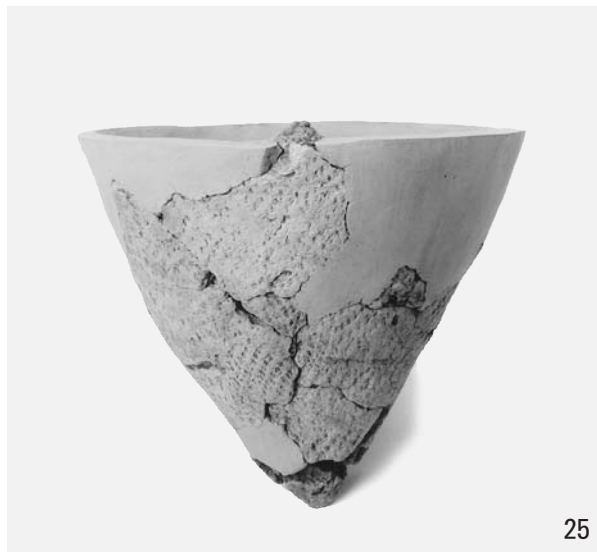
23 表面剥落部分の縄文



23 内面の縄文



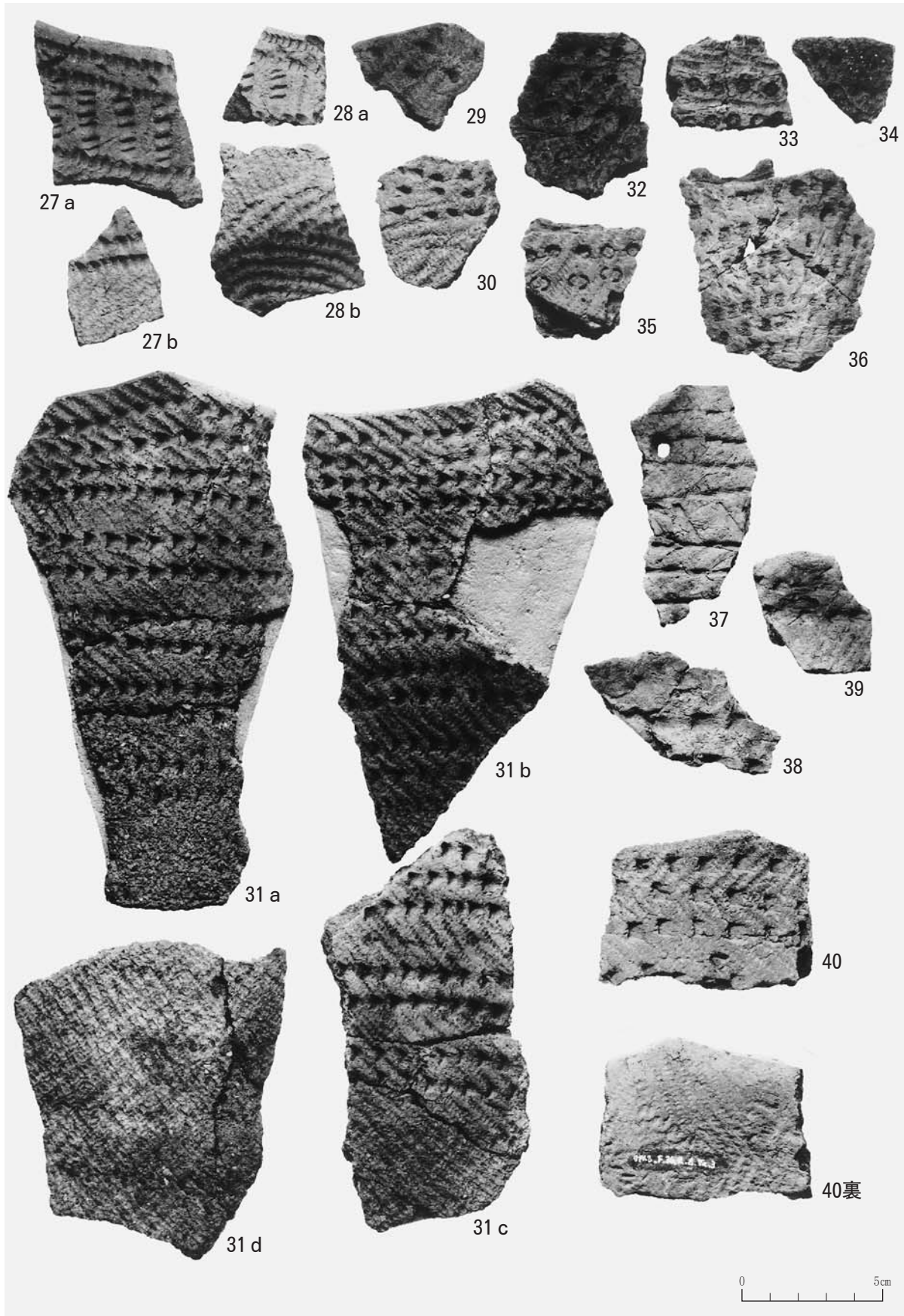
胎土に混入している撚り糸



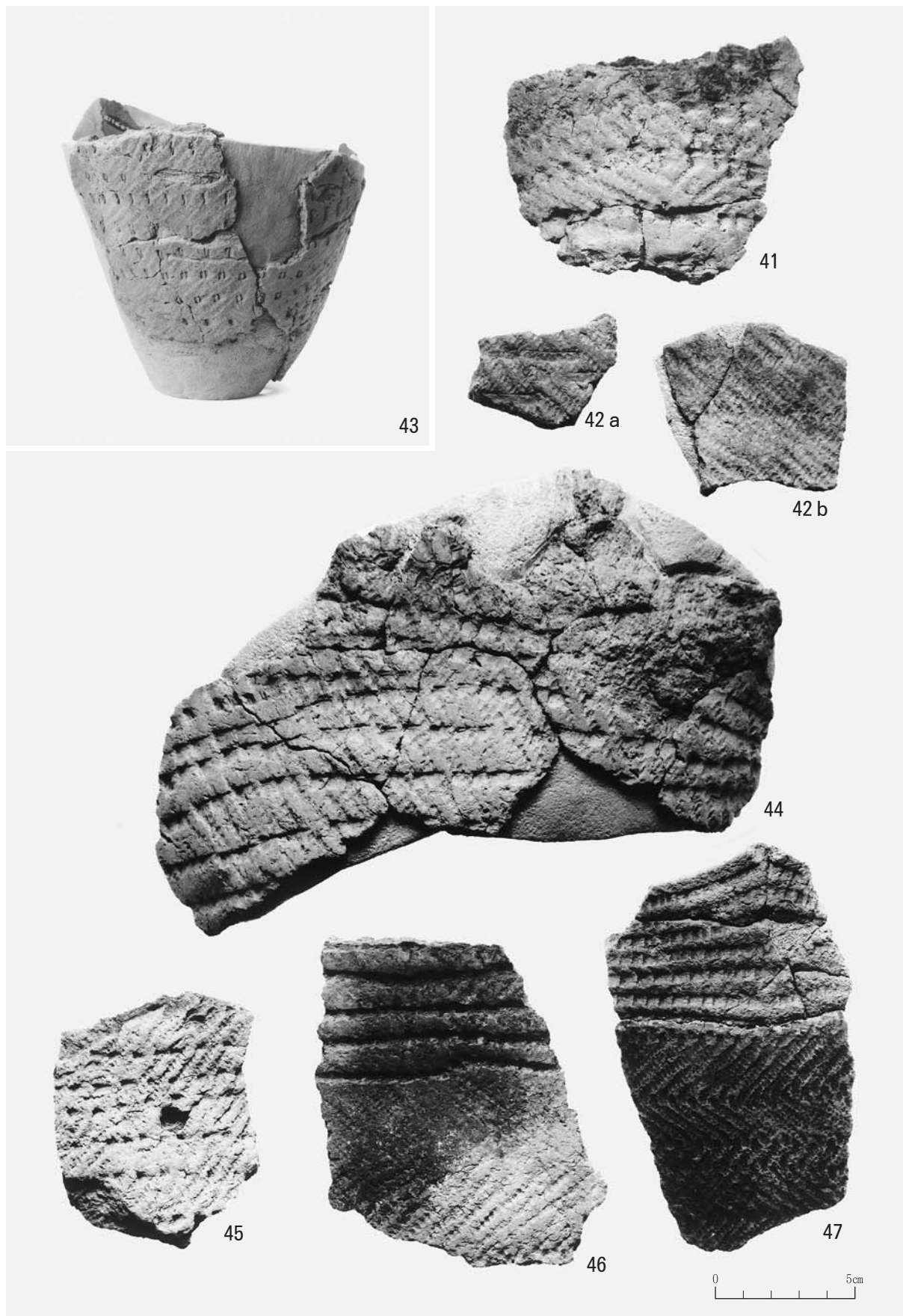
25 尖底部の黒曜石剥片



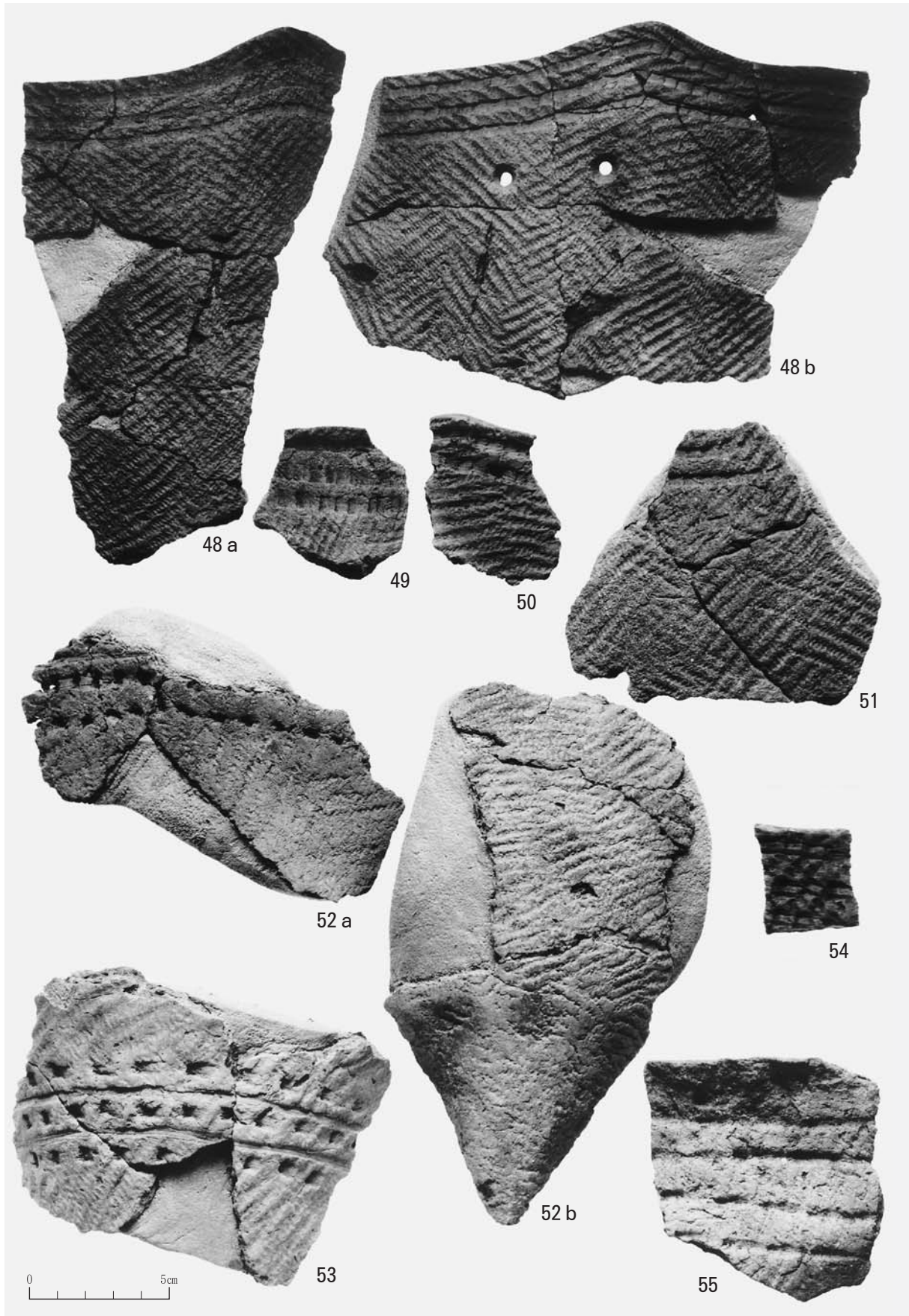
25 尖底部の黒曜石剥片



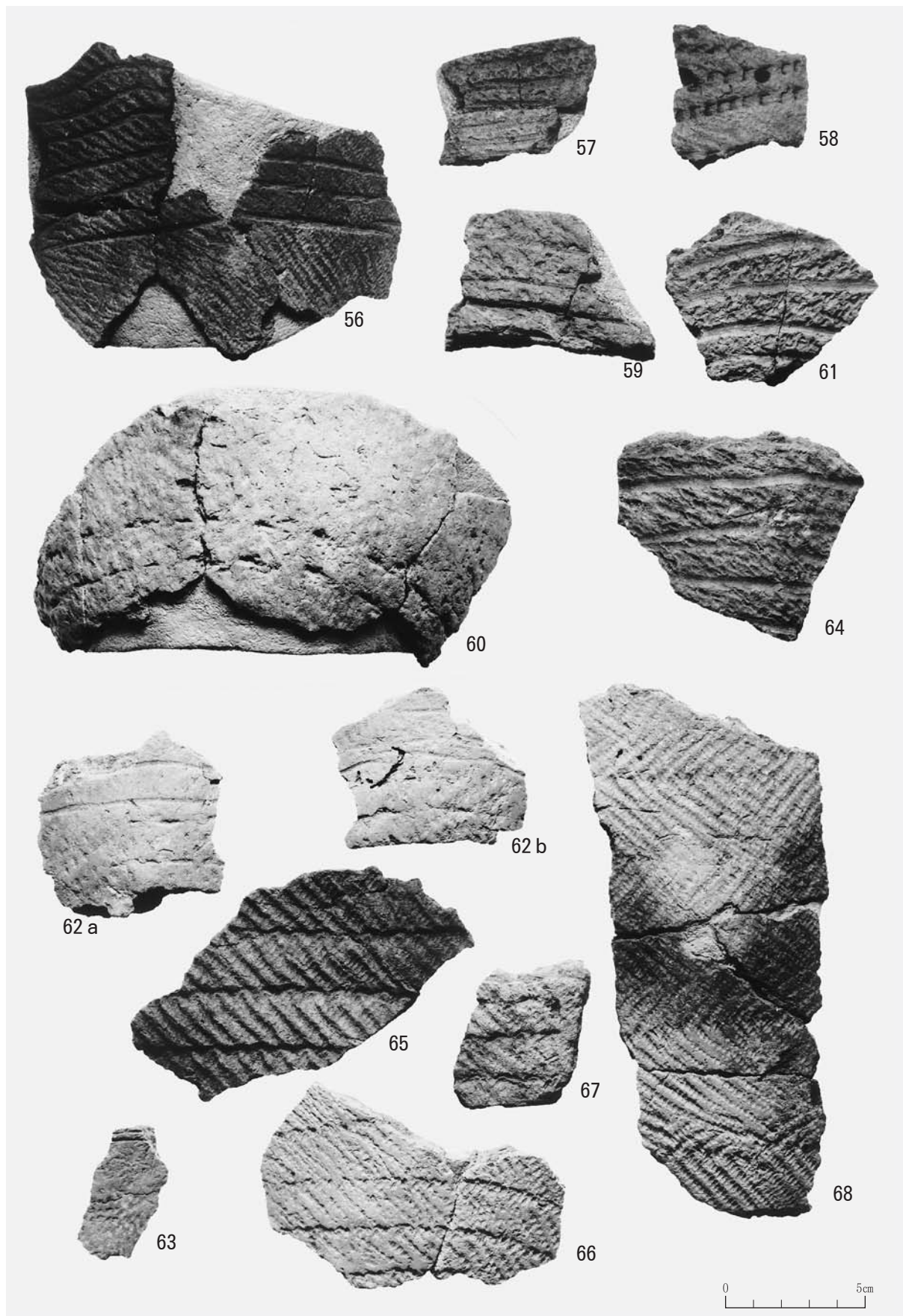
1 包含層出土の土器(8) 図V-4-13(1)



1 包含層出土の土器(9) 図V-4-13(2)・14(1)

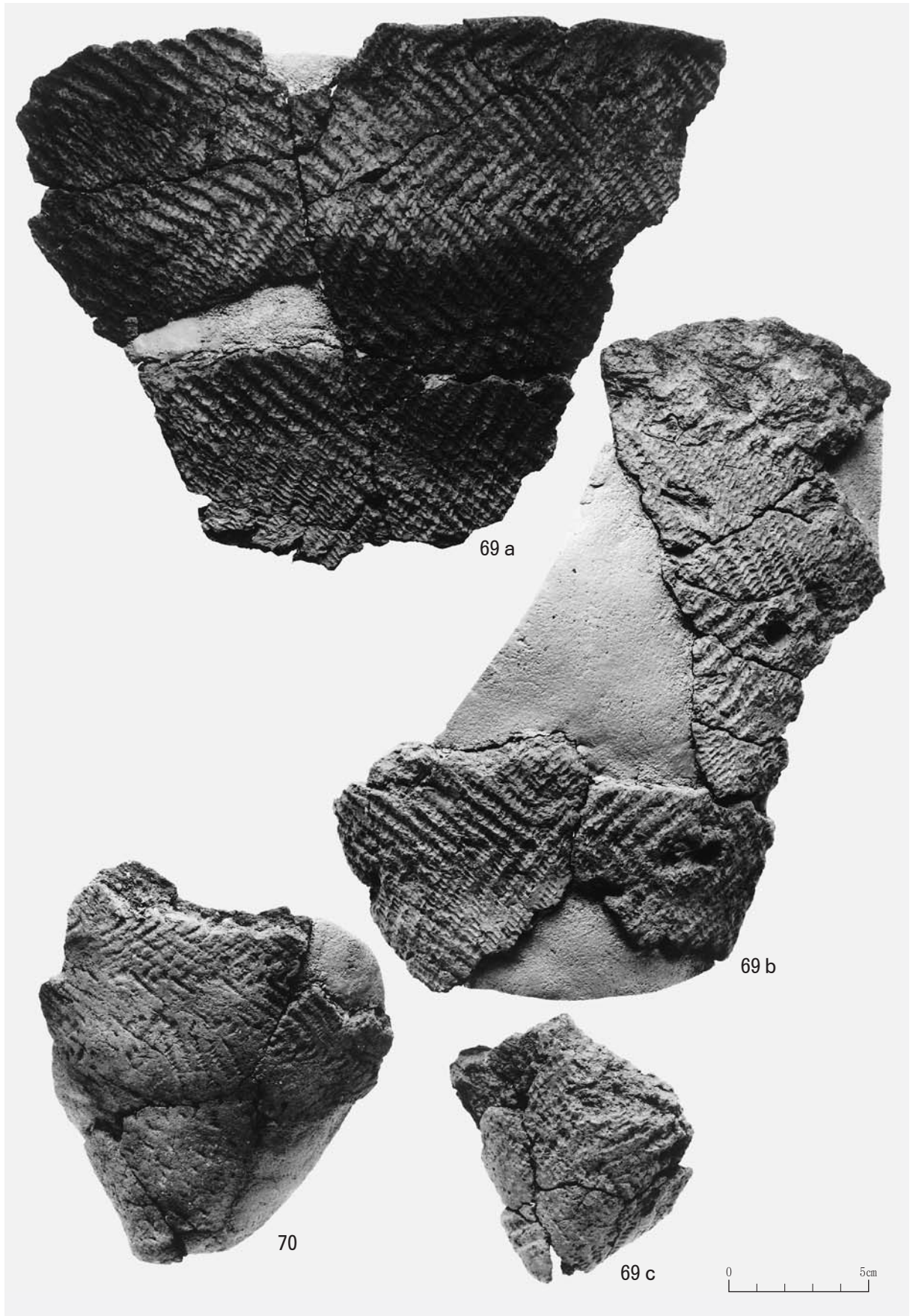


1 包含層出土の土器(10) 図V-4-14(2)・15(1)

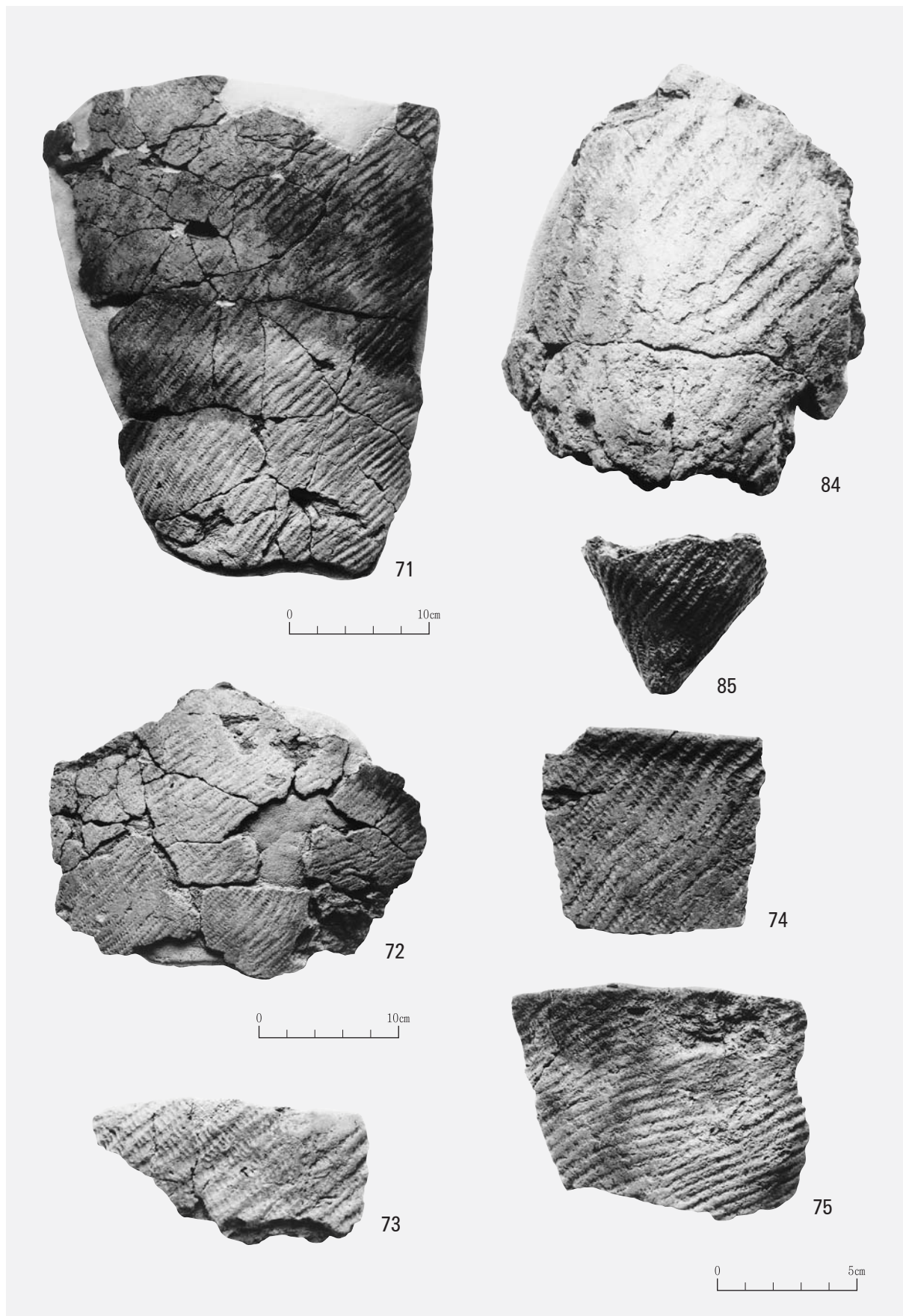


1 包含層出土の土器(11) 図V-4-15(2)・16(1)

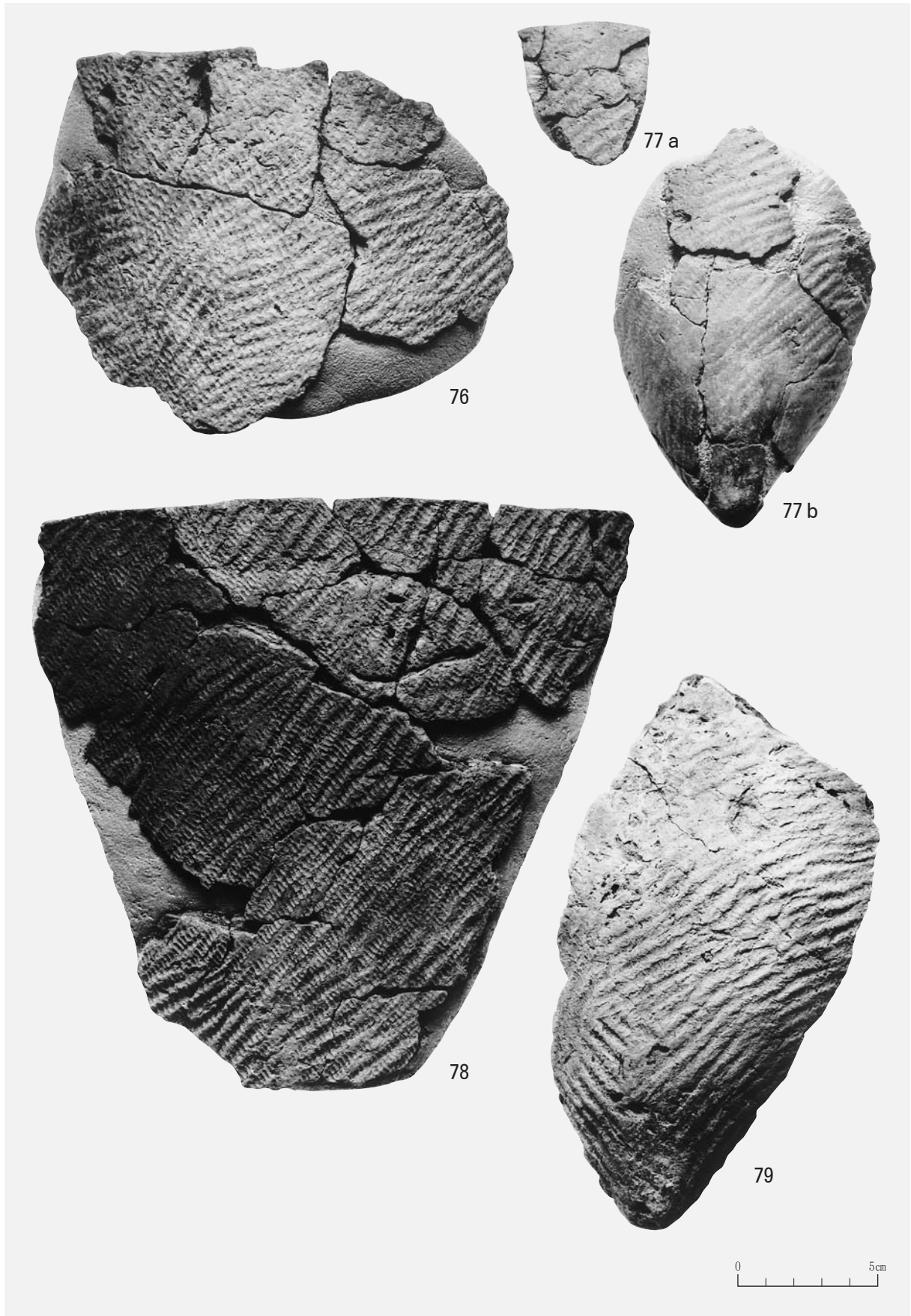




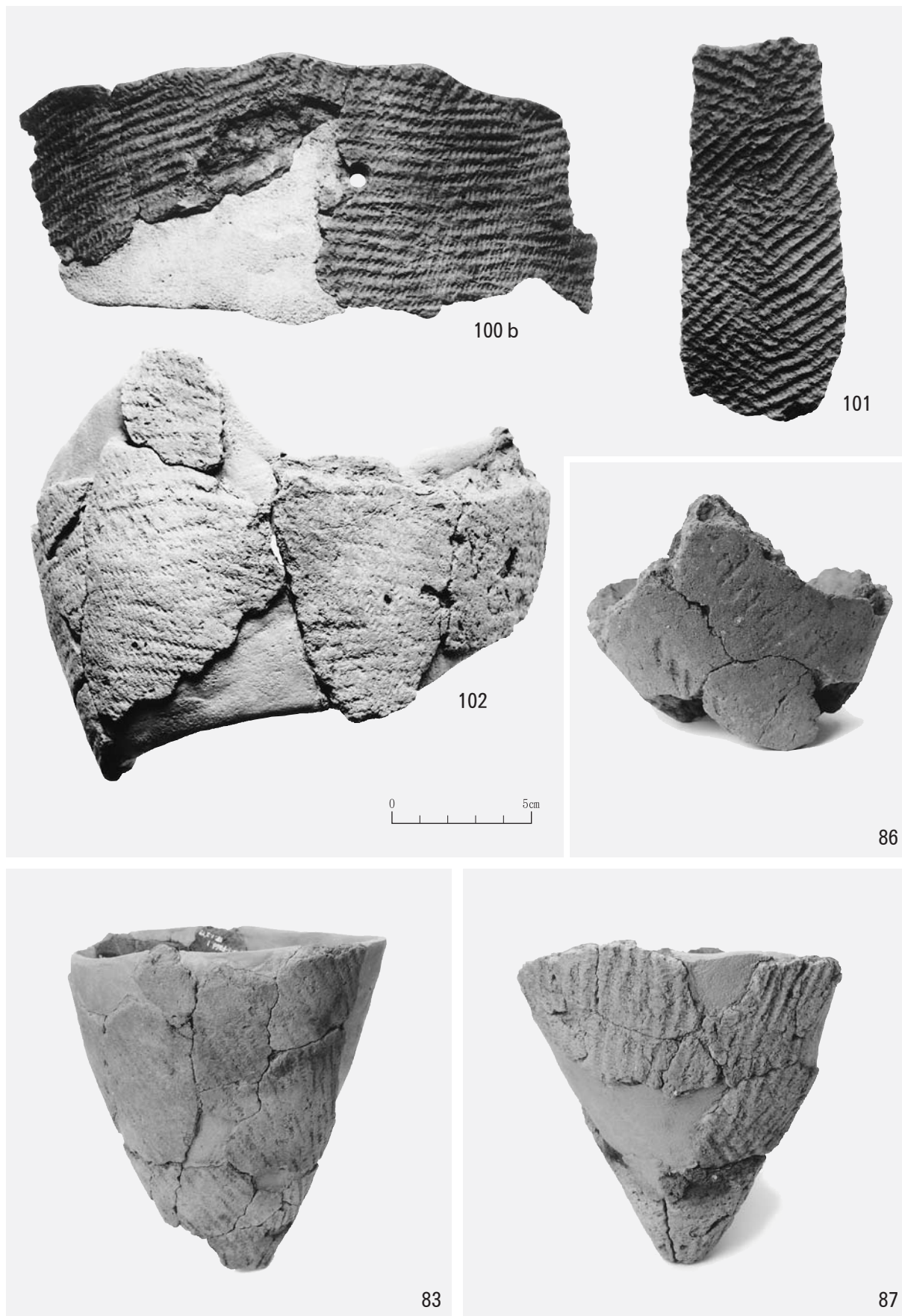
1 包含層出土の土器(12) 図V-4-16(2)



1 包含層出土の土器(13) 図V-4-17・18(1)・19(1)



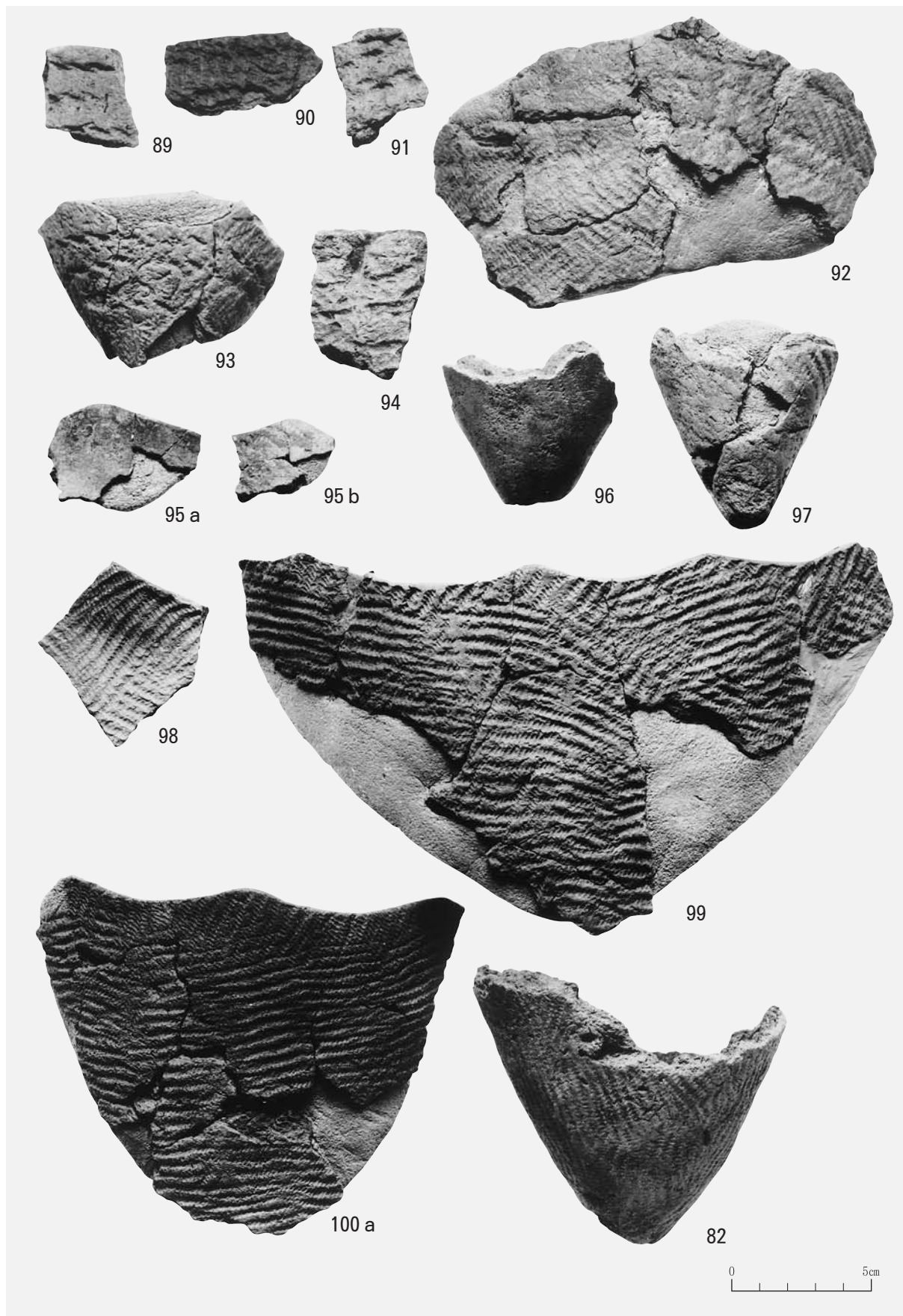
1 包含層出土の土器(14) 図V-4-18(2)



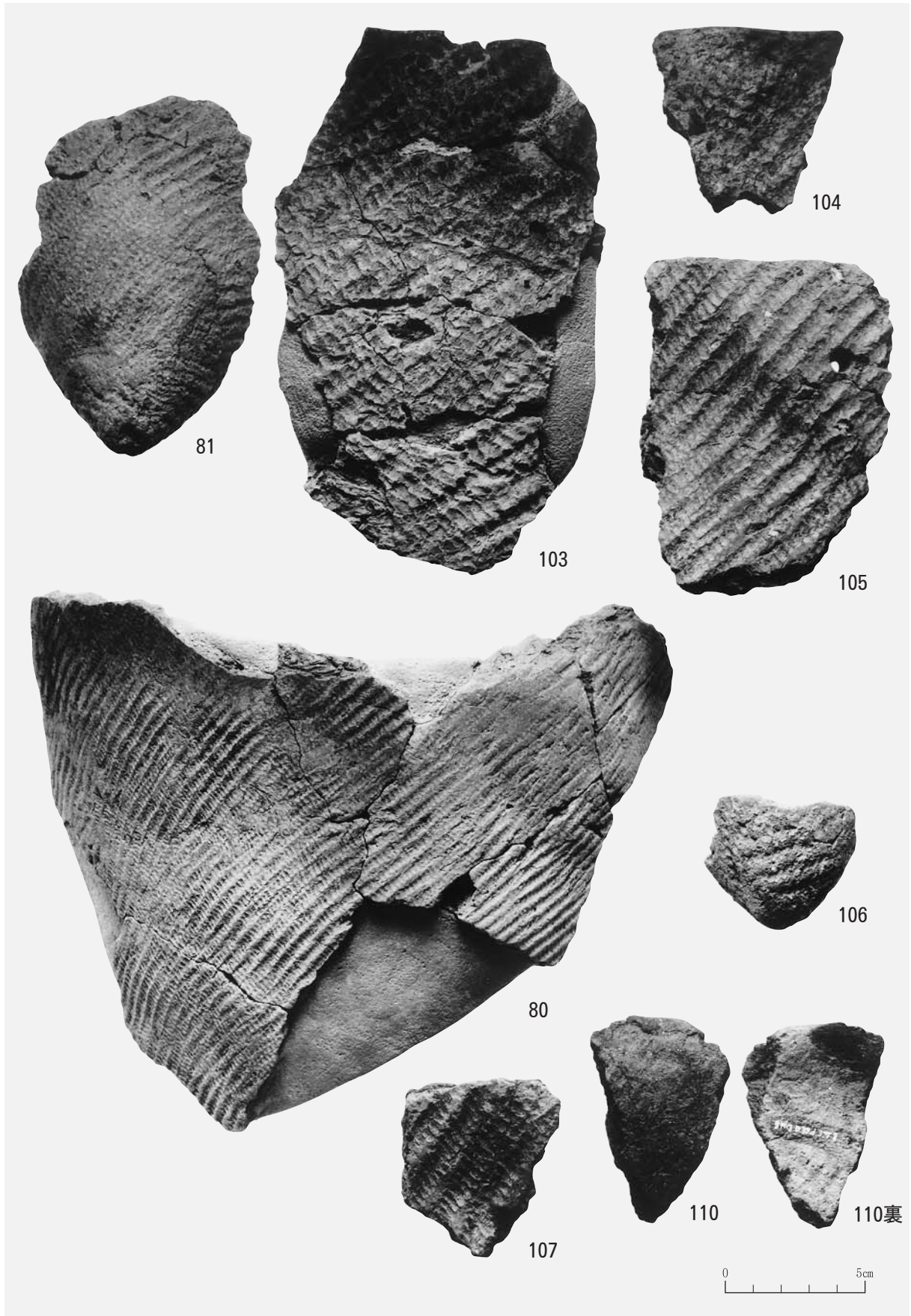
1 包含層出土の土器(15) 図V-4-19(2)・21(1)



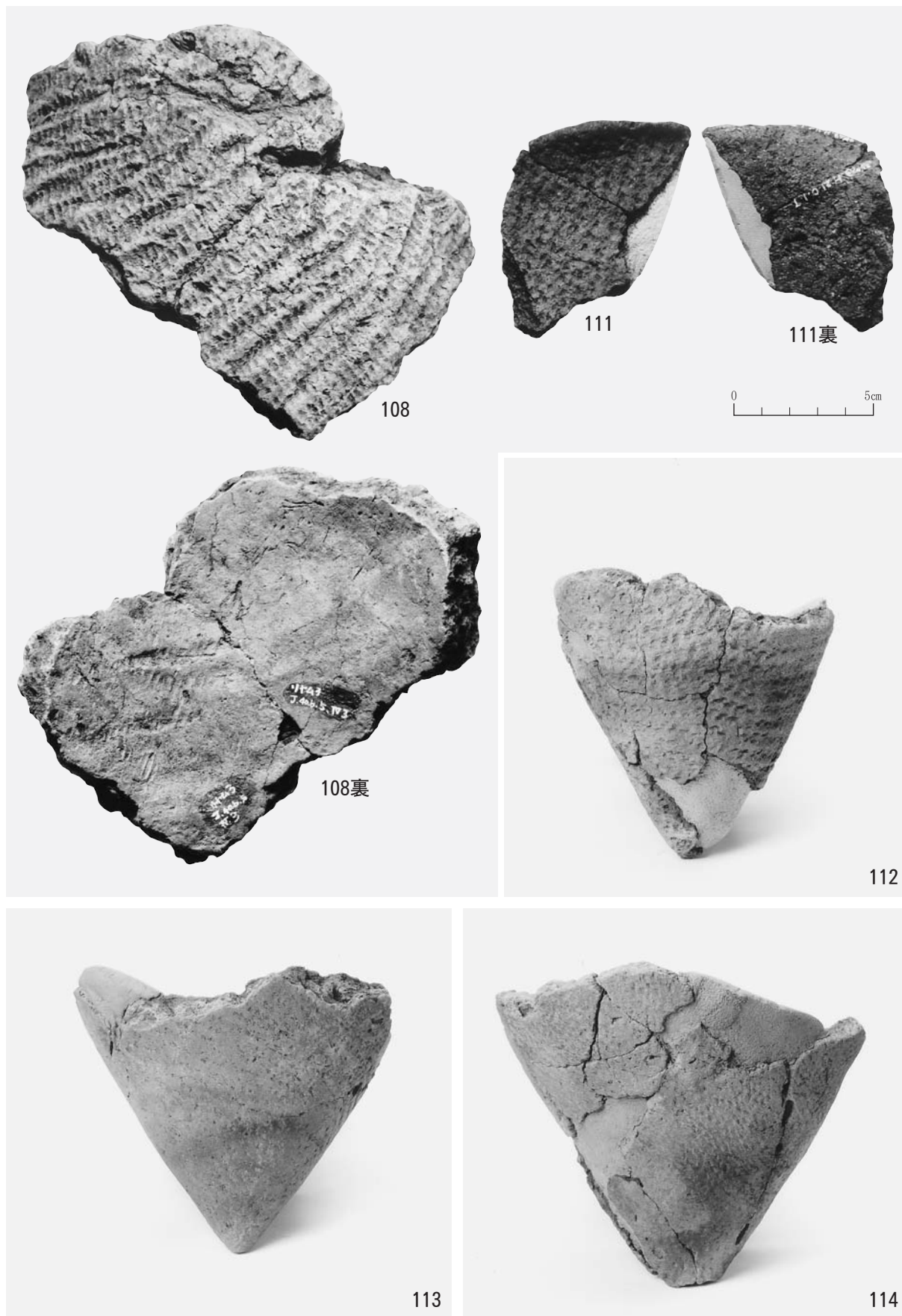
1 包含層出土の土器(16) 図V-4-20



1 包含層出土の土器(17) 図V-4-19(3)・21(2)

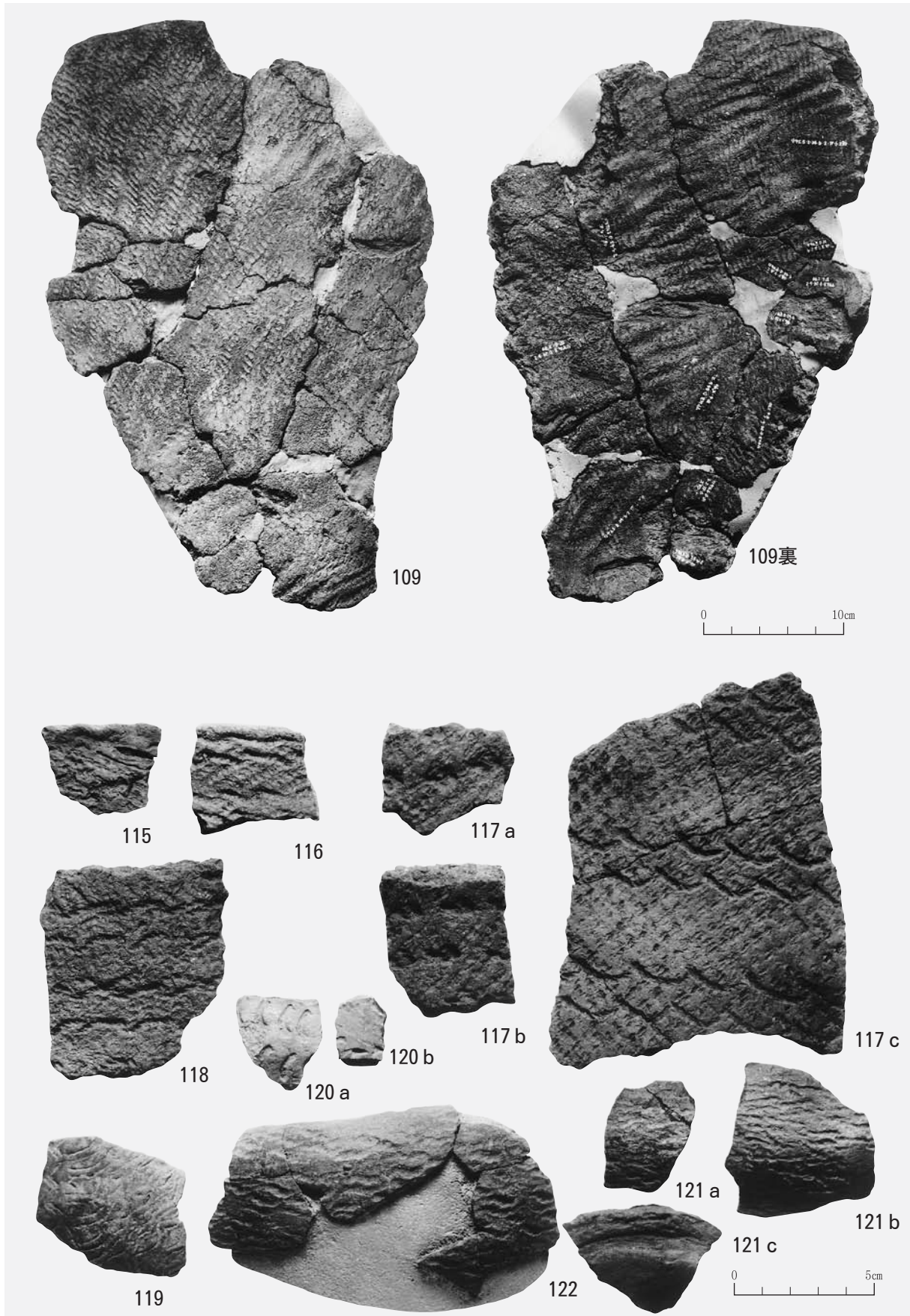


1 包含層出土の土器(18) 図V-4-18(3)・22(1)・23(1)

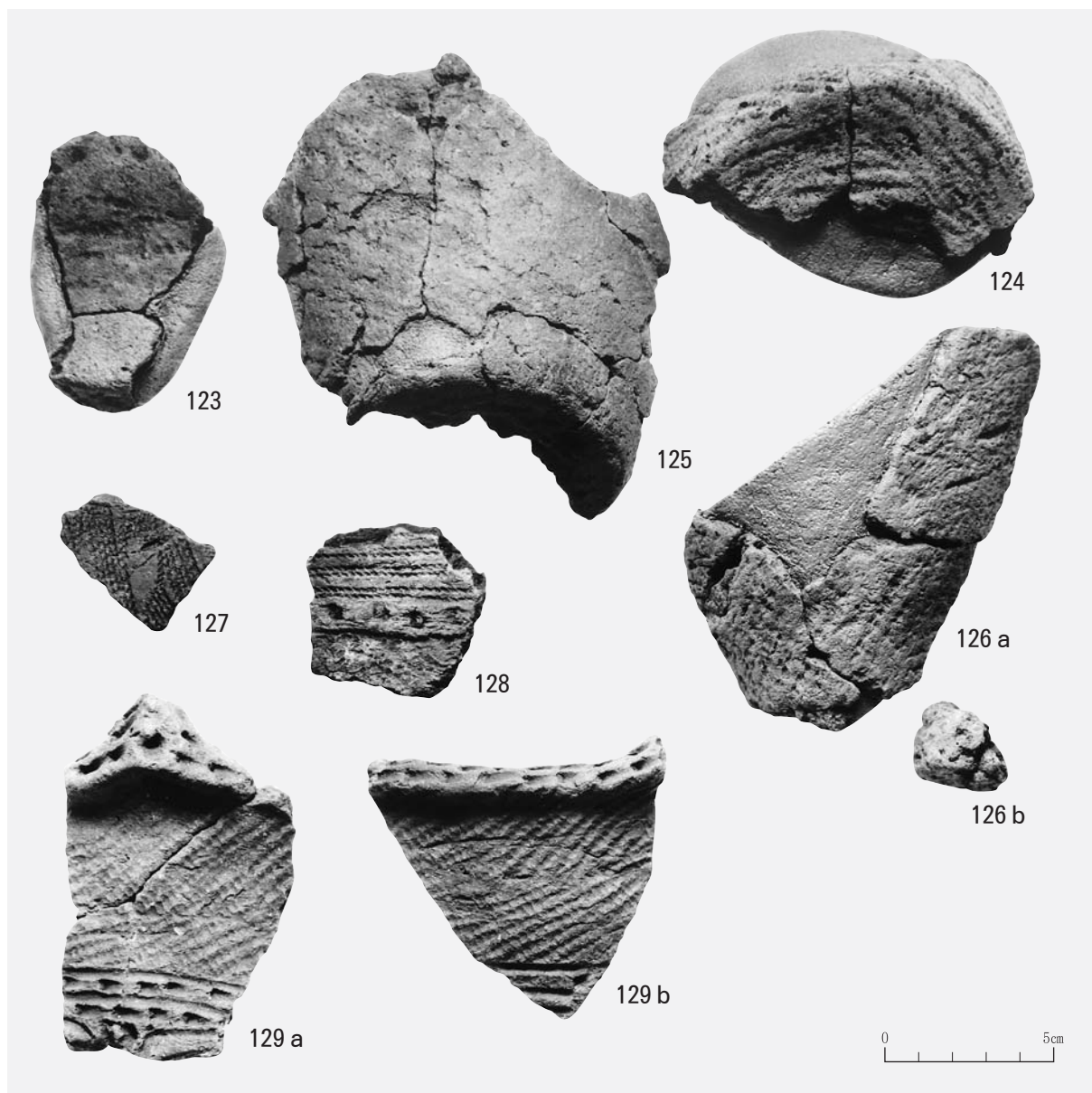


1 包含層出土の土器(19) 図V-4-22(2)・23(2)

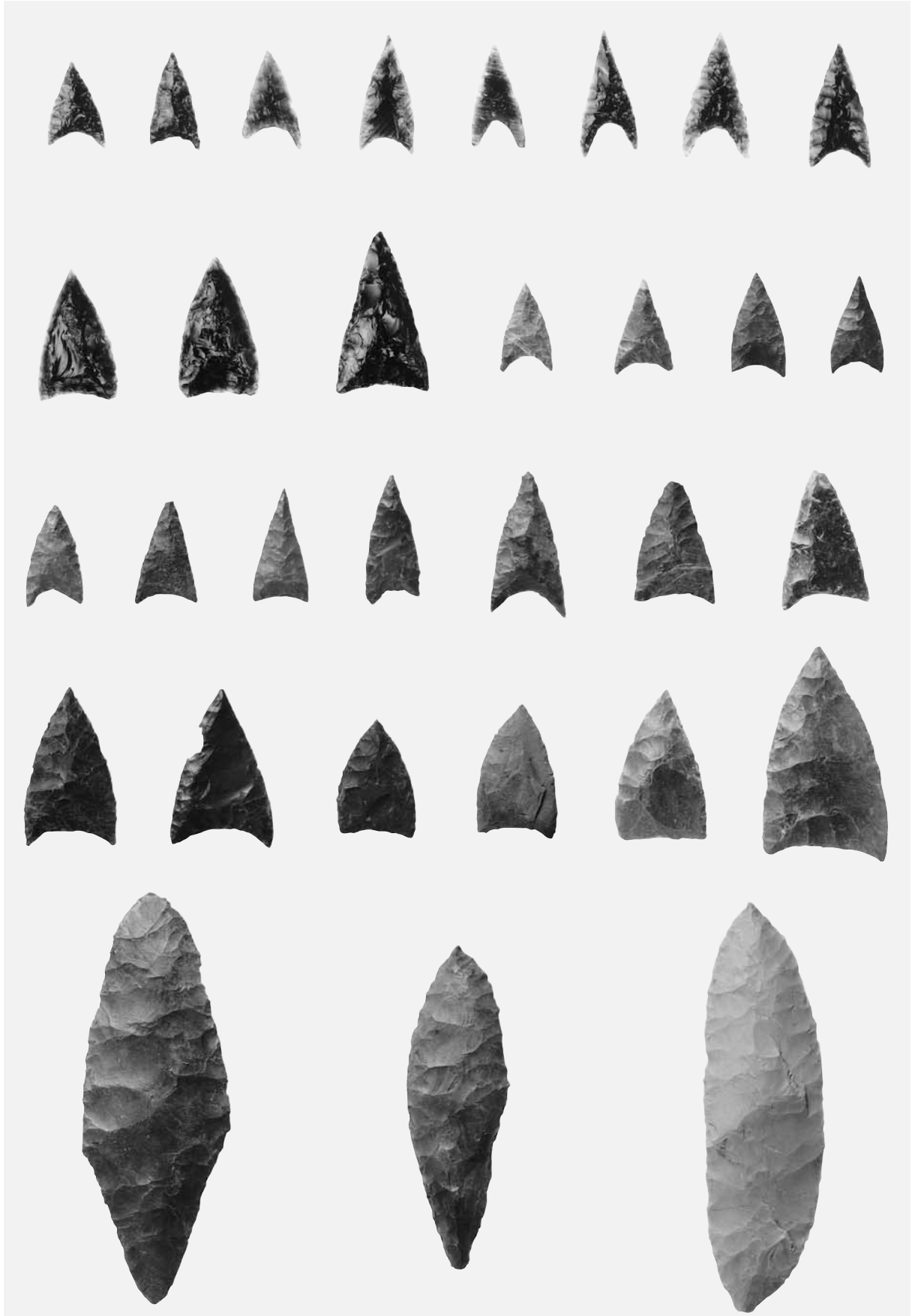




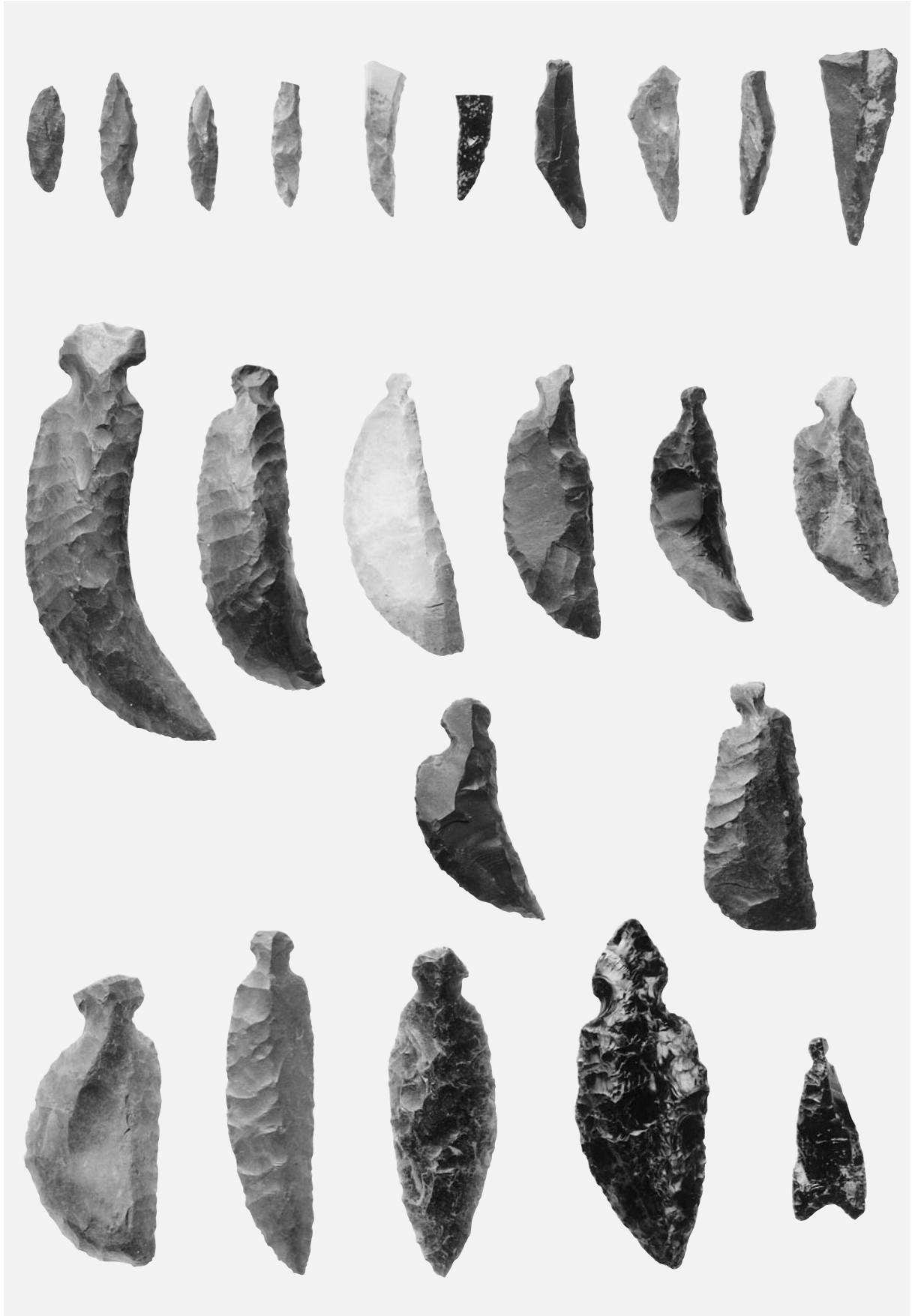
1 包含層出土の土器(20) 図V-4-22(3)・24(1)



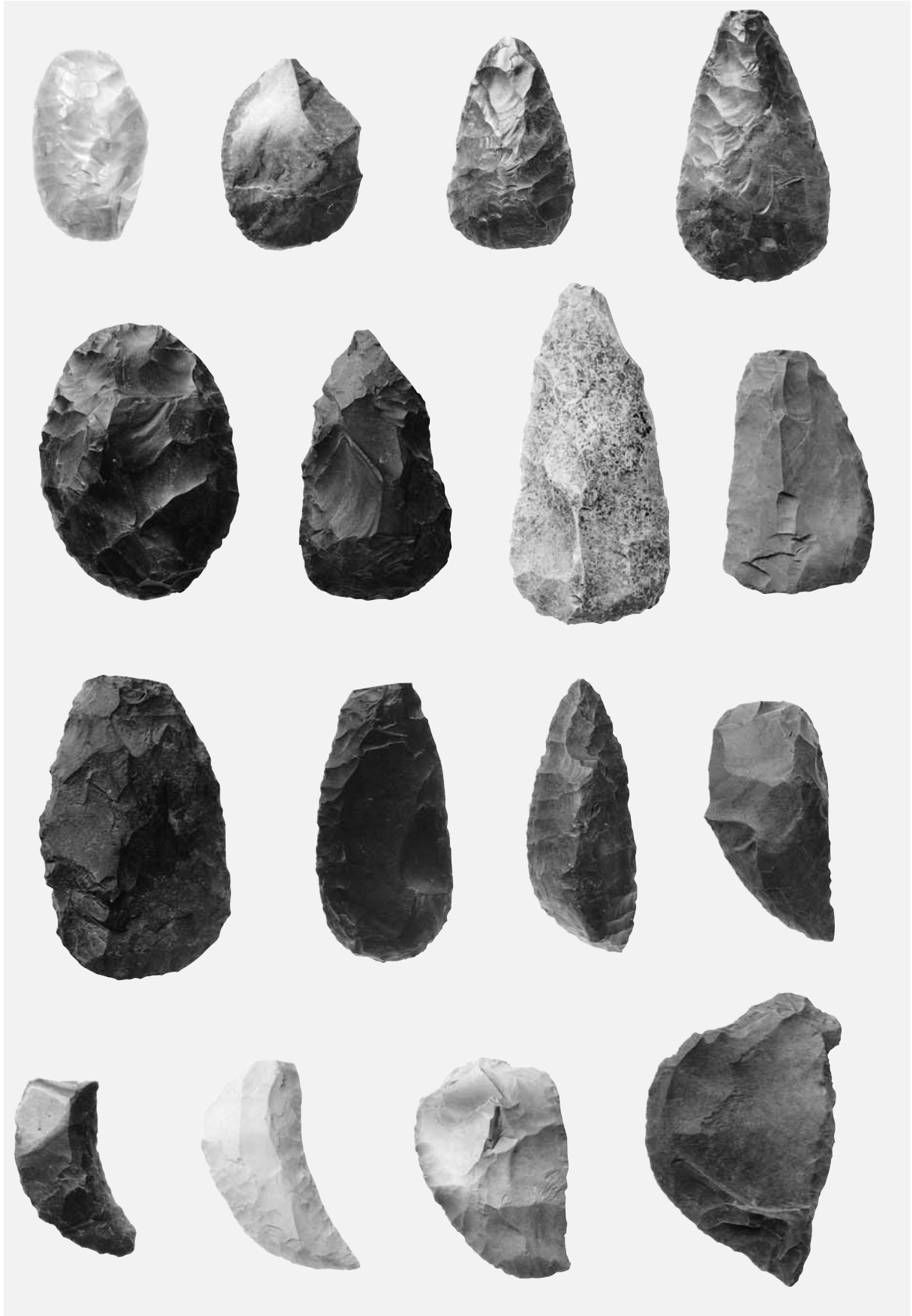
1 包含層出土の土器(2) 図V-4-24(2)・25



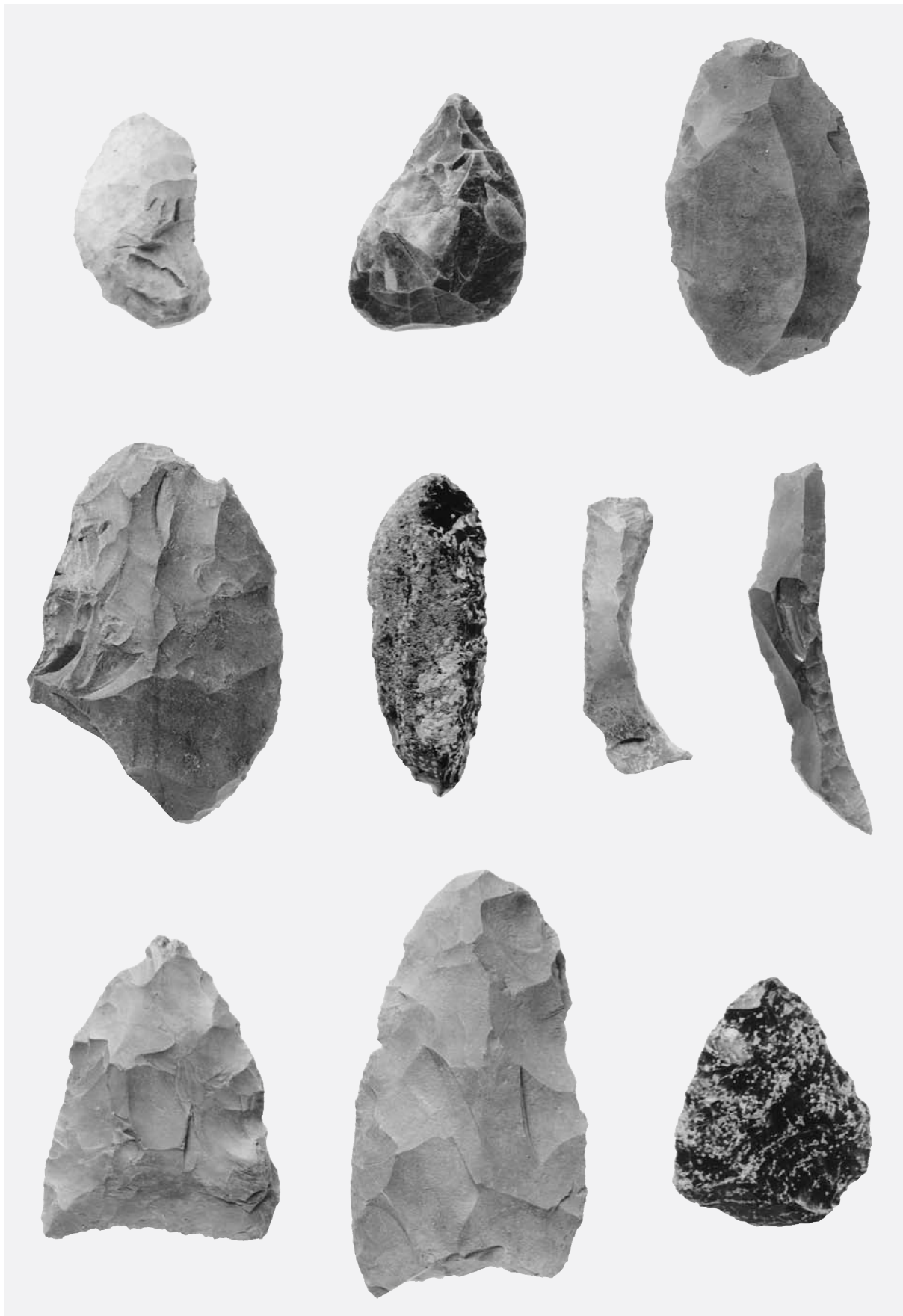
1 包含層出土の石器(1)



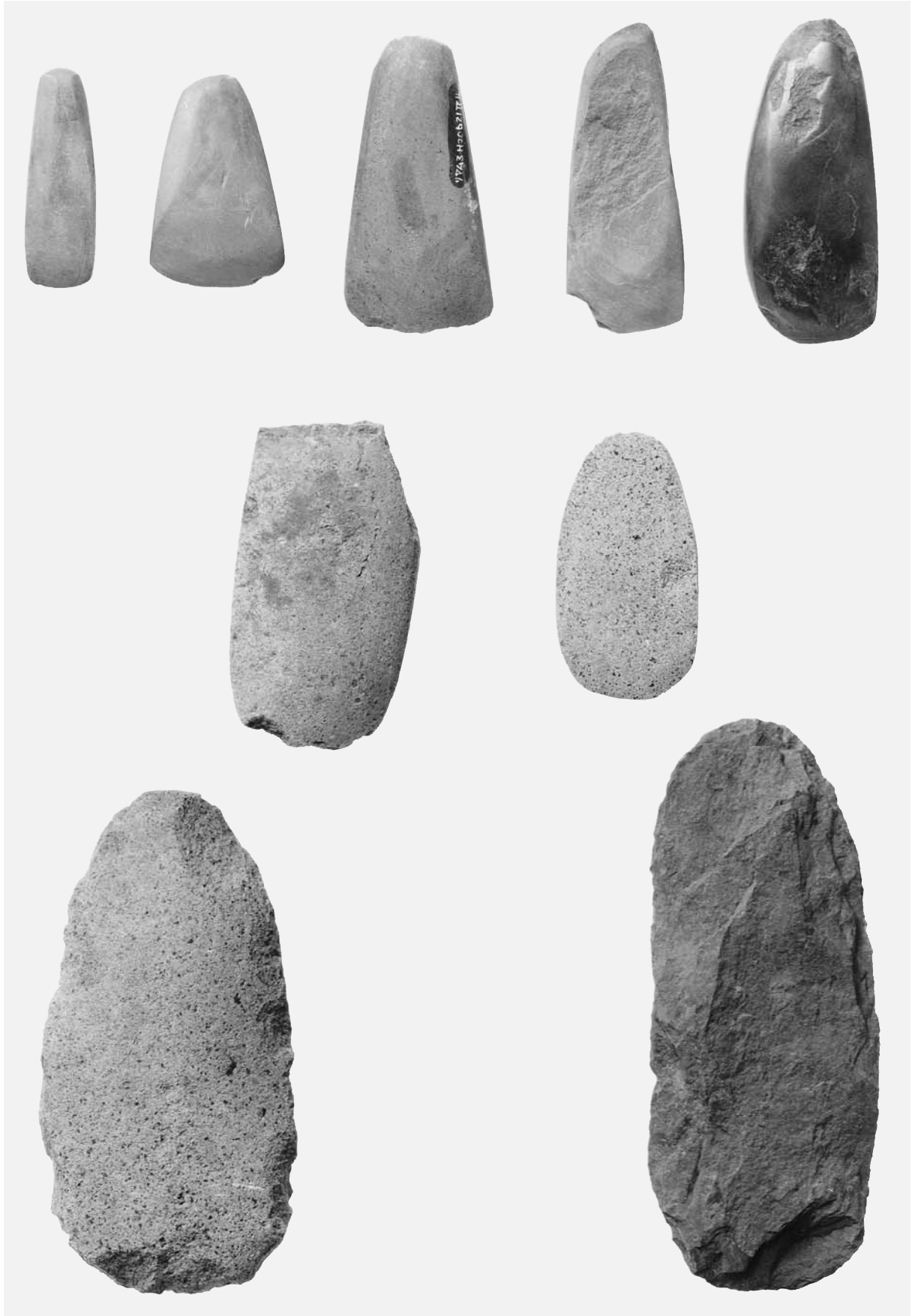
1 包含層出土の石器(2)



1 包含層出土の石器(3)



1 包含層出土の石器(4)

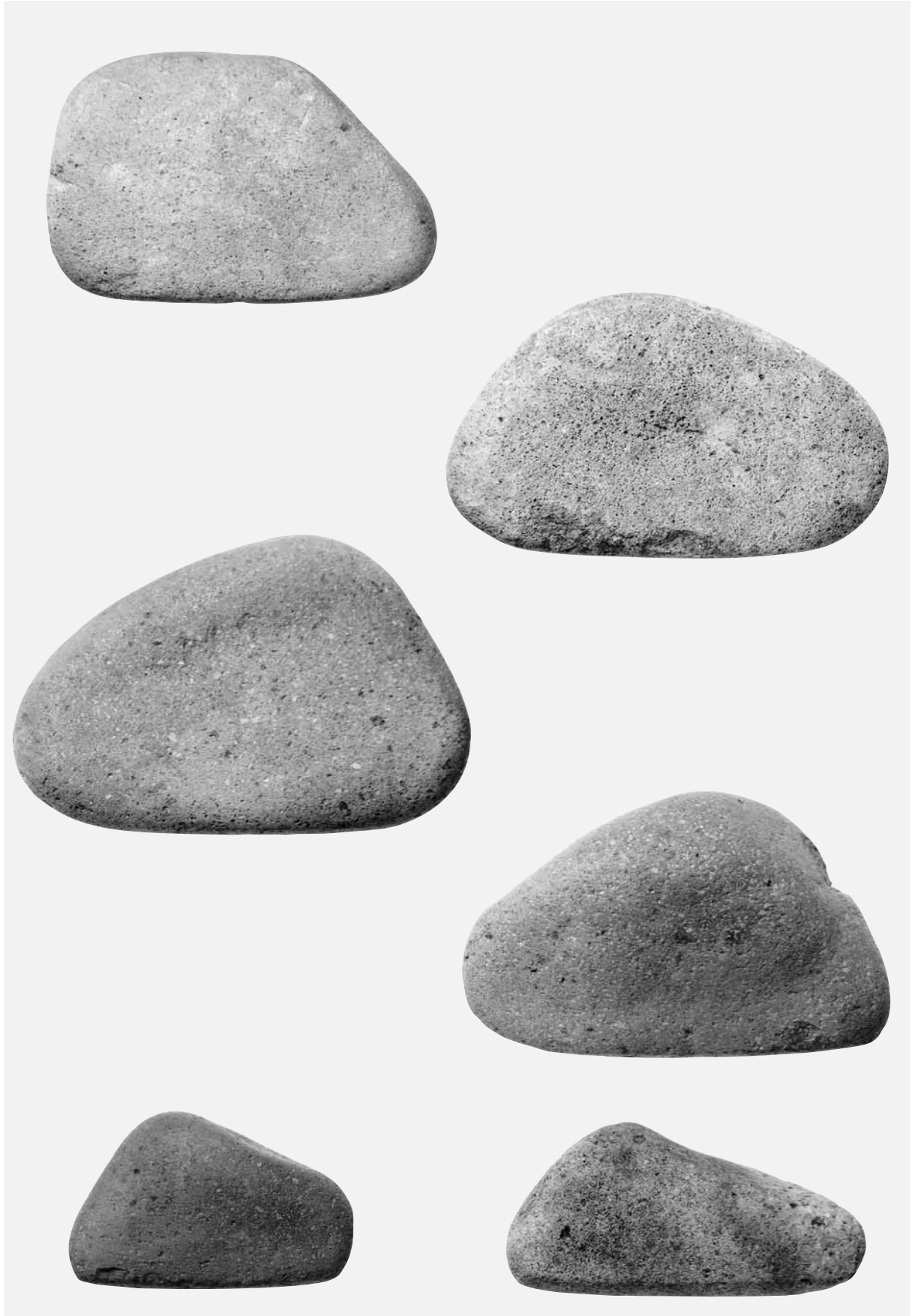


1 包含層出土の石器(5)

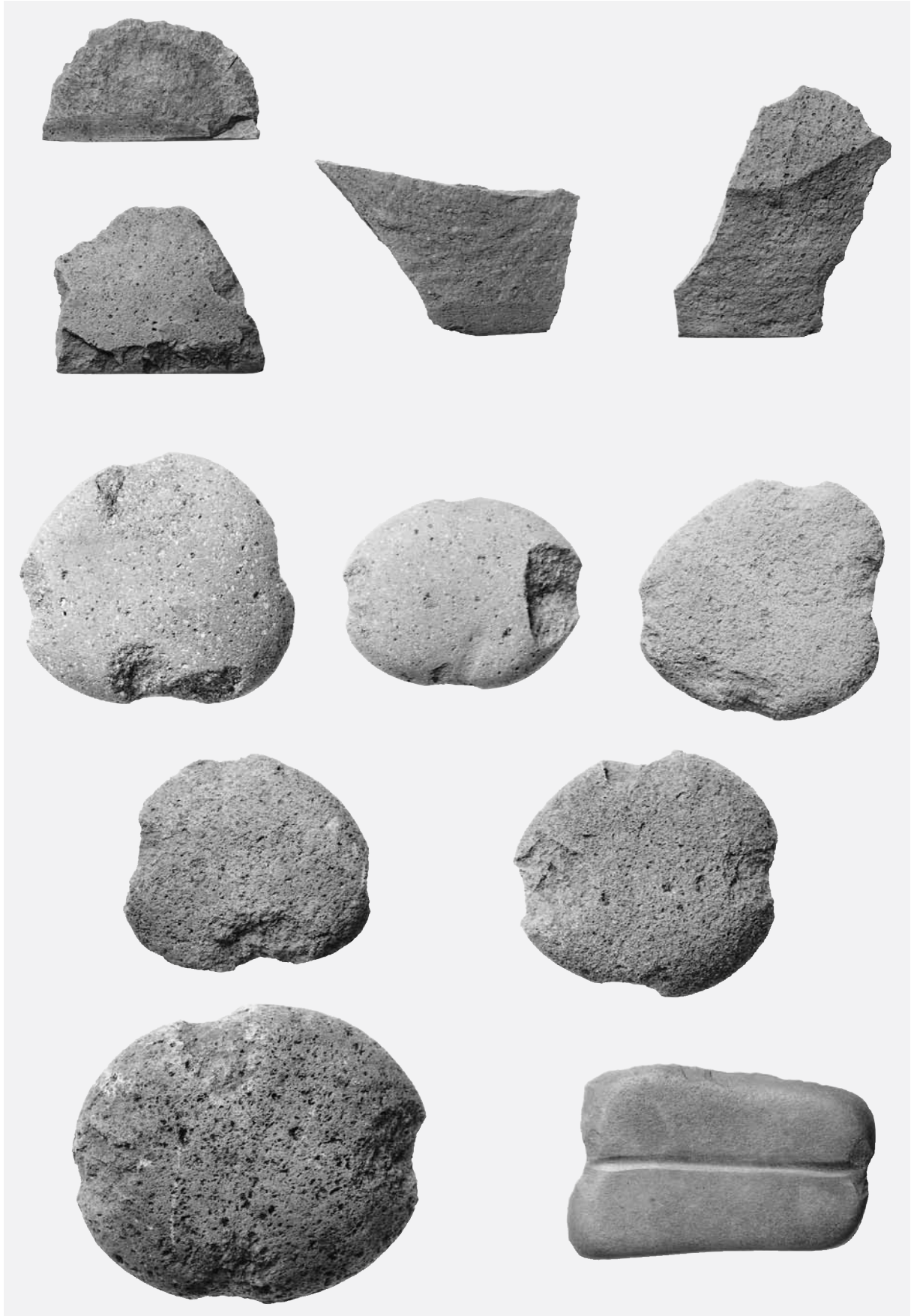


1 包含層出土の石器(6)

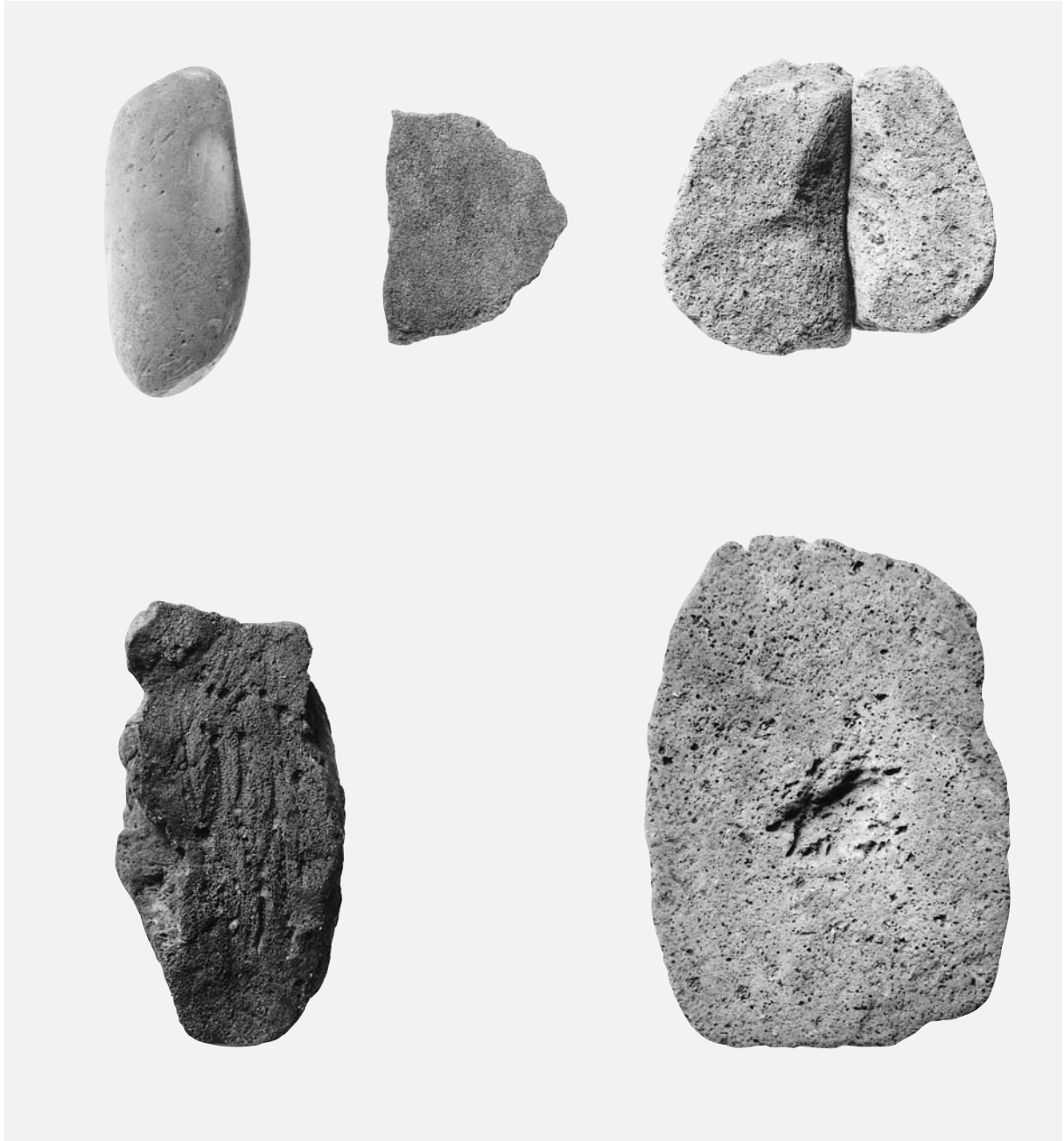




1 包含層出土の石器(7)



1 包含層出土の石器(8)



1 包含層出土の石器(9)



2 包含層出土の石製品



3 包含層出土の土製品

## 引用参考文献

- 青森県教育委員会 1980『永野遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第56集
- 青森県教育委員会 1981『表館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第61集
- 青森県教育委員会 1981『鷹架遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第63集
- 青森県教育委員会 1983『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第82集
- 青森県教育委員会 1985『表館遺跡調査報告書Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第91集
- 青森県教育委員会 2005『和野前山遺跡外』青森県埋蔵文化財調査報告書第403集
- 青森市教育委員会 2000『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』青森市埋蔵文化財調査報告書第58集
- 赤石慎三 1997「苫小牧市柳館遺跡における縄文時代前期中葉の土器について」『北海道考古学』第33輯
- 阿部千春・福田裕二 1993『八木A遺跡・ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 阿部千春 1993「北海道南部における初期の円筒土器とその周辺」『考古学ジャーナル』6月号 No.362
- AtsukoOkada, HiroakiOkadaandChester S. Chard 1967 An Annotated Bibliography of The Arhaeology of Hokkaido Arctic Anthropology IV - 1 The University of Wisconsin, Madison.
- 池上啓介 1937「北海道後志國岩内郡岩内町利野無納遺跡の遺物(其一)」『史前學雜誌』第9巻第4輯
- 石岡憲雄 1999「東北地方 前期(円筒下層式)」『縄文時代』10
- 石狩町教育委員会 1992『石狩町上花畔地区宅地開発事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- 石川直章 2004「動物意匠をもつ土器ー北海道岩内郡共和町・岩内町出土土器実測図の報告ー」『小樽市博物館紀要』17
- 石橋孝雄編 1979『SHIBISHIUSUⅡ』石狩町教育委員会
- 岩崎隆人・三室俊昭 1966「札幌市発寒小学校遺跡」『北海道の文化』10文化財保護協会
- 岩内町 1944『岩内町史』
- 恵山町教育委員会 1986『日ノ浜砂丘1遺跡』
- 太田幸夫 1994『レールの旅路』富士書院
- 大場利夫・桐井力蔵 1958『岩内遺跡』岩内町・岩内町教育委員会
- 大沼忠春 1981「道央部の前期縄文土器群の編年について」『北海道考古学』第17輯
- 大沼忠春 1984「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』第20輯
- 大沼忠春 1986「道南の前期土器群の編年について(Ⅱ)」『北海道考古学』第22輯
- 大沼忠春 1993「北海道東部の円筒土器文化」『考古学ジャーナル』6月号 No.362
- 大沼忠春 1999「北海道地方 早期～晩期」『縄文時代』10
- 大山 柏 1941「北海道岩内町リヤムナイの遺物(第二回)」『史前學雜誌』第13巻第5輯
- 大山 柏 1942「北海道岩内町リヤムナイの遺物(第三回)」『史前學雜誌』第14巻第2・3輯
- 茅沼炭化礦業株式会社茅沼礦業所編 1956『開礦百年史』
- 北沢 実編 1997『帯広・川西C遺跡』帯広市教育委員会
- 木古内町教育委員会 1991『釜谷4遺跡』
- 木古内町教育委員会 1999『釜谷遺跡』
- 北檜山町教育委員会 2001『北檜山町豊岡6遺跡』
- 共和町史編さん委員会編 1972『共和町史』共和町
- 栗沢町教育委員会 1966『加茂川遺跡』
- 児玉作左衛門・大場利夫 1954「函館市春日町出土の遺物について」『北方文化研究報告』第9輯
- 児玉作左衛門・大場利夫 1955「網走市大曲洞窟出土の遺物について」『北方文化研究報告』第10輯
- 助北海道埋蔵文化財センター 1981『美沢川流域の遺跡群Ⅳ』北埋調報3
- 助北海道埋蔵文化財センター 1982『江別市吉井の沢1遺跡』北埋調報5
- 助北海道埋蔵文化財センター 1985『湯の里遺跡群』北埋調報18
- 助北海道埋蔵文化財センター 1993『函館市中野A遺跡(Ⅱ)』北埋調報84
- 助北海道埋蔵文化財センター 1996『函館市西桔梗1遺跡』北埋調報99
- 助北海道埋蔵文化財センター 1998『上磯町茂別遺跡』北埋調報121
- 助北海道埋蔵文化財センター 1998『函館市西桔梗1遺跡(2)』北埋調報122
- 助北海道埋蔵文化財センター 1999『千歳市柏台1遺跡』北埋調報138
- 助北海道埋蔵文化財センター 2001『赤井川村日の出4遺跡・日の出10遺跡』北埋調報161
- 助北海道埋蔵文化財センター 2005a『北檜山町生渕2遺跡』北埋調報214

- (財)北海道埋蔵文化財センター 2005 b 『森町森川4遺跡』北埋調報218  
(財)北海道埋蔵文化財センター 2005 c 『共和町リヤムナイ3遺跡(1)』北埋調報220  
(財)北海道埋蔵文化財センター 2005 d 『森町森川3遺跡』北埋調報222  
坂本 衛 2004 『鉄道施設がわかる本』山海堂  
芝田直人 2005 「2 いわゆる「浜中大曲式」土器について」『北檜山町生淵2遺跡』北埋調報214  
清水靖夫・長岡正利・渡辺一郎・武揚堂編 2002 『伊納図(東京国立博物館所蔵伊納中図原寸複製)』武揚堂  
積丹町史編さん委員会 1985 『積丹町史』積丹町  
後志鯉街道普及実行委員会編 2005 『後志学 後志鯉街道』  
杉 行夫 1992 「茅沼炭化工業専用鉄道の思い出」『鉄道ファン』vol32-9  
鈴木正語ほか 1991 『釜谷4遺跡』木古内町教育委員会  
武内理三編 1987 『角川地名事典』1 北海道 上・下巻 角川書店  
竹田輝雄 1963 『発足岩陰遺跡』小樽市博物館紀要No.2  
竹田輝雄 1969 「縄文晩期文化 北海道」『新版考古学講座』第3巻 雄山閣出版  
竹田輝雄ほか 1962・1970(復刻1979) 『茶津洞窟遺跡群』小樽市博物館紀要No.1・No.3  
田部 淳 1999 『汐見橋遺跡』泊村教育委員会  
田部 淳・田才雅彦 1998 「発足砂丘遺跡の試掘調査」『時の絆 道を辿る』石付喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会  
田部 淳・土肥達佳 2002 『ヘロカロウス遺跡A地点』泊村教育委員会  
田部 淳・土肥達佳 2003 『滝ノ澗遺跡』泊村教育委員会  
田部 淳・村上章久 2004 『堀株1遺跡』泊村教育委員会  
田部 淳・村上章久 2005 『堀株1遺跡(2)』泊村教育委員会  
田部 淳・吉田玄一ほか 1997 『ヘロカロウス遺跡E～G地点』泊村教育委員会  
玉蟲左太夫著・稲葉一郎解説 1992 『入北記』北海道出版企画センター  
茅野嘉雄 2002 「いわゆる結節回転文からみた円筒下層a式について」専修考古学 第9号  
知里真志保 1956 『アイヌ語入門 復刻版』北海道出版企画センター  
知里真志保 1984 『地名アイヌ語小事典 復刻版』北海道出版企画センター  
戸井町教育委員会 1989 『蛭子川2遺跡』  
戸井町教育委員会 1990 『浜町A遺跡』  
戸井町教育委員会 1991 『浜町A遺跡II』  
戸井町教育委員会 1993 『戸井貝塚II』  
戸井町教育委員会 1994 『戸井貝塚IV』  
戸井町教育委員会 1995 『蛭子川2遺跡II』  
戸井町教育委員会 2001 『高屋敷川1遺跡』  
苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1992 『美沢11遺跡』  
永井秀夫編 2003 『北海道の地名』日本地名大系第1巻 平凡社  
永田方正 1984(初版1891) 『初版北海道蝦夷語地名解 復刻版』草風館  
名取武光・峰山 巖 1954 『伊達町北黄金遺跡発掘報告』伊達町教育委員会  
名取武光・峰山 巖 1957 「若生貝塚発掘報告」『北方文化研究報告』第12輯  
名取武光・峰山 巖 1963 「茶呑場遺跡 付伊達町北黄金遺跡群」『北方文化研究報告』第18輯  
名取武光・松下 亘 1964 「桃内遺跡」『北方文化研究報告』第19輯  
新冠町教育委員会 2004 『明和3遺跡』  
西野保行 1994 『鉄道線路の話』成山堂書店  
西本豊弘編 2000 『浜中2遺跡発掘調査報告書』国立歴史民俗博物館研究報告85  
二本柳正一・角鹿扇三・佐藤達夫 1957 「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌』第43巻第2号  
野辺地初雄・野辺地章太・高橋 昇 2004 『東山1遺跡』岩内町教育委員会  
野村 崇 1981 「北海道中部・南部の土器」『縄文文化の研究 4 縄文土器II』雄山閣出版  
野村 崇 1985 「2 北海道の亀ヶ岡文化」『北海道縄文時代終末期の研究』みやま書房  
野村 崇 1992 「積丹半島における考古学研究の進展と遺跡の概要」『積丹半島の自然と歴史-自然篇-』北海道開拓記念館研究報告第12号  
函館市教育委員会 1985 『サイベ沢遺跡』  
函館市教育委員会 1987 『豊原1遺跡』

- 函館市教育委員会 1994『豊原2遺跡』
- 福田敏一 2004「4 車輛および構内の施設に関連した遺物」『新橋駅発掘』雄山閣出版
- 福田裕二 1995『八木A遺跡Ⅱ・ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 福田裕二 1997『八木A遺跡Ⅲ・八木C遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 福田正広 2003「北海道における亀ヶ岡式土器と在地系土器の系譜」『海と考古学』5
- 福田正己・小疇 尚・野上道男編 1984『寒冷地域の自然環境』北海道大学図書刊行会
- 古屋敷則夫・鈴木正語・山田 央 2001『高屋敷川1遺跡』戸井町教育委員会
- 北海道開拓記念館 1978『北海道における炭鉱の発展と労働者』北海道開拓記念館研究報告第4号
- 北海道開拓記念館 1980『熊野喜蔵氏資料目録・Ⅱ』北海道開拓記念館一括目録第13集
- 北海道開拓記念館 1992『積丹半島の自然と歴史－自然篇－』北海道開拓記念館研究報告第12号
- 北海道教育委員会 1983『泊発電所建設に係る埋蔵文化財包蔵地確認調査報告書』
- 松井孝宗 1983『豊田市郷土資料館収蔵品図録 Ⅲ松平義人寄贈考古資料』豊田氏郷土資料館報告20  
豊田市郷土資料館
- 松浦武四郎著・吉田武三校註 1970『三航蝦夷日誌』吉川弘文館
- 松浦武四郎著・吉田常吉編 1984「西蝦夷日誌」『新版蝦夷日誌下』時事通信社
- 松浦武四郎著・高倉新一郎解説 1978『武四郎廻浦日誌上』北海道出版企画センター
- 松浦武四郎著・高倉新一郎校訂・秋葉実解説 1982『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌上』北海道出版企画センター
- 松前町教育委員会 1974『松前町大津遺跡発掘調査報告書』
- 松前町教育委員会 1974『松前町高野遺跡発掘報告』
- 松前町教育委員会 1983『白坂』
- 松谷純一・大場靖友・川内 基 1984『泊村ヘロカロウス・茶津遺跡－発掘調査概報－』北海道文化財研究所
- 三橋誠之・宮 宏明 2004「擦痕を有する細石刃核と削片」『北海道旧石器文化研究』第9号北海道旧石器文化研究会
- 宮 宏明 2005「松平義人と北海道の旧石器文化」『北海道旧石器文化研究』第10号北海道旧石器文化研究会
- 武藤康弘 1988「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究－表館式、早稲田第6類土器をめぐって－」『考古学雑誌』第74巻第2号
- 武藤康弘 1991「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究Ⅱ－円筒下層a式直前の土器をめぐって－」『考古学雑誌』第76巻第3号
- 芽室町教育委員会 1992『小林遺跡』
- 芽室町教育委員会 2000『芽室町小林遺跡』芽室町埋蔵文化財調査報告 第1輯
- 山田秀三 1984『北海道の地名』北海道新聞社
- 山田悟郎・渡部真人・赤松守男 1992「積丹半島の第四系について」『積丹半島の自然と歴史－自然篇－』北海道開拓記念館研究報告第12号
- 吉崎昌一 1952「－浜中遺跡略報－北海道南部の亀ヶ岡式土器について」『明治大学考古学研究会報告要旨』
- 吉崎昌一 1965「縄文文化の発展と地域性 北海道」『縄文時代 日本の考古学Ⅱ』河出書房新社
- 吉田玄一・川内 基・吉田周子 1985a『共和町宮丘1遺跡－発掘調査概報－』北海道文化財研究所
- 吉田玄一・川内 基・吉田周子 1985b『泊村茶津遺跡－発掘調査概報－』北海道文化財研究所
- 吉田玄一・川内 基・吉田周子 1986『宮丘1遺跡』北海道文化財研究所調査報告書第1集
- 吉田玄一・川内 基・吉田周子 1987『ヘロカロウス遺跡』北海道文化財研究所調査報告書第3集
- 吉田茂樹・田才雅彦ほか 2000『リヤムナイ2遺跡』共和町教育委員会
- 渡辺真吾 1980「北海道で廃線の危機に立つ3路線」『鉄道ピクトリアル』No.384 vol30-12
- 渡辺真吾 2001「岩内馬車鉄道」『鉄道ピクトリアル』No.696 vol151-1

## 報告書抄録

ふりがな		きょうわちょう かみりやむないいせき・りやむないさんいせきに						
書名	共和町 上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ 3 遺跡(2)							
副書名	一般国道276号岩内共和道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第227集							
編著者名	遠藤香澄・笠原 興・袖岡淳子							
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 TEL 011-386-3231							
発行年月日	平成18(西暦2006)年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′			
かみりやむないいせきナイ遺跡	いわないぐんきょうわちょう 岩内郡共和町 あざりやむない 字梨野舞納70 ほか	01401	D-12-02	42度 59分 54秒	140度 32分 48秒	20050607 ～ 20050909	1300m <sup>2</sup>	道路建設 工事に伴 う事前調 査
りやむないさんいせきイ3遺跡	いわないぐんきょうわちょう 岩内郡共和町 あざりやむない 字梨野舞納19- 2ほか	同上	D-12-29	42度 59分 50秒	140度 32分 40秒	20050511 ～ 20051028	3500m <sup>2</sup>	同上
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上リヤムナイ遺跡	遺物包含地	縄文時代 早期	剥片集中 2か所		石鏃、スクレイパー、 粗工両面調整石器、 たたき石、すり石、 石皿、フレイク、礫 830点			
リヤムナイ3遺跡	遺物包含地	縄文時代 前期前半	石器集中 1か所	剥片集中 63か所	集石 15か所	焼土 60か所	縄文土器 34400点 (春日町式、静内中野 式、円筒土器下層式、) 石器等 16800点 点(石鏃、石槍また はナイフ、石錐、つ まみ付きナイフ、ス クレイパー、両面調 整石器、石核、たた き石、すり石、石鋸、 砥石、台石・石皿、 石錘、頁岩・玄武岩・ 黒曜石のフレイク、 スコリア、軽石、礫・ 礫片) 土器片錘、円 盤状土製品	尖底部に黒曜石が埋 められた土器

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第227集

**共和町 上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ 3 遺跡(2)**

—一般国道276号岩内共和道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日 平成18年 3月27日発行

**編集・発行** 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
〒069-0832 江別市西野幌685番地-1  
TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238  
[E-mail]mail@domaibun.or.jp  
[URL]http://www.domaibun.or.jp

**印刷** 柏楊印刷 株式会社  
〒007-0802 札幌市東区東苗穂 2条 3丁目 4番48号  
TEL (011) 789-2377 FAX (011) 789-2376